

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分 冊 1

(住居跡・住居跡内出土遺物)

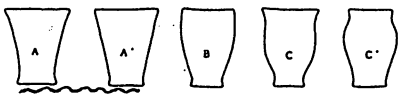
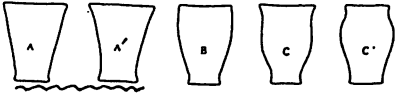
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 227集
 上八木田 I 遺跡発掘調査報告書
 新盛岡競馬場建設関連発掘調査
 正 誤 表

分冊 1

ページ	行		誤	正															
3	3	追加	(1) 調査区画の設定 (第8図)	(1) 調査区画の設定 (第7・8図)															
3	28	追加	ことにした。	ことにした。(第7図)															
11	32	訂正	(注) 数値は…	(注) 数値は…															
170	第114欄	訂正	Ⅶ D 2 h 坑 Ⅶ D 2 h 住	Ⅶ D 2 h 住 Ⅶ D 2 h 坑															
248	18 19	訂正	地床炉が6基検出された。… …4号炉のほぼ中央部、焼土の下から埋設された土器が検出された。4号炉と埋設…	地床炉が4基検出された。… …3号炉のほぼ中央部、焼土の下から埋設された土器が検出された。3号炉と埋設…															
249	第169欄	追加		<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>材料</td> <td>1号炉</td> <td>2号炉</td> <td>3号炉</td> <td>4号炉</td> </tr> <tr> <td>範囲</td> <td>50×74</td> <td>28×55</td> <td>55×105</td> <td>32×35</td> </tr> <tr> <td>厚さ</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>11</td> <td>4</td> </tr> </table>	材料	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	範囲	50×74	28×55	55×105	32×35	厚さ	5	4	11	4
材料	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉															
範囲	50×74	28×55	55×105	32×35															
厚さ	5	4	11	4															
262	24	訂正	遺構 (第 187図、写真図版58)	遺構 (第 180図、写真図版58)															

分冊 2

ページ	行		誤	正																																
56	第312欄 スケッチ	訂正	(1276・1282を除く)	(1276・1284を除く)																																
86	24	追加	第Ⅶ群 土師器	第Ⅶ群 土師器																																
156	32	訂正	細分は行わない。全体にネガティブバルブ…	細分は行わない。全体にネガティブバルブ…																																
162	27	訂正	の外縁に剥離を伴う (2373・2374他)。…	の外縁に剥離を伴う (2374・2375他)。…																																
165	第18表	訂正	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td></td> <td colspan="3">I</td> </tr> <tr> <td></td> <td>a</td> <td>b</td> <td>c</td> </tr> <tr> <td>遺構内</td> <td>41</td> <td>7</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>遺構外</td> <td>187</td> <td>19</td> <td>2</td> </tr> </table>		I				a	b	c	遺構内	41	7	0	遺構外	187	19	2	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td></td> <td colspan="3">I</td> </tr> <tr> <td></td> <td>a</td> <td>b</td> <td>c</td> </tr> <tr> <td>遺構内</td> <td>41</td> <td>7</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>遺構外</td> <td>187</td> <td>19</td> <td>2</td> </tr> </table>		I				a	b	c	遺構内	41	7	0	遺構外	187	19	2
	I																																			
	a	b	c																																	
遺構内	41	7	0																																	
遺構外	187	19	2																																	
	I																																			
	a	b	c																																	
遺構内	41	7	0																																	
遺構外	187	19	2																																	
169	24	訂正	そ1・2前後のところである。…	そ1・2前後のところである。…																																
245	15	訂正	れない点が、様相に異をする点である。	れない点が、様相を異にする。																																
266	4	訂正	…に刻みを入れたもの (第 497図1395) が…	…に刻みを入れたもの (第 497図12) が…																																
267	第490欄	訂正																																		
271	26	訂正	<その他>22の隆帯のモチーフは…	<その他>23の隆帯のモチーフは…																																
288	9	訂正	…検討を加えている (藤村東男 198) 。…	…検討を加えている (藤村東男 1985) 。…																																

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分 冊 1

(住居跡・住居跡内出土遺物)

序

本県には、縄文時代を初めとして数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、8,000箇所^がに及ぶ遺跡^が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和は今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡市八木田地区の新盛岡競馬場建設に関連して、平成3年度に発掘調査をした盛岡市上八木田Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。同遺跡からは、160棟にもおよぶ縄文時代前期に属する大規模な集落跡と、それらに伴う数多くの遺物が検出され、未解明な部分が多かった盛岡盆地周辺の山間部における貴重な考古学的資料を提供することとなりました。

この報告書^が、研究者のみならず一般に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成に、御協力・御援助を賜りました岩手県競馬組合、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に感謝申し上げますと共に、今後とも御指導・御協力をお願い致します。

平成7年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 高橋 令則

例 言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市上八木田33-1ほかに所在する上八木田^{かみやぎた}I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 上八木田I遺跡の調査は、新盛岡競馬場建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会文化課の指導と調整のもとに、岩手県競馬組合の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はLE18-1103、当センターの調査略号はKYI-91である。
4. 野外調査および室内整理の期間、担当者等は次の通りである。

野外調査 期間 平成3年4月8日～11月15日

面積 22,400cm²

担当者 平井 進、佐瀬 隆、千葉孝雄、佐々木弘、神 敏明、酒井宗孝、
笹平克子、金子昭彦、濱田 宏、八重座のり子、山口博英

室内整理 第一次 期間 平成3年11月18日～平成4年3月31日

担当者 平井 進、千葉孝雄、笹平克子、八重座のり子、山口博英

第二次 期間 平成4年4月1日～平成6年3月31日

担当者 千葉孝雄

5. 出土品の鑑定・保存は次の方々、機関に依頼した。(順不同・敬称略)

石器・石製品の石材鑑定	佐藤 二郎 (長内水源工業)
炭化糸の鑑定	中田 節子 (<財>山梨文化財研究所客員研究員)
炭化糸の保存処理	鈴木 稔 (<財>山梨文化財研究所)
炭化植物遺体の同定	(株)パリノ・サーヴェイ
鉄製品の鑑定・保存処理	赤沼 英男・木村 克則 (岩手県立博物館)
火山灰同定・胎土分析	三辻 利一 (奈良教育大学)
炭化材樹種同定	早坂松次郎 (岩手県木炭協会)
黒曜石分析と産地同定	藁科 哲男 (京都大学)

6. 本報告書の執筆は、「I 調査に至る経過」を鈴木恵治が、他は千葉孝雄が担当した。
7. 使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1および2万5千分の1の地形図と、岩手県競馬組合が作成した2千5百分の1の地形図である。
8. 本報告書作成にあたり、次の方々に御指導・御助言・文献のお世話などをいただいた。(順不同・敬称略)

井上雅孝・佐藤敬枝・高橋矩江 (滝沢村教育委員会)、鈴鹿良一・石本弘・本間宏・吉田

秀享・菅原祥夫（福島文化センター）、森幸彦（福島県立博物館）、興野義一（日本考古学協会）、白鳥良一（仙台市教育委員会）、村田晃一（宮城県教育委員会）、大野憲司・利部修（秋田県埋蔵文化財センター）、阿部千春（南茅部町教育委員会）、古屋敷則雄（戸井町教育委員会）、林謙作（北海道大学）、稲野彰子・浅田知世（北上市埋蔵文化財センター）、松田光太郎（神奈川県埋蔵文化財センター）、熊谷常正・小田野哲憲（岩手県教育委員会）、鶴飼幸雄（茅野市教育委員会）、小林公明・樋口誠司（井戸尻考古学館）、鎌田祐二（宮古市教育委員会）、七ヶ浜町歴史民俗資料館、階上町教育委員会

9. 野外調査にあたっては、岩手県競馬組合や盛岡市教育委員会等関係機関の協力を得た。また細野志郎氏をはじめとする地元の方々には作業員として協力いただいた。
10. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、K Y I -91の略号を付し岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

〈分冊 1〉

本 文 目 次

序

例言

I	調査に至る経過	2
II	野外調査方法と室内整理	3
1	野外調査	3
2	室内整理	6
III	遺跡の位置と環境	11
1	遺跡の位置	11
2	地理的環境	11
3	地形・地質概観	12
4	周辺の遺跡	15
5	遺跡周辺の微地形と基本層序	19
IV	検出された遺構と遺物	41
1	竪穴住居跡	41
(1)	縄文時代の竪穴住居跡	41
(2)	平安時代の竪穴住居跡	395

〈分冊 2 掲載内容〉

- 2 土坑
- 3 陥し穴
- 4 炉跡
- 5 土器埋設遺構
- 6 焼土遺構
- 7 遺構外出土遺物

V まとめ

付篇 分析・鑑定・同定報告

〈分冊 3 掲載内容〉

- 写真図版
遺跡全景・遺構
遺物

図 版 目 次

第 1	図 遺跡の位置……………1		第 69・70 図 VII C 7 f 住居跡・出土遺物……………111
第 2	図 計測位置・部位名称……………10		第 71・72 図 VII C 8 f 住居跡・出土遺物……………113
第 3	図 地形分類図……………13		第 73・74 図 VII C 8 g 住居跡・出土遺物……………115
第 4	図 遺跡周辺の表層地質図……………14		第 75 図 VII C 8 j・VII C 9 j 住居跡……………118
第 5	図 周辺の遺跡……………17		第 76 図 VII C 8 j・VII C 9 j 住居跡出土遺物……………119
第 6	図 調査区各地点の層序……………24		第 77・78 図 VII C 9 f 住居跡・出土遺物……………121
第 7	図 周辺の地形と調査グリッド配置図……………25		第 79 図 VII C 9 i - 3・VII C 9 i - 4 住居跡……………123
第 8	図 調査区画図と遺構配置部分図の位置……………27		第 80~84 図 VII C 9 i - 3 住居跡出土遺物……………124
第 9~13	図 遺構配置部分図 1~5……………29		第 85・86 図 VII C 9 i - 4 住居跡出土遺物……………129
第 14~17	図 IV D 8 b 住居跡・出土遺物……………43		第 87~89 図 VII C 9 j - 2 住居跡・出土遺物……………134
第 18~21	図 IV D 9 c 住居跡・出土遺物……………48		第 90~92 図 VII C 0 g 住居跡・出土遺物……………138
第 22~25	図 IV D 0 c 住居跡・出土遺物……………53		第 93 図 VII C 0 g - 2 住居跡・出土遺物……………142
第 26	図 V D 0 f 住居跡・出土遺物……………57		第 94~97 図 VII C 0 g - 3 住居跡・出土遺物……………143
第 27~29	図 V D 1 c 住居跡・出土遺物……………59		第 98 図 VII C 0 h・VII C 0 h - 2・VII C 1 h - 2 住居跡……………148
第 30~32	図 V D 2 c 住居跡・出土遺物……………63		第 99 図 VII C 0 h・VII C 0 h - 2 住居跡出土遺物……………149
第 33	図 V D 2 d 住居跡・出土遺物……………67		第 100 図 VII D 1 d・VII D 1 d - 2・VII D 1 d - 3 住居跡……………151
第 34・35	図 VI C 2 g 住居跡・出土遺物……………68		第 101 図 VII D 1 d・VII D 1 d - 3 住居跡出土遺物……………153
第 36	図 VI C 2 g - 2 住居跡……………71		第 102 図 VII D 1 e 住居跡……………154
第 37・38	図 VI C 3 h 住居跡・出土遺物……………72		第 103 図 VII D 1 g・VII D 1 g - 2 住居跡……………157
第 39	図 VI D 0 g 住居跡・出土遺物……………75		第 104~108 図 VII D 1 g 住居跡出土遺物……………158
第 40・41	図 VI D 5 f 住居跡・出土遺物……………76		第 109 図 VII D 1 g - 2 住居跡出土遺物……………163
第 42~45	図 VI D 7 g 住居跡・出土遺物……………78		第 110・111 図 VII D 2 f 住居跡・出土遺物……………164
第 46~49	図 VI D 8 e 住居跡・出土遺物……………83		第 112 図 VII D 2 h・VII D 2 h - 3 住居跡……………167
第 50・51	図 VI D 8 h 住居跡・出土遺物……………87		第 113 図 VII D 2 h 住居跡出土遺物……………168
第 52・53	図 VI D 0 g 住居跡・出土遺物……………90		第 114 図 VII D 2 h - 2 住居跡……………170
第 54~56	図 VI D 0 h 住居跡・出土遺物……………93		第 115 図 VII D 3 g 住居跡・出土遺物……………172
第 57~59	図 VI D 0 i 住居跡・出土遺物……………97		第 116 図 VII D 3 g - 2 住居跡・出土遺物……………174
第 60	図 VII C 3 g 住居跡・出土遺物……………100		第 117 図 VII D 3 g - 3・VII D 3 g - 4 住居跡……………175
第 61・62	図 VII C 6 f 住居跡・出土遺物……………102		第 118 図 VII D 3 g - 3 住居跡出土遺物(1)……………176
第 63・64	図 VII C 6 g 住居跡・出土遺物……………104		第 119 図 VII D 3 g - 3 住居跡出土遺物(2)・VII D 3 g - 3 住居跡出土遺物……………177
第 65~68	図 VII C 6 h 住居跡・出土遺物……………107		第 120・121 図 VII D 3 h 住居跡・出土遺物……………180

第 122 図 VII D 3 h - 2 住居跡……………182

第 123 ~ 126 図 VII D 4 f 住居跡・出土遺物……………185

第 127 図 VII D 4 f - 2 住居跡・出土遺物……………190

第 128 図 VII D 4 f - 3 住居跡……………191

第 129・130 図 VII D 4 h 住居跡・出土遺物……………192

第 131 図 VII D 4 h - 2・VII D 4 h - 3 住居跡……………195

第 132 図 VII D 4 h - 2・VII D 4 h - 3 住居跡出土遺物……………196

第 133 図 VII D 4 h - 4 住居跡・出土遺物……………198

第 134 図 VII D 4 i 住居跡……………200

第 135 図 VII D 5 g - 2 住居跡・出土遺物……………201

第 136 図 VII D 5 g ~ 6 g グリット遺構群重複関係……………202

第 137 図 VII D 5 g - 3 住居跡・出土遺物……………203

第 138 図 VII D 5 h 住居跡・出土遺物……………205

第 139・140 図 VII D 5 i 住居跡・出土遺物……………206

第 141 図 VII D 4 h ~ 5 i グリット遺構群重複関係……………208

第 142 図 VII D 5 i - 2 住居跡・出土遺物……………210

第 143 図 VII D 5 i - 3 住居跡・出土物……………211

第 144・145 図 VII D 6 f 住居跡・出土遺物……………212

第 146・147 図 VII D 6 g 住居跡・出土遺物……………215

第 148 図 VII D 6 g - 2 住居跡・出土遺物……………218

第 149 図 VII D 6 g - 3 住居跡・出土遺物……………220

第 150 図 VII D 6 g - 4 住居跡・出土遺物……………221

第 151 図 VII D 6 h 住居跡・出土遺物……………223

第 152 図 VII D 6 h - 2・VII D 7 i 住居跡……………225

第 153 ~ 155 図 VII D 6 h - 2 住居跡出土遺物……………227

第 156 図 VII D 6 i 住居跡・出土遺物……………230

第 157・158 図 VII D 7 g 住居跡・出土遺物……………231

第 159 図 VII D 7 g - 2 住居跡・出土遺物……………234

第 160 図 VII D 7 h 住居跡・出土遺物……………235

第 161 図 VII D 7 i 住居跡出土遺物……………236

第 162 ~ 164 図 VII D 8 c 住居跡・出土遺物……………238

第 165 図 VII D 8 h 住居跡・出土遺物……………242

第 166 図 VII D 8 i・VII D 8 i - 2 住居跡……………244

第 167 図 VII D 8 i・VII D 8 i - 2 住居跡出土遺物……………245

第 168 図 VII D 8 i - 3 住居跡・出土遺物……………247

第 169 図 VII D 9 c・VII D 9 c - 2 住居跡……………249

第 170・171 図 VII D 9 c 住居跡出土遺物)……………251

第 172 ~ 174 図 VII D 9 c - 2 住居跡出土遺物……………254

第 175 図 VII D 9 f 住居跡出土遺物……………257

第 176 ~ 179 図 VII D 0 b 住居跡・出土遺物……………258

第 180 図 VII D 0 b - 2・VII D 0 b - 3・VII D 0 b - 4 住居跡……………263

第 181 図 VII D 0 b - 2・VII D 0 b - 3・VII D 0 b - 4 住居跡出土遺物……………265

第 182・183 図 VII D 0 h 住居跡・出土遺物……………267

第 184 図 VII C 1 g 住居跡・出土遺物……………270

第 185 図 VII C 1 g - 2 住居跡・出土遺物……………271

第 186 図 VII C 1 h 住居跡・出土遺物……………273

第 187 図 VII C 1 h - 2 住居跡出土遺物……………274

第 188 図 VII C 2 h 住居跡・出土遺物……………276

第 189 ~ 191 図 VII C 2 j 住居跡・出土遺物……………278

第 192 図 VII C 3 f 住居跡・出土遺物……………282

第 193・194 図 VII D 2 g 住居跡・出土遺物……………283

第 195 図 VII D 0 i 住居跡・出土遺物……………287

第 196 図 VII E 7 a 住居跡……………288

第 197 図 VII E 9 b 住居跡……………289

第 198 ~ 200 図 VII E 0 a 住居跡・出土遺物……………292

第 201 ~ 203 図 IX D 1 e 住居跡・出土遺物……………295

第 204 図 IX D 1 h 住居跡……………298

第 205 図 IX D 2 g・IX D 3 g・IX D 4 g 住居跡……………299

第 206 図 IX D 2 g 住居跡出土遺物……………301

第 207 図 IX D 2 g - 2・IX D 2 h・IX D 3 h・IX D 3 h - 2 住居跡……………303

第 208 図 IX D 2 h 住居跡出土遺物……………304

第 209 ~ 213 図 IX D 3 c 住居跡・出土遺物……………306

第 214 図 IX D 3 g 住居跡出土遺物……………312

第 215 図 IX D 3 h 住居跡出土遺物……………313

第 216 ~ 223 図 IX D 3 j 住居跡・出土遺物……………315	第 255 図 IX D 9 g 住居跡・出土遺物……………370
第 224 図 IX D 4 d 住居跡・出土遺物……………325	第 256 図 IX D 9 g - 2 住居跡・出土遺物……………371
第 225 図 IX D 4 f 住居跡・出土遺物……………326	第 257 図 IX D 9 h 住居跡……………372
第 226 図 IX D 4 g 住居跡出土遺物……………328	第 258 図 IX D 0 f・IX D 0 f - 2 住居跡・出土遺物 ……374
第 227 ~ 231 図 IX D 4 g - 2 住居跡・出土遺物……………330	第 259 図 IX E 2 b 住居跡・出土遺物……………376
第 232・233 図 IX D 4 g - 3 住居跡・出土遺物……………335	第 260 図 IX E 5 a 住居跡……………377
第 234 図 IX D 4 h・IX D 4 h - 2・IX D 5 h・IX D 5 i 住居跡……………339	第 261 図 IX E 6 b 住居跡・出土遺物……………378
第 235・236 図 IX D 4 h 住居跡出土遺物……………341	第 262 図 IX D 1 g・IX D 1 g - 2・IX D 1 g - 3 住居跡……………380
第 237 図 IX D 5 c 住居跡・出土遺物……………343	第 263 図 IX D 1 g・IX D 1 g - 2 住居跡出土遺物 ……381
第 238 図 IX D 5 g・IX D 5 g - 2 住居跡……………345	第 264 図 IX D 1 j・IX D 1 j - 2 住居跡・出土遺物 ……384
第 239 図 IX D 5 g・IX D 5 g - 2 住居跡出土遺物……………346	第 265 図 IX D 2 i 住居跡……………387
第 240 ~ 242 図 IX D 5 i 住居跡・出土遺物……………348	第 266 図 IX D 3 h 住居跡……………387
第 243・244 図 IX D 6 f 住居跡・出土遺物……………353	第 267 図 IX D 3 i 住居跡……………389
第 245 図 IX D 7 j 住居跡……………356	第 268 図 IX D 4 f 住居跡・出土遺物……………389
第 246 図 IX D 8 f 住居跡・出土遺物……………358	第 269・270 図 IX D 4 g 住居跡・出土遺物……………390
第 247 図 IX D 8 f - 2 住居跡……………359	第 271 図 IX D 6 g 住居跡……………392
第 248 図 IX D 8 g・IX D 8 g - 4・IX D 8 g - 5 住居跡……………360	第 272 図 IX D 9 e 住居跡・出土遺物……………393
第 249 図 IX D 8 g 住居跡出土遺物……………361	第 273 ~ 281 図 IX I C 6 b 住居跡・出土遺物……………396
第 250 図 IX D 8 g - 2 住居跡・出土遺物……………363	第 282 ~ 284 図 IX I C 9 a 住居跡・出土遺物……………406
第 251 図 IX D 8 g - 3 住居跡・出土遺物……………364	第 285 ~ 288 図 IX I E 2 b 住居跡・出土遺物……………410
第 252・253 図 IX D 8 i 住居跡・出土遺物……………365	第 289 図 IX I E 2 c 住居跡・出土遺物……………415
第 254 図 IX D 9 f・IX D 9 f - 2 住居跡・出土遺物……………368	

表 目 次

第 1 表 各測点の X 系座標と標高値…………… 4	第 4・5 表 遺構名一覧(1)・(2)……………39
第 2 表 時期別遺跡数……………15	第 6 表 検出遺構数一覧……………41
第 3 表 周辺の遺跡一覧……………18	

報告書抄録

ふりがな	かみやぎたいちいせきはつくつちようさほうこくしょ
書名	上八木田 I 遺跡発掘調査報告書
副書名	新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第227集
編著者名	千葉孝雄
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020 岩手県盛岡市飯岡11-185 TEL0196-38-9001
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみやぎたいち 上八木田 I	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 かみやぎた 上八木田33-1	03201		39度 41分 34秒	141度 13分 24秒	19910408～ 19911115	22400	新盛岡競馬場 建設に伴う 緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上八木田 I	集落	縄文時代 前期前葉～ 中期初頭	竪穴住居跡153棟	縄文時代前期大木式 土器（大木4～6） 剥片石器、礫石器	山地斜面に形成された 集落 地域色濃い前期大木式 土器
		縄文時代 中期末葉	竪穴住居跡6棟	石棒	規格性を有する住居跡
		平安時代	竪穴住居跡4棟	炭化系	



第1図 遺跡の位置 (国土地理院 5万分の1 盛岡の一部使用)

I 調査に至る経過

新盛岡競馬場の建設構想は、現在の競馬場周辺が住宅地となったことによる競馬開催時の交通環境の悪化や騒音の問題化、施設の老朽化などの解消のため昭和50年に提案され、昭和58年3月に盛岡市新庄字八木田地区が計画予定地と決定された。計画地の総面積は129ヘクタールであり、建設工事は昭和63年から平成7年までの8カ年計画である。

事業の着手にあたり、昭和63年に岩手県教育委員会と盛岡市教育委員会が遺跡の分布調査を実施し、同事業に伴う遺跡として上八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡が関わる事が判明した。平成元年には盛岡市教育委員会が上八木田Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の試掘調査を実施し、縄文時代や古代の遺構と遺物包含層を確認した。その結果をもとに、岩手県教育委員会は岩手県競馬組合と協議を行い、上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡については平成2年度に、同Ⅱ遺跡については平成3年度に発掘調査をすることとした。

平成2年、当センターは上記3遺跡の本調査を実施したがそれと並行して、岩手県教育委員会は上八木田Ⅰ遺跡の発掘調査範囲の確認調査を実施した。その結果は同報告書^(注)に詳しいが、競馬組合との協議を経て22,400㎡を対象に本調査をすることとした。この結果、上八木田Ⅰ遺跡の発掘調査を平成3年度財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの事業として、Ⅱ遺跡とともに実施することとし、平成3年4月1日付けで岩手県競馬組合と文化振興事業団が委託契約を締結し、本遺跡の調査に着手した。

(注) 岩手県教育委員会 1991：岩手県内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅱ「岩手県文化財調査報告書第90集」

II 野外調査と室内整理

1. 野外調査

(1) 調査区画の設定 (第8図)

上八木田遺跡群 (上八木田 I～V 遺跡の総称として用いる。以下同じ。)の調査に際し、調査対象区域を網羅した共通の座標を用いることとし、平面直角座標第 X 系にのせて区画を設定した。座標原点は第 X 系 $X = -33,000.000\text{m}$ 、 $Y = 33,000.000\text{m}$ である。この原点から東方および南方へ一辺 50m の大区画を設定し、この一辺をそれぞれ 10 等分して 5m 毎の小区画とした。区画名は、大区画に対しては東方向へローマ数字を、南方向へ大文字アルファベットを順に与え、小区画に対しては各大区画内で東方向へアラビア数字を 1～9・0 まで、南方向へ小文字アルファベットを a～j まで順に与えた。これらの組み合わせにより、大区画名は I A、II B、小区画名は大区画名を冠して I A 1 a、II B 2 b のように表した。上記のようにして設定された大区画 (50×50m) のうち、上八木田 I 遺跡に関わるものは

IV D、V C、V D、VI C、VI D、VII B、VII C、VII D、VII E、VIII C、VIII D、VIII E

IX C、IX D、IX E、X D、X E、XI B、XI C、XI D、XI E、XI D

の 22 区画である。

区画は調査計画立案・進捗状況の把握・粗掘り作業区の設定・遺物の取り上げ・遺構の命名などにおいて多く用いられた。

測量のための座標は 1m 単位とし、上記原点を起点として南へ S 1・S 2・…、東へ E 1・E 2・…、のように原点から離れるにしたがって増えていく。

調査に際し設定した基準点の座標値 (X、Y) および標高は次のとおりである。

基準点 7 (S 150 E 150) $X = -34,050.000\text{m}$ $Y = 33,150.000\text{m}$ $H = 256.554\text{m}$

基準点 8 (S 150 E 250) $X = -34,050.000\text{m}$ $Y = 33,250.000\text{m}$ $H = 263.447\text{m}$

基準点 9 (S 200 E 300) $X = -34,100.000\text{m}$ $Y = 33,350.000\text{m}$ $H = 260.826\text{m}$

基準点 10 (S 200 E 400) $X = -34,100.000\text{m}$ $Y = 33,400.000\text{m}$ $H = 265.996\text{m}$

遺構実測の精度を高めるために、測点を要所に設けた。地点とその座標値・標高値は表に示した (第 1 表)。これらとは別に、調査範囲が広いことから、大まかな位置や区域を表すための名称が必要とされた。調査区域の連続・不連続と地形を考慮して、便宜的に次のように呼ぶことにした。

A 区…調査区西側の独立した区域

B 区…A 区と C 区間の区域

C 区…調査区東側の独立した区域

点名	X	Y	H
No. 1	-34,050.000	+33,175.000	260.531
No. 2	-34,050.000	+33,200.000	263.239
No. 3	-34,050.000	+33,225.000	263.603
No. 4	-34,075.000	+33,200.000	259.401
No. 5	-34,075.000	+33,225.000	260.534
No. 6	-34,050.000	+33,800.000	267.962
No. 7	-34,050.000	+33,325.000	276.526
No. 8	-34,050.000	+33,350.000	272.413
No. 9	-34,050.000	+33,375.000	268.970
No. 10	-34,050.000	+33,400.000	270.082
No. 11	-34,025.000	+33,325.000	272.831
No. 12	-34,025.000	+33,350.000	276.524
No. 13	-34,025.000	+33,375.000	273.394
No. 14	-34,025.000	+33,400.000	272.049
No. 15	-34,075.000	+33,300.000	263.530
No. 16	-34,075.000	+33,325.000	267.913
No. 17	-34,075.000	+33,350.000	268.189
No. 18	-34,075.000	+33,375.000	266.329
No. 19	-34,075.000	+33,400.000	269.814

点名	X	Y	H
No. 20	-34,075.000	+33,425.000	272.548
No. 21	-34,075.000	+33,450.000	274.299
No. 22	-34,075.000	+33,475.000	273.759
No. 23	-34,075.000	+33,500.000	272.805
No. 24	-34,100.000	+33,325.000	261.755
No. 25	-34,100.000	+33,350.000	263.890
No. 26	-34,100.000	+33,375.000	264.505
No. 27	-34,100.000	+33,425.000	267.674
No. 28	-34,100.000	+33,450.000	268.422
No. 29	-34,100.000	+33,475.000	268.562
No. 30	-34,100.000	+33,500.000	270.709
No. 31	-34,125.000	+33,350.000	261.037
No. 32	-34,125.000	+33,375.000	261.156
No. 33	-34,125.000	+33,400.000	264.197
No. 34	-34,125.000	+33,475.000	268.354
No. 35	-34,125.000	+33,500.000	271.680
No. 36	-34,000.000	+33,525.000	283.109
No. 37	-34,025.000	+33,525.000	279.009

第1表 各測点のX系座標と評高値

さらに、B区に2筋ある尾根について、東側のそれとその周辺をB区東尾根、西側のそれとその周辺をB区西尾根または単にそれぞれ東尾根、西尾根と呼んだ。地形との関わりについては後述する。

(2) 調査体制とその運営

面積が2万㎡以上におよぶこの調査に対し、調査員は都合11名が関わり作業員登録は最大で157名を数えた。調査を効率的に進めかつ可能な限り情報を収集し記録するために次のような体制を整えた。

〈調査員に関して〉2名で1パーティーを組み、概ね大区画毎に担当することとした。このパーティーは固定的なものではなく、調査の進行をスムーズに進めるために時には1名または3名というように弾力的に運営された。1名は担当区画を持たずに調査の進行計画を立て進捗状

況を把握し全体を統括した。統括責任者はまた競馬組合・文化課・その他との渉外を受け持つほか、遺構の認定の他各パーティーとの整合性や調査法にかかわる問題点に常に心を配った。

〈作業員に関して〉調査員の各パーティーに対し20名程度の人数を配属し、各々のパーティーの中で粗掘り、精査の作業を分担した。実測については各パーティーから独立して2人1組の実測班が編成され、常時5組程度が各パーティーの調査進行に合わせて統括責任者によって配属された。実測班は図面作成の他、遣り方設定・測量杭の設置、遺物の取り上げも行った。また、写真撮影のためのローリングタワーの組み立て・分解についても実測班同様特別チームが編成されたが、普段は各パーティーの仕事に従事した。

〈記録他〉調査過程および結果についての所見は当センターで作成しているフィールドカードを用いて記録した。観察事項のみならず疑問や不明な点・仮説など調査者の思考過程をも盛るように努めた。浮かび上がった疑問点・問題点はその日のうちに野外調査終了後のミーティングで話し合うようにした。ミーティングでは他に各パーティーから当日の進捗状況、遺構の登録、翌日の予定、実測班の要不要などの報告・要請および全体的な打ち合わせを行った。

(3) 粗掘りと遺構検出

区画を設定したあと、前年度に試掘調査をしたトレンチをクリーニングして検出遺構と遺物の確認、盛土内の遺物のとりあげの作業を行った。試掘はすべての大区画で実施されており、トレンチの土層断面観察をしながら粗掘りと遺構検出を行った。調査は概ね、A区とB区西尾根については順次西から東に向かって大区画・小区画毎に進め、B区東尾根とC区については逆に東から西に向かって同様に進めた。

前年度の試掘トレンチおよび本調査に際して入れたトレンチの状況を観察し、検出面までの土量や遺物包含の有無を判断しながら、一部は重機を用いることもあったが、多くは人力によって粗掘りと遺構の検出を行った。

A区については、全調査区の終了とは別に、当該区の調査が終了した6月3日時点で委託者に引き渡され、工事に着手されている。

(4) 遺構の名称

遺構の名称は、ⅣD8c住居跡・ⅤD2c土坑などのように、その位置する小区画名と遺構種類名を組み合わせ用いた。複数の同種遺構が検出された場合または重複遺構の場合は、ⅦC9i-3住居跡・ⅦD9b-2土坑などのように小区画の次に順次枝番号をつけた。遺構が複数の小区画にまたがる場合は、その大部分を占める小区画名を用いるようにしたが、精査の段階で予想外に遺構が広がることもあり厳密なものとは言えない。

(5) 精査

精査は、通常の住居跡については四分法、土坑・陥し穴・焼土遺構・土器埋設遺構について

は二分法を原則とし、遺構の性格・遺存状況によって適宜方法を変えて行った。四分法によった場合、分割区北西四半部をQ1とし時計と反対回りに順次Q2～Q4と呼ぶことにした。遺物は埋土内のものはこの分割区毎に、床面出土のものは地点・標高を実測図またはフィールドカードに記入して取り上げている。必要に応じ、埋土上部・埋土下部、床面直上などの区別も行った。しかし住居跡が斜面において検出される場合は遺存状況が悪く、原則通りの方法が取れなかったことも多い。

(6) 実測と写真

実測は、遺構の密集度の高い区域は遣り方実測を用いたが、多くは簡易遣り方を採用した。実測図は20分の1を基本に、焼土遺構やカマドの断ち割り断面などでは必要に応じて10分の1で行った。

写真撮影は調査員が行った。遺構の平面・埋土断面・遺物の出土状況など、情報の量・質に応じて可能な限り写真による記録を行った。使用したカメラおよびフィルムは、モノクロームが35mm判と6×7cm判各1台、カラーズライドが35mm判を1組とし、最大4組を使用した。航空写真は、A区の調査終了時点でA区のみを、また全調査区の調査終了時点でA区以外を撮影している。

2. 室内整理

(1) 作業経過

遺物の洗浄や図面合成などの一部は野外調査時の雨天の場合に現場で行ったが、遺物整理・記録整理の大部分は野外調査終了後に行い、おおよそ次の様な内容で行った。

第一次（平成3年11月～平成4年3年）

- | | |
|-------------|---|
| (遺物整理) | 石器…洗浄、注記、登録、実測の一部、写真撮影
土器…洗浄、仕分け・注記、接合・復元の一部
鉄器…写真撮影 |
| (鑑定他) | 石器の石質鑑定、炭化材の樹種同定、火山灰鑑定委託
野外調査で採取した埋土などのフローティング作業と検出された堅果類の鑑定委託、鉄器の鑑定と保存処理の委託 |
| (遺構図面整理) | 点検・合成、第二原図作成、図面台帳の作成 |
| (遺構観察記録の整理) | フィールドカードの整理、遺構観察表の作成 |
| (写真整理) | 野外調査時の写真の整理、遺構写真台帳の作成
遺構写真図版の一部作成 |

第二次（平成4年4月～平成6年3年）

- (遺物整理) 石器…実測、トレース
土器…接合・復元、登録、実測、写真撮影、トレース
鉄器…実測、写真撮影
- (鑑定他) 炭化糸の鑑定と保存処理委託、土器胎土分析委託
- (遺構図面整理) 遺構実測図トレース、図版作成
- (写真整理) 遺構図版の作成、遺物写真図版の作成、遺物台帳の作成
- (報告書作成) 原稿執筆、割り付け、編集、

これらの作業のうち、接合・復元、実測・トレースなどの具体的作業は、調査員の計画と指示のもとに当センターの作業員があたった。

(2) 整理方法

<遺構登録と報告書への掲載>

野外調査時に登録した遺構のうち、住居跡として登録した遺構の一部は、室内整理段階で土坑として扱った方が良いと判断された。それについては遺構名を変更して報告してある。また同じく住居跡としたものでも、遺存状態が悪く土坑の可能性も否定できないものがあった。これらについては野外調査時点の名称を踏襲し、事実記載においてその旨説明してある。野外調査において精査の結果、登録が抹消された遺構がある。このうち枝番号をつけた遺構名についてはその番号を順次繰り上げるべきであるが、整理の都合上欠番と同様の扱いとし、野外調査時点の遺構名をそのまま用いている。

重複遺構については、次のように扱った。重複には、壁や床の一部のみ重複する部分重複と、同一床面の中で2棟以上の重複を想定できる完全重複とがある。それぞれに時期や構築主体者を異にする場合と、同一主体者による建替え・拡張・縮小の場合とが考えられるが、その判断は容易ではない。本報告書では、完全であれ部分であれ、また建替え・拡張・縮小もこれらすべて重複の概念で把握し、原則的に枝番号を付けて複数の住居として扱い、集計上もそのように処理してある。

遺構の事実記載に当たっては、観察項目にしたがって文章で記述したが、焼土遺構については表形式で表した。

<遺物登録と報告書への掲載>

土器の登録については接合・復元の作業後に報告書に掲載するものを選び出しそれのみ番号を付し台帳に記載した。完形品・またはそれに準じて器形・全体の文様または地文が分かるものは遺構内外を問わず登録した。

破片資料では、遺構内土器は、遺構の時期の判断資料となるものや、特徴的な文様を有するものを取り上げた。小破片の場合や別個体でも同種の場合は不掲載とした。地文のみの胴部破

片についても取り上げないことが多かったので、遺物図版に個体数は反映していない。遺構内土器の出土量について、個体数・破片数などをカウントする作業はできなかったため、目安として可能な限り重量を示すようにした。

遺構外土器については特徴を有する口縁部破片を主とし、胴部破片は分類上必要なものを取り上げた。

石器については、剥片石器はフレーク・チップ類を除き、二次的な剥離を有するものはすべて登録した。二次的な加工がされていても道具と認め難いものはリタッチドフレーク(Rフレと略称する)、二次的な剥離が微小なもので加工とは認め難く使用痕と考えられるものはユーティライズドフレーク(Uフレと略称する)という名称をつけて台帳に記載した。礫石器は、使用痕を有するもの、使用痕は認められないが他から本遺跡に持ち込まれたと考えられるものを登録した。

登録した遺構内出土石器はRフレ・Uフレを除きその全てを報告書に掲載することを原則とした。ただし大幅な欠損品はその限りではない。

遺構外石器については、点数が膨大であり全てを取り上げることはできなかったため、任意の分類基準を設け、同一分類に属するもののうち完形品を中心に代表的なものを図化した。図化できなかった遺構外石器(Rフレ・Uフレを除く)については、整理時点の番号を付し、分類・分量・石質などを表で示した。図示した点数は、各分類に属する出土点数の割合を反映するものではない。

<図版掲載順>

遺構図版は、本文と共に種類別にして、大調査区毎に北西から南東の順に掲載してある。分冊3の写真図版も同様である。遺物図版は、遺構内出土遺物については住居跡・炉跡・土器埋設遺構の場合は原則として当該遺構の次に掲げ、土坑・陥し穴・焼土遺構については遺構図版をまとめて掲載した後、遺構種別毎に一括して掲げた。遺物については整理時点の番号(整理番号)とは別に、遺構内外や種別に関係なく掲載順に1からの通し番号(報告書番号)をつけている。写真図版の番号はこの報告書番号と一致する。

<縮尺>

遺構図版は原則として50分の1で表し、必要によっては大縮尺または小縮尺を用いた。各図版にスケールで示した。

遺物については、土器実測図は4分の1、拓影図は3分の1、剥片石器は2分の1、礫石器は3分の1を原則としたが一部異なるものもある。各図版にスケールで示した。

写真図版については、遺構・遺物とも縮尺不定である。

<図版>

遺構は、原則として北(公共座標による)を上とし、位置を示すための測量座標を示してあ

る。重複遺構の新旧関係の表現は、その様態が³一様ではないことから統一されてはいない。重複遺構または隣接遺構名を図版中に示す場合には、煩雑さを避ける目的で正式遺構名ではなく省略した形で掲げた。住居跡は「住」、土坑は「坑」、陥し穴は「陥」、焼土遺構は「焼」と遺構種別の頭文字のみを用いた。例えば、ⅣD8b住居跡はⅣD8b住、ⅦD9b土坑はⅦD9b坑のごとくである。

使用したスクリーン・トーンは凡例に示した通りである。単位は、長さはcm、重さはgである。

<計測値他>

遺構・遺物の部位名称および計測位置は図に示した(第2図)。計測値は土器・石器とも推定値は[]、残存値は()で示した。単位は、長さはcm、重さはgである。

<土層注記>

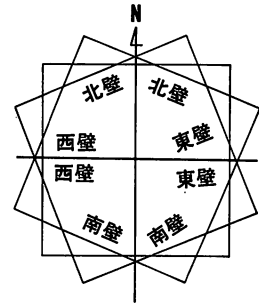
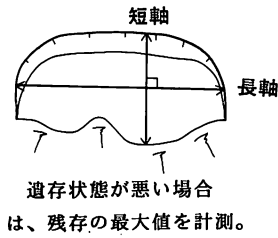
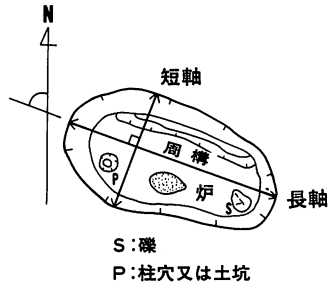
土色は農林水産省農林水産技術会議監修の「新版標準土色帖」(1989年版)による。

〈規模〉長軸：開口部の最大の値をとる位置で計測。

短軸：長軸に直交して最大の値をとる位置で計測。

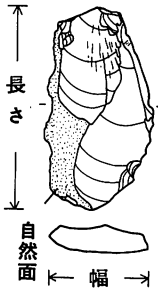
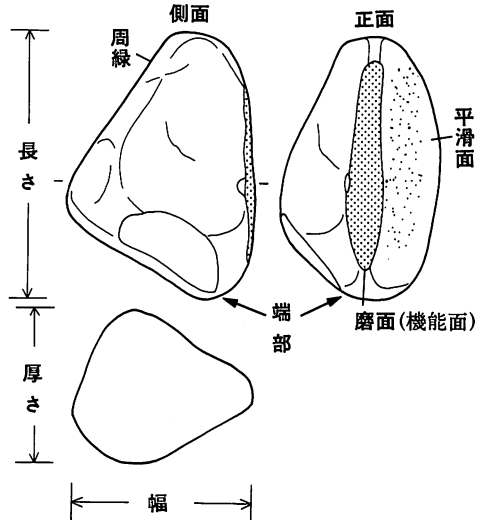
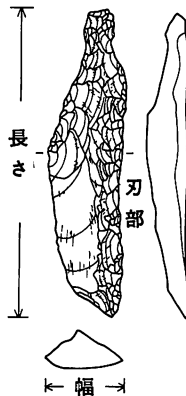
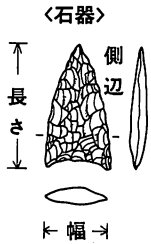
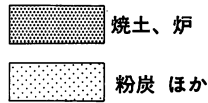
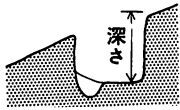
〈壁高〉東西南北の各壁の最

大の値をとる位置で計測。

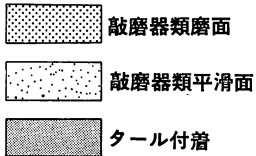


遺存状態が悪い場合は、長軸・短軸の計測位置で計測。

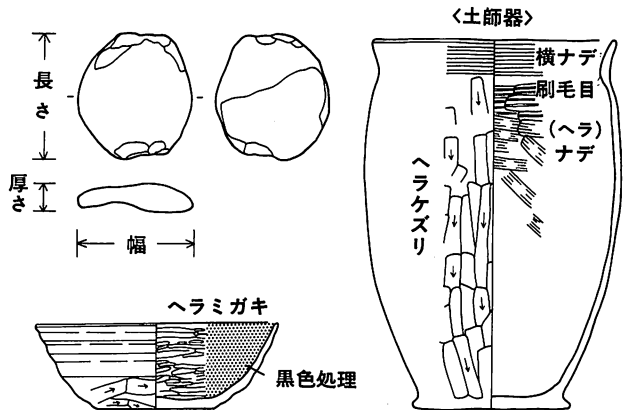
〈深さ〉最大の値をとる位置で計測。



* 厚さは、剥片石器の場合、凸形打瘤を除いて、主平面と直交する最大値を示した。



* 他に用いる場合は、その都度図版内に注記した。



第2図 計測位置・部位名称

III 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (第1図)

本遺跡の所在する盛岡市は、岩手県の中央部に位置し、北は岩手郡滝沢村・玉山村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は紫波郡矢巾町・紫波町、稗貫郡大迫町、西は岩手郡雫石町に接する。本遺跡は盛岡市街地の東方、盛岡市役所からの距離約5.5km、北上山地の西縁にあたり、北緯39° 41'、東経141° 13' 付近に位置する。

本遺跡一帯は「八木田遺跡」として周知の遺跡であり、縄文土器(早期)および弥生土器を出土するとされている(岩手県史第1巻 1961)。現在は、八木田遺跡、下八木田遺跡、上八木田I～V遺跡としてそれぞれ登録されている。これらの各遺跡は八木田沢に開析された狭隘な谷底平野の縁辺に分布する。上八木田I遺跡は、同沢の北側にあたり北から延びる尾根の南斜面を占地する。沢を挟んで南側には上八木田II、III遺跡が³、また沢の上流部には上八木田IV、V遺跡が所在する。

本遺跡の標高は260～280m前後で、盛岡市街地との比高は135～155mである。現況は主に尾根部は山林、麓部は畑地であり、ほか一部は宅地等である。

2. 地理的環境

盛岡市は岩手県の県庁所在地であり、文化・経済・行政等の中心地である。近世南部氏の城下町として発展し、明治以降旧城下を核に周辺の町村を合併して市域を広げてきた。最近都南村を加え、面積489.15km²、人口約28万3千人となり、東北地方北部の中核都市としての名実を備えつつある。行政区の範囲は、東は北上山地の分水嶺に達し、西は奥羽山脈の麓にかかる。市街地は両山地に挟まれた盛岡盆地に形成されており、標高は盛岡市役所付近で約126mである。

市域を東西に分割するように、東北地方最大の大河北上川が南流し、市街地の南寄りの位置で西から雫石川、東から中津川・築川を集めて水量を大きく増加させる。北上川から東側では毛無森の標高1,437mを筆頭に標高600m～900mの山体群が群在しており、中津川・築川等が³開析した狭い谷底平野を中心として集落が点在する。交通網はこれらを繋ぎながら河川に沿って延びている。すなわち米内川に沿って東日本旅客鉄道山田線が³、築川と並行して国道106号線(旧閉伊街道)が³三陸海岸に至る。

^(注)年平均気温は10.5° と全体的には冷涼であるが³、最高気温32.5°、最低気温-11.4° と寒暖の差が大きく盆地特有の特徴を示している。年間降水量は1454.5mmであるが³、冬の降雪量はそれほど多くはない。

(注) 数値は「盛岡市統計資料」によるもので、人口は平成5年度、他は平成3年度の統計である。

3. 地形・地質概観 (第3・4図)

北上川西側は、第四紀の新岩手火山形成期およびそれ以前の火山碎屑物が火砕流となって台地を構成し、さらに北上川・雫石川によって形成された河岸段丘や扇状地が広く発達し、平坦地・沖積平野が広範囲に形成されている。

これに比し東側は、西流する中津川・築川の営力は平坦地をほとんど作り出さず、北上川本流は著しく東に寄り北上山地山稜が近くまで迫っている。平坦地は、僅かに中津川が北上川に合流する地点の低位段丘でやや纏ってみられる程度であり、他は狭隘な中位段丘・谷底平野・崖錐性扇状地などが、中津川・築川およびそれらの支流に沿って形成されるのみである。

北上山地は、主に先第三系の古期岩類を基盤とし、隆起準平原化作用と隆起の繰り返しによって形成された高度の異なる山体群で構成される。山地のほぼ中央付近を、北西から南東にかけて走る早池峰構造地帯によって、北部北上帯と南部北上帯に二分される。北部北上帯に属する山地は、外山山地と玉山山地である。外山山地は姫神岳の南西部に連なる高度700m～900mの中起伏山地である。玉山山地は高度400m以下の小起伏山地で、第四紀の侵食作用によるものと推定されている。南部北上帯は手代森山地がこれにあたる。高度は400m以下で小起伏山地部と中起伏山地部の双方で構成されている。

早池峰構造体に属する山地は、高森山地、朝島山山地および建石山地である。本遺跡は、同構造体上により、標高560mの建石山を中心とする建石山地の範囲にある。小起伏山地にあたるが、中津川と米内川およびその支流によって開析されてやや起伏量は大きくなっている。

基盤岩は主に輝緑凝灰岩と泥岩からなり、これらが北西から南東方向に交互に筋状に走っている。一部には深成岩類の貫入がみられる。遺跡周辺の地形配列は、概ね北西から南東の方向性を示し、これは地質構造に規定されていると考えられている。

本遺跡は、建石山地を構成する深沢山(標高361m)から延びる尾根と、中津川の小支谷である八木田沢が開析した谷底平野との間に形成された、山麓緩斜面を中心とする山地縁辺に立地する。この地形面は最終氷期の周氷河作用によって形成されたもので起伏量の大きい山地の全面でよく発達すると思われる。本遺跡がのる斜面の成因もそれに該当するものと思われる。

引用・参考文献

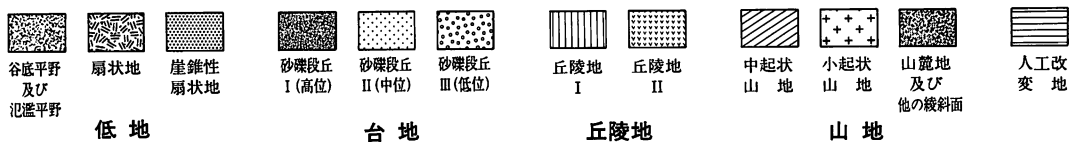
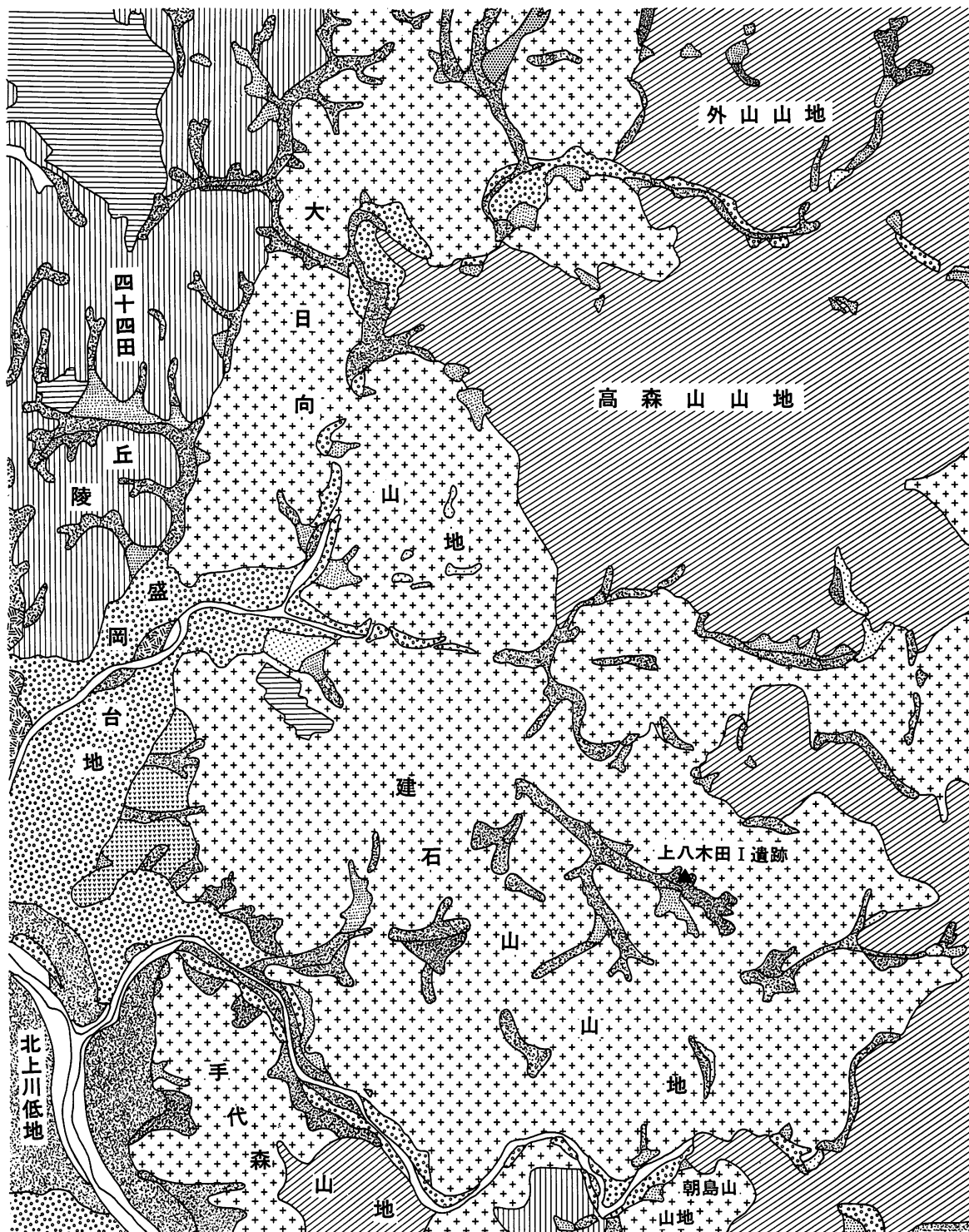
岩手県 1978：『北上山系開発地域土地分類基本調査 盛岡』

岩埋文 1992：『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第177集

岩埋文 1993：『上八木田Ⅱ発掘調査報告書』岩埋文報第194集

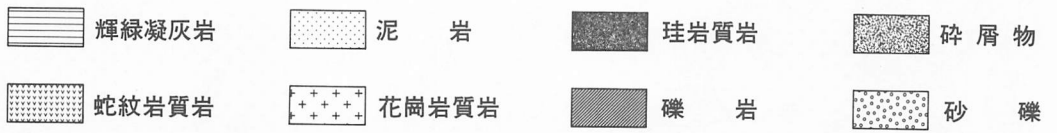
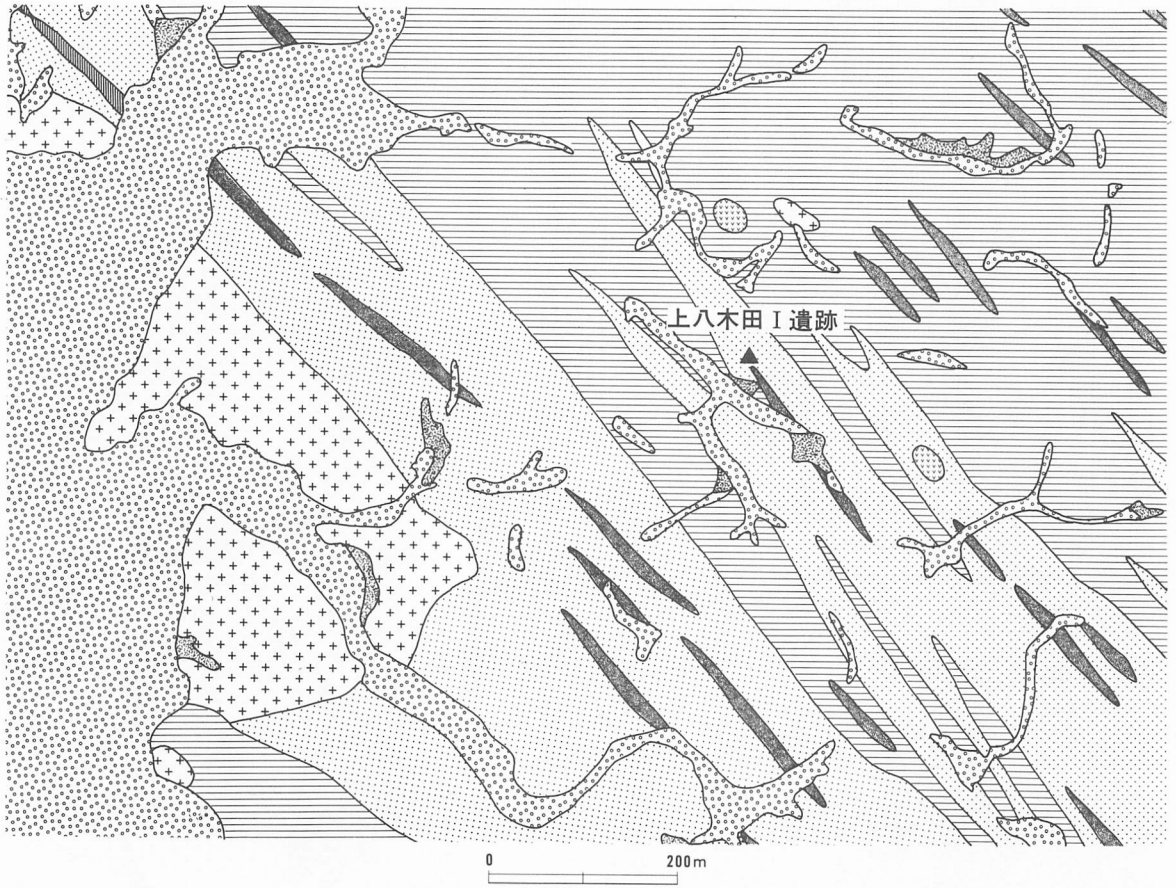
(岩埋文は、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの、

岩埋文報は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書の略称として用いた。以下同じ。)



(岩手県 1978「土地分類基本調査 盛岡」による)

第3図 地形分類図



(岩手県 1978「土地分類基本調査 盛岡」による)

第 4 図 遺跡周辺の表層地質図

4. 周辺の遺跡 (第5図・第3表)

盛岡市に所在する遺跡は昭和61年版岩手県遺跡台帳で283、盛岡市教育委員会の遺跡地図(1989年版)では288を数える。ここでは全体を網羅することはできないので、本遺跡が位置する北上川東側を中心に図化した。

図幅の更に東側にも中津川、築川、およびその支流にそって遺跡が散在しているが、密集度は低い。図幅の西側には、雫石川の北岸盛岡台地に縄文時代草創期・早期を主体とした大新町遺跡、中期の拠点集落と想定される大館町遺跡が位置し、平安時代の集落跡も複合している。雫石川以南では沖積地が広範囲に形成され志波城をはじめ奈良時代から平安時代の遺跡が数多く分布している。山地の縁辺の緩斜面は縄文時代の遺跡が占地している。

第5図および第3表は、前掲岩手県遺跡台帳および盛岡市遺跡地図ほかを参考にして、縄文時代に属する遺跡に絞ってその位置と時期を示したものである。土器散布地、集落跡などの遺跡の性格については捨象してある。また一部に複数遺跡をまとめて示したものがある。

図幅の範囲内における時期別の遺跡数は第2表の通りである。収集した資料に限りがあり詳細が不明なものもあるが、おおよその傾向は把握できる。すなわち、縄文早期、前期と増加した遺跡数は、中期に急増してピークに達し、後期晩期と漸減傾向を示す。

時 期	早期	前期	中期	後期	晩期
遺跡数	13	18	47	38	25

第2表 時期別遺跡数

早期では、向館遺跡^(注)(18)から押型文土器が数点出土している。貝殻文の時期になると、松屋敷遺跡(1)で竪穴状遺構が検出され、近接して発見された焼土遺構は屋外炉である可能性が指摘されている。八木田遺跡群(70他)では物見台系の土器が出土しているが遺構は確認できていない。他には四十四田丘陵の南縁や中津川ぞいに遺跡が点在するが、近辺の河川からの比高がやや大きい場所を占地している。一本松遺跡(60)は貝殻文の他に縄文・縄文土器を出土している。「盛岡市史」によると八木田遺跡からも同様の土器が出土しているが、今回の調査では検出されなかった。

前期の遺跡は、米内川の小支谷である米内沢、中津川中流、および同川の小支谷である八木田沢など、標高200m～300mの山間部に位置するものが多いが、未調査のものが多く詳細は不明である。向館遺跡では、本遺跡のものに酷似した前期の土器が出土しているが、遺構は検出されていない。

前期末から中期初頭の遺跡は、砂溜遺跡(93)など建石山地の西縁、北上低地に接する丘陵地にも進出し小山遺跡群と総称される。砂溜遺跡からは大型住居を含む3棟の住居跡が、仁反田遺跡(95)からは土坑群が数多く検出されている。これを居住域と貯蔵施設との場の使い分

けと見ることについては、報告者は地形の特質から否定的である。最近調査されたほぼ同時期の西黒石野遺跡(117)は、北上川を西の臨む丘陵の西縁に位置する点で立地上の共通性がある。同遺跡は10棟の住居跡が直径40mの規模で環状に配置され、中央には広場を有するという環状集落跡である。

中期の遺跡は、米内川と中津川の合流地点付近の砂礫段丘と、米内沢が米内川に注いで作り出した谷底平野とその周辺の崖錐性扇状地において急増する。遺跡の数のみならず、その規模においても大きく発展する。柿ノ木平遺跡(84)や上米内遺跡(19)、向館遺跡などがそれぞれある。また、四十四田丘陵上の松屋敷遺跡も同時期の集落跡である。柿ノ木平遺跡の数多い住居はおおむね大木8b期のなかに収まるもので、集落が次期に継続されない点特徴的である。

後期には、中期に出現した米内川・中津川の合流地点の砂礫段丘上の集落の多くが姿を消すほか、向館遺跡、上米内遺跡など継続して営まれる集落もその規模を大きく減ずる。因みに向館遺跡では中期の住居数10数棟に対し、後期の住居数は2棟であり、上米内遺跡でも同様の傾向がうかがえる。住居跡は前述の他に、川目A遺跡(113)や大葛遺跡(64)、上八木田Ⅲ遺跡(72)、同V遺跡(74)など山間部で検出されているのが特徴的である。一方、前記砂礫段丘は、落合遺跡(53)で墓壇群・配石遺構が検出され、土地利用の上でその役割を変化させている。

晩期にいたると築川沿いの遺跡はほとんど姿を消すほか、疎密はあるものの全域的にその数を減じる。四十四田丘陵の西縁部と米内川流域にやや密集域がある。上米内遺跡では晩期の全時期を通じての住居跡・墓壇群が検出されている。

以上、時期をおって概観してきたが、このなかで上八木田Ⅰ遺跡を把えることとする。本遺跡は前期の大集落跡として際立っているが、図に示した全域で遺跡数が増加する中期には本遺跡においても集落が営まれ、逆に減少傾向を示す後・晩期においては、本遺跡では晩期前葉および中葉のものがそれぞれ1遺構ずつあるに過ぎない。

また、前期に限れば、該期の18遺跡の内容について未詳なものが多いので速断はできないが、北上川東岸の丘陵上を占地する遺跡が末葉から中期初頭にかけての時期に属するのに対し、その前段階を主体とする本遺跡は山間地に位置するという特徴が浮かび上がる。

(注) 番号は第5図・第3表の遺跡番号である。なお、向館遺跡、上米内遺跡、松屋敷遺跡の調査報告書については現在整理中であり、その内容については担当者から教示を得た。

引用・参考文献

- 岩手県教育委員会 1986：『岩手県遺跡台帳』
草間 俊一 1951：「先史期」『盛岡市史 第1巻』 盛岡市
小岩 末治 1960：「上古篇」『岩手県史 第1巻』 岩手県



● は縄文時代前期の遺跡

第5図 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	備考
1	松屋敷	早期・中期	H5. 岩埋文調査, 集落跡・狩場跡
2	小鳥沢A-S	前期末~中期初	S58(C), S59(E), S60(B), S63 市教委調査(含試掘), 狩場跡
3	道の下A		S63. 市教委調査
4	道の下B	前期・中期	
5	米内沢A		
6	米内沢B	前期・晩期	
7	下三沢	前期・晩期	
8	上三沢	前期・晩期	
9	一戸農場	中期~晩期	
10	矢沢	後期・晩期	盛岡市史
11	大崎新田	後期	
12	矢沢口		
13	畑	中期~晩期	
14	盲沢下		
15	盲沢	中期・後期	
16	止沢	中期・後期	
17	畑井野	前期・中期	盛岡市史
18	向館	草創期~晩期	H4. 岩埋文調査, 中期・後期集落跡
19	上來内	中期~晩期	S63. 市教委調査, 集落跡 H4-5. 岩埋文調査, 集落跡
20	松木平		
21	大平		
22	四十四田		
23	黒石野	前期・後期・晩期	S63-H2. 市教委調査
24	東黒石野	後期・晩期	H1. 市教委調査
25	黒石野平	後期・晩期	
26	黒岩		
27	東緑が丘		S60, S62, S63. 市教委調査
28	上田頭	早期	S63. 市教委調査
29	宇登坂	中期・後期	
30	長根		
31	樺石		H1. 市教委調査
32	洞清水	後期	
33	蔵ノ神	早期~晩期	S57. 市教委調査, 遺物少量
34	新茶屋	晩期	盛岡市史
35	新茶屋口		
36	甘口	晩期	盛岡市史
37	蒼前	早期	
38	イタコ塚		
39	道下	前期・中期	
40	道上		
41	岩清水		S62~63. 市教委調査
42	久保屋敷A		
43	稲荷窪		
44	金比羅前		
45	上田山	中期	
46	高松		
47	久保屋敷B		
48	銭神沢	後期・晩期	S61. 市教委調査
49	合間	早期・前期	盛岡市史
50	日向	早期・前期	
51	橋山田	後期	
52	永福寺山		
53	落合	後期・晩期	S61-2, H2-3. 市教委調査 配石遺構
54	馬場野		S57. 市教委試掘, 遺物僅少
55	稲荷社前		
56	下米内		
57	大豆門		
58	薬師社脇	中期	
59	アカトリ	中期	
60	一本松	早・前・後・晩	S42. 若手大学 盛岡市教委調査

番号	遺跡名	時期	備考
61	熊ノ沢		
62	一本松沢		
63	エドコ山	中期	
64	大葛	中期・後期	S62. H. 市教委調査, 後期集落跡
65	大馬ヶ洞	中期・後期	
66	上大葛	中期	
67	笹ノ平	早期~中期・晩期	
68	高畑A	中期・後期	盛岡市史
69	高畑B		
70	上八木田I	早期~中期・晩期	H3. 岩埋文調査, 前期集落跡
71	上八木田II	早期・晩期	H3. 岩埋文調査, 狩場跡
72	上八木田III	後期・晩期	H2. 岩埋文調査, 後期集落跡
73	上八木田IV	中期・後期	H2. 岩埋文調査, 狩場跡
74	上八木田V	早期~晩期	H2. 岩埋文調査, 前期・後期集落跡
75	下八木田	早期・中期	
76	八木田	早期	
77	滝ノ上A		
78	滝ノ上B		
79	白滝	中期	S57. 市教委調査, 遺物僅少
80	岩山南		S59. 市教委調査, 狩場跡
81	栗木平	中期・後期	
82	寺沢	中期・後期	
83	向田	前期・中期	
84	柿ノ木平	中期	S50-51. 若手大学調査 S57. 市教委調査, 集落跡
85	稲久保	中期	
86	桜山		
87	大久保	中期・後期	
88	大塚	後期・晩期	H2. 市教委調査
89	鼻子		
90	新庄		
91	瀬戸		
92	山王山	中期	
93	小山	前期~晩期	S61-62. 市教委調査 中期包含層
94	砂溜	前期~中期	S62-63. 市教委調査 中期初頭集落跡
95	仁反田	前期~中期	県教委調査, フラスコビット群
96	和田		
97	沢田	後期・晩期	S57-58. 市教委試掘 後期上層僅少
98	金勢		
99	貝石	中期・後期	S62. 市教委調査
100	立石		
101	安庭館	中期・後期	
102	檜ヶ森		
103	南仙北		
104	門		
105	川目寺沢		
106	たたら山		
107	宇都野		
108	道達		
109	ブナト	後期	
110	泣坂		
111	田ノ沢		
112	川目B		
113	川目A	中期・後期	盛岡市史, 斧跡, 三足土器
114	戸仲	中期・後期	盛岡市史
115	小屋野	後期	
116	宇曾沢		
117	西黒石野	前期末~中期初	H3. 市教委調査, 環状集落跡
118			
119			

第3表 周辺の遺跡一覧

- 盛岡市教育委員会 1975：『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和55～58年度－』
 盛岡市教育委員会 1976：『盛岡市埋蔵文化財調査年報－昭和59年度－』
 盛岡市教育委員会 1983：『柿ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報－』
 盛岡市教育委員会 1989：『小山遺跡群－昭和63年度発掘調査報告－』
 盛岡市教育委員会 1989：『盛岡市遺跡地図』
 盛岡市教育委員会 1992：『大館遺跡群大館町遺跡 平成3年度発掘調査概要』

5. 遺跡の微地形と基本層序（第6図・第7図）

上八木田Ⅰ遺跡は、建石山地を構成する深沢山（標高361m）等から延びる尾根と、中津川の小支谷である八木田沢が開析した狭隘な谷底平野との間に形成された、山麓緩斜面を中心とする山地縁辺に位置する。

遺跡内には、八木田沢に注ぐ小沢が3本あり、うち2本は埋没谷となっている。西側埋没谷は試掘調査において遺構・遺物が発見されず湧水がみられたことから調査対象から外されたものである。この埋没谷より西側の区域を便宜上A区と呼ぶことにする（第7図）。また、遺跡東端に現存する沢は、小規模ながら侵食作用による谷部の形成が明瞭であり、同様に調査対象外とされた。この沢部より東側をC区と呼ぶことにする。A区とC区の間にも埋没谷が存在するが調査範囲としては連続するためB区として一括した。B区には2筋の尾根が突き出しているが、西側の尾根とその麓部を含めてB区西尾根、又は単に西尾根、東側の尾根とその麓部を含めてB区東尾根又は単に東尾根と呼ぶことにする。

上八木田Ⅰ遺跡の基本層序については、その立地が山地緩斜面を中心とするため、安定した一定の表徴をみることができない。A・B・Cの各区はもちろん、B区でも尾根頂部と麓部とでは著しく異なっている。したがって、遺跡全体の基本土層を画一的に示すことはできない。ここでは、区域毎に地形の特徴を示す数地点の土層を提示し、その土層がある程度標準化できる範囲を示すこととする。

(1) A区の微地形と土層

A区の北側には小高い山があり、そこから南東方向に広く走る尾根は約23°の傾斜を有する急斜面である。調査区はこの傾斜が緩く変換する地点によって区分される。A区北側はやや南東方向に傾斜していて山林として利用され、他は南に傾く緩斜面であり畑地として利用されていた区域である。谷底平野との境界は、比高6mの急崖となっている。標高259～267mの範囲にある。

南向きの緩斜面からは縄文時代中期の住居跡が5棟、横並びで検出された。また南東に傾く緩斜面からは縄文時代前期の住居跡が検出された。

本区域の土層は必ずしも一様ではないが、縄文時代中期の遺構を検出したIV D 0 d 付近の土層を概ね標準モデルにすることができる。

IV C区・V C区・V D区・VI C区標準土層<IV D 0 d 付近> (第6図①)

I層	灰黄褐色土 ～黒褐色土	シルト	二分される。上位は表土。しまりを欠く。層厚約10cm。 下位（I b層）は耕作土。I a層との混土で締まりを欠く部分と、混土せずにややしまる部分とがある。層厚5～15cmで乱調。
II層	暗褐色土	シルト	やや固くしまる。やや粘性あり。縄文時代中期の遺物を含む。層厚約20cm。二分される。上位は黒色土、褐色土を混入する。下位は褐色土の混入が少ない。
III層	黒褐色土	シルト	固くしまっている。VI層の褐色土をブロック状に含む。本層上面が縄文中期の遺構の検出面である。層厚約20cm。
IV層	暗褐色土	シルト	IV層からVI層への漸移層。
V層	黄褐色土	粘土質シルト	ロームで遺物を全く含まない。下位に小礫を含む。本報告書では、遺構・遺物が検出されない本層より下位の層を便宜的に「基盤層」と呼ぶ。

A区の北側のVI C区では、I層には多くの植生根を含む他、一部ではII層を欠落する。V C区・VI C区の北側の調査区境界付近ではI層のうえに道路造成時の盛り土がある。東側にあたるV D区ではI層の下位に粘性ある黒色土が30cm程度堆積し、層厚を増して埋没谷へと続く。

(2) B区西尾根の微地形と土層

B区西尾根は、尾根の鞍部とその3方の斜面、および南に広がる麓部からなる。尾根頂部の標高は280 m、平坦部で275 m程度であり、周囲の山体群に比しやや低めであるが、2筋の埋没谷に挟まれていること、傾斜角が急なことにより、景観上は実際より高い印象がある。頂部からやや平坦な痩せ尾根が南に40mほど延び、そこから西側と南側には約20～23°の急角度でほぼ一様に傾斜する。西斜面は表土から縄文前期の土器がやや纏まった範囲で集中的に出土しており、土器捨て場として利用していたものと考えられる。東斜面は尾根平坦部から東10mまではおよそ15°の斜面であるが、いったん勾配を緩めて10mほど続いた後は、ふたたび勾配を増し急崖となって東麓部埋没谷へとつながる。頂部から東斜面にかけて、縄文前期を中心に住居跡、土坑が高密度で重複し連続する。

本区域の土層は地点によって様相が大きく異なり、再堆積と考えられる層の存在が特徴的である。ここではそれが顕著なVII C 5 h 付近の土層を示した。

ⅦC区・ⅦD区・ⅧD区土層<ⅦC 5 h 付近> (第6図②)

I層	暗褐色土	シルト	表土。腐植土を含む。
II層	褐色土～暗褐色土	シルト	小角礫を含む。上位はややしまりを欠くが下位はよくしまっている。縄文時代前期末葉から中期初頭を主とする遺物包含層であるばかりでなく、遺構検出面も本層中にあり、異なる文化層が存在するはずであるが、肉眼による観察では分別不可能であった。粉炭が混入する部分もあり、一次堆積層とは考えられない。ソリフラクション等の自然の営力によるほかに、本区域では遺構の重複が著しいものがあり、排土等の人為的再堆積も想定する必要がある。本地点においては、断面では3層に細分できるが一般化はできない。 本報告書では本層を便宜上「再堆積層」と呼ぶ。
III層	暗褐色土	シルト	不均一に固くしまる部分がある。雨裂とも考えられ旧表土と想定される。上面から縄文時代早期の貝殻文土器の破片が出土した。
IV層	褐色土	シルト	しまりあり。本層より下位には遺物、遺構は無い。
V層	黄褐色土	粘土質シルト	しまりなし。基盤層。
VI層	黄褐色土	粘土質シルト	下位ほど礫を含む。

尾根鞍部の南端は岩盤とその赤色風化層が露出している。鞍部から東斜面および南斜面（ⅦC区・ⅦD区・ⅧC区にあたる）では、III層・IV層を欠落し、表土・再堆積層の下は直接基盤層であるV層（一部ではVI層）となる。

南側山麓部は、斜面との漸移部に2つの傾斜変換点を有して順次勾配を減じ、A区のような急崖をつくらずに緩い傾斜で谷底平野に接続する。遺構は、斜面との漸移部に著しい重複関係を有して、縄文時代前期の住居跡が集中する。麓裾部には縄文前期前葉および縄文晩期の遺構が検出された。標高は漸移部で264 m、麓裾部260 mである。

南麓部のⅦD 9 j 付近の土層を次に示した。ⅦD区・ⅧD区の標準土層として把握できる。

ⅦD区・ⅧD区標準土層<ⅦD 9 j 付近> (第6図③)

I層	黒褐色土	シルト	しまりややあり。植生根多い。表土、耕作土。
II層	黒色土	シルト	しまりややあり。やや砂を含む。近世墓壇の検出面。本層とIII層は縄文時代の遺物の包含層である。
III層	黒褐色土	シルト	II層よりも粘性あり。

IV層 黒褐色土	シルト	やや粘性あり。縄文時代の遺構は本層を壁とするものがあり、遺構検出面となるべき層。
V層 暗褐色土	シルト	IV層とVI層の漸移層。
VI 褐色土～黄褐色土	粘土質シルト	基盤層。

II、III層は黒ボク土で谷底平野に近づくほど層厚を増す。IV層は本来遺構検出面となるべき層であるが、平面的な検出は困難で、V層で確認されることが多かった。

山腹斜面、および山麓部との傾斜変換点では、II～V層にかわって黒褐色土を主体とする小角礫含みの固くしまった層が存在する。これらも再堆積層として一括把握した。

(3) B区東尾根の微地形と土層

B区東尾根は、標高295mの頂部からはほぼ南に台形状に延びる。標高276m前後までは急斜面であるが、そこからは勾配を減じて緩斜面となり、40mほど続いた後、標高265mの地点が傾斜変換点となって沢の侵食作用による段差が形成される。西側は麓部が約40mほど緩やかに延びて谷底平野へと漸移する。調査区は概ね標高276mの傾斜変換点から谷底平野に至る緩斜面である。ここでは、疎密はあるものの縄文時代前期の住居跡が斜面全域に分布する。

東尾根中腹部の調査区境界にあたるIXD6d付近と、南斜面下位のIXD7j付近、東側の沢に近いXD6h付近の土層を示した。土色・土質が若干異なる部分もあるが、概ねIXD7j付近が、IXD区・XD区の標準土層となろう。

IXD区・XD区標準土層<IXD7j付近> (第6図⑤)

I層 暗褐色土	シルト	表土。腐植土を含む。
II層 褐色土	シルト	しまりなし。縄文時代の遺物を含む。
III層 黒褐色土	シルト	しまりあり。時期不明の焼土遺構が検出される。
IV層 褐色土	シルト	黒褐色土、黄色褐色土を含む、漸移層。縄文時代前期の遺構の検出面である。
V層 黄褐色土	粘土質シルト	基盤層。下位には礫層(VI層)が続く。

<IXD6d付近> (第6図④)

1層 暗褐色土	シルト	表土。腐植土を含む。
2層 褐色土	シルト	しまりなし。縄文時代の遺物を含む。
3層 黄褐色土	シルト	ややしまりあり。小角礫を含む。縄文時代前期の遺構の検出面である。
4層 明褐色土	シルト	岩盤の風化層で下位の岩盤に漸移する。基盤層。

<XD6h付近> (第6図⑥)

1層 褐色土	砂質ローム	小角礫に富む。粘性なし。層厚は一定しない。
--------	-------	-----------------------

2層	暗褐色土	砂質ローム	小角礫に富む。粘性なし。
3層	黒色土	粘土質ローム	粘性ややあり。埋没腐植層。縄文時代前期の遺物の包含層。
4層	褐色土	粘土質ローム	粘性ややあり。縄文時代前期の検出面。基盤層。

④の1・2層は⑤のⅠ・Ⅱ層に、3・4層はⅤ・Ⅵ層に対応すると考えられる。⑤における黒色土(Ⅲ層)は、傾斜変換して勾配を減じる部分に至ると出現する。また、⑥の1・2・3層は⑤のⅠ・Ⅱ・Ⅲ層に、4層はⅤ層に対応する。すなわち東側ではⅣ層を欠落する。東尾根の東側にある谷頭凹型斜面は、標高283mから277mの範囲で、傾斜角10°の緩斜面である。ここからは、平安時代の住居跡が2棟検出された。本区域は層厚は異なるもの、おおむね同一の層序を示す。平安時代の住居跡が隣接するXIC6a付近の土層を掲げる。

XIC区標準土層<XIC6a付近>(第6図⑦)

Ⅰ層	暗褐色土	シルト	粘性、しまりなし。植生根多い。
Ⅱ層	黒褐色土	シルト	粘性ややあり。Ⅲ層への漸移層。
Ⅲ層	黒色土	シルト	粘性ややあり。平安時代の遺構の検出面である。
Ⅳ層	黒褐色土	シルト	粘性あり。しまりあり。縄文時代の遺構の検出面である。
Ⅴ層	暗褐色土	粘土質シルト	粘性あり。しまりあり。褐色土をブロック状に含む。
Ⅵ層	褐色土	粘土質シルト	固くしまっている。基盤層。

平安時代の住居跡より斜面の上位ではⅡ層～Ⅳ層を欠落するほか、Ⅰ層の上に近年の道路造成時の盛り土と考えられる褐色土をのせる。

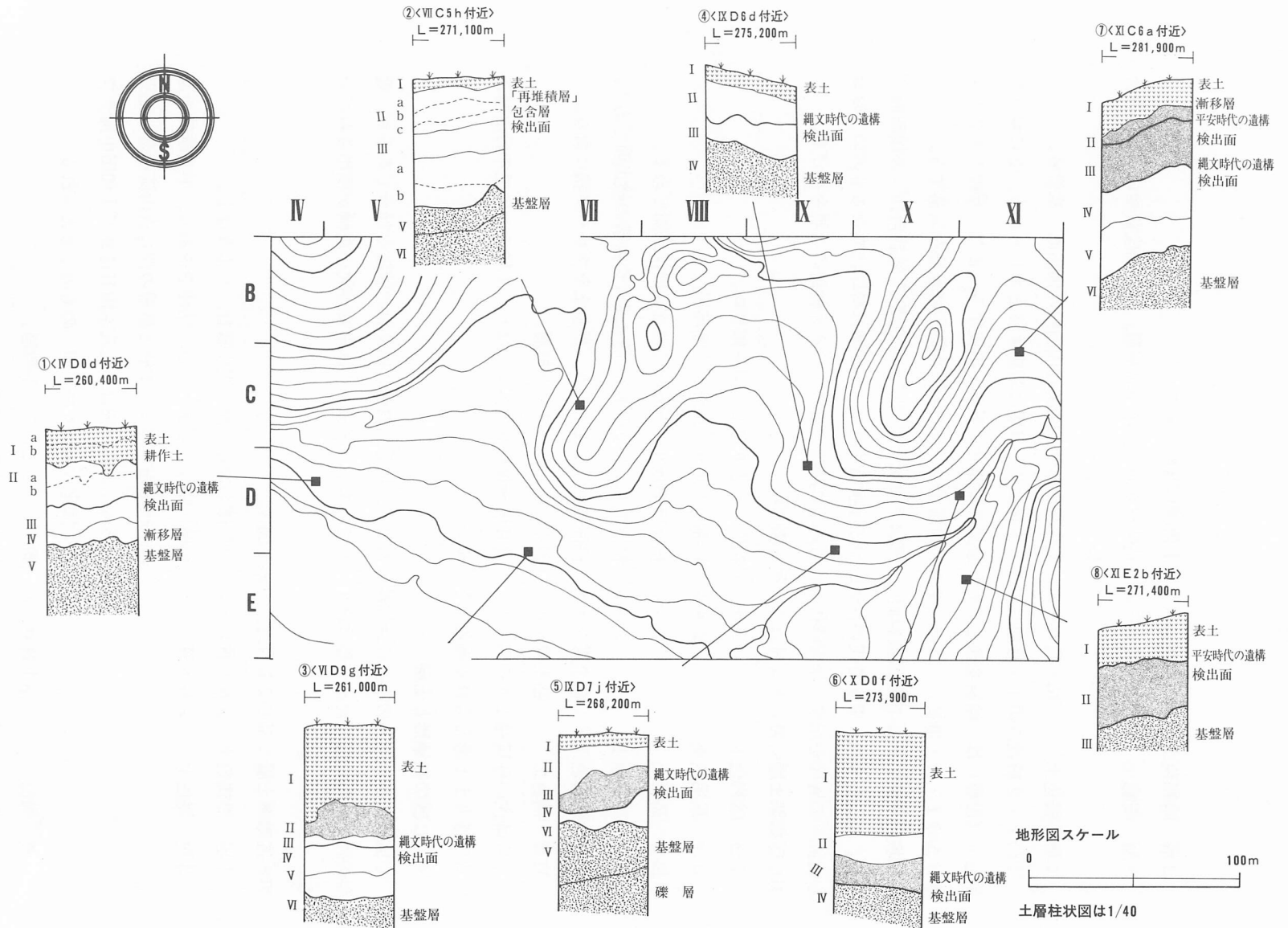
(4) C区の微地形と土層

C区は標高304mの小山の西裾部にあたり、沢と急斜面に挟まれた狭隘な部分であるが、近年の作業小屋建造のため一部は削平されている。本区域からは平安時代の遺構が検出されている。

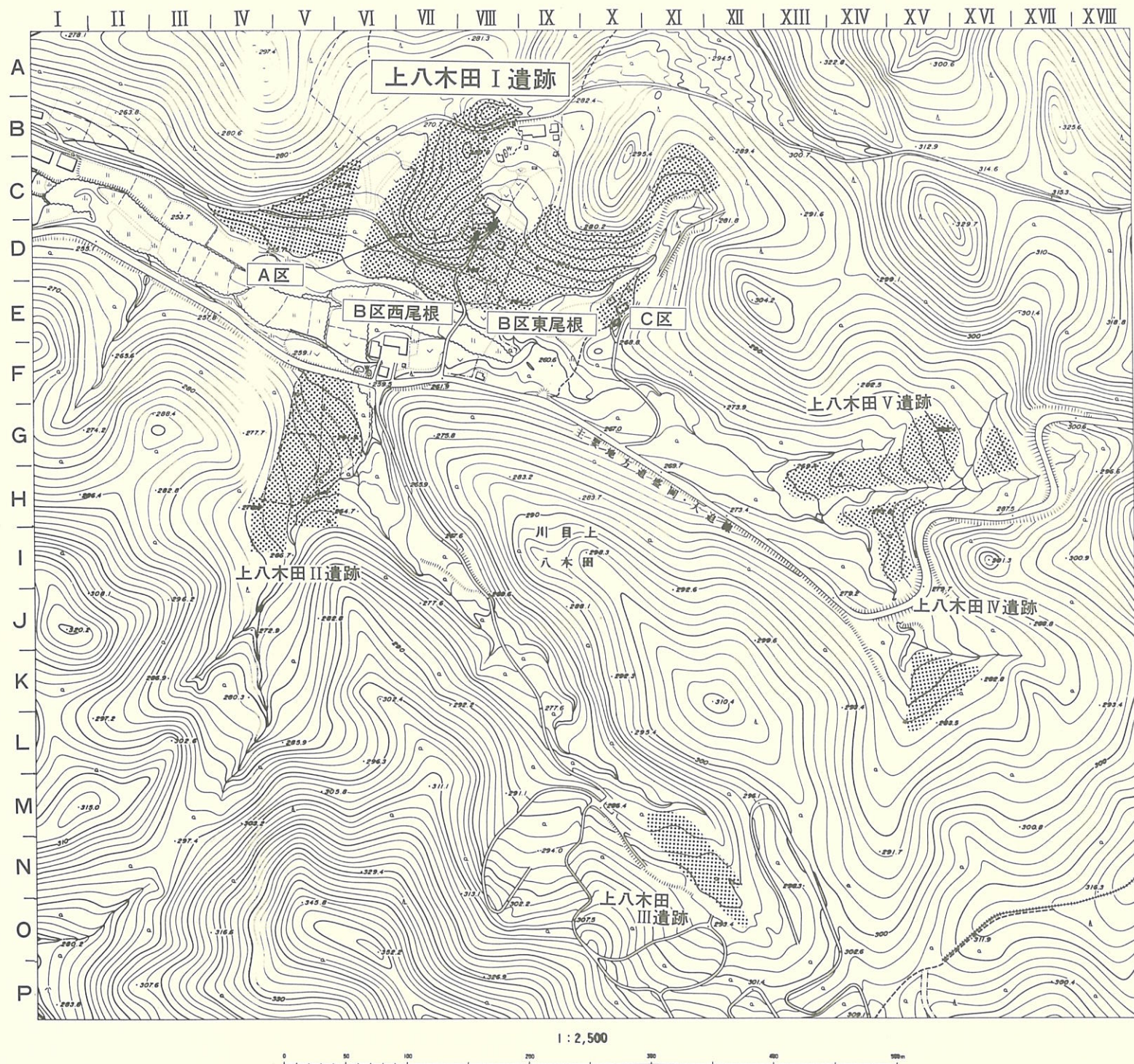
XIE区標準土層<XIE2b付近>(第6図⑧)

Ⅰ層	黒褐色土	シルト質ローム	小角礫を含む。植生根に富む。しまりなし。
Ⅱ層	黒色土	シルト質ローム	腐植に富む。しまりなし。粘性ややあり。平安時代の遺構の検出面である。本層とⅢ層の間に火山灰を含む地点がある。同火山灰は、上八木田Ⅱ遺跡で十和田中掬テフラと同定されたもの同一のものと考えられる。
Ⅲ層	褐色土	粘土質ローム	固くしまっている。基盤層。

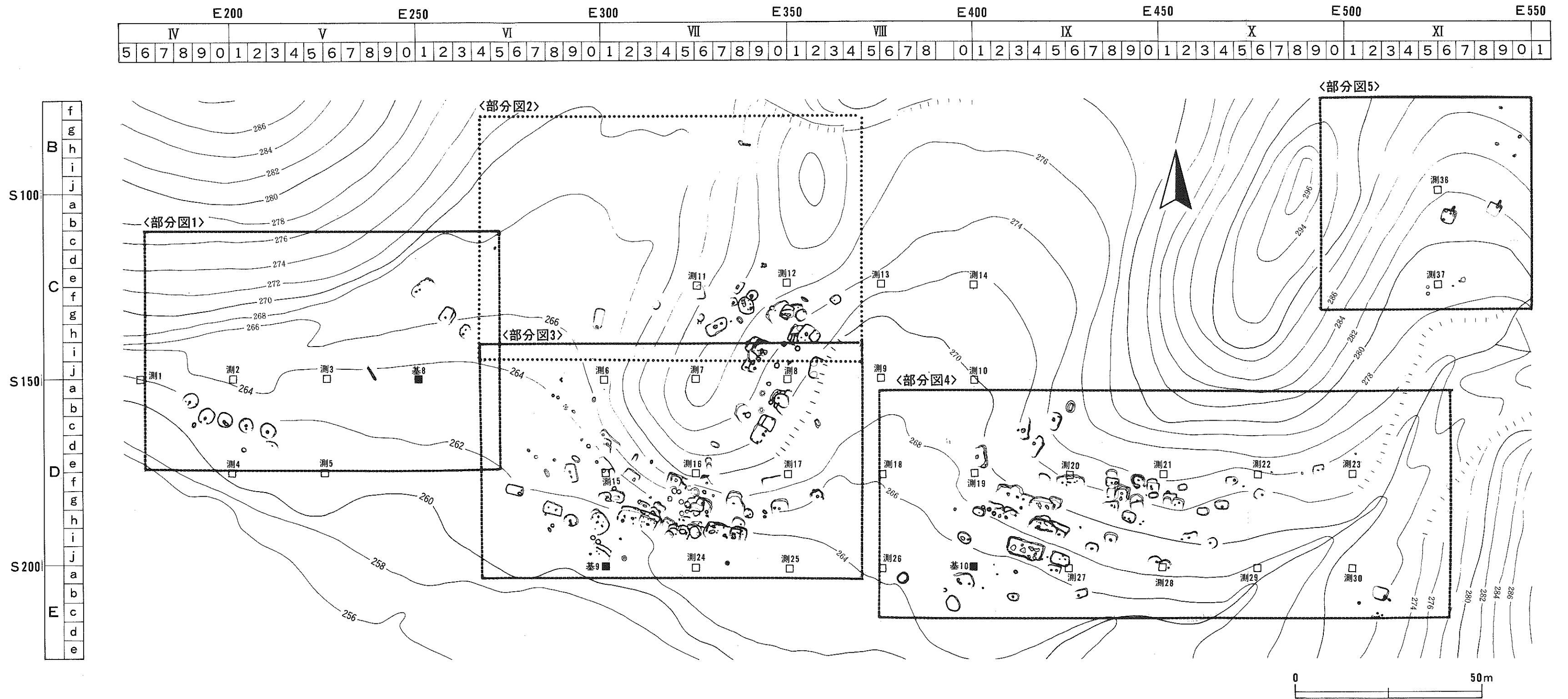
C区東側の沢に近づく部分では、Ⅰ層・Ⅱ層の層厚が増す。



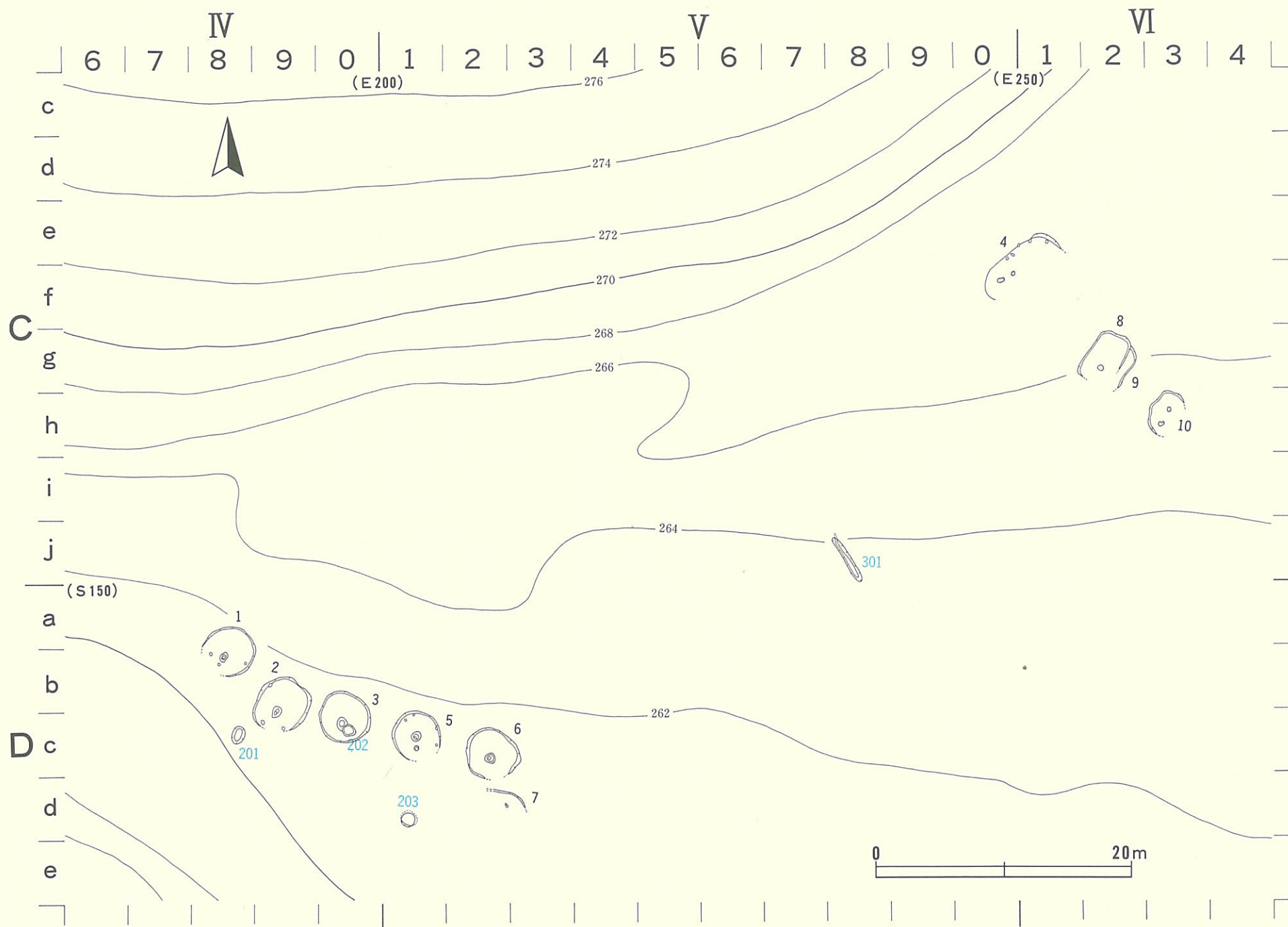
第6図 調査区各地点の層序



第7図 周辺の地形と大グリッド配置図

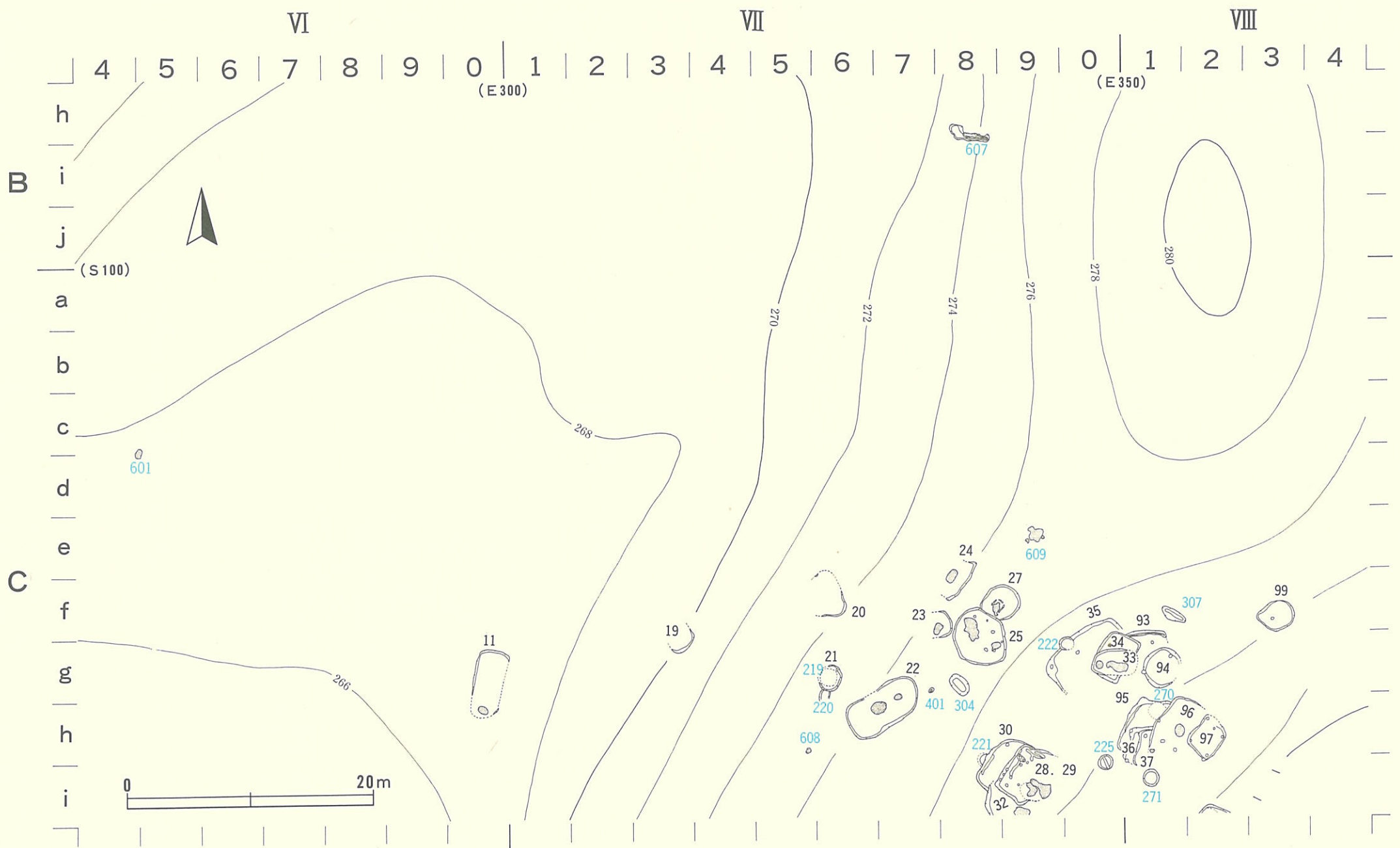


第 8 図 グリッド配置図と遺構配置部分図の位置

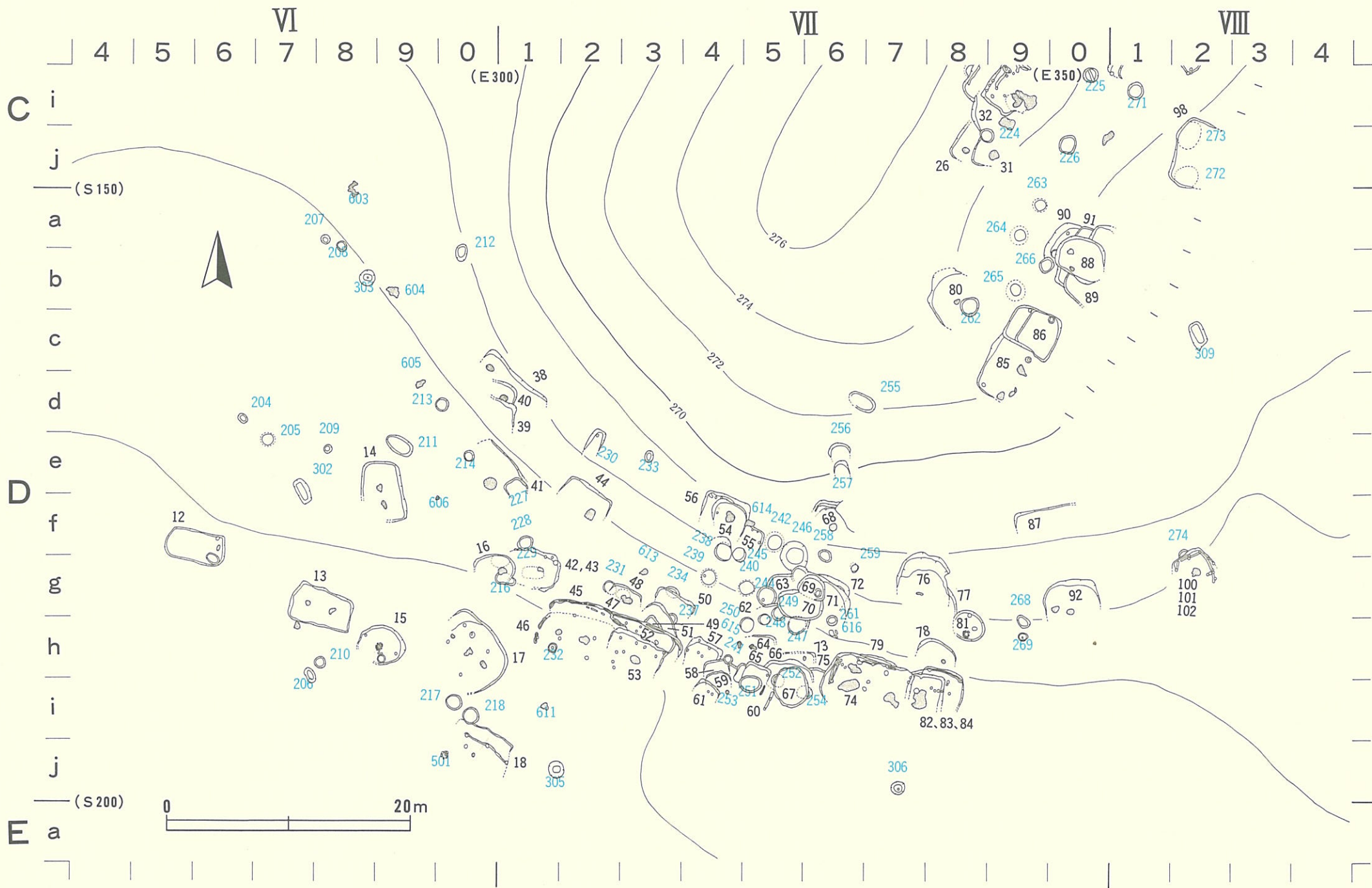


※等高線は調査前の地形を表す
 ※番号は遺構一覧表(第5・6表)と照応する

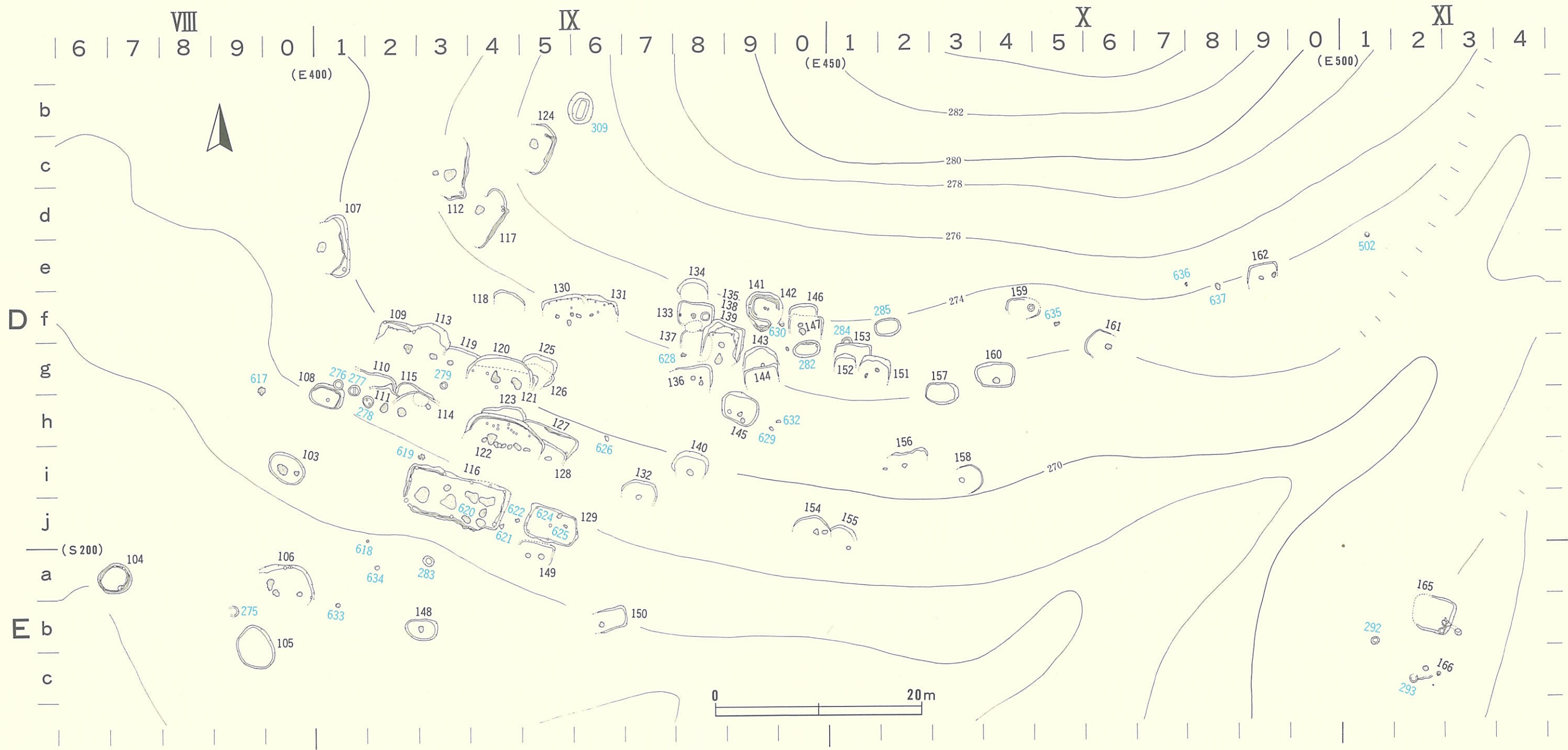
第9図 遺構配置部分図1



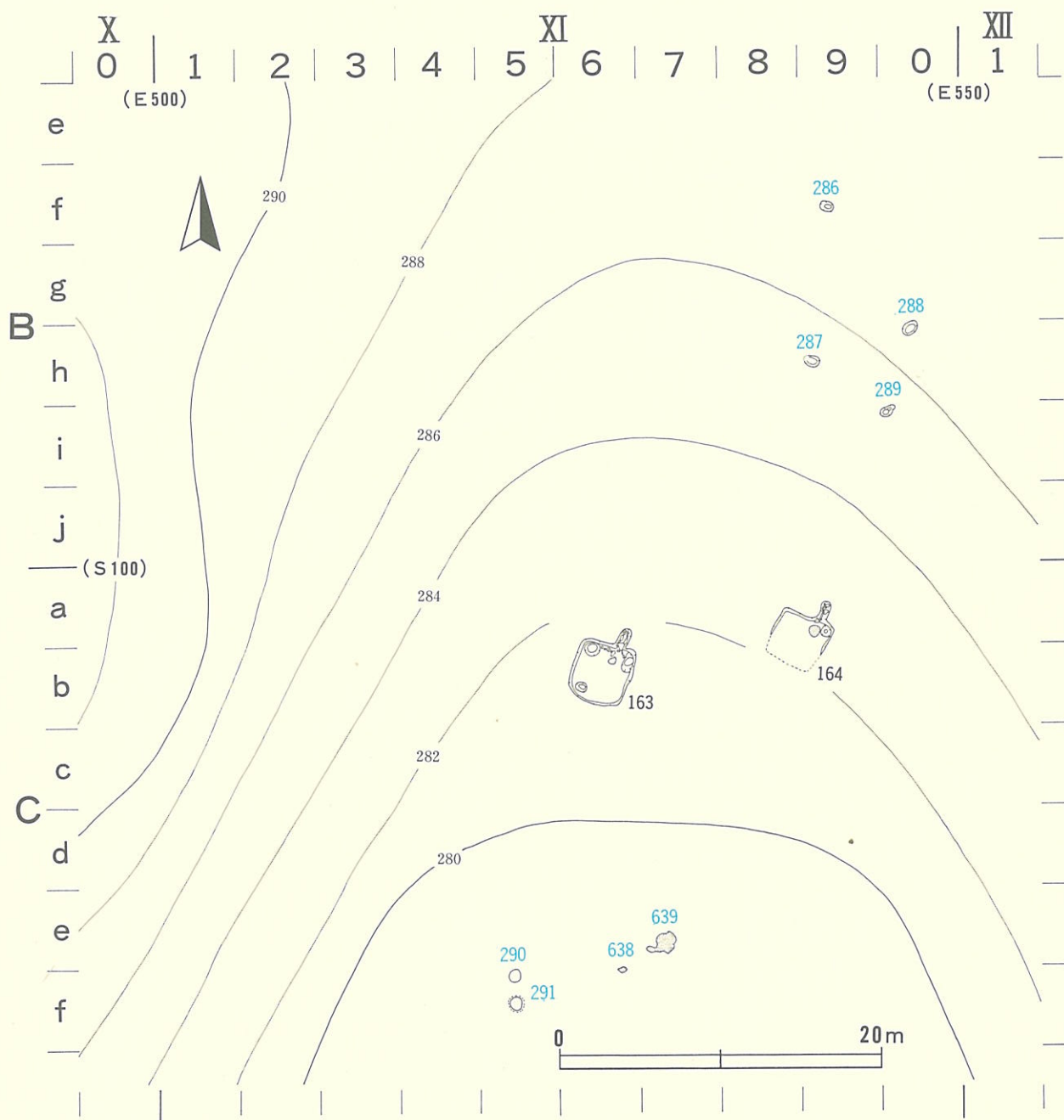
第10図 遺構配置部分図2



第11図 遺構配置部分図3



第12図 遺構配置部分図4



第13図 遺構配置部分図5

〈堅穴住居跡〉

番号	遺構名
1	ⅣD 8 b 住居跡
2	ⅣD 9 c 住居跡
3	ⅣD 0 c 住居跡
4	ⅤC 0 f 住居跡
5	ⅤD 1 c 住居跡
6	ⅤD 2 c 住居跡
7	ⅤD 2 d 住居跡
8	ⅤC 2 g 住居跡
9	ⅤC 2 g-2 住居跡
10	ⅤC 3 h 住居跡
11	ⅣC 0 g 住居跡
12	ⅥD 5 f 住居跡
13	ⅥD 7 g 住居跡
14	ⅥD 8 e 住居跡
15	ⅥD 8 h 住居跡
16	ⅥD 0 g 住居跡
17	ⅥD 0 h 住居跡
18	ⅥD 0 i 住居跡
19	ⅦC 3 g 住居跡
20	ⅦC 6 f 住居跡
21	ⅦC 6 g 住居跡
22	ⅦC 6 h 住居跡
23	ⅦC 7 f 住居跡
24	ⅦC 8 f 住居跡
25	ⅦC 8 g 住居跡
26	ⅦC 8 j 住居跡
27	ⅦC 9 f 住居跡
28	ⅦC 9 i-3a 住居跡
29	ⅦC 9 i-3 b 住居跡
30	ⅦC 9 i-4 住居跡
31	ⅦC 9 j 住居跡
32	ⅦC 9 j-2 住居跡
33	ⅦC 0 g 住居跡
34	ⅦC 0 g-2 住居跡
35	ⅦC 0 g-3 住居跡
36	ⅦC 0 h 住居跡
37	ⅦC 0 h-2 住居跡
38	ⅦD 1 d 住居跡
39	ⅦD 1 d-2 住居跡
40	ⅦD 1 b-3 住居跡
41	ⅦD 1 e 住居跡
42	ⅦD 1 g 住居跡
43	ⅦD 1 g-2 住居跡
44	ⅦD 2 f 住居跡
45	ⅦD 2 h 住居跡
46	ⅦD 2 h-2 住居跡
47	ⅦD 2 h-3 住居跡
48	ⅦD 3 g 住居跡
49	ⅦD 3 g-2 住居跡

番号	遺構名
50	ⅦD 3 g-3 住居跡
51	ⅦD 3 g-4 住居跡
52	ⅦD 3 h 住居跡
53	ⅦD 3 h-2 住居跡
54	ⅦD 4 f 住居跡
55	ⅦD 4 f-2 住居跡
56	ⅦD 4 f-3 住居跡
57	ⅦD 4 h 住居跡
58	ⅦD 4 h-2 住居跡
59	ⅦD 4 h-3 住居跡
60	ⅦD 4 h-4 住居跡
61	ⅦD 4 i 住居跡
62	ⅦD 5 g-2 住居跡
63	ⅦD 5 g-3 住居跡
64	ⅦD 5 h 住居跡
65	ⅦD 5 f 住居跡
66	ⅦD 5 i-2 住居跡
67	ⅦD 5 i-3 住居跡
68	ⅦD 6 f 住居跡
69	ⅦD 6 g 住居跡
70	ⅦD 6 g-2 住居跡
71	ⅦD 6 g-3 住居跡
72	ⅦD 6 g-4 住居跡
73	ⅦD 6 h 住居跡
74	ⅦD 6 h-2 住居跡
75	ⅦD 6 i 住居跡
76	ⅦD 7 g 住居跡
77	ⅦD 7 g-2 住居跡
78	ⅦD 7 h 住居跡
79	ⅦD 7 i 住居跡
80	ⅦD 8 c 住居跡
81	ⅦD 8 h 住居跡
82	ⅦD 8 i 住居跡
83	ⅦD 8 i-2 住居跡
84	ⅦD 8 i-3 住居跡
85	ⅦD 9 c 住居跡
86	ⅦD 9 c-2 住居跡
87	ⅦD 9 f 住居跡
88	ⅦD 0 b 住居跡
89	ⅦD 0 b-2 住居跡
90	ⅦD 0 b-3 住居跡
91	ⅦD 0 b-4 住居跡
92	ⅦD 0 h 住居跡
93	ⅦC 1 g 住居跡
94	ⅦC 1 g-2 住居跡
95	ⅦC 1 h 住居跡
96	ⅦC 1 h-2 住居跡
97	ⅦC 2 h 住居跡
98	ⅦC 2 j 住居跡
99	ⅦC 3 f 住居跡

番号	遺構名
100	ⅧD 2 g 住居跡
101	ⅧD 2 g-2 住居跡
102	ⅧD 2 g-3 住居跡
103	ⅧD 0 i 住居跡
104	ⅧE 7 a 住居跡
105	ⅧE 9 b 住居跡
106	ⅧE 0 a 住居跡
107	ⅨD 1 e 住居跡
108	ⅨD 1 h 住居跡
109	ⅨD 2 g 住居跡
110	ⅨD 2 g-2 住居跡
111	ⅨD 2 h 住居跡
112	ⅨD 3 c 住居跡
113	ⅨD 3 g 住居跡
114	ⅨD 3 h 住居跡
115	ⅨD 3 h-2 住居跡
116	ⅨD 3 j 住居跡
117	ⅨD 4 d 住居跡
118	ⅨD 4 f 住居跡
119	ⅨD 4 g 住居跡
120	ⅨD 4 g-2 住居跡
121	ⅨD 4 g-3 住居跡
122	ⅨD 4 h 住居跡
123	ⅨD 4 h-2 住居跡
124	ⅨD 5 c 住居跡
125	ⅨD 5 g 住居跡
126	ⅨD 5 g-2 住居跡
127	ⅨD 5 h 住居跡
128	ⅨD 5 i 住居跡
129	ⅨD 5 j 住居跡
130	ⅨD 6 f 住居跡
131	ⅨD 6 f-2 住居跡
132	ⅨD 7 j 住居跡
133	ⅨD 8 f 住居跡
134	ⅨD 8 f-2 住居跡
135	ⅨD 8 g 住居跡
136	ⅨD 8 g-2 住居跡
137	ⅨD 8 g-3 住居跡
138	ⅨD 8 g-4 住居跡
139	ⅨD 8 g-5 住居跡
140	ⅨD 8 i 住居跡
141	ⅨD 9 f 住居跡
142	ⅨD 9 f-2 住居跡
143	ⅨD 9 g 住居跡
144	ⅨD 9 g-2 住居跡
145	ⅨD 9 h 住居跡
146	ⅨD 0 f 住居跡
147	ⅨD 0 f-2 住居跡
148	ⅨE 2 b 住居跡
149	ⅨE 5 a 住居跡

番号	遺構名
150	ⅩE 6 b 住居跡
151	ⅩD 1 g 住居跡
152	ⅩD 1 g-2 住居跡
153	ⅩD 1 g-3 住居跡
154	ⅩD 1 j 住居跡
155	ⅩD 1 j-2 住居跡
156	ⅩD 2 i 住居跡
157	ⅩD 3 h 住居跡
158	ⅩD 3 i 住居跡
159	ⅩD 4 f 住居跡
160	ⅩD 4 g 住居跡
161	ⅩD 6 g 住居跡
162	ⅩD 9 c 住居跡
163	ⅩC 6 b 住居跡
164	ⅩC 9 a 住居跡
165	ⅩE 2 b 住居跡
166	ⅩE 2 c 住居跡

〈土坑〉

番号	遺構名
201	ⅣD 8 c 土坑
202	ⅣD 0 c 土坑
203	ⅤD 1 d 土坑
204	ⅥD 6 d 土坑
205	ⅥD 7 e 土坑
206	ⅥD 7 i 土坑
207	ⅥD 8 a 土坑
208	ⅥD 8 a-2 土坑
209	ⅥD 8 e 土坑
210	ⅥD 8 h 土坑
211	ⅥD 9 e 土坑
212	ⅥD 0 b 土坑
213	ⅥD 0 d 土坑
214	ⅥD 0 e 土坑
215	ⅥD 0 g 土坑
216	ⅥD 0 g-2 土坑
217	ⅥD 0 i 土坑
218	ⅥD 0 i-2 土坑
219	ⅦC 6 g 土坑
220	ⅦC 6 g-2 土坑
221	ⅦC 8 i 土坑
222	ⅦC 9 g 土坑
223	ⅦC 9 i 土坑
224	ⅦC 9 j 土坑
225	ⅦC 0 i 土坑
226	ⅦC 0 j 土坑
227	ⅦC 0 e 土坑
228	ⅦD 1 f 土坑
229	ⅦD 1 g-2 土坑
230	ⅦD 2 e 土坑

第4表 遺構名一覽(1)

番号	遺構名
231	ⅦD 2 g 土坑
232	ⅦD 2 h 土坑
233	ⅦD 3 e 土坑
234	ⅦD 3 g 土坑
235	ⅦD 3 g-2 土坑
236	ⅦD 3 g-3 土坑
237	ⅦD 3 h 土坑
238	ⅦD 4 g 土坑
239	ⅦD 4 g-2 土坑
240	ⅦD 4 g-3 土坑
241	ⅦD 4 h-2 土坑
242	ⅦD 5 f 土坑
243	ⅦD 5 g 土坑
244	ⅦD 5 g-2 土坑
245	ⅦD 5 g-3 土坑
246	ⅦD 5 g-4 土坑
247	ⅦD 5 g-5 土坑
248	ⅦD 5 g-6 土坑
249	ⅦD 5 h 土坑
250	ⅦD 5 h-2 土坑
251	ⅦD 5 i 土坑
252	ⅦD 5 i-2 土坑
253	ⅦD 5 i-3 土坑
254	ⅦD 5 i-4 土坑
255	ⅦD 6 d 土坑
256	ⅦD 6 c 土坑
257	ⅦD 6 c-2 土坑
258	ⅦD 6 f 土坑
259	ⅦD 6 f-2 土坑
260	ⅦD 6 g 土坑
261	ⅦD 6 h 土坑
262	ⅦD 8 c 土坑
263	ⅦD 9 a 土坑
264	ⅦD 9 b 土坑
265	ⅦD 9 b-2 土坑
266	ⅦD 9 b-3 土坑
267	ⅦD 9 b-4 土坑
268	ⅦD 9 h 土坑
269	ⅦD 9 h-2 土坑
270	ⅧC 1 h 土坑
271	ⅧC 1 i 土坑
272	ⅧC 2 j 土坑
273	ⅧC 2 j-2 土坑
274	ⅧD 2 g 土坑
275	ⅧE 9 b 土坑
276	ⅨD 1 g 土坑
277	ⅨD 1 g-2 土坑
278	ⅨD 2 h 土坑
279	ⅨD 3 g 土坑
280	ⅨD 3 h 土坑

番号	遺構名
281	ⅨD 8 f 土坑
282	ⅨD 0 g 土坑
283	ⅨE 3 a 土坑
284	ⅩD 1 g 土坑
285	ⅩD 2 f 土坑
286	ⅪB 9 f 土坑
287	ⅪB 9 h 土坑
288	ⅪB 0 h 土坑
289	ⅪB 0 i 土坑
290	ⅪC 5 f 土坑
291	ⅪC 5 f-2 土坑
292	ⅪE 1 c 土坑
293	ⅪE 2 c 土坑

< 陥し穴 >

番号	遺構名
301	V C 8 j 陥し穴
302	ⅦD 7 e 陥し穴
303	ⅦD 8 b 陥し穴
304	ⅦC 8 g 陥し穴
305	ⅦD 1 j 陥し穴
306	ⅦD 7 j 陥し穴
307	ⅧC 1 f 陥し穴
308	ⅧD 2 c 陥し穴
309	ⅨD 6 b 陥し穴

< 土器埋設遺構 >

番号	遺構名
401	ⅦC 6 h 埋設土器

< 炉 跡 >

番号	遺構名
501	ⅦD 0 j 炉
502	ⅪD 1 e 炉

< 焼土遺構 >

番号	遺構名
601	ⅦC 5 d 焼土
602	ⅦD 7 h 焼土
603	ⅦD 8 a 焼土
604	ⅦD 9 b 焼土
605	ⅦD 9 e 焼土
606	ⅦD 0 f 焼土
607	ⅦB 8 h 焼土
608	ⅦC 5 h 焼土
609	ⅦC 9 e 焼土
610	ⅦC 0 b 焼土
611	ⅦD 1 j 焼土
612	ⅦD 3 g 焼土
613	ⅦD 5 f 焼土

番号	遺構名
614	ⅦD 5 h 焼土
615	ⅦD 5 h-2 焼土
616	ⅦD 6 h 焼土
617	ⅦD 0 j 焼土
618	ⅨD 1 j 焼土
619	ⅨD 3 i 焼土
620	ⅨD 3 j 焼土
621	ⅨD 3 j-2 焼土
622	ⅨD 4 j 焼土
623	ⅨD 5 j 焼土
624	ⅨD 5 j-2 焼土
625	ⅨD 5 j-3 焼土
626	ⅨD 6 h 焼土
627	ⅨD 8 g 焼土
628	ⅨD 8 g-2 焼土
629	ⅨD 9 h 焼土
630	ⅨD 0 f 焼土
631	ⅨD 0 g 焼土
632	ⅨD 0 h 焼土
633	ⅨE 1 b 焼土
634	ⅨE 2 a 焼土
635	ⅩD 5 f 焼土
636	ⅩD 6 f 焼土
637	ⅩD 8 e 焼土
638	ⅪC 6 f 焼土
639	ⅪC 7 e 焼土

第5表 遺構名一覽(2)

IV 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代に属するものとしては、竪穴住居跡・土坑・陥し穴・土器埋設遺構・焼土遺構、平安時代に属するものとしては、竪穴住居跡・土坑・焼土遺構である。それらの遺構数については表で提示した。住居跡として登録したものでも、残存状況が悪く、方形の土坑の可能性もあるものが2棟ある。また、伴出遺物がなくて所属時期が決定できず、検出面と埋土等からの推定によるものがある。

	住居跡	土坑	陥し穴	土器埋設遺構	炉跡	焼土遺構	計
縄文時代	162	88	5	1	2	29	291
平安時代	4	1				1	6
不明		4	4			9	17
計	166	93	9	1	2	39	314

第6表 検出遺構数一覧

遺物は遺構内外を合わせて、土器・土製品は中コンテナで170箱、石器・石製品は小コンテナで107箱出土した。

1. 竪穴住居跡

(1) 縄文時代の竪穴住居跡

IV D 8 b 住居跡 (遺構番号1)

遺構 (第14図、写真図版7)

<検出状況> III層上面で、炭化物を含む黒褐色土が分布する状態で検出した。本住居と同時期で同規模のものが近接して5棟検出されているが、その最西端に位置する。東1.5mにはIV D 9 C 住居跡が検出されている。

<形状・規模> 径4m程度の円形である。

<壁・壁高> 基盤層である黄褐色土を壁とし、ほぼ直立している。壁高は北が最も高く45m、東23m、西10m、南で床と同じ高さとなる。

<埋土> 8層に分けられるが、締まりにむらがあり、褐色土・暗褐色土が混在することから、人為的な堆積と考えられる。全体に焼土粒および粉炭(数cm以下の細かい炭化物、以下同じ)を含む。炭化材が北東四半部に高密度で分布する。樹種はケヤキとクリである。

<床・柱穴・施設> 全体に固く締まっている。南側が特に固く、出入り口の可能性がある。自

然地形に沿って、北側から南側に緩く傾斜する。凹凸はほとんど無い。柱穴状の掘り込みが3個検出された。径はほぼ同規模である。埋土は褐色土でよく締まっている。北側では検出されない。

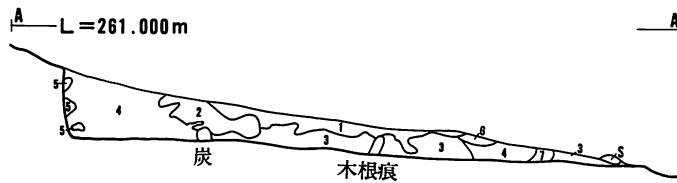
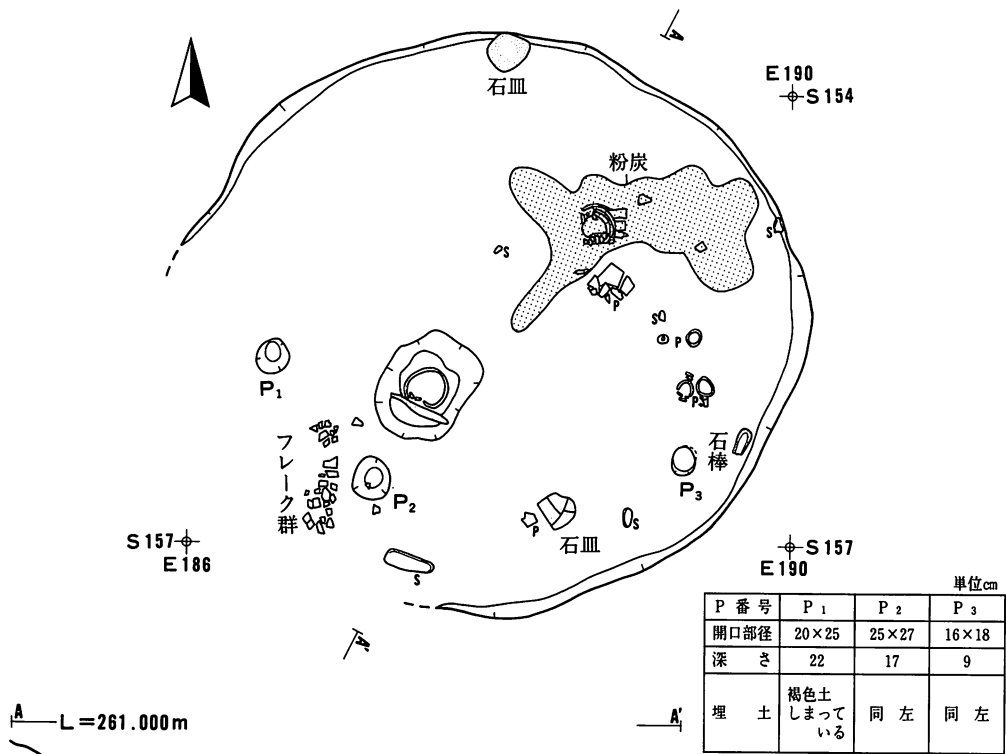
〈炉〉ほぼ中央に位置する。床面を20cmほど掘り込み、1個の偏平な礫(16)と土器(2)とを、両者とも正立に埋設し、そのまわりを粘土で固めている。礫の厚さはほぼ一様であり、石皿の転用品の可能性もある。礫は床面より10cm程突き出ており、その下約30cmが土中にある。最下部の掘り方は確認できなかった。土器に接する面が被熱して赤変し脆弱化している。埋設された土器は円筒状を呈し、底部を欠く。土器の内部には締まりのない暗褐色土が充填し、周囲には焼土が厚く発達している。

遺物(第15～17図、写真図版132・133)

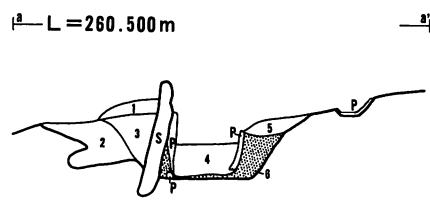
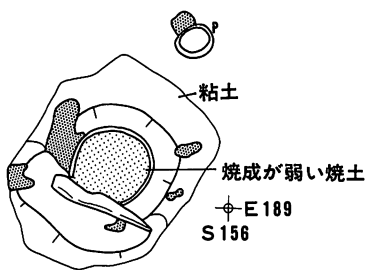
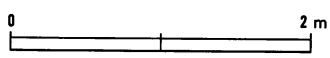
〈土器〉床面またはその直上から3735g、埋土から1260gと多量出土しているが、復元できたものは底部を含めて9個体である。2は炉の中央部に、正立に埋設されていたものである。口縁部と胴下半部は水平に欠損しており、輪積み部分から破損した土器を再利用したものか。下から9～10cmの部分は被熱して変色し脆弱化している。1は中期の住居の中では唯一の小型壺である。単節の地文のみであるが、伴出土器と比較して縄文が極めて細かい。胴上半部に一部異なる方向の縄文が見られる。9は折り返し口縁をもつ土器で、内面は棒状または筥状の工具によりミガキがかけられている。他に底部のみの土器が5個体分(3～7)出土した。住居の東側および炉の北側に据え置いたかのような状況で出土している。撚糸文は8の1個体のみである。

〈石器・石製品〉10は自然面を片面にのこし、一次剝離面のみを打点方向から粗く二次加工している。11は礫の長軸・短軸両方に打ち欠きが認められるが、長軸側は抉りには至らない。12は岩手火山起源の溶岩で、両面の中央部に溝状の磨面が残る。13は整形加工した石棒である。中央の折損部から下半が、東壁際にの床面に横倒しの状態で検出された。断面形の一面はやや平坦で中央部に線状にやや窪んだ部分がある。上半部はIV D 0 c住居跡の床面から出土したものである。14は本遺跡では唯一の整形加工した石皿である。15は北壁際床面から出土したもので、自然石の中央部に溝状の磨痕が観察される。他に、使用痕不明の岩手火山起源の溶岩、Uフレ1点が床面から出土している。

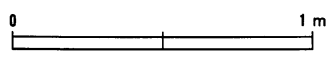
時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。



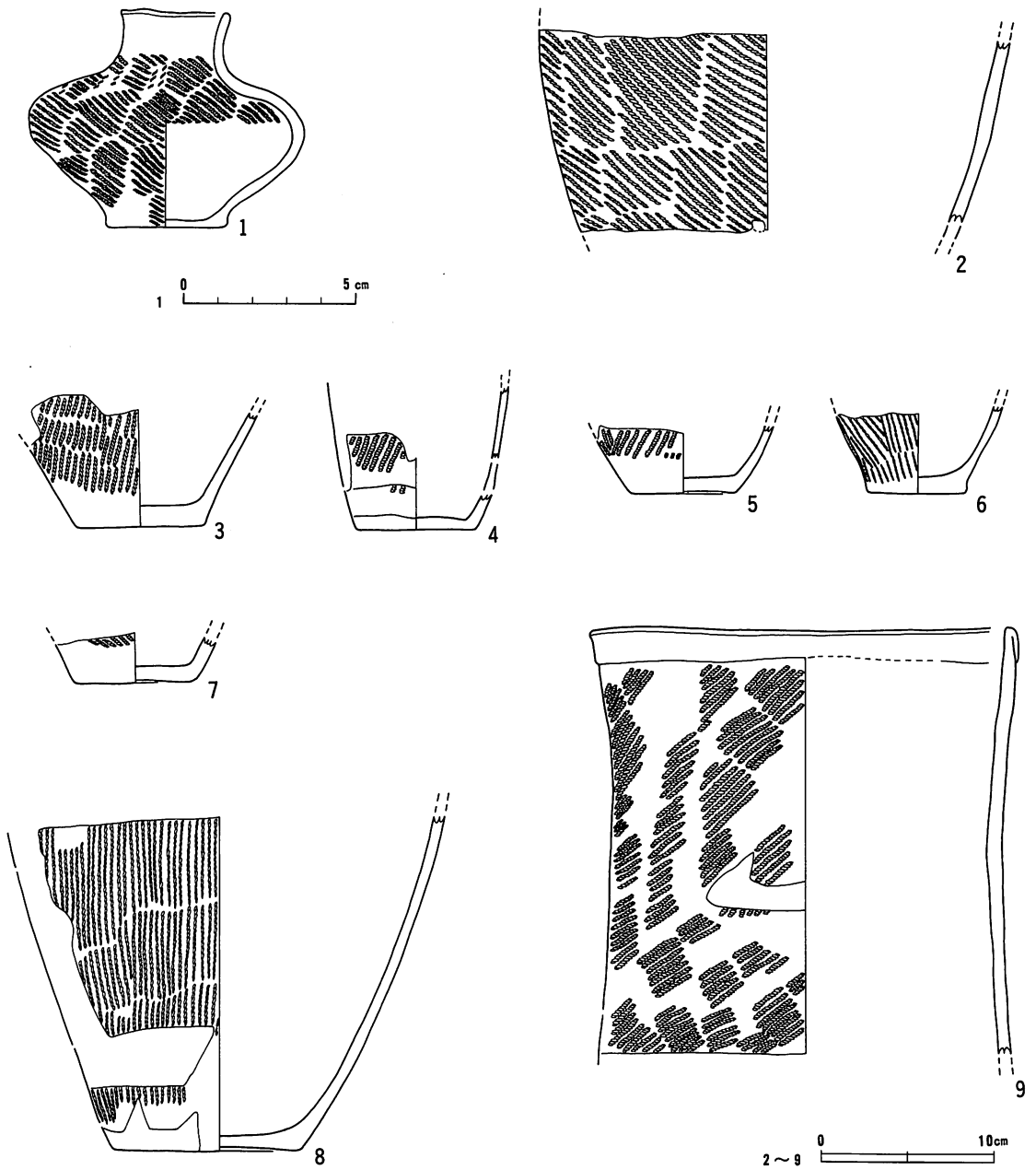
1. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。炭化物若干混入する。
2. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりなし。炭化物を微量に含む。
3. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
4. 7.5Y R% 暗褐色土 やや固い。
5. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
6. 10Y R% 褐色土 やわらかい。
7. 10Y R% 黄褐色土 固い。粘性あり。



1. 10Y R% 明黄褐色土 粘土。焼成はあまり受けていない。
2. 10Y R% 黒褐色土 固い。
3. 7.5Y R% 明褐色土 固い。礫(中粒)含む。炉の構築土。
4. 7.5Y R% 暗褐色土 粘性なし。
5. 10Y R% 黒褐色土 しまりなく、バサバサしている。
6. 10Y R% 赤色土 焼土。強く焼成を受けている。

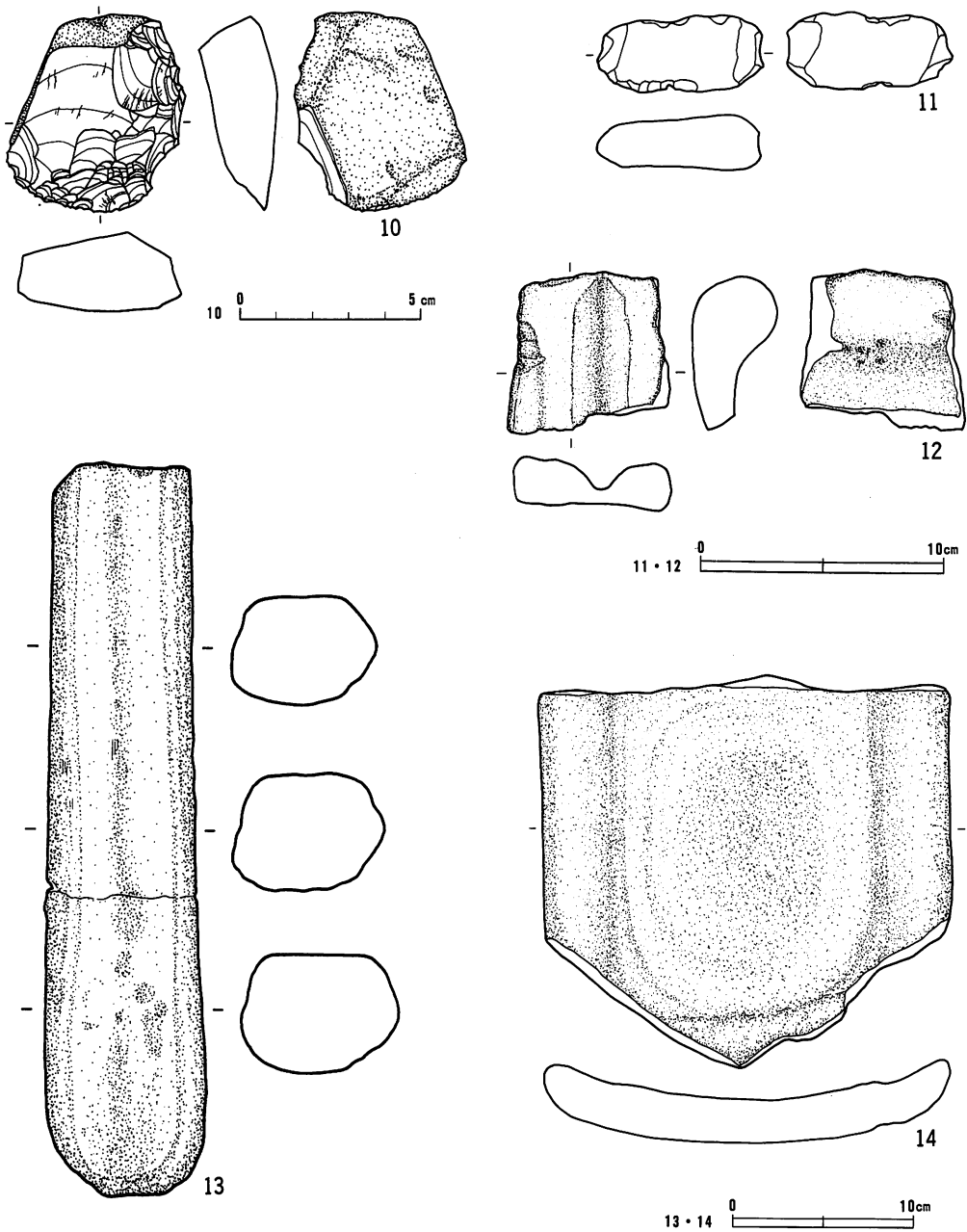


第14図 IV D 8 b 住居跡



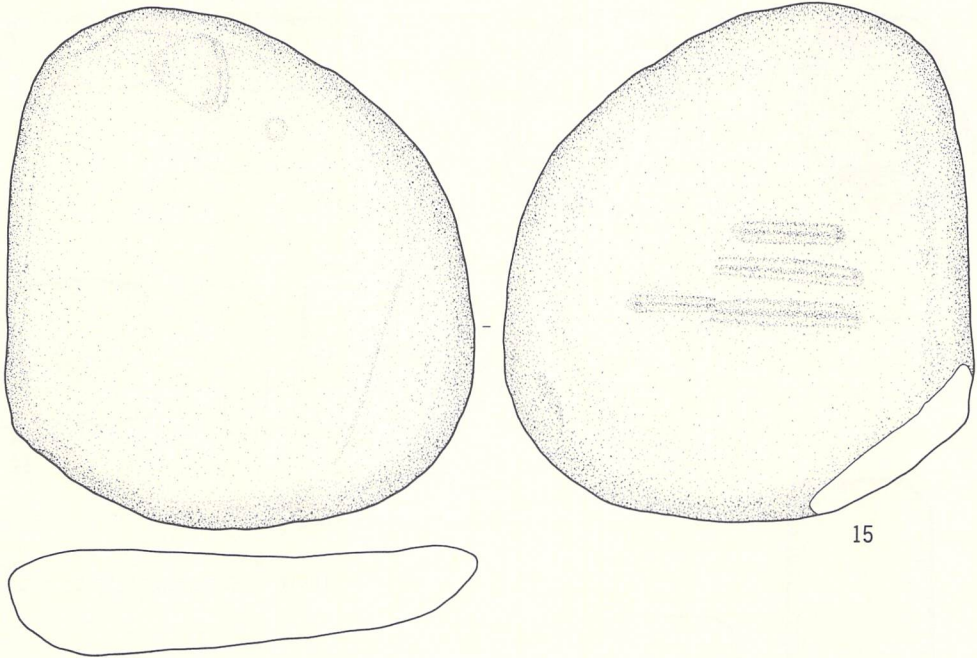
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1	IV D 8 b 住	床面	頸部から肩部にかけて一部側面圧痕あり。	LR縦	3.2	3.5	6.3		III 3 c	132
2	IV D 8 b 住	炉		LR縦	-	-	(12.0)		III 3 b	132
3	IV D 8 b 住	床面		LR横	-	7.4	(6.4)		III 3	132
4	IV D 8 b 住	床面		RL縦	-	7.0	(8.3)		III 3	132
5	IV D 8 b 住	床面		RL縦	-	6.0	(3.9)		III 3	132
6	IV D 8 b 住	床面		R燃糸文	-	5.8	(5.0)		III 3	132
7	IV D 8 b 住	床面		LR縦	-	6.9	(2.9)		III 3	132
8	IV D 8 b 住	埋土		LR燃糸文	-	(10.6)	(19.2)		III 3 b	132
9	IV D 8 b 住	埋土	複合口縁。	LR縦	24.7	-	(24.6)		III 3 b	132

第15図 IV D 8 b 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
10	IV D 8 b 住	埋土下位	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	5.5	4.9	2.1	58.91	自然面を片面に残し、打点方向から粗い調整。	IV	132
11	IV D 8 b 住		石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	3.1	6.8	2.3	70		III	132
12	IV D 8 b 住		溶岩	両輝石安山岩	岩手山	6.2	6.6	3.3	80			132
13	IV D 8 b 住	床面	石棒	デイサイト	奥羽山地	40.0	8.7	6.5	3800	IV D 0 c 住の石棒と接合。		132
14	IV D 8 b 住	床面	石皿・台石類	粗粒砂岩	奥羽山地	(21.6)	22.5	4.7	(1880)	断面形は内側・外側ともやぶを描く。		132

第16図 IV D 8 b 住居跡出土遺物(2)



15

16

焼成を受けている部分

0 10cm

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
15	ⅣD8b住	床面	石皿・台石類	輝石安山岩	北上山地	27.7	25.0	5.8	5200			133
16	ⅣD8b住	炉	立石	花崗閃緑岩	北上山地	28.7	43.2	4.0	7550	炉の南に埋設		133

第17図 ⅣD8b住居跡出土遺物(3)

ⅣD9c住居跡（遺構番号2）

遺構（第18図、写真図版8）

〈検出状況〉基盤層上面で試掘段階で検出されていたものである。本住居の北西1.5mにⅣD8b住居跡が、東0.8mにⅣD1c住居跡が位置する。

〈形状・規模〉径4.1×4.2mのほぼ円形である。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土を壁とし、ほぼ直立している。壁高は北が最も高く48cm、東40cm、西20cm、南で床と同じ高さとなる。

〈埋土〉18層に分けられる。壁際には崩落土が混入する。全体に焼土粒および粉炭を含む。床面より10～20cmの高さに、固い焼土が数箇所まとまって検出された。炭化材は細かいものだが、北半部に多く、樹種はナラとケヤキである。住居焼失後自然埋没したものと考えられる。

〈床・柱穴・施設〉北半部は基盤層を、南半部は暗褐色土を床とし、ほぼ水平である。南側は、相対的に固く出入口の可能性はある。柱穴は4基検出した。P1～P3は暗褐色シルトを埋土とする。P4は底部に凹凸があり木根の可能性もある。

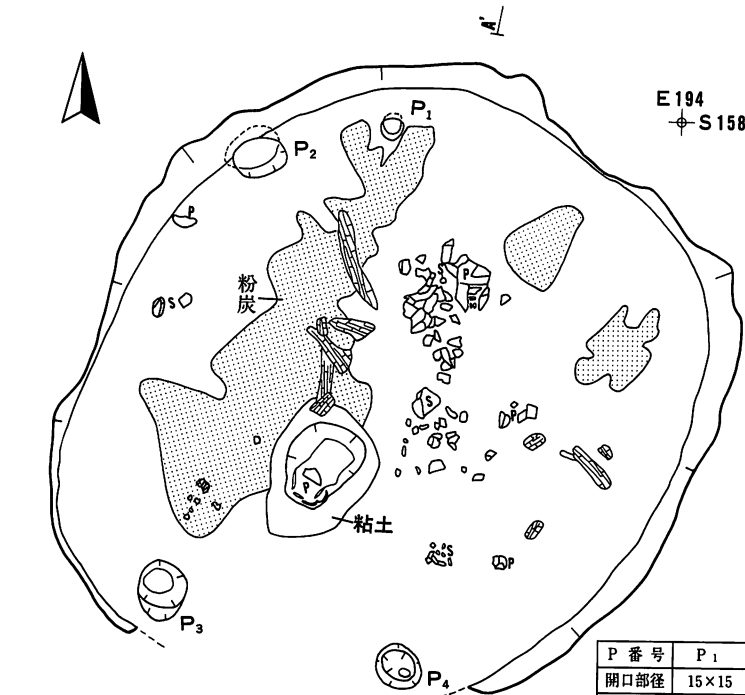
〈炉〉中央よりやや南寄りに位置する。70×90cmの楕円形の範囲を約50cmの深さに掘り込み、炉の中央部側に口縁部をむけて斜位に埋め、炉の周囲を粘土で固めている。土器の上位の粘土は明瞭に盛り上がる。土器の底部は無い。焼土は、斜位に埋設した土器の外側から炉を一周するように形成されている。

遺物（第19～21図、写真図版133～135）

〈土器〉床面から9300g、埋土から375gが出土した。18は炉の埋設土器である。被熱して脆弱化している。17は沈線によって区画された無文帯が、口縁部を全周し、胴上半部には曲線的な文様を描出する。胴部から展開した文様は口縁部分で鱗状の突起となり、3単位の緩波状口縁を形成する。19は口縁部の無文帯は沈線を伴わない。胴部に展開する曲線的無文帯によって形成された円文の周縁と口縁部無文帯との境界部に刺突が施される。20は胴中央部および胴下半部の一部に朱の顔料が塗布された痕跡が観察される。沈線で区画された無文帯内部には、丁寧なミガキがかけられている。一部に刺突が施される。

〈石器・石製品〉明瞭な刃部を作り出した剥片が5点、スクレーパーエッジは有しないが二次加工を施している剥片が1点、刃部形成はしていないが使用痕ある剥片が2点、他に使用痕・二次加工を明瞭には観察できない剥片が7点（北上山地・チャート、雫石産・硬質泥岩他）出土した。26は階段状剥離で粗い加工である。29は欠損品であるが、良く研磨され光沢を帯びる。部分的に敲打によりザラつく部分がある。32は自然礫の側辺を使用し磨面は平坦である。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

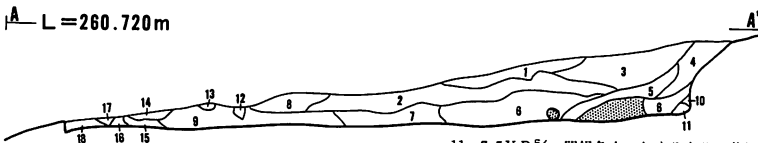


E194
S158

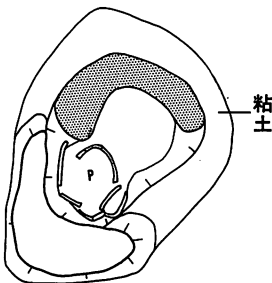
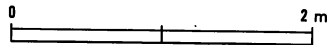
S162
E190

L=260.720m

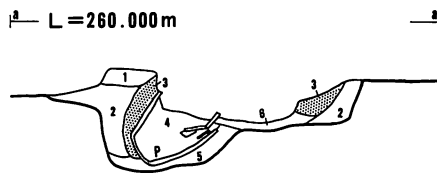
P 番号	単位cm			
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
開口部径	15×15	28×35	32×34	30×34
深 さ	18	43	14	25
埋 土	暗褐色 シルト	暗褐色 シルト	暗褐色 シルト	暗褐色と 黒色土の 混土



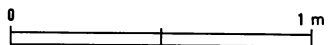
- | | | | |
|-----------------|------------------------------|-----------------|---------------------------|
| 1. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。12層に焼土粒、黄橙色土をブロック状に含む。 | 11. 7.5YR% 明褐色土 | しまりあり。黄橙色土をブロック状に含む。 |
| 2. 7.5YR% 黒色土 | しまりあり。黒褐色土、炭化物をブロック状に含む。 | 12. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。灰白色土を縞状に、炭化物を粒状に含む。 |
| 3. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。橙色土、炭化物を粒状に含む。 | 13. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。炭化物を粒状に含む。 |
| 4. 7.5YR% 褐色土 | しまりあり。黄橙色土を縞状に含む。 | 14. 7.5YR% 黒褐色土 | しまりあり。黄褐色土、炭化物を粒状に含む。 |
| 5. 7.5YR% 黒褐色土 | しまりあり。橙色土、炭化物を粒状に含む。 | 15. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。 |
| 6. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。明黄褐色土、炭化物をブロック状に含む。 | 16. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりなし。橙色土を縞状に含む。 |
| 7. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色土、焼土粒、炭化物をブロック状に含む。 | 17. 7.5YR% 褐色土 | しまりあり。黄褐色土を縞状に含む。 |
| 8. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。8層褐色土をブロック状に含む。 | 18. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄橙色土、黒色土を粒状に含む。 |
| 9. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。黄橙色土を縞状に、炭化物を粒状に含む。 | | |
| 10. 7.5YR% 明褐色土 | しまりあり。 | | |



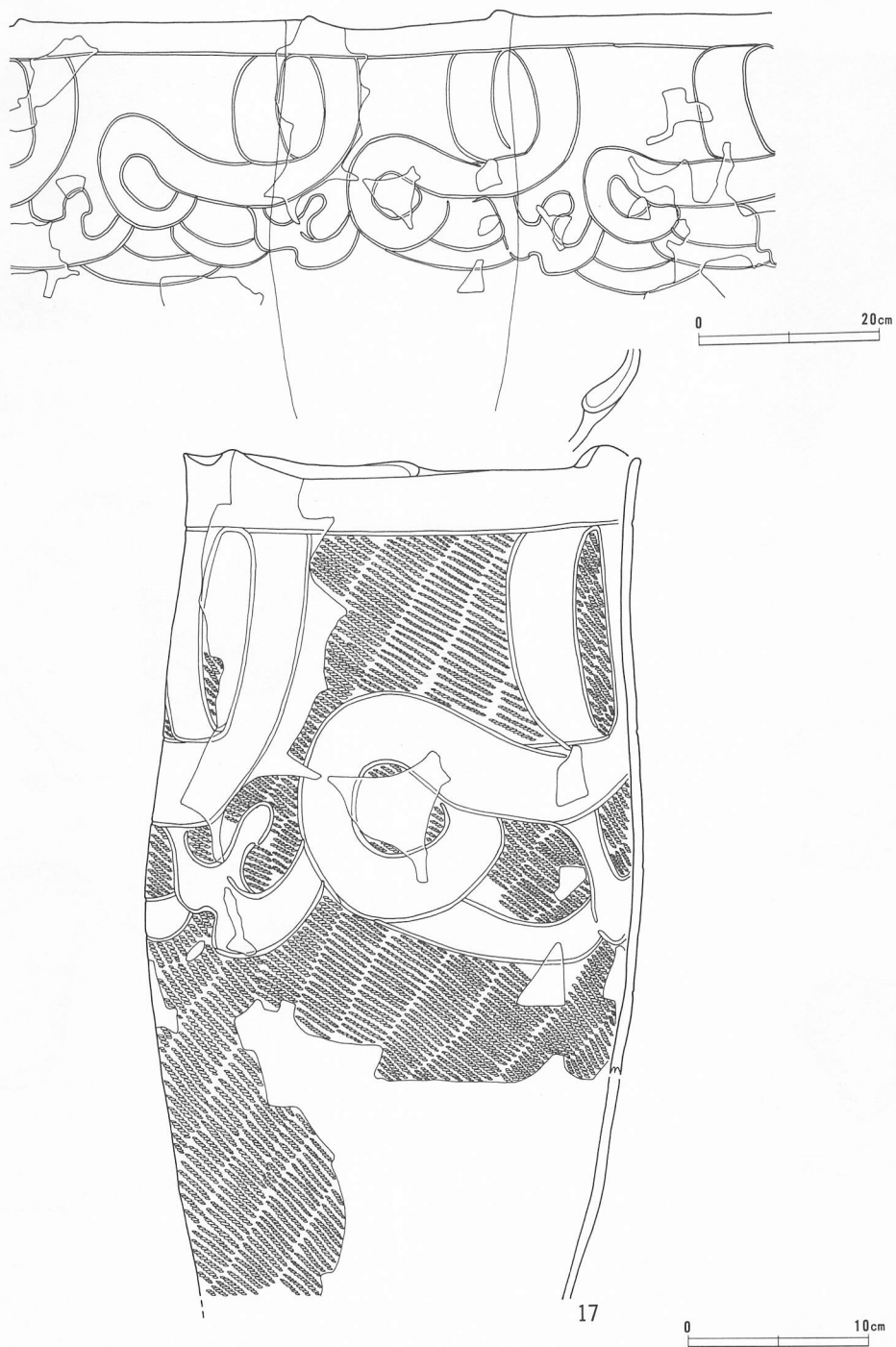
S161
E192



- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 5YR% 明灰褐色土 | 粘土、弱く被熱している。 |
| 2. 5YR%~10YR% 赤褐色~褐色土 | 被熱により土色が漸移的に変化。 |
| 3. 2.5YR% 明赤褐色土 | 焼土、固くしまる。 |
| 4. 5YR% 明灰褐色土 | 焼土、固くしまる。小角礫含む。 |
| 5. 5YR% 赤灰色 | 砂。一部焼成を受けている。 |
| 6. 5YR% 暗赤褐色土 | しまりなく、サラサラしている。炭化物含む。 |

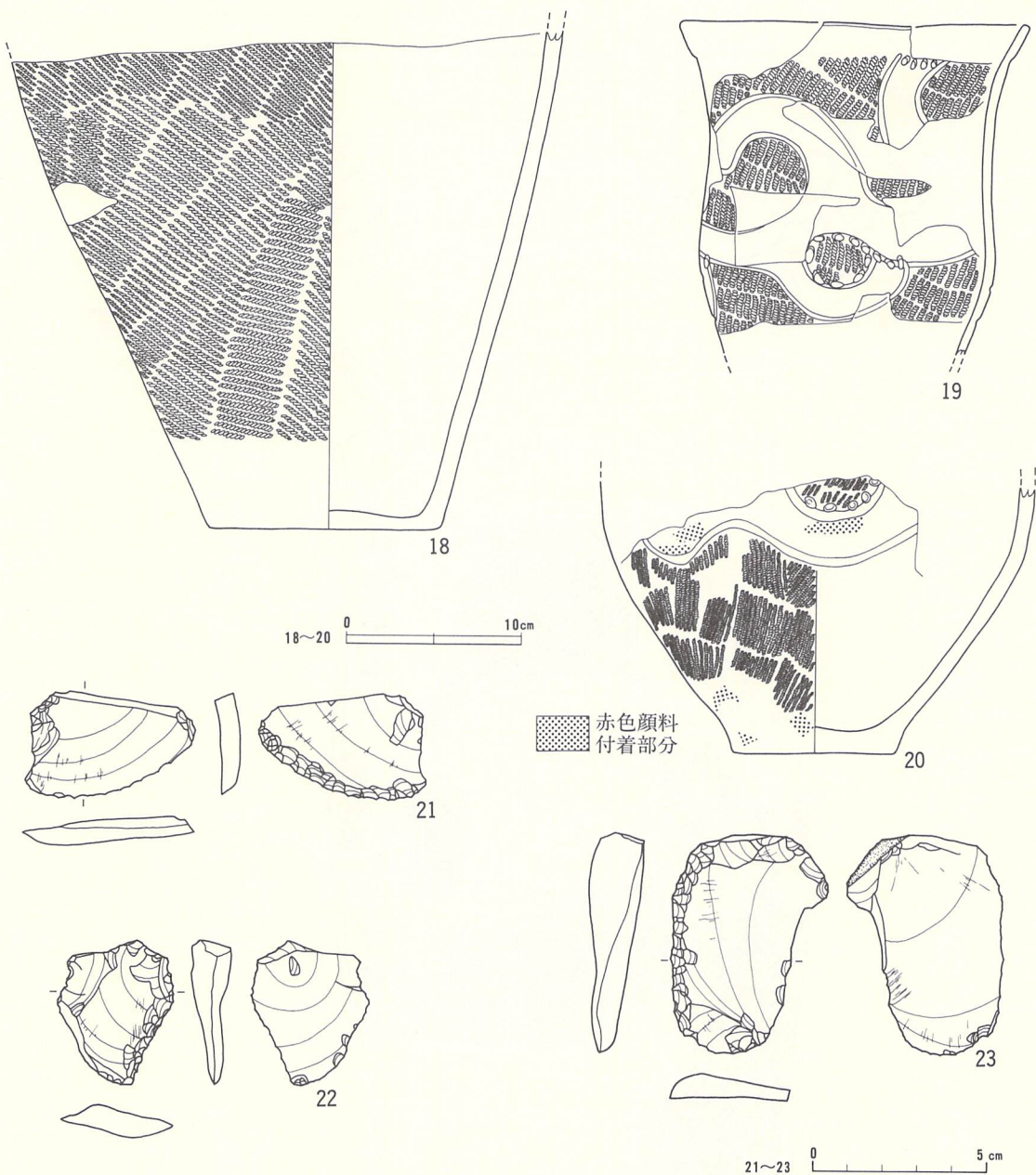


第18図 IV D9c 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
17	IV D 9 c 住	床面	沈線、磨消縄文、鱗状突起 (内面)	L R 縦	25.2	-	(47.4)		Ⅲ 3 a 7	133

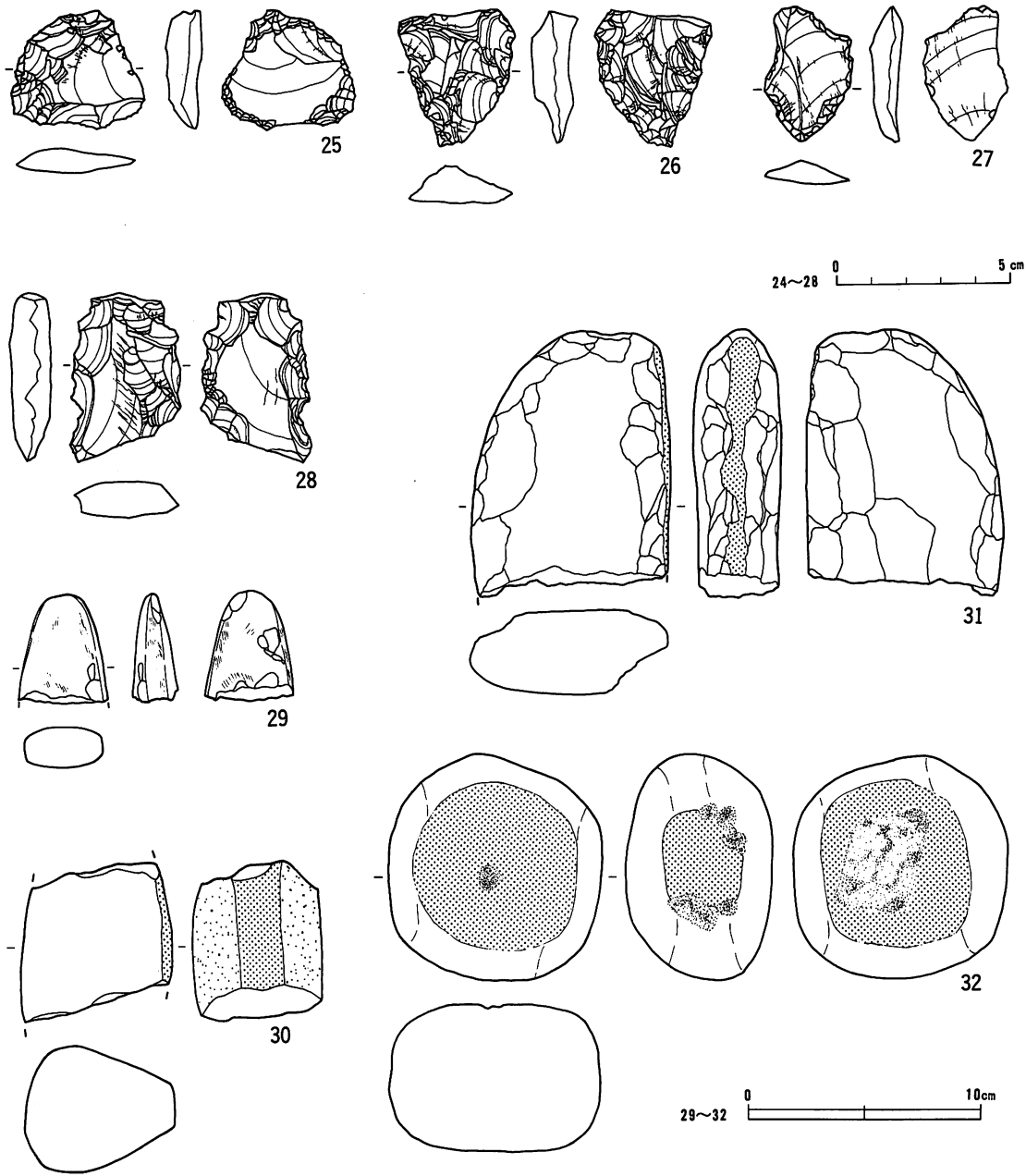
第19図 IV D 9 c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
18	ⅣD9c住	炉 ¹	底部近くは横ナテ。	L R縦	(31.5)	13.4	(28.5)		Ⅲ3 b	133
19	ⅣD9c住	床面	沈線(凹線)、磨消縄文、棒状工具による刺突。	L R縦	(20.0)	—	(19.0)		Ⅲ3 a 1	133
20	ⅣD9c住	床面	沈線(凹線)、棒状工具による刺突、内面ミガキ顕著。	L燃系文	—	(9.4)	(15.5)	赤色顔料付着。	Ⅲ3 a 1	133

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
21	ⅣD9c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	雫石西部	3.0	4.8	0.8	10.07		I a 2	134
22	ⅣD9c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	雫石西部	4.1	3.3	1.1	10.04	素材の一辺のみ二次加工。	I a 3	134
23	ⅣD9c住	Q4埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	6.3	4.6	1.6	27.91	素材のバルブ発達、ネガティブバルブも発達。	I a 2	134

第20図 ⅣD9c住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
25	IV D 9 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.3	3.8	0.7	11.43	刃潰し加工あり。	I b 2	134
26	IV D 9 c 住	床面	不定形石器	珪長質細粒凝灰岩	礮石西部	3.9	3.3	1.1	11.36	側面縦鋸歯状。	III	134
27	IV D 9 c 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.8	2.5	0.9	6.60		I d 2	134
28	IV D 9 c 住	床面	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.9	3.2	1.2	19.74	側面縦鋸歯状。	IV	134
29	IV D 9 c 住	床面	磨製石斧	輝石岩	北上山地	(4.7)	(3.8)	(1.7)	(50)	欠損品。二次使用の可能性もある。		134
30	IV D 9 c 住		敲磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(6.1)	6.5	5.4	(380)	平滑面2面。剝離無し。欠損品。	I a	134
31	IV D 9 c 住		敲磨器類A群	輝石安山岩	奥羽山地	(11.4)	8.6	3.6	(560)	欠損品。	III b 3	135
32	IV D 9 c 住	床面	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	9.6	9.2	6.2	920	側面に磨面。平坦部は台石様の凹凸。	V	135

第21図 IV D 9 c 住居跡出土遺物(3)

IV D 0 c 住居跡 (遺構番号 3)

遺構 (第22図、写真図版 9)

〈検出状況〉基盤層上面で北側の壁を検出した。IV D 0 c 土坑によって切られ、炉の一部が壊されている。西0.8mにIV D 9 c 住居跡、東1.6mにV D 1 c 住居跡が位置する。

〈形状・規模〉径4m程のほぼ円形を呈する。

〈壁・壁高〉北側は基盤層である黄褐色土を、南側は暗褐色土を壁とする。壁高は北で40cm、西で38cm、東で25cm、南で7cmを測る。

〈埋土〉北半部に固く締まった黄褐色土が広く分布する。厚さは一定でなく、平面分布も均一ではない。全体的に粉炭を含み、北西四半部の床直上に異地性の焼土が多く検出された。人為的な堆積と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉北半は基盤層を、南半は暗褐色を床とし、南側は相対的に軟質である。

〈炉〉土器埋設炉で、中央よりやや南寄りに位置する。南西隅はVI D 0 c 土坑によって一部壊されている。80×100cmの範囲を深さ30cm程度掘り下げ、粘土を底面に貼り付けたのち土器を埋設し、シルトで周囲を固定している。さらに幅8～15cm程度の粘土を楕円形に巡らせて区画する。土器(33)は炉の南端に、開口部を炉の中央部に向け、約30度の角度で斜位に埋設されている。

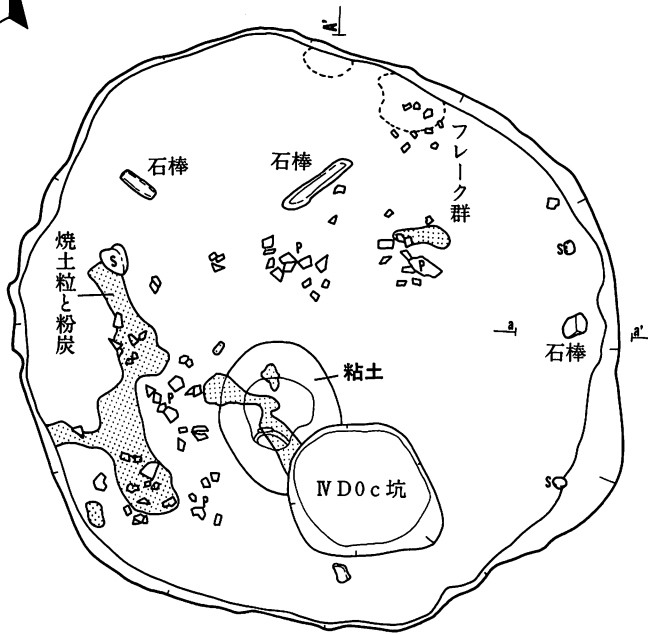
〈石棒〉東壁際において、やや東側に傾くがほぼ直立した状態で検出された。床面基盤層を掘り込んで埋設した痕跡はないものの、黒褐色土を5cm程度の深さに盛り、その中に据えられている。石棒が底面と接する部分は極めて固く締まっている。

遺物 (第23～25図、写真図版135・136)

〈土器〉床面から4778g、埋土から5133g出土した。33は炉に埋設された土器である。地文のみで底部より緩やかに外傾し口縁部付近で緩く外反する器形であるが、土圧によっていびつに変形している。口縁部分で径19×22.8cm、中ほどで19×21cm、底部より5cmの高さの部分で13.5×14.3cmである。被熱し、脆弱化している。35と36は地文施文後に磨消手法によって曲線的文様を描出している。

〈石器・石製品〉13の上半部は北西四半部の床面に横倒して検出されたもので、IV D 8 b 住の石棒と接合したものである。42は両面加工により凸状の刃部を形成する。45は東壁際に直立して検出された石棒である。自然石を敲打によって整形したもので頭部は作り出されない。数箇所、棒状の工具を用いて意図的に穿ったと考えられる小さな窪みが一定の方向性で観察される。46は加工痕は観察されない。北東四半部壁際から剥片が多量に纏まって出土した。その中には、Rフレ1点、Uフレ11点を数えたが図化は省略した。

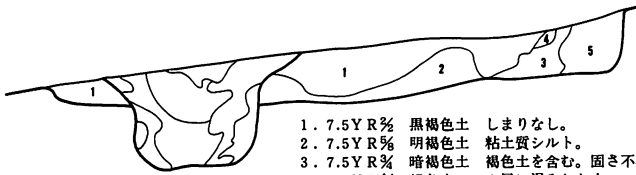
時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。



S 163 ⊕
 E 195

⊕ S 163
 E 199

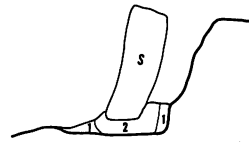
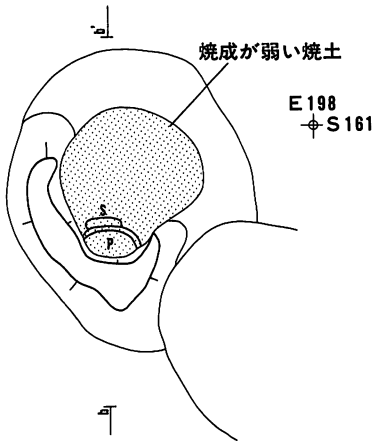
A — L = 261.100 m



1. 7.5 Y R % 黒褐色土 しまりなし。
2. 7.5 Y R % 明褐色土 粘土質シルト。
3. 7.5 Y R % 暗褐色土 褐色土を含む。固さ不均一でもろい。
4. 7.5 Y R % 褐色土 3層に混入した土。
5. 7.5 Y R % 暗褐色土 炭化物が若干混入する。

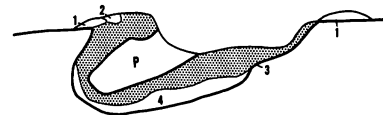
0 ————— 2 m

a — L = 260.900 m — a'



1. 10 Y R % 黒褐色土 しまりなし。褐色土をブロック状に含む。
2. 10 Y R % 黒褐色土 しまりあり。褐色土を粒状に含む。

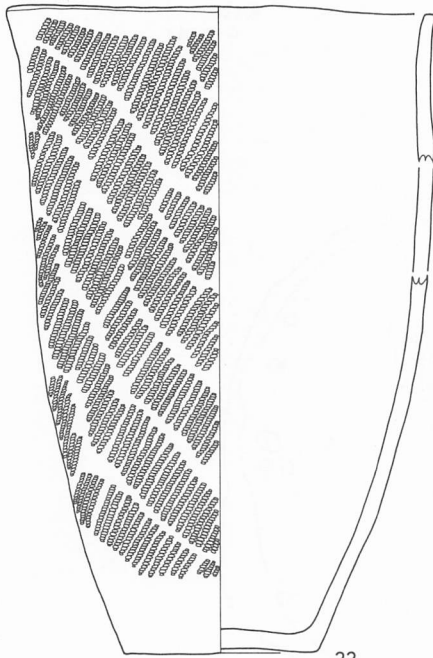
b — L = 205.800 m — b'



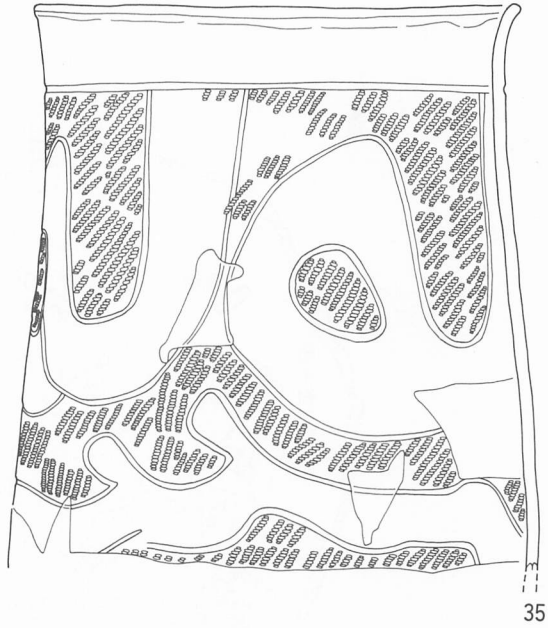
1. 10 Y R % 黄褐色 粘土。小角礫を少量含む。
2. 2.5 Y R % におい赤褐色 1層が焼成を受けたもの。
3. 2.5 Y R % 赤褐色 焼土。固い。少量の礫を含む。
4. 7.5 Y R % 明褐色 焼成を受けている。

0 ————— 1 m

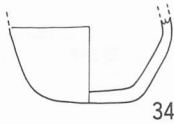
第22図 IV D0c 住居跡



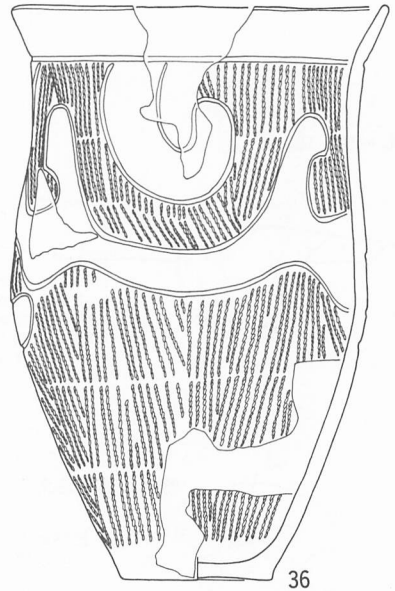
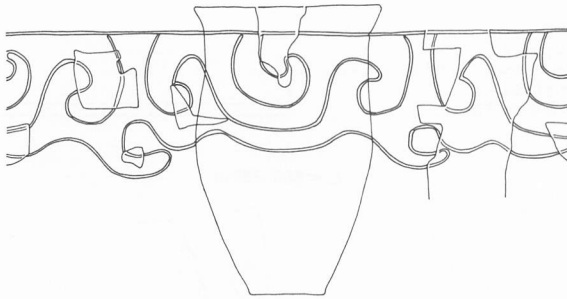
33



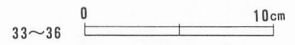
35



34

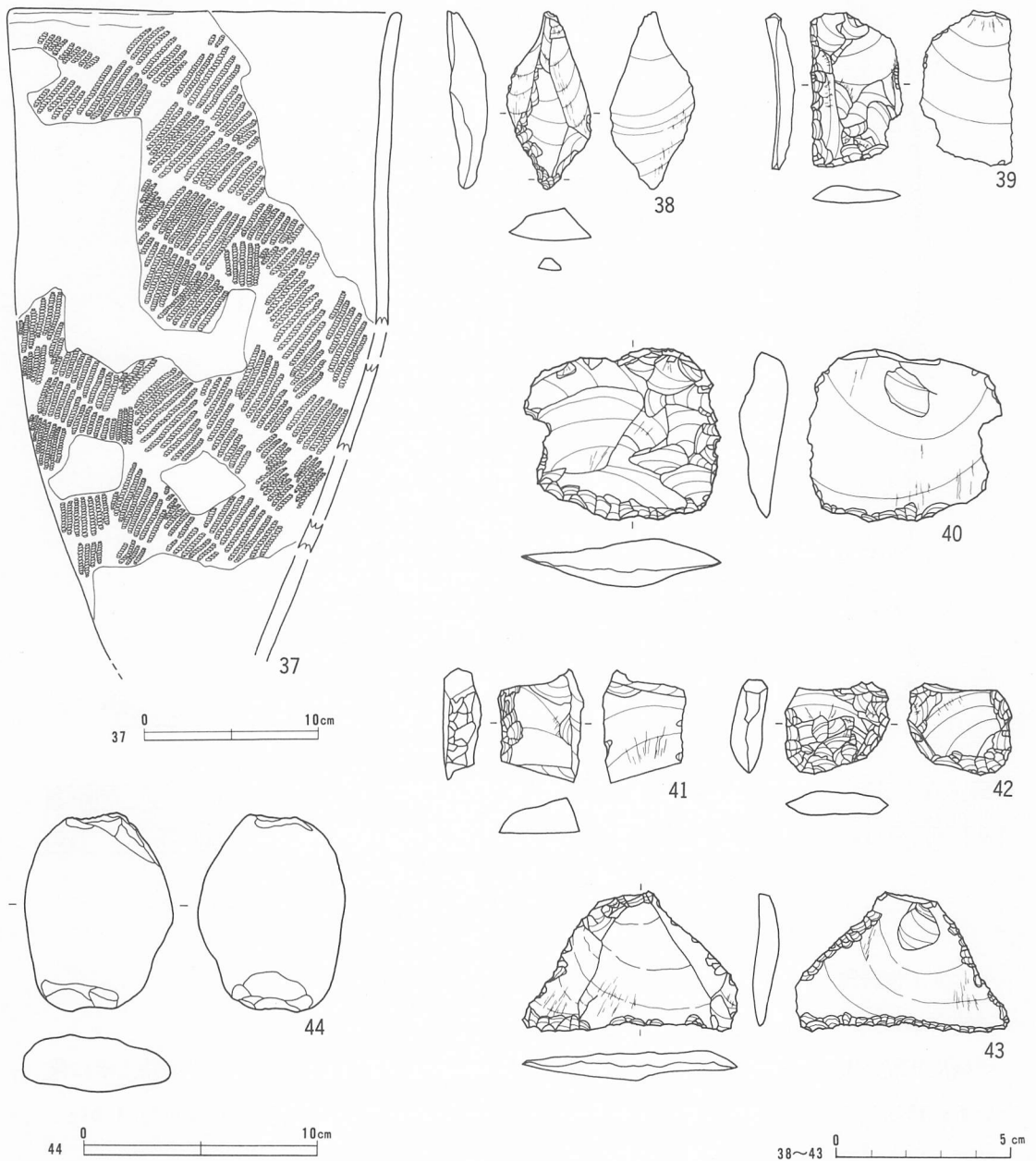


36



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
33	IV D 0 c 住	炉		R L 縦	22.8	10.0	30.5	つぶれて偏平になっている。	III 3 b	135
34	IV D 0 c 住	床面	無文		-	4.0	(4.7)			135
35	IV D 0 c 住	埋土	沈線(凹線)、磨消文、変形 J 字文	R L 縦	25.8	-	(30.0)		III 3 a 7	135
36	IV D 0 c 住	Q 2 埋土	沈線、磨消文、波頭文	L 撚糸文	20.0	8.0	30.6		III 3 a 7	135

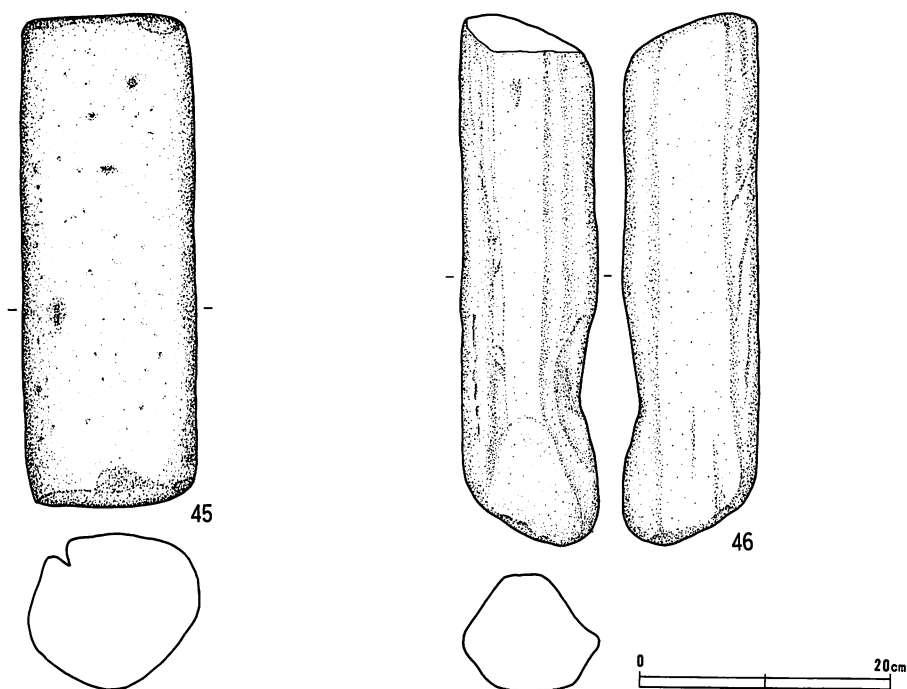
第23図 IV D 0 c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
37	IV D 0 c 住	埋土		R L 縦。	(24.4)	—	(37.6)		III 3 b	135

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
38	IV D 0 c 住	Q 4 埋土	石錐	粘板岩	北上山地西部	5.1	2.4	1.2	10.10	身部のつくり出しは不明瞭。		135
39	IV D 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	4.4	2.6	0.5	6.38		I a 1	135
40	IV D 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	4.9	5.7	1.4	32.43		II	136
41	IV D 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	珪質泥岩	雫石西部	3.2	2.5	1.1	9.60		I a 3	136
42	IV D 0 c 住	Q 4 埋土	不定形石器	珪質泥岩	雫石西部	2.6	3.0	0.9	7.58	正面観は強い丸凸状。側面観は直線状。	I b 4	136
43	IV D 0 c 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	4.0	6.2	0.9	17.67	バルブの一部をとり除く加工。	I a 3	136
44	IV D 0 c 住	埋土下位	石錐	凝灰岩	北上山地	8.5	6.4	2.5	170		I	136

第24図 IV D 0 c 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
45	IV D 0 c 住	床面	石棒	流紋岩	松尾(長者屋敷)	39.2	13.7	12.3	10250			136
46	IV D 0 c 住	床面	石棒	流紋岩	北上山地	42.3	10.7	9.4	1890	断面形が不整な六角形となる様を有する。表面はやや滑らか。		136

第25図 IV D 0 c 住居跡出土遺物(3)

VC 0 f 住居跡 (遺構番号 4)

遺構 (第26図、写真図版10)

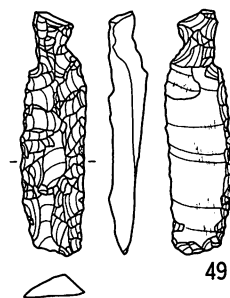
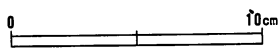
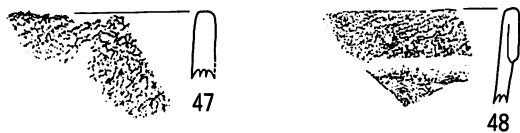
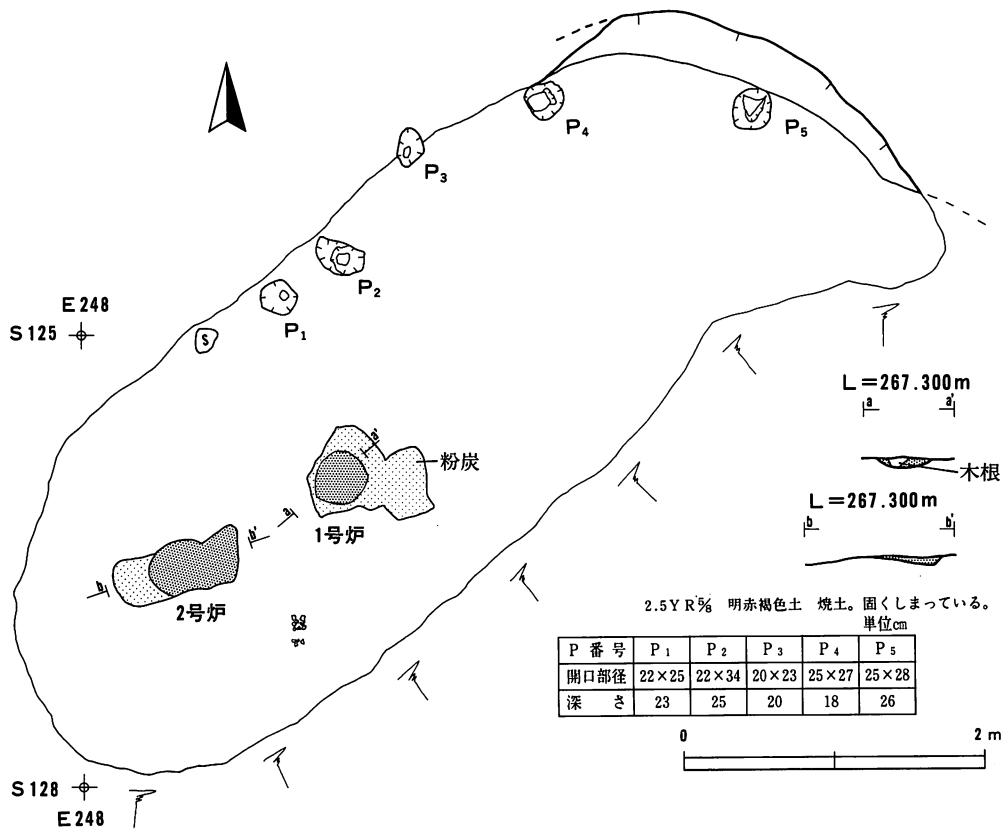
〈検出状況〉Ⅲ層の暗褐色土上面で黒褐色の落ち込みとして検出したが、北側は道路工事に伴い土が移動しており、南側はなだらかな斜面となっていてプランは確定できなかった。しかし、柱穴と焼土が確認され、住居跡と認定した。

〈形状・規模〉平面形は柱穴の配置からは長方形ないしは楕円形が推定される。規模は、残存値で270×650cmである。

〈壁・壁高〉北東四半部でのみ確認できた。基盤層を壁として緩やかに立ち上がり、壁高は6.4cmを測る。

〈埋土〉上位は黒褐色土、下位は暗褐色土と大別される。黒褐色土は遺物と粉炭を包含する。

〈床・柱穴・施設〉北半は基盤層を床とし固く締まっている。南半は暗褐色土でやや締まりに欠ける。床面は凹凸はほとんど無いが、南側がやや低くなっている。柱穴は5個検出されたが、いずれも径20cm深さ20cm前後でほぼ同規模である。壁際に並んでいたものと想定される。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
47	VC0f住	埋土		LR0段多条。				繊維をおおく含む。脆弱。		136
48	VC0f住	埋土	複合口縁。	LR横。				焼成良好。硬質。		136

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
49	VC0f住	埋土上位	石匙	粘板岩	北上山地	6.5	1.8	1.1	8.95		I b 1	136

第26図 VC0f住居跡・出土遺物

〈炉〉長軸の西側に偏った位置に、地床炉が2基検出された。まわりには粉炭が分布する。東側のものを1号炉、西側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は35×38cmの範囲に分布し、厚さは最大で10cmを測る。中央部は木根により攪乱を受けているが、他は固く締まっている。2号炉の焼土は30×60cmの範囲に分布し、最大厚は8cmで固く締まっている。

遺物（第26図、写真図版136）

〈土器〉埋土から225g出土した。47は植物性繊維を多く混入する前期初頭の土器で、縄文の施文方向は不定である。48は折り返し口縁で口縁部・胴部に単節斜縄文が施文される。焼成が良好で硬質である。中期初頭の土器であろう。他にも縄文のみの小さい破片が出土している。

〈石器〉フレークが埋土から1点出土している。

時期 出土遺物からは時期を特定できない。

V D 1 c 住居跡（遺構番号5）

遺構（第27図、写真図版11）

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色土が円形に分布することから検出した。斜面下方に当たる南側は一部流失により不明である。東には1m離れてV D 2 c 住居跡が、西1.5mの距離にⅣ D 0 c 住居跡が位置する。

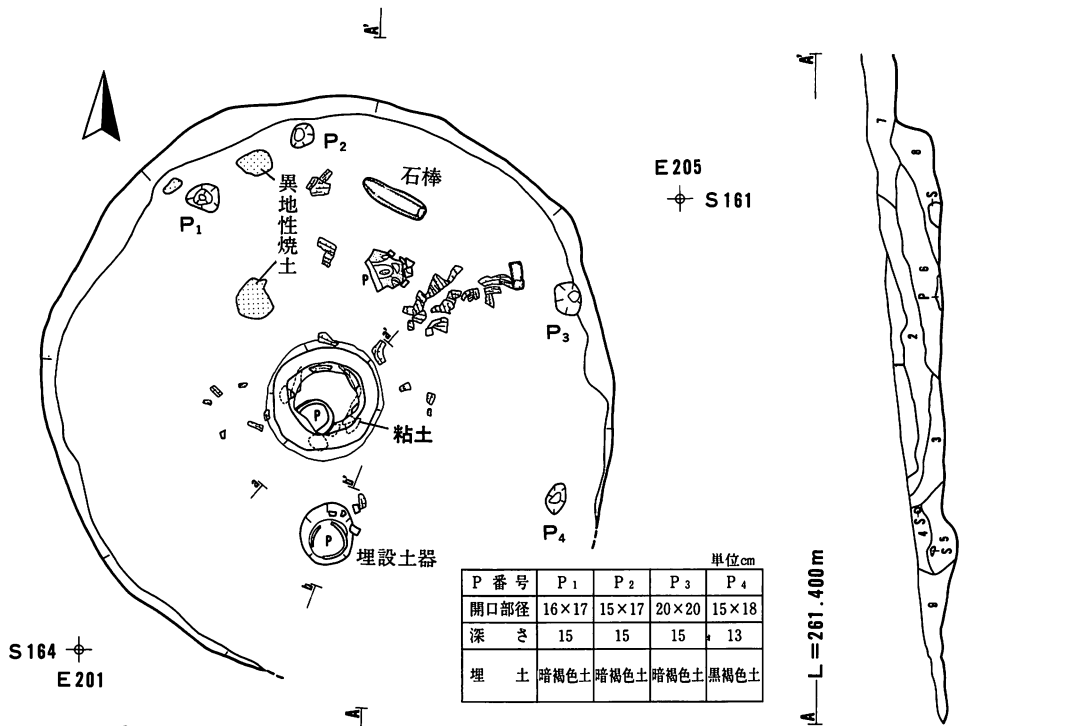
〈形状・規模〉南側が一部不明であるが、径4m程度の円形を呈する。

〈壁・壁高〉斜面上方の北側は基盤層を、他はⅢ・Ⅳ層を壁とし、壁高は北壁40cm、西壁24cmを測り、東壁は試掘トレンチにより削られたため10cmの残存値を示す。

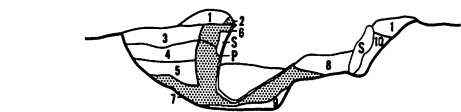
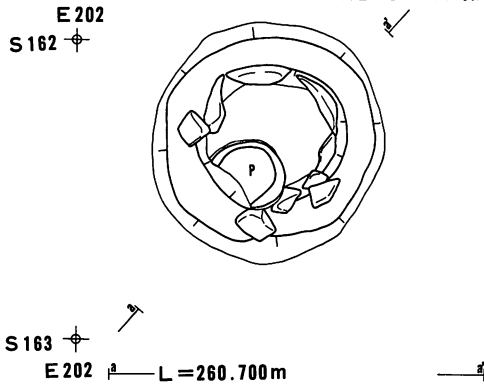
〈埋土〉全体的に粉炭ないしは長さ5cm程度の細かい炭化材を含み、床面まで達する。壁際には一部崩落土を含むが、黒色～黒褐色が卓越し締まりに欠ける。

〈床・柱穴・施設〉北半は基盤層で固く締まっているが、南半は暗褐色土でやや軟質である。柱穴が4個検出された。4個とも径15～20cm、深さ15cm程度でほぼ同規模である。しかし、P1～P3の埋土は暗褐色土であるのに対し、P4のそれは黒褐色土で固く締まっていることから、4個すべてが対応するものではない可能性がある。北半部の床面から床面直上にかけて焼土と炭化材が検出された。焼土は3箇所分布し、粘土質シルトが焼成をうけたもので固く締まっている。床面との間に5～10cm程暗褐色土を挟むことから異地性のものである。炭化材は北東四半部に密に分布するが、いずれも脆弱であり、分布状況等から規則性を見出すことはできない。樹種は床面出土のものはすべてナラで、断面観察では丸木材と考えられる。

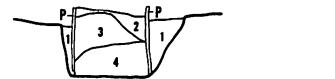
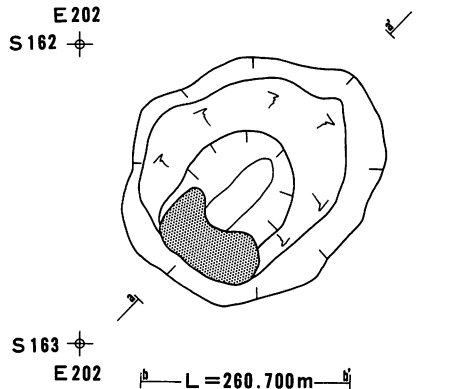
〈炉〉ほぼ中央に位置し、直径約80cmの円形をなす。外郭に幅15～20cm、厚さ4～5cmにわたり褐色の粘土を貼り付けている。内側には円周に沿って長さ15～25cm程度の偏平な角礫を9個巡らしている。炉の南側に、開口部を北壁に向けて約40度の角度で斜位に土器が埋設されてい



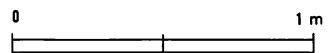
1. 7.5Y R% 暗褐色土 黒色土を含む。
2. 7.5Y R% 黒褐色土 黒色土を含む。
3. 10Y R% 黒褐色土 黒色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
4. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。明褐色土を少量含む。
5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。黒色土を少量含む。炭化物とを微量含む。
6. 10Y R% にふい黄褐色土 しまりなし。黒色土を少量含む。炭化物を微量含む。
7. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。明褐色土をブロック状に含む。
8. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。明褐色土を少量含む。炭化物を含む。
9. 7.5Y R%~% 黒褐色土 しまりなし。褐色土をブロック状に含む。



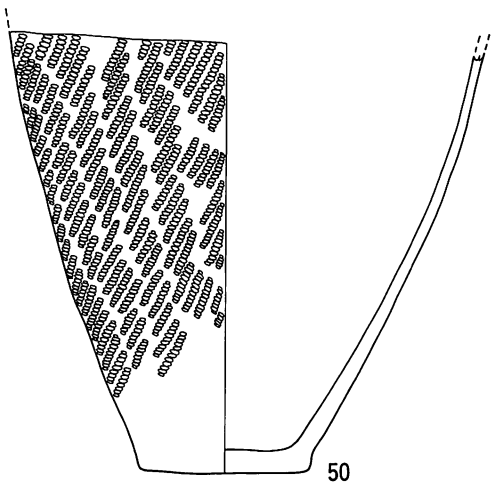
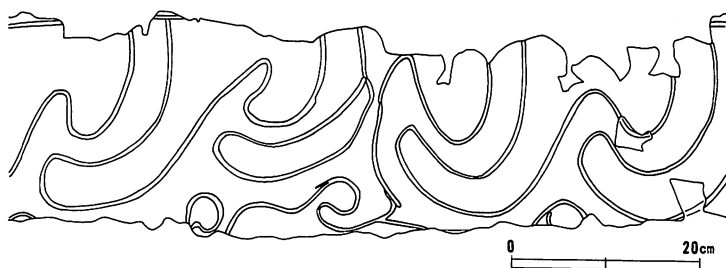
1. 10Y R% 褐色土 粘土。固くしまっている。炉の構築土。
2. 2.5Y R% 赤褐色土 焼土。1層の焼成土。
3. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。炉の構築土。
4. 7.5Y R%~7.5Y R% 暗褐色~黒褐色土 きわめて固い。粉炭。焼土粒を若干含む。
5. 5Y R% 暗赤褐色土 しまりなし。多量の粉炭、焼土粒を含む。
6. 5Y R% 明赤褐色土 粘土が焼成を受けたもの。
7. 2.5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまる。
8. 5Y R% 赤褐色土 しまりなし。焼土。暗褐色土、粉炭を含む。
9. 7.5Y R%~% 灰褐色 砂。しまりなし。
10. 10Y R% 褐色土 しまりなし。



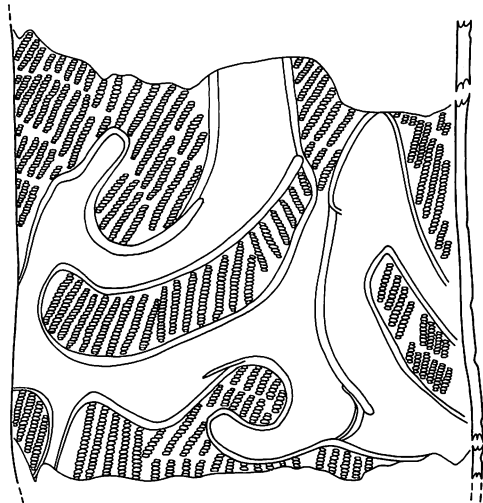
1. 7.5Y R% 黒褐色土 褐色土を粉末状に含む。
2. 10Y R% 黒色土
3. 10Y R% 黒褐色土
4. 10Y R% 暗褐色土



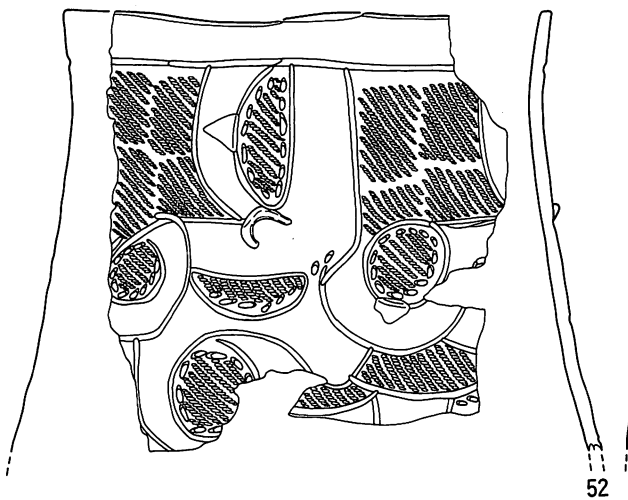
第27図 V D1c 住居跡



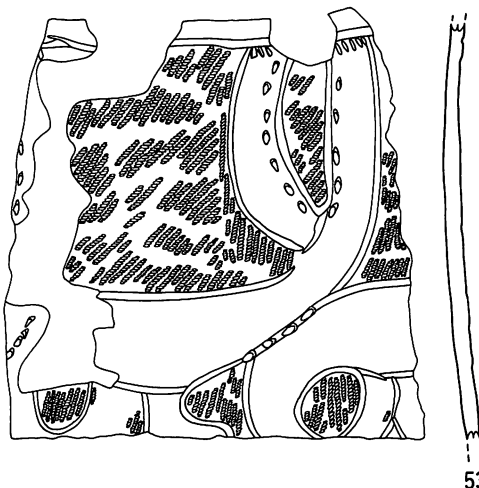
50



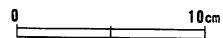
51



52

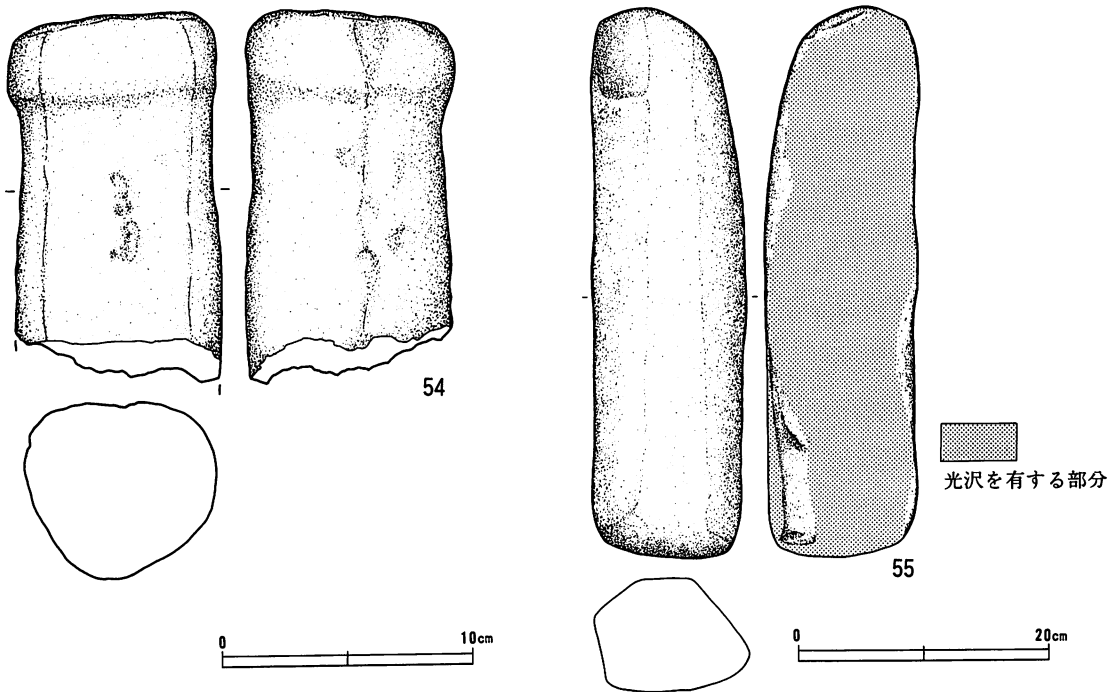


53



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
50	VD1c住	炉		R L縦	-	9.0	(23.3)		Ⅲ 3 b	137
51	VD1c住	埋設土器	沈線(凹線)、磨消縄文、棒状工具による刺突	L R縦	-	-	(24.3)		Ⅲ 3 a 1	137
52	VD1c住	床面	沈線(凹線)、磨消縄文、変形J文字、棒状工具による刺突、鱗状突起	L R縦	(26.0)	-	(23.3)		Ⅲ 3 a 1	137
53	VD1c住	床面	沈線(凹線)、磨消縄文、変形J文字、棒状工具による刺突	R L縦	-	-	(22.9)		Ⅲ 3 a 1	137

第28図 VD1c住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
54	VD1c住	床面	石棒	流紋岩	北上山地	(14.7)	8.2	7.0	(1380)	頭部を作り出す。断面形は円形基調だがやや三角形となる。		137
55	VD1c住	床面	石棒	流紋岩	北上山地	43.5	12.1	8.5	5650			137

第29図 VD1c住居跡出土遺物(2)

る。土器の周囲は焼成をうけて固く締まったシルトで覆われる。土器の地山への接地面には細砂が一面に敷かれている。炉は粉炭、焼土粒を多く混入した暗褐色土で、土器の内部には灰を含み極めて締まりのない赤灰色土に覆われる。炉内出土の炭化物はケヤキと鑑定された。

〈床面埋設土器〉炉の南端から40cmの位置に検出された。直径約40cm深さ約20cmの掘り方を持ち、体部上半を正立に埋設している。内部は黒色ないしは暗褐色土で満たされる。

遺物（第28・29図、写真図版137）

〈土器〉床面から6254g、埋土から85g出土した。50は炉内に埋設された土器である。地文のみで、胴下半部を利用している。51～53は磨消し無文帯により曲線的文様を描き、鱗状突起が施される。51は住居南側の床面に埋設された土器である。口縁部と胴下半部は欠損している。52・53は沈線によって区画された円形または楕円形には、区画線に沿って斜位方向から連続した刺突文が施される。52は区画内に、53は無文帯に施される点異なる。

〈石器・石製品〉54は東壁寄りの床面から出土した。断面形はやや三角形状で、頭部を僅かに

作り出している。側面の一部に溝状に窪みが形成されている。55は北壁寄りの床面から出土した。加工した痕跡は見えないが側面の一部はやや凹凸があるが光沢を有する。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

VD2c住居跡（遺構番号6）

遺構（第30図、写真図版12）

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色土が円形に分布することから検出した。並列して検出された5棟の住居のうち東端に当たり、西1mにはVD1c住居跡が位置する。

〈形状・規模〉南側が一部不明であるが、径4m程度の円形を呈する。

〈壁・壁高〉斜面上方の北側は基盤層を、他はⅢ・Ⅳ層を壁とし、壁高は北壁40cm、西壁30cm、東壁25cmである。

〈埋土〉全体的に粉炭ないしは長さ5cm程度の細かい炭化材を含み、床面まで達する。壁際には一部崩落土を含むが、黒色～黒褐色が卓越し締まりに欠ける。

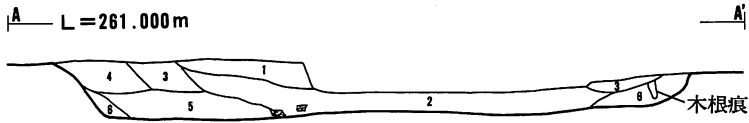
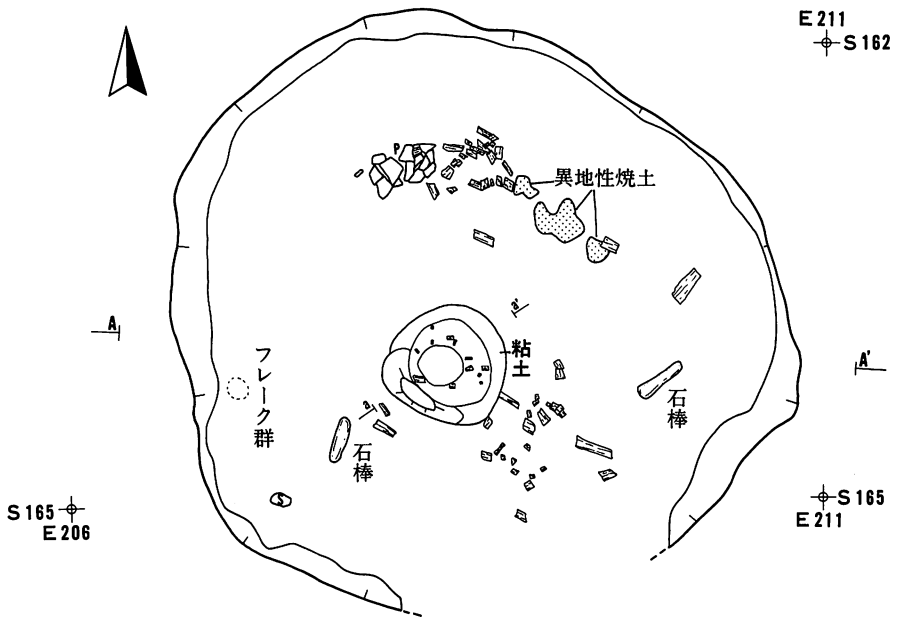
〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く締まっており、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。床面ないし床直上から焼土と炭化材が検出された。焼土は明瞭なものは3箇所分布し、粘土質シルトが焼成をうけたもので固く締まっている。床面との間に5～10cm程暗褐色土を挟むことから異地性のものである。炭化材は北側と南東部に密に分布しているが、いずれも脆弱であり、材の原形をとどめるものは殆どない。残存状況のよいものの断面観察では丸木材と考えられる。樹種は、1点は針葉樹（詳細不明）で、それ以外はすべてケヤキである。

〈炉〉ほぼ中央に位置し、直径約80cmの円形をなす。外郭に幅10～20cm、厚さ4～5cmにわたり褐色の粘土を貼り付けている。内部は細かい炭化物を含む暗褐色土に覆われ、床面より15cm程下の炉の中央部分にあたる位置に正立に埋設された土器が検出された。掘り方は土器の径と殆ど変わらない。土器の周りの土には焼成をうけた痕跡はみられない。

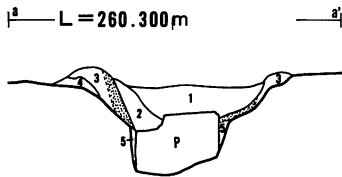
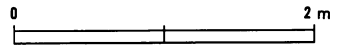
遺物（第31・32図、写真図版137・138）

〈土器〉実測図で表した2点のみの出土である。56は炉の埋設土器である。沈線によって区画した後、充填手法による縄文帯でJ字状または逆C字状および波頭状の文様を描く。土器に被熱の痕跡は明瞭ではない。57は埋土中位から床直上にかけて出土したものである。磨削手法による無文帯で、下部を連結させたJ字文を描き、連結部区画を斜め下方からの刺突によって充填している。無文帯はミガキがかけられる。

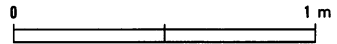
〈石器・石製品〉59は西側の床面から出土したもので、加工痕は観察されない。西壁際の床面にはりついた状態で多数のフレーク（霏石産・珪質泥岩他）が纏まって検出された。60は東側の床面から出土した。敲打によって整形し頭部を僅かに作り出している。一側面に縦方向にや



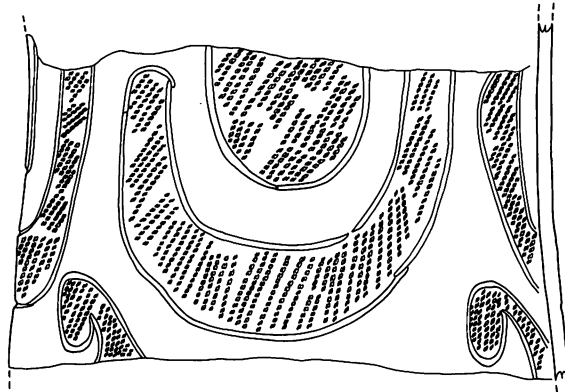
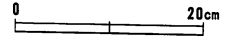
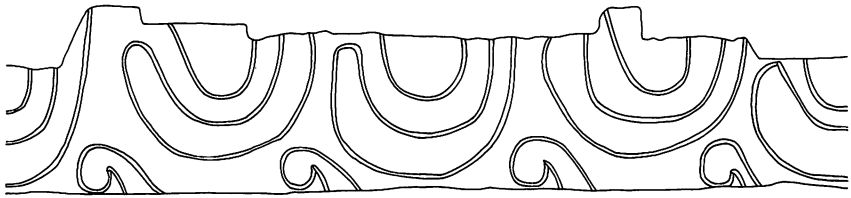
- 1. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。暗褐色土を含む。
- 2. 10Y R% 黒褐色土 褐色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
- 3. 10Y R% 褐色土 粘土質土。固くしまっている。
- 4. 10Y R% 暗褐色土 ややしまる。
- 5. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。粉炭を微量含む。
- 6. 10Y R% 褐色土 暗褐色土を含む。



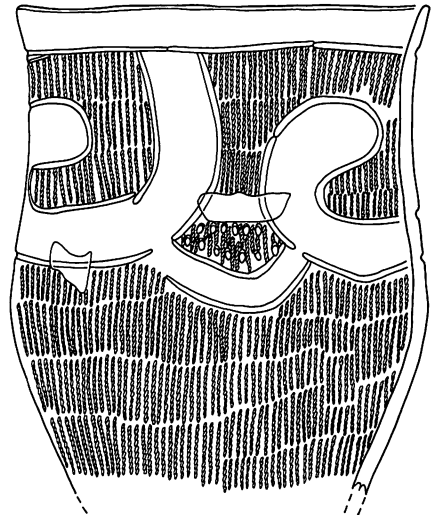
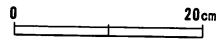
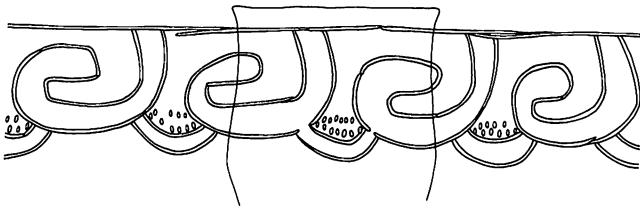
- 1. 暗褐色土 しまりなし。粉炭を含む。
- 2. 暗褐色土 焼成を受けている。しまりなし。炭化物を含む。
- 3. にふい黄褐色土 粘土。固くしまっている。焼成を受けている。
- 4. 褐色土 黒褐色土を含む。
- 5. 黒褐色土 しまりなし。微細な炭化物を含む。
(土器の内部の土は5層と同じ)



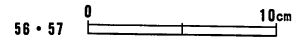
第30図 VD2c住居跡



56

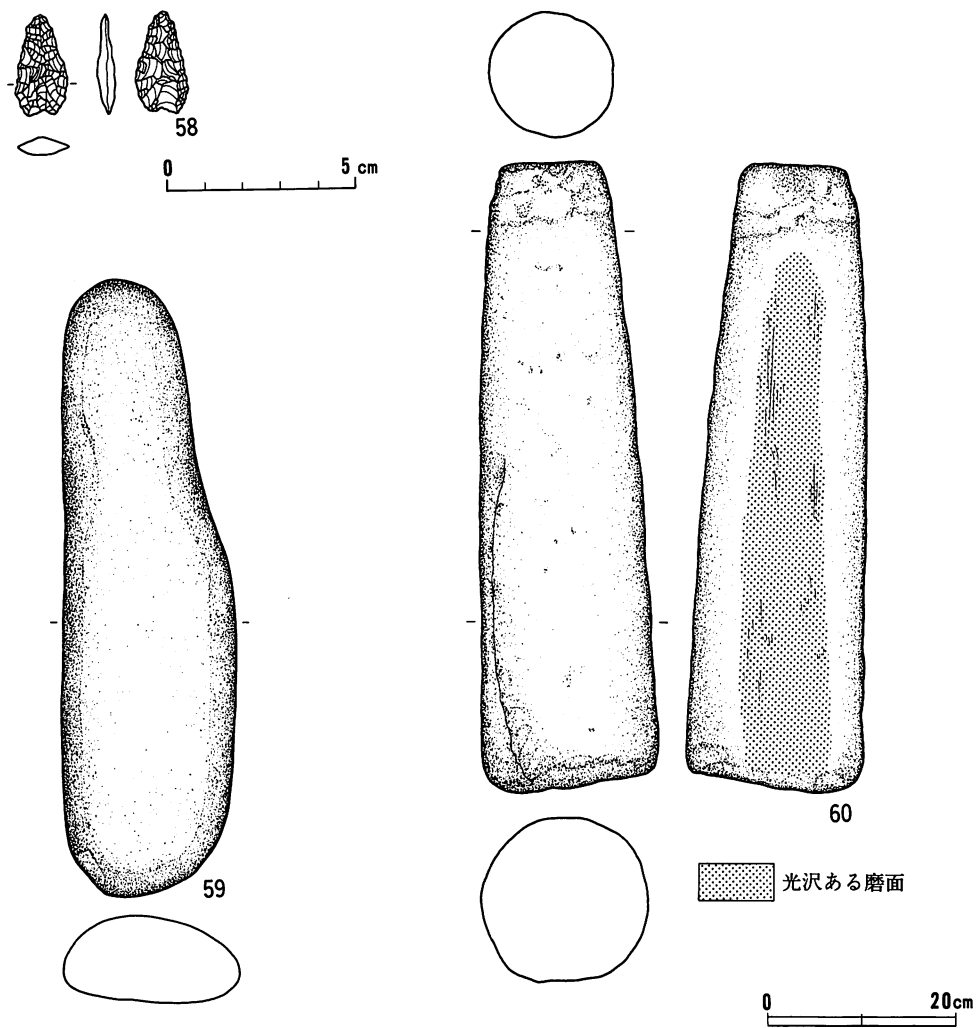


57



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
56	VD 2 c 住	炉	沈線(凹線)、磨消縄文、J字文、波頭文	L R L 横	-	-	(19.0)		Ⅲ 3 a	137
57	VD 2 c 住	埋土中位	沈線区画と磨消によるJ字文。竹管刺突	L R 燃糸文	21.9	-	(25.6)		Ⅲ 3 a i	137

第31図 VD 2 c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
58	VD 2 c 住	Q 3 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.7	1.4	0.5	1.27		II b 3	138
59	VD 2 c 住	床面	石棒	凝灰質硬砂岩	北上山地	32.3	9.3	4.7	2180			138
60	VD 2 c 住	床面	石棒	デイサイト	奥羽山地	33.5	9.3	8.6	3900	頭部を僅かに作り出す。帯状にやや光沢があり。		138

第32図 VD 2 c 住居跡出土遺物(2)

や光沢がある。

時期 床面出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

V D 2 d 住居跡（遺構番号 7）

遺構（第33図、写真図版13）

〈検出状況〉V D 2 c 住居跡の南 1 m に位置し、縄文時代中期末に属する他の 5 棟のように位置関係の上で規則性は見出せない。基盤層まで下げた試掘トレンチで落ち込みとみられる暗褐色のラインが検出され、住居の北壁と想定して精査に入った。しかし、斜面下方では全体が暗褐色土で壁は確認されず全容は明らかでない。だが、床面の一部と考えられる平坦な部分があること、その一部に埋設土器が検出されたことから、住居跡として認定した。

〈形状・規模〉斜面上方にあたる北壁のみ残存し、形状、規模とも不明である。

〈壁・壁高〉基盤層で、壁高は 17cm である。

〈埋土〉締まりを欠く暗褐色土を主体とする。壁際には崩落土を含み、一部攪乱がある。

〈床・柱穴・施設〉平坦な部分は固く締まっている。柱穴は検出されない。

〈埋設土器〉ほぼ同一地点で 2 個体が検出された。一方は明瞭な掘り方をもつ。

遺物（第33図、写真図版138）

〈土器〉61 と 62 は隣接して埋設された土器である。61 は 2 段の縄の撚糸による充填文であり、無文帯は丁寧なナデによって調整される。62 は胴下半部で地文のみである。64 は凹線で口縁部無文帯と区画される。65 は胴部に展開する曲線的無文帯が口縁部と接する位置に刺突が施される。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

VI C 2 g 住居跡（遺構番号 8）

遺構（第34図、写真図版14図）

〈検出状況〉A 区東斜面は II 層を欠き、I 層が厚く堆積しているが、その下の暗褐色土を掘り込んでいる。本住居の床面下から VI C 2 g - 2 住居跡が検出された。

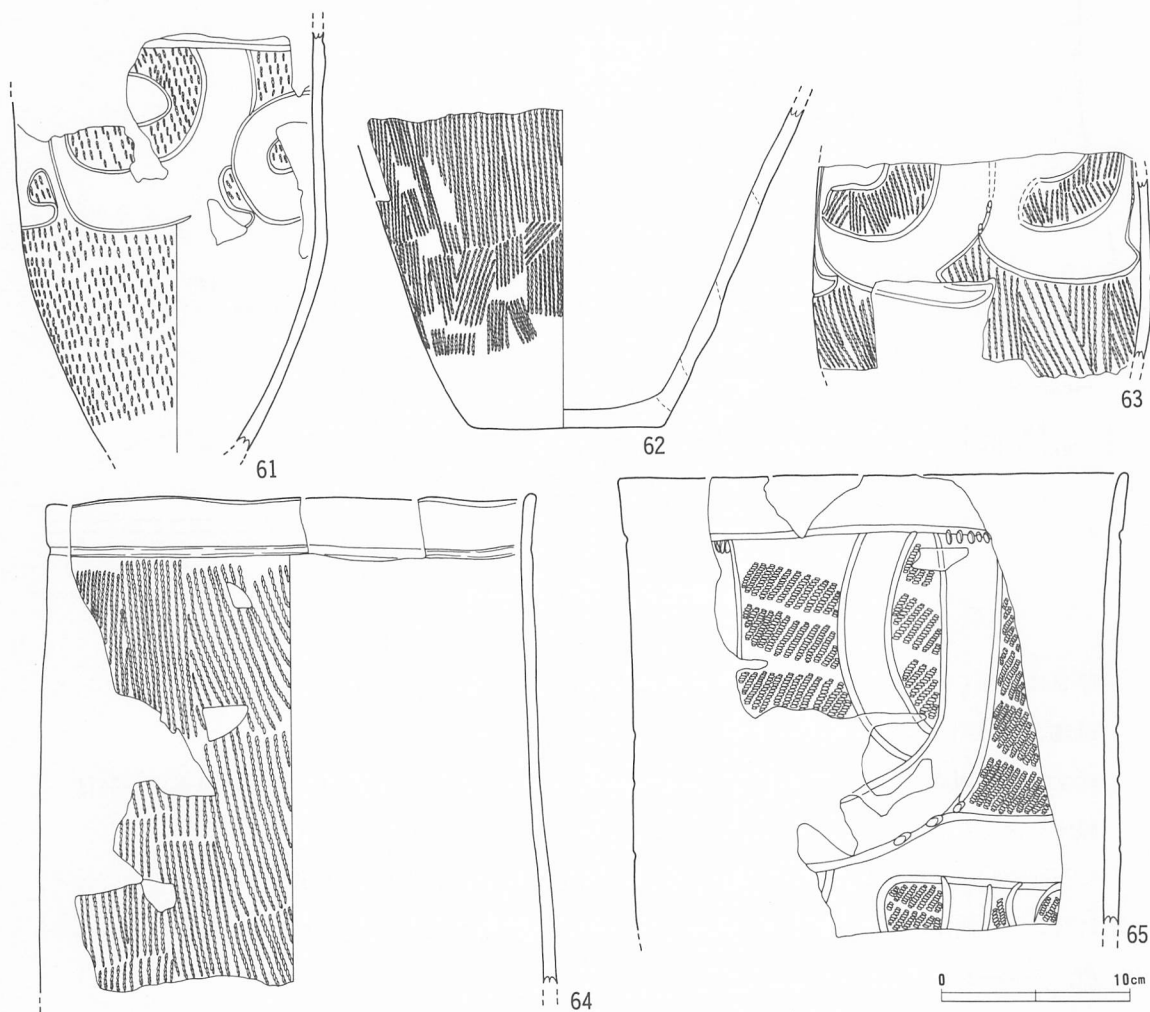
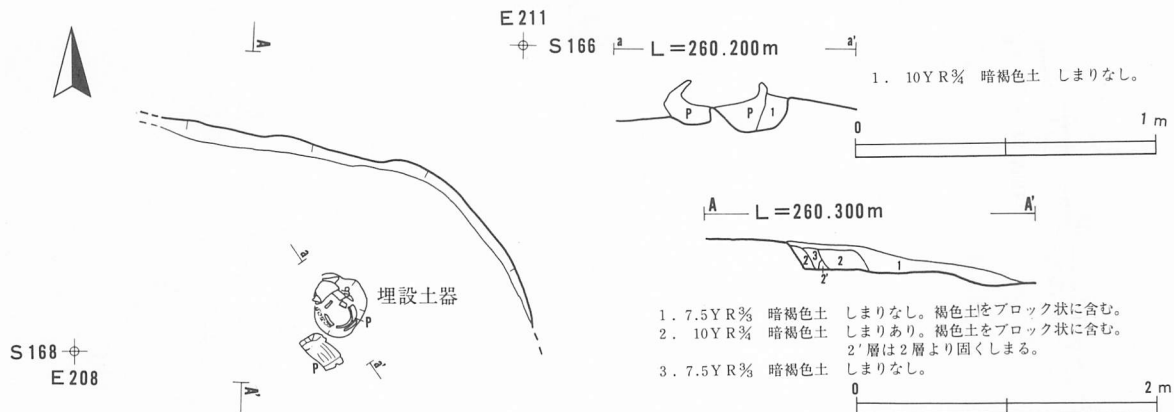
〈形状・規模〉南壁は斜面下位で流失しているが、平面形は長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とすると考えられる。長軸は推定値で 2 m、短軸は 1.4 m である。

〈壁・壁高〉やや軟質の褐色土で、ほぼ直立している。壁高は北で 13cm、西で 17cm、東で 5 cm を測る。

〈埋土〉黒褐色土と褐色土で構成される。黒褐色土には褐色土がブロック状に混入するが、軟らかく粉炭を少量含む。暗褐色土はさらに締まりがない。

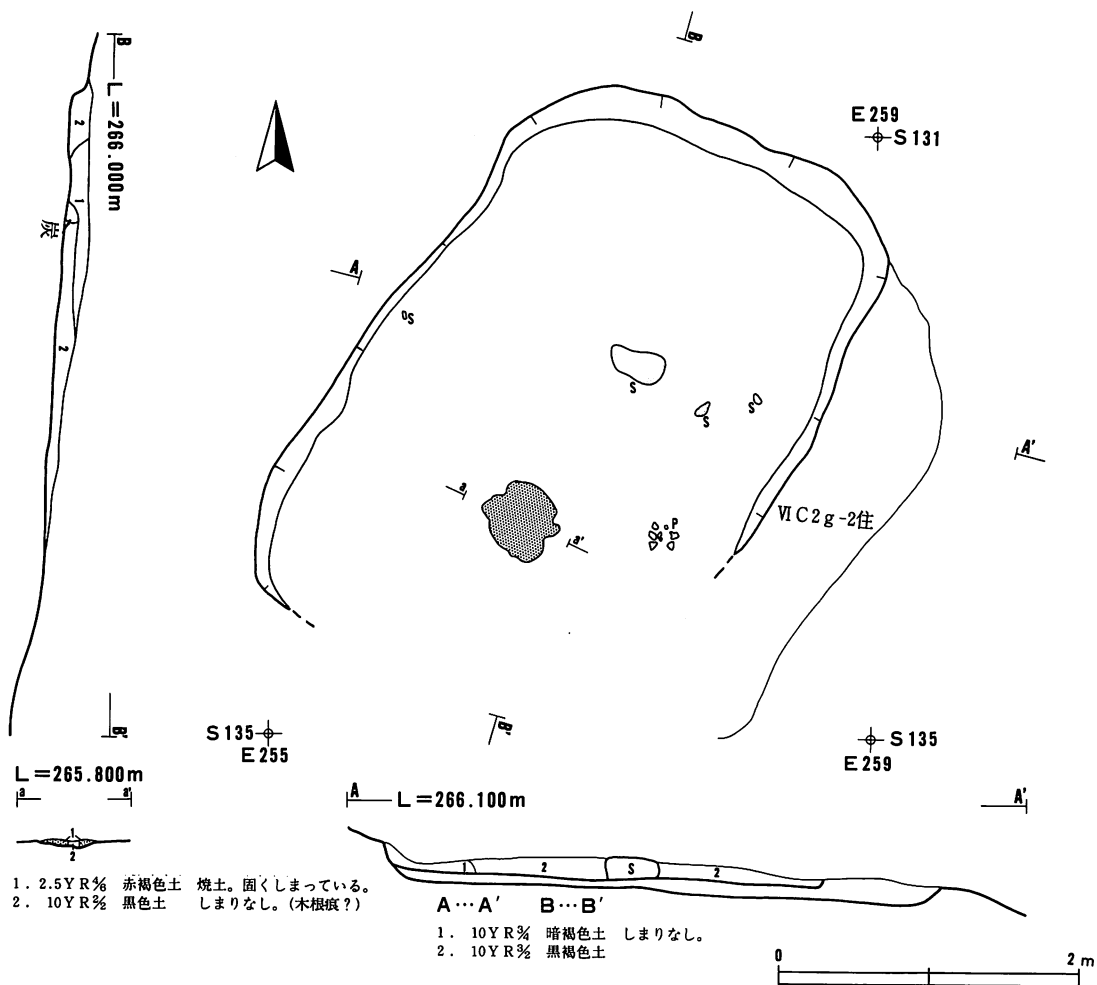
〈床・柱穴・施設〉暗褐色土と褐色土の混土で、やや軟質である。貼床と考えられる。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸の南側に偏った位置に、地床炉 1 基が検出された。焼土は 45×50cm の範囲に分布し、



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
61	VD 2 d 住	床面	沈線(凹線)、磨消縄文、J字文。	L R 撚糸文	-	-	(22.4)		III 3 a 7	138
62	VD 2 d 住	埋設土器		L 撚糸文	-	10.1	(17.0)		III 3 b	138
63	VD 2 d 住	床面	沈線(凹線)、磨消縄文。	L 撚糸文	-	-	(12.0)		III 3 a i	138
64	VD 2 d 住	床面	沈線(凹線)、磨消縄文。	L R 撚糸文	(26.0)	-	(26.3)		III 3 b	138
65	VD 2 d 住	埋土	沈線(凹線)、磨消縄文、棒状工具による刺突。	R L 縦	(27.2)	-	(24.1)		III 3 a i	138

第33図 VD 2 d 住居跡・出土遺物



第34図 VI C 2 g 住居跡

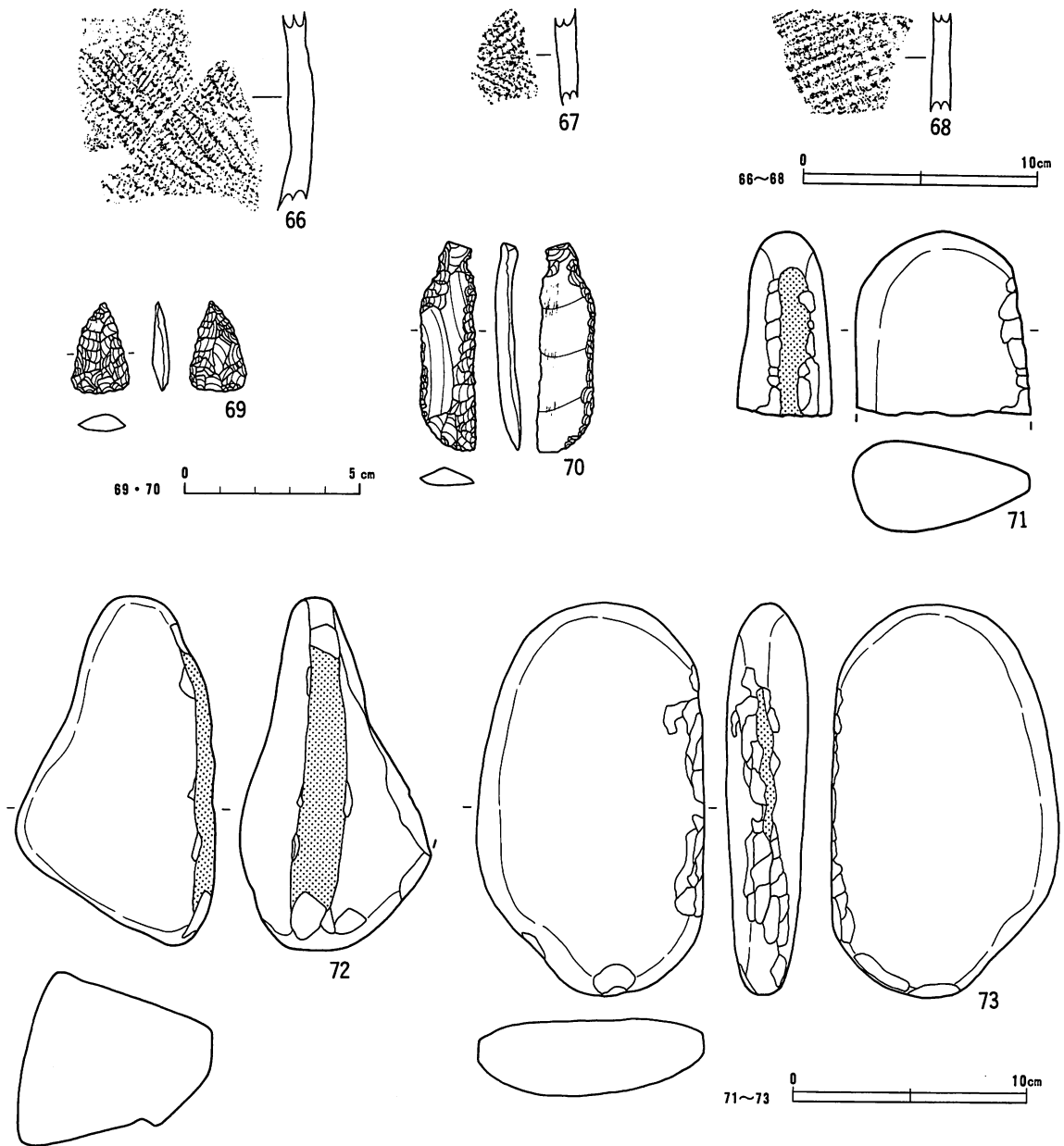
厚さは6cmで固く締まっている。中央部は木根により、攪乱を受けている。

遺物 (第35図、写真図版138・139)

<土器>床面直上から、破片が205g出土した。67・68のように繊維を含むものが多い。66は繊維を含まない。

<石器>69は石鏃であるがやや対称性を欠く。70は右側縁は片面から丁寧な加工が施されるのに対し、左側縁は小剥離が表裏に連続している。打面調整剥離の技法であろう。他にUフレ2点、フレーク1点出土した。

時期 破片のみの出土であるが床面出土土器から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると思われる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
66	VI C 2 g 住	床直上		L R 横 (0 段多条)。					II 2	138
67	VI C 2 g 住	床直上		L R の回転方向を変えた羽状縄文。				繊維混入。	II 1 c 7	138
68	VI C 2 g 住	床直上		L R 横。				繊維混入。	II 1 b	138

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
69	VI C 2 g 住	床面	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	2.6	1.7	0.5	1.64		I 2	138
70	VI C 2 g 住	床面	石匙	硬質泥岩	雫石西部	6.0	1.6	0.8	16.07		I b 2	138
71	VI C 2 g 住	床面	敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.8)	7.4	3.8	(325)		I a 1	138
72	VI C 2 g 住	床面	敲磨器類 A 群	緑色凝灰岩	北上山地	(15.1)	(7.8)	(7.9)	(1050)		I a 1	139
73	VI C 2 g 住	床面	敲磨器類 A 群	凝灰岩	北上山地	16.8	9.7	3.2	820		III b 2	139

第35図 VI C 2 g 住居跡出土遺物

VI C 2 g - 2 住居跡 (遺構番号 9)

遺構 (第36図)

〈検出状況〉VI C 2 g 住居跡の床面の下から現地性の焼土を検出し、先行する住居として確認された。本住居はVI C 2 g 住居跡より東壁が³30cm程東に広がる。

〈形状・規模〉南壁は斜面下位で流失しているが³、平面形は長軸が等高線に平行する長方形を基調とし、長軸は推定値で4.8m、短軸は3.4mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土を壁とし、壁高は斜面上位である西壁で26cm、北で13cm、東で19cmを測る。

〈埋土〉暗褐色土の単層である。VI C 2 g 住居跡の貼り床と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、固く締まっている。ややうねりがあり斜面に沿って幾分傾斜する。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸線上に2基の地床炉を検出した。この2つの炉は同一のレベルにあり同時に使用されたものと考えられる。南側のものを1号炉、北側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は45×65cmの範囲に分布し、厚さは最大8cmである。木根により攪乱を受けている。2号炉の焼土は78×85cmの範囲に分布し、厚さは最大10cmである。

遺物

〈石器〉床面から花崗岩質の円形の磨石が³1点出土したが³、極めて脆く崩壊してしまい凶化できなかった。

時期 重複関係・住居形態等から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると推定される。

VI C 3 h 住 (遺構番号10)

遺構 (第37図、写真図版15)

〈検出状況〉A区の東斜面に位置する。V層上面で検出した。

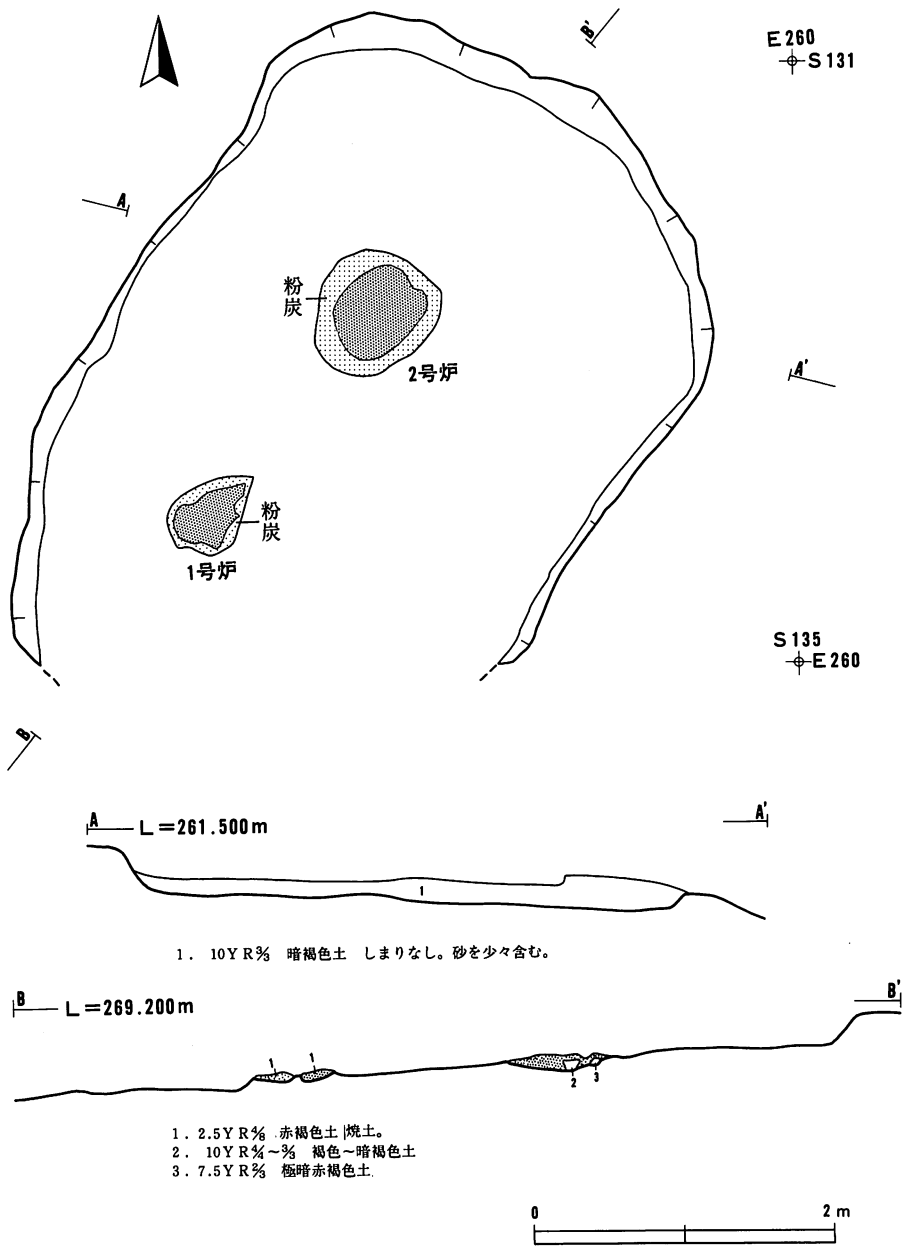
〈形状・規模〉東側は斜面下方で流失しているため不明であるが³、平面形は長軸が等高線に平行する楕円形と推定される。規模は長軸が³3.25m、短軸が推定で1.8mである。

〈壁・壁高〉やや軟質な暗褐色 m 褐色土を壁とし、やや外傾する。壁高は斜面上方の西で10cm、北で15cmを測る。東と南は流失により不明である。

〈埋土〉黒色～黒褐色土を主体とし、粉炭を含む。軟らかく締まりがない。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿ってやや傾斜する。全体的に軟質である。柱穴は検出されない。

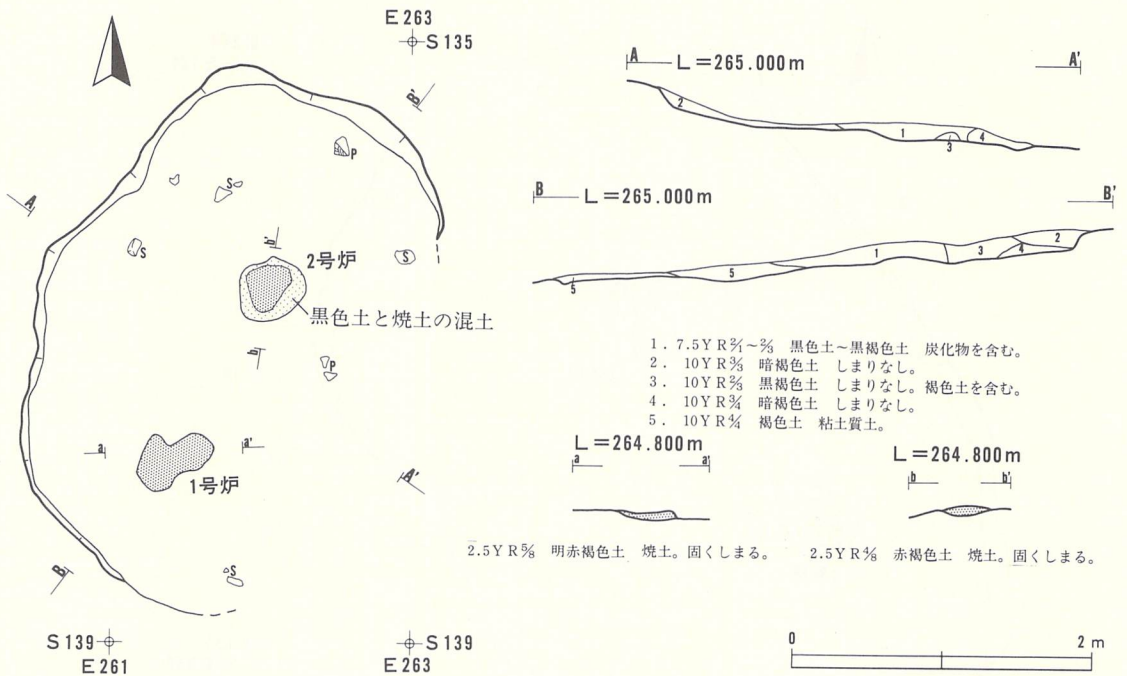
〈炉〉長軸線上に2基の地床炉を検出した。2基とも同レベルにあり、同時に使用されたものと考えられる。南側のものを1号炉、北側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は37×54cmの範囲に分布し厚さは最大6cm、2号炉の焼土は43×45cmのほぼ円形を呈し厚さは最大で7cmで



1. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。砂を少々含む。

- 1. 2.5YR% 赤褐色土 焼土。
- 2. 10YR%~% 褐色~暗褐色土
- 3. 7.5YR% 極暗赤褐色土。

第36図 VIC 2 g-2住居跡



第37図 VI C 3 h 住居跡

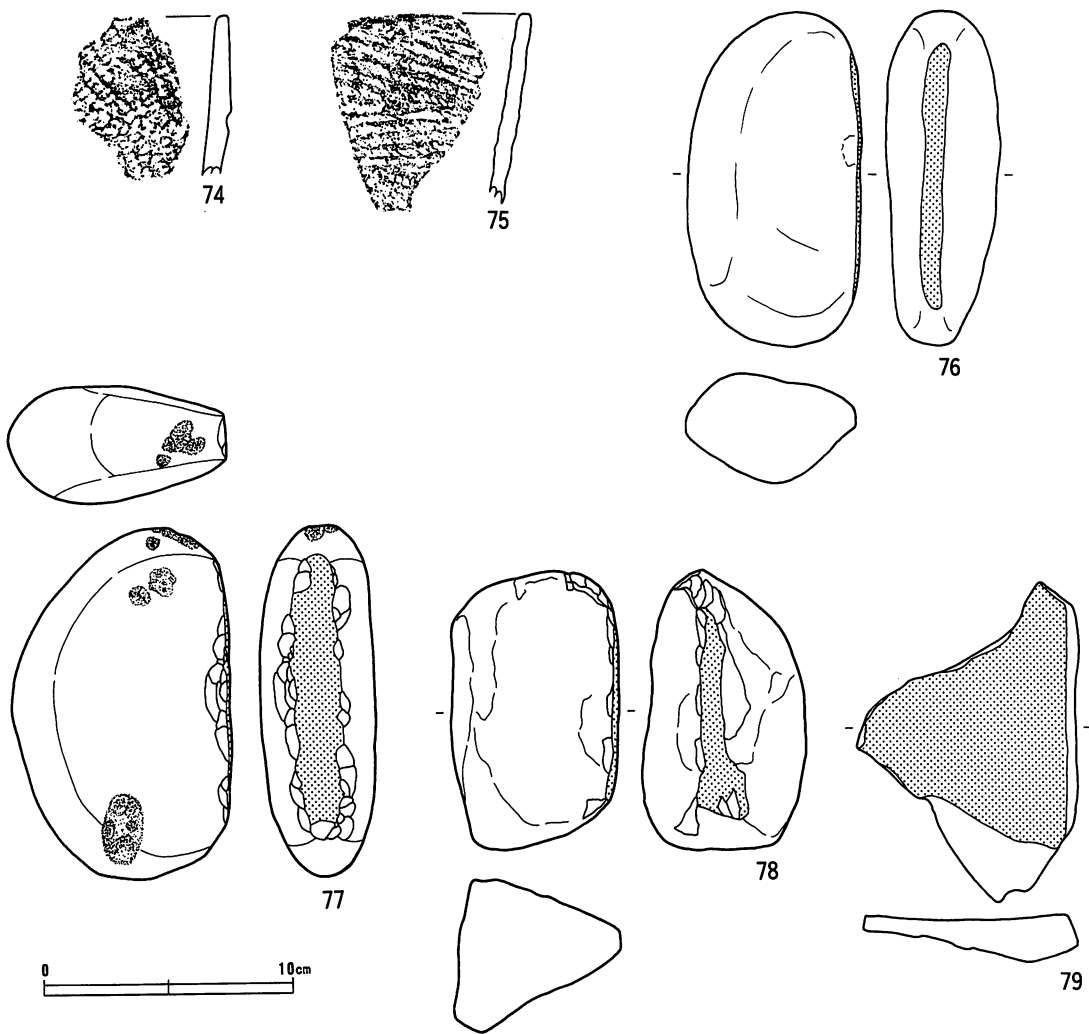
ある。いずれも固く締まっている。

遺物 (第38図、写真図版139)

〈土器〉床面から破片のみ 425 g 出土した。いずれも繊維を僅かに含む。74は破片中央部にループ文が横走している。75は撚糸文がやや方向を変えて施文されている。

〈石器〉79は扁平な自然石の一面を平滑になるまで使用したものであるが、擦った方向までは観察できない。

時期 破片のみの資料であるが出土土器から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
74	VIC 3 h 住	床面		R L 横。				繊維を僅かに含む。	II 2 b	139
75	VIC 3 h 住	床面		R 燃糸文、横回転。				繊維を僅かに含む。焼成良好。	II 2 c	139

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
76	VIC 3 h 住	床面	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	13.2	6.8	6.7	555	剝離無し。	II a 1	139
77	VIC 3 h 住	床面	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	14.1	8.6	4.5	890	凹石と複合。	I a 1	139
78	VIC 3 h 住	床面	敲磨器類 A 群	チャート	北上山地	11.1	6.6	6.4	600		I a 1	139
79	VIC 3 h 住	床面	砥石	凝灰質硬砂岩	北上山地	(12.6)	(8.8)	(2.2)	(180)	砂質の礫の一面が、平滑になるまで使用されている。		139

第38図 VIC 3 h 住居跡出土遺物

VI C 0 g 住居跡 (遺構番号11)

遺構 (第39図、写真図版16)

〈検出状況〉西尾根の麓の埋没谷の際に位置する。厚く堆積した暗褐色土層が消滅して黒褐色土に変わる地点であり、土層の様相は一定でなく、平面プランとしては検出できなかった。地床炉と思われる現地性焼土を検出した後に北壁と西壁を確認した。

〈形状・規模〉東側は掘り過ぎにより不明であるが、北壁と西壁のラインおよび東側の斜面の状況から長軸が等高線に平行する長方形基調のプランを推定できる。規模は不明であるが、周囲の地形を考えると1.2×2.7m程度になるのではないかと考えられる。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層を壁とし、やや外傾する。壁土は締まりを欠く。壁高は西で17cm、北で15cmを測る。

〈埋土〉暗褐色土に黒褐色土をブロック状に含む。暗褐色土層を起源とするものと考えられる。締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、埋土よりは締まるものの軟質である。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されない。

〈炉〉長軸線上の南壁寄りに位置する地床炉1基を検出した。焼土は72×77cmの楕円形状に分布し、厚さは最大9cmである。南側に細かい炭化物がみられる。

遺物 (第39図、写真図版139・140)

〈土器〉80は北壁寄りの埋土下位で一括出土したものである。縄端を片結びした2段の縄を縦回転させたもので、口唇部にはその一部分に指頭状の圧痕が施される。他の例では数個連続する場合が多いが、欠損して不明である。

〈石器〉石錘1点のみの出土である。

時期 出土土器から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

VI D 5 f 住居跡 (遺構番号12)

遺構 (第40図、写真図版17)

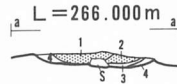
〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。暗褐色土上面で黒色の落ち込みとして検出した。北壁は倒木痕により攪乱を受けている。

〈形状・規模〉等高線にほぼ平行し、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は、長軸4.9m、短軸2.6mである。

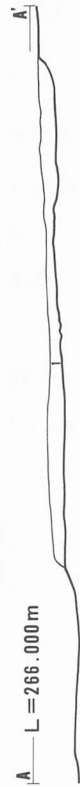
〈壁・壁高〉暗褐色土と黄褐色の混土層を壁とし、ほぼ直立する。壁土は固いものではない。壁高は東壁14cm、西壁20cm、南壁7cm、北壁23cmである。

〈埋土〉上位は黒色土、下位は黒褐色土を主体とし、崩落土である褐色土を幾分混入する。と

E 297
S 132

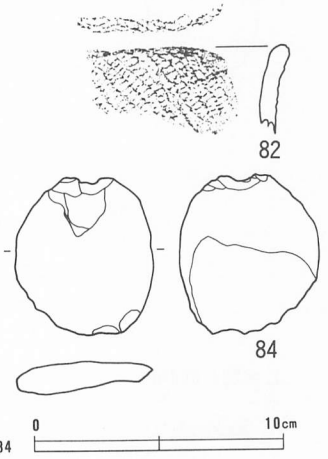
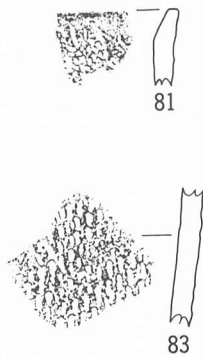
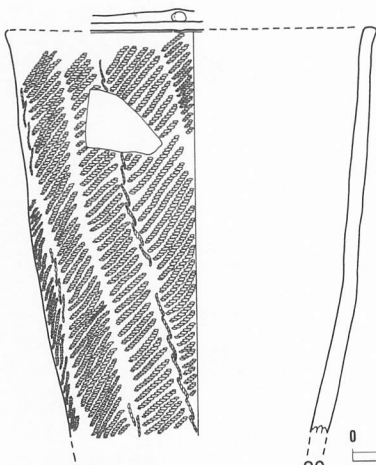


1. 5Y R% 暗赤褐色土 しまりなし。炭化物を斑状に含む。
2. 5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。
3. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。焼土粒を含む。
4. 5Y R% 黒褐色土 しまりあり。焼土粒、炭化物を含む。



1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。黒褐色土をアブロック状に含む。

S 137
E 297



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
80	VIC 0 g 住	埋土下位	RL縦回転、口唇部文様あり。		(19.7)	-	(20.7)		II 6 b 才	139
81	VIC 0 g 住	埋土下位		縦位綾絡文。					II 6	140
82	VIC 0 g 住	埋土下位	口唇部にも原体圧痕又は絡条体回転。地文と異なる原体。	RL横。					II 6	140
83	VIC 0 g 住	埋土下位		多軸絡条体。					II 6	140

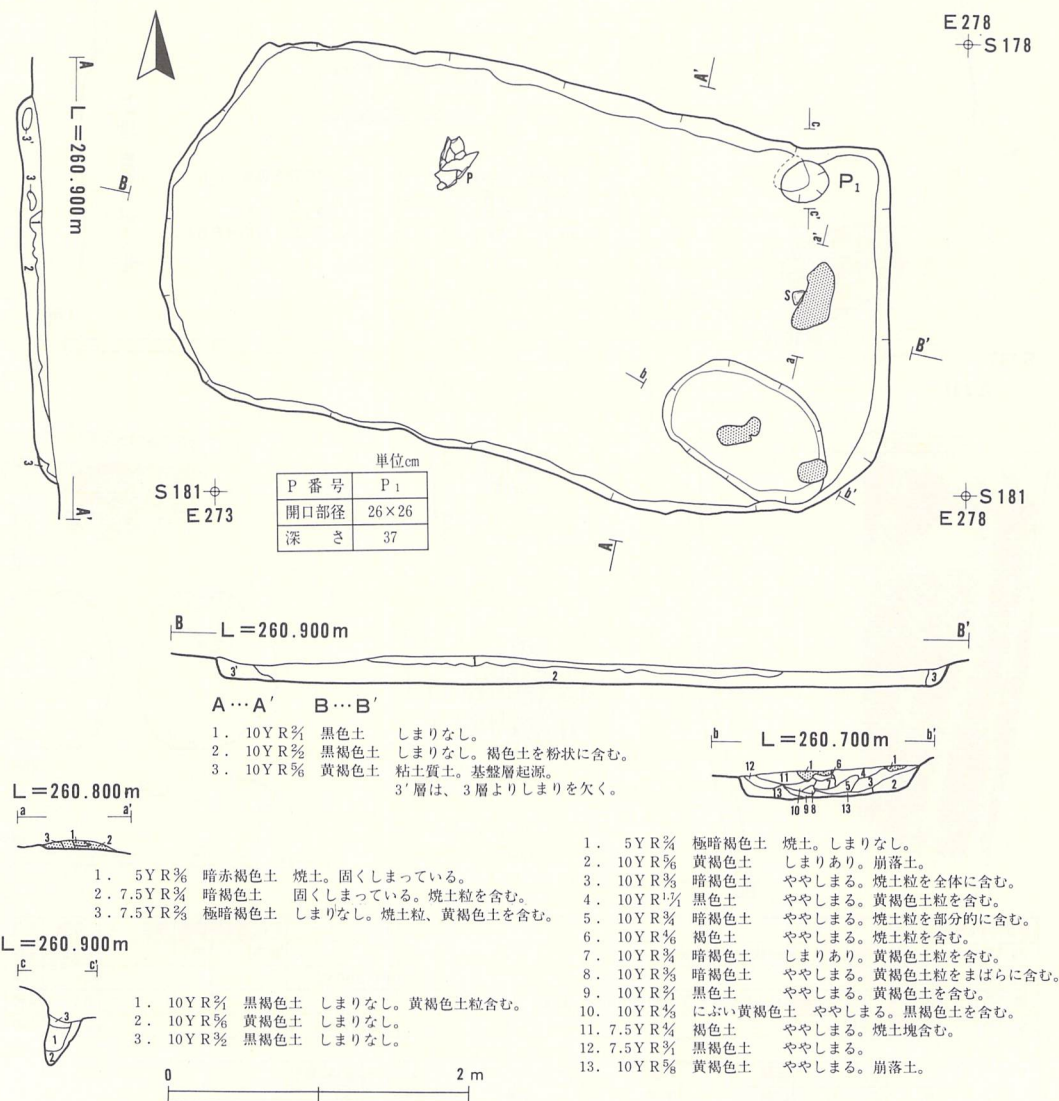
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
84	VIC 0 g 住	埋土下位	石錘	凝灰岩	北上山地	6.3	5.5	1.2	50		I	140

第39図 VIC 0 g 住居跡・出土遺物

もに締まりを欠く。自然堆積と思われる。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土と黄褐色の混土層で、あまり凹凸がなくほぼ平坦である。柱穴は北東隅に1個検出された。規模は開口部径26cm、深さ37cmで東壁方向に斜めに傾く。南東隅に土坑が1基検出された。規模は開口部72×117cm、深さ16cmで埋土上位に焼土を混入する。本住居に先行する遺構である可能性もある。床面精査時に2箇所焼土を検出した。そのうちのひとつは土坑の真上に当たるが、非常に淡いものである。

〈炉〉長軸線上の東壁寄りに検出した。床面よりやや高い位置にあるが、レンズ状に焼成を受けて固く締まっており、地床炉と考えられる。焼土は20×46cmの楕円形状に分布し厚さは最大



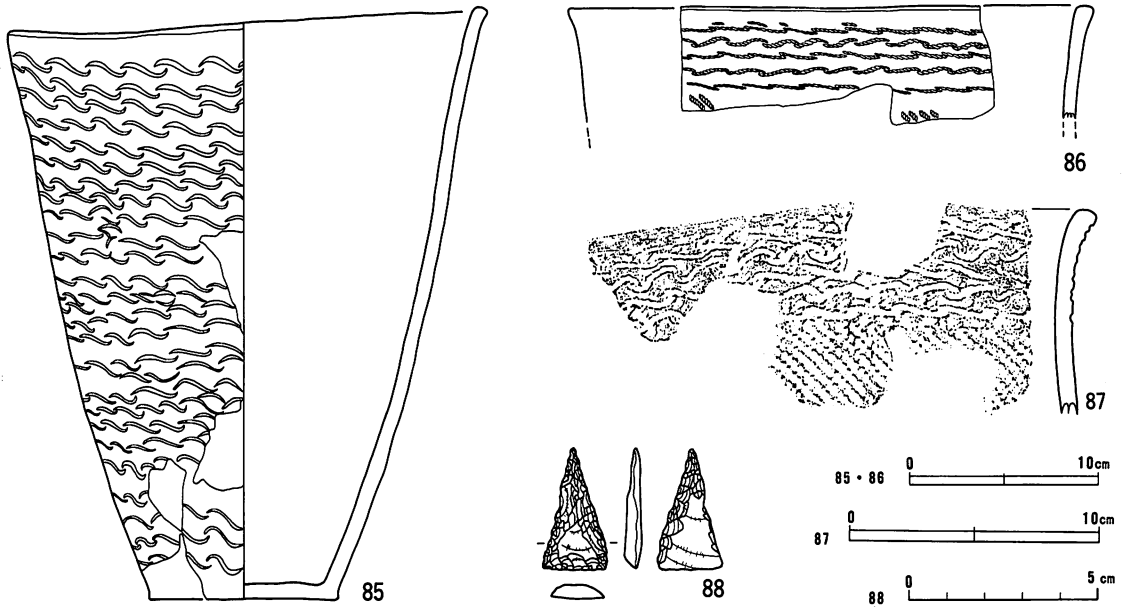
5 cmである。

遺物 (第41図、写真図版140)

<土器>床面から 815 g、埋土から 399 g 出土した。85は北東方向の床面から一括出土したものである。胎土に繊維が混入され、全面にS字状連鎖沈文が施される。口唇部はほぼ平坦になでられる。86・87は口縁部には綾絡文が重畳するが、綾絡文の間にも斜縄文が観察される。胴部には一面に斜縄文が施される。86・87は繊維をふくんでいる。

<石器>88の1点のみ出土した。やや対称性を欠く石鏃である。

時期 出土土器から、縄文時代前期中葉に属するものと考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
85	VID 5 f 住	床面		S字状連鎖沈文。	25.5	(10.0)	31.6		II 4	140
86	VID 5 f 住	埋土	重畳する横位綾絡文。	R L横。	(28.0)	-	(6.1)	繊維混入。	II 3 a	140
87	VID 5 f 住	埋土	重畳する横位綾絡文。	R L横。					II 3 a	140

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
88	VID 5 f 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.2	1.7	0.35	1.38		I 4	140

第41図 VID 5 f 住居跡出土遺物

VI D 7 g 住居跡 (遺構番号13)

遺構 (第42図、写真図版18)

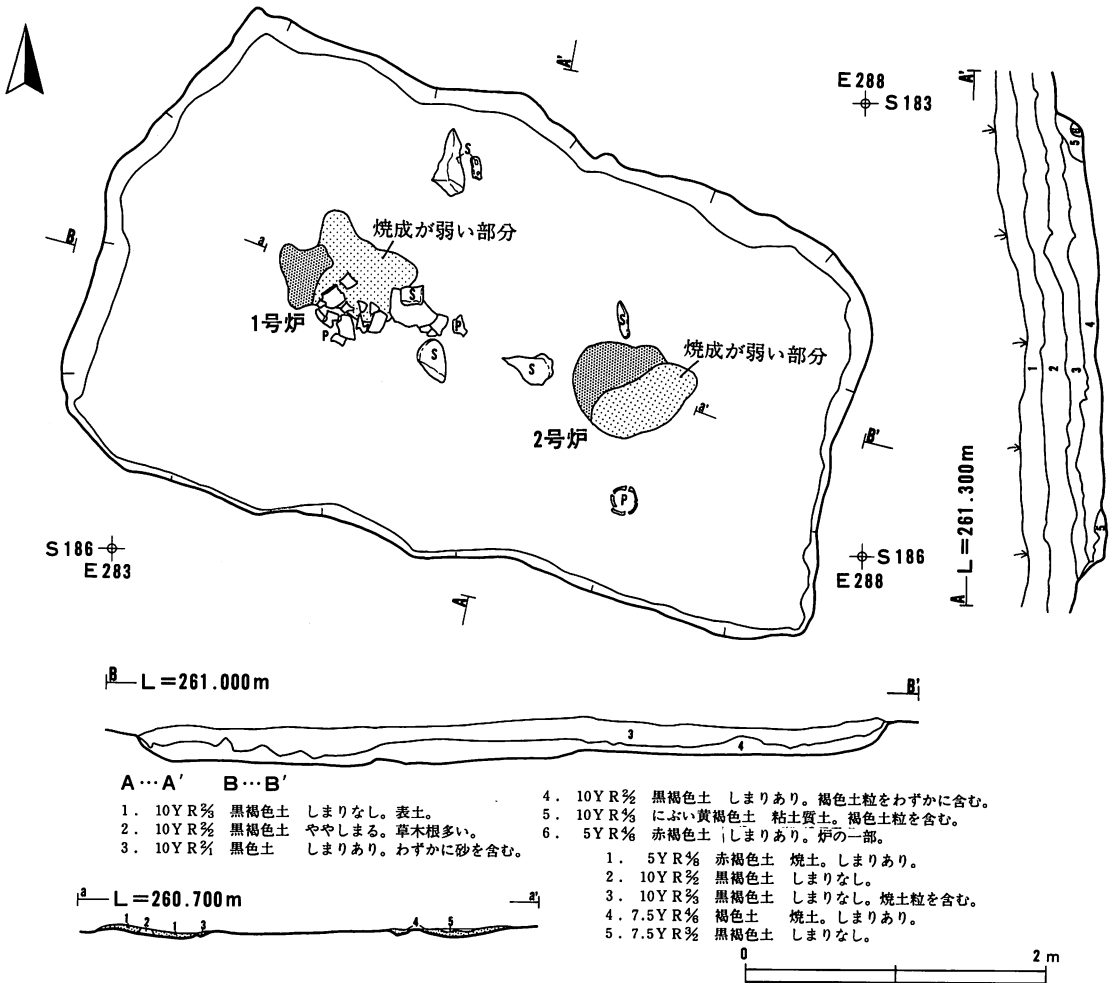
<検出状況>西尾根の南麓に位置する。暗褐色土上面で黒色の落ち込みとして検出した。

<形状・規模>ほぼ等高線に平行し、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は、長軸5.1m、短軸3.1mである。

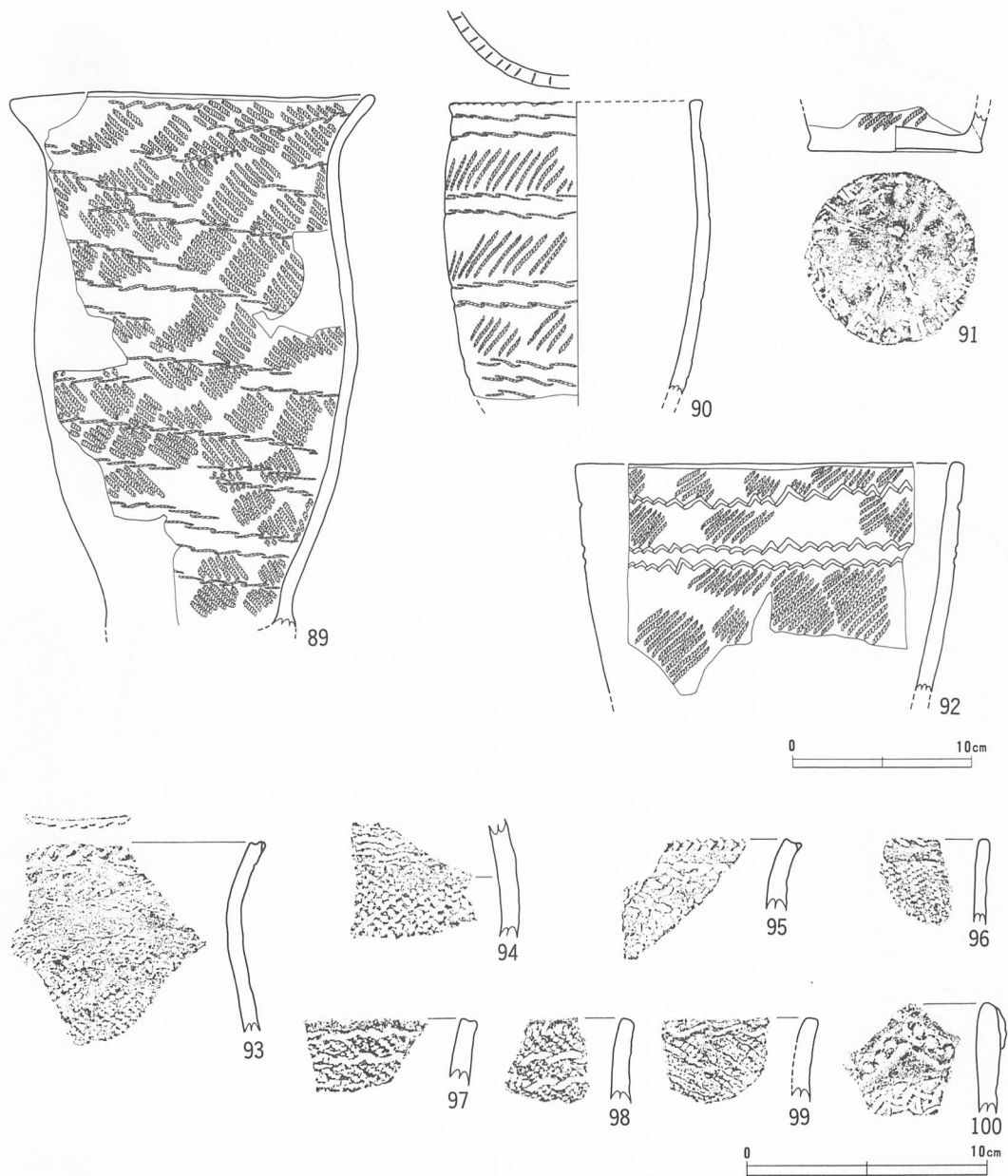
<壁・壁高>暗褐色土と黄褐色の混土層を壁とし、やや外傾する。壁土は固いものではない。壁高は東壁17cm、西壁15cm、南壁18cm、北壁28cmである。

<埋土>上位は黒色土、下位は黒褐色土を主体とし、崩落土である褐色土を幾分混入する。ともに締まりを欠く。自然堆積と思われる。

<床・柱穴・施設>暗褐色土と黄褐色の混土層で、やや軟質である。斜面に沿って南西方向に

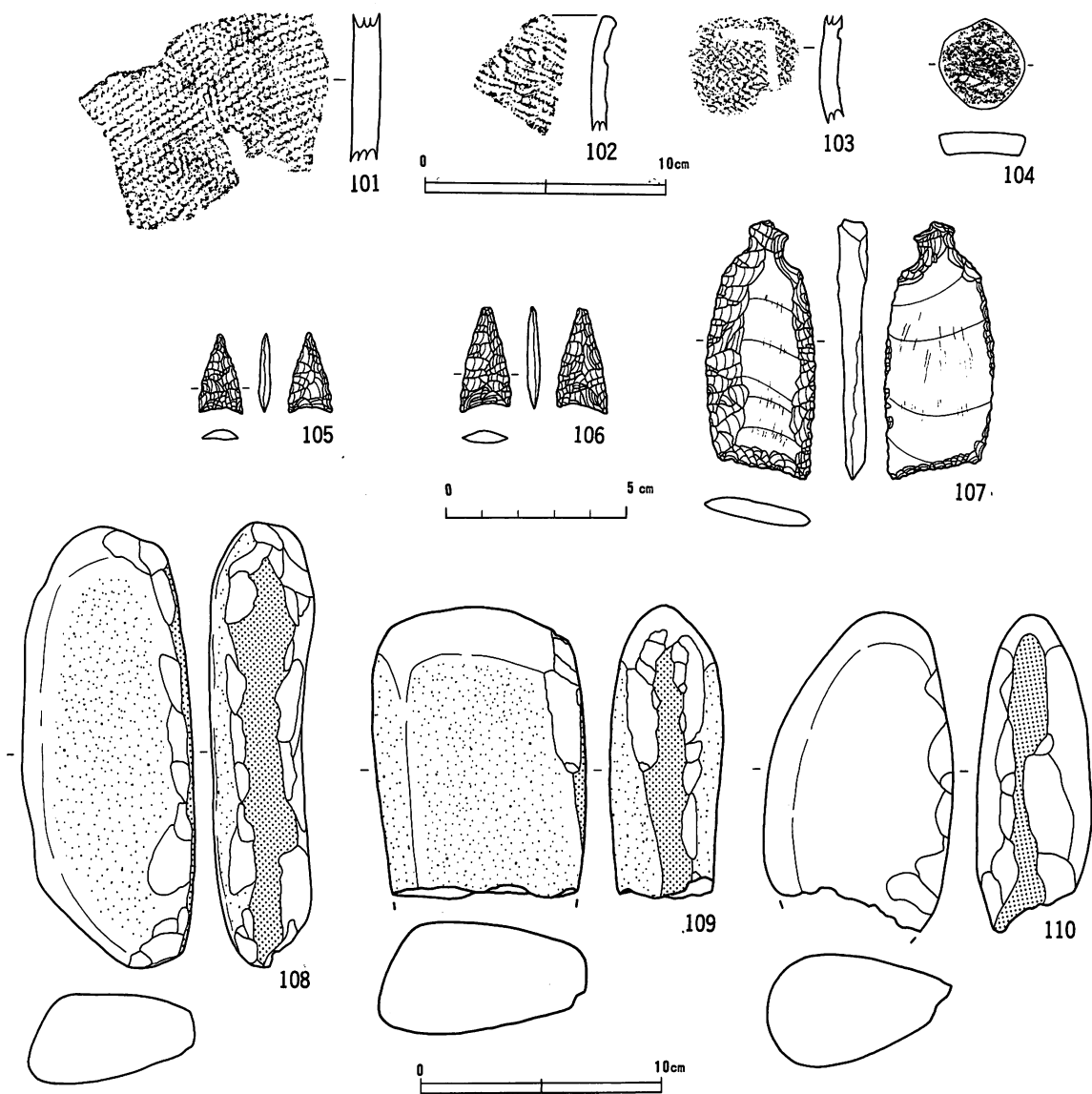


第42図 VI D 7 g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
89	VID 7 g 住	床面		R L横、横位綾絡文。	(20.4)	—	(29.6)		II	140
90	VID 7 g 住	Q 1 埋土	口唇部右方向からの爪形圧痕。	L R横、横位綾絡文。	(14.2)	—	(16.5)		II 6 b カ	140
91	VID 7 g 住	埋土	鋸歯状沈線。	L R横	—	9.8	(2.0)		II 5	140
92	VID 7 g 住	埋土	鋸歯状沈線。	L R横	(22.0)	—	(12.8)		II 5	140
93	VID 7 g 住	床面	口唇端棒状工具による刻み。S字状連鎖沈文。	組紐。					II 4	140
94	VID 7 g 住	埋土	横位綾絡文。	組紐。				繊維わずか混入。	II 3 a	141
95	VID 7 g 住	Q1、Q2埋土	口唇端刻み目。(筥状工具による、右側からの施文)	組紐。				繊維わずか混入。	II 2 a	141
96	VID 7 g 住	埋土	口唇端棒状工具による斜位刻み。	組紐?				繊維わずか混入。	II 2 a	141
97	VID 7 g 住	埋土		R L横、横位綾絡文。					II 3	141
98	VID 7 g 住	埋土		R L横、横位綾絡文。					II 3	141
99	VID 7 g 住	埋土		R L横、横位綾絡文。					II 2 b	141
100	VID 7 g 住	埋土	波状口縁、口縁直下隆帯上刻み(左側半截竹管?右側繩端?)、S字状連鎖沈文。						II 4	141

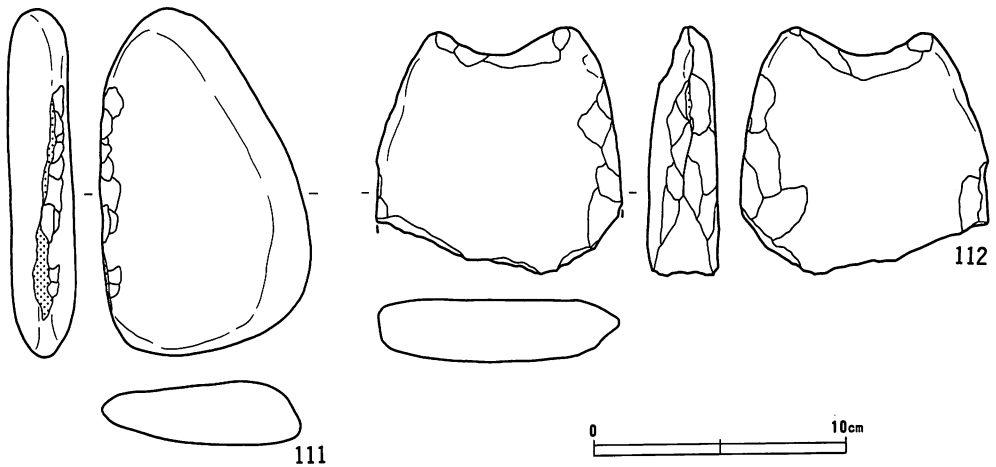
第43図 VID 7 g 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
101	VID 7 g 住	埋土		組縄縄文。				繊維混入。	II 1 a	141
102	VID 7 g 住	埋土		R L 0 段多条、又はRR。				繊維混入。	II 1 b	141
103	VID 7 g 住	埋土	沈線 (鋸齒状?)。	R L 横。					II 5	141
104	VID 7 g 住							繊維混入。		141

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
105	VID 7 g 住	Q 2 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.2	1.2	0.3	0.61		II b 2	141
106	VID 7 g 住	Q 2 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.4	0.3	1.16		II b 2	141
107	VID 7 g 住	Q 2 埋土	石匙	硬質泥岩	磐石西部	7.2	3.0	0.9	5.34		I b 2	141
108	VID 7 g 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	18.5	7.1	6.9	830	平滑面 1 面。	I a 1	141
109	VID 7 g 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(12.0)	8.9	4.1	(830)	平滑面 3 面。欠損品。	I a	141
110	VID 7 g 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(12.9)	7.8	4.5	(650)	欠損品。	I b	141

第44図 VID 7 g 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
111	VI D 7 g 住	埋土	敲磨器類 A 群	凝灰岩	北上山地	13.8	8.4	2.6	400		III b 1	142
112	VI D 7 g 住	床面	敲磨器類 A 群	凝灰岩	北上山地	(9.7)	(9.8)	(2.4)	(370)	挟り有り。	III c 2	142

第45図 VI D 7 g 住居跡出土遺物(3)

やや傾斜し、最大比高18cmである。

<炉>長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、50×85cmの不整形に分布し厚さは最大4cmである。2号炉の焼土は、65×85cmの楕円形状に分布し厚さは最大5cmである。いずれも固く締まっている。

遺物 (第43～45図、写真図版140～142)

<土器>床面から2023g、埋土から1482g出土した。89は、1号炉の上およびその周辺から出土したもので、横位の綾絡文が器面全体に施されるが、地文の斜縄文と連動しており原体は縄端を片結びしたものと考えられる。繊維は混入しない。90は斜縄文施文後に綾絡文を施したものと考えられる。口唇部は平坦になでられ、爪による刻み目が全周している。92は胎土に砂を多く含み、色調は黄褐色で、前述2点と異なり全体に脆い感じがする。縄文施文後に「八」を連続的に左から右へと施すが、始まりの部分が常にやや深く刻まれる。102にはループ状の圧痕が観察されるが、いわゆるループ文とは様相を異にする。

<石器>107は3辺に二次加工が施され、裏面にも一部細かい剝離が連続している。打面調整剝離によるものか。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期に属するものと考えられる。89の土器の時期の位置付けが不明であり、よって遺構の時期も詳細は明らかにできない。

VI D 8 e 住居跡 (遺構番号14)

遺構 (第46図、写真図版19)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。褐色土上面で黒褐色の落ち込みとして検出した。南側は一部木根により攪乱を受けている。

〈形状・規模〉等高線に直交し、南北方向に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は、長軸5m、短軸3.45mである。

〈壁・壁高〉基盤層である褐色土を壁とし、やや外傾する。壁土は固く締まっている。壁高は東壁27cm、西壁20cm、南壁6cm、北壁35cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、壁際に一部崩落土を含む。全体に粉炭を含み、締まっている。自然堆積と思われる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である褐色土を直接床とし、全体に平坦で固めである。斜面に沿って南側にやや傾斜する。

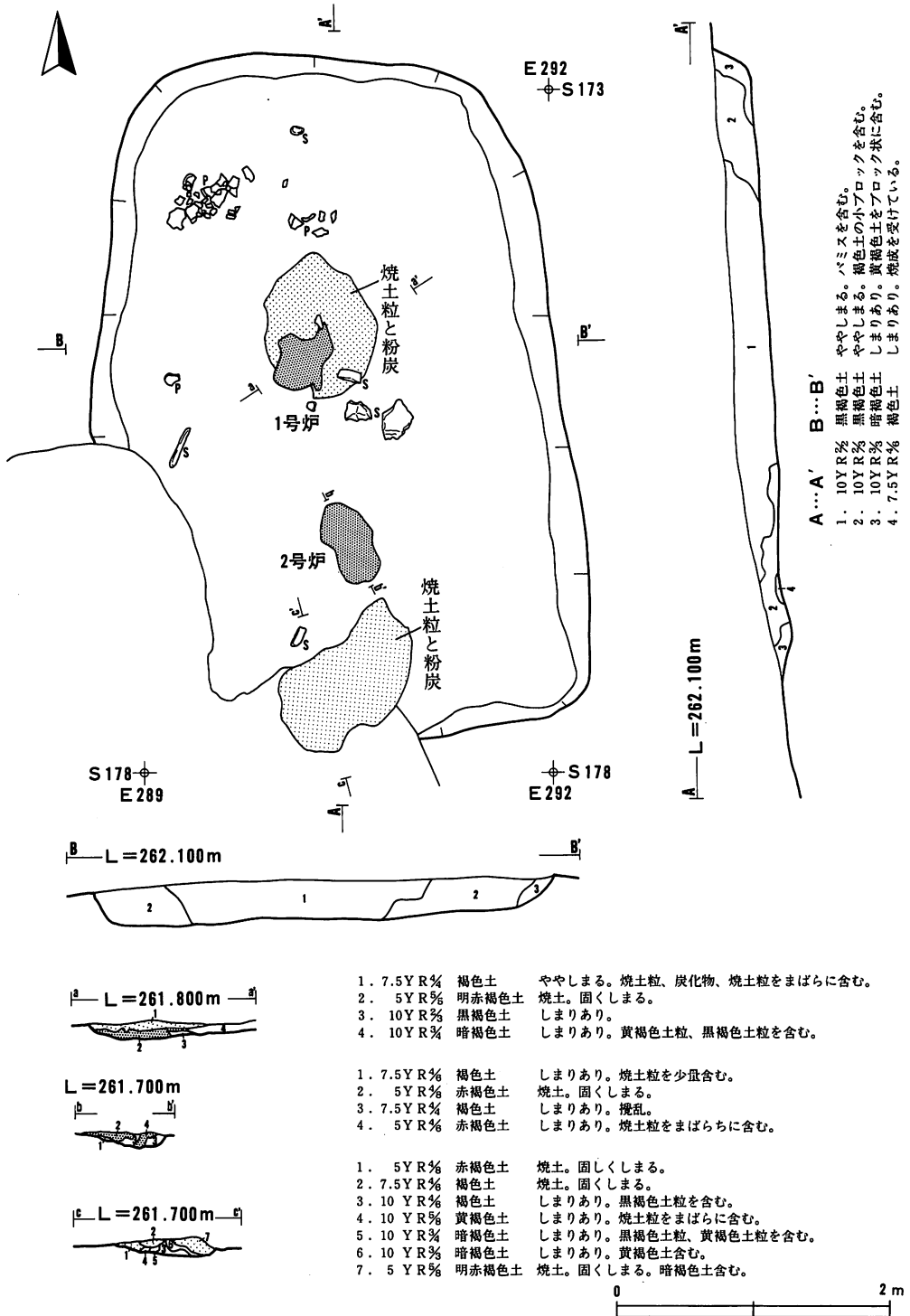
〈炉〉長軸線上に焼土を3基検出した。南端のものは、70×110cmの楕円形状に分布し厚さは最大10cmである。焼土の下に暗褐色土が入り込み全体に攪乱されている。他の2基は基盤層が焼成を受けてレンズ状に焼土が形成されており原位置を保っていると考えられる。よってこの2基を地床炉とした。北側のものを1号炉、南側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、85×95cmの楕円形状に分布し厚さは最大7cmである。2号炉の焼土は、30×95cmの楕円形状に分布し厚さは最大10cmである。南半の一部が攪乱を受けている。いずれも固く締まっている。

遺物 (第47～49図、写真図版142・143)

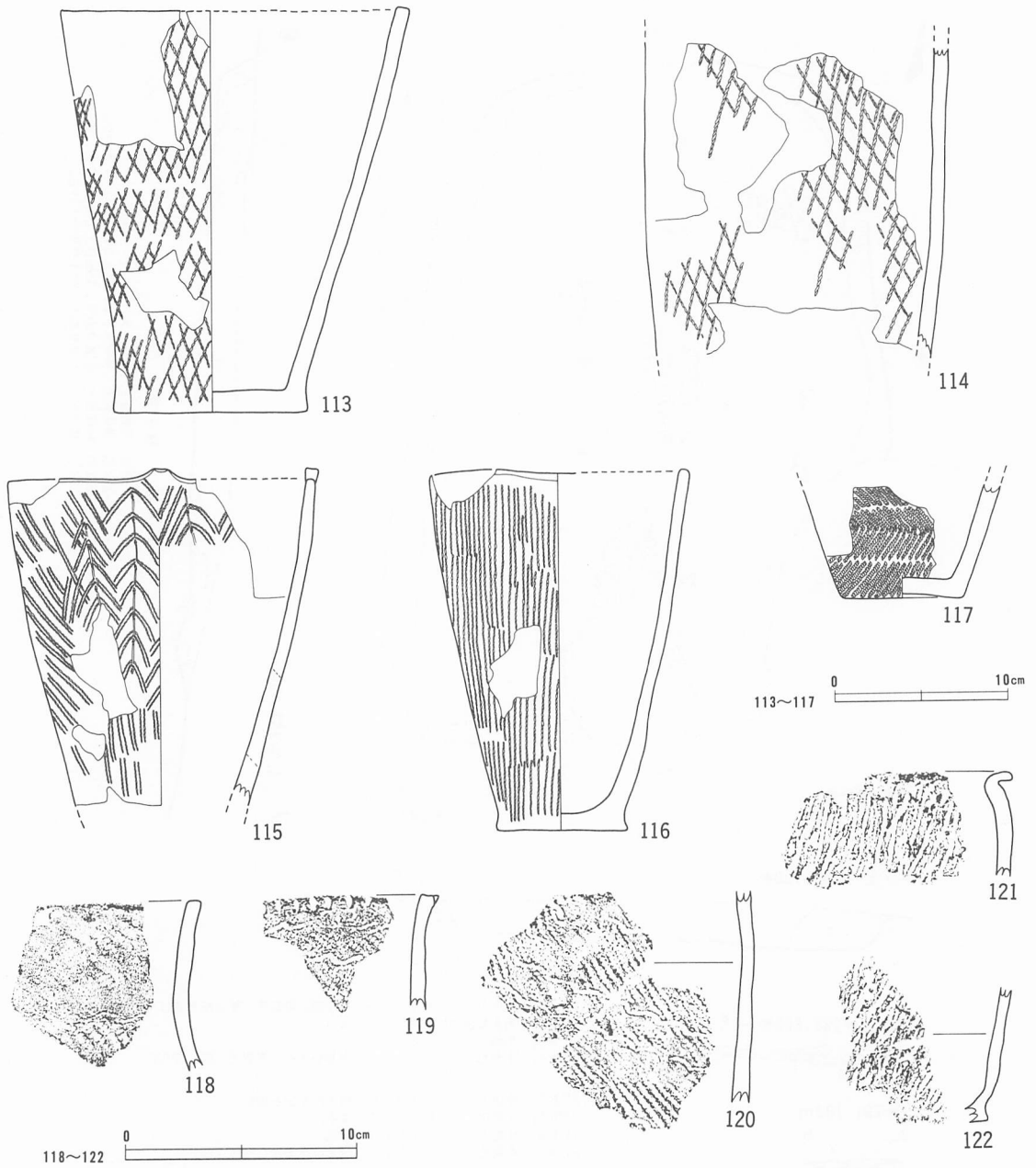
〈土器〉床面から2895g、埋土から4678gの土器が出土した。113は北西隅の床面から一括出土したものである。115には低平な山形突起がありその上面は僅かにくぼんでいる。突起は1個残存するのみであり、口縁形態の詳細は不明である。121と122は同一個体である。口縁部が大きく外反し、底部外面が外側に張り出す。胎土に粗砂を含み脆弱である。127～128は同一個体で、木目状撚糸文を地文とする弁状突起を有する。

〈石器・石製品〉130は片刃の石匙である。一次剥離のバルブを除去している。131は自然面を残すが、刃部は粗く整形後に小剥離が施される。133は、全周に二次加工が施されて急角度の刃部が形成される。134は敲打痕が観察されるが、凹みには至らない。137は西壁寄り床面から出土した石剣である。擦痕が著しい。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属するものと考えられる。

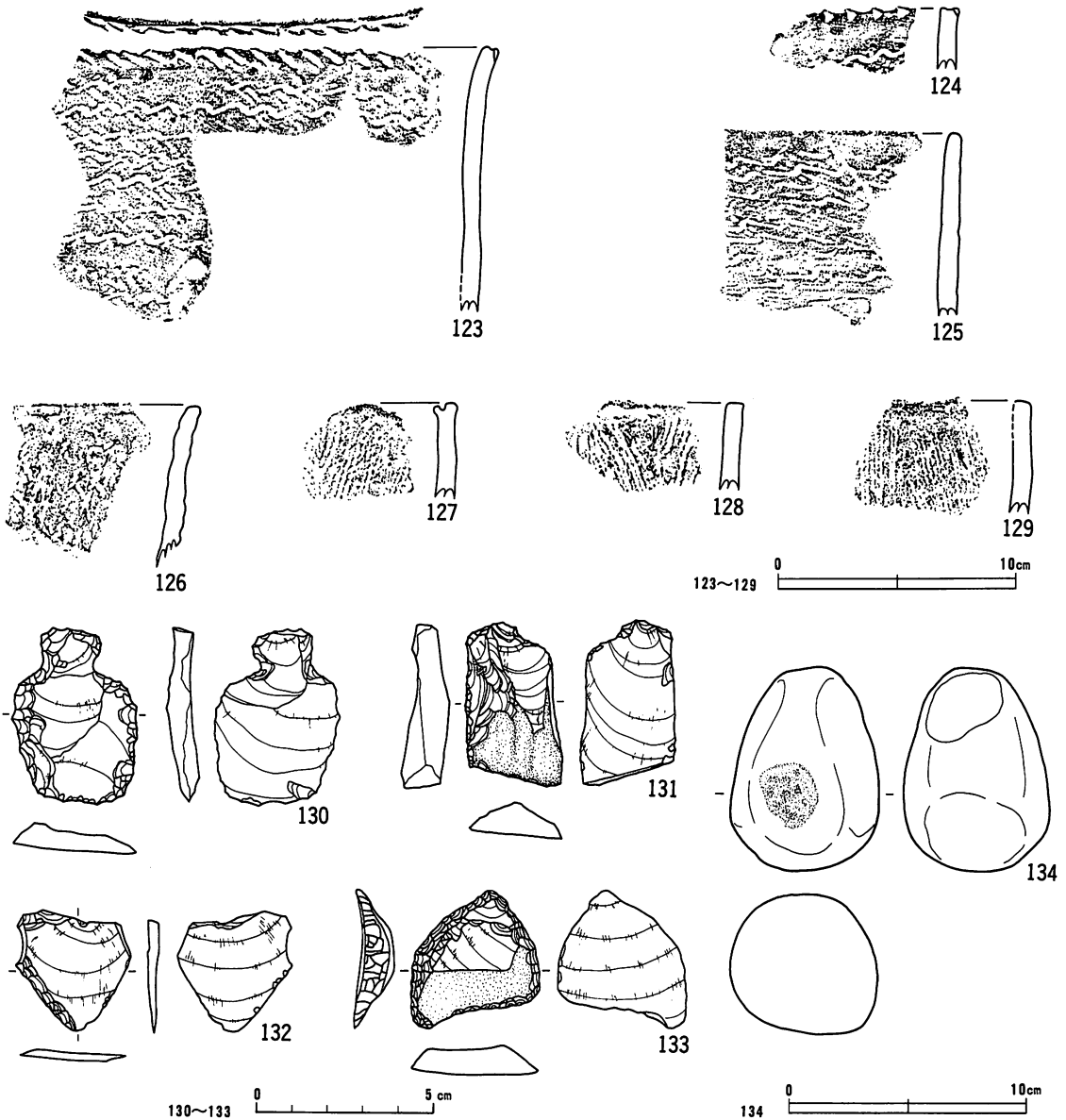


第46図 VID8e住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
113	VI D 8 e 住	床面		L網目状燃糸文。	—	11.2	23.0		II 6	142
114	VI D 8 e 住			L網目状燃糸文。	[20.0]	—	(18.0)		II 6	142
115	VI D 8 e 住	埋土	山形状突起。	R木目状燃糸文。	(18.0)	—	(19.4)		II 6 a ウ	142
116	VI D 8 e 住	埋土		R燃糸文。	(15.0)	7.6	20.9	10cm幅ほどの無文部分が縦に展開。	II 6 b カ	142
117	VI D 8 e 住	Q 1 埋土		L R × R L 第 1 種羽状。	—	(7.1)	(6.4)			142
118	VI D 8 e 住	床面		R L 横。横位綾結文。					II 3 a	142
119	VI D 8 e 住	床面	口唇端匙状工具による刻み。横位綾結文。	R L 横。横位綾結文。					II 3 a	142
120	VI D 8 e 住	床面		L R 横。片結び横位綾結文。					II 6	142
121	VI D 8 e 住	床面		L燃糸文、R燃糸文。				122と同一個体。	II 6 b カ	142
122	VI D 8 e 住	埋土		L燃糸文、R燃糸文。				121と同一個体。	II 6 b カ	142

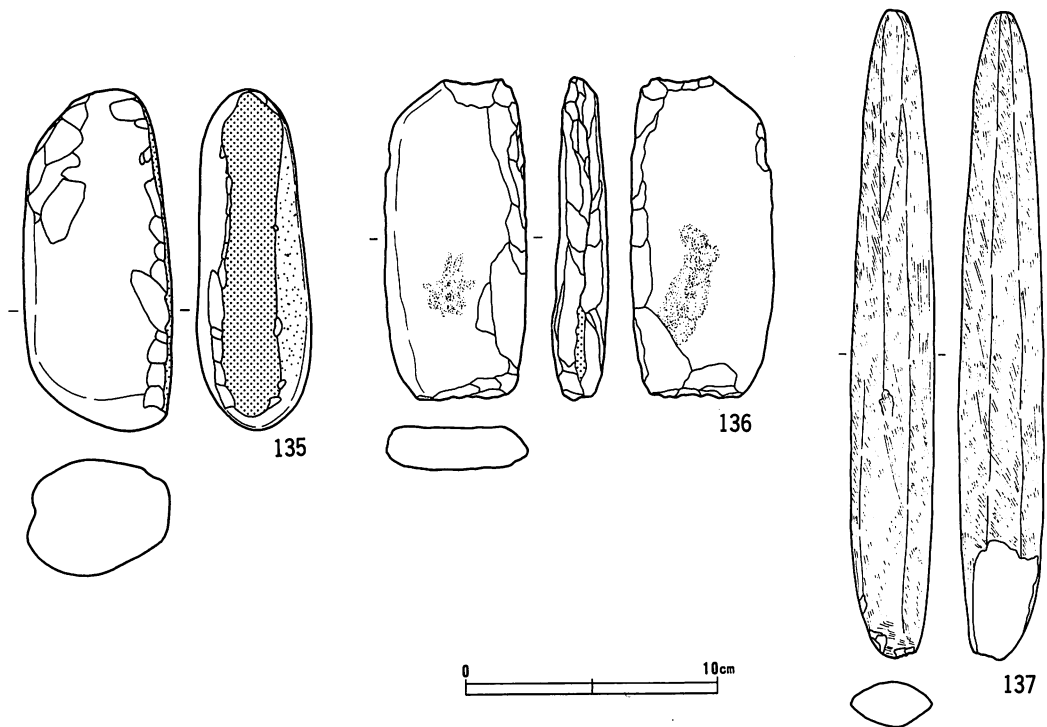
第47図 VI D 8 e 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
123	VID 8 e 住	埋土	口唇部沈線。口唇端棒状工具による斜位刻み、重層する横絡文。	R L横。横位綾絡文。					II 3 a	143
124	VID 8 e 住	Q 1 埋土	弁状口縁? 口唇端棒状工具による右方向からの刻み。	R L横。横位綾絡文。					II 3 a	143
125	VID 8 e 住	埋土	重層する横位綾絡文。						II 3 b	143
126	VID 8 e 住	埋土		L 網目状燃糸文。				113と同一個体。	II 6	143
127	VID 8 e 住	埋土	波状口縁。頂部(弁状?) 口唇部沈線。	L 2 条木目状燃糸文。				128、129と同一個体。	II 6 a i	143
128	VID 8 e 住	埋土	波状口縁。	L 2 条木目状燃糸文。				127、129と同一個体。	II 6	143
129	VID 8 e 住	Q 4 埋土	波状口縁。	L 2 条木目状燃糸文。				127、128と同一個体。	II 6	143

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
130	VID 8 e 住		石匙	粘板岩	北上山地	4.9	3.5	0.9	11.11		I b 1	143
131	VID 8 e 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	4.6	2.7	0.9	13.25		I a 1	143
132	VID 8 e 住	床面	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	3.4	3.2	0.2	3.25	右辺に微小剝離あり。使用痕と思われる。	I a 1	143
133	VID 8 e 住	Q 1 埋土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	3.9	3.6	0.7	11.85	加工は全周に施される。槌器。	I d 2	143
134	VID 8 e 住	床面	敲磨器類 B 群	珪長質凝灰岩	北上山地	8.5	6.3	5.4	420	浅い凹凸が片面に集中。	II	143

第48図 VID 8 e 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
135	VID 8 e 住	Q 3 埋土下位	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	13.5	4.5	4.6	560	平滑面 1 面。	I a 2	143
136	VID 8 e 住	床面	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.6	5.7	1.6	230	+凹石。	III b 2	143
137	VID 8 e 住	床面	石剣	粘板岩	北上山地	25.7	3.3	1.8	190			143

第49図 VID 8 e 住居跡出土遺物(3)

VID 8 h 住居跡 (遺構番号15)

遺構 (第50図、写真図版20)

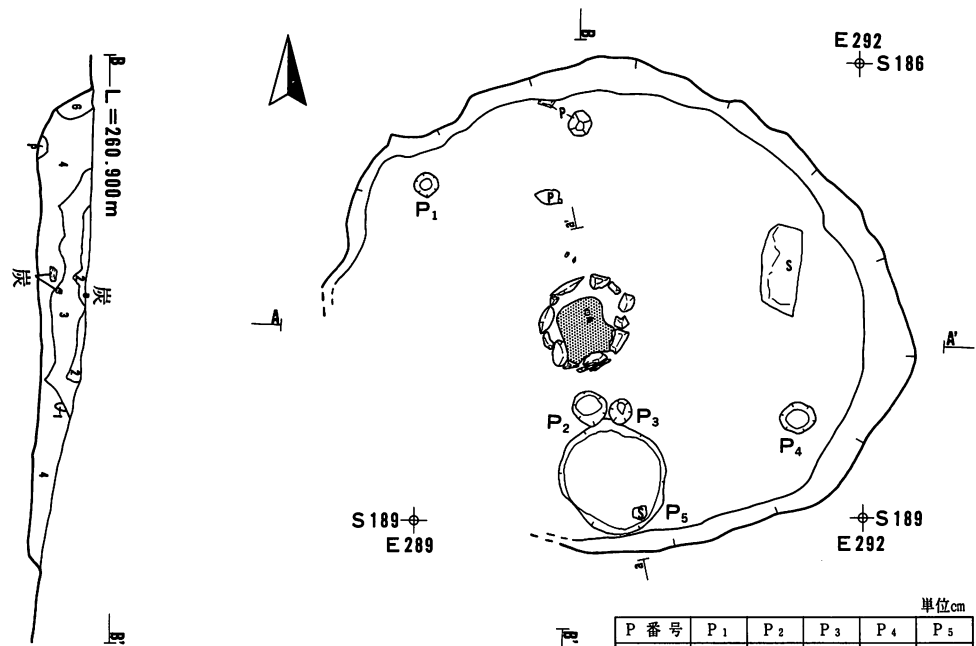
<検出状況>西尾根の南麓の平坦部に位置する。暗褐色土上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。

<形状・規模>いびつな円形で、径は3.1~3.9mである。

<壁・壁高>上半は暗褐色土と黄褐色土の混土層、下半は基盤層である黄褐色土を壁とし、固く締まる。やや外傾する。壁高は東壁22cm、西壁28cm、南壁8cm、北壁32cmである。

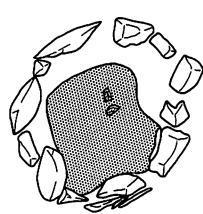
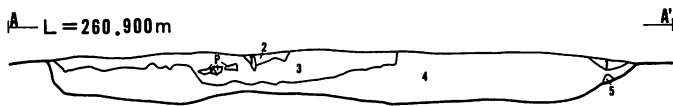
<埋土>黒色土と黒褐色土を主体とし、やや締まっている。自然堆積と思われる。全体に細炭・粉炭を含み、床面にまで達する。樹種はケヤキである。

<床・柱穴・施設>基盤層である褐色土を直接床とし、全体に平坦で固めである。南西方向にやや傾斜する。柱穴を4個検出したが、規模・位置から対応関係をとらえることはできない。



単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	16×16	24×24	17×17	22×24	70×75
深さ	11	25	23	9	18



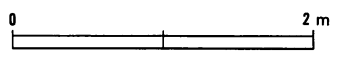
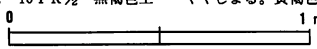
- A...A' B...B'
1. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。
 2. 7.5Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。草木根含む。
 3. 7.5Y R% 黒色土 しまりあり。炭化物を含む。
 4. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物をまばらに含む。黄褐色土ブロックを含む。
 5. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
 6. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。



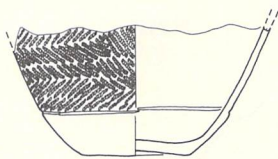
1. 10Y R% 暗褐色土 粘土質土。しまりなし。黄褐色土含む。
2. 10Y R% 黄褐色土 粘土質土。しまりあり。
3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。
4. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。2層に近似する。
5. 10Y R% 黒色土 ややしまる。
6. 10Y R% 黒褐色土 ややしまる。黄褐色土を含む。



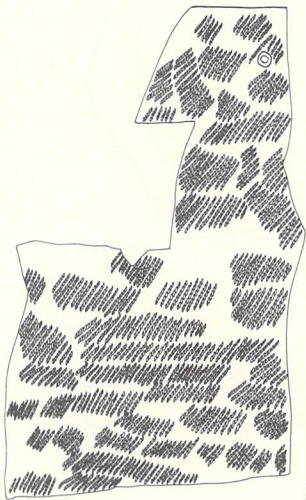
1. 5Y R% 暗赤褐色土 焼土。ややしまる。
2. 10Y R% 黒色土 しまりなし。炭化材を含む。
3. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。攪乱?
4. 10Y R% 黒褐色土 ややしまる。3層の黄褐色土ブロックを含む。炭化材含む。
5. 10Y R% 黒褐色土 ややしまる。焼土粒、炭化物粒を含む。
6. 10Y R% 黒褐色土 ややしまる。



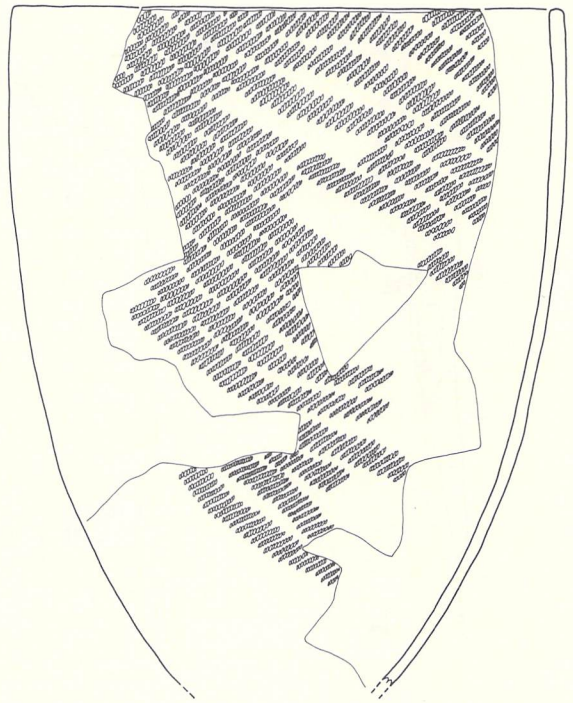
第50図 VI D 8 h 住居跡



138

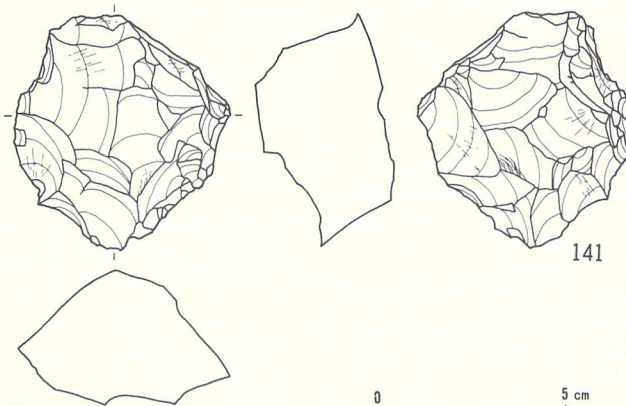


139



140

0 10cm



141

0 5cm

番号	出土地点	層位	地文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
138	VID 8 h 住	床面	沈線から下磨消し。	LR + RL の非結束羽状縄文。	-	0.6	(6.7)	後期~晚期	V 2	143
139	VID 8 h 住	埋土下位		LR 横。	-	-	(25.0)	後期~晚期、補修孔。	V 4	143
140	VID 8 h 住	埋土下部		LR 横。	[29.2]	-	(36.0)	晚期	V 4	143

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
141	VID 8 h 住	埋土下位	石核	硬質泥岩	雫石西部	6.2	5.7	3.7	111.53			144

第51図 VID 8 h 住居跡出土遺物

P5は埋土に焼土粒や粉炭を含み、本住居に伴うものと考えられる。

〈炉〉床面のほぼ中央部に石囲炉が位置する。おおむね円形を呈し、外郭の計測値で57×70cmを測る。計14個の亜角礫で構成され、個々の礫の長さは9～26cmの範囲にある。うち2個の石材は、北上山地産凝灰岩千枚岩とチャートであった。炉の内部には、厚さ最大で4cmの固く締まった焼土が形成される。焼土層のなかから土器片が出土した。

遺物（第51図、写真図版143・144）

〈土器〉床面から325g、埋土から2093g出土した。3点とも焼成良好で縄文が細かい。138の底部に近接する位置に凹線が一周し、それより下は磨消される。

〈石器〉141は、剝離の方向が一定でなく同一技法によって素材を得る手法とは異なる。他にUフレ、Rフレ各1点、フレーク6点が埋土から出土した。

時期 床面出土土器から縄文晩期前葉に属するものと考えられる。

VID0g住居跡（遺構番号16）

遺構（第52図、写真図版16）

〈検出状況〉西尾根南斜面のややなだらかになる傾斜変換点付近に位置する。基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面下方に当たり流失している。また南西部には攪乱がある。床面下からVID0g土坑、VID0g-2土坑が検出された。本住居はこの2基の土坑を埋めて構築されている。

〈形状・規模〉残存部分からの推定では楕円形を基調とすると考えられる。規模は東西3.4m、南北は残存値で1.6mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まっており、やや外傾する。壁高は東壁9cm、西壁10cm、北壁6cmである。

〈埋土〉暗褐色土が主体で、基盤層である黄褐色土が径2cmのブロックとなって混入する。床直上には最大10cmの厚さで黒褐色土層が存在する。固く締まっており貼床の可能性もある。しかし、厚さは不均一である。

〈床・柱穴・施設〉前述した黒褐色土は埋土の最下層として把握する。西側は基盤層を、東側は土坑を埋めて床としている。全体に固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉東壁寄りに地床炉1基を検出した。焼土は60×70cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大6cmである。固く締まっている。焼成は良好で、VID0g-2土坑の埋土も赤変している。

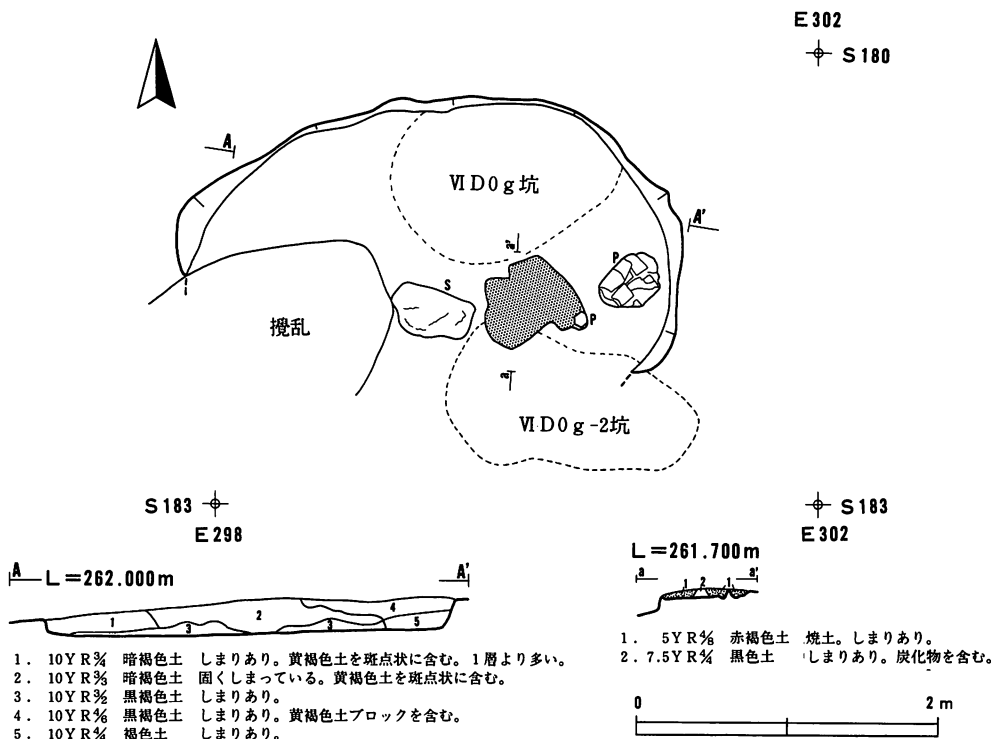
〈自然石〉炉の西側に隣接する床面に、35×55cmの不整形で偏平な角礫が位置する。加工痕も使用痕も認められないが、位置的に意味をもつものか。

遺物 (第53図、写真図版144)

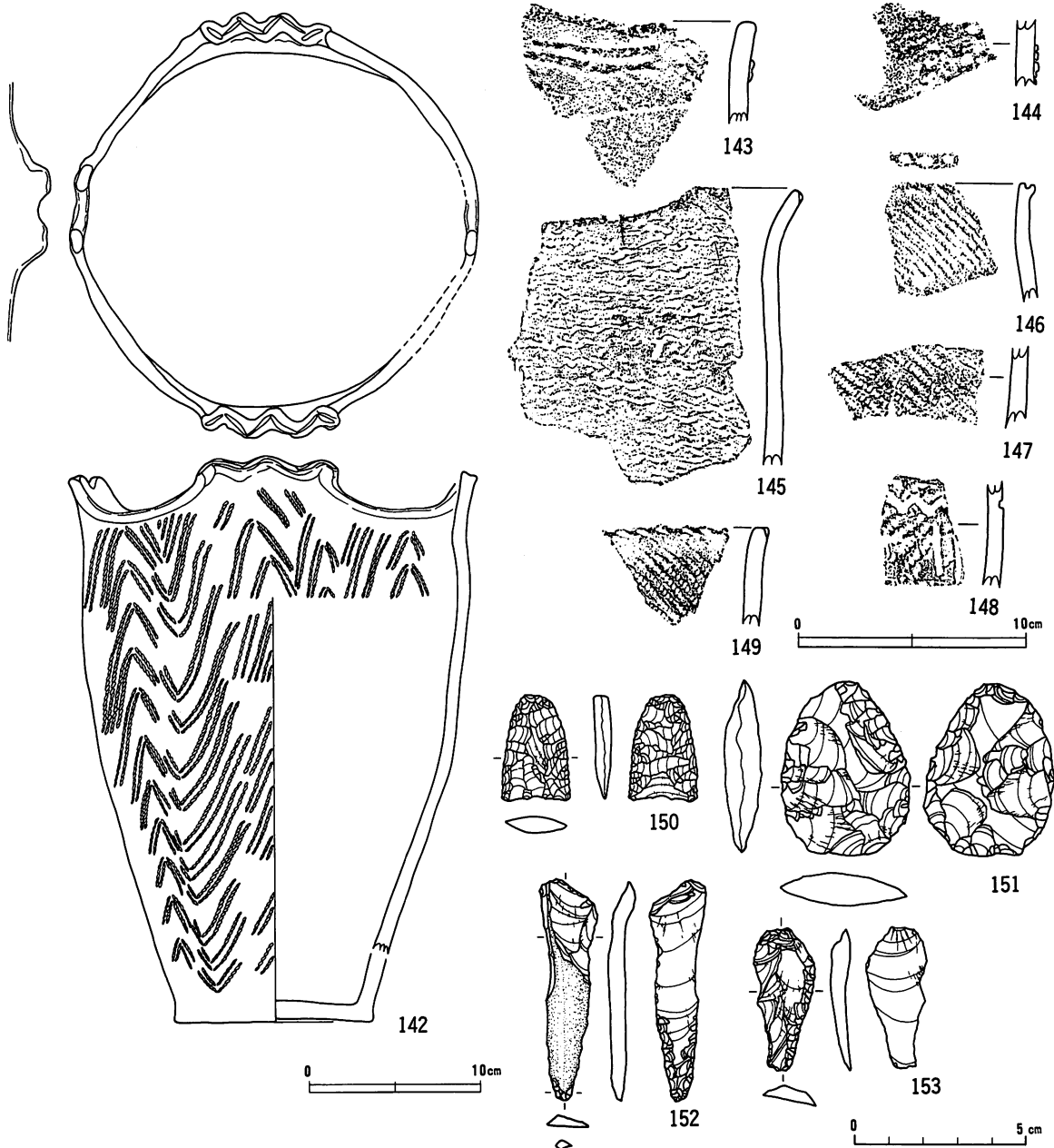
<土器>床面から4120 g、埋土から 856 g 出土した。142 は東壁際の床面から出土したものである。焼成は良好で硬質である。口縁部の装飾体は 1 対は鋸歯状で、その上面に棒状工具により沈線が 1 画ずつ描く手法によって施される。他の 1 対は 2 単位の山形突起で、その頂部はやや凹みを有する。143 と 144 は胎土・焼成から同一個体と考えられる。143 は隆帯上に凹線が、144 には竹管刺突が施される。145 の横位綾絡文は節が不明瞭であり、S 字連鎖状沈文とすべきかも知れない。148 は鋸歯状沈線を有する。繊維は含まない。

<石器> 150 は尖頭部が丸みを帯び断面形も鋭利ではない。151 はほぼ全面加工しているがやや粗い剥離である。152 は尖頭部に着目して石錐としたが、スクレーパーの可能性もある。他に凶化は省略したが岩手山起源の溶岩が 2 点、Uフレ 1 点、Rフレ 2 点、フレック 6 点が出土した。

時期 床面出土遺物から縄文前期後葉に属すると考えられる。



第52図 VID0 g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
143	VID 0 g 住	床直上	波状口縁、鋸齒状裝飾体、裝飾体上沈線。	L 木目状燃糸文。	23.9	11.7	33.2		II 6 a 7	144
142	VID 0 g 住	床直上	隆帯上沈線。	R L 横。				144と同一個体。	II 6 b i	144
144	VID 0 g 住	埋土	隆帯上竹管刺突。	R L 横。				143と同一個体。	II 6 b 7	144
145	VID 0 g 住	床直上	波状口縁。口唇端篋状工具による刻み。重層する横位絞絡文。						II 3 b	144
146	VID 0 g 住	埋土	口唇部竹管刺突。	R L 0 段多条。					II 6	144
147	VID 0 g 住	埋土		R L 横。					II 6	144
148	VID 0 g 住	埋土	沈線。	L R 横。					II 5	144
149	VID 0 g 住	埋土	口唇端棒状工具による刻み。	R L 横。				繊維わずか混入。	II 2 b	144

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
150	VID 0 g 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	3.1	2.0	0.5	3.06		II a 2	144
151	VID 0 g 住	埋土	尖頭器楪石器	珪質泥岩	雫石西部	5.1	3.8	1.1	12.78			144
152	VID 0 g 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	6.5	1.6	0.5	4.64	やや尖った細長い形状。自然面残す。		144
153	VID 0 g 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	雫石西部	4.5	1.9	0.5	3.02	左辺にも使用痕かと思われる小剥離あり。	I a 1	144

第53図 VID 0 g 住居跡出土遺物

VI D 0 h 住居跡 (遺構番号17)

遺構 (第54・55図、写真図版22)

〈検出状況〉西尾根の南麓の緩斜面に位置する。基盤層上面で検出した。掘り込みが浅く、南半は斜面下方のため流失していて不明である。

〈形状・規模〉遺存状態が悪く詳細は不明であるが、残存状況と柱穴の配置から推定すると、5×6.2m程度の隅丸長方形と考えられる。北東隅に10cm程高い部分がある。遺構の重複の可能性もあるが明らかではない。ここでは北壁のラインが一致することからテラス状施設と想定して単独の遺構と考えておく。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く凹凸があり、やや外傾する。壁高は東壁13cm、北壁20cmである。

〈埋土〉南側は黒褐色土、北側は暗褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土であるが、一部暗褐色土がブロック状に混入し、全体的に固い。暗褐色土を取り除くと凹凸が生じることから、住居構築時の掘り方ないしは斜面下方が流失した際の痕跡かと考えられる。柱穴は5個検出された。位置と規模の対応関係からP1～P4が支柱穴と考えられる。床面の北西方向に土坑が検出された。

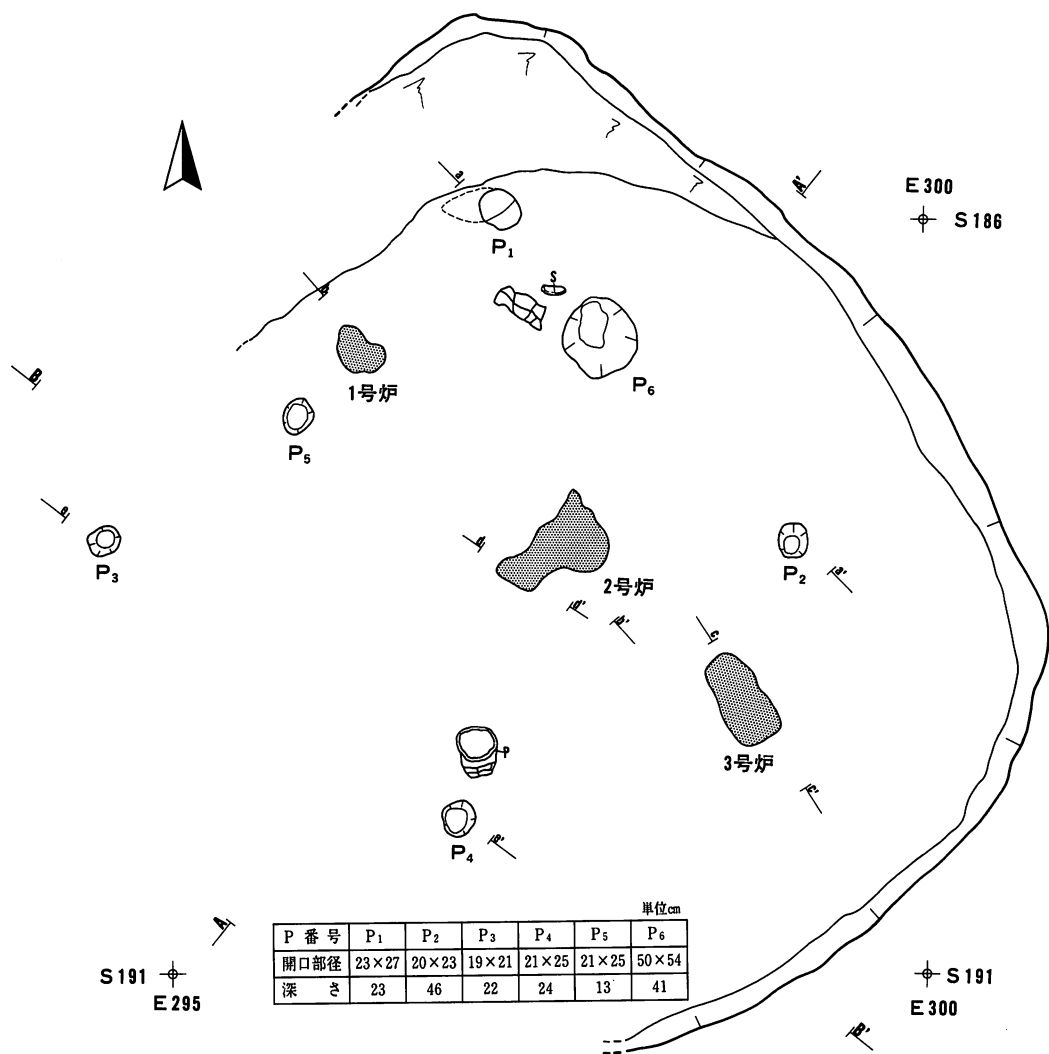
〈炉〉ほぼ長軸線上に地床炉が3基検出された。西側から東側へ向かってそれぞれ1号炉、2号炉、3号炉とする。1号炉の焼土は、22×35cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大3cmである。2号炉の焼土は、45×72cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。3号炉の焼土は、27×65cmの楕円形状の範囲に分布し、厚さは最大4cmである。いずれも基盤層が焼成をうけてレンズ状に焼土が形成されている。

遺物 (第55・56図、写真図版144～146)

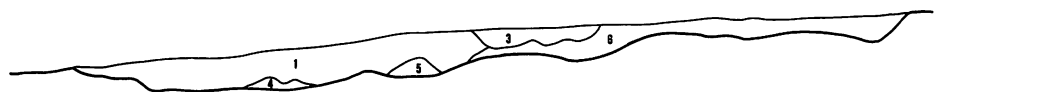
〈土器〉床面から2825g出土した。154はP1の東側床面から出土したものである。地文施文後、頸部に指頭を左斜めから押圧した隆帯を巡らし、胴部にも同様の隆帯が曲線的に貼り付けられるようだが剥落しているので詳細は不明である。口唇部の断面形は丸みを帯びる。155は埋土断面図(B-B')および平面図に図化された土器で、木目状撚糸文の土器である。156は輪積み部からの破損であるが、破損断面部に木葉痕が観察される。

〈石器〉160は石匙のつまみ部が欠損したものかも知れない。164は2対に打滅痕が観察されることからピエス・エスキーユとした。167は棒状の素材を両面から交互に二次加工している。169は上半が両面から小さい剥離で立面観鋸歯状となる。170は階段状剥離で両面から加工している。他にUフレ1点、Rフレ3点、フレーク42点(雫石産・硬質泥岩他)が出土している。

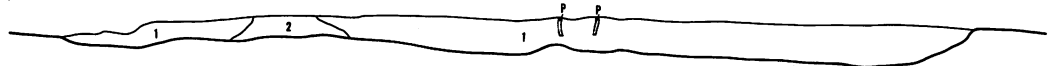
時期 出土土器から縄文時代前期後葉に属すると推定される。



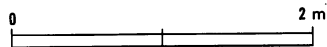
A — L = 261.200 m



B — L = 261.000 m



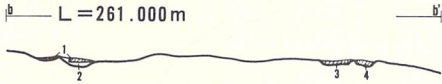
- | | |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 10YR% 黒褐色土 ややしまりあり。草木根、褐色土粒を含む。 | 4. 10YR% 褐色土 ややしまりあり。 |
| 2. 10YR% 暗褐色土 ややしまりあり。黄褐色土を粒状に含む。 | 5. 10YR% におい黄褐色土 しまりあり。 |
| 3. 10YR% 黒褐色土 しまりあり。暗褐色土をわずかに含む。 | 6. 10YR% 暗褐色土 ややしまりあり。黄褐色土を含む。 |



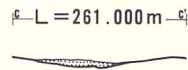
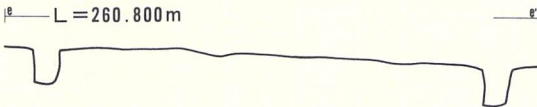
第54図 VID0h住居跡(1)



1. 10Y R $\frac{2}{6}$ 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土粒を合。



1. 5Y R $\frac{4}{6}$ 赤褐色土 しまりあり。
 2. 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒褐色土 しまりあり。
 3. 5Y R $\frac{3}{6}$ 暗赤褐色土 しまりあり。
 4. 5Y R $\frac{4}{6}$ 赤褐色土 焼土。しまりあり。

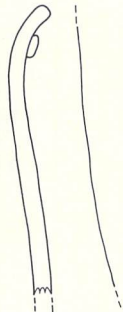
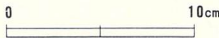
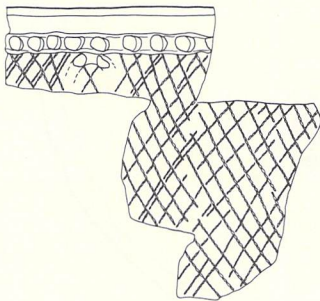
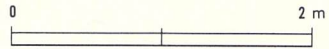


5Y R $\frac{4}{6}$ 赤褐色土 しまりあり。

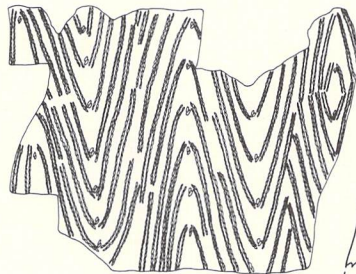
L = 260.800 m



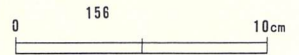
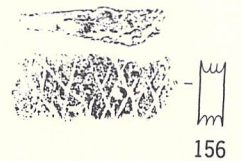
1. 5Y R $\frac{4}{6}$ にふい赤褐色土 焼土。しまりあり。
 2. 10Y R $\frac{2}{6}$ 暗褐色土 しまりあり。



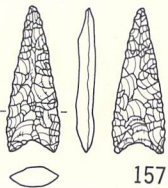
154



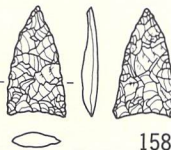
155



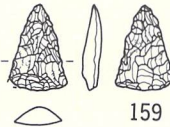
154・155



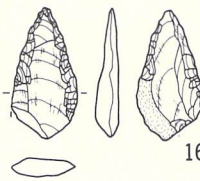
157



158



159

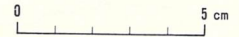


160



161

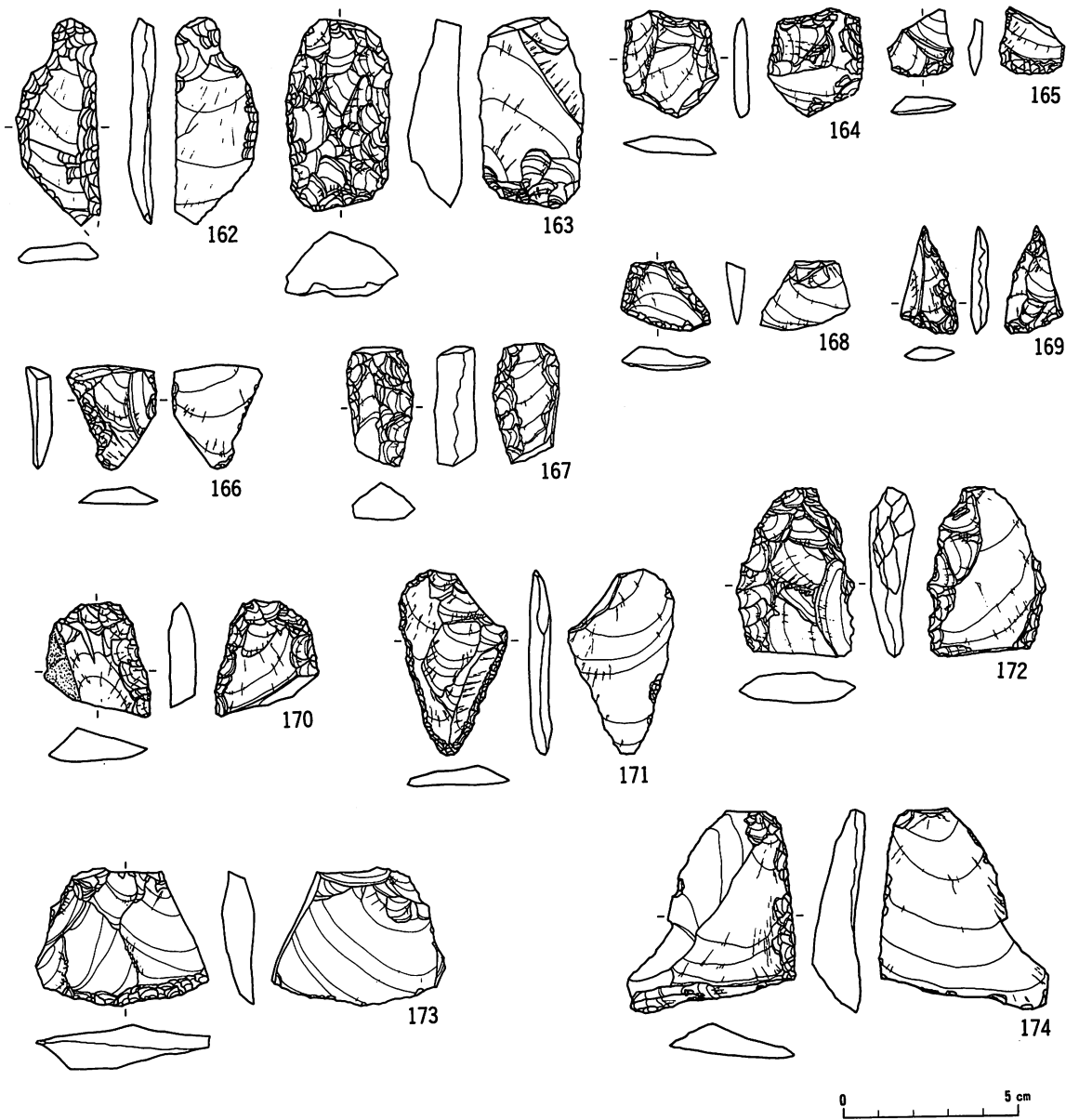
157~161



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
154	VID 0 h 住	床面	口頸部隆帯上左方向からの指頭状圧痕。	R 網目状捺糸文			(15.4)		II 6 b 7	144
155	VID 0 h 住	Q 4 埋土下位		L + R の木目状捺糸文。			(14.0)		II 6	144
156	VID 0 h 住	埋土		r 網目状捺糸文。				横断面に木葉痕残る。	II 6	145

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
157	VID 0 h 住	Q 4 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.9	1.4	0.5	2.19		II b 1	145
158	VID 0 h 住	Q 3 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.9	1.6	0.4	1.43		II b 2	145
159	VID 0 h 住	Q 4 埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	2.3	1.5	0.5	1.10		III 1	145
160	VID 0 h 住	Q 1 埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	(3.4)	1.7	0.4	(2.66)	石匙の可能性あり。		145
161	VID 0 h 住	Q 3 埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	(1.6)	(1.7)	(0.3)	(0.82)			145

第55図 VID 0 h 住居跡(2)・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
162	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	石匙	硬質泥岩	礮石西部	5.9	2.4	0.8	8.73		I a 2	145
163	VI D 0 h 住	Q 1 埋土	石匙	硬質泥岩	礮石西部	5.4	3.0	1.3	26.81		II	145
164	VI D 0 h 住	床面	ビエス・エスキュー	硬質泥岩	礮石西部	3.2	2.8	0.4	4.53	2 対。		145
165	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	1.9	1.9	0.4	1.23		I a 2	145
166	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	2.9	2.6	0.4	3.85		I b	145
167	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.4	1.9	1.0	9.19		III	145
168	VI D 0 h 住	Q 1 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	2.0	2.5	0.6	2.26	右辺にも二次加工あり。やや急。	I c 1	146
169	VI D 0 h 住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	礮石西部	3.1	1.6	0.4	1.68		III	146
170	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.3	3.0	0.9	9.14		IV	146
171	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	礮石西部	5.3	3.1	0.5	8.40		VI	146
172	VI D 0 h 住	Q 1 埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	礮石西部	4.8	3.4	0.9	17.60		II	146
173	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.9	5.0	0.9	17.21		I a 2	146
174	VI D 0 h 住	Q 4 埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	5.7	4.8	0.9	21.40		I a 1	146

第56図 VI D 0 h 住居跡出土遺物(2)

VI D 0 i 住居跡（遺構番号18）

遺構（第57図、写真図版23）

〈検出状況〉西尾根の南麓の緩斜面に位置する。暗褐色土上面で検出した。掘り込みが浅いため斜面下方にあたる南半は流失していて不明である。VI D 0 i 土坑によって北壁が僅かに切られている。

〈形状・規模〉北側は10cmほど高く平坦になっている。遺構の重複も想定されたが、埋土は同一であることから、テラス状の施設を有する単独の住居と考えた。詳細は不明だが、残存状況から推定すると4×5m程度の、長方形を基調とする平面形と考えられる。

〈壁・壁高〉暗褐色と黄褐色の混土で外傾する。壁高はテラス状施設の北壁7cmで他は不明である。

〈埋土〉上位は混入物少ない漆黒の土である。下位は暗褐色土や黄褐色土を粒状に含む。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色と黄褐色の混土層で、やや固めで少し凹凸がある。柱穴は4個検出した。位置と規模からP1～P3は対応し、主柱穴となると考えられる。

〈炉〉ほぼ中央部と推定される位置に地床炉1基を検出した。焼土は27×30cmの不整形に分布し、厚さは最大5cmである。基盤層が焼成をうけたもので、レンズ状に焼土が形成されている。

遺物（第58・59図、写真図版146～148）

〈土器〉床面から3480g、埋土から4170g出土した。175・177・178の3点は東半部床面から出土したものである。176は綾絡文が横走するが、装飾的效果は低く、単に縄の末端処理によるものかも知れない。他の撚糸文の土器と、器形が異なる点が注目される。177は口唇部に指頭圧痕を、口縁部を除く器全体には撚糸文を施す。原体は、軸の右端に穿孔して撚紐を潜し玉止めしたものである。

〈石器〉184は対称性を欠くが、石鏃の未成品と考えた。189は折断面と剝離により尖頭部を形成する。190と191は欠損品か。他にUフレ2点、Rフレ2点、フレーク17点が出土した。

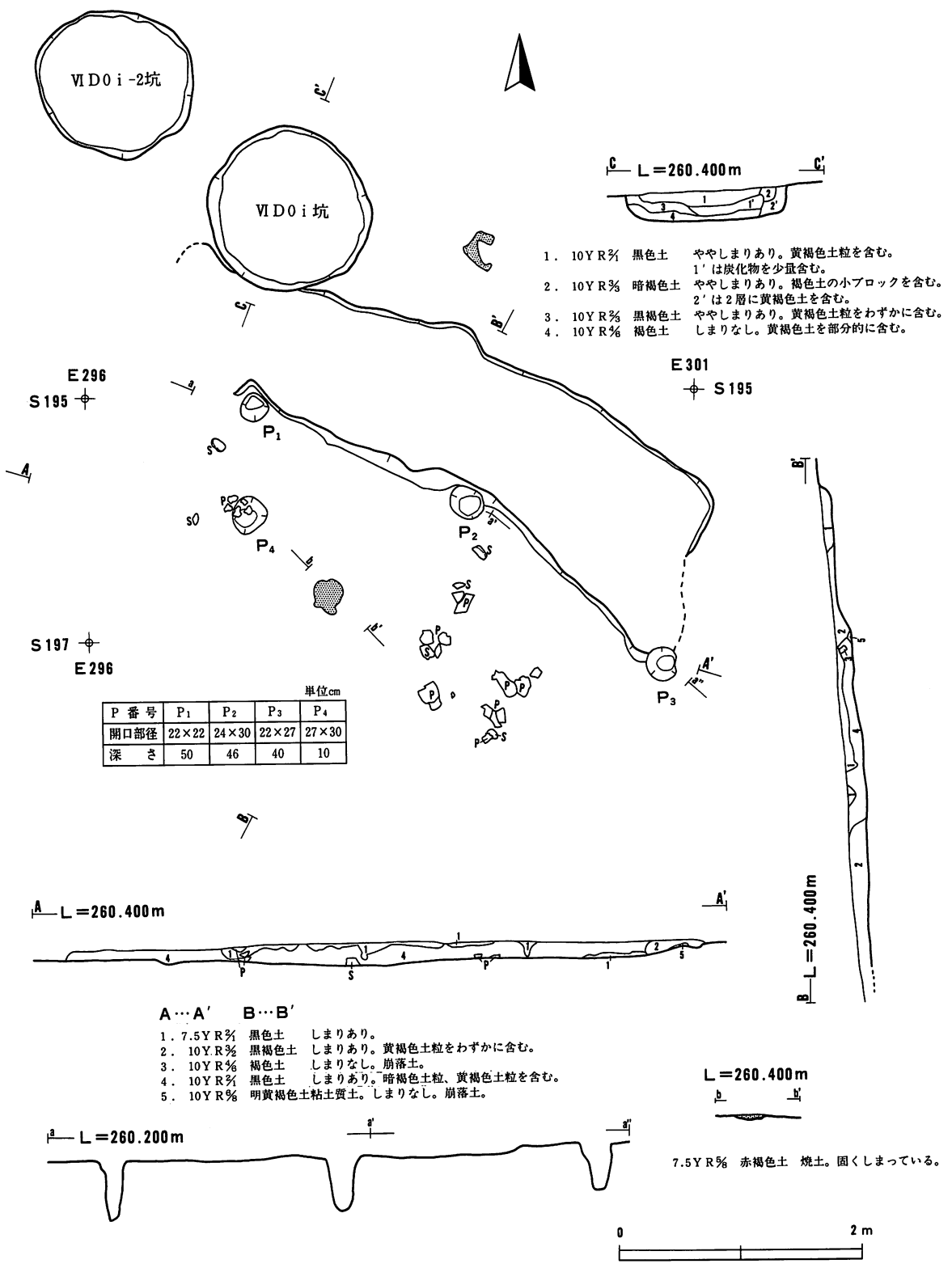
時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

VII C 3 g 住居跡（遺構番号19）

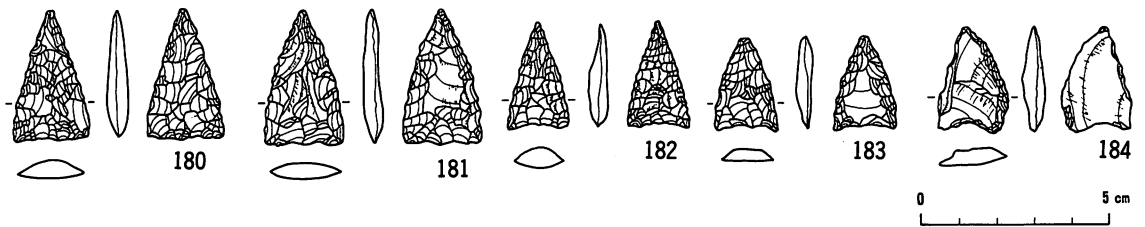
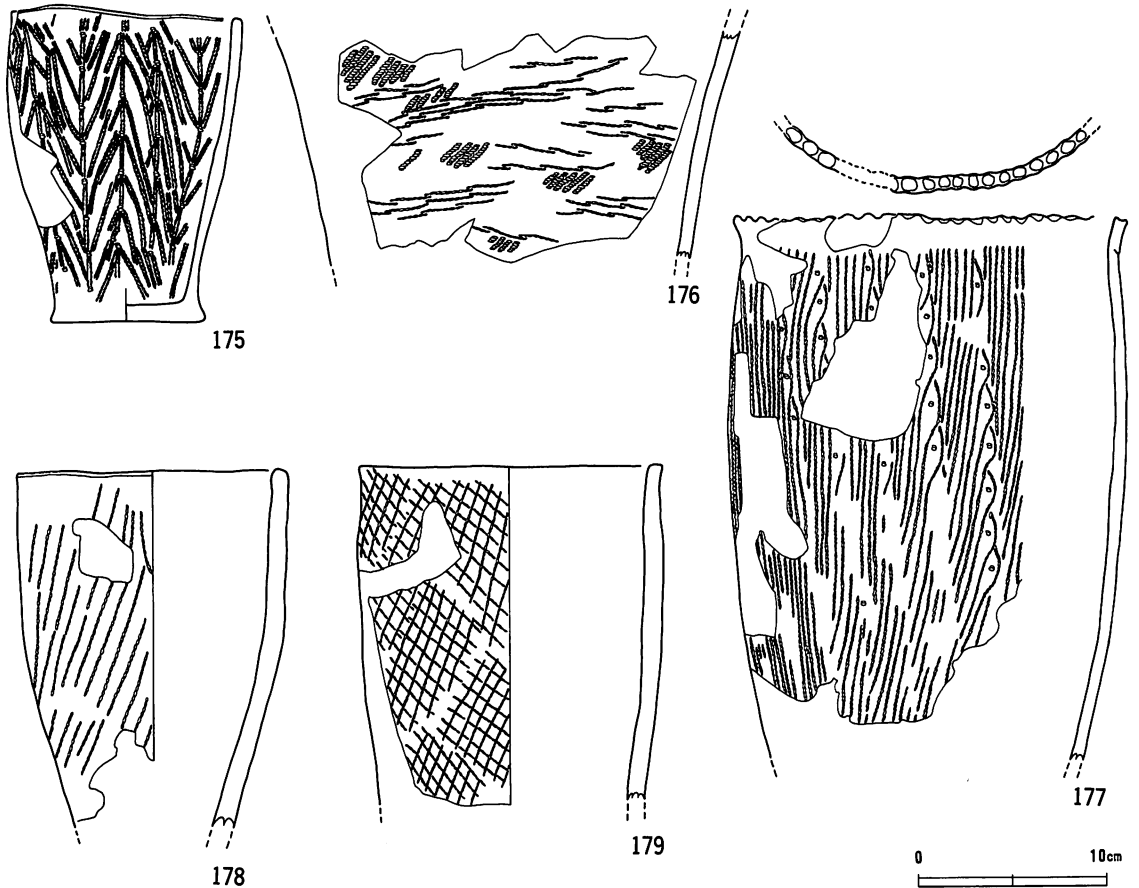
遺構（第60図、写真図版24）

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置し、厚い再堆積層中に部分的に暗褐色土が多く入りこんでいることから検出できた。急斜面であり、下方は流失していて遺存しているのはごく一部と思われる。

〈形状・規模〉遺存状態が悪く形状・規模とも不明である。残存値は南北2.2m、東西1.2mである。



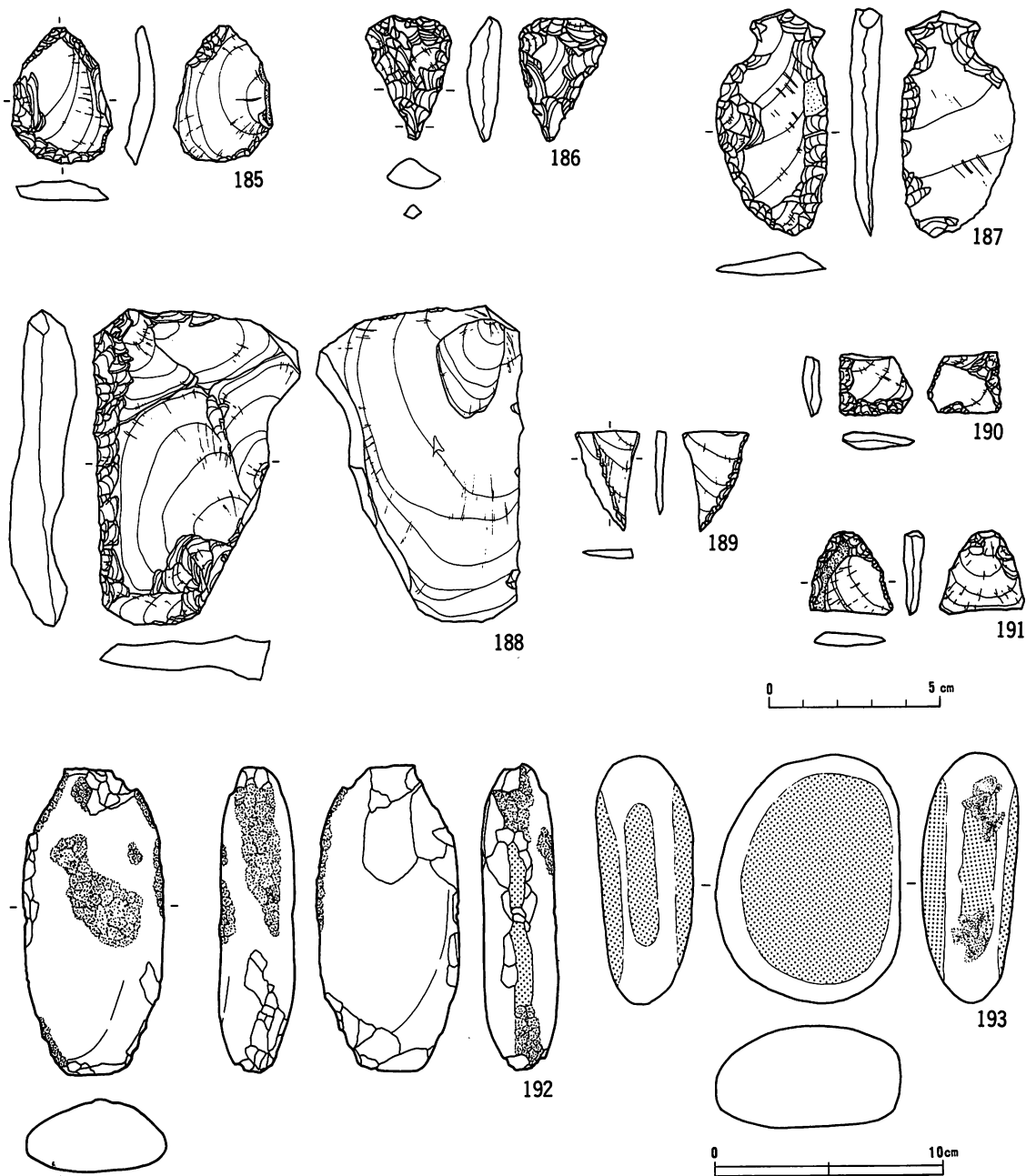
第57図 VID0i 住居跡



番号	出土地点	層位	文様 文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
175	VID 0 i 住	床面	底部張り出し。	L 木目状燃糸文。	12.1	8.2	16.8		II 6 b 才	146
176	VID 0 i 住	床面		L R 横、横位縦結文。	-	-	(12.0)		II 6 b	146
177	VID 0 i 住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L 燃糸文。	(20.8)	-	(24.6)		II 6 b 才	147
178	VID 0 i 住	床面		R 燃糸文。	(14.5)	-	(19.0)		II 6 b 才	147
179	VID 0 i 住	埋土		R 網目状燃糸文。	(16.2)	-	(17.9)		II 6 b 才	147

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
180	VID 0 i 住	Q 1 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.4	2.0	0.5	3.12		I 1	147
181	VID 0 i 住	Q 1 埋土	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	3.6	2.1	0.5	3.34		I 2	147
182	VID 0 i 住	Q 3 埋土	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	2.7	1.7	0.4	1.46		II b 2	147
183	VID 0 i 住	Q 4 埋土	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	2.3	1.7	0.5	1.64		II a 1	147
184	VID 0 i 住	Q 3 埋土	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	2.8	1.8	0.4	2.17		II b 2	147

第58図 VID 0 i 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
185	VID 0 i 住	Q 3 埋土	尖頭器 礫石器	硬質泥岩	礫石西部	2.9	4.0	0.5	6.77			147
186	VID 0 i 住	Q 3 埋土	石錐	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	3.6	2.5	1.0	6.61	尖頭部つくり出し明確。全体に肉厚だが身部は心状の断面形。		147
187	VID 0 i 住	Q 3 埋土	石匙	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	6.6	3.2	0.9	14.23		I a 2	147
188	VID 0 i 住	Q 3 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	9.2	6.0	1.1	68.80		I a 1	147
189	VID 0 i 住	Q 3 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.9	1.9	0.3	1.34	2 辺が折断 (or 折損か) 三角形の形状。極薄。	I a 2	147
190	VID 0 i 住	Q 3 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	1.7	2.1	0.4	1.68	右辺は両面加工で粗い。左辺は小剥離。	I b 1	147
191	VID 0 i 住	Q 3 埋土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	2.4	2.4	0.3	2.40	刃潰し部分あり。	I b 2	147
192	VID 0 i 住	床面	敲磨器類 A 群	濃緑色凝灰岩	北上山地	13.3	6.2	3.0	410	+凹石。	II b 2	148
193	VID 0 i 住	床面	敲磨器類 B 群	硬砂岩	北上山地	10.8	8.2	4.3	530	側面に磨面と敲打痕。	V	148

第59図 VID 0 i 住居跡出土遺物(2)

〈壁・壁高〉暗褐色と黄褐色の混土で再堆積層の一部と考えられる。締めりはあまりない。壁高は斜面上方の東側で35cmを測る。

〈埋土〉暗褐色の締めりのないシルトによる単層である。下位には崩壊土と思われる褐色土が混入する。

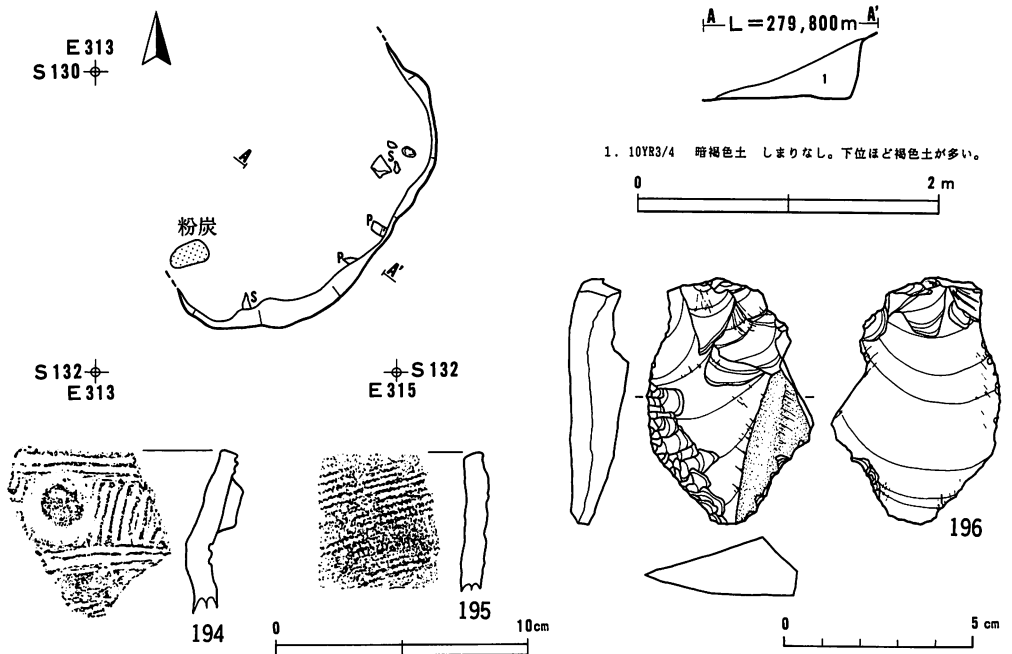
〈床・柱穴・施設〉暗褐色土に黄褐色土がブロック状に混入する。ほぼ水平で平坦である。全体的に軟質である。柱穴は検出されない。

〈炉〉検出されない。南壁寄りに粉炭がまとまって検出された。

遺物 (第60図、写真図版148)

〈土器〉床面から50g出土している。194は、頸部で屈曲する器形で、棒状工具により口縁部に頸部に横位沈線を施し、その間を縦位短沈線で充填する。

〈石器〉196は1側辺に二次加工が施されている。他に床面からフレーク1点が出土している。時期 破片資料からではあるが、床面出土遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭と考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
194	VII C 3 g 住	床面	ボタン状貼り付け。沈線文。	L R横。					II 7 b	148
195	VII C 3 g 住	床面		L R横。						148

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
196	VII C 3 g 住		不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	6.5	4.4	1.6	33.35	粗い剥離のあと細部加工。	I a 2	148

第60図 VII C 3 g 住居跡・出土遺物

ⅦC 6 f 住居跡 (遺構番号20)

遺構 (第61図、写真図版24)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置する。再堆積層を掘り下げ中に炉と考えられる焼土が検出されたこと、多くの遺物が出土したことから住居跡を想定して精査を進めたところ、基盤層においてかろうじて南壁を検出できた。急斜面であり、下方は流失して遺存しているのはごく一部である。埋土断面図はとれなかった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、残存状況から南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を基調とするものと推定される。残存値は南北3.85m、東西2.6mである。

〈壁・壁高〉基盤層の黄褐色土で、固く締まり、ほぼ直立する。壁高は斜面上方の東壁で10cm、南壁で10cm、最大値は南西隅壁で22.5cmを測る。

〈埋土〉暗褐色の締まりのないシルトによる単層である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を直接床とし、固く締まっておりやや凹凸がある。柱穴は検出されない。

〈炉〉北側に焼土が1基検出された。40×45cmの不整形に分布し、厚さは3cm程度である。

遺物 (第61・62図、写真図版148・149)

〈土器〉床面から5170g、埋土から325g出土した。197～199は南寄りの床面から一括出土したものである。197の地文は2段の縄を用いた網目状撚糸文である。198は斜縄文を施文後に縦位の綾絡文を施している。口唇部は平らになでられている。201は弁状突起で、頂部に指頭状圧痕、外面に鋸歯状の沈線(凹線)が施文される。204は木目状撚糸文を地文として凹線が施された隆帯が、口頸部にタガ状に巡り、胴部には半円状に展開するらしい。

〈石器〉207は床面から出土したものである。

時期 床面出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

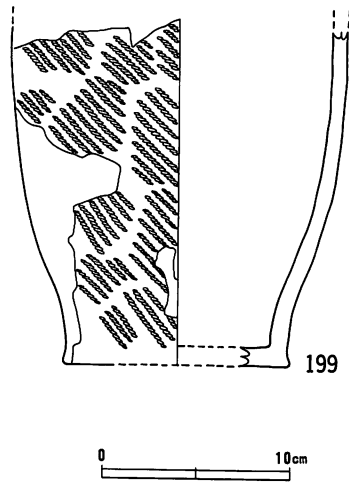
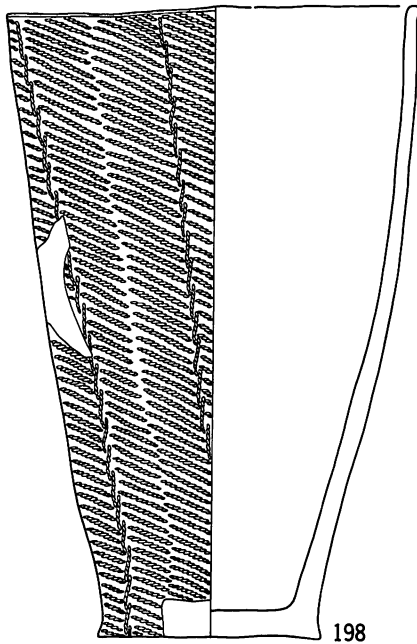
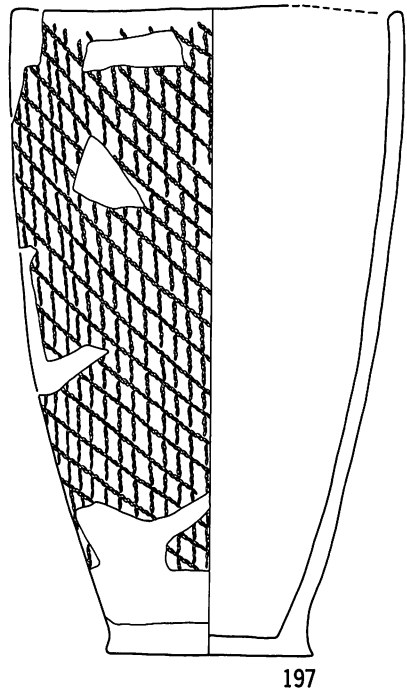
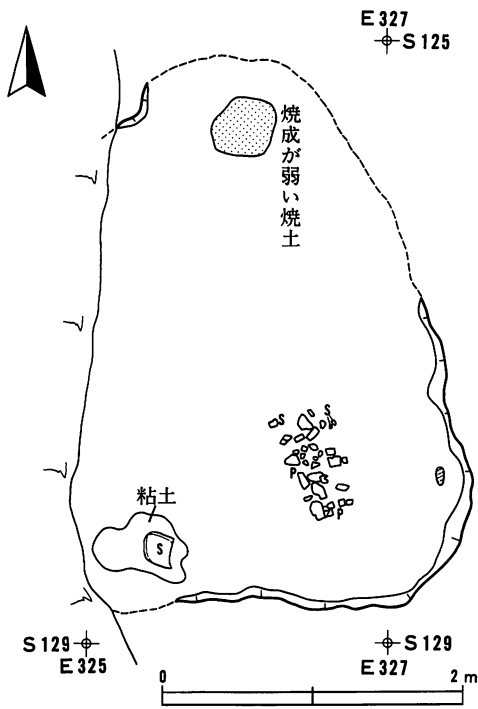
ⅦC 6 g 住居跡 (遺構番号21)

遺構 (第63図、写真図版25)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置し、厚い再堆積層中に部分的に暗褐色土が多く入りこんでいることから検出できた。斜面下方にあたる西壁は流失している。ⅦC 6 g-2土坑と南壁で重複し、ⅦC 6 g土坑とは完全重複している。

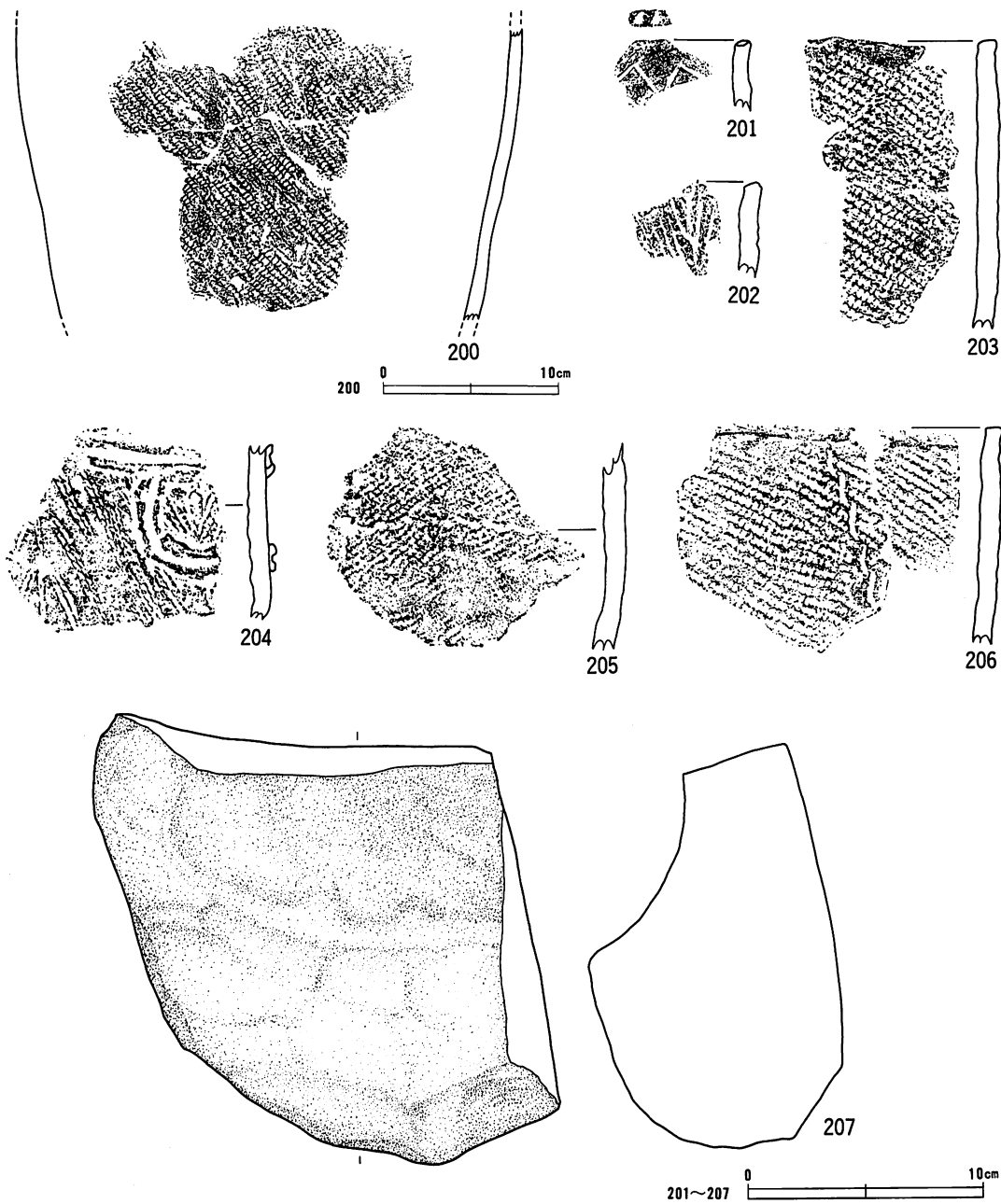
新旧関係については、本住居はⅦC 6 g土坑を埋めて構築されていることから、本住居の方が新しい。ⅦC 6 g-2土坑との関係では、同土坑の検出が遅れたため、明確な資料を残せなかったが、精査時の観察では本住居跡の方が新しいと考えられた。

〈形状・規模〉残存状況から小形の楕円形が推定される。長軸は2.25m、短軸は推定で1.7m



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
197	VII C 6 f 住	床面		LR網目状燃糸文	(20.7)	11.0	34.2		II 6 b 才	148
198	VII C 6 f 住	床面		LR縦、縦位綾絡文	(21.9)	11.9	33.6		II 6 b 才	148
199	VII C 6 f 住	床面		LR縦	-	(12.0)	(18.3)		II 6 b	148

第61図 VII C 6 f 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
200	VII C 6 f 住	床直上		L R縦。	-	-	(16.4)		II 6	149
201	VII C 6 f 住	床面	波状口縁。頂部指頭状圧痕。口縁部鋸齒状沈線。						II 6 a 7	149
202	VII C 6 f 住	埋土	波状口縁。	R 木目状燃糸文。					II 6 b	149
203	VII C 6 f 住	床面		L R縦。					II 6 b	149
204	VII C 6 f 住	床面	隆帯上に沈線。	R 木目状燃糸文。					II 6 b 7	149
205	VII C 6 f 住	床面		L R横。横位綾絡文。					II 6	149
206	VII C 6 f 住	床面		L R縦。					II 6	149

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
207	VII C 6 f 住	床面	石皿・台石類	珉長質凝灰岩	北上山地	(19.7)	(19.1)	10.6	(4700)			149

第62図 VII C 6 f 住居跡出土遺物(2)

前後になるものと思われる。

〈壁・壁高〉固く締まった褐色土で、ほぼ直立している。重複部分の壁は軟質である。壁高は斜面上方の東側で40cm、北で10cm、南で7cmを測る。西壁は流失している。

〈埋土〉褐色土を主体とする。上位は5mm～1cm大の礫を10%程度含むが、下位には礫は多くなく粉炭を含む。斜面上方の壁際には崩落土がみられる。

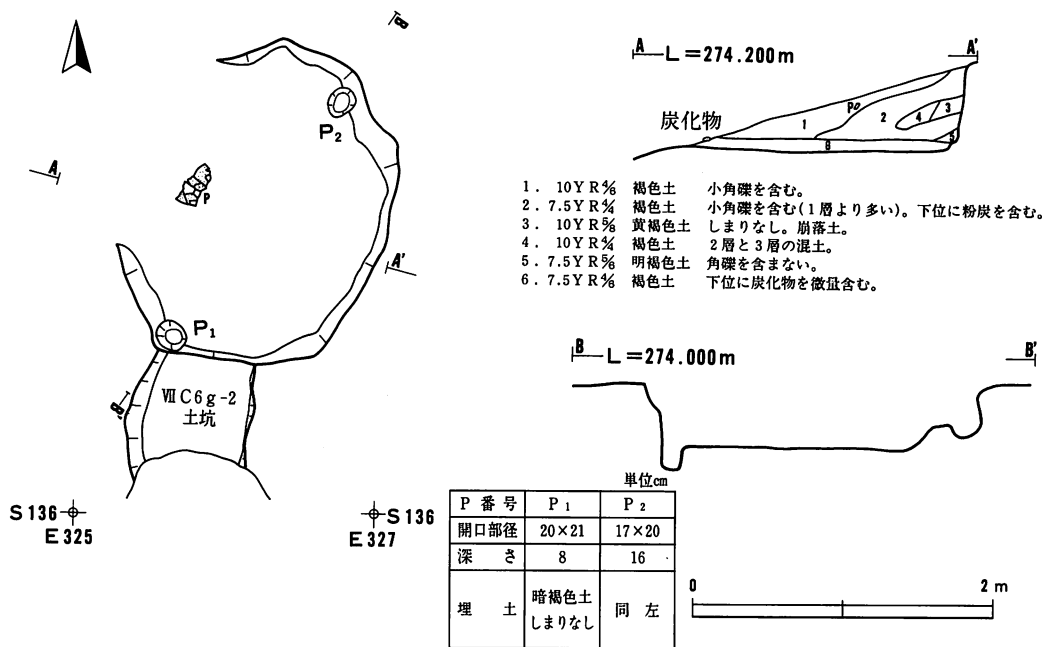
〈床・柱穴・施設〉床はほぼ水平で平坦であり、やや軟質である。VII C 6 g 土坑を埋めた土を床としている。柱穴は2個検出された。両者とも締まりを欠く暗褐色土を埋土とする。P2の方は、埋土下位に黄褐色の礫を含む。しかし、P1とP2とは底面で40cmのレベル差があり、主柱穴とするには疑問がある。

〈炉〉検出されない。

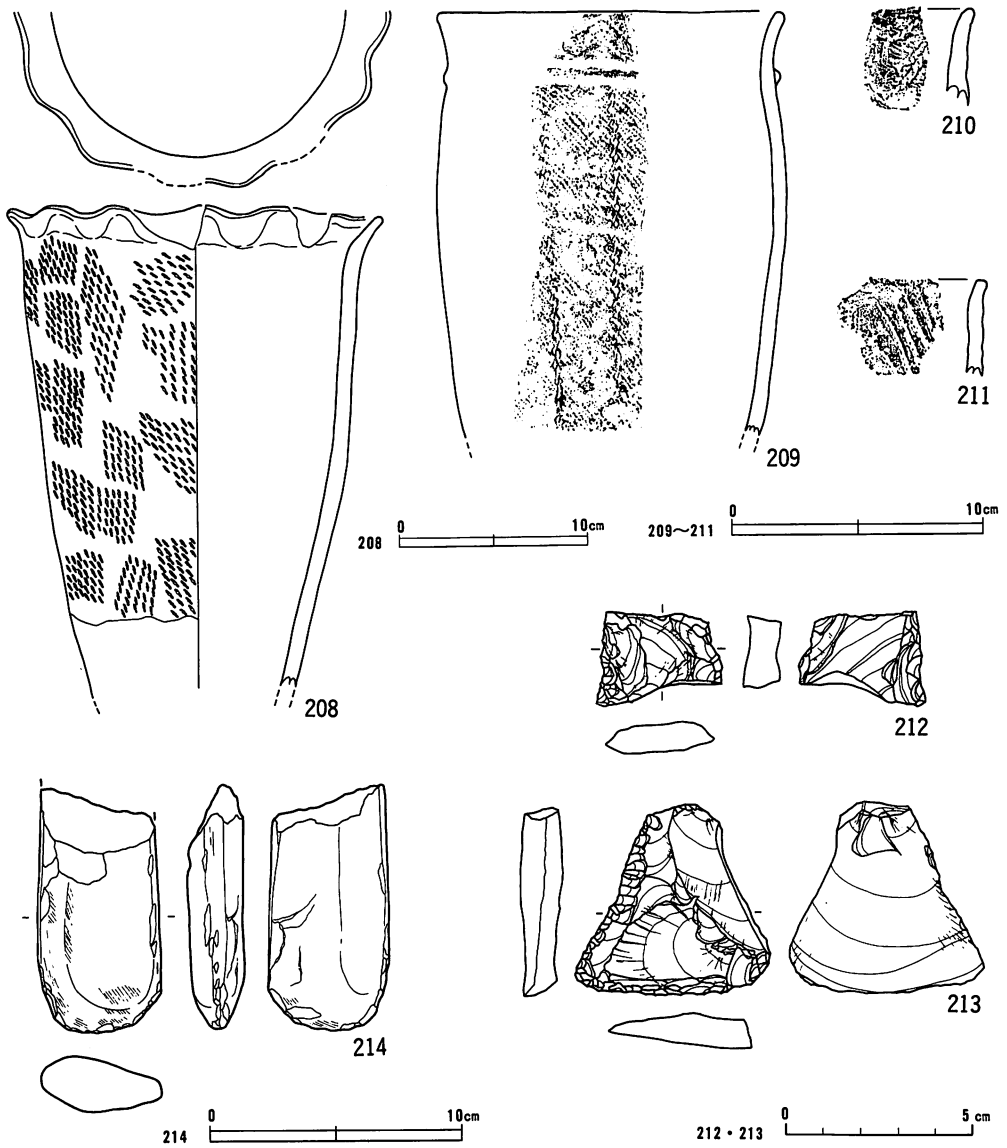
遺物（第64図、写真図版149）

〈土器〉床面から2275g、埋土から1170g出土した。図示した他には縄文時代前期の網目状燃糸文、多軸絡条体の土器片が出土している。

〈石器〉212は刃部側面観が鋸歯状を呈する。石筥等の欠損品か。213はエンド方向に急角度の、サイド方向にスクレーパー状の刃部を有する。214は石斧としたが、自然礫の形状を活用



第63図 VII C 6 g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
208	VII C 6 g 住	床面	花卉状口縁。	R L 多軸絡条文。	20.0	-	(25.5)		II 6 b ㄱ	149
209	VII C 6 g 住	埋土	原体圧痕、隆帯。	L R 縦、綾絡文。	(18.4)	-	(22.5)		II 8 a ㄹ	149
210	VII C 6 g 住	床面		L + R による木目状燃系文。					II 6 b	149
211	VII C 6 g 住	床面		L 木目状燃系文。					II 6	149

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
212	VII C 6 g 住	埋土	不定形石器	硬質泥質凝灰岩	雫石西部	2.5	3.3	0.8	8.52	側面観鋸歯状を呈する。	VII	149
213	VII C 6 g 住	床面	不定形石器	粘板岩	北上山地	5.1	5.2	1.1	27.08		I b 3	149
214	VII C 6 g 住	床面	磨製石斧	粘板岩	北上山地	(9.6)	4.8	2.1	(150)	自然礫の形状を活用。刃面は研磨。	II	149

第64図 VII C 6 g 住居跡出土遺物

し最小限の加工にとどめている。表には調整のための擦痕と使用痕の剥離が観察される。図示した他にUフレ3点、Rフレ1点、フレーク4点出土した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

VII C 6 h 住居跡 (遺構番号22)

遺構 (第65図、写真図版25・26)

〈検出状況〉西尾根の頂部に位置し、厚い再堆積層中に部分的に若干の暗褐色土のにごりとして検出された。北西壁の中央部に一部倒木痕による攪乱がある。

〈形状・規模〉長円形ないしは隅丸長方形で、長軸方向は等高線にほぼ沿っている。規模は、長軸6.3m、短軸3.4mである。

〈壁・壁高〉斜面上方にあたる南東壁の下半部は基盤層、他は暗褐色土でほぼ直立している。重複部分の壁は軟質である。壁高は北東壁30cm、北西壁7cm、南東壁68cm、南西壁30cmである。

〈埋土〉色調や小角礫の混入の度合いによって細別できるが、おおむね上位にはにぶい黄褐色土、下位には暗褐色土、壁際には壁の崩落土が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を直接床とし、固く締まっている。凹凸がみられる。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉床面の長軸線上に2基、床面よりやや下のレベルから1基の計3基の焼土が検出された。位置および焼成の度合いから地床炉と考えられる。床面南側のものを1号炉、北側のものを2号炉、床面より下のレベルから検出されたものを3号炉とする。1号炉の焼土は105×15cmの不整円形の範囲に分布し厚さは6cm、2号炉の焼土は40×60cmの楕円形状の範囲に分布し厚さは5cmでいずれも固く締まっている。3号炉は、2号炉の上面から5～7cm程下から検出された。焼土は50×105cmの不整形の範囲に分布し、厚さは5cmである。3号炉は2号炉に先行する炉で、床面を掘り下げで使用されたものと考えられる。

遺物 (第66～68図、写真図版149～151)

〈土器〉床面から1270g、埋土から5295g出土しているが接合するものがなく、詳しい資料は得られない。215は手づくねによる無文の小型土器である。217は上下がはっきりしない。隆帯断面は三角形状である。219は波状口縁気味で細い棒状工具による沈線が粗雑に施されている。221と222は同一個体であるが、口唇部に指頭状圧痕が連続するものと思われる。他には縄文時代前期の木目状撚糸文の地文のみの破片である。

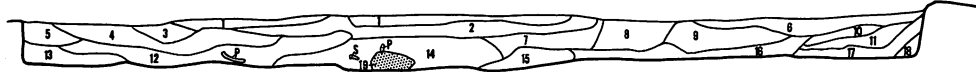
〈石器〉239は岩手火山起源の溶岩であるが、擦痕は明瞭に観察できないものの、床面からの出土であり遺物として取り上げた。より小さい溶岩が他に1点出土している。240も使用痕・加工痕は明瞭には観察できない。しかし、本遺跡の土層にないものであり、本住居に持ち込ま

E 327
S 134

S 138
E 327

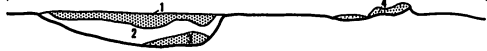
S 138
E 333

A— L = 275.600 m

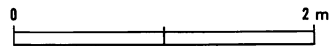


- | | | | |
|---------------------|---------------------|----------------------|--------------------------|
| 1. 10 Y R % におい黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 11. 10 Y R % 黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 2. 10 Y R % 明黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 12. 10 Y R % 褐色土 | しまりなし。小角礫を多く含む。 |
| 3. 10 Y R % 褐色土 | ややしまる。砂を含む。 | 13. 10 Y R % 褐色土 | 固さ不均一で全体にしまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 4. 10 Y R % におい黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 14. 10 Y R % 暗褐色土 | しまりあり。焼土をブロック状に含む。 |
| 5. 10 Y R % 黄褐色土 | しまりなし。砂を少量含む。 | 15. 10 Y R % 黄褐色土 | 小角礫を少量含む。粉炭を含む。 |
| 6. 10 Y R % 明黄褐色土 | ややしまる。小角礫を多く含む。 | 16. 10 Y R % におい黄褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 7. 10 Y R % におい黄褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 | 17. 10 Y R % におい黄褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 8. 10 Y R % 灰黄褐色土 | しまりあり。炭化物をブロック状に含む。 | 18. 10 Y R % 褐色土 | しまりなし。小角礫を微量含む。 |
| 9. 10 Y R % におい黄褐色土 | しまりあり。礫を多く含む。 | 19. 5 Y R % 明赤褐色土 | しまりなし。砂を多く含む。 |
| 10. 10 Y R % 黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | | |

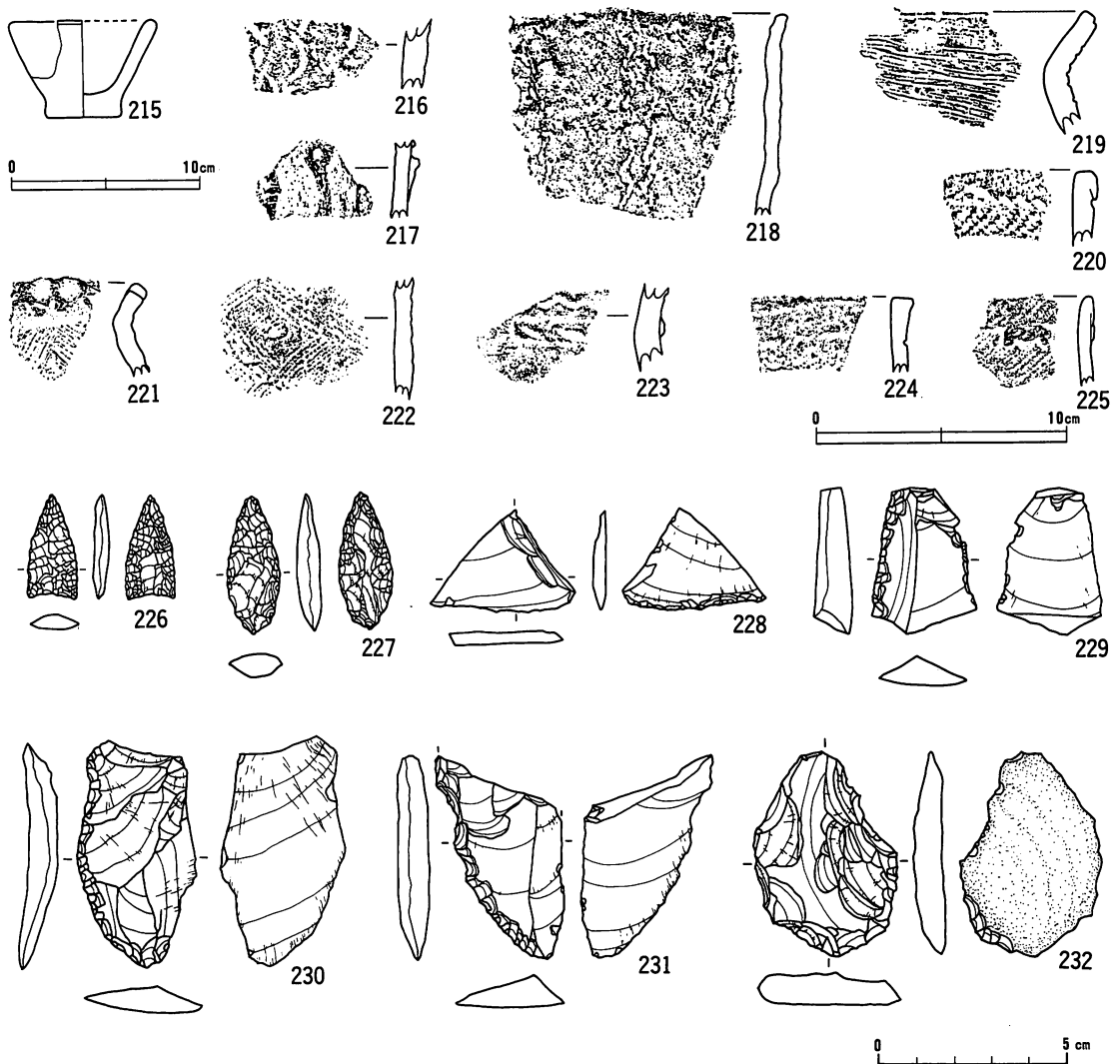
a— L = 274.200 m



- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 5 Y R % 明赤褐色土 | 焼土。しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 2. 10 Y R % 褐色土 | ややしまる。 |
| 3. 5 Y R % 明赤褐色土 | しまりなし。 |
| 4. 5 Y R % 明赤褐色土 | しまりなし。砂を少量含む。 |



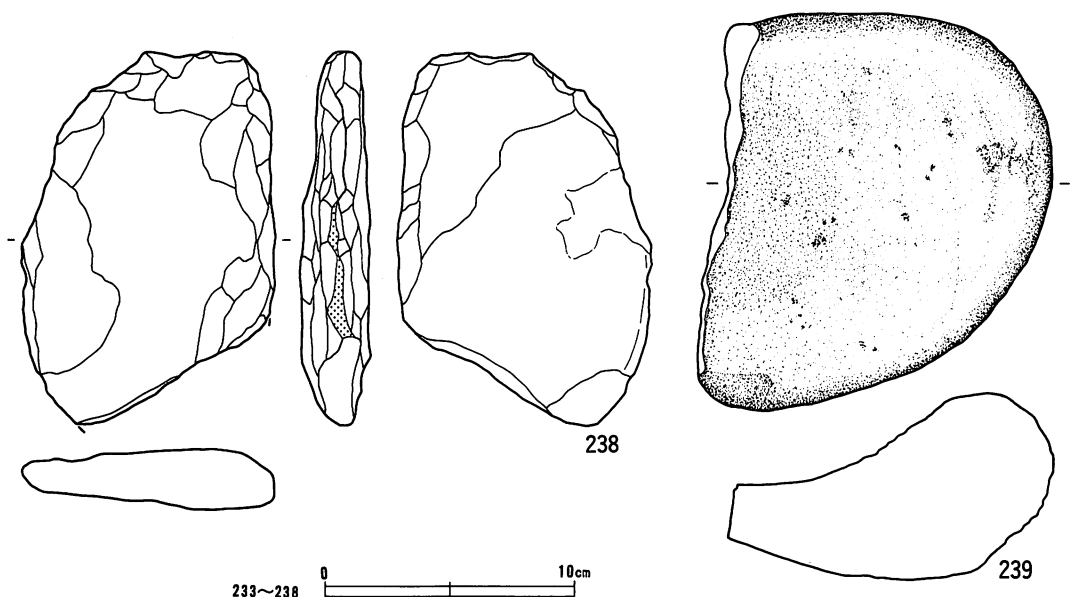
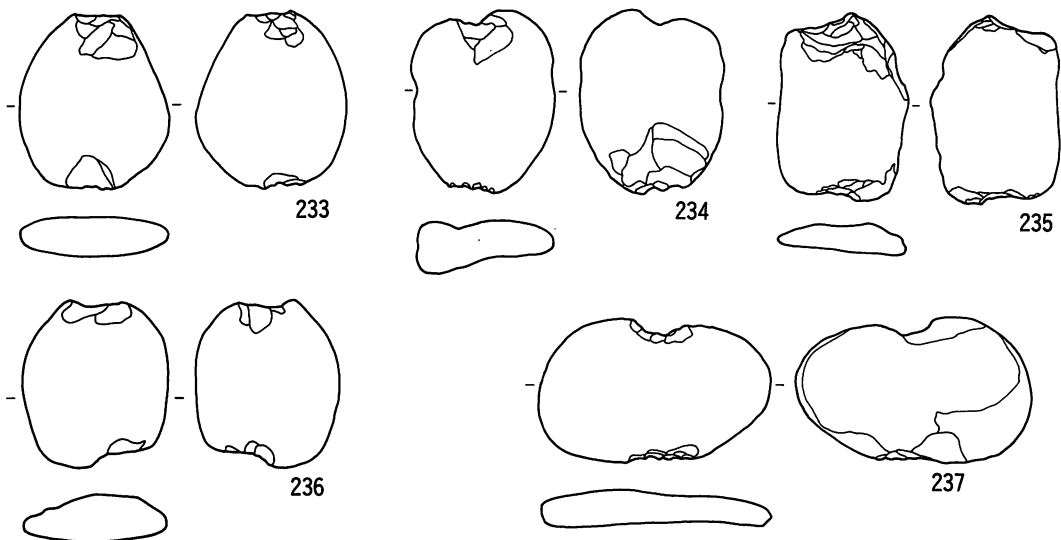
第65図 VII C 6 h 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	計測値	底部径	器高	備考	分類	写真
215	VII C 6 h 住	埋土		無文	(7.8)	4.0	5.2	小型土器、手づくね。		149
216	VII C 6 h 住	床面		R縦位綾絡文。						149
217	VII C 6 h 住	埋土	隆帯上に鹿状工具による鋭い刻み目。隆帯上に円文。							149
218	VII C 6 h 住	埋土		L R縦。片結び縦位綾絡文。						149
219	VII C 6 h 住	埋土	沈線。						III 1 b	149
220	VII C 6 h 住	埋土	複合口縁、口縁直下L R側面圧痕。	L R横。					III 1 b	149
221	VII C 6 h 住	埋土	柳歯条沈線による菱形文。細波状口縁。					222と同一個体。		149
222	VII C 6 h 住	埋土	柳歯条沈線による菱形文。					221と同一個体。		149
223	VII C 6 h 住	埋土	隆帯上棒状工具による刻み。沈線。							150
224	VII C 6 h 住	埋土	L R側面圧痕。						III 1 b	150
225	VII C 6 h 住	埋土	複合口縁。隆帯(粘土紐M字形)。	L R横。						150

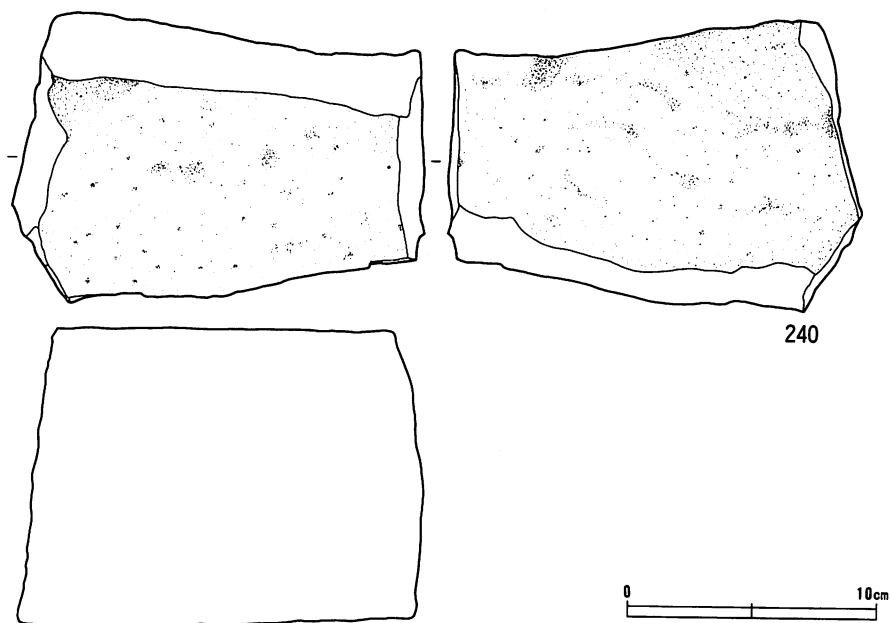
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
226	VII C 6 h 住	Q 3埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	2.8	1.3	0.4	1.34		II b 2	150
227	VII C 6 h 住		石鏃	硬質泥岩	礫石西部	3.7	1.4	0.7	2.72		IV a 2	150
228	VII C 6 h 住		不定形石器	泥質凝灰岩	礫石西部	2.7	3.8	0.3	3.16	平面形は三角状。折断面2辺あり。	I a 1	150
229	VII C 6 h 住		不定形石器	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	3.9	2.8	1.0	8.27	右辺は微小刻離。	I a 1	150
230	VII C 6 h 住	床面	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	6.1	3.3	1.0	13.62	素材面を多く残す。	I a 2	150
231	VII C 6 h 住	ベルト埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	(5.4)	3.4	0.9	(11.65)	折損あるいは折断面あり。	I a 2	150
232	VII C 6 h 住	床面	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	5.4	3.8	0.8	18.46	裏面は自然面。	IV	150

第66図 VII C 6 h 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
233	VII C 6 h 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	7.0	6.0	1.6	100		I	150
234	VII C 6 h 住	Q 4 埋土	石錘	凝灰質硬砂岩	北上山地	7.3	5.8	2.1	100		I	150
235	VII C 6 h 住	Q 4 埋土	石錘	粘板岩	北上山地	7.5	5.1	1.1	60		I	150
236	VII C 6 h 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	6.6	5.8	1.8	100		I	150
237	VII C 6 h 住	床面	石錘	凝灰岩	北上山地	5.8	9.3	1.5	120		II	150
238	VII C 6 h 住	床面	敲磨器類 A 群	珩長質凝灰岩	北上山地	(14.7)	10.1	2.1	(450)		III b 3	150
239	VII C 6 h 住	床面	石皿・台石類	兩輝石安山岩	岩手火山	(8.8)	(21.7)	8.9	(1710)			151

第67図 VII C 6 h 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
240	VII C 6 h 住	床面	石皿・台石類	珉長質凝灰岩	北上山地	(11.6)	(16.2)	11.8	(3590)			151

第68図 VII C 6 h 住居跡出土遺物

れたものである。また半円状偏平打製石器に形状が類似する花崗岩質岩（半円状花崗岩質岩と仮称する。以下同じ。）が3点、Uフレが4点、フレークが15点出土している。

時期 破片資料のみであり詳細は不明であるが、出土遺物から縄文前期後葉から中期初頭の範囲に属すると考えられる。

VII C 7 f 住居跡（遺構番号23）

遺構（第69図、写真図版26）

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置する。埋土と壁土が殆ど同一色で区別がつかず、平面的な検出はできなかった。再堆積層を30cmほど下げたところで焼土が検出され、その斜面下方から遺物が多く出土したことから、遺構であることを想定して精査を進めたところ東壁を検出することができた。斜面下方にあたる西側は流失している。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。残存値は、東西2.1m、南北2mである。

〈壁・壁高〉斜面上方のみ残存し、暗褐色土でやや軟質である。東壁は18.5cm、南壁13cmであ

る。

〈埋土〉検出が遅れたため埋土断面図をとれなかった。褐色ないしは暗褐色土で、締まりに欠ける。

〈床・柱穴・施設〉再堆積層である暗褐色土を床としやや軟質である。柱穴は検出されなかった。

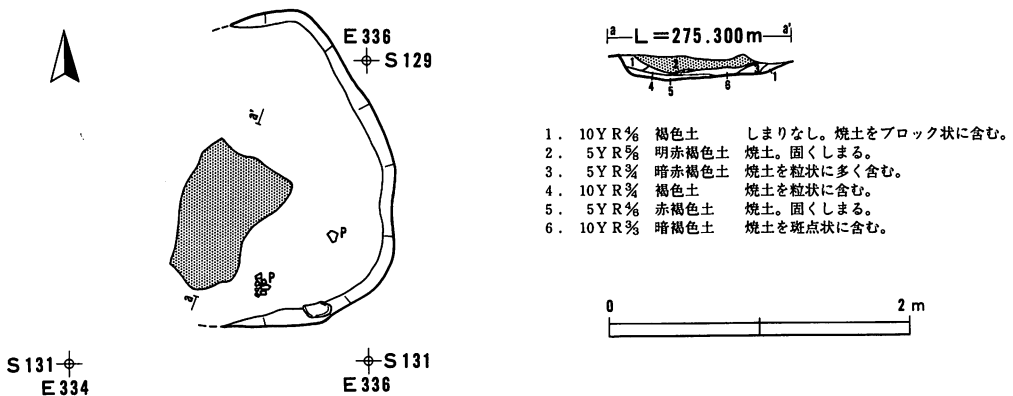
〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は55×100cmの範囲に分布し、厚さは最大12cmである。床面を構成する暗褐色土がレンズ状に焼成をうけたもので、固く締まっている。

遺物 (第70図、写真図版 151)

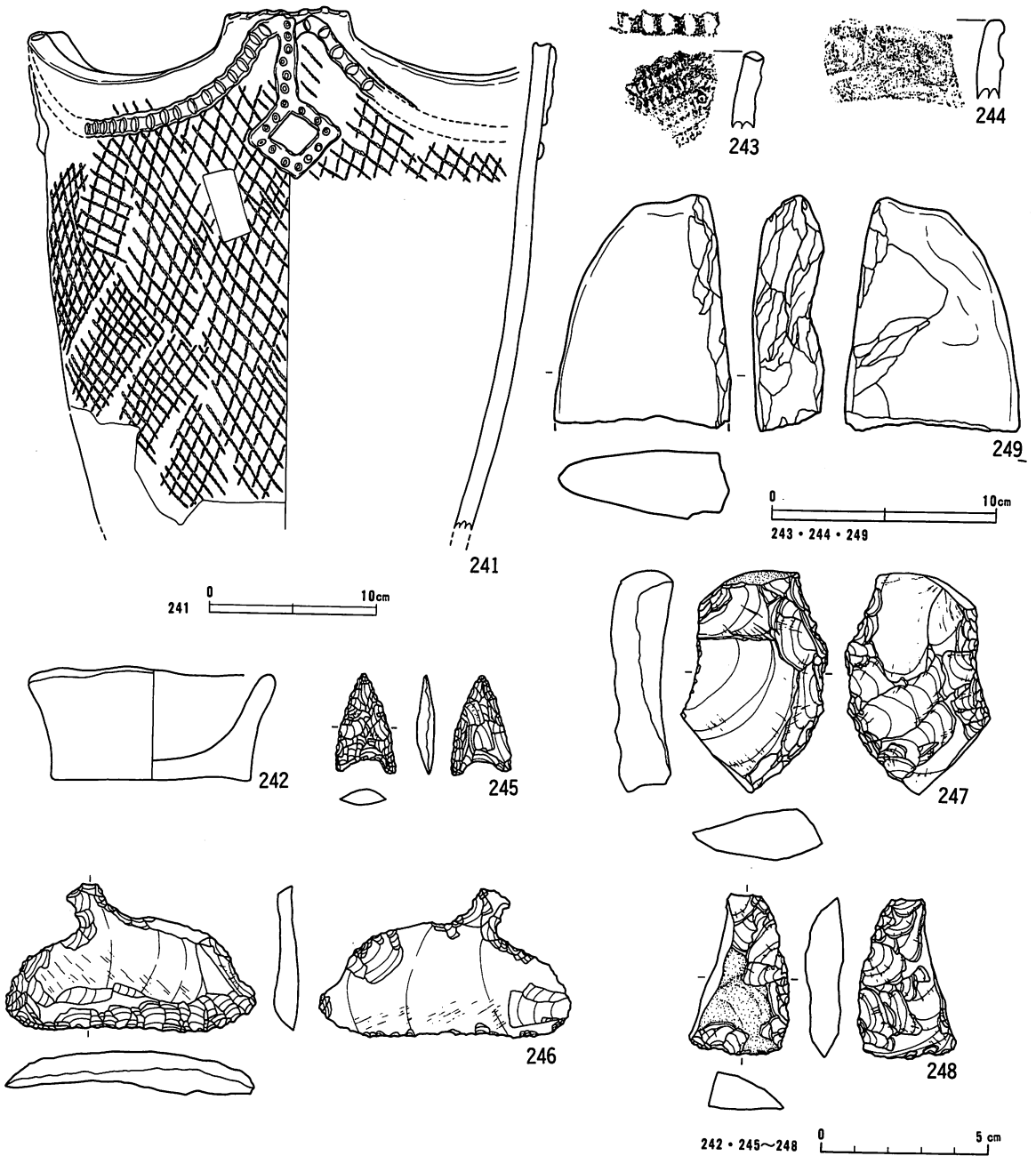
〈土器〉241は床面出土の破片と、遺構外で取り上げたものと接合したものである。4つの弁状突起をもつ波状口縁で、1対はやや高く他の1対はそれよりやや低いと考えられる。弁状突起の口唇部には右方向から指頭が押圧される。口唇部はなでられていて平らである。胴部には地文施文後に隆帯を貼り付けているが、頂部と頂部を連結するものと、頂部から垂下して菱形を形成するものとある。前者はやや平たい隆帯上に左側の隆帯には左側から、右側のそれには右側から指頭を押圧しているが、剥落のため図示した部分以外は不明である。後者は断面形が長方形状のやや角ばった隆帯上に、器体に対して直角に竹管が刺突される。242は手づくねによる無文の小型土器である。

〈石器〉248は自然面を残し粗い剥離である。打製石斧の欠損品の可能性もある。図示した他に床面から半円状花崗岩質岩が1点、埋土からUフレ1点、フレイク7点が出土している。

時期 床面土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。



第69図 VII C 7 f 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
241	VII C 7 f 住	床面	波状口縁、弁状突起、突起頂部に指頭状圧痕、陸帯上竹笥割突、陸帯上指頭状圧痕。	L網目燃糸文。	(31.6)	—	(30.8)		II 6 a f	151
242	VII C 7 f 住	床面	無文		7.4	6.0	3.4			151
243	VII C 7 f 住	Q 4 埋土	波状口縁。絡糸体圧痕。口唇部棒状工具による押圧。						II 8 b	151
244	VII C 7 f 住	Q 4 埋土	凹文(盲孔)。							151

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
245	VII C 7 f 住		石鏃	流紋岩	磐石西部	2.0	1.8	0.5	1.76		II c 2	151
246	VII C 7 f 住	Q 1 埋土	石匙	硬質泥岩	新第三系中新統	4.3	7.5	0.6	25.28		II b	151
247	VII C 7 f 住	Q 1 埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	6.6	4.3	1.4	51.18		I a 3	151
248	VII C 7 f 住	Q 1 埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	4.8	3.0	1.1	15.06		IV	151
249	VII C 7 f 住	Q 4 埋土	敲磨器類 A 群	凝灰岩千枚岩	北上山地	10.3	(7.8)	7.6	(285)	欠損品。		151

第70図 VII C 7 f 住居跡出土遺物

ⅦC 8 f 住居跡 (遺構番号24)

遺構 (第71図、写真図版26)

〈検出状況〉西尾根の西斜面に位置する。埋土と壁土が殆ど同一色で区別がつかず、平面的な検出はできなかった。再堆積層下位で土器が多く出土し、焼土も検出されたことから遺構であることを想定して精査を進めたところ東壁を検出することができた。斜面下方にあたる西側は流失している。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。残存値は、東西1.9m、南北3.6mである。

〈壁・壁高〉斜面上方のみ残存し、暗褐色土でやや軟質である。やや外傾する。壁高は東壁22cmである。

〈埋土〉褐色土で構成されるが、下位にはにぶい褐色土を混入する。

〈床・柱穴・施設〉再堆積層である暗褐色土を床としやや軟質で凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

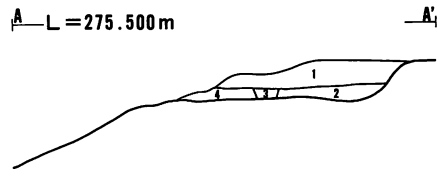
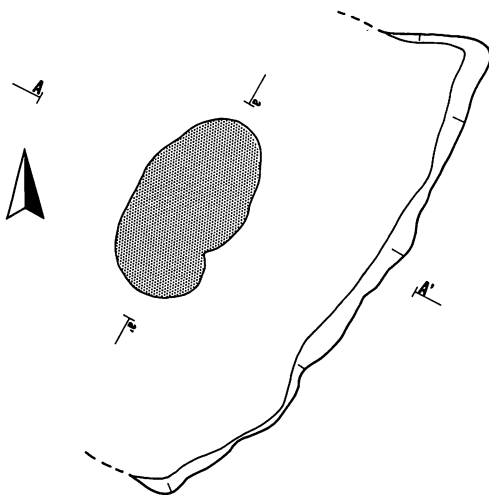
〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は38×65cm楕円形状に分布し、厚さは最大7cmである。木根により一部攪乱されている。

遺物 (第72図、写真図版152)

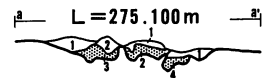
〈土器〉床面からは251が、埋土から250を含め450gが出土した。250は頸部に爪形を連続押圧した隆帯を貼付けて口縁部文様体を区画し、口縁部には絡条体圧痕により「V」または「X」を連続させている。胴部地文は第2種結束による羽状縄文である。

〈石器〉252、253は粗い剥離だが全面を加工している。254は欠損品である。加工は粗い。

時期 床面出土土器から、縄文前期末葉に属すると考えられる。



1. 7.5 Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
2. 7.5 Y R% 褐色土 しまりなし。にぶい褐色土を綿状に含む。
3. 7.5 Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
4. 10 Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。



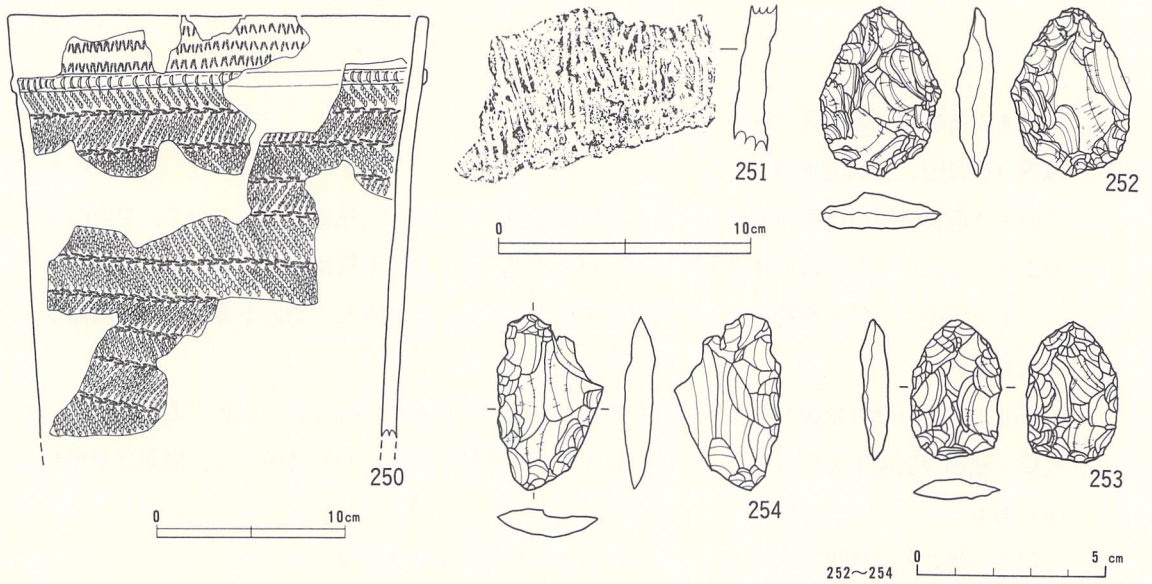
1. 7.5 Y R% 明褐色土 しまりなし。焼土を少量含む。
2. 7.5 Y R% 褐色土 しまりなし。
3. 5 Y R% にぶい赤褐色土 焼土。しまりなし。
4. 5 Y R% 明赤褐色土 焼土。しまりなし。

S 128
E 338

S 128
E 338

第71図 ⅦC 8 f 住居跡

0 2m



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
250	VII C 8 f 住	埋土	絡条体圧痕、隆帯上(繩端による?) 圧痕。	L R × R L 第2種結束羽状繩文。	(22.3)	—	(22.3)		II 8 b	152
251	VII C 8 f 住	床面		R 撚糸文。						152

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
252	VII C 8 f 住	床面	尖頭器様石器	粘板岩	北上山地	4.5	3.2	0.8	11.30			152
253	VII C 8 f 住	埋土	尖頭器様石器	泥質凝灰岩	礮石西部	3.7	2.5	0.7	5.83			152
254	VII C 8 f 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.6	2.8	0.7	9.97	折損部あり。	IV	152

第72図 VII C 8 f 住居跡出土遺物

VII C 8 g 住居跡 (遺構番号25)

遺構 (第73図、写真図版27)

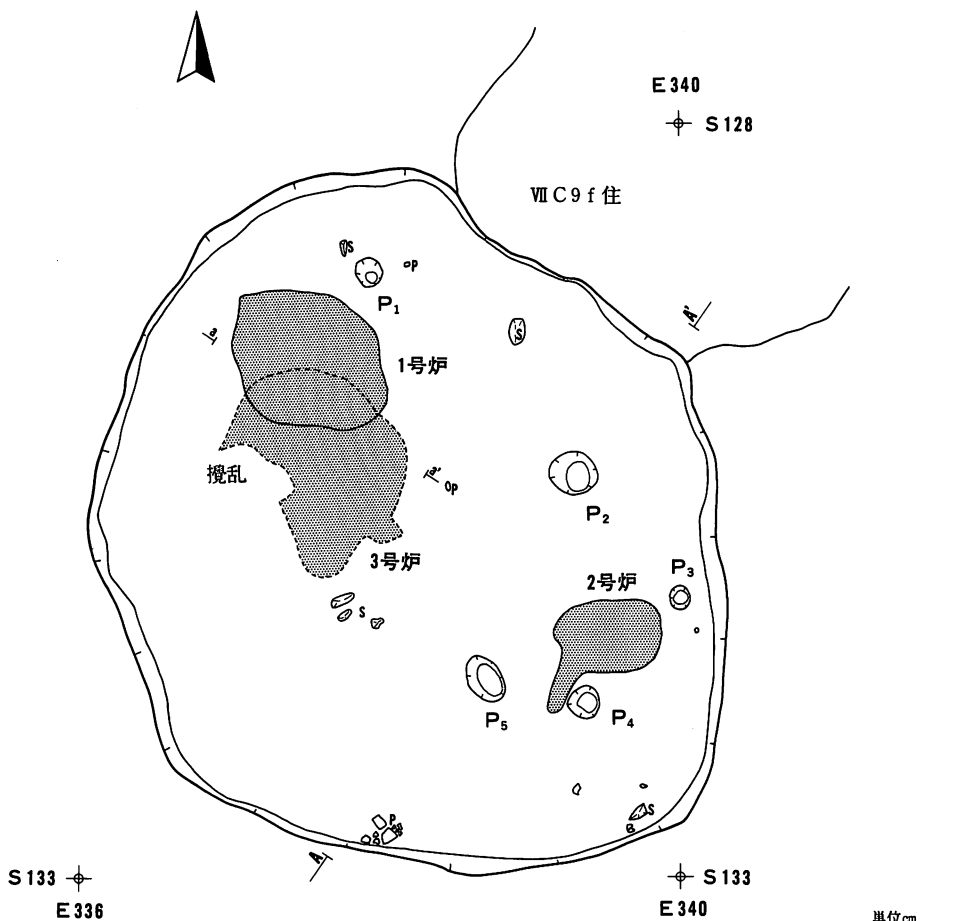
〈検出状況〉西尾根の頂部に位置する。再堆積層を10cm程下げたところで、若干の土の濁りとして検出された。VII C 9 f 住居跡と北壁で重複する。図面をとれなかったが精査時の観察で、本住居の埋土がVII C 9 f 住居跡まで入り込むことが確認されており、本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉不整な円形で、径は4.2mから5mの範囲にある。

〈壁・壁高〉再堆積層を構成する褐色土でやや軟質である。やや外傾する。壁高は東壁15cm、西壁で8cm、南壁19cm、北壁25cm、VII C 9 f 住居跡との重複部分の床面の比高は2～3cmである。

〈埋土〉上位は褐色土、下位は暗褐色土が主体をなし、中位はその混土でやや赤味を帯びる。いずれも締まりに欠ける。

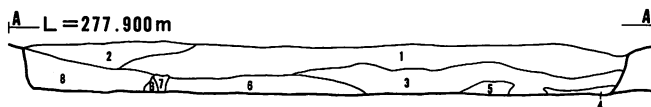
〈床・柱穴・施設〉ほぼ水平で平坦であり、固く締まっている。黄褐色土と褐色土の混土であ



E 340

単位cm

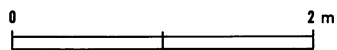
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	18×20	28×32	16×16	20×22	23×30
深 さ	26	18	25	65	11



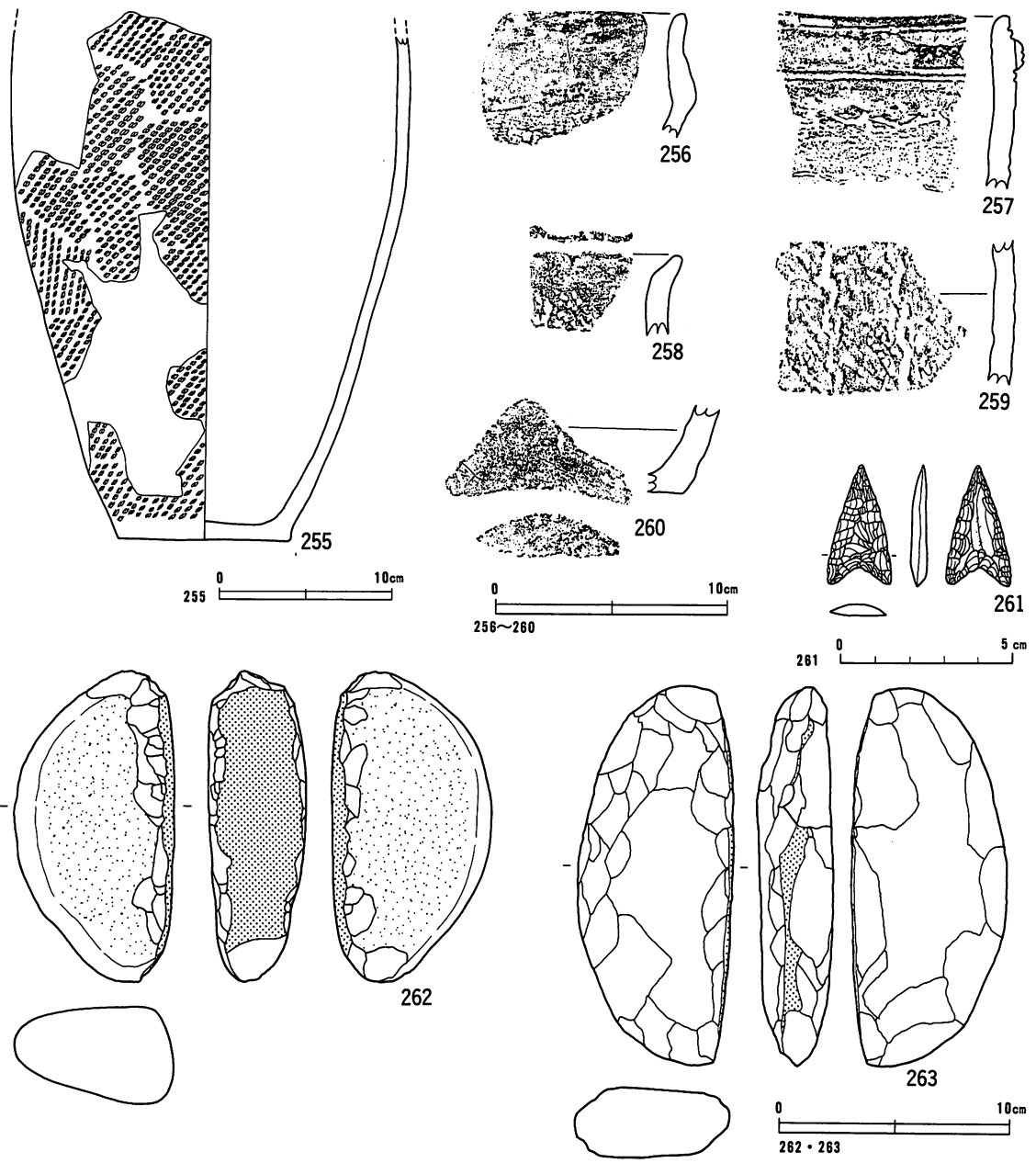
- | | | |
|-----------------|----------------|------------------|
| 1. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。草木根多い。 | 5. 10YR% 黒褐色土 |
| 2. 7.5YR% 橙色土 | | 6. 7.5YR% 暗褐色土 |
| 3. 5YR% にふい赤褐色土 | 小角礫を含む。 | 7. 10YR% にふい黄橙色土 |
| 4. 7.5YR% 灰褐色土 | 黄褐色土をブロック状に含む。 | 8. 5YR% 暗赤褐色土 |



- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. 5YR% 明赤褐色土 | 焼土。しまりなし。 |
| 2. 10YR% 黒褐色土 | しまりなし。焼土をブロック状に含む。 |
| 3. 5YR% 橙色土 | 焼土。 |
| 4. 5YR% 赤褐色土 | 焼土。小角礫を含む。 |
| 5. 10YR% 黄褐色土 | 焼土をブロック状に含む。 |



第73図 VII C8 g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
255	VII C 8 g 住	床面上		R L R 縦	-	10.0	(30.5)			152
256	VII C 8 g 住	床面	口縁部磨消し無文。肩部竹管凹文。	0 段多条。R L 縦。					III 1	152
257	VII C 8 g 住		竹管内部による平行沈線。半截竹管刺突。	R 燃糸文。					III 1	152
258	VII C 8 g 住	炉	花卉状口縁。	L R 縦。片結び縦位綾格文。						152
259	VII C 8 g 住	床面		L R 縦。片結び縦位綾格文。						152
260	VII C 8 g 住	床面	無文。						III 1	152

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
261	VII C 8 g 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	雫石西部	3.5	1.8	0.4	2.22		II d 2	152
262	VII C 8 g 住	床面	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	13.4	7.0	4.2	540	平滑面 2 面。	II a 2	152
263	VII C 8 g 住	焼土の中	敲磨器類 A 群	粘板岩質千枚岩	北上山地	16.2	6.7	2.9	480		III b 3	152

第74図 VII C 8 g 住居跡出土遺物

る。柱穴は5個検出された。P1とP3は位置・規模から対応すると考えられる。

〈炉〉床面で2基、床面よりやや下のレベルで1基の計3基の焼土が検出された。位置・規模・焼成の様子から地床炉と考えられる。床面で検出された炉のうち、西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とし、床面より下のレベルで検出されたものを3号炉とする。1号炉の焼土は90×120cmの楕円形状に分布し、厚さは最大10cmで固い。2号炉は50×70cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大2cmである。色調は淡いが床面が焼成を受けたものである。3号炉は1号炉の上面から5～6cm下のレベルで検出された。焼土は90×140cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大20cmで固く締まっている。1号炉と2号炉の間には黒褐色土が堆積する。炉の使用は2時期と考えられるが、それに伴う建替えや平面形等は確認できなかった。このことから、3号炉は床を掘り込んで使用したもので、その後黒褐色土で埋めて再びその位置を炉として使用したと考えられる。

遺物（第74図、写真図版152）

〈土器〉床面から2775g、埋土から475g出土した。255は口縁部を欠損するが、複節の斜縄文を地文とし、焼成良好で硬質である。256は頸部で屈曲する器形で、口縁部は無文である。無文帯との境界に竹管刺突文が連続する。

〈石器〉262は磨面の幅がほぼ器体の最大幅に等しい。磨面断面形は凸状である。

時期 床面出土土器と重複関係から、縄文時代中期初頭と考えられる。

VII C 8 j 住居跡（遺構番号26）

遺構（第75図、写真図版28）

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで、若干土の濁りみられ、斜面下方において焼土が検出されたことから確認できた。東側は流失により不明である。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明であるが、斜面に平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、残存値で1.56×3mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く、凹凸がある。ほぼ直立する。壁高は西壁12cm、南壁10cmである。

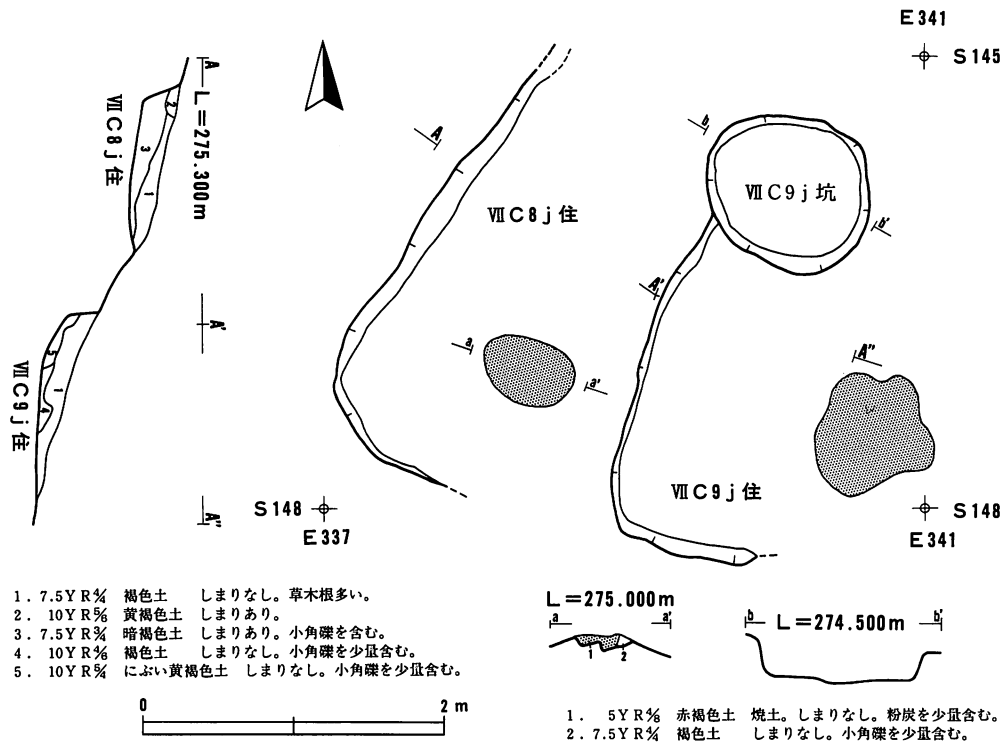
〈埋土〉上位は褐色土、下位は暗褐色土が主体をなす。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土でやや軟質であり、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は34×64cmの楕円形状に分布し、厚さは最大5cmである。固く締まっている。

遺物（第76図、写真図版153）

〈土器〉床面から75g、埋土から770g出土した。264は波状口縁頂部の突起先端部が2又と



第75図 VII C 8 j ・ VII C 9 j 住居跡

なっている。265は棒状工具による沈線が施文され、比較的硬質である。ほかに横位綾絡文の破片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、床面出土土器片から縄文時代前期末葉から中期初頭に属するものと考えられる。

VII C 9 f 住居跡 (遺構番号27)

遺構 (第77図、写真図版28)

〈**検出状況**〉西尾根の頂部に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで、若干土の濁りがみられたことから検出した。VII C 8 g 住居跡と南西壁で重複している。図面が取れなかったが精査時点の観察で、VII C 8 g 住居跡の埋土が本住居まで入り込むことから、VII C 8 g 住居跡の方が新しいと考えられる。

〈**形状・規模**〉径2.8m前後の円形である。

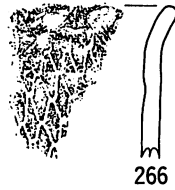
〈**壁・壁高**〉北壁は基盤層、東西壁は暗褐色土でほぼ直立する。壁高は東壁40cm、西壁26cm、



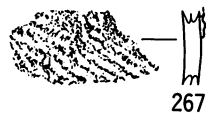
264



265



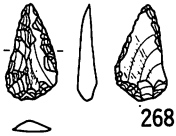
266



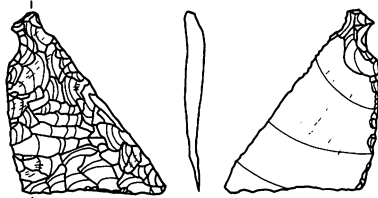
267

VII C 8 j 住

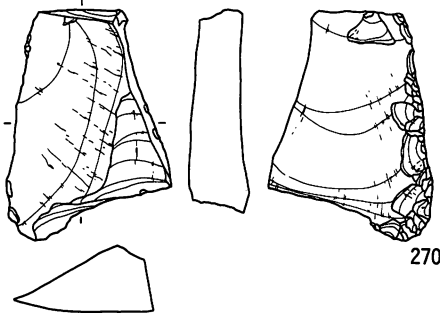
264~267 0 10cm



268

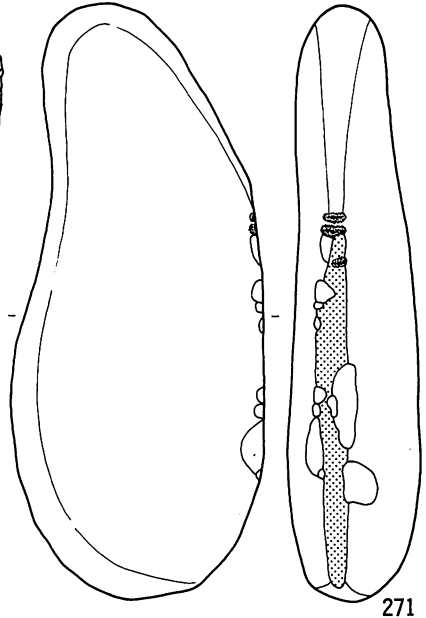


269



270

268~270 0 5cm



271

VII C 9 j 住

271 0 10cm

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
264	VII C 8 j 住	埋土	口縁部突起。	L R 横。						153
265	VII C 8 j 住	床面	沈線。	L R 横。					III 1	153
266	VII C 9 j 住	床面	花卉状口縁。	R 網目状燃糸文。					II 6b ㄊ	153
267	VII C 9 j 住	埋土	隆帯上に縄文。	L R 縦。					III 1 c	153

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
268	VII C 9 j 住	床面	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	2.5	1.3	0.5	1.24		III 1	153
269	VII C 9 j 住		石匙	硬質泥岩	礮石西部	4.8	4.2	1.1	11.01		I b 2	153
270	VII C 9 j 住		不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	6.1	4.3	1.8	42.04		IV	153
271	VII C 9 j 住	床面	敲磨器類 A 群	緑色凝灰岩	奥羽山地	24.6	10.1	5.1	1660		I a 1	153

第76図 VII C 8 j・VII C 9 j 住居跡出土遺物

北壁30cmである。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、全体に締まりを欠く。下位では小角礫が多く混入する。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉石囲炉1基を検出した。中央からやや南西寄りに位置する。偏平な垂角礫を8個用いて、ほぼ長方形に構成される。南西側は石が抜き取られた痕跡がある。その方向はⅦC8g住居跡と重複する方向と一致し、何等か関係があった可能性があるが、埋土からは確認できなかった。規模は、構成礫の外法で短軸が92cm、長軸は推定で110cmである。礫の大きさは10cmから50cmまであり、礫自体には被熱の痕跡は残っていない。うち1個の石質は、古生界の北上山地産珪長質凝灰岩である。

遺物（第78図、写真図版153）

〈土器〉小破片のみの出土である。275は焼土内からの出土であり、他の土器とは時期が異なり本遺構に先行する可能性がある。

〈石器〉283は偏平な自然礫の両側辺に擦痕があり、両平坦部に凹部を形成する。他に床面からフレーク1点が出土している。

時期 破片資料のみであるが、床面出土土器から縄文中期初頭に属すると推定される。

ⅦC9i-3住居跡

遺構（第79図、写真図版29）

〈検出状況〉西尾根の頂部付近の東斜面に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで、若干土の濁りとして検出した。当初1棟と考えられたが、埋土断面と床面の高さから、西側でⅦC9i-4住居跡と重複していることが分かった。またⅦC9i-3住居跡も、床面精査で本住居に先行する周溝が検出され、建替えをしていることが分かった。新期のものをⅦC9i-3a住居跡、古期のものをⅦC9i-3b住居跡として記載する。南側でⅦC9j-2住居跡を切る。本住居の床面下から原位置を保つ焼土が検出された。これはⅦC9i-3b住居跡より更に古期のものである。東側は斜面のため流失していて不明である。

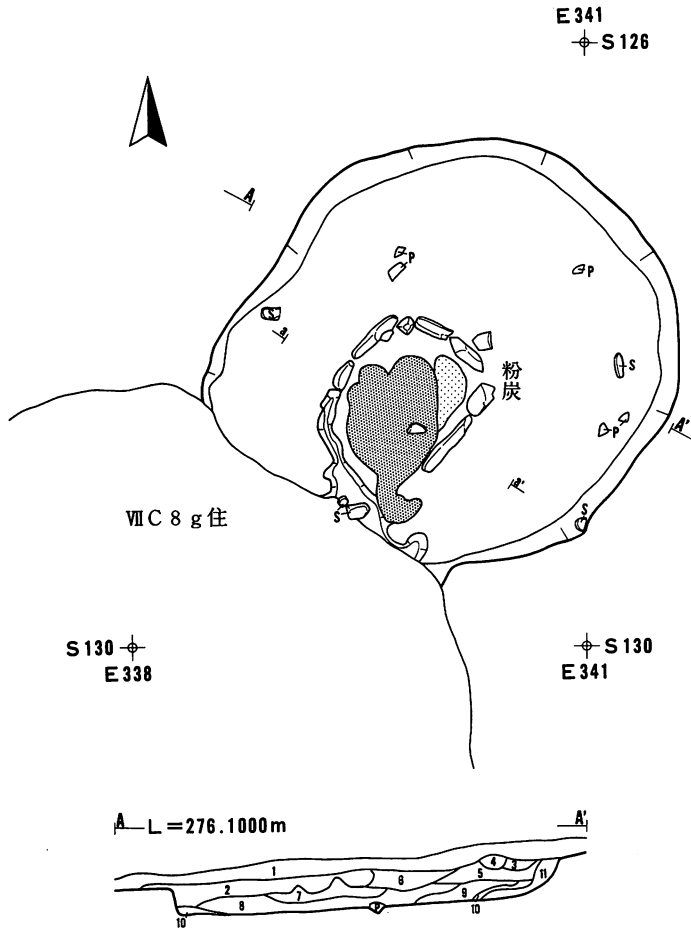
ⅦC9i-3a住居跡（遺構番号28）

〈形状・規模〉詳細は不明であるが方形ないしは長方形を呈するものと推定される。南北4.9m、東西は残存値で4.3mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁10cm、南壁15cm、北壁5cmである。

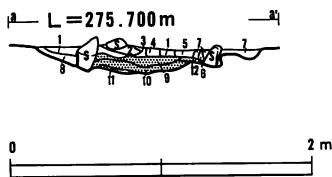
〈埋土〉3層に大別される。最下層には粉炭を含む。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方は基盤層、他はにぶい黄褐色土で全体にやや凹凸がある。柱穴は



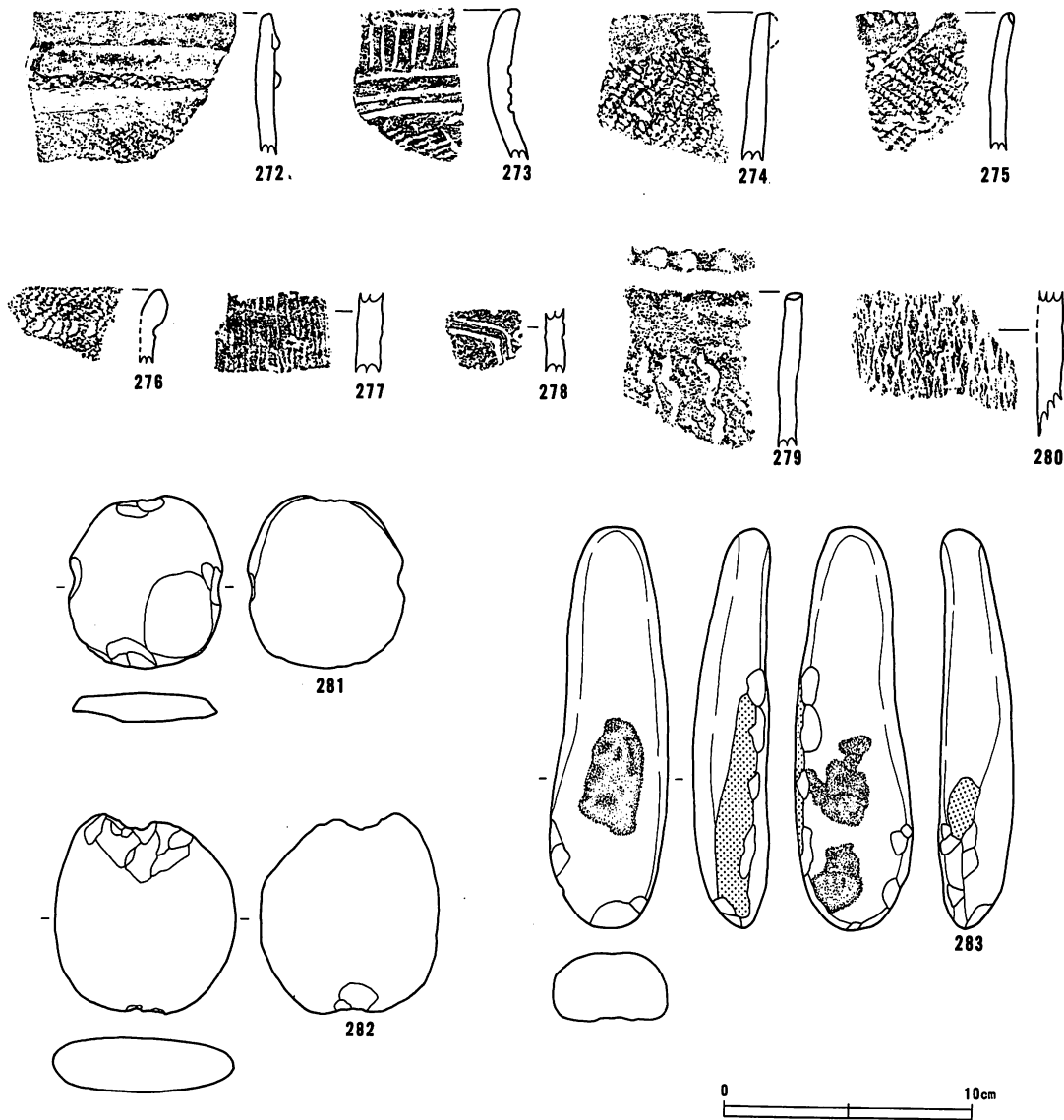
- 1. 7.5YR% 褐色土 しまりなし。草木根多い。
- 2. 5YR% 赤褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
- 3. 7.5YR% 明褐色土 しまりなし。
- 4. 7.5YR% 暗褐色土 しまりなし。黒色土を含む。
- 5. 5YR% 赤褐色土
- 6. 5YR% ぶい赤褐色土

- 7. 7.5YR% 褐色土 小角礫を含む。
- 8. 7.5YR% 暗褐色土 しまりあり。黄褐色土、黒色土を含む。
- 9. 7.5YR% ぶい褐色土
- 10. 7.5YR% 明褐色土 黄褐色土を含む。
- 11. 7.5YR% ぶい橙褐色土



- 1. 10YR% 褐色土 しまりなし。砂を含む。
- 2. 705YR% 明褐色土 しまりなし。砂を少量含む。
- 3. 10YR% 明黄褐色土 しまりなし。小角礫を多量に含む。
- 4. 10YR% 明黄褐色土 しまりなし。焼土を粒状に含む。
- 5. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
- 6. 7.5YR% 褐色土 しまりなし。砂、小角礫を含む。
- 7. 10YR% 黒褐色土 しまりなし。砂、小角礫を含む。
- 8. 10YR% ぶい黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
- 9. 5YR% ぶい赤褐色土 しまりなし。粉炭を含む。
- 10. 5YR% 明赤褐色土 しまりなし。砂を少量含む。
- 11. 5YR% 橙褐色土 しまりなし。砂を少量含む。
- 12. 5YR% 明赤褐色土 しまりなし。

第77図 VII C 9 f 住居跡



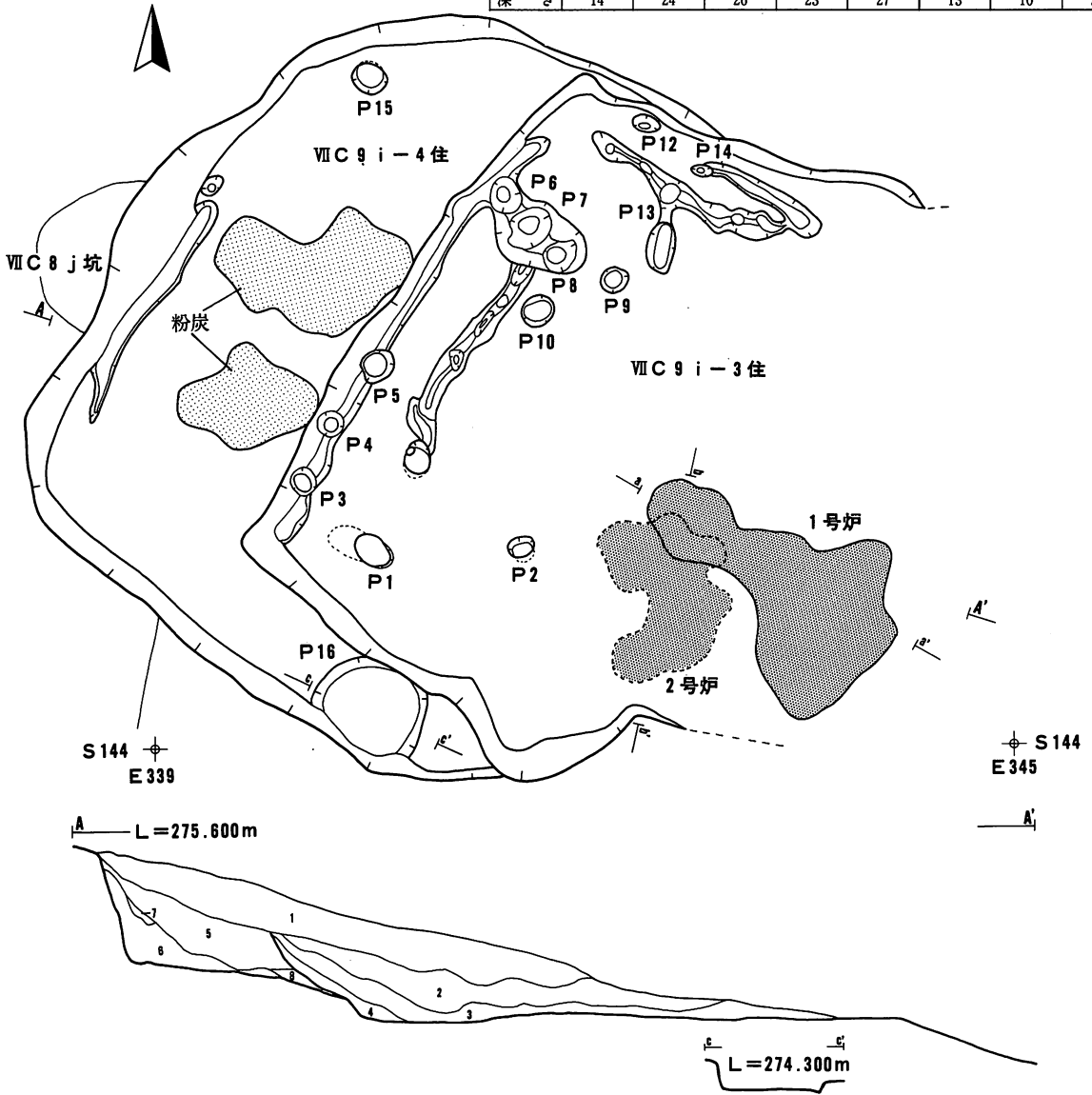
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
272	VII C 9 f 住	床面	複合口縁。隆帯上地文と同じ原体による回転施文。	R L横。					III b	153
273	VII C 9 f 住	床面	沈線文。	R L縦。					III a	153
274	VII C 9 f 住	炉内	折り返し口縁(剝離)。	L R横。					III b	153
275	VII C 9 f 住	炉内	口唇端棒状工具による刻み。	R L横。片結び横位綾絡文。					II 3	153
276	VII C 9 f 住		口縁部肥厚。口縁直下に繩端?による爪形圧痕。	L R横。					III b	153
277	VII C 9 f 住	床面		R 撚糸文。						153
278	VII C 9 f 住	床面	半截竹管内面による平行沈線。竹管刺突。							153
279	VII C 9 f 住	埋土	口縁部無文。口唇部指頭状圧痕。	L R縦。片結び縦位綾絡文。					II b 才	153
280	VII C 9 f 住	炉内		R 網目状撚糸文。						153

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
281	VII C 9 f 住	炉内	石鉢	凝灰岩	北上山地	6.8	6.3	1.1	80		III	153
282	VII C 9 f 住	埋土	石鉢	琉長質凝灰岩	北上山地	8.0	7.3	2.2	190		I	153
283	VII C 9 f 住	床面	敲磨器類 A 群	緑色凝灰岩	奥羽山地	16.1	4.6	2.6	310	磨面 2 面。+ 凹石。	II a 2	153

第78図 VII C 9 f 住居跡出土遺物

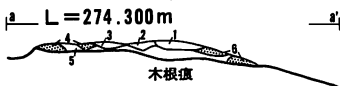
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
開口部径	20×26	17×20	12×17	18×19	21×22	22×28	26×26	21×24
深 さ	47	56	12	25	34	45	50	46

P 番号	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
開口部径	18×18	20×22	16×20	14×20	14×17	10×14	22×24	70×80
深 さ	14	24	26	23	27	13	10	22

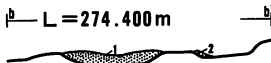


- 1. 10Y R% 黄褐色土 しまなし。草木根多い。
- 2. 7.5Y R% 黄褐色土 しまなし。砂、小角礫を含む。
- 3. 10Y R% 黄褐色土 しまあり。褐色土を縞状に含む。
- 4. 10Y R% 黄褐色土 しまあり。小角礫、砂、炭化物を斑点状に含む。

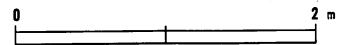
- 5. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。小角礫を多く含む。炭化物を少量含む。
- 6. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。小角礫、炭化物を多量に含む。
- 7. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。小角礫を多く含む。
- 8. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫、粉炭を多く含む。



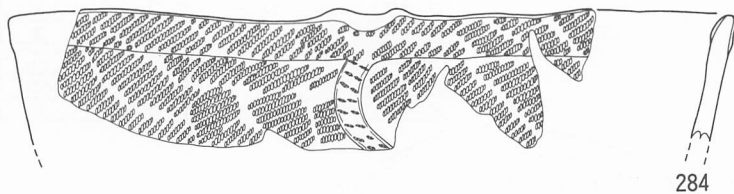
- 1. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。草木根多い。
- 2. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。
- 3. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
- 4. 5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまる。
- 5. 10Y R% 褐色土 ややしまる。草木根多い。
- 6. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまる。



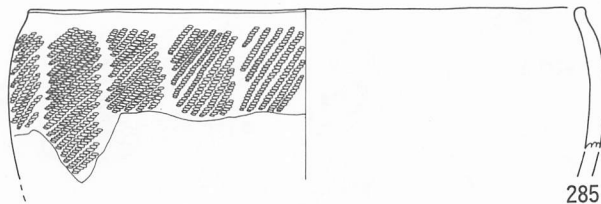
- 1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまる。
- 2. 5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりなし。粉炭を少量含む。



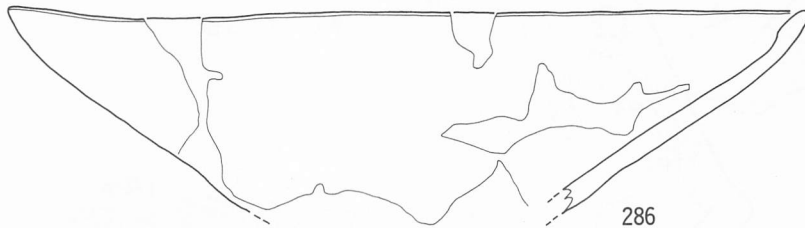
第79図 VII C 9 i - 3・VII C 9 i - 4住居跡



284

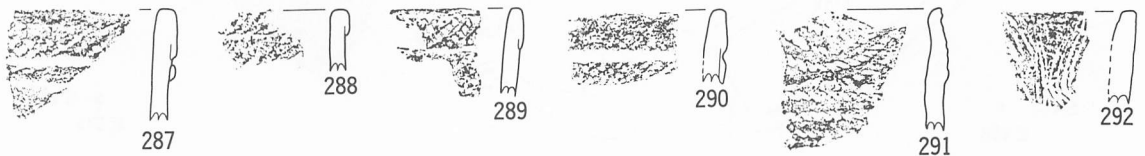


285



286

0 10cm



287

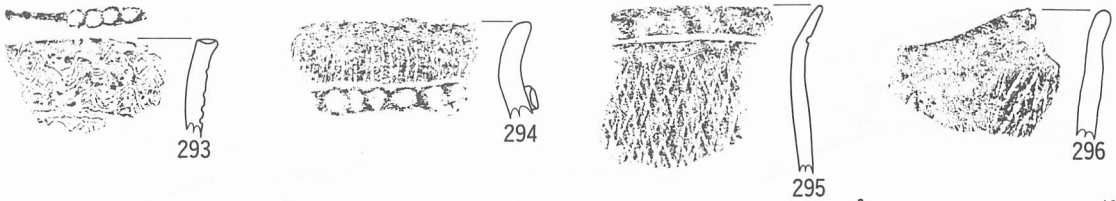
288

289

290

291

292



293

294

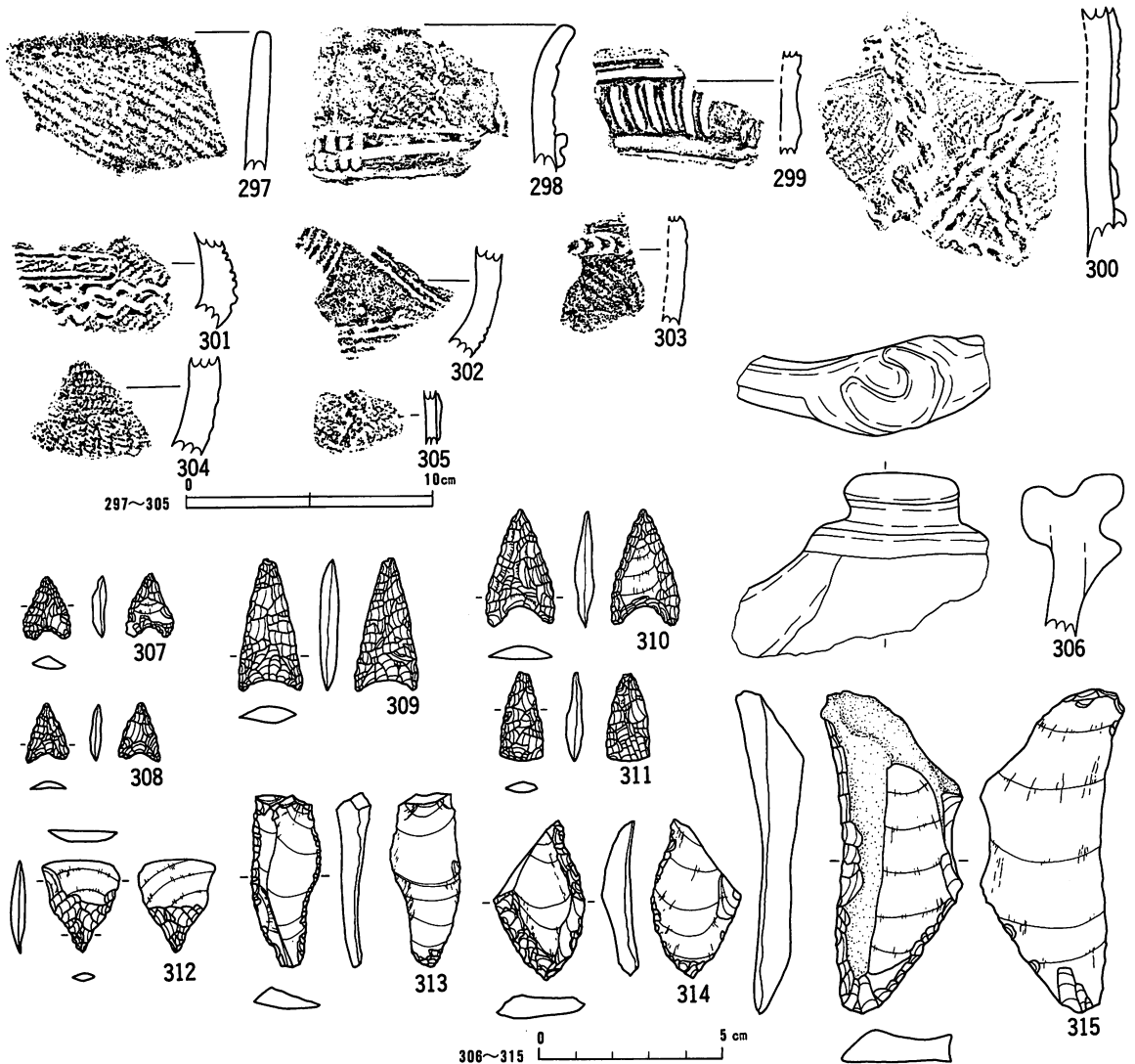
295

296

0 10cm

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
284	VII C 9 i - 3 住	埋土	複合口縁、山形状突起(2山)、縦位の弧状隆帯上にも施文	L R横	(39.0)	-	(6.7)		III b	154
285	VII C 9 i - 3 住	埋土		R L縦	(29.6)	-	(9.0)		III d	154
286	VII C 9 i - 3 住	埋土	複合口縁。	無文	(42.8)	-	(10.8)		III d	154
287	VII C 9 i - 3 住	埋土	複合口縁。隆帯上にも縄文。	L R横。					III b	154
288	VII C 9 i - 3 住	埋土	複合口縁。	L R横。					III b	154
289	VII C 9 i - 3 住	埋土	複合口縁。	L R横。					III b	154
290	VII C 9 i - 3 住	埋土	複合口縁。	L R横。					III b	154
291	VII C 9 i - 3 住	埋土	波状口縁。	L R側面圧痕。					II 6	154
292	VII C 9 i - 3 住	埋土	櫛歯状沈線。						II 9 a	154
293	VII C 9 i - 3 住	埋土	口唇部指頭状圧痕(爪跡明瞭)。半截竹管平行鋸歯状沈線。						III a	154
294	VII C 9 i - 3 住	埋土	隆帯上に左方向からの指頭状圧痕。	R 捻糸文。					II 6 b 7	154
295	VII C 9 i - 3 住	埋土	口縁部無文。口縁下沈線。	R 網目状捻糸文。					II 6 b 7	154
296	VII C 9 i - 3 住	埋土	波状口縁。	L 捻糸文。					II 6	154

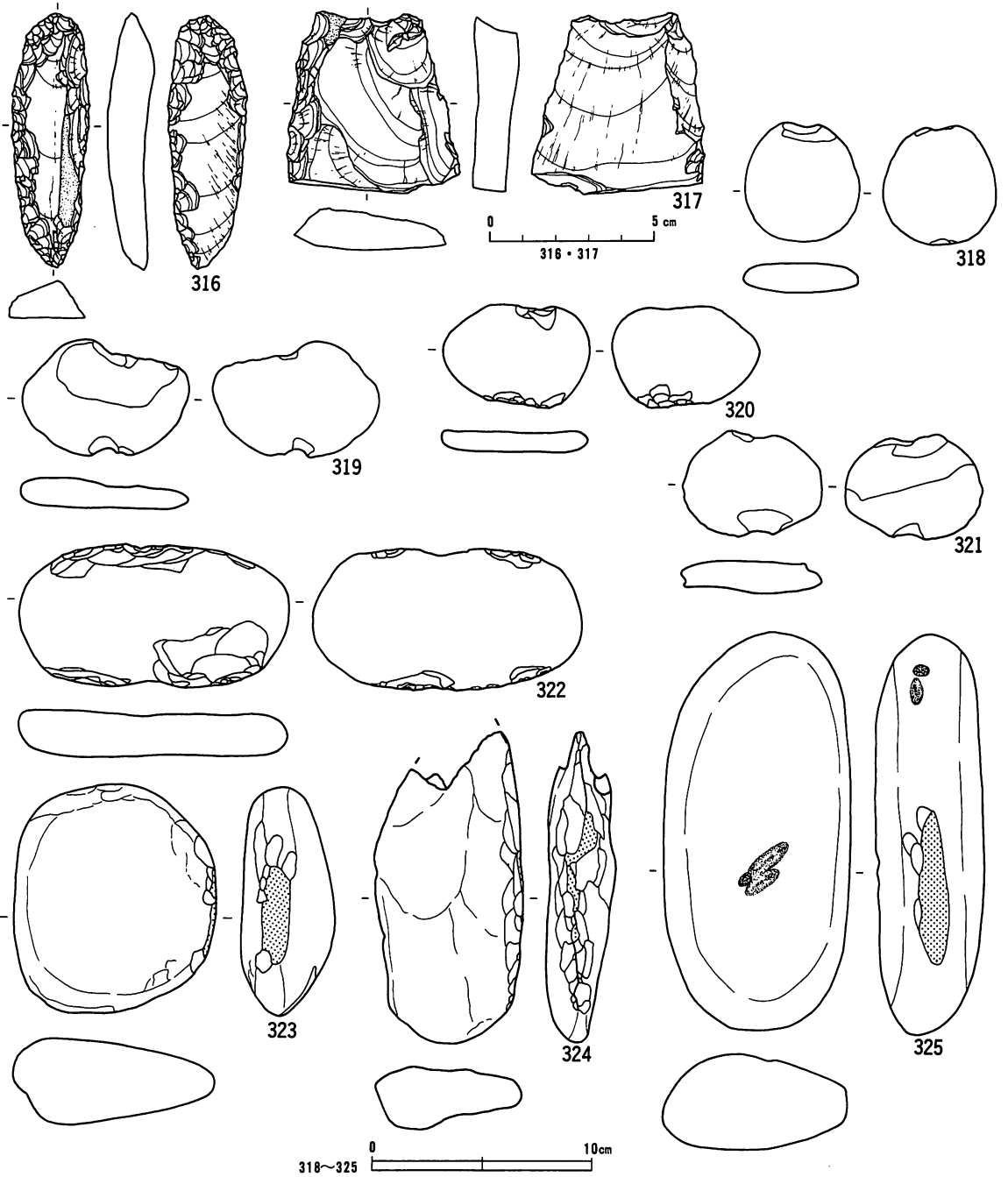
第80図 VII C 9 i - 3 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	底部径	器高	備考	分類	写真
297	ⅦC9 i - 3住	埋土		L R縦。				Ⅲ1 d	154
298	ⅦC9 i - 3住		隆帯上棒状工具による沈線刻み。	L R縦,片結び縦位幾格文。				Ⅲ1 a	154
299	ⅦC9 i - 3住	埋土	沈線。					Ⅲ1 a	154
300	ⅦC9 i - 3住	埋土	隆帯上L R施文,半截竹管平行沈線による方形区画,棒状工具による波状沈線2条。					Ⅲ1 a	154
301	ⅦC9 i - 3住	埋土	波状沈線。半截竹管内面による平行沈線。	L R横。				Ⅲ1 a	154
302	ⅦC9 i - 3住		半截竹管内面による平行沈線。					Ⅲ1 a	154
303	ⅦC9 i - 3住	埋土	半截竹管内面による押し引き。	L R縦。				Ⅲ1 a	154
304	ⅦC9 i - 3住	埋土		0段多条L R。			縦維は微量含むか?		154
305	ⅦC9 i - 3住	埋土	隆帯上に縄文。					Ⅲ1 c	154
306	ⅦC9 i - 3住	埋土	円環状突起。						154

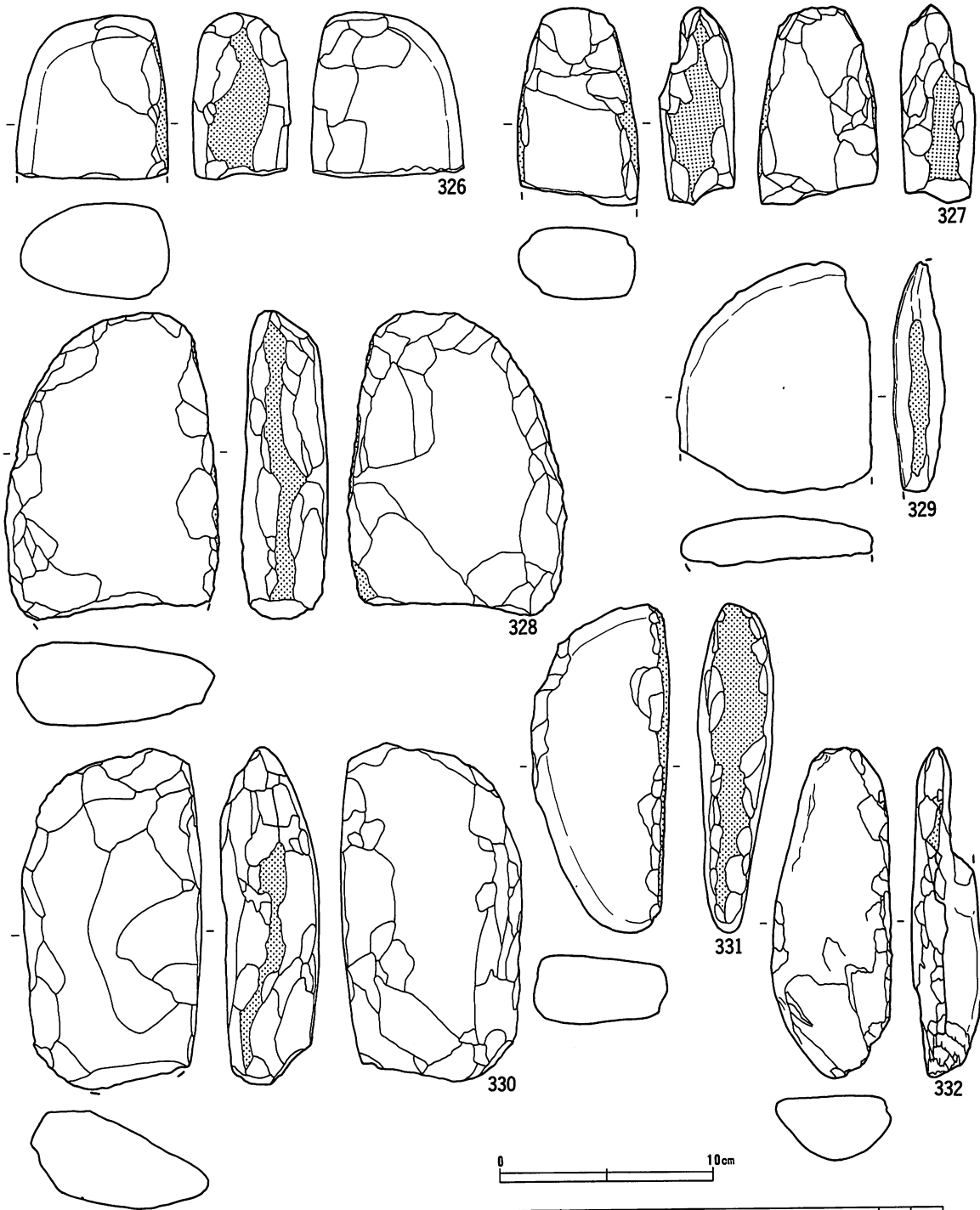
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
307	ⅦC9 i - 3住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	1.7	1.3	0.3	0.47		Ⅱc 2	155
308	ⅦC9 i - 3住		石鏃	チャート	北上山地	1.6	1.1	0.2	0.28	小型。脚部一部欠損。	Ⅱd 2	155
309	ⅦC9 i - 3住		石鏃	泥質凝灰岩	礫石西部	3.6	1.7	0.5	2.40		Ⅱb 1	155
310	ⅦC9 i - 3住		石鏃	泥質凝灰岩	礫石西部	3.2	1.8	0.5	1.90	凹基の挟りが大きい。	Ⅱc 2	155
311	ⅦC9 i - 3住	埋土	石鏃	泥質凝灰岩	礫石西部	2.4	1.1	0.5	1.02		Ⅲ 2	155
312	ⅦC9 i - 3住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	2.5	2.1	0.3	1.50	基部は扁平、身部はやや厚い。尖頭部つくり出し顕著。		155
313	ⅦC9 i - 3住		不定形石器	粘板岩	北上山地	4.7	1.9	0.9	5.20	1辺は刃部、1辺は微小剝離。	I a 1	155
314	ⅦC9 i - 3住	床面	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.3	2.4	0.6	5.94		I b 2	155
315	ⅦC9 i - 3住		不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	8.7	3.4	1.3	31.69	相対する2側縁に二次加工。自然面残す。	I d 3	155

第81図 ⅦC9 i - 3住居跡出土遺物(2)



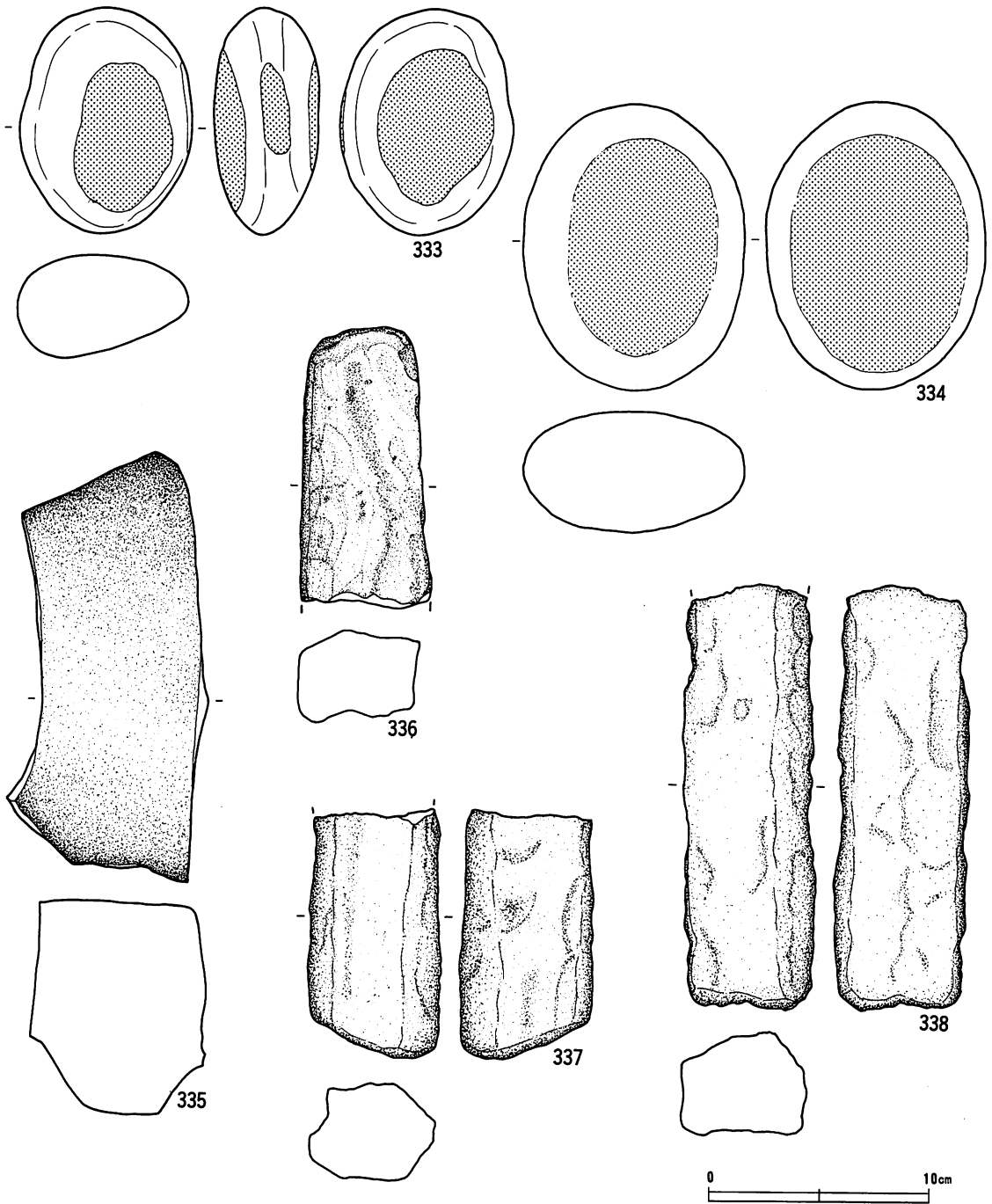
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
316	VII C 9 i - 3 住	床面	不定形石器	珪質泥岩	掣石西部	7.7	2.4	1.3	21.08		Ie	155
317	VII C 9 i - 3 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	掣石西部	5.4	5.2	1.1	46.80	急角度のステップ状剝離。	IV	155
318	VII C 9 i - 3 住	床面	石錘	凝灰岩	北上山地	5.3	5.2	1.3	65		I	155
319	VII C 9 i - 3 住	床面	石錘	凝灰岩	北上山地	5.2	7.6	1.3	70		II	156
320	VII C 9 i - 3 住	床面	石錘	凝灰岩	北上山地	4.6	6.7	1.0	50		II	156
321	VII C 9 i - 3 住	床面	石錘	ホルンフェルス	北上山地	4.8	6.3	1.4	60		II	156
322	VII C 9 i - 3 住	床面	石錘	粘板岩	北上山地	6.5	12.3	2.1	260		II	156
323	VII C 9 i - 3 住	検出面	敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	10.3	9.2	4.3	565		Ia1	156
324	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類A群	凝灰質千枚岩	北上山地	(14.0)	6.8	2.9	(360)		Ib3	156
325	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	18.0	8.5	5.0	1170	+凹石。	IIa1	156

第82図 VII C 9 i - 3 住居跡出土遺物(3)



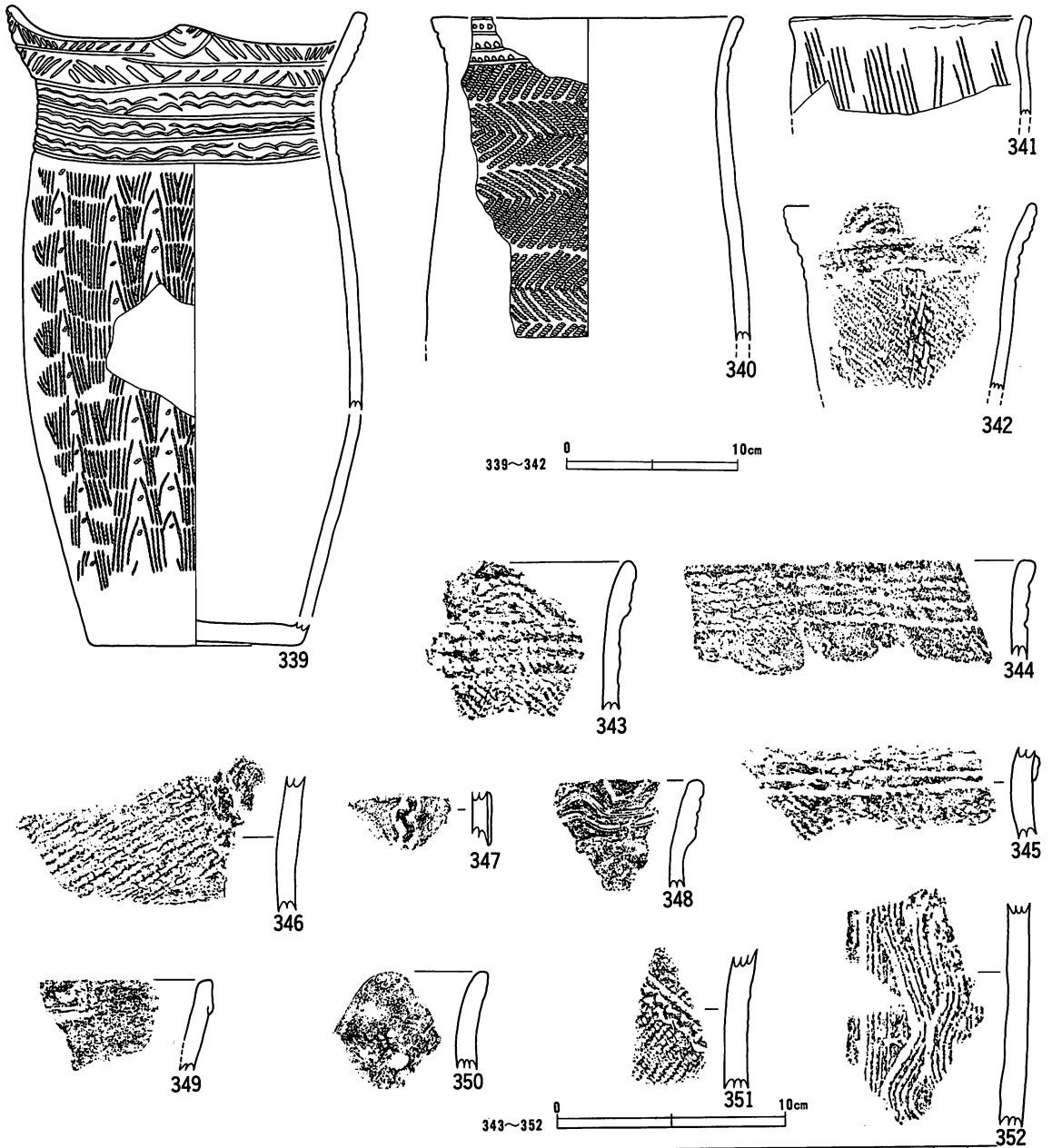
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
326	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	(7.7)	7.1	4.4	(385)		II a	156
327	VII C 9 i - 3 住	検出面	敲磨器類A群	緑色凝灰岩	北上山地	(9.2)	5.6	3.4	(250)	磨面2面。	IIb3	156
328	VII C 9 i - 3 住	ビット埋土	敲磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(14.3)	10.2	4.0	(810)		IIIb3	156
329	VII C 9 i - 3 住		敲磨器類A群	両輝石安山岩	岩手火山	(10.8)	9.8	9.0	(200)			156
330	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	(15.4)	8.4	4.4	(845)		IIIb3	157
331	VII C 9 i - 3 住		敲磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	15.4	3.5	6.5	460		IIIb2	157
332	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類A群	凝灰質千枚岩	北上山地	(15.3)	3.0	5.3	(320)		IIb2	157

第83図 VII C 9 i - 3 住居跡出土遺物(4)



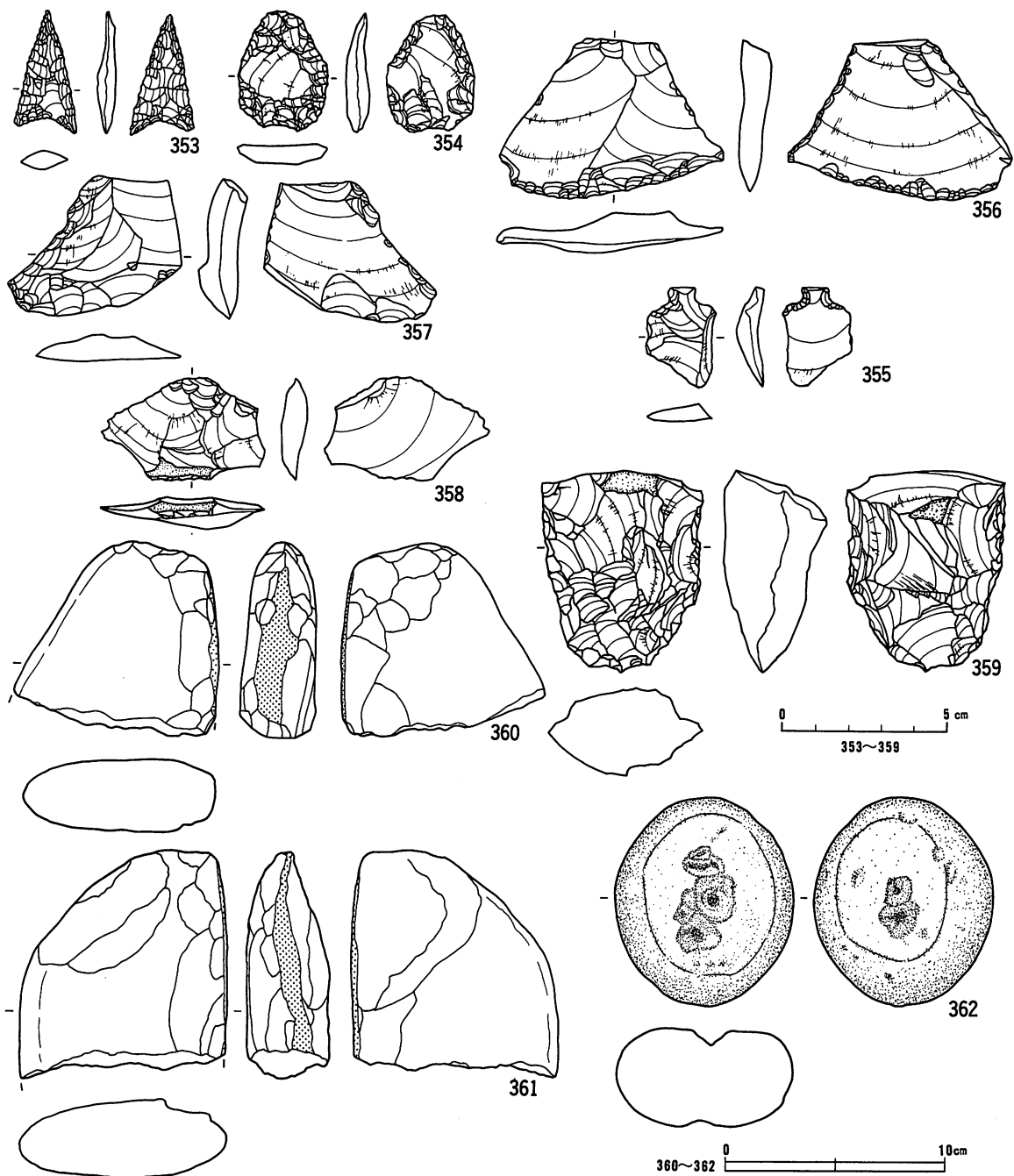
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
333	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類B群	両輝石安山岩	奥羽山地	10.2	7.8	4.7	510	磨面はざらつき。	I	157
334	VII C 9 i - 3 住	床面	敲磨器類B群	両輝石安山岩	奥羽山地	12.9	9.8	5.3	980	全面に磨面。光沢あり。	I	157
335	VII C 9 i - 3 住		石皿・台石類	流長質凝灰岩	北上山地	(26.1)	(12.4)	(12.8)	(6000)	使用の痕跡は明瞭でない。		157
336	VII C 9 i - 3 住	ベルト埋土	石棒	デイサイト	奥羽山地	(12.6)	5.9	3.7	(470)			157
337	VII C 9 i - 3 住		石棒	流紋岩	北上山地	(11.9)	6.0	4.4	(480)	明瞭な稜を有する。		157
338	VII C 9 i - 3 住		石棒	流紋岩	奥羽山地 松尾	(19.1)	6.0	5.6	(840)	断面形が不整五角形状の稜を有する。		157

第84図 VII C 9 i - 3 住居跡出土遺物(5)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
339	VII C 9 i - 4住	床面		R木目状燃糸状	21.0	(12.4)	37.6		II7 a	158
340	VII C 9 i - 4住	埋土	口縁部棒状工具による右方向からの刺突。沈線（凹線）	LR×RL第1種結束縄文	(18.3)	-	(18.7)		II7 a	158
341	VII C 9 i - 4住	埋土		R燃糸文	(14.2)	-	(4.9)		II6 b	158
342	VII C 9 i - 4住	埋土		LR縦、綾結文	(14.8)	-	(10.9)		II8 a	158
343	VII C 9 i - 4住	埋土	波状口縁。LR側面圧痕。	LR縦。					II8 a	158
344	VII C 9 i - 4住	埋土	LR側面圧痕。	LR縦、片結び縦位綾結文。					II8 a	158
345	VII C 9 i - 4住	埋土	隆帯上にLR側面圧痕。	LR縦。					II	158
346	VII C 9 i - 4住	埋土	隆帯	LR横。					III c	158
347	VII C 9 i - 4住	埋土	隆帯						III c	158
348	VII C 9 i - 4住	埋土	複合口縁。浅い凹部を有する工具による沈線。						III a	158
349	VII C 9 i - 4住	埋土	複合口縁。	無文。					III b	158
350	VII C 9 i - 4住	埋土	波状口縁。	燃糸文。						158
351	VII C 9 i - 4住	埋土	竹管外面による沈線。変形爪形文	LR横。					III a	158
352	VII C 9 i - 4住	埋土上位	櫛歯状沈線。						II9 a	158

第85図 VII C 9 i - 4住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
353	VII C 9 i - 4住	埋土	石鏝	泥質凝灰岩	礫石西部	3.7	1.9	0.6	2.12		II d1	158
354	VII C 9 i - 4住	床面	尖頭器櫛石器	珉質泥岩	礫石西部	3.6	2.7	0.5	6.91			158
355	VII C 9 i - 4住	床面	石匙	チャート	北上山地	3.0	2.1	0.9	3.19		VI	158
356	VII C 9 i - 4住	埋土	不定形石器	珉質泥岩	礫石西部	4.9	4.8	0.9	25.91	右辺に使用痕あり。	I a2	158
357	VII C 9 i - 4住	埋土	不定形石器	珉質細粒凝灰岩	礫石西部	4.2	4.6	1.0	15.78	先端部に打減痕。	I b3	159
358	VII C 9 i - 4住	床面	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	3.0	5.0	0.8	11.13	素材面大きいのこる。	IV	159
359	VII C 9 i - 4住	埋土	打製石斧	珉質泥岩	礫石西部	(6.1)	4.9	3.1	(63.92)	欠損品(大半)。周縁が粗い調整。	II	159
360	VII C 9 i - 4住	床面	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(8.5)	(9.2)	(3.2)	(380)	欠損品。	III b2	159
361	VII C 9 i - 4住	床面	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(10.3)	8.5	3.5	(430)	欠損品。	III b2	159
362	VII C 9 i - 4住	床面	敲磨器類A群	両輝石安山岩	岩手火山	9.4	8.2	4.5	310		II	159

第86図 VII C 9 i - 4 住居跡出土遺物(2)

ⅦC 9 i - 3 b 住居跡のものも含めて14個検出された。所属関係は不明であるが、位置関係から本住居に伴うものはP3～P9かと思われる。周溝は斜面上方に当たる西壁際と北壁際に位置し、幅14～18cm、深さ7～14cmである。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は65×10cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大04cmである。木根により攪乱を受けており締まりに欠ける部分がある。

ⅦC 9 i - 3 b 住居跡 (遺構番号29)

〈検出状況〉ⅦC 9 i - 3 a 住居跡の床面精査で、同住居跡の周溝に切られたより古い時期周溝が検出され、建替えをしているものと考えた。規模等は不明であるが、ⅦC 9 i - 3 a 住居跡よりやや北よりに位置し、P2が本住居に対応すると仮定すれば、拡張と考えられるものの詳細は不明である。

〈施設〉周溝は、ⅦC 9 i - 3 a 住居跡と同様北壁際と西壁際につくられ、幅10～16cm、深さ11～14cmである。

遺物 (第80～84図、写真図版154～157)

〈土器〉床面から1450g、埋土から8880g出土した。284は2山を1単位とする山形突起を有し、頂部から2段の縄の側面を押圧した「C」字状の粘土紐を貼り付けている。粘土紐の下端までの幅で口縁部を全周する肥厚帯があり、更に粘土紐の上端から口縁部の内外両面を複合口縁としている。285は口唇部が平らになでられ断面形は角ばる。286は無文の大型浅鉢である。口縁部裏側に明瞭な稜をもつ複合口縁である。287～290は複合口縁である。287は複合口縁の下に隆帯を巡らす。300・305は細い波状の隆帯が縦方向に貼付けられている。

〈石器・石製品〉336・338は明瞭な稜を有する棒状礫で、奥羽山地産であり本住居に持ち込まれたものである。335は図示面以外は割れている凝灰岩である。表面に微細な凹凸が全面に分布するが使用痕・加工痕と断定するにはやや躊躇する。しかし、他の住居からも同種のものが出土している。図示しなかったが他に、岩手火山起源の熔岩4点、半円状花崗岩質岩が5点、大きく欠損した特殊磨石1点、Uフレが7点、フレークが46点(雫石産・珪質泥岩、雫石産・流紋岩質細粒凝灰岩他)出土した。

時期 床面出土土器から縄文時代中期初頭に属すると考えられる。

ⅦC 9 i - 4 住居跡 (遺構番号30)

遺構 (第79図、写真図版29)

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。ⅦC 9 i - 3 住居跡より一段高い床面を有する。東側は斜面により流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明だが、方形ないしは長方形を基調とすると推定される。規模は南北

5.1m、東西は残存値5.1mである。

〈壁・壁高〉斜面上方の北壁と西壁は基盤層、南壁はにぶい黄褐色土で緩やかに立ち上がる。壁高は西壁38cm、南壁14cm、北壁22cmである。

〈埋土〉上位は黄褐色土、下位はにぶい黄褐色土で、両者とも粉炭と小角礫を含むが、下位ほど粉炭と遺物を多く混入する。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿ってやや傾斜し、西壁から東側1mまでの範囲は緩やかなスロープとなる。その部分では粉炭が2箇所集中的に分布することから、本住居は焼失住居と考えられる。柱穴は北西隅に1個検出された。深さは10cmしかないが、埋土はにぶい黄褐色土で住居の埋土に等しい。南壁際には土坑が検出された。埋土は黄褐色土で小角礫を含む。西壁際に部分的に周溝が存在する。幅10～21cm、深さ10～16cmで黄褐色土を埋土とする。

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は105×110cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大9cmである。木根の攪乱を受けている。

遺物（第85・86図、写真図版158・159）

〈土器〉339は床直上から一括出土したものである。4個の突起をもつ小波状口縁で、頸部は平行沈線と波状沈線を、口縁部は矢羽状の短沈線を施文している。340は胴下半部に最大径を有し、口縁部に棒状工具による沈線と左方向からの半截竹管外面による刺突文を施文している。口唇部は平らになでられている。346・347は細い波状の隆帯が縦走する。隆帯上には施文されない。348の沈線内部には筋状の稜があることから植物性の棒状工具による施文と考えられる。350は波状頂部が丸山状である。

〈石器〉355は石匙の欠損品または未製品で刃部二次加工はない。358は全体に素材面を残し、1辺に急角度の二次加工を施す。362は岩手火山起源の熔岩である両輝石安山岩で、両面に凹部が明瞭に観察される。側辺も磨石として用いた可能性もある。図示した他に、台石状の凝灰岩の小破片と半円状花崗岩質岩が各1点、Uフレが5点、フレークが29点、それぞれ埋土から出土している。

時期 床面出土土器から縄文時代前期末葉から中期初頭に属すると考えられる。

ⅦC 9 j 住居跡 (遺構番号31)

遺構 (第75図、写真図版30)

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。再堆積層を10cmほど下げたところで焼土を検出し、斜面上方でそれに対応すると考えられる壁を確認したことから、住居と認定した。北壁でⅦC 9 j 土坑と重複する。埋土断面図をとることができなかったが、精査時の観察では、本住居のほうが新しい。東側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが方形ないしは長方形を基調とすると考えられる。規模は南北2.5m、東西は残存値で2.1mである。

〈壁・壁高〉西壁は基盤層、南壁は褐色土でほぼ直立する。壁高は西壁34cm、南壁12cmである。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、全体に締まりを欠く。下位では小角礫が多く混入する。

〈床・柱穴・施設〉西壁側は基盤層、東側はにぶい黄褐色土である。全体にやや凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は80×90cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。

遺物 (第76図、写真図版153)

〈土器〉ほとんど出土していない。267は細い隆帯が縦位に貼付けられ、隆帯上にも縄文が施文されている。

〈石器〉269は丁寧な加工により全周を調整している。裏面は1辺のみ微小剝離が観察される。図示した他に、床面から台石状の凝灰岩片1点、Uフレ2点、埋土からUフレ1点、フレーク2点が出土している。

時期 特定する資料を欠くので不明であるが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文前期後葉ないし中期初頭と推定される。

ⅦC 9 j - 2 住居跡 (遺構番号32)

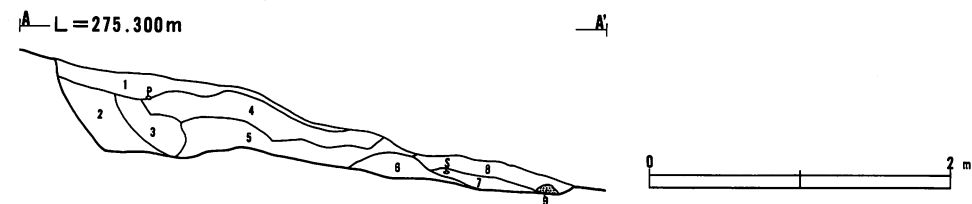
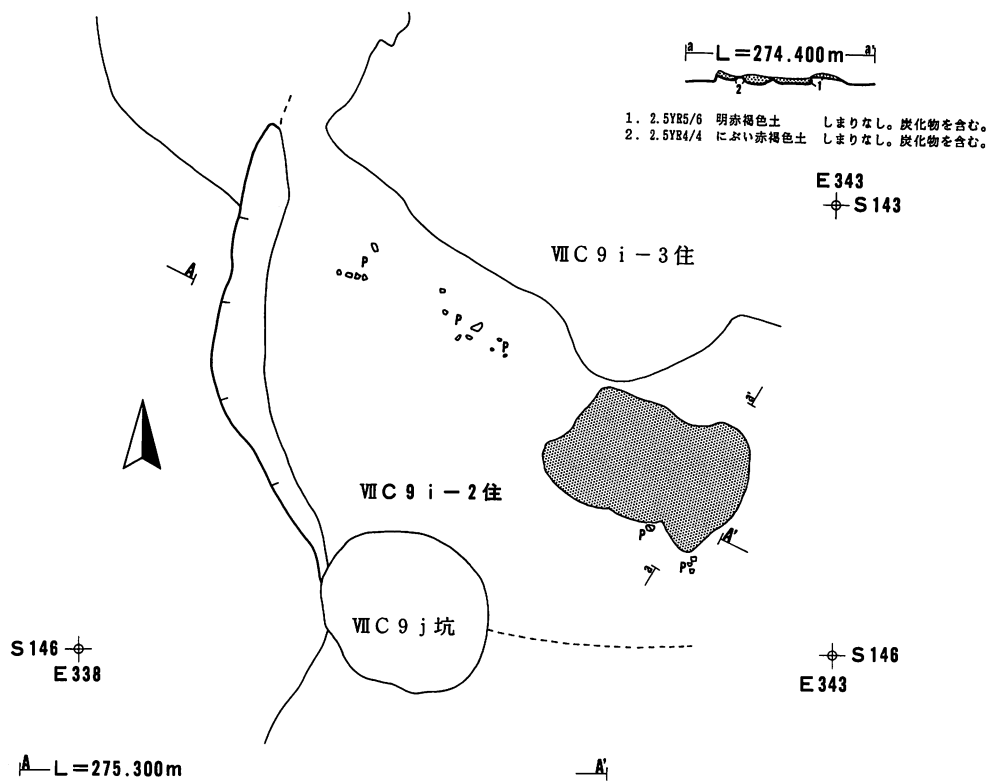
遺構 (第87図)

〈検出状況〉ⅦC 9 j 住居跡およびⅦC 9 j 土坑の精査中に検出した。埋土断面図をとれなかったが、平面でⅦC 9 j 土坑の方が新しいことを確認している。北側ではⅦC 9 i - 3 住居跡に切られている。東側は斜面のため流失して不明である。

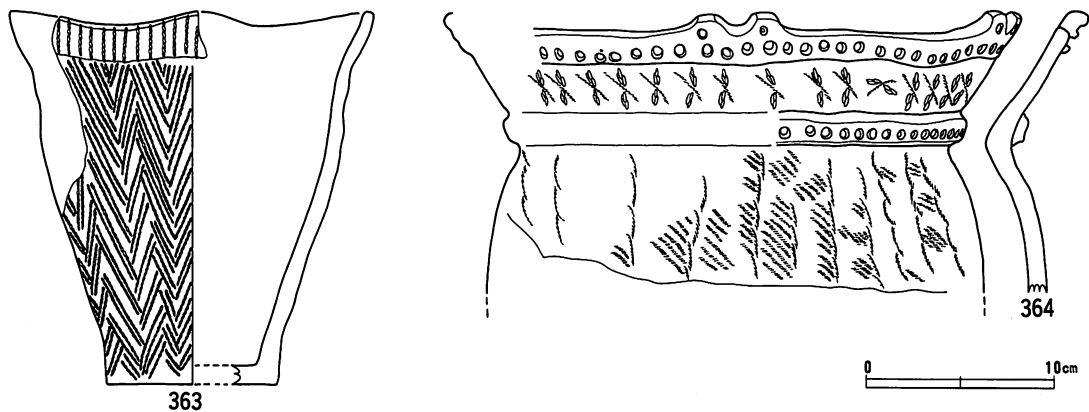
〈形状・規模〉詳細は不明である。残存値は、東西4m南北2.4mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁57cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。再堆積層起源と考えられる黄褐色土、明褐色土を主体とし、壁際には崩落土が混入する。自然堆積の様相を示す。

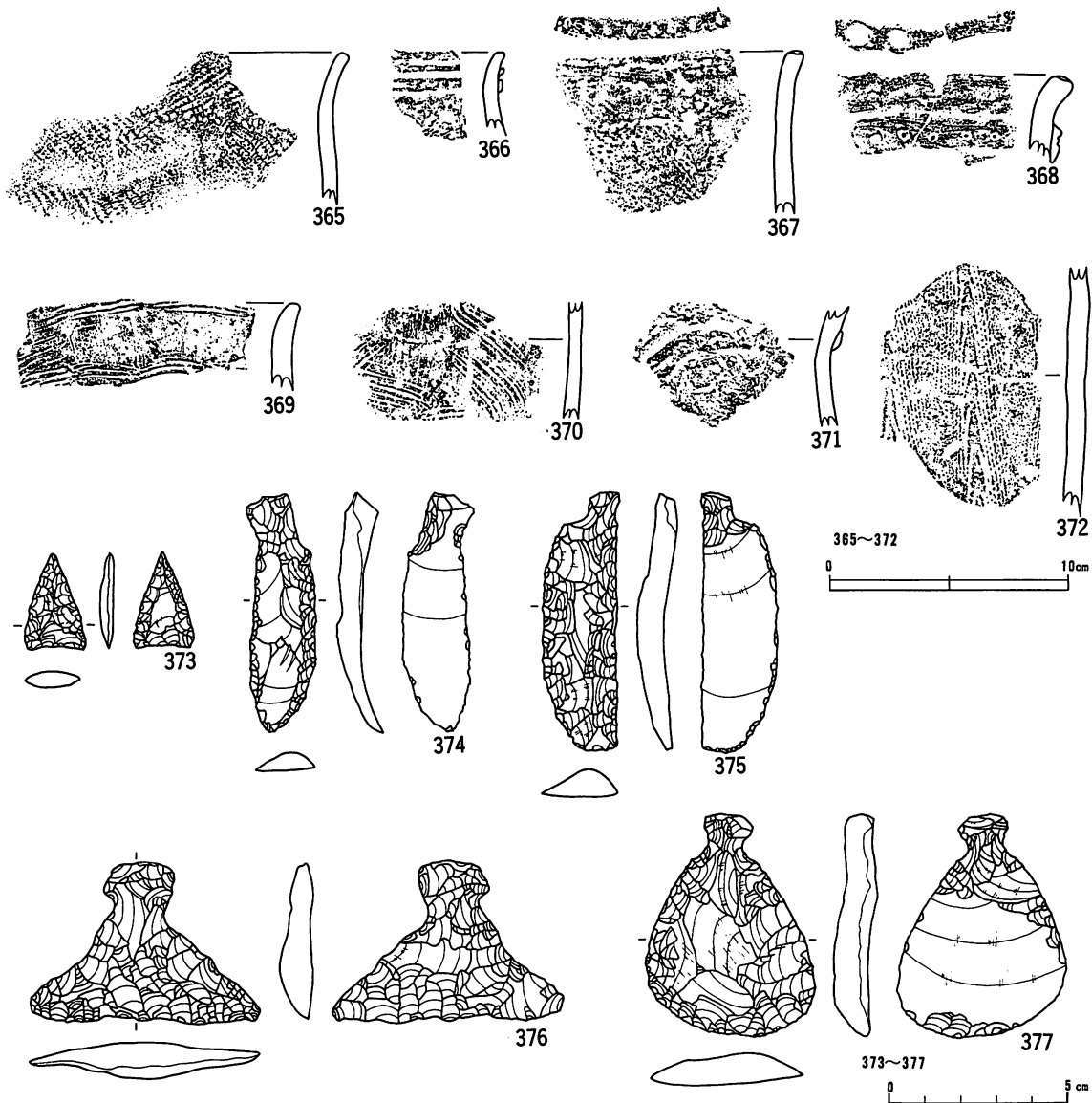


- | | | | |
|-----------------|---------------|-----------------|---------------|
| 1. 7.5Y R% 褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | 6. 7.5Y R% 褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 2. 7.5Y R% 褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | 7. 7.5Y R% 褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 10Y R% 黄褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | 8. 7.5Y R% 明褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 4. 10Y R% 黄褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | 9. 5Y R% 明赤褐色土 | 焼土。固くしまっている。 |
| 5. 10Y R% 明黄褐色土 | しまりなし。崩落土を含む。 | | |



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
363	VII C 9 j - 2 住	床面	口縁部 R の圧痕、やや肥厚気味	L + R 木目状燃糸文	(19.4)	(9.0)	19.9		III d	159
364	VII C 9 j - 2 住	床面	複合口縁、頸部隆帯上竹管刺突、口縁部原体不明	L 縦、片結び縦位綫絡文。	(31.0)	-	(15.0)		III d	159

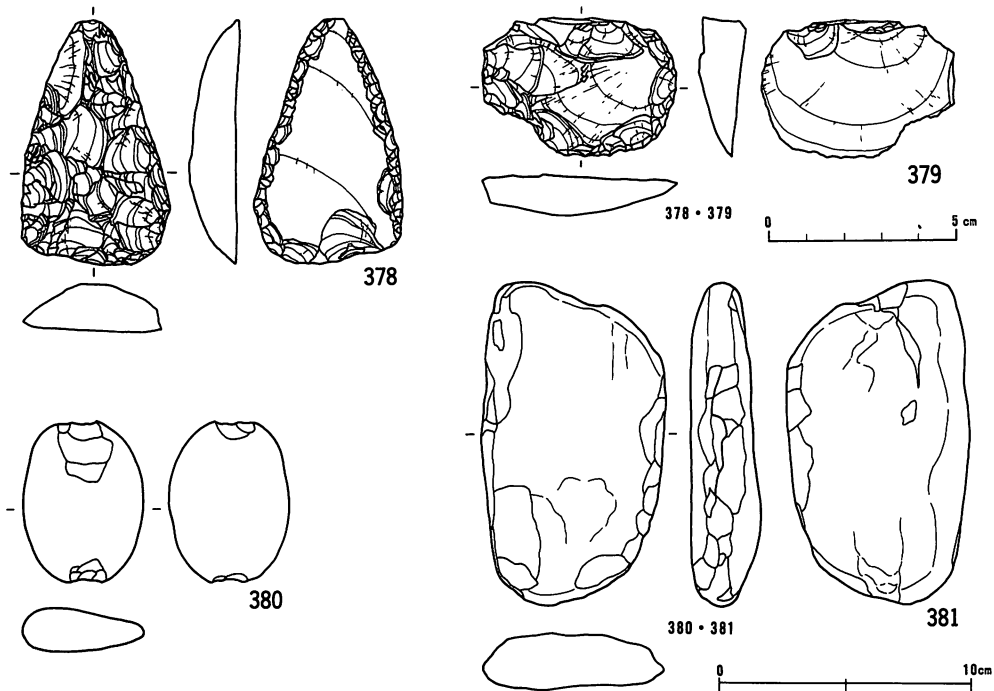
第87図 VII C 9 j - 2 住居跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
365	VII C 9 j - 2 住	埋土		L R × R L 第 1 種 結束羽状縄文						159
366	VII C 9 j - 2 住	埋土	複合口縁。折り返し部に筒状工具による沈線。							159
367	VII C 9 j - 2 住		R 側面圧痕?。口唇部圧痕。工具不明(縄端?)	多軸絡条体?						159
368	VII C 9 j - 2 住	床面	隆帯上に竹管刺突。口唇部一部指頭状圧痕。						III a	159
369	VII C 9 j - 2 住		櫛齒状沈線。						II 9 a	159
370	VII C 9 j - 2 住	埋土	櫛齒状沈線文。						II 9 a	159
371	VII C 9 j - 2 住	埋土	隆帯上に側面圧痕? 胴部 R 側面圧痕。							159
372	VII C 9 j - 2 住			L 木目状燃糸文。						159

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
373	VII C 9 j - 2 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	2.7	1.7	0.4	1.41		II a 2	160
374	VII C 9 j - 2 住		石匙	粘板岩	北上山地	6.6	2.0	1.2	9.50		I a 2	160
375	VII C 9 j - 2 住		石匙	泥質凝灰岩	磐石西部	7.2	2.1	1.1	10.77		III	160
376	VII C 9 j - 2 住		石匙	粘板岩	北上山地	4.4	6.5	1.0	16.01		II a 1	160
377	VII C 9 j - 2 住		石匙	珉質泥岩	磐石西部	6.2	4.7	1.3	25.20		I b 1	160

第86図 VII C 9 j - 2 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
378	VII C 9 j - 2 住	埋土	石鏡	珪質泥岩	礫石西部	6.5	4.0	1.2	30.95		I	160
379	VII C 9 j - 2 住	床面	不定形石器	泥質凝灰岩	礫石西部	3.7	5.1	1.1	22.01		VII	160
380	VII C 9 j - 2 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	6.4	4.8	1.7	80		I	160
381	VII C 9 j - 2 住	床面	敲磨器類A群	凝灰質千枚岩	北上山地	12.8	7.2	2.4	350		IIIc1	

第89図 VII C 9 j - 2 住居跡出土遺物(3)

〈床・柱穴・施設〉斜面上方は基盤層、下方はにぶい黄褐色土で全体にやや凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は80×126 cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大6 cmである。木根により攪乱を受けており締まりに欠ける部分がある。

遺物 (第87~89図、写真図版159・160)

〈土器〉床面から2245 gが出土した。363は口縁部に1段の縄の側面を縦位に連続的に圧痕している。364は2山を1単位とする突起を、5単位有すると考えられる平縁の土器である。頸部と口縁部に、断面形が長方形に近い幅広の隆帯を全周させ、その上に竹管刺突を器体に対して直角方向に施す。地文は1段の縄を片結びして縦に回転させてたものである。口縁部は、無節の部分が節を有する部分を切る「X」状の文様が施文されるが、回転によるものか圧痕によるものか判断できなかった。表現はしていないが、実測図の口縁部右側部分には胴部と同じ原

体が横回転された後「X」状文を施文しており、同一原体の圧痕である可能性が高いと思われるものの、復元できなかったことから不明としておく。367の地文は筋が右斜位、左斜位にそれぞれ揃っている。

〈石器〉374は尖頭部が作り出されるが鋭いものではない。表面左辺は小剥離である。376はつまみ部に一部自然面を残すが全面加工して両端に尖頭部をつくり出す。図示した他にUフレ1点、フレーク12点が出土している。

時期 床面出土土器から縄文時代中期初頭に属すると考えられる。

ⅦC 0 g 住居跡 (遺構番号33)

遺構 (第90図)

〈検出状況〉西尾根の頂部から東斜面にかけて位置する。再堆積層下位で検出した。当初1棟と考えて精査にはいったが、レベルを異にする焼土が検出され、それに対応する壁を部分的ではあるが確認したことから、2棟の住居の重複と考えられた。新期のものをⅦC 0 g 住居跡、古期のものをⅦC 0 g - 2 住居跡とする。東壁は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉検出の不手際により、北壁は部分的に観察用のベルトで確認した。隅丸長方形が推定される。規模は残存値で長軸3.6m、短軸2.2mである。

〈壁・壁高〉再堆積層を構成するにぶい黄褐色土で固く締まっている。ほぼ直立する。壁高は西壁31cm、南壁16cm、北壁33cmである。

〈床・柱穴・施設〉ほぼ水平であり、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

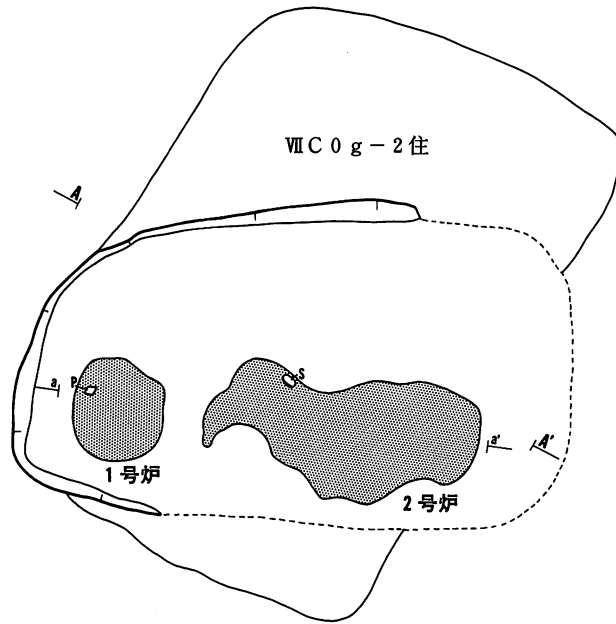
〈炉〉長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は55×70cmの楕円形状に分布し厚さは最大8cm、2号炉の焼土は80×182cmの不整形の範囲に分布し厚さは最大10cmで、いずれも木根の攪乱を受けてはいるが、固く締まっている。

遺物 (第91・92図、写真図版161・162)

〈土器〉382は口縁部に沿って円形竹管が連続刺突される。385は、2種の結束羽状縄文をもちいたものか。386は円形竹管刺突が縦位に施される。387は円形竹管刺突に加えて半(多?)截竹管による平行沈線が施文されるが、鋸歯状を描くものか。390は口唇部から続く隆帯が右に屈曲しクランク状を呈する。右側には沈線が3本観察される。391は隆帯が垂下するが、隆帯と器体の境界が目立たぬように撫でられる。

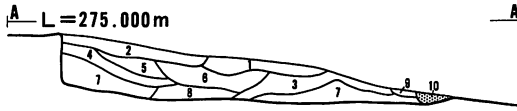
〈石器〉392の石鏃の尖頭部は断面形もやや丸みを帯びる。397は表面中央部に瘤状の自然面を残す。裏面は加工が粗い。403は小型でやや厚めの磨製石斧で、整形時の擦痕が面的に観察され稜線が明瞭である。図示した他に、半円状花崗岩質岩が1点、Uフレが2点、フレークが

E 351
 ⊕ S 130



E 135 ⊕
 E 347

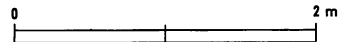
⊕ S 135
 E 351



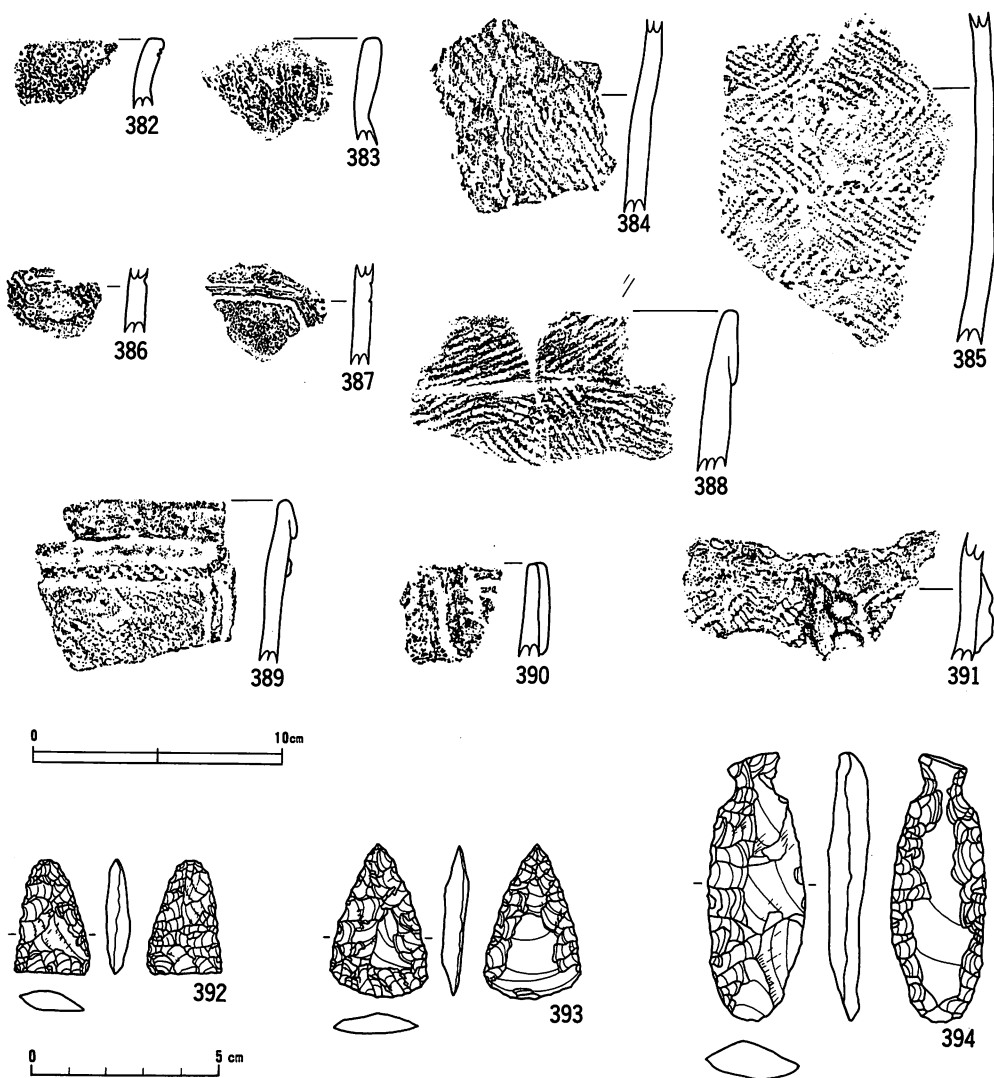
- | | | | |
|----------------|-----------------|----------------|-------------------|
| 1. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 6. 10YR% 黄褐色土 | ややしまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 2. 7.5YR% 暗褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 7. 10YR% 褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 3. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 8. 7.5YR% 明褐色土 | しまりあり。小角礫を多く含む。 |
| 4. 10YR% 黄褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 | 9. 5YR% 明赤褐色土 | しまりなし。粉炭を少量含む。 |
| 5. 10YR% 褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 | 10. 5YR% 赤褐色土 | しまりなし。 |



- | | | | |
|-----------------|------------------------------|------------------|---------------------|
| 1. 5YR% におい赤褐色土 | しまりなし。褐色土をブロック状に含む。粉炭を微量に含む。 | 7. 5YR% 明赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 2. 7.5YR% 明赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 8. 5YR% におい赤褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 5YR% 明赤褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | 9. 5YR% におい赤褐色土 | しまりなし。焼土粒、小角礫を少量含む。 |
| 4. 10YR% 褐色土 | しまりなし。砂を多く含む。焼土粒、粉炭を微量含む。 | 10. 5YR% 赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 5. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。粉炭、小角礫を少量含む。 | 11. 5YR% におい赤褐色土 | しまりなし。焼土粒、小角礫を少量含む。 |
| 6. 7.5YR% 褐色土 | しまりなし。焼土粒、粉炭、小角礫を少量含む。 | | |



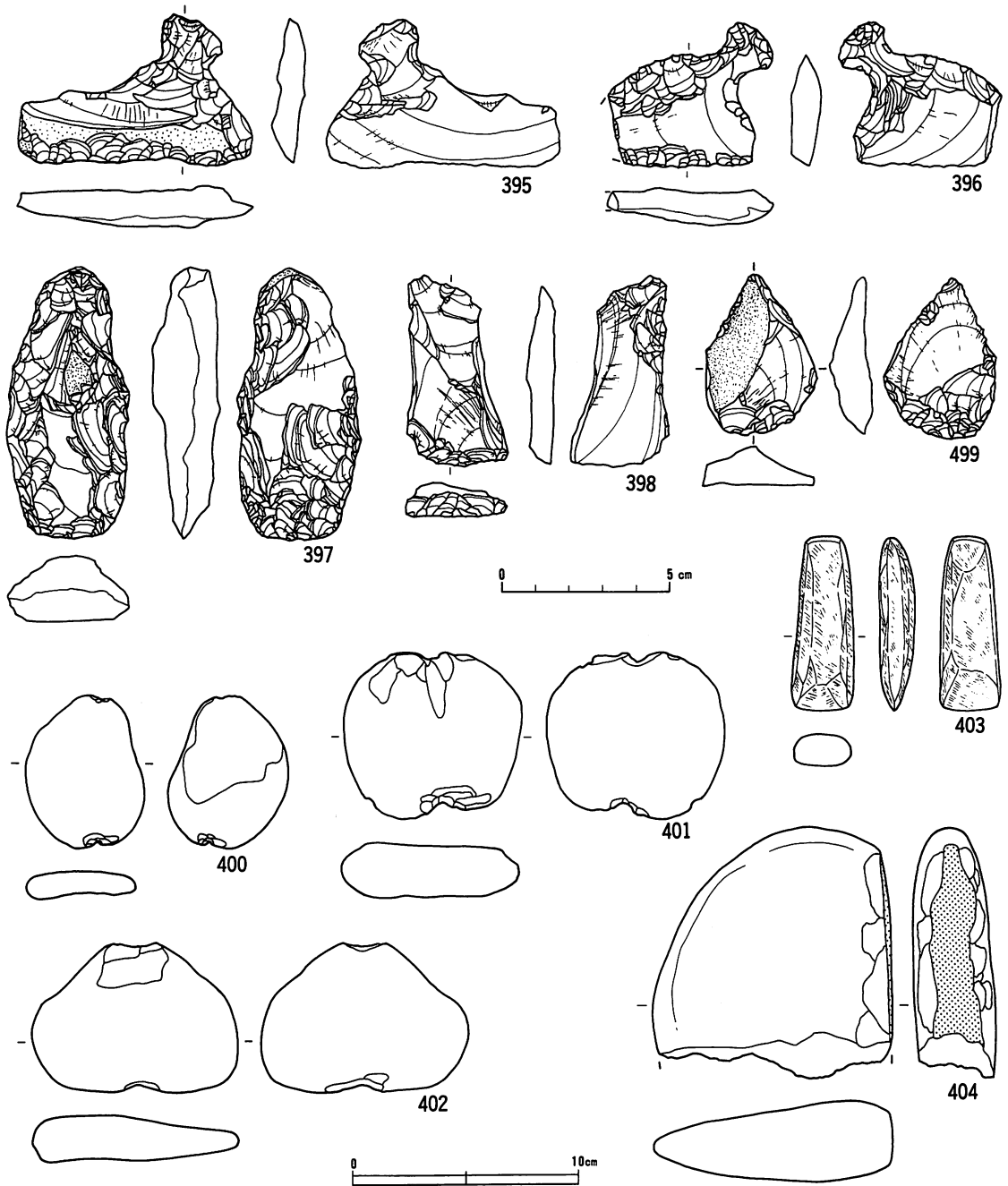
第90図 VII C 0 g 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
382	ⅦC 0 g 住	床面	竹管刺突。	R + L 撚糸文。				904と同一個体	Ⅱb ㄱ	161
383	ⅦC 0 g 住	床面	波状口縁。	L + R の撚糸文。						161
384	ⅦC 0 g 住			L R 縦。片結び縦位綾絡文。						161
385	ⅦC 0 g 住	床面		L R × R L 第1種結束羽状縄文。						161
386	ⅦC 0 g 住	埋土	竹管刺突。沈線。	L R 縦。						161
387	ⅦC 0 g 住	埋土 Q 1	竹管刺突。半截竹管内面による沈線。							161
388	ⅦC 0 g 住	埋土	複合口縁。	L R。回転方向を変えている。				内面はミカキ。	Ⅲ1 b	161
389	ⅦC 0 g 住	埋土 Q 1	複合口縁。口縁部無文。隆帯上に縄文施文。	R L 横。					Ⅲ1 c	161
390	ⅦC 0 g 住	埋土	隆帯。沈線。							161
391	ⅦC 0 g 住	埋土	隆帯上指頭状圧痕(爪跡残る)。	L R 横。					Ⅲ1 c	161

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
392	ⅦC 0 g 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	3.1	1.9	0.5	2.85	先端部やや丸い。	I 2	161
393	ⅦC 0 g 住	埋土	尖頭器櫛石器	硬質泥岩	磐石西部	4.1	2.6	0.5	4.75			161
394	ⅦC 0 g 住	埋土	石匙	硬質泥岩	新第三系中新統	7.1	2.6	1.1	17.82		I b 3	161

第91図 ⅦC 0 g 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
395	VII C 0 g 住	埋土	石匙	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	1.2	7.0	1.2	20.19		II b	161
396	VII C 0 g 住	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	1.1	(4.9)	1.1	(18.0)		II	161
397	VII C 0 g 住	床面	打製石斧	粘板岩	北上山地	2.0	3.6	2.0	(18.0)	中央上部に自然の瘤状の盛り上がりを残す。	I	161
398	VII C 0 g 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	1.0	3.0	1.0	13.70		IV a	161
399	VII C 0 g 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	1.3	3.4	1.3	15.05		IV	161
400	VII C 0 g 住	焼土面	石鏟	凝灰岩	北上山地	1.3	5.3	1.3	75		I	161
401	VII C 0 g 住	床面	石鏟	凝灰岩千枚岩	北上山地	2.9	8.0	2.9	210		II	161
402	VII C 0 g 住	床面	石鏟	凝灰岩	北上山地	2.0	9.2	2.0	155		II	161
403	VII C 0 g 住	埋土	磨製石斧	凝灰岩	北上山地	1.1	1.8	1.1	20	擦底が多く観察される。	IV	162
404	VII C 0 g 住	床面	砥磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	3.3	10.7	3.3	(510)		III a	162

第92図 VII C 0 g 住居跡 出土遺物(2)

18点出土している。

時期 特定は困難であるが、床面出土遺物から縄文時代前期末葉から中期初頭に属すると推定される。

ⅦC 0 g - 2 住居跡 (遺構番号34)

遺構 (第93図、写真図版30)

〈**検出状況**〉ⅦC 0 g 住居跡の床面下から検出された。ⅧC 1 g 住居跡、ⅦC 0 g - 3 住居跡の上に構築されている。

〈**形状・規模**〉長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形を基調とする。規模は、短軸2.7 m、長軸3.9 mである。

〈**壁・壁高**〉にぶい黄褐色土で、ほぼ直立している。壁高は東壁4 cm、西壁38 cm、南壁16 cm、北壁36 cmである。

〈**床・柱穴・施設**〉にぶい黄褐色土で、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈**炉**〉長軸線上に地床炉を2基検出した。南側のものを1号炉、北側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は104×120 cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大12 cmである。2号炉の焼土は110×128 cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大15 cmである。いずれも固く締まっており、断面がレンズ状に形成されている。

遺物 (第93図、写真図版162)

〈**石器**〉1408は強い丸凸刃状で、欠損又は折断している。図示した他にフレイクが8点出土した。

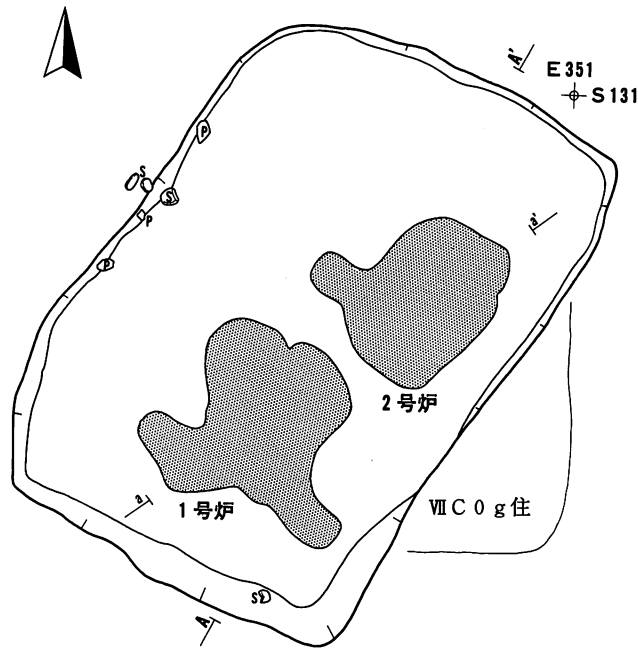
時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期末葉から中期初頭に属すると推定される。

ⅦC 0 g - 3 住居跡 (遺構番号35)

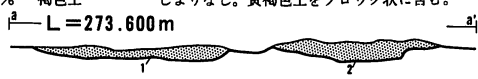
遺構 (第94・95図)

〈**検出状況**〉ⅦC 0 g - 2 住居跡の床面の下から検出され、それより南西方向に広がる規模をもつ。南東側は斜面のため流失している。北西壁のほぼ中央部でⅦC 9 g 土坑と重複する。埋土観察から同土坑の方が新しい。また、本住居の下からはⅧC 1 g 住が検出されている。新旧関係をまとめると次のようになる。

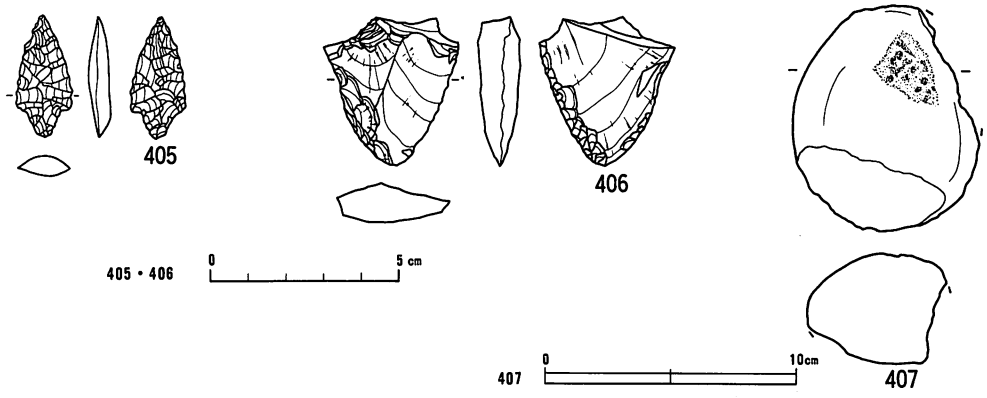
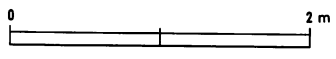
(新) ⅦC 0 g - 2 住居跡 ←—— ⅦC 0 g - 3 住居跡 ←—— ⅧC 1 g 住居跡 (古)
ⅦC 9 g 土坑 ←—— ⅦC 0 g - 3 住居跡



- | | | | |
|-------------------|----------------------|---------------------|--------------------|
| 1. 5Y R % におい赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 7. 5Y R % におい赤褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 2. 7.5Y R % 褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 8. 10Y R % 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 7.5Y R % 褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 9. 5Y R % 明赤褐色土 | ややしまりあり。小角礫を多く含む。 |
| 4. 10Y R % 黄褐色土 | しまりなし。小角礫を多く含む。 | 10. 10Y R % におい黄褐色土 | ややしまりあり。褐色土を縞状に含む。 |
| 5. 5Y R % 黄褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 11. 7.5Y R % 明褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 |
| 6. 10Y R % 褐色土 | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。 | | |

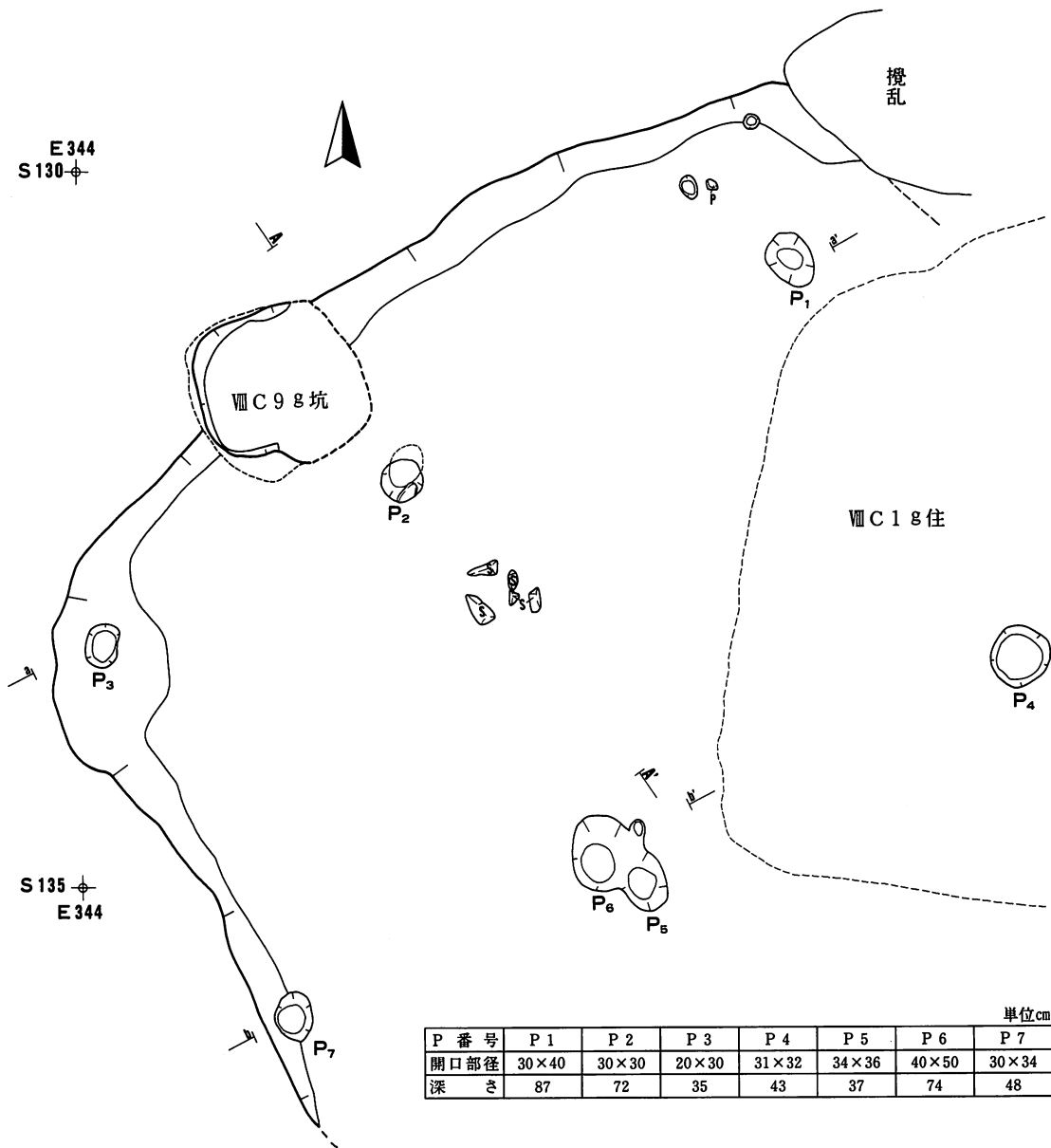


- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 2.5Y R % 明赤褐色土 | 焼土。しまりなし。炭化物を少量含む。 |
| 2. 2.5Y R % 赤褐色土 | 焼土。しまりなし。炭化物を少量含む。 |



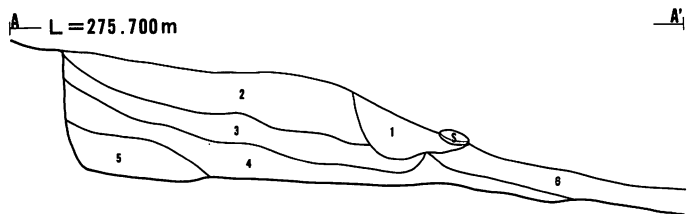
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
405	VII C 0 g - 2 住	床面	石鏃	チャート	北上山地	3.3	1.5	0.5	2.03		IV 2	162
406	VII C 0 g - 2 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	3.9	3.6	1.0	12.51	強い丸凸刃をつくり出し、欠損又は折断。	Ia1	162
407	VII C 0 g - 2 住	埋土	敲磨器類 B 群	珪長質凝灰岩	北上山地	(8.9)	(7.5)	4.5	(370)		II	162

第93図 VII C 0 g - 2 住居跡・出土遺物

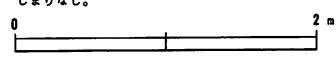


単位cm

P 番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
開口部径	30×40	30×30	20×30	31×32	34×36	40×50	30×34
深 さ	87	72	35	43	37	74	48

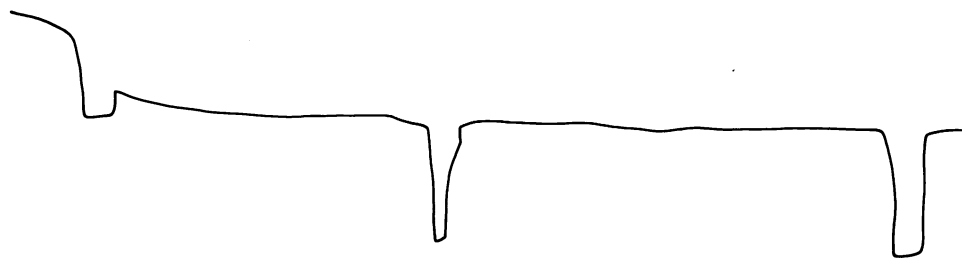


- | | | | |
|---------------------|-----------------|---------------------|---------------|
| 1. 7.5YR3/4 暗褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | 4. 10 YR4/4 褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 2. 7.5YR4/4 褐色土 | しまりなし。小角礫を少量含む。 | 5. 10 YR5/4 にぶい黄褐色土 | しまりなし。炭化物を含む。 |
| 3. 2.5YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりなし。炭化物を少量含む。 | 6. 7.5YR4/6 褐色土 | しまりなし。 |



第94図 VII C 0 g - 3 住居跡(1)

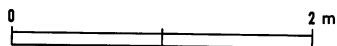
L = 275.600 m



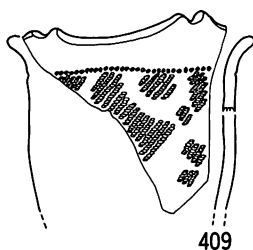
L = 275.600 m



→



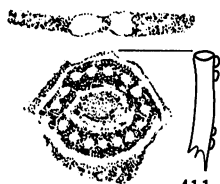
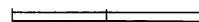
408



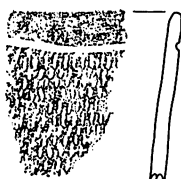
409



410



411



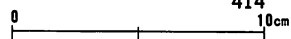
412



413

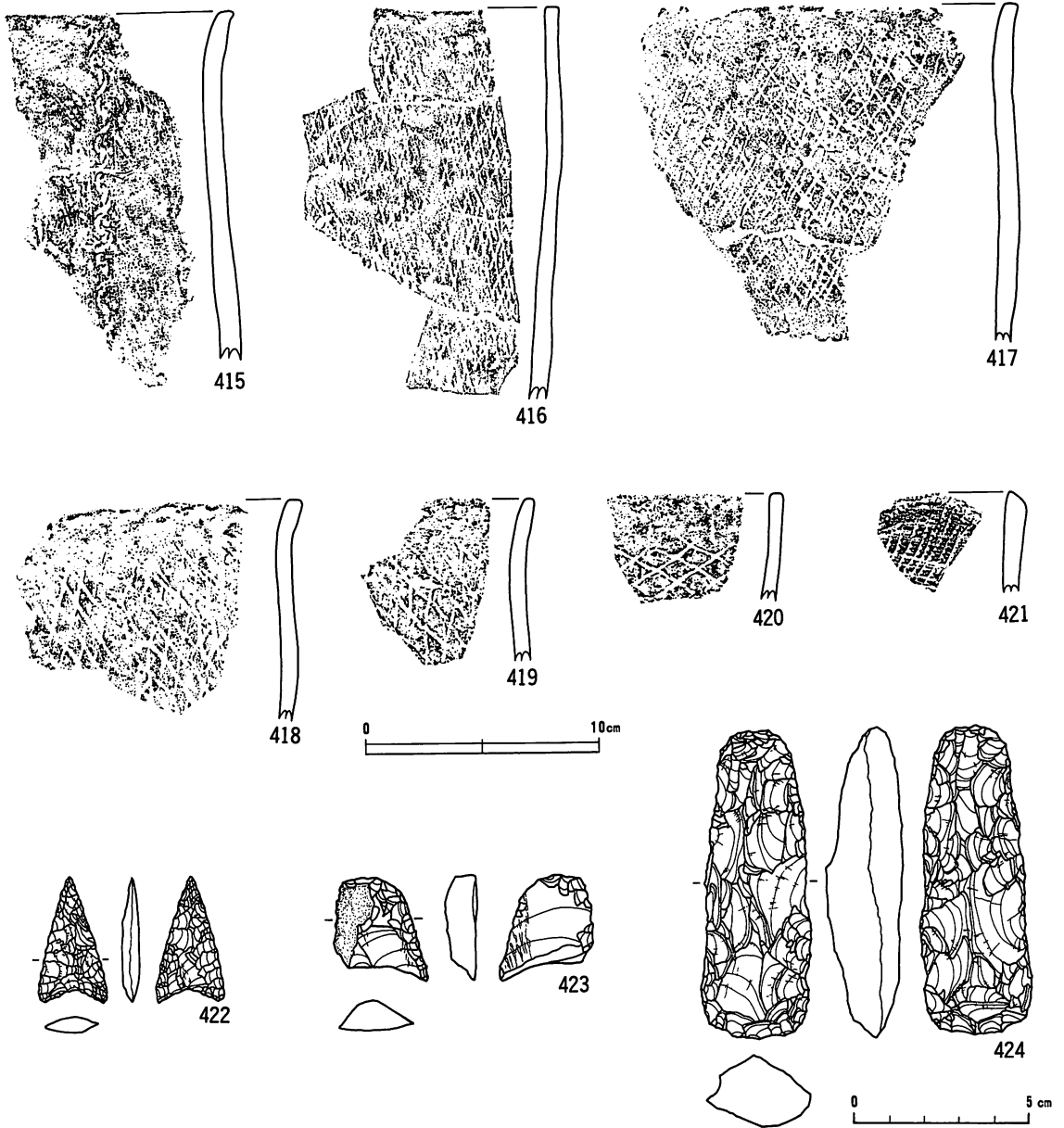


414



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
408	VII C O g - 3 住	埋土	櫛歯状沈線		[15.8]	-	(19.5)		II 9 a	162
409	VII C O g - 3 住	埋土	緩い波状口縁、頂部 2 山、R L 側面圧痕。	R L 縦	[14.0]	-	(10.5)			162
410	VII C O g - 3 住	埋土		不明	-	11.4	(3.9)			162
411	VII C O g - 3 住	埋土	波状口縁、頂部指頭状圧痕、隆帯上刺突文(棒状工具?)。						II 6 a	162
412	VII C O g - 3 住	埋土	口縁部無文、口縁下沈線。	多軸絡糸体。					II 6 b	162
413	VII C O g - 3 住	埋土	L R 側面圧痕。	L R × R L 第 1 種結束羽状縄文?						162
414	VII C O g - 3 住	埋土		L + R による木目状燃糸文。					II 6	162

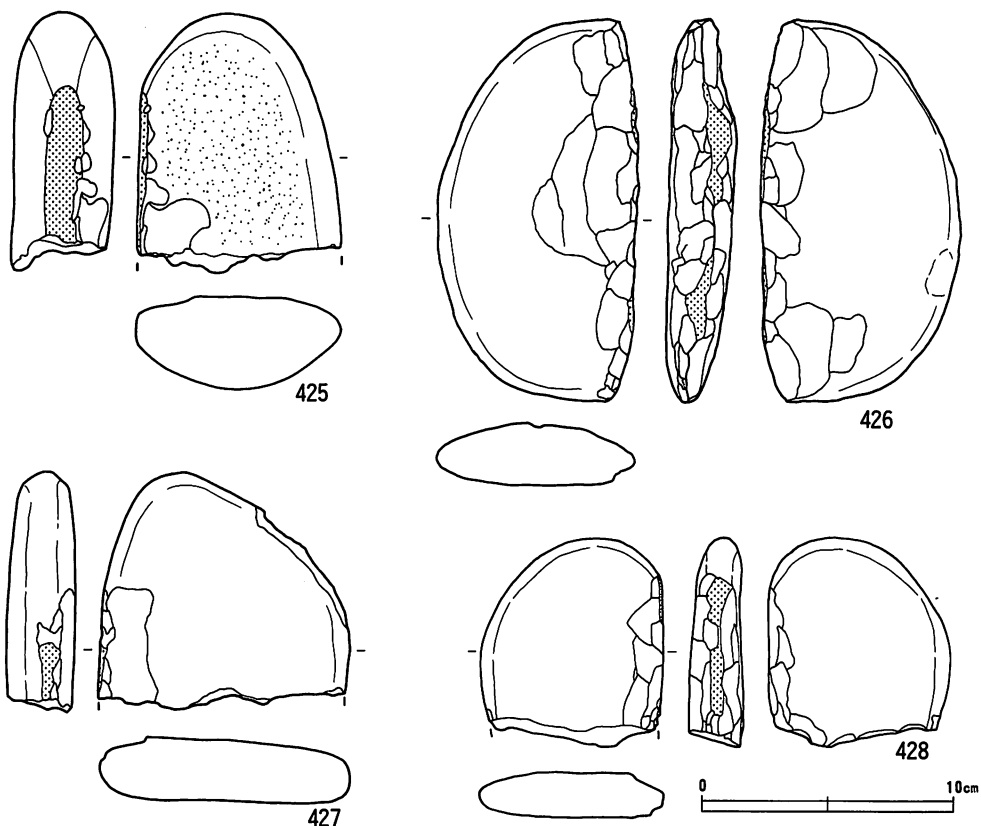
第95図 VII C 0 g - 3 住居跡(2)・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
415	ⅦC0g-3住	埋土		L R縦。片結び縦位綾絡文。						162
416	ⅦC0g-3住	埋土		R網目細文。					II6bカ	162
417	ⅦC0g-3住	埋土		R網目状燃糸文。					II6bカ	162
418	ⅦC0g-3住	埋土	右端に細隆帯が一部観察される。	R網目状燃糸文。					II6bカ	162
419	ⅦC0g-3住	埋土		L網目状燃糸文。					II6bカ	163
420	ⅦC0g-3住	埋土		R網目状燃糸文。横回転。					II2C	163
421	ⅦC0g-3住	埋土	波状口縁。貝殻腹縁圧痕。						I1	163

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
422	ⅦC0g-3住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	3.5	1.9	0.4	2.12		IIb1	163
423	ⅦC0g-3住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.9	2.7	0.9	6.15	自然面を残す。折損品か？	Ia1	163
424	ⅦC0g-3住	埋土	打製石斧	珪質泥岩	礮石西部	8.8	3.2	2.1	61.51	断面形は肉厚。辺の剝離は粗い。	I	163

第96図 ⅦC0g-3住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
425	VII C 0 g - 3 住	埋土	敲磨器類 A 群	珉長質凝灰岩	北上山地	(10.1	8.1	3.7	(450)	平滑面 1 面。	II a	163
426	VII C 0 g - 3 住	埋土	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	15.3	7.8	2.3	420		III b 1	163
427	VII C 0 g - 3 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安出岩	奥羽山地	(9.2	10.0	2.5	(400)		III b 2	163
428	VII C 0 g - 3 住	埋土	敲磨器類 A 群	デイサイト質凝灰岩	磐石	(8.2	7.2	1.7	(180)		III b	163

第97図 VII C 0 g - 3 住居跡出土遺物(3)

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、隅丸長方形が推定される。規模は北東壁から南西壁まで 6.9m、北西壁から床面南東の最大残存部まで 4.5m である。

〈壁・壁高〉基盤層でほぼ直立する。壁高は北西壁 67cm、南西壁 40cm である。

〈埋土〉上位は再堆積層起源で締まりを欠く。中位の第 4 層は基盤層に類似した色調で固く締まっている。粉炭を僅かに含む。下位は粉炭の他遺物を混入する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は 6 個検出された。P3 と P7 はやや浅いが、位置的には対応関係をもつ。埋土は住居のそれとほぼ等しく、上位は砂粒を含む褐色土、中位は砂粒を含む黒褐色土～暗褐色土、下位は粉炭を含む黄褐色土である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第95～97図、写真図版162・163）

〈土器〉埋土から5110g出土した。408の胎土は砂に比し粘土の量が³多く、色調はにぶい橙色である。胴部全体に小さな凹凸が多く、口縁部の厚さも均一性を欠き、やや手づくね土器の仕上がりに似る。器面全体に、櫛歯状の沈線が6本を1単位として施文されるが、所により3～5本の沈線として表れる。特定のモチーフは看取されず、縦横に不規則に施文している。409は2山を1単位とする山形突起を有する小波状口縁の土器である。突起は4単位あるものと思われるが、1対はやや高く、他の1対はそれよりやや低い。412は多軸絡条体を回転施文後に口縁部下に沈線を施している。口縁部の無文帯にも一部地文が観察されることから、磨消しによるものではない。420は網目状撚糸文の横回転で、本遺跡では数少ない。421は丸山状で口縁部断面は外削ぎである。

〈石器〉424は断面が肉厚で、長幅比が大きいことから打製石斧とした。基部の断面形は丸い。側辺の剝離は粗い。他に埋土から、岩手火山起源の溶岩1点、半円状花崗岩質岩が³1点、フレークが³7点出土している。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から中期初頭に属すると推定される。

VII C 0 h 住居跡（遺構番号36）

遺構（第98図）

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。VIII C 1 h 住居跡の床面の下から検出された。VIII C 1 h - 2 住居跡およびVII C 0 h - 2 住居跡に切られる。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが方形ないしは長方形を基調とするものと推定される。規模は残存値で、南北2.9m東西1.3mである。

〈壁・壁高〉西壁は基盤層、北壁は褐色土で緩やかに立ち上がる。壁高は西壁20cm、北壁20cmである。

〈埋土〉褐色土をブロック状に含む黄褐色土の単層で、下位に粉炭を縞状に混入する。

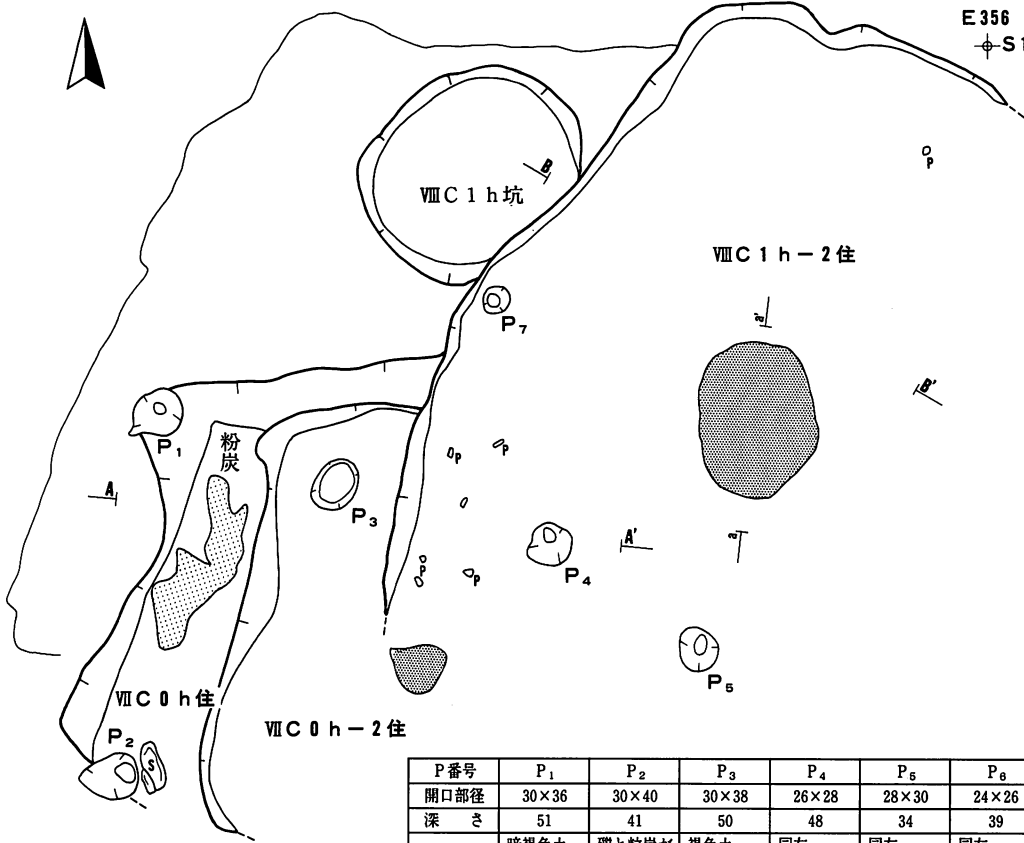
〈床・柱穴・施設〉基盤層で固くやや凹凸がある。壁際30×110cmの不整形の範囲に粉炭が分布する。柱穴はP1とP2の2個検出された。埋土は暗褐色土で小角礫と粉炭を含む。粉炭の分布から本住居は焼失住居と考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第99図、写真図版163）

〈土器〉429の左端は破損ではなく旧状を残しており、弁状となる可能性がある。他に埋土から単節斜縄文、木目状撚糸文、組縄縄文の小破片が出土した。

E 356
S 136

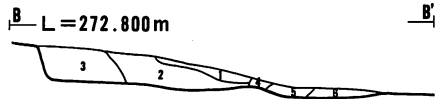
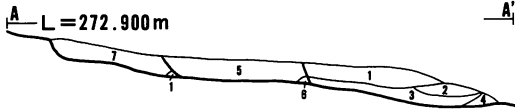


単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
開口部径	30×36	30×40	30×38	26×28	28×30	24×26	18×18
深 さ	51	41	50	48	34	39	33
埋 土	暗褐色土	礫と粒炭が まじっている	褐色土 明黄褐色土	同左	同左	同左	褐色で砂粒 を多く含む

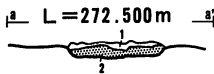
S 142
E 350

S 142
E 356

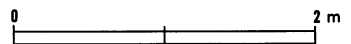


1. 7.5YR% 明褐色土 しまりなし。暗褐色土をブロック状に含む。
2. 10YR% 暗褐色土 ややしまりあり。炭化物、小角礫を少量含む。
3. 10YR% 褐色土 ややしまりあり。褐色土を縞状に含む。
4. 7.5YR% 褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。
5. 7.5YR% 褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
6. 10YR% 褐色土 しまりなし。小角礫、暗褐色土を含む。
7. 10YR% 黄褐色土 しまりなし。褐色土を粒状に含む。最下位に炭化物を縞状に含む。

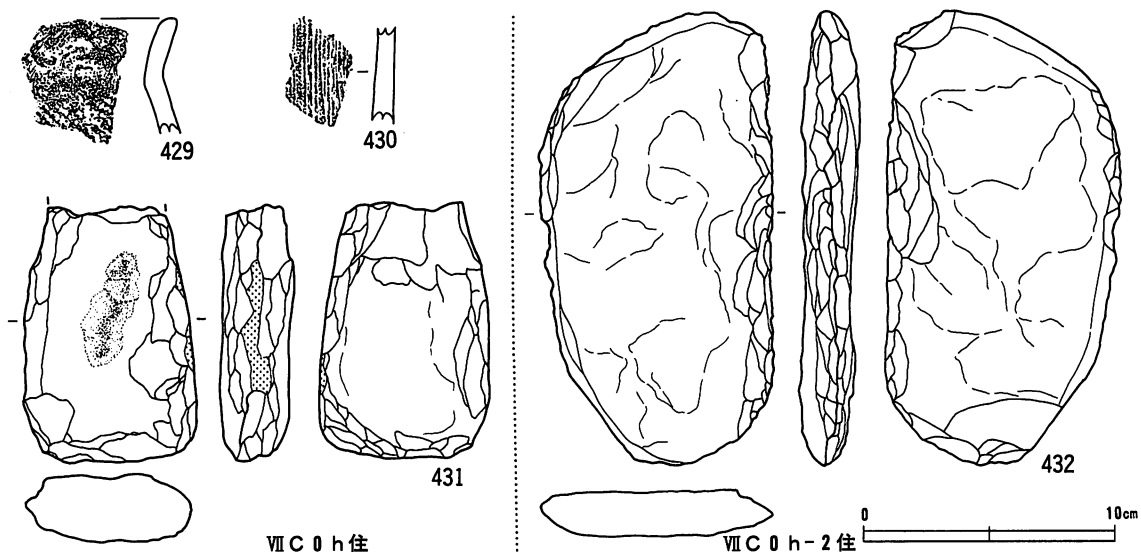
1. 10YR% 黒褐色土 しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。
2. 10YR% 黒褐色土 しまりなし。小角礫を少量、黄褐色土をブロック状に含む。
3. 10YR% 黒色土 しまりなし。暗褐色土を縞状に含む。
4. 10YR% 黒褐色土 しまりなし。小角礫を少量含む。
5. 5YR% 暗赤褐色土 しまりなし。黒褐色土を含む。
6. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土を粒状に含む。



1. 7.5YR% 暗褐色土 しまりなし。焼土粒を含む。
2. 2.5YR% 赤褐色土 焼土。



第98図 VII C 0 h・VII C 0 h - 2・VIII C 1 h - 2 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	計測値	底径	器高	備考	分類	写真
429	VII C 0 h 住	埋土	波状口縁。粘土紐貼り付け。	L R 縦。片結び縦位綾絡文。					III 1	163
430	VII C 0 h 住	埋土	櫛歯状沈線。						II 9	163

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
431	VII C 0 h 住	床面	敲磨器類 A 群	粘板岩質千枚岩	北上山地	(10.1)	6.8	2.6	(290)	+凹石。	III b 3	163
432	VII C 0 h - 2 住	床面	敲磨器類 A 群	凝灰質千枚岩	北上山地	17.8)	9.3	2.4	515		III c 2	163

第99図 VII C 0 h ・ VII C 0 h - 2 住居跡出土遺物

〈石器〉431は床面から出土したものであるが、1側面に擦面と剝離が観察されることから敲磨器類とした。敲打による凹みと周縁の剝離から、凹石・打製石斧などの多目的使用が考えられる。他にフレークが2点出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から中期初頭に属するものと推定される。

VII C 0 h - 2 住居跡 (遺構番号37)

遺構 (第98図)

〈検出状況〉西尾根の東斜面に位置する。VIII C 1 h 住居跡の床面の下から検出された。VII C 0 h 住居跡を切り、VIII C 1 h - 2 住居跡に切られる。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、柱穴の位置から方形を基調とするものと推定される。規模は推定値で、南北3.1m東西3.2mである。

〈壁・壁高〉VII C 0 h 住居跡の埋土である黄褐色土を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は西

壁11cm、北壁18cmである。

〈埋土〉締まりを欠く褐色土で、小角礫を少量含む。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で固くやや凹凸がある。柱穴は、推定範囲に4個検出されたが、本住居に明瞭に帰属するものはP3のみである。P4とP5は、規模・位置から本住居に帰属する可能性もあるが不明である。

〈炉〉本住居の推定範囲に焼土が1基検出されている。38×40cmの不整形の範囲に分布し、厚さは1cm程度であるが、一応地床炉としておく。

遺物（第99図、写真図版163）

〈土器〉床面から90g、埋土から155g出土したが、すべて縄文時代前期の斜縄文小片である。

〈石器〉432の1点とフレークが7点出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から、縄文時代前期後葉から中期初頭に属するものと推定される。

ⅦD1d住居跡（遺構番号38）

遺構（第100図、写真図版32）

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土中に焼土を検出し、斜面上へ方にそれに対応する壁を確認したことから住居として認定した。南側でⅦD1d-3住居に切られている。南西部は掘り過ぎてしまった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。長軸は6.3m、短軸は残存値で1.7mである。

〈壁・壁高〉上半部は暗褐色土層、下半部は基盤層である黄褐色土層を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は北壁50cm、西壁19cmである。

〈埋土〉上位には暗褐色土、下位には褐色土が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉北壁際は一部基盤層であるが、南側は褐色土である。全体に固く平坦である。柱穴は検出されなかった。

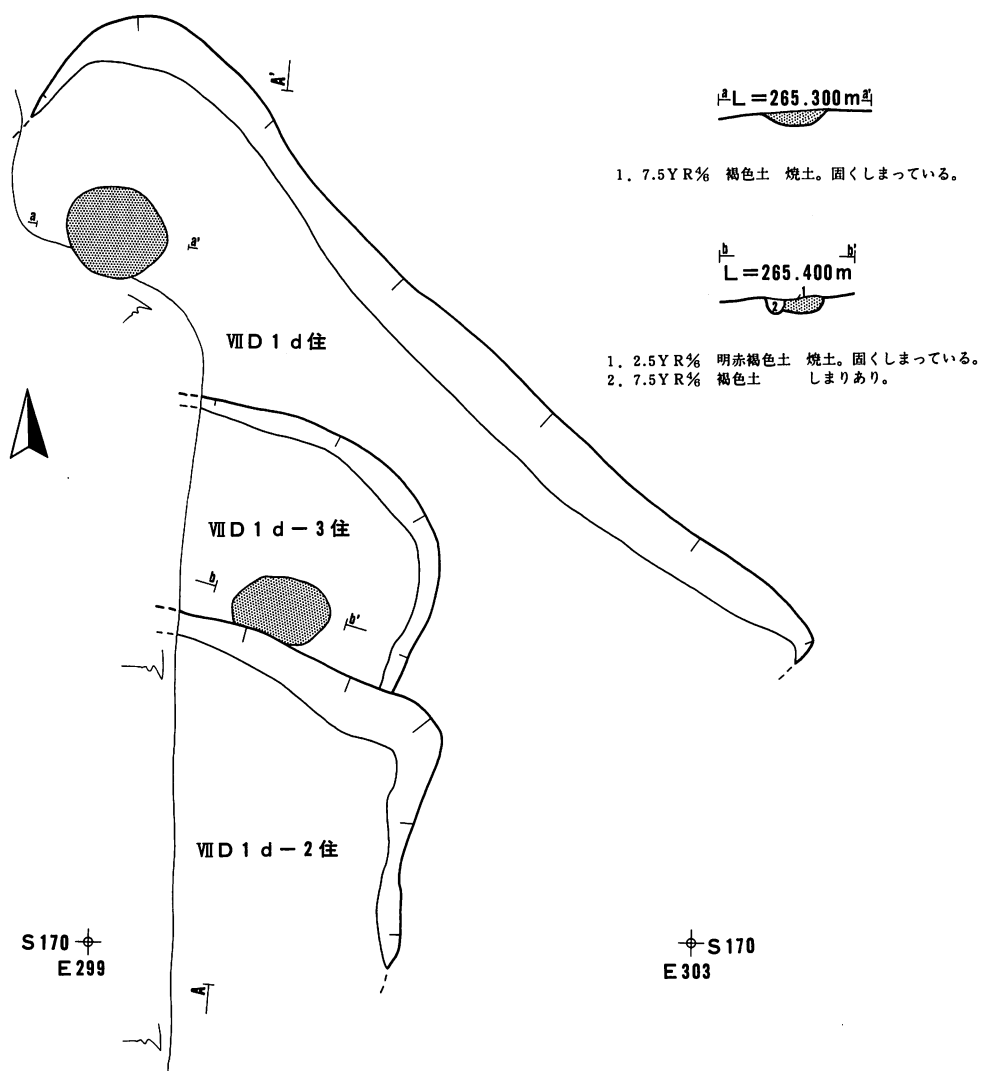
〈炉〉西壁寄りに地床炉1基を検出した。焼土は60×70cmの長丸状に分布し、厚さは最大12cmと発達している。断面はレンズ状で、床面が焼成を受けたものである。

遺物（第101図、写真図版164）

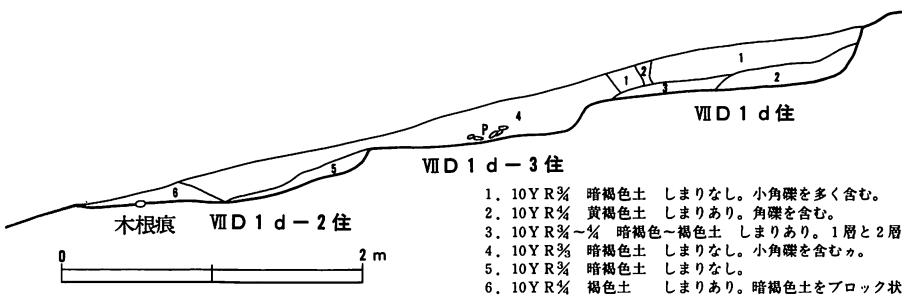
〈土器〉435は植物性繊維を混入する。ループ状圧痕は、いわゆるループ文とは異なる。

〈石器〉フレークが1点出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。



A L=265.400m



1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。
2. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。角礫を含む。
3. 10Y R%~% 暗褐色~褐色土 しまりあり。1層と2層の混土。
4. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
6. 10Y R% 褐色土 しまりあり。暗褐色土をブロック状に含む。

第100図 VII D 1 d・VII D 1 d-2・VII D 1 d-3 住居跡

ⅦD1d-2 住居跡 (遺構番号39)

遺構 (第100図、写真図版31)

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。西側から小角礫を含む暗褐色土層を掘り下げている段階で、断面に住居の掘り込みを確認し、ⅦD1d-2住居跡とⅦD1d-3住居跡を同時に検出した。埋土と壁が殆ど同色で平面的な検出ができなかったことから西側は掘り過ぎてしまった。北壁でⅦD1d-3住居跡と重複している。断面観察ではⅦD1d-3住居跡の埋土が本住居にも及んでいることから、本住居の方が古いと考えられる。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。残存値は東西1.8m、南北2.2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層で固く締まり、内湾気味に外傾する。壁高は北壁17cm、東壁16cmである。

〈埋土〉第5層が純粋な本住居の埋土と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉小角礫を含む褐色土を床面とする。斜面に沿って傾斜するが、北壁側に特にその傾向がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物〈土器〉埋土から縄文時代前期の横位綾絡文、網目状燃糸文、組縄縄文などの小破片が計200g出土したが、図示は割愛した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物などから縄文時代前期後葉から末葉後葉に属するものと推定される。

ⅦD1d-3 住居跡 (遺構番号40)

遺構 (第100図、写真図版31)

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。ⅦD1d-2住居跡と同時に検出した。平面的な検出ができなかったことから西側は掘り過ぎてしまった。南側でⅦD1d-2住居跡と重複する。埋土断面観察から、本住居の方が新しいと考えられる。

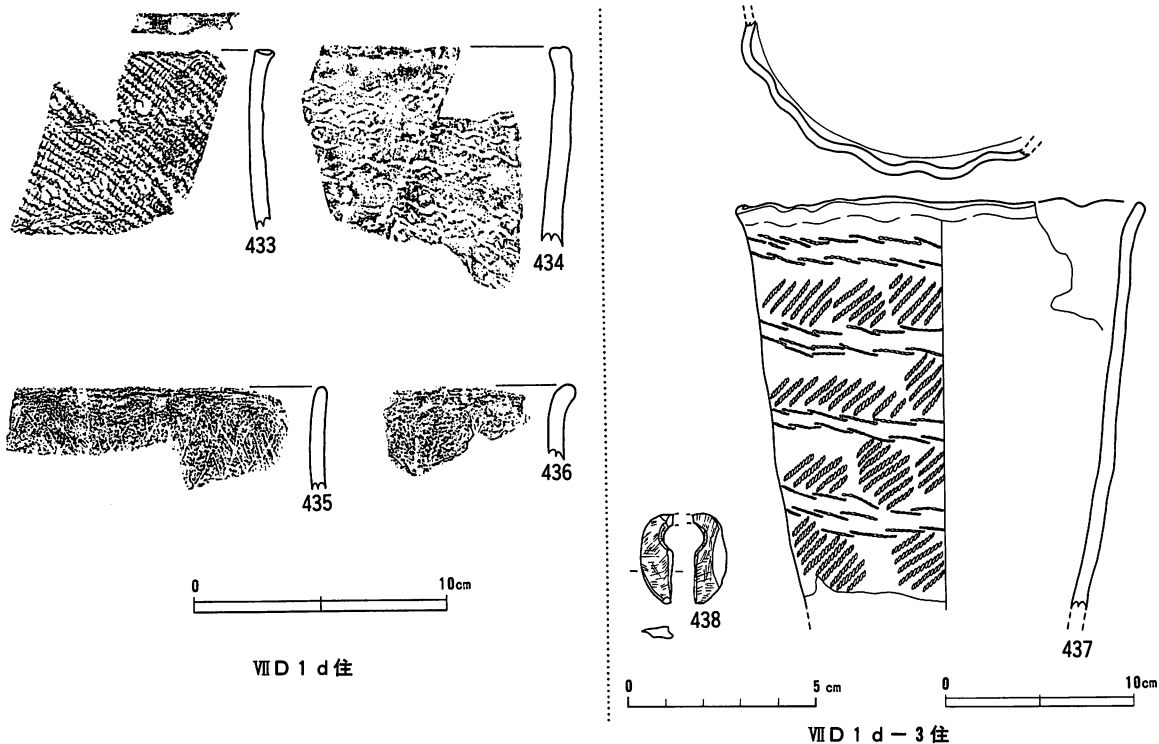
〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。残存値は東西1.7m、南北1.5mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層を壁とし固く締まり、内湾気味に外傾する。壁高は北壁17cm、東壁22cmである。

〈埋土〉締まりを欠く暗褐色土で、ⅦD1d-2住居の範囲にも及ぶ。

〈床・柱穴・施設〉小角礫を含む褐色土である。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されない。

〈炉〉検出されなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
433	VII D 1 d 住	埋土	ループ文?。口唇部指頭状圧痕。	直前段反捲?又はO段多糸				2条おきにループが現れる。	II 1 b	164
434	VII D 1 d 住	埋土	一部口唇端刻み目。重層する横位綾絡文。	L R横。片結び横位綾絡文。					II 3 a	164
435	VII D 1 d 住	埋土		R横目状燃糸文。					II 6bカ	164
436	VII D 1 d 住	埋土		L木目状燃糸文。					II 6bカ	164
437	VII 1 d-3住	埋土		L R横、横位綾絡文	[21.8]	-	(22.0)		II 6bエ	164

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
438	VII D 1 d-3住	埋土	耳飾	チャート	北上山地	(2.4)	-	0.3	(1.19)			164

第101図 VII D 1 d・VII D 1 d-3 住居跡出土遺物

遺物 (第101図、写真図版164)

<土器>埋土から1140g出土した。437は埋土から一括出土したものである。上面観が花卉状を呈する口縁を有する。口唇部は平らになでられ断面は角張っている。胴部は2段の縄を横回転後、綾絡文を施文したものと考えられる。

<石製品>438が1点出土したのみである。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物などから縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。

ⅦD 1 e 住居跡 (遺構番号41)

遺構 (第102図、写真図版32)

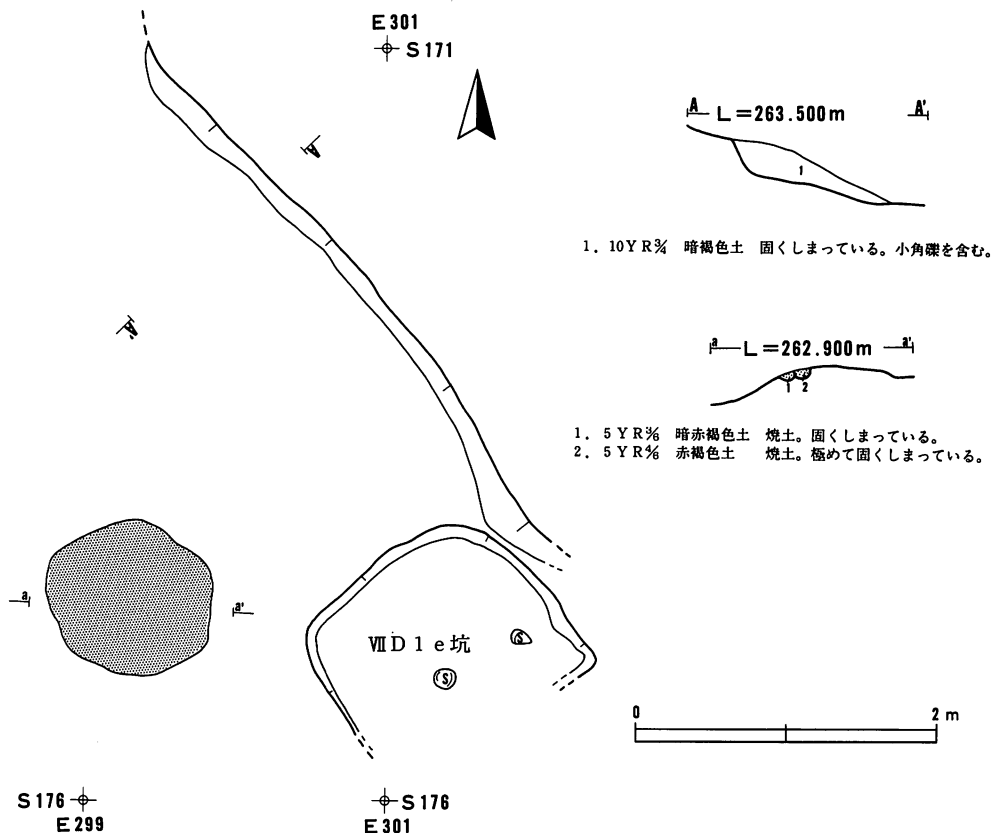
〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。小角礫を含む暗褐色土層を下げている過程で焼土を検出、その斜面上方で壁を確認し住居として認定した。斜面のため南側は流失しており、遺存状態が悪い。東側でⅦD 1 e 土坑と重複するが、本住居は同土坑を埋めて構築されている。

〈形状・規模〉不明であるが、北東壁の遺存状態から等高線にほぼ平行する長方形を基調とする可能性がある。規模は、残存値で3.1×4.3mである。

〈壁・壁高〉北東壁のみ残存し、再堆積層下位の褐色土でやや外傾、壁高は29cmである。

〈埋土〉再堆積層起源の暗褐色土の単層である。小角礫を含む。

〈床・柱穴・施設〉東側は平坦であるが、西側は掘り過ぎもあるものの斜面に沿って傾斜し、最大比高32cmである。全体に固いが、ⅦD1e土坑部分も同様であり踏み固めた可能性がある。柱穴は検出されなかった。



第102図 ⅦD 1 e 住居跡

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は100×108cmの不整形形状に分布する。断面観察では、強い焼成を受けている部分は平面形ほど広くなく、厚さは最大6cmである。

遺物 遺物は出土しない。

時期 時期を特定する資料を欠き不明である。検出状況・埋土・焼土の生成状況などから、縄文時代前期に属する可能性が高い。

ⅦD1g住居跡（遺構番号42）

遺構（第103図、写真図版32）

〈検出状況〉西尾根の南麓斜面に位置する。基盤層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。西側は小角礫含みの暗褐色土層が連続し、壁を確認できなかった。北西隅でⅦD1f土坑と重複している。ⅦD1f土坑はより上の層で確認しており、本住居の方が古い。西側の一部でⅦD0g住居跡と接するが、直接的な切り合いは観察できない。本住居の床面下からⅦD1g-2住居跡が検出された。

〈形状・規模〉西側は不明であるが、長軸方向が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。長軸は推定で4m、短軸は3.1mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く、外傾する。壁高は東壁19cm、北壁37cmである。

〈埋土〉固く締まる暗褐色土を主体とする。径5mm以下の炭化物を含むが、下位程多い。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD1g-2住居跡の埋土を床としており、全体に固い。床上および直上に焼土と多量の炭化物が分布することから焼失住居と考えられる。柱穴は3個検出された。いずれも北東隅付近に位置しており、上屋構造は不明である。床直上から34×40cmの偏平な自然礫が検出されている。

〈炉〉長軸中央の東寄りに地床炉1基を検出した。焼土は26×50cmの不整形の範囲に分布し、断面はレンズ状で厚さは最大6cmである。焼土の西隣に径22cmの角礫が埋められているが、被熱の痕跡はない。粉炭が混入する黒褐色土が焼土の南側に巡る。

遺物（第104～108図、写真図版164～168）

〈検出状況〉北東四半部の床面ないしその直上で数個体が、おり重なるように出土した。直上としたものも、床面出土のものとは一括資料となり得る出土状況である。

439は口径・器高とも他より大きい。第1種結束羽状縄文を器面全体に施文した後、口縁部に粘土紐を鋸歯状に貼り付けて全周させる。粘土紐の屈曲部分はやや曲線的な印象があり、断面形は長方形に近い。粘土紐上には棒状工具（先端が閉鎖している竹管か）により、器面に対してほぼ直角に刺突が施される。口唇部は丸みを帯びる。内面は全体に丁寧になでられている。440と441は同一固体であるが、口径・器高とも不明である。439と同様口縁直下に粘土紐を鋸

歯状に巡らしているらしいが剥落しており詳細は不明である。鋸歯状粘土紐の下端に接して馬蹄状の粘土紐が貼り付けられる。粘土紐には器体に対してほぼ直角に竹管刺突が連続的に施文される。442は焼成良好で硬質である。口縁部分で急に外反する。443は焼成がやや不良で脆い印象をもつ。網目状の地文は全周せず器面の約3分の1は無文である。444と445、456は同一固体であるが、器高は不明である。胴中央部から口縁部まで内弯し、口縁直下で外反する。446は口縁部に上面観が鋸歯状となる装飾体を有する波状口縁の土器である。破損部の観察では、波状口縁を作出した後に装飾体を貼り付け、内面と外面から指頭で調整している。同装飾体の中央部には竹管刺突がほぼ直角に連続的に施文され、端の部分は浅い凹みがつけられる。447は灰褐色で焼成不良でやや脆い。口縁部内面にも、外面に用いたものと同じ原体で施文している。内面は縦にみかきかけられている。448は口縁直下に綾絡文、胴上半部には第2種の、胴下半部には第1種の結束羽状縄文が施文される。上の地文が下のそれより後に施文されている。口唇部は丸みを帯びる。色調は灰褐色で、焼成は良好である。451は口縁部がやや外反し、口唇部は平らになでられ断面形は角張る。453の胎土は、表面観察では砂に比し粘土が多い印象がある。地文は0段の撚糸文として表現したが、あるいは緩い撚りの縄である可能性もある。条間が比較的離れ、条そのものもやや太めである。口唇部は平らになでられ、地文と同一の原体が押圧される。454と455は埋土から出土した同一固体であるが、本住居とは時期を異にするもので混入と思われる。

〈石器〉470は尖頭器様石器としたが1側辺は入念な加工であるのに対し、他の2縁辺の加工はやや粗く、若干対称性を欠く。471は上辺と下辺に打減痕が観察されることからピエス・エスキューとした。476はやや粗い剝離であるが、石筥の未製品の可能性もある。477は急角度の細かい加工が施され、折断面とかがわって尖頭部を形成する。図示した他にUフレ2点、フレークが床面から36点、埋土から47点（北上山地産・粘板岩、雫石産・硬質泥岩、奥羽山地産・流紋岩他）が出土した。

時期 床面出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

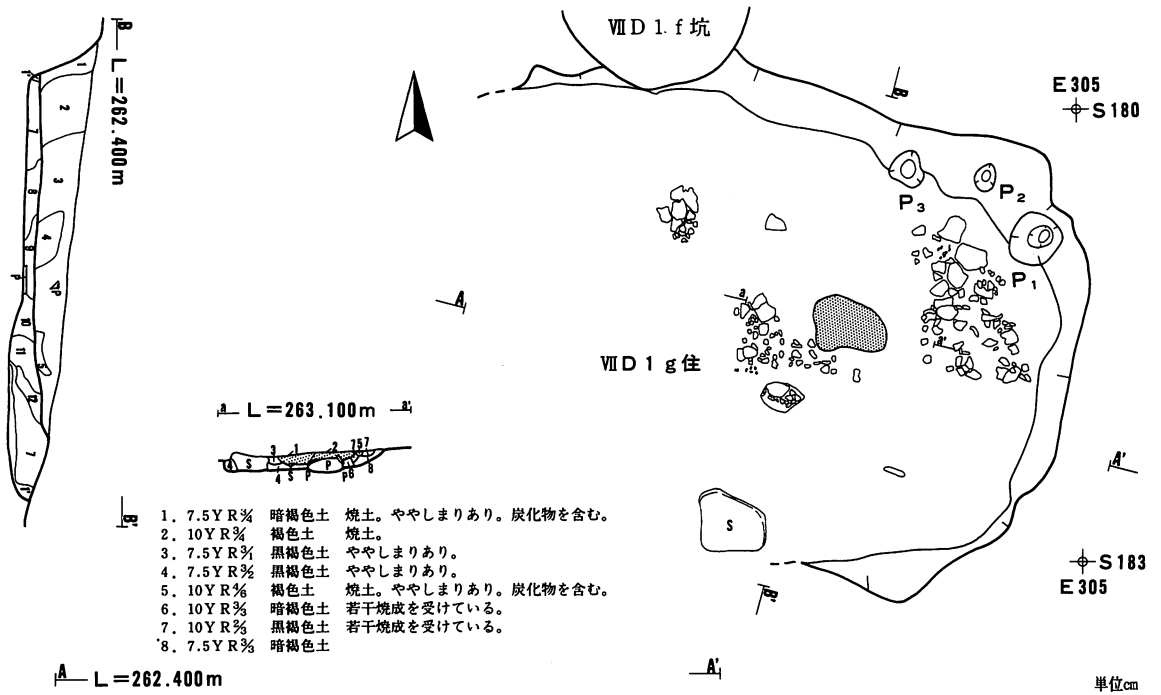
ⅦD1g-2住居跡（遺構番号43）

遺構（第103図、写真図版34）

〈検出状況〉ⅦD1g住居跡床面で、同住居の壁より内側を巡る黒褐色土のプランとして検出した。南西壁は確認できなかった。

〈形状・規模〉長軸方向が等高線にほぼ平行する凸辺隅丸長方形で、規模は、短軸2.9m長軸4.2mである。

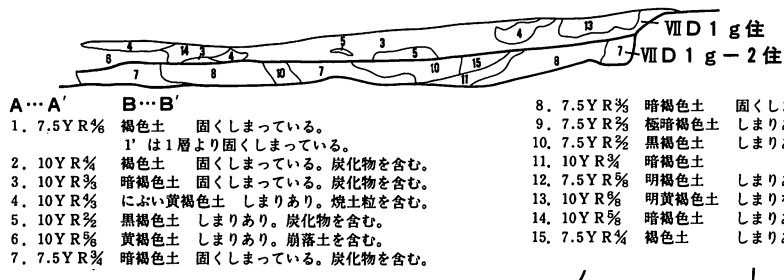
〈壁・壁高〉基盤層で固く、やや外傾する。壁高は東壁35cm、西壁4cm、南壁10cm、北壁45cm



- 1. 7.5YR% 暗褐色土 焼土。ややしまりあり。炭化物を含む。
- 2. 10YR% 褐色土 焼土。
- 3. 7.5YR% 黒褐色土 ややしまりあり。
- 4. 7.5YR% 黒褐色土 ややしまりあり。
- 5. 10YR% 褐色土 焼土。ややしまりあり。炭化物を含む。
- 6. 10YR% 暗褐色土 若干焼成を受けている。
- 7. 10YR% 黒褐色土 若干焼成を受けている。
- 8. 7.5YR% 暗褐色土

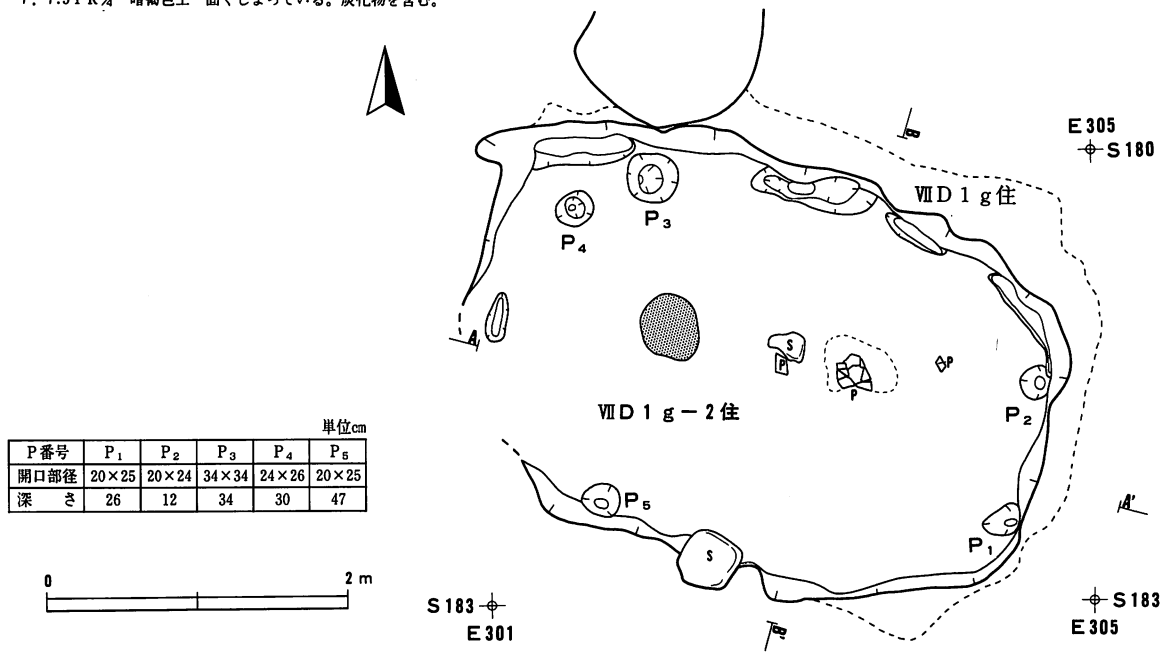
単位cm

P番号	P ₁	P ₂	P ₃
開口部径	35×35	20×15	30×25
深さ	40	16	30



- A...A' B...B'
- 1. 7.5YR% 褐色土 固くしまっている。1'は1層より固くしまっている。
 - 2. 10YR% 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
 - 3. 10YR% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
 - 4. 10YR% にぶい黄褐色土 しまりあり。焼土粒を含む。
 - 5. 10YR% 黒褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
 - 6. 10YR% 黄褐色土 しまりあり。崩落土を含む。
 - 7. 7.5YR% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。

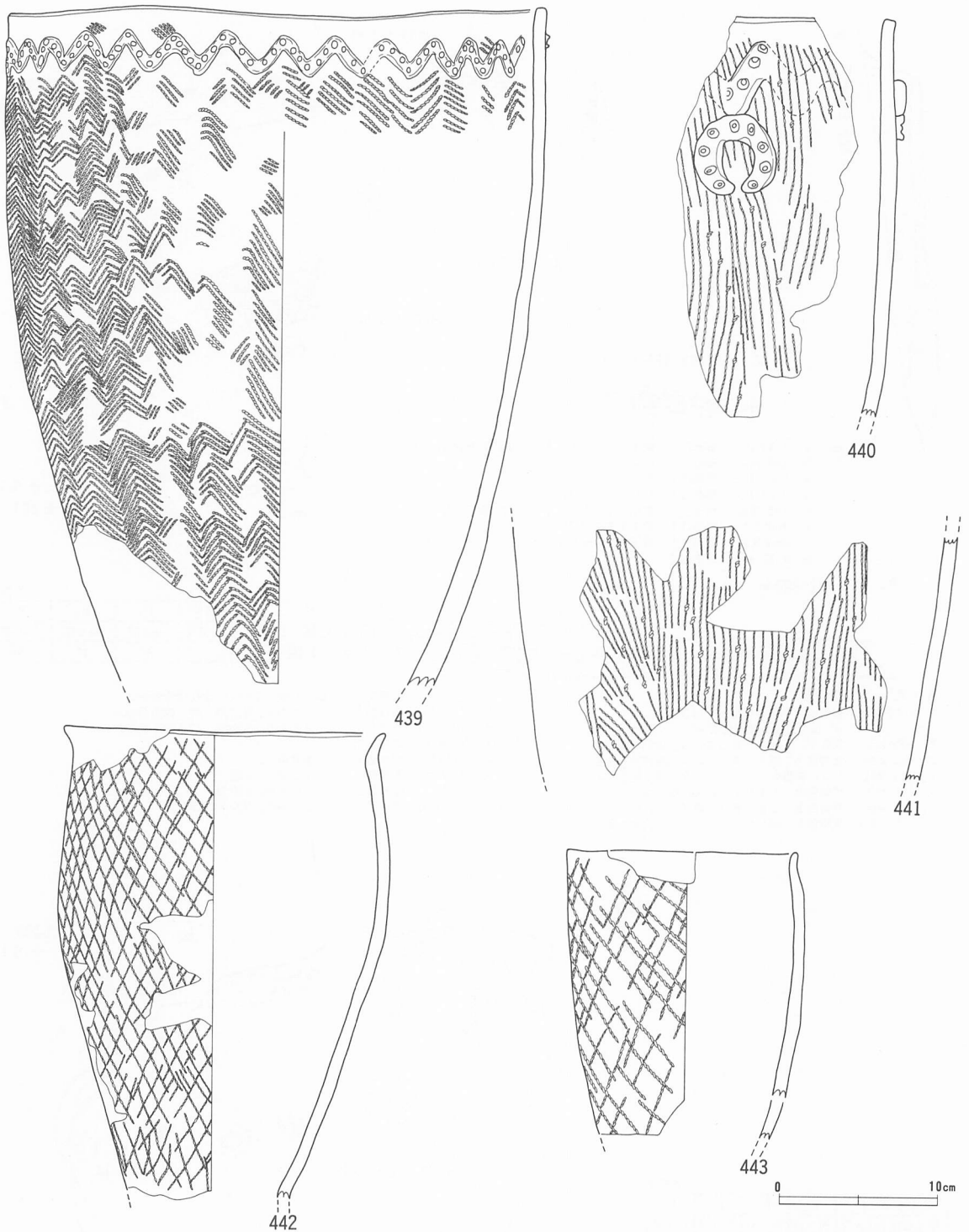
- 8. 7.5YR% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
- 9. 7.5YR% 極暗褐色土 しまりあり。炭化物、焼土粒を含む。
- 10. 7.5YR% 黒褐色土 しまりあり。炭化物、焼土粒を含む。
- 11. 10YR% 暗褐色土
- 12. 7.5YR% 明褐色土 しまりあり。
- 13. 10YR% 明黄褐色土 しまりなし。攪乱?
- 14. 10YR% 暗褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
- 15. 7.5YR% 褐色土 しまりあり。炭化物を含む。



単位cm

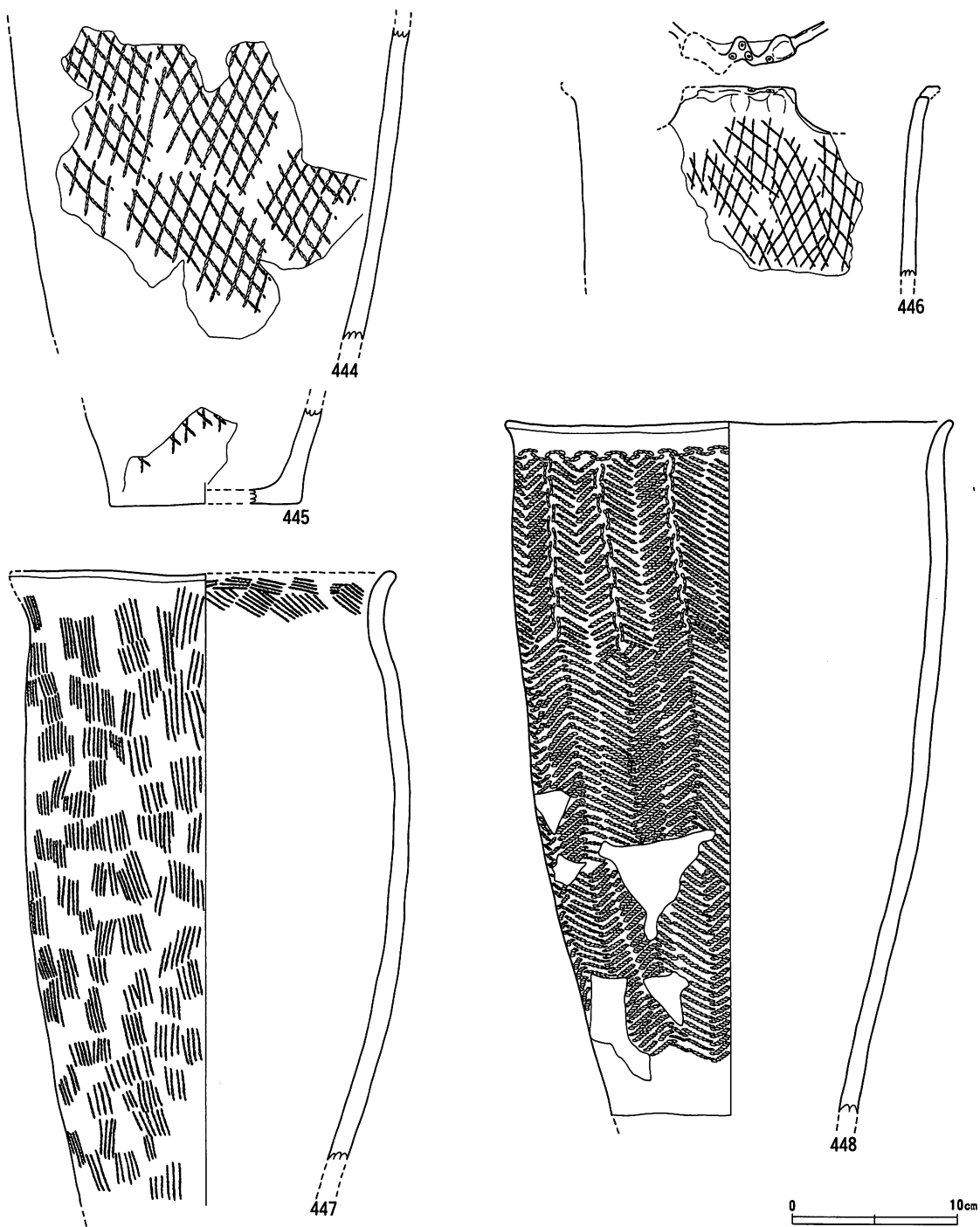
P番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	20×25	20×24	34×34	24×26	20×25
深さ	26	12	34	30	47

第103図 VII D 1 g・VII D 1 g - 2 住居跡



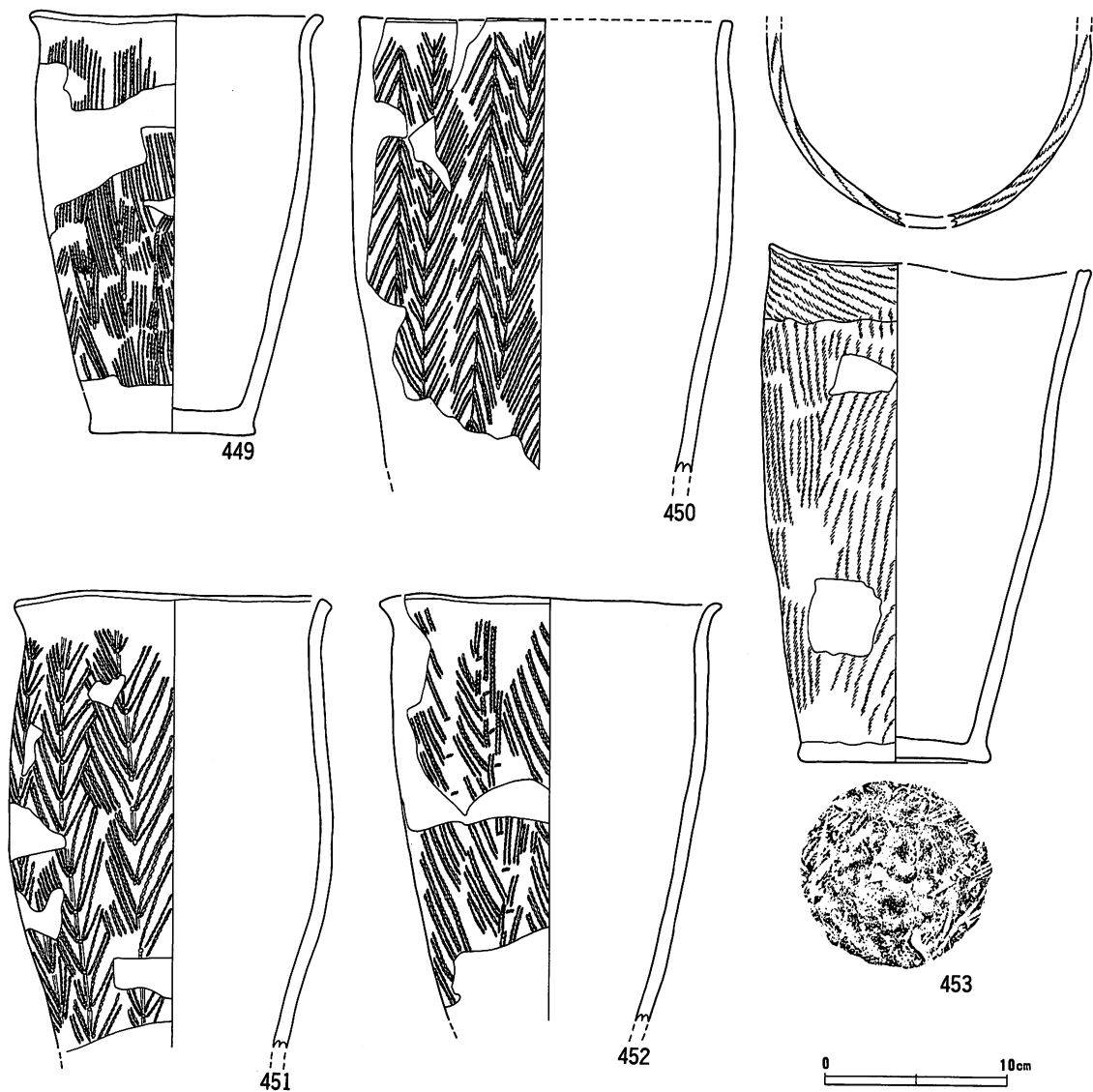
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
439	VII D 1 g 住	床面	口頸部鋸齒状隆帯上竹管刺突	LR × RL 第1種結束羽状縄文	34.0	—	(42.7)		II 6bア	164
440	VII D 1 g 住	床直上	鋸齒状隆帯、馬蹄状隆帯上竹管刺突	R 燃糸文	—	—	(26.8)	441と同一個体	II 6bア	164
441	VII D 1 g 住	床直上		R 燃糸文	—	—	(15.6)	446と同一個体	II 6bア	164
442	VII D 1 g 住	床直上		R 網目状燃糸文	[20.3]	—	(29.7)		II 6bカ	164
443	VII D 1 g 住	床面		L 網目状燃糸文	[14.5]	—	(19.0)		II 6bカ	164

第104図 VII D 1 g 住居跡出土遺物(1)



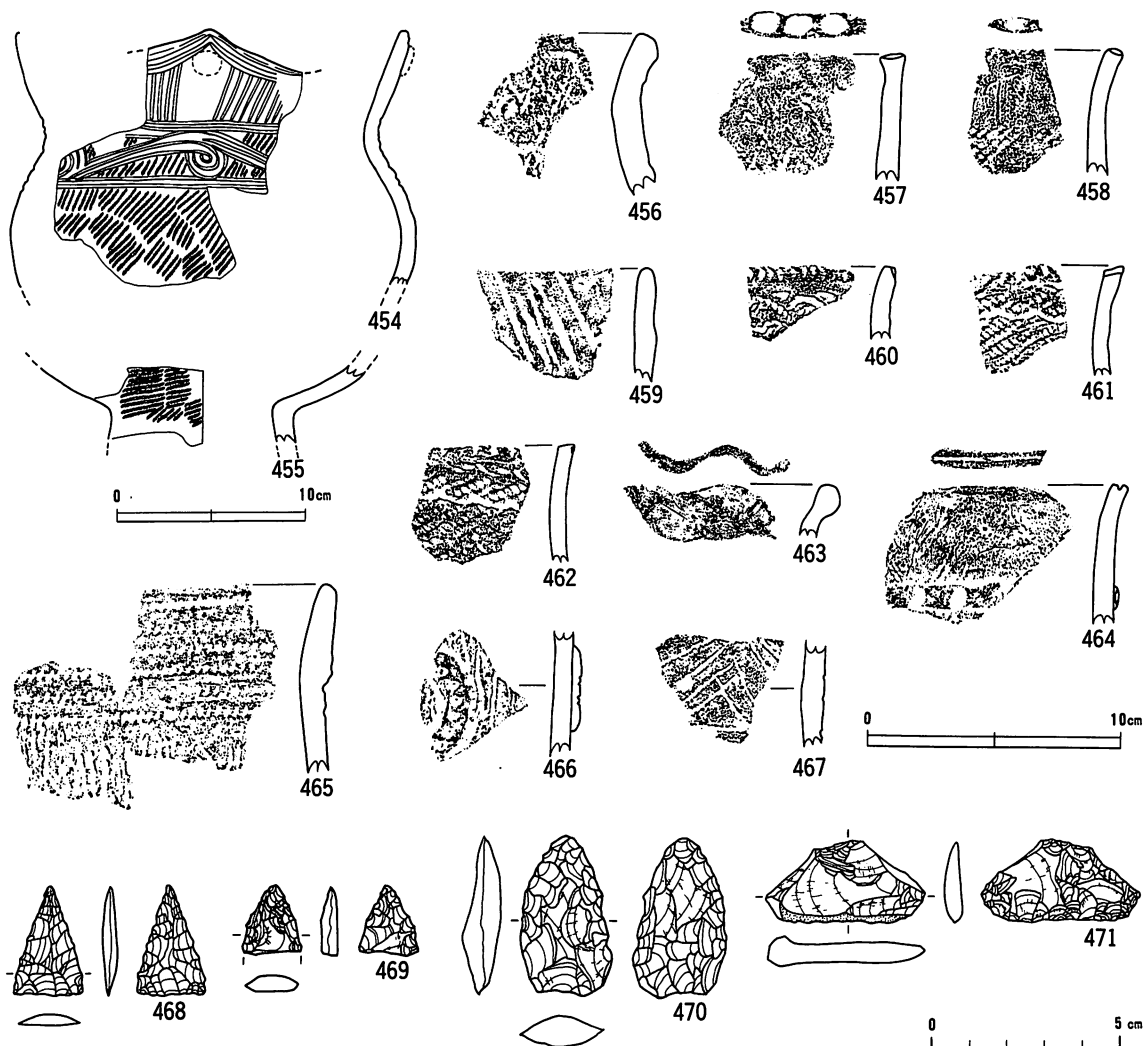
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
444	VII D 1 g 住	床直上		L R 網目状燃糸文	-	-	(18.4)	445, 456 と同一個体	II 6 b	164
445	VII D 1 g 住	床直上		L R 網目状燃糸文	-	[11.6]	(5.8)	444, 456 と同一個体	II 6 b	164
446	VII D 1 g 住	床直上	口縁部弁状突起、鋸歯状裝飾体上竹管刺突	R 網目状燃糸文	[23.0]	-	(11.5)		II 6a 7	165
447	VII D 1 g 住	床面	口縁部内側も施文	R 燃糸文	[23.5]	-	(39.0)		II 6b 才	165
448	VII D 1 g 住	床直上	胴上半部第2種結束羽状縄文、胴下半部第1種結束羽状縄文	L R × R L	[27.2]	-	(42.4)	縦横混入	II 6b 才	165

第105図 VII D 1 g 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
449	VII D 1 g 住	床直上		R木目状燃糸文	[16.1]	[9.0]	23.2		II 6bカ	165
450	VII D 1 g 住	床直上		R木目状燃糸文	[20.4]	-	(24.8)		II 6bカ	165
451	VII D 1 g 住	床面		L木目状燃糸文	17.4	-	(25.1)		II 6bカ	165
452	VII D 1 g 住	埋土上部		L木目状燃糸文	[18.8]	-	(23.5)		II 6bカ	165
453	VII D 1 g 住	床直上	口唇部にも施文	I燃糸文	17.7	10.6	28.6	粘土多い。	II 6bカ	165

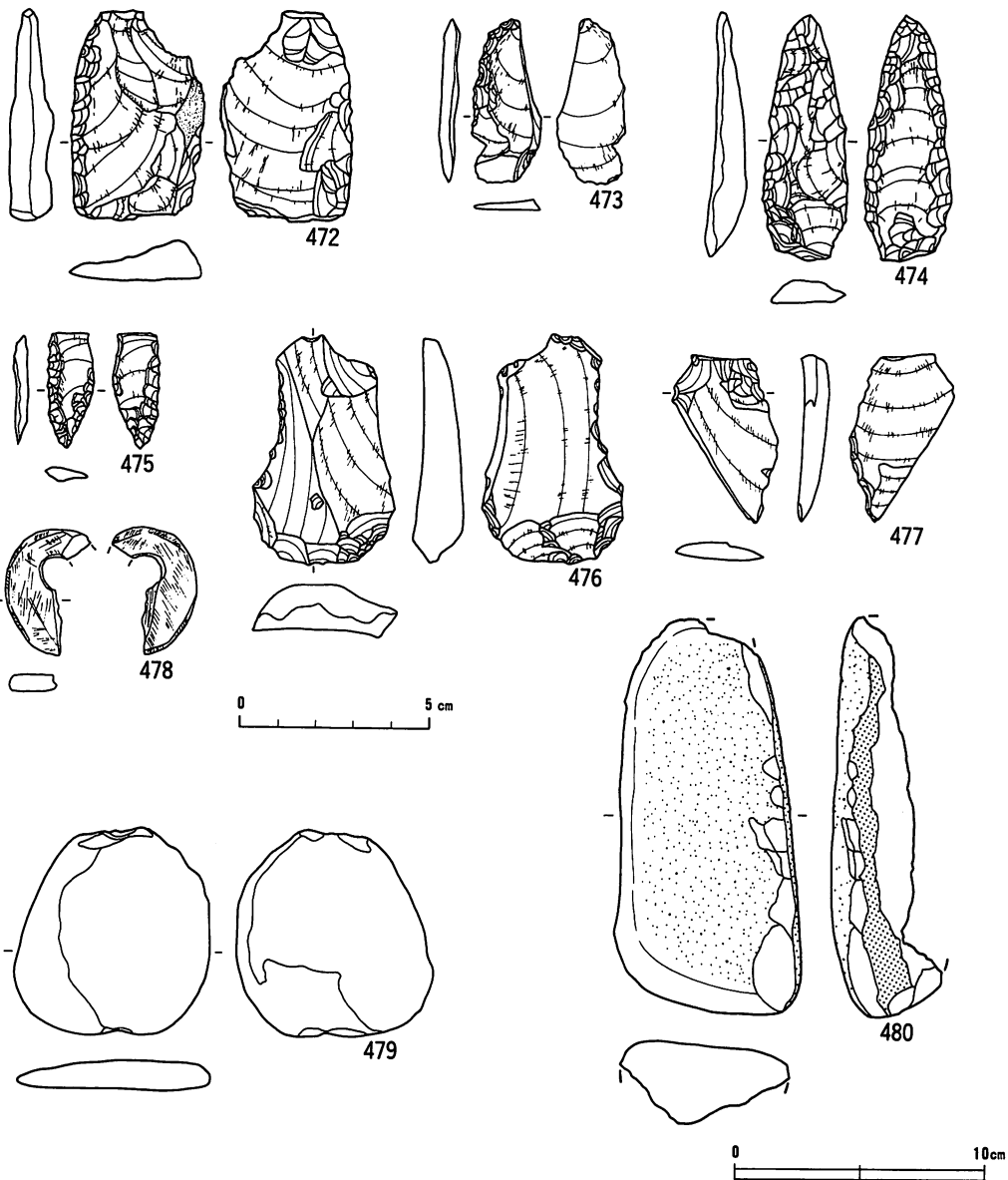
第106図 VII D 1 g 住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
454	ⅦD1g住	埋土	波状口縁、沈線	L R横	[20.9]	-	(13.6)	455と同一個体	Ⅲ1a	165
455	ⅦD1g住	埋土	金魚鉢形	L R横	-	-	(4.3)	454と同一個体	Ⅲ1a	165
456	ⅦD1g住	床面		L R網目状燃糸文。				444, 445と同一個体	Ⅱ6bイ	166
457	ⅦD1g住	床面	口唇部指頭状圧痕。	R網目状燃糸文。					Ⅱ6bオ	166
458	ⅦD1g住	Q4埋土	口唇部指頭状圧痕。口縁部無文。	L R横。					Ⅱ6bオ	166
459	ⅦD1g住	埋土		L 燃糸文。					Ⅱ6bカ	166
460	ⅦD1g住	Q4埋土	口唇端鋭い刻み目。口縁部横位綾絡文。	L R横。					Ⅱ3a	166
461	ⅦD1g住	埋土上部	菱形的突起、突起の口唇部は平坦、口唇端刻み目。口縁部横位綾絡文。	L R横。					Ⅱ3a	166
462	ⅦD1g住	埋土上部	口唇端刻み目。刻み筋後口唇部をナデ。口縁部横位綾絡文。	L R横。					Ⅱ3a	166
463	ⅦD1g住	Q4埋土	鋸歯部沈線。隆帯上指頭状圧痕(左側から)。						Ⅱ6aア	166
464	ⅦD1g住	Q4埋土	絡条体圧痕。	R 2 杖木目状燃糸文。					Ⅱ6bイ	166
465	ⅦD1g住	床直土	曲線的隆帯上に竹管刺突。	R 燃糸文。					Ⅱ8b	166
466	ⅦD1g住	Q4埋土	曲線的隆帯上に竹管刺突。	R 燃糸文。					Ⅱ6bイ	166
467	ⅦD1g住	埋土	波状口縁。沈線。						Ⅱ7	166

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
468	ⅦD1g住	Q3埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	3.1	1.7	0.4	1.70		I 1	166
469	ⅦD1g住	床直上	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	(1.8)	1.6	0.4	(1.27)	基部側大半欠損。	不明	167
470	ⅦD1g住	Q1埋土	尖頭器様石器	硬質泥岩	礫石西部	4.3	2.4	0.8	8.23			167
471	ⅦD1g住	床直上	ピエス・エスキーユ	硬質泥岩	礫石西部	4.2	2.2	0.7	5.54	台形状。		167

第107図 ⅦD1g住居跡出土遺物(4)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
472	VII D 1 g 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	5.5	3.5	1.0	21.8		I a1	167
473	VII D 1 g 住	Q 1 床土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	4.3	1.8	0.2	2.55		I a2	167
474	VII D 1 g 住	Q3床直上	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	6.5	2.3	0.6	12.05		I e	167
475	VII D 1 g 住	Q3床直上	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	3.0	1.2	0.3	1.47	側面観が鋸歯縁。	III	167
476	VII D 1 g 住	埋土上位	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	0.1	3.8	1.1	25.29	筥状石器の未製品の可能性あり。	IV	167
477	VII D 1 g 住	埋土上位	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	4.5	2.5	0.5	6.40	折断面とかかかって尖頭部を形成。	VI	167
478	VII D 1 g 住	Q 3 埋土	耳飾	チャート	北上山地	3.4	(2.3)	0.4	(4.03)			167
479	VII D 1 g 住	床直上	石錘	赤色凝灰岩	北上山地	8.2	7.7	1.2	129		I	167
480	VII D 1 g 住	床直上	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	15.7	(7.5)	(6.8)	(460)	平滑面1面。欠損品。		168

第108図 VII D 1 g 住居跡出土遺物(5)

である。

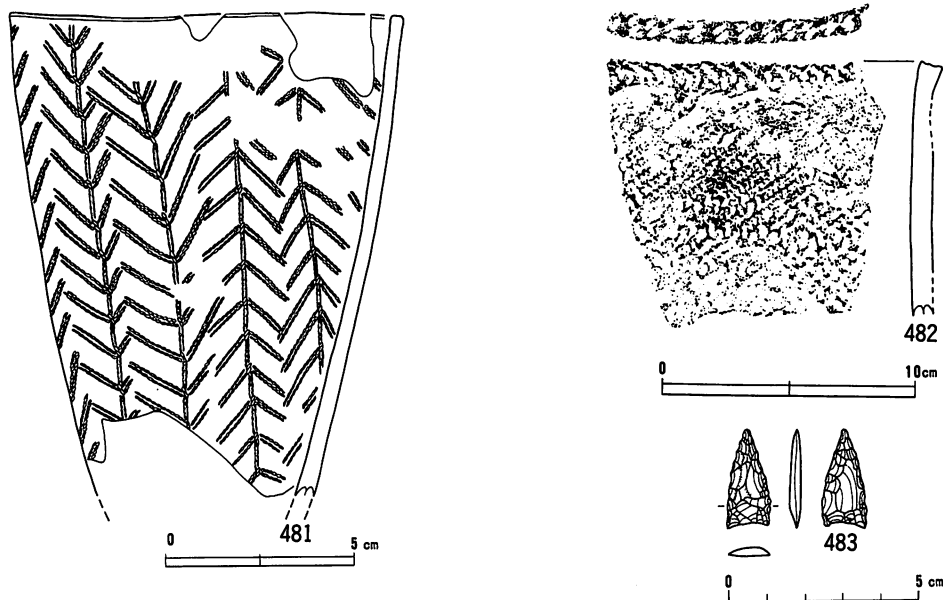
<埋土>暗褐色土を主体とし、微細な炭化物を含む。第9層には、ⅦD1g住居による被熱の痕跡が残る。全体に固く締まっている。

<床・柱穴・施設>基盤層で固くやや凹凸があり、中央部が少し窪む。柱穴は5個検出された。概ね壁際に位置し、P2を除けば規模もほぼ等しい。埋土は暗褐色土で固く締まっている。周溝が北壁際と西壁側の一部に断続的に巡る。幅10~20cm、深さ5~7cmで固く締まった黒褐色土を埋土とする。

<炉>長軸線上西側に焼土が検出された。径40cmの不整な円形に分布し、厚さは1~1.5cm程度と薄い。微細な炭化物を含みやや締まりを欠く。焼土の発達が悪いが一応地床炉としておく。

遺物 (第109図、写真図版168)

<土器>481は床面出土であるが、胎土に砂を多く含み、焼成は良好、色調は明黄褐色である。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
481	ⅦD1g-2住	床直上		R木目状燃糸文	28.0	-	(25.7)		II6bカ	168
482	ⅦD1g-2住	床面	口唇部縄の側面圧痕。繊維混入。	L R結束横。				繊維混入	II1a	168

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
483	ⅦD1g-2住	床直上	石鏃	泥質凝灰岩	磐石西部	2.6	1.1	0.2	0.82		IIb2	168

第109図 ⅦD1g-2住居跡出土遺物

口唇部はなでにより平坦である。482は繊維土器であり混入したものである。

〈石器〉石鏃1点の出土である。他にUフレ2点、フレーク9点が出土した。

時期 重複関係・床面出土遺物から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

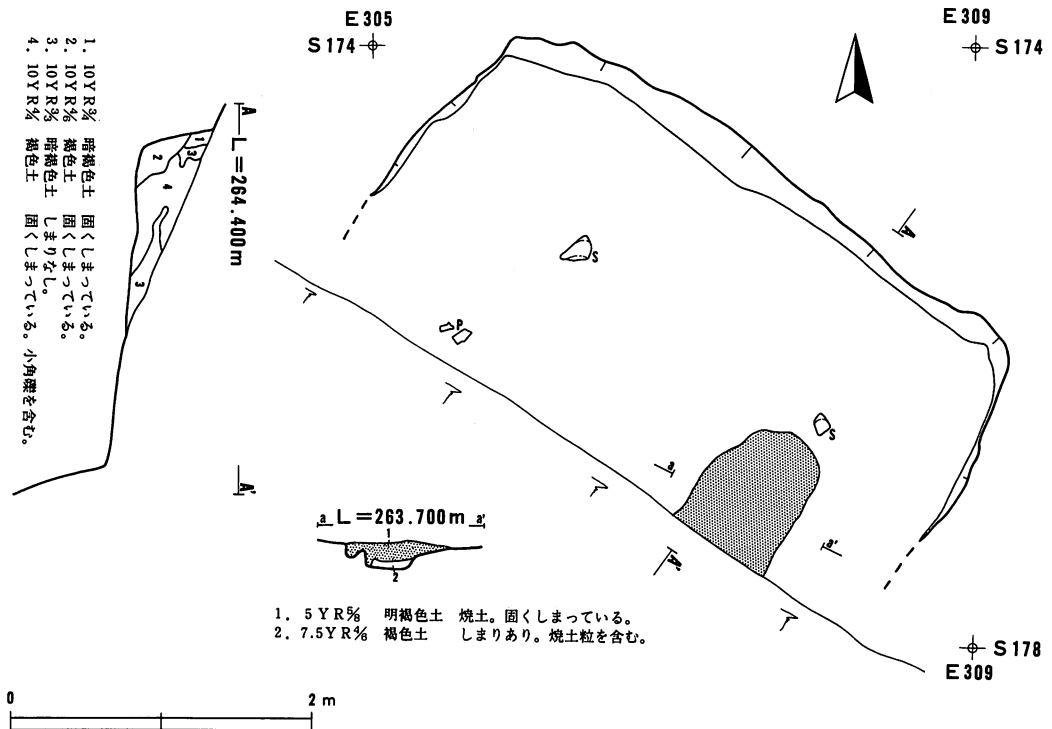
VII D 2 f 住居跡 (遺構番号44)

遺構 (第110図、写真図版34)

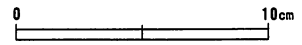
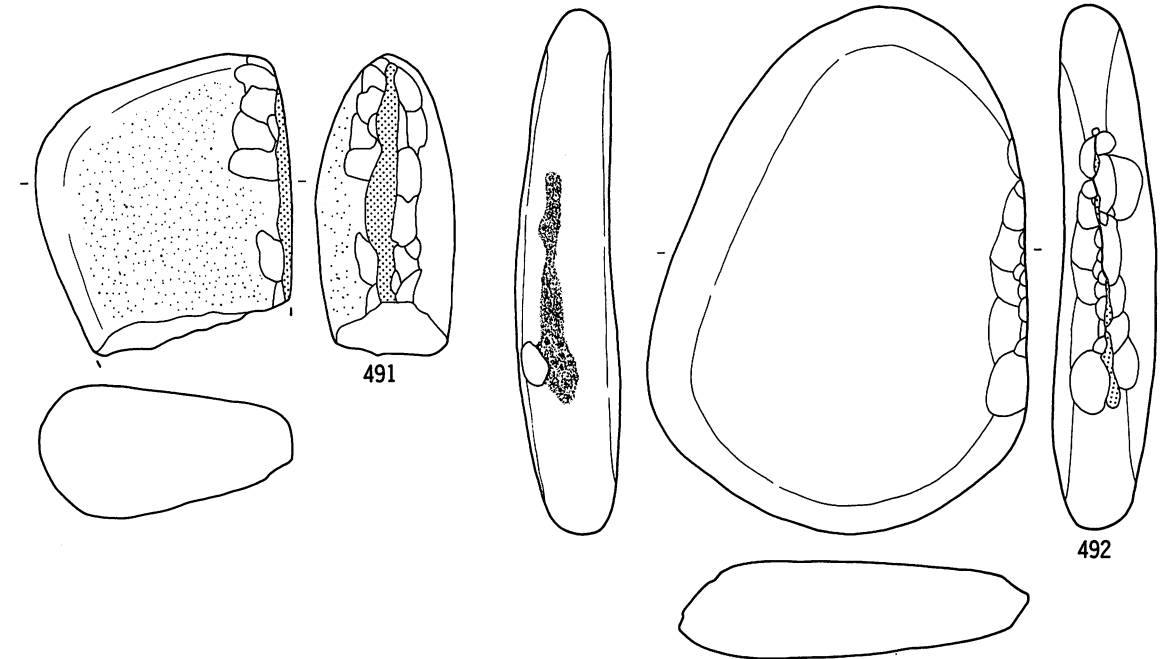
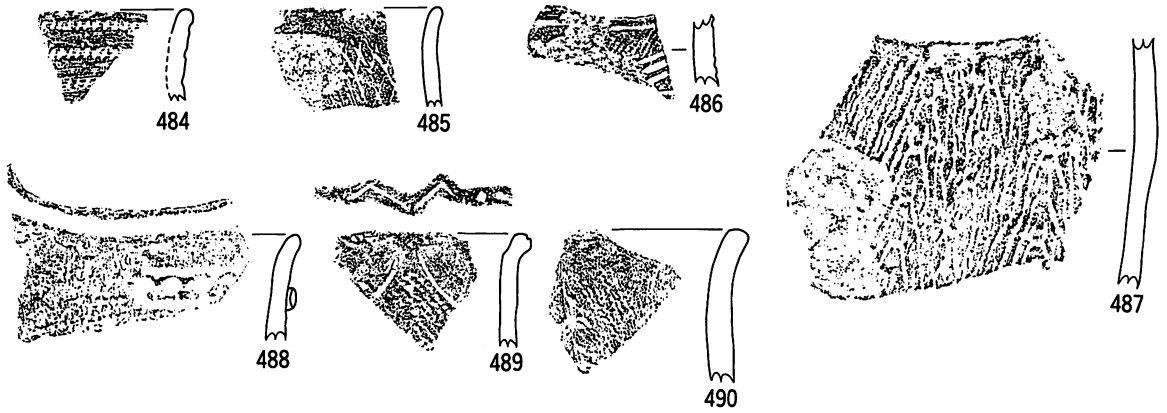
〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。表土除去後に小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。南側の東西壁は斜面のため流失、さらに調査直前まで使用されていた道路のため大きく削剝されている。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。東西4.3m、南北は残存値で2.4mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層で、直立気味に立ち上がる。壁高は東壁25cm、西壁18cm、北壁39cmで



第110図 VII D 2 f 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
484	VII D 2 f 住	床面	絡条体压痕。						II 8 b	168
485	VII D 2 f 住	床面		R 網目状燃糸文。					II 6	168
486	VII D 2 f 住	床面	半截竹管平行沈線。内面ミガキ。	L R 横。					III 1	168
487	VII D 2 f 住	床面		R 木目状燃糸文。(先端部結ウ)					II 6	168
488	VII D 2 f 住	埋土	波状口縁。隆帯上指頭状压痕。	多輪絡条体。					II 6	168
489	VII D 2 f 住	埋土	上面観鋸歯状裝飾体。裝飾体上面沈線。口唇部刺突。	L R 縦。					II 6aア	168
490	VII D 2 f 住	埋土		R 2 条木目状燃糸文。					II 6	168

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
491	VII D 2 f 住	床面	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(10.5)	10.1	5.5	(920)	平滑面 1 面。	I a	168
492	VII D 2 f 住	床面	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	20.9	15.0	4.1	1880	+ 敲石。	III b 1	168

第111図 VII D 2 f 住居跡出土遺物

ある。

〈埋土〉褐色土を主体とし、全体的に固く締まっている。斜面下方は暗褐色土で締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土層で、東側に木根による細かい凹凸がある他はほぼ平坦であるが、全体に斜面沿ってやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は68×90（残存値）cmの推定楕円形状に分布し、厚さは最大18cmである。断面観察では概ねレンズ状に形成され固く締まっており、強い焼成を受けている。

遺物（第111図、写真図版168）

〈土器〉床面から640g、埋土から1310g出土したが接合するものはなかった。488は左側に装飾体がつくのではないかと思われるが不明である。489の口唇部の鋸歯状沈線は一画毎に施されたものである。

〈石器〉図示した2点のみの出土である。

時期 破片のみの出土であり特定はできないが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から中期初頭に属するものと推定される。

ⅦD2h住居跡（遺構番号45）

遺構（第112図、写真図版35）

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。調査直前まで使用されていた道路に南接している。西側は暗褐色ないし黒褐色土のやや方形のプランとして確認したが、東側は暗褐色土層が厚く埋土との区別が困難だったことおよび遺構の重複により、平面的な検出はできなかった。

南側でⅦD2h-2住居跡と重複するが、本住居は同住居を埋めてつくられる。東側ではⅦD3h-2住居跡と重複するが、埋土断面による切り合い関係は明らかにできなかったが、本住居の方が新しい。それは次のような精査時点の観察による。すなわち、ⅦD3h-2住居跡の床面は本住居より10cm程度高いにもかかわらず、本住居の埋土と重複部分の埋土は同じと判断され、周溝がまわっていくこと、ⅦD3h-2住居跡による貼床は観察できなかったことに基づく。

本住居の北側東半には断続的ではあるが2条の周溝が検出され、建替えによる2棟の重複と考えられた。1棟は床面東半部にある内側の周溝と西半の北壁を結ぶプランを想定したもの（aとする）であり、他の1棟は外側の周溝をもつものである。後者には2つの場合（それぞれb、cとする）が考えられる。bは残存する西側から東側まで現有する北壁のラインでとらえる場合。cは2重になった周溝の部分とそれに対応する壁のみの範囲が残存したとみる場合である。野外調査での観察ではcと考えられた。それは北壁の東半がやや北側にやや突き出し、

西半の北壁とは方向を若干異にすると考えられたからである。しかし、周溝が検出してから重複に気づいたため、その部分の埋土断面はとれなかった。bの可能性もなしとはしない。

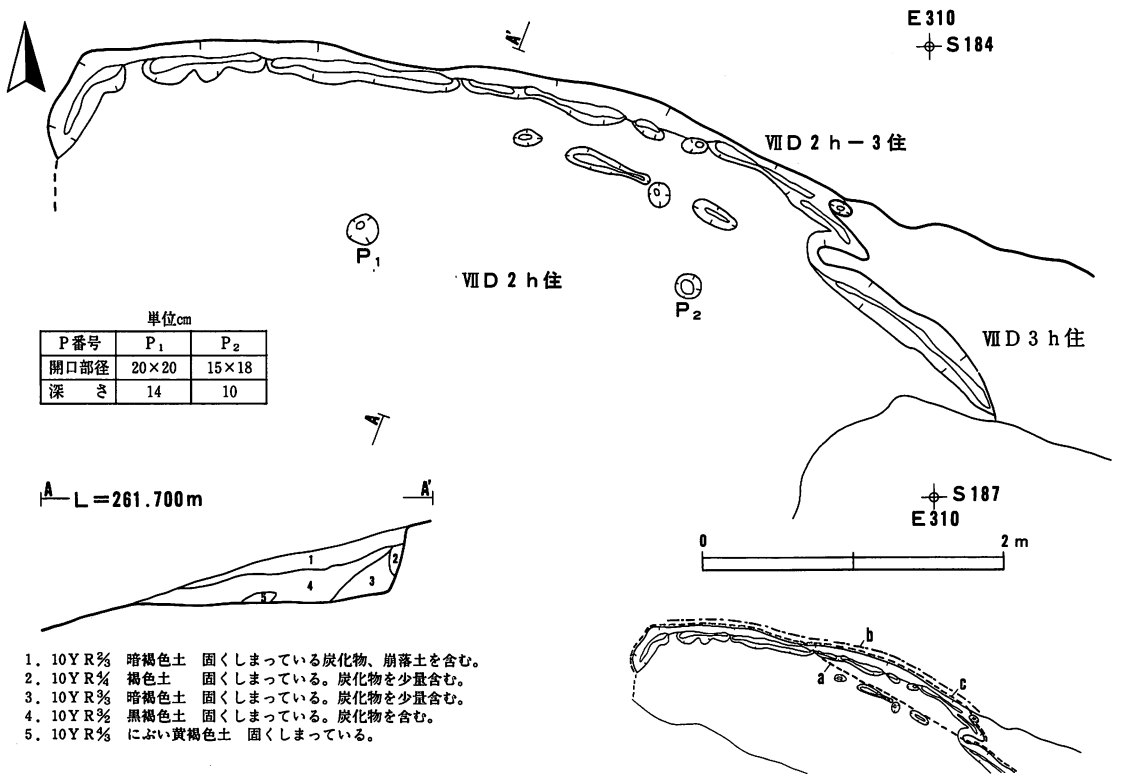
遺構名は、aの想定でとらえたものをVII D 2 h住居跡、cの立場でとらえたものをVII D 2 h - 3住居跡とする。VII D 2 h - 3住居跡の壁がVII D 2 h住居跡によって切られたと考えれば、新旧関係は次のようになる。

(新) VII D 2 h住居跡 ← VII D 2 h - 3住居跡 ← VII D 3 h - 2住居跡 (旧)

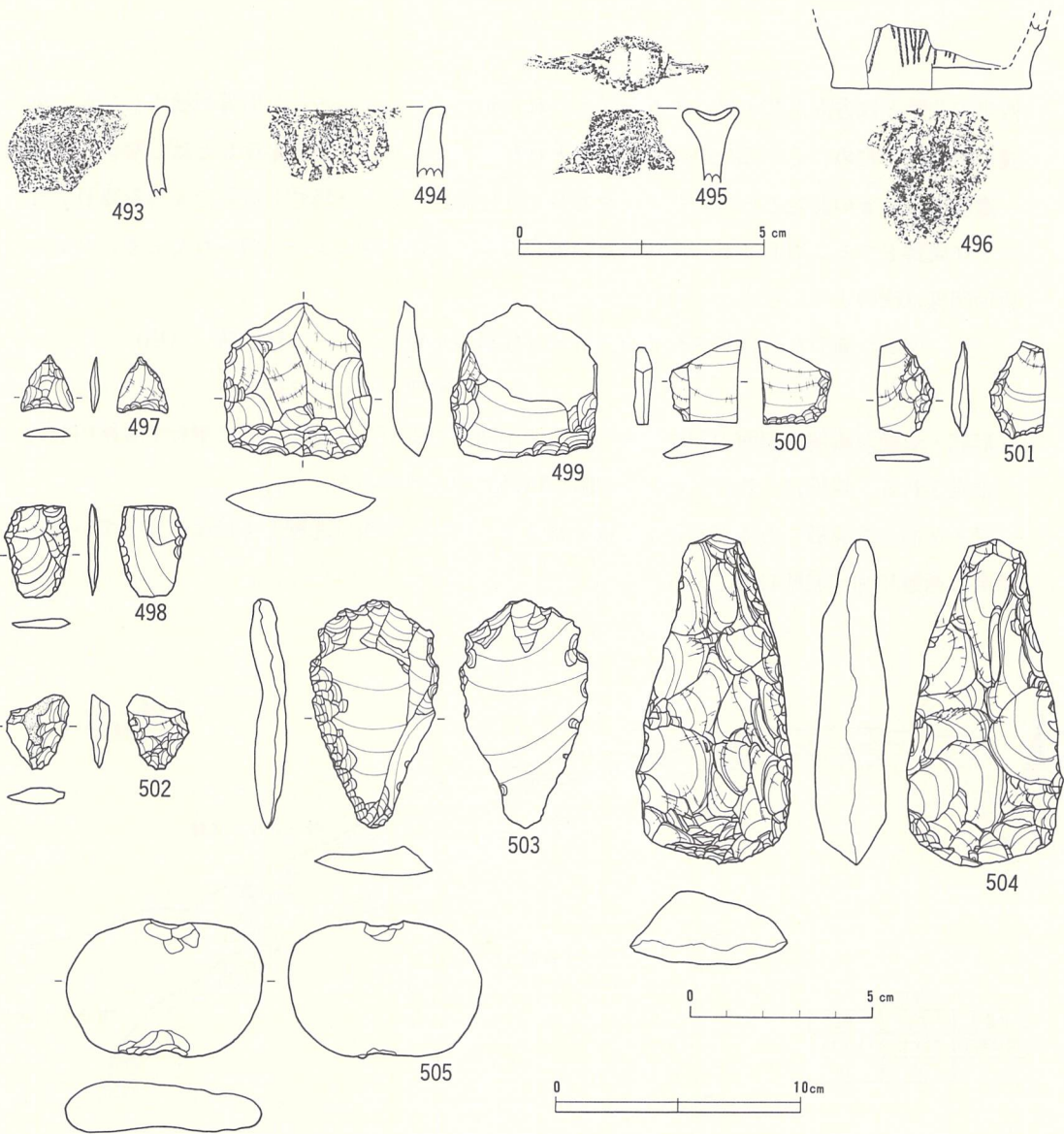
← VII D 2 h - 2住

<形状・規模>南側は斜面のため流失して不明であるが、長軸が斜面に平行する楕円形状と推定される。規模は、長軸6.7m、短軸は残存値で3.5mである。

<壁・壁高>基盤層である黄褐色土で固く締まり、残存する西壁北壁ともほぼ直立している。壁高は西壁18cm、北壁41cmである。



第112図 VII D 2 h・VII D 2 h - 3住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
493	VII D 2 h 住	床直上	波状口縁。	R 撚糸文。					II 6	169
494	VII D 2 h 住	Q 2 埋土		L R 縦。片結び縦位綾絡文。					II 6	169
495	VII D 2 h 住	Q 2 埋土	波状口縁。頂部、上面に2個の凹部を有する円形装飾体。	R 2 条木目状撚糸文。					II 6aウ	169
496	VII D 2 h 住	埋土		L 撚糸文	-	[11.0]	(3.4)	網代痕。		169

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
497	VII D 2 h 住	床直上	石鏝	泥質凝灰岩	礫石西部	1.5	1.4	0.2	0.39	小型。	II b 2	169
498	VII D 2 h 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.5	1.8	0.3	1.40	薄く扁平。左辺の刃は不規則。刃こぼれ	I c 2	169
499	VII D 2 h 住	埋土	石篋	珪質泥岩	礫石西部	4.2	4.0	1.0	20.03	基部側欠損。	II	169
500	VII D 2 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.2	2.0	4.5	1.65	折断面2辺あり、三角形となる。扁平。	I b 1	169
501	VII D 2 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.7	1.5	0.2	1.39	下辺に微小剥離あり。	I b 2	169
502	VII D 2 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.1	1.7	0.4	1.36		III	169
503	VII D 2 h 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	6.3	3.5	1.0	15.71	尖頭部(丸み)も調整。きれいなスクレーパー。	I b 1	169
504	VII D 2 h 住	床直上	打製石斧	硬質泥岩	礫石西部	8.9	4.2	1.9	69.47	裏面の調整は粗く平坦。	I	169
505	VII D 2 h 住	埋土	石錘	凝灰質硬砂岩	北上山地	5.5	8.0	2.1	130		II	169

第113図 VII D 2 h 住居跡出土遺物

〈埋土〉3層に大別される。第1層には基盤層を形成する黄褐色土が径3mmのブロックで混入する。粉炭を含む。第3層は炭化物が第1層より多い。断面からⅦD 2 h - 2住を埋めて床としていることが分かる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、やや凹凸はあるがほぼ水平である。柱穴は2個検出されたがいずれも浅いものである。周溝が断続的に巡る。埋土は10 Y R 5/6の床よりやや濁った黄褐色土で締まりを欠き粉炭を含む。幅10cm程度、深さは最大で12cmである。ⅦD 2 h - 3住居跡の周溝と切り合いは平面では観察できなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第113図、写真図版169）

〈土器〉床面から120g、埋土から825g出土した。495は装飾体頂部に浅い凹みが施されたものである。図示した他には網目状捺糸文、組縄縄文の小破片が埋土から出土した。

〈石器〉499は基部側を欠損しているが、断面形状から打製石斧とした。504の裏面の調整は粗く平坦で、断面形はカマボコ状を呈する。図示した他にフレーク18点出土した。

時期 破片のみの出土で時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと思われる。

ⅦD 2 h - 2 住居跡（遺構番号46）

遺構（第144図、写真図版35）

〈検出状況〉西尾根の南麓の平地、旧畑地に位置する。耕作土下で焼土を検出した。壁と埋土の大半は耕作のために攪乱消失している。北壁はⅦD 2 h 住居跡に埋められていて僅かに残る。東側でⅦD 3 h 住居跡と重複する。同住居跡が新しいことが同住居の平面検出時に確認されている。新旧関係は次のようになる。

（新）ⅦD 3 h 住居跡←ⅦD 2 h 住居跡←ⅦD 2 h - 2 住居跡 （旧）

ⅦD 2 h - 3 住居跡←ⅦD 3 h - 2 住居跡

また、床面でⅦD 2 h 土坑を検出した。本住居に先行すると考えられる。

〈規模・形状〉壁の残存状況が悪く不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は残存値で、東西5.7m南北3.2mである。

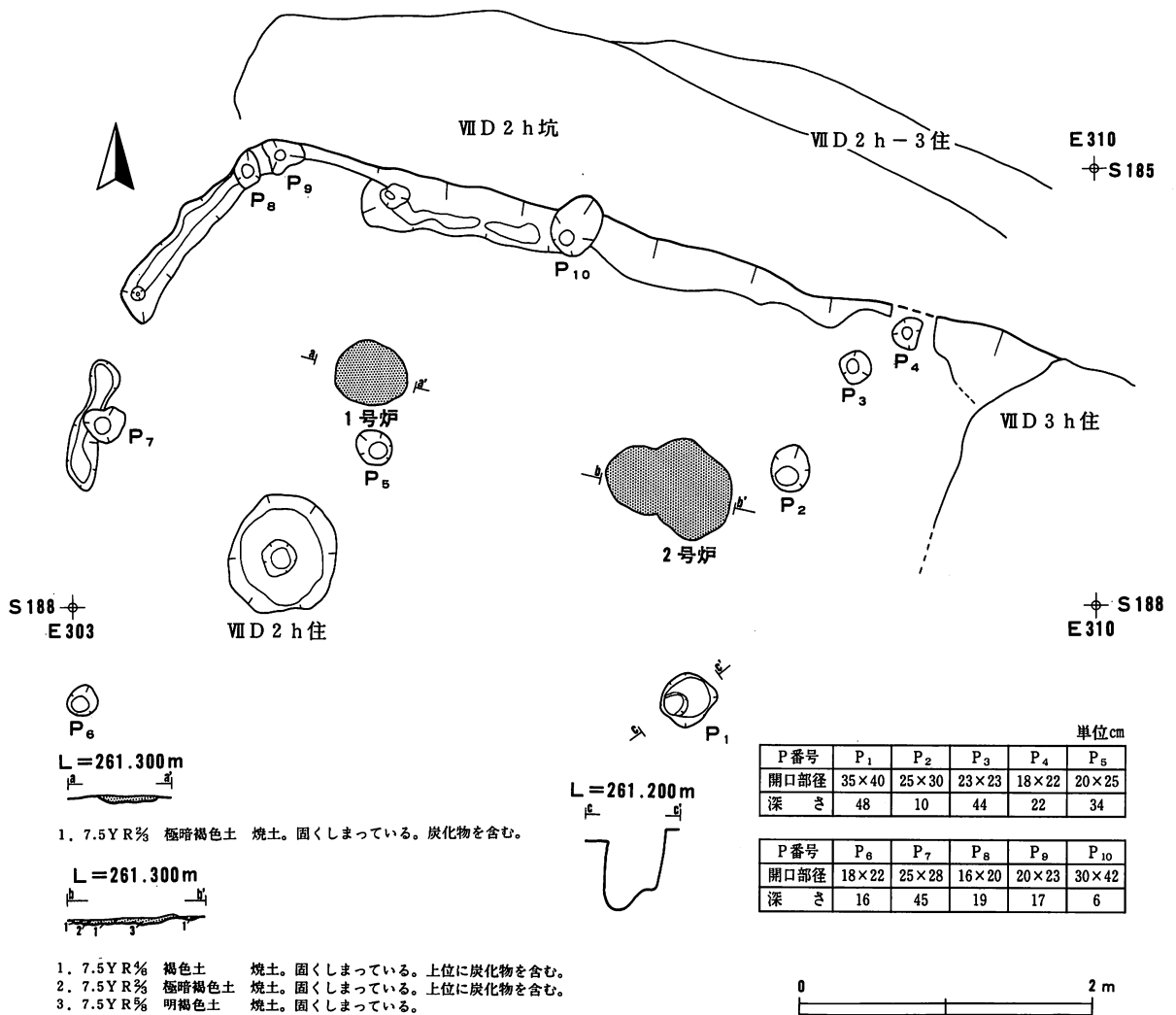
〈壁・壁高〉北壁のみ残存、基盤層である黄褐色土で固く、緩やかに立ち上がる。壁高は東7cmである。

〈埋土〉耕作により攪乱され不明である。一部ⅦD 2 h 住居跡に埋められた土は暗褐色土でやや軟質である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色で固く、殆ど凹凸なく平坦である。柱穴は10個検出さ

れた。うち4個は周溝に伴う。P1~P3がほぼ一直線上にのる他は特に規則性は見出だせない。埋土は概ね黒褐色~暗褐色土で、粉炭を含み固く締まるものが多い。周溝は西側と北壁際の一部に巡る。幅は最大20cm、深さ最大10cmである。埋土は黒褐色土で固く締まり粉炭を含む。

<炉>長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は42×50cmの卵形に分布し、厚さは最大6cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。2号炉の焼土は66×90cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。断面は帯状で固く締まっている。



第114図 VII D 2 h - 2 住居跡

遺物 本遺構に帰属するとして取り上げた遺物はない。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文前期後葉に属すると考えられる。

ⅦD 2 h - 3 住居跡 (遺構番号47)

遺構 (第112図、写真図版35)

〈検出状況〉ⅦD 2 h 住居跡の精査で、同住居の壁および周溝と想定されるラインより北側にやや突出する部分を検出し、このことから2棟の重複であると考えられた。この突出する壁およびそれに対応する周溝をもってⅦD 2 h - 3 住居跡とした。新旧関係については、ⅦD 2 h 住居跡の埋土内に本住居の壁に相当する部分は観察できなかったことから、ⅦD 2 h 住居跡の方が新しいと考えられた。

〈形状・規模〉不明であるが、北壁のラインからはⅦD 2 h 住居跡に類似した平面形を推定できる。残存値は0.45×3 mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ一部残存する。基盤層である黄褐色土で固く、ほぼ直立する。壁高は50 cmである。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 2 h 住居跡と同レベルである。周溝は幅10cm、深さ10cmで断続的に巡る。

遺物 本遺構に伴う遺物はない。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。

ⅦD 3 g 住居跡 (遺構番号48)

遺構 (第115図、写真図版36)

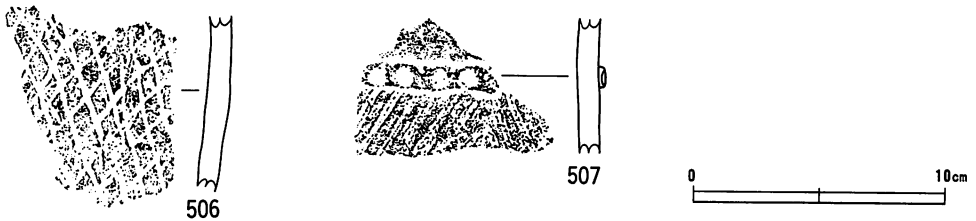
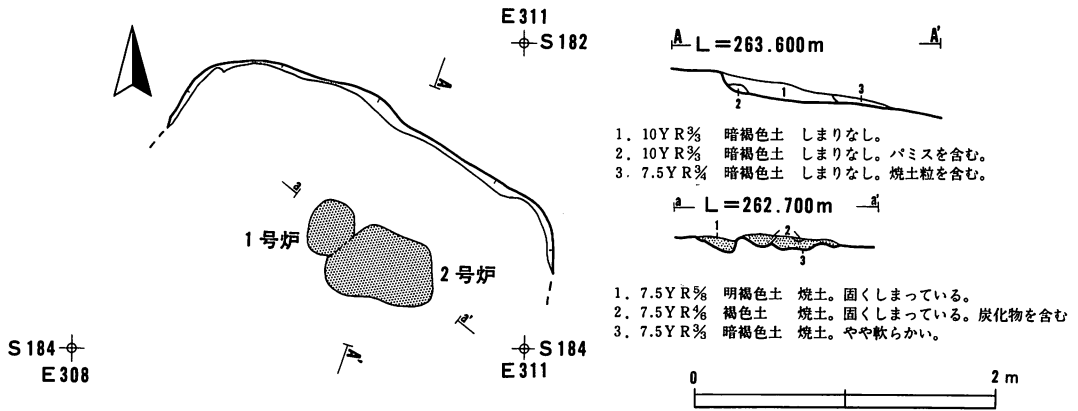
〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。表土除去後小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。南側は斜面および耕作のため流失している。

本住居の床面の下から、ⅦD 2 g 土坑およびⅦD 3 g 土坑が検出された。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長軸方向が等高線にはほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は残存値で、東西2.8m、南北1.2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土で固くしまっており、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁5cm、北壁15cmである。

〈埋土〉やや明るい暗褐色土で、壁際にパミス状のものを僅かに含むが、サンプリングはできなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
506	VII D 3 g 住	炉内		R 網目状燃糸文。					II 6	169
507	VII D 3 g 住	Q 2 埋土	隆帯上左側からの指頭状圧痕。	R 2 条木目状燃糸文。					II 6 b'	169

第115図 VII D 3 g 住居跡・出土遺物

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で固い。斜面に沿ってやや傾斜する。壁際に木根によると思われる攪乱がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉床面において焼土が不整形に検出され、断面観察から2単位あることが明らかになった。西側の部分を1号炉、東側の部分を2号炉とする。1号炉の焼土は30×37cmの円形に、2号炉のそれは45×65cmの不整形の範囲に分布し、厚さは両者とも最大8cmで概ねレンズ状に形成され固く締まっている。

遺物（第115図、写真図版169）

土器は、図示した他に焼土内から木目状燃糸文、R L横の小破片が出土した。石器はフレークが床面から6点、埋土から10点出土したのみである。

時期 破片のみの出土で特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅦD 3 g - 2 住居跡 (遺構番号49)

遺構 (第116図、写真図版37)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。ⅦD 3 g - 4 住居跡の床面において黒褐色土が分布することから検出できた。

南側は、ⅦD 3 h - 2 住居跡と重複する。ⅦD 3 h - 2 住居跡の精査を先行させたため切り合いを断面図であらわすことができなかった。野外調査での観察では、ⅦD 3 h - 2 住居跡の方が新しいと考えられた。それは、床面レベルで45cm程の差があるにもかかわらず、同住居の埋土に本住居の床あるいは埋土は観察できなかったということに基づく。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、等高線に斜行する方形ないし長方形を基調とすると推定される。規模は、残存値で1×1.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、ごく緩やかに立ち上がる。壁高は東壁4cm、西壁10cm、北壁41cmである。

〈埋土〉固く締まる黒褐色土であり、上位に長さ10mm程度の炭化物を混入する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、ゆるやかな凹凸がある。柱穴は検出されなかった。床上に20×20cm、厚さ5cmの角礫を検出した。使用痕も加工痕も観察されない。意図的に置いたものかどうかは不明である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第116図、写真図版170)

〈土器〉埋土から980g出土した。508は浅い刺突である。511は指頭圧痕を伴う隆帯が、頸部にタガ状に巡り、胴部には円形に貼り付けられる。

〈石器〉513はつまみの対辺には刃部加工がない。未製品か。図示した他にフレークが3点埋土から出土した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

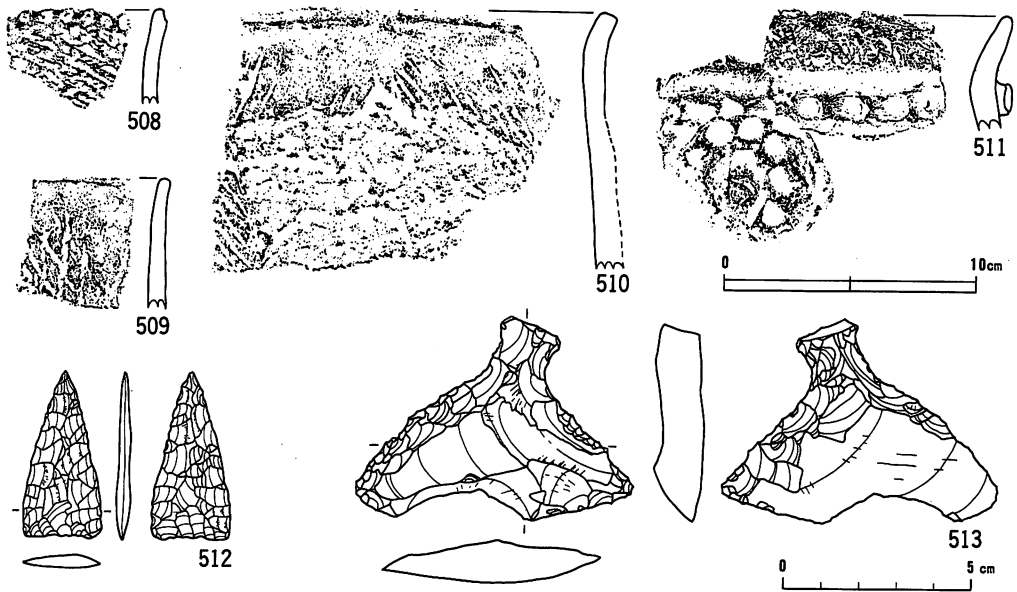
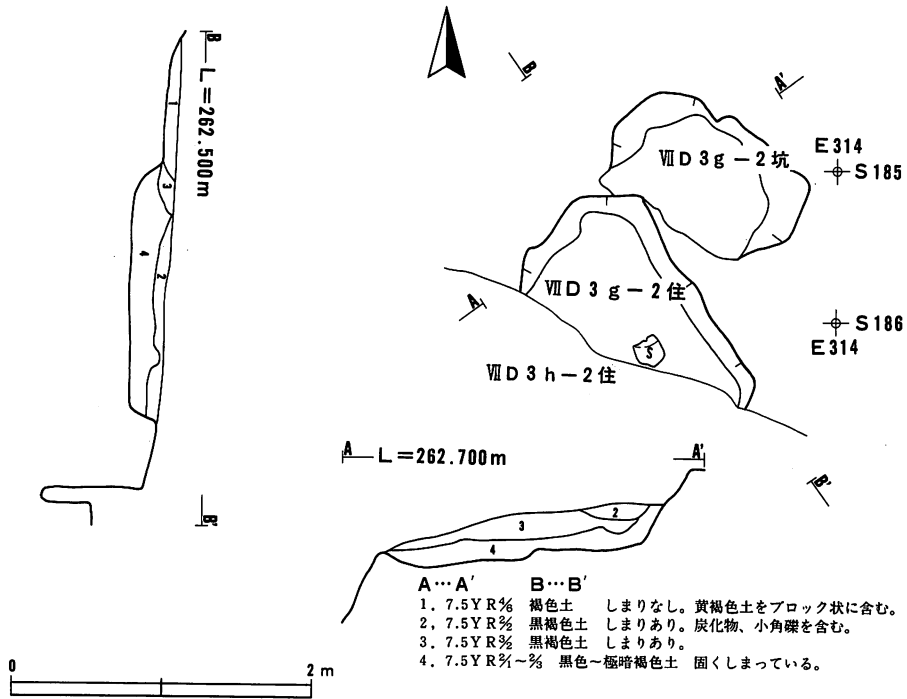
ⅦD 3 g - 3 住居跡 (遺構番号50)

遺構 (第117図、写真図版37)

〈検出状況〉西尾根の南斜面、道路に南接する。小角礫含みの暗褐色土層下位で黒褐色の落ち込みとして確認、斜面下方は流失していると考えられた。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は、長軸3.4m、短軸は残存値で1.4mである。

〈壁・壁高〉小角礫含みの暗褐色土で固く締まり、直立気味に立ち上がる。壁高は東壁23cm、



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
508	VII D g-2 住	埋土	口唇端状刺突。(竹管かどうか不明)。	R燃糸文。					II 6bウ	170
509	VII D g-2 住	埋土		L網目状燃糸文。					II 6	170
510	VII D g-2 住	埋土		R木目状燃糸文。				下半部剥落。	II 6bカ	170
511	VII D g-2 住	埋土	隆帯上指頭状圧痕。	L燃糸文。					II 6bイ	170

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
512	VII D 3 g-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	4.4	2.1	0.4	3.14		I 2	170
513	VII D 3 g-2 住	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	5.4	7.4	1.3	34.60		II	170

第116図 VII D 3 g-2 住居跡・出土遺物

西壁 5 cm、北壁13cmである。

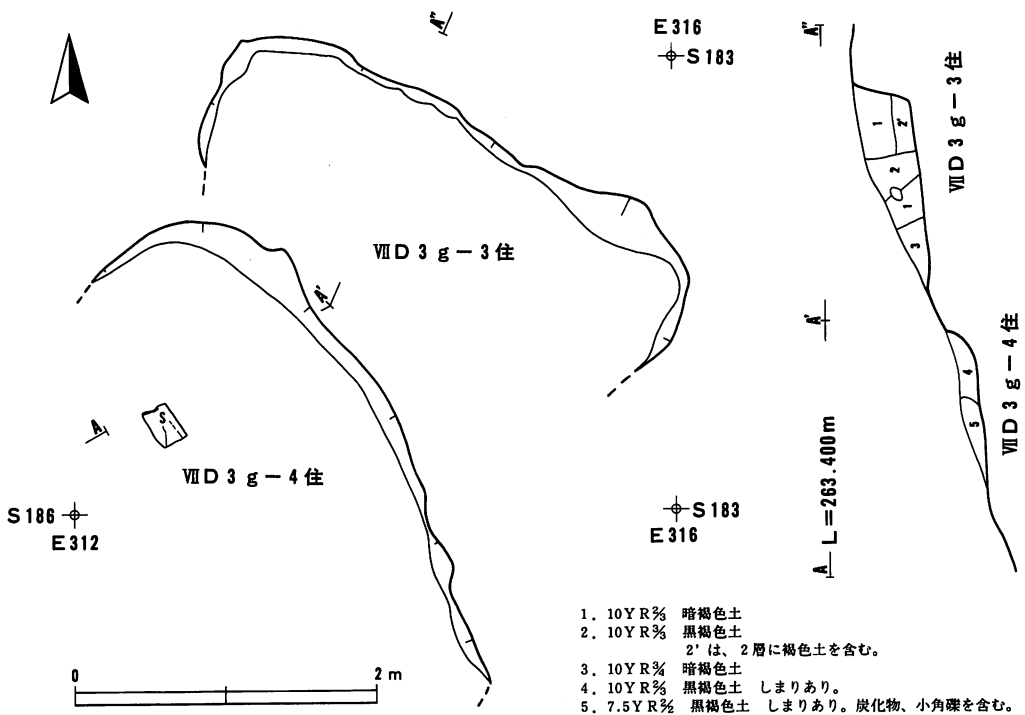
<埋土>黒褐色土を主体とする。褐色土のブロックを含む。全体に締まりを欠く。

<床・柱穴・施設>再堆積層である暗褐色土で固い。凹凸はあまりないがやや西側が低くなる。柱穴は検出されなかった。

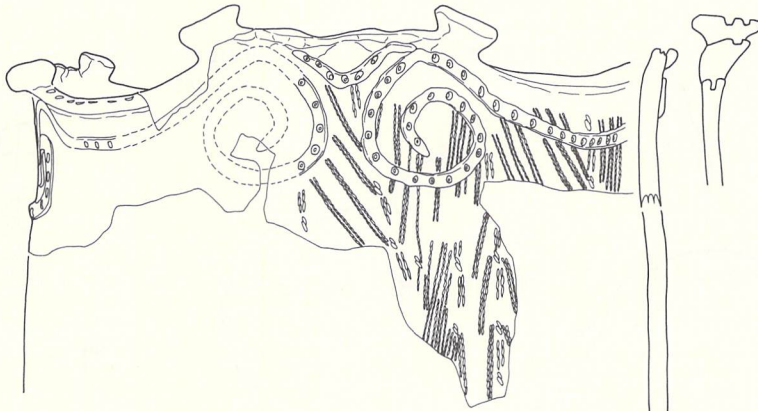
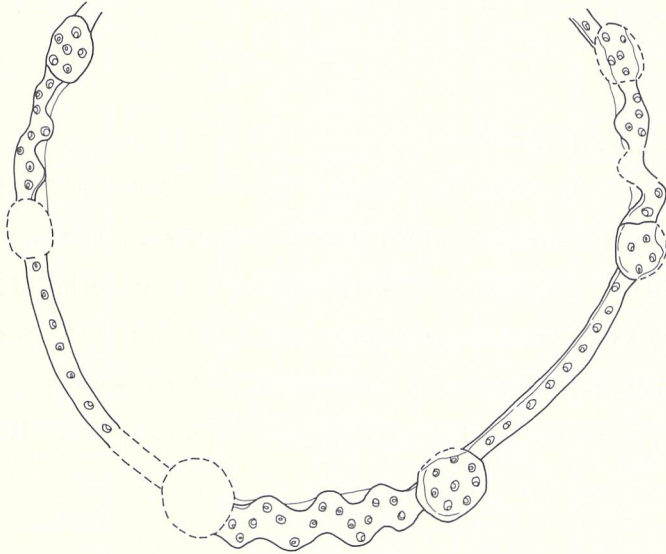
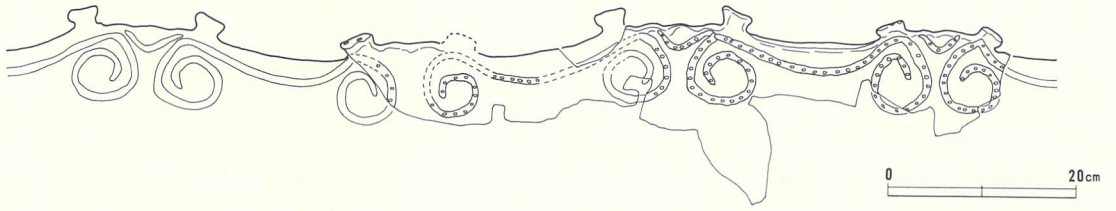
<炉>検出されなかった。

遺物 (第118・119図、写真図版170・171)

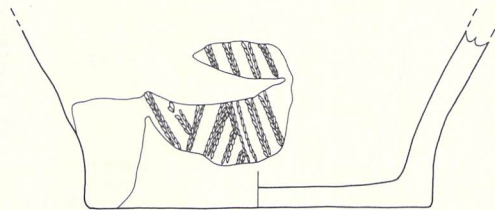
<土器>床面から 765 g、埋土から2996 g 出土した。514 と 515 は同一個体である。本遺構の他、VII D 3 h 土坑埋土および遺構外出土の破片が接合したものである。口径33.5cm、底径18.2 cm、器厚 1.1 cm の大ぶりの土器である。口縁部は緩い波状となり、その頂部には装飾体が3個残存する。向かい合う2個の装飾体は、他の1個と比較して長さ・幅・高さいずれも下回る。当初は2個一対の装飾体が二対で構成されていたものと推定される。装飾体は、上面鋸歯状を基調としてその両端には円文が配される。装飾体および口唇部には、その形状に沿って竹管



第117図 VII D 3 g-3・VII D 3 g-4 住居跡



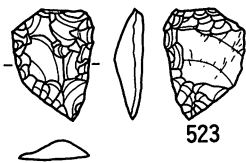
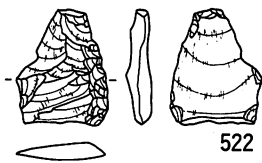
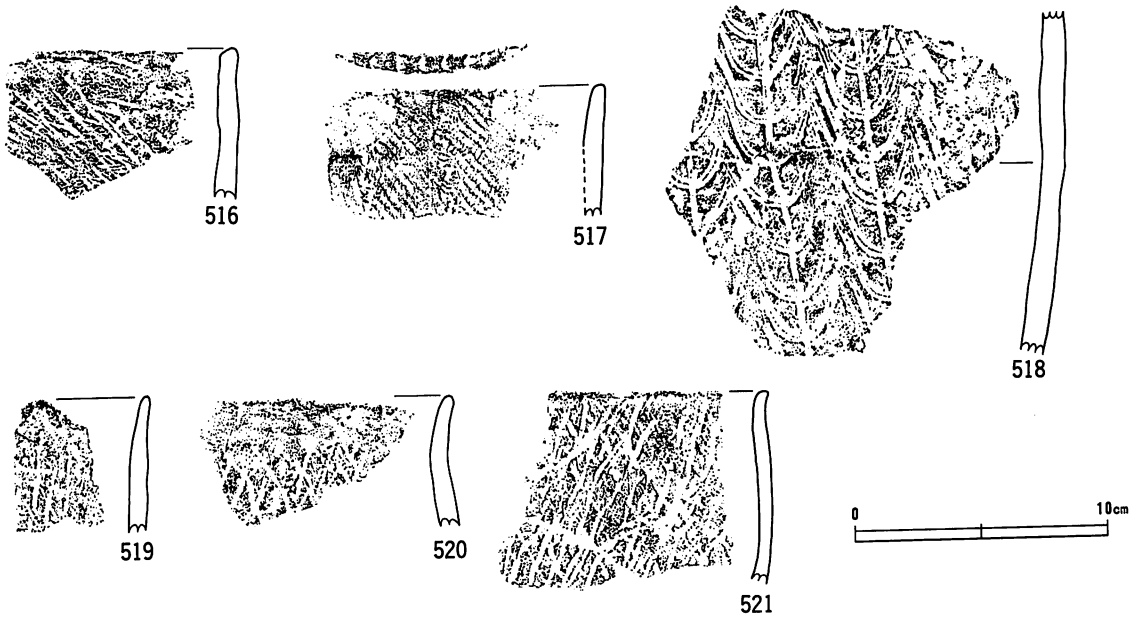
514



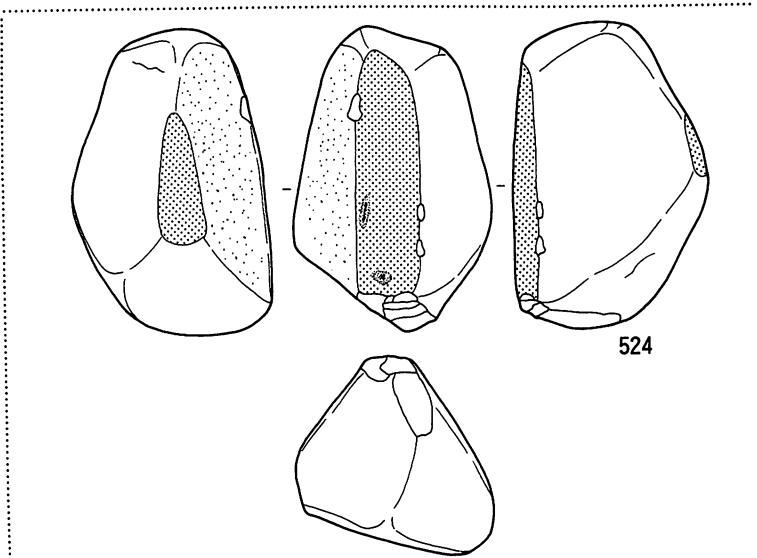
515

番号	出土地点	層位	文様	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
514	VII D 3 g - 3 住	埋土上位	緩い波状口縁、口縁部扇歯状突起、隆部上竹管刺突	L + Rの木目状燃系文	34.5	— (21.2)	515と同一個体	II 6aア	170
515	VII D 3 g - 3 住	埋土上位	—	L + Rの木目状燃系文	—	[18.2] (8.8)	514と同一個体	II 6aア	170

第118図 VII D 3 g - 3 住居跡出土遺物(1)



VII D 3 g - 3 住



VII D 3 g - 4 住

番号	出土地点	層内	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
516	VII D 3 g - 3 住	炉内		R 燃糸文 (撚りあまい)。					II 6b カ	170
517	VII D 3 g - 3 住	埋土	口唇部爪形圧痕。	L R 縦。片結び縦位綾絡文。					b	170
518	VII D 3 g - 3 住	埋土		L 2 条木目状燃糸文。					II 6b カ	170
519	VII D 3 g - 3 住	埋土	波状口縁。	R 燃糸文。					II 6b カ	170
520	VII D 3 g - 3 住	床面		L 網目状燃糸文。					II 6b カ	170
521	VII D 3 g - 3 住	埋土		網目状燃糸文。					II 6b カ	170

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
522	VII D 3 g - 3 住	埋土	不定形石器	硬質泥質	雫石西部	3.1	2.4	0.4	3.28	扁平、不整形。	I a 2	171
523	VII D 3 g - 3 住	床面	不定形石器	珪質泥岩	雫石西部	2.9	2.2	0.5	3.48	尖頭器とするには、対称性を欠く。	I b 2	171
524	VII D 3 g - 4 住	埋土上位	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	11.5	7.8	6.3	780	磨面 3 面。平滑面 2 面。	I a 2	171

第119図 VII D 3 g - 3 住居跡出土遺物(2)、VII D 3 g - 4 住居跡出土遺物

刺突が全体的に施される。口縁下には太めでやや平たい隆帯が貼り付けられ、口唇部同様竹管刺突が連続する。隆帯はその両端で渦を巻き、装飾体同士を連絡するように4単位センチメートルに貼付けられている。粗砂を多く含み、やや脆い印象がある。色調は7.5Y R6/8橙色である。〈石器〉523は尖頭部が意識的に加工されている。図示した他にUフレ1点が埋土から出土した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉と考えられる。

ⅦD3g-4住居跡（遺構番号51）

遺構（第119図）

〈検出状況〉西尾根の南斜面に位置する。再堆積層下位で黒褐色の落ち込みとして確認、斜面下方は流失していると考えられた。斜面上方にあたる北壁は、基盤層まで掘り込み明瞭である。床面は、西側は基盤層であるのに対し、中央部はなお黒褐色土である。これは、ⅦD3g-2住居跡の上に構築されたためであると判明したが、本住居の床面と想定した部分はすこぶる固く、精査時点の指標となった。

〈規模・形状〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、残存値で1.2×3.75mである。

〈壁・壁高〉基盤層まで掘り込んで壁としており、緩やかに立ち上がる。壁高は北壁12.5cm、西壁5.5cmである。

〈埋土〉締めりある黒褐色土で2層に分けられ、上位は炭化物を含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土であるが、中央部は重複があり黒褐色土である。すこぶる固く締まる。柱穴は検出されなかった。斜面下方の床上に偏平な角礫が検出された。18×26cmの大きさで加工痕、使用痕は認められない。意図的に置いたものかどうかは不明である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第119図、写真図版171）

〈土器〉埋土から縄文時代前期の網目状撚糸文の破片2点、撚糸文1点、無文の底部が出土したが、いずれも小破片であり図示は省略した。

〈石器〉図示した1点のみの出土である。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

ⅦD 3 h 住居跡 (遺構番号52)

遺構 (第120図、写真図版38)

〈検出状況〉西尾根の南麓の斜面に位置する。表土除去後、小角礫含みの暗褐色土層上面で黒色土の長方形のプランとして検出した。南側は斜面および畑作により消失している。

北側でⅦD 3 h - 2 住居跡、西側でⅦD 2 h - 2 住居跡と重複する。平面および埋土断面観察から、本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉南側は不明だが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は長軸が4.8 m、短軸は残存値で2.3 mである。耕作により削剥された部分から、4個の柱穴を検出している。これは本住居の推定範囲内におさまるものであるが、15cm程レベルが下がることから所属を断定することはできない。仮に、この4個の柱穴が本住居に伴うものとする、短軸は3.5 m前後になろう。

〈壁・壁高〉暗褐色土層から基盤層まで掘りこんで壁としている。西側は、重複するⅦD 2 h - 2 住居跡の埋土である。固く締まり、ほぼ直立する。埋土断面図では、壁の立上がり部分が有段となっているがこれはごく部分的なものである。壁高は東壁10cm、西壁20cm、北壁57cmである。

〈埋土〉第1層～第3層を主体とする。第1層には長さ2 cm程度の炭化物を多く含む。第2層には炭化物は微量となり、径3 cmので黄褐色土ブロックを含む。全体に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、やや凹凸がある。中央部分がやや窪み、かつ全体的には西側に傾斜し、比高最大値は15cmある。柱穴は床面レベルで7個検出された。P2～P5はほぼ一直線状に並ぶ。P1は北東隅に位置し、深さは55cmと群を抜いており、他と性格を異にするものかもしれない。柱穴の埋土には基盤層である礫混じりの黄褐色土を含む層の存在が特徴である。

〈炉〉住居の中央部と推定される位置に、炭化物および焼土粒を多く含む褐色土が分布する。締まりを欠き、長期間使用された炉とはいい難い。

遺物 (第121図、写真図版171)

〈土器〉埋土から1840 g 出土した。そのほとんどが地文のみの小破片であり、特徴を有するものは少ない。木目状燃糸文、網目状燃糸文、組縄縄文土器片や、土師器の小破片も出土した。

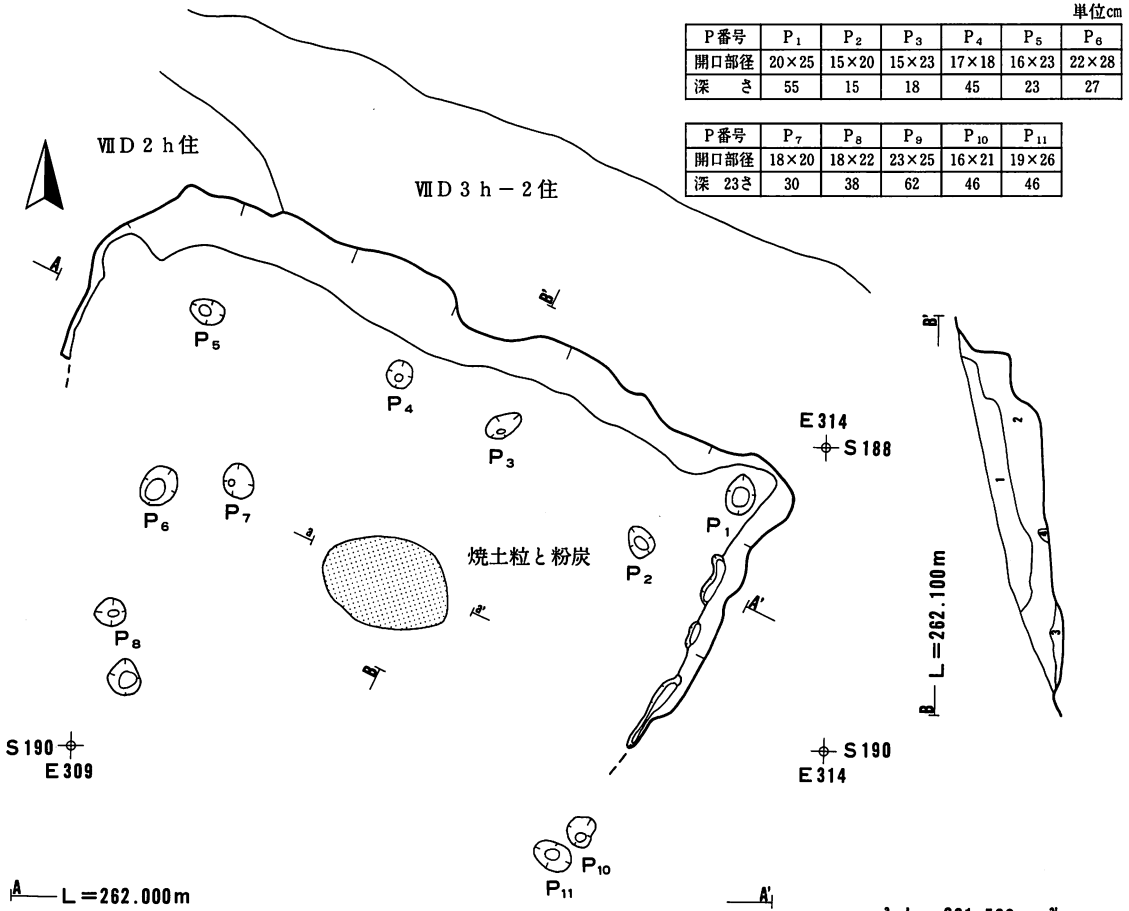
〈石器〉533 は幅広の剝離が施され、1 辺には使用痕が認められる。528 の尖頭部の欠損はごく新しいもの(発掘時?)である。図示した他にUフレ1点、フレーク18点(うち6点は床面)が出土した。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉と考えられる。

単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
開口部径	20×25	15×20	15×23	17×18	16×23	22×28
深 さ	55	15	18	45	23	27

P 番号	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
開口部径	18×20	18×22	23×25	16×21	19×26
深 さ	30	38	62	46	46

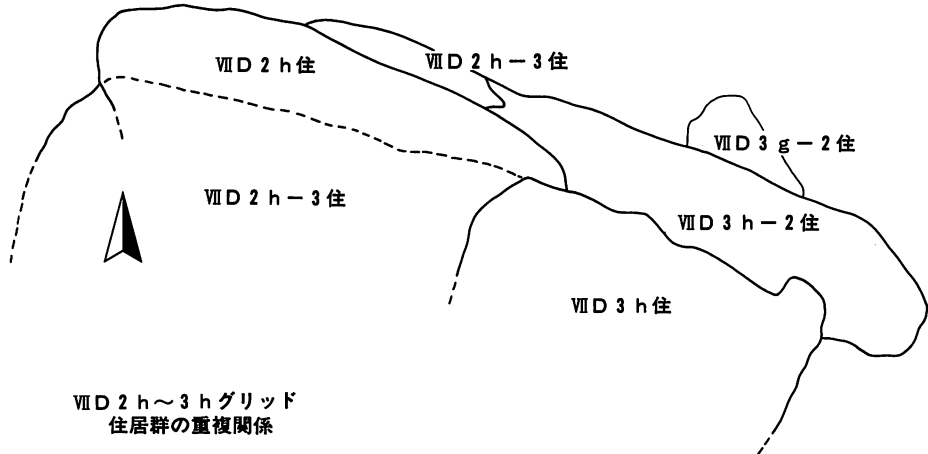
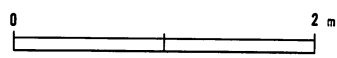


β-L = 261.500 m



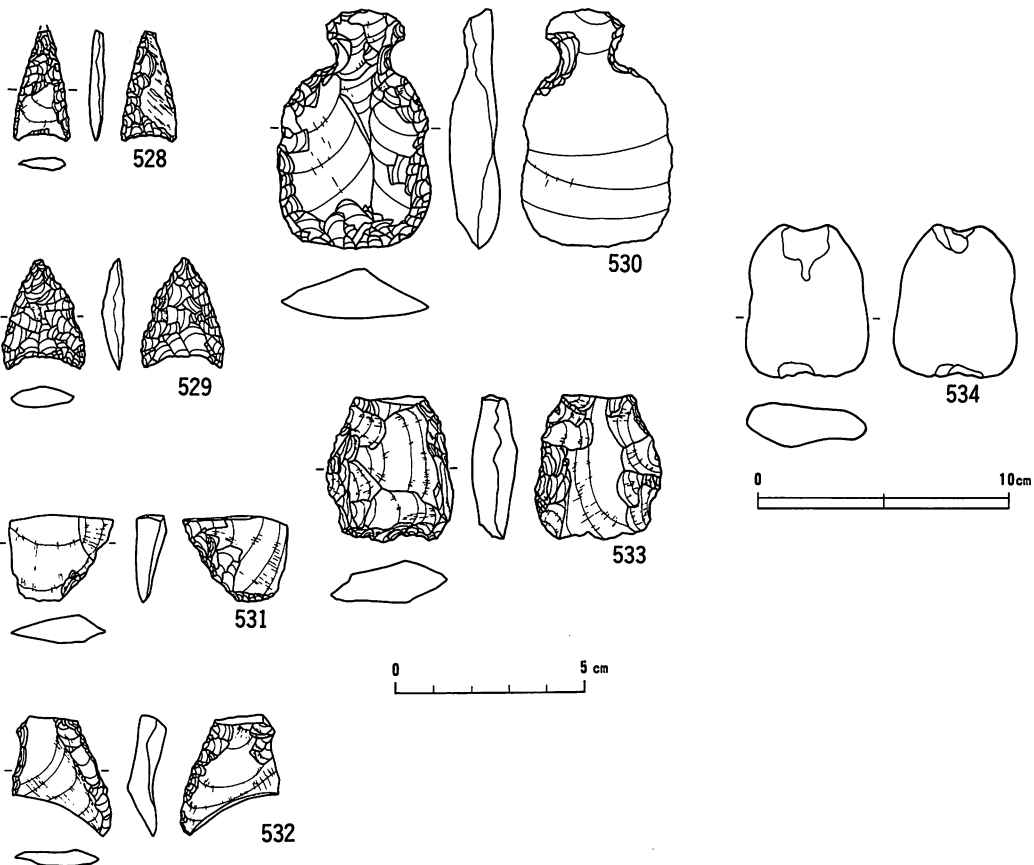
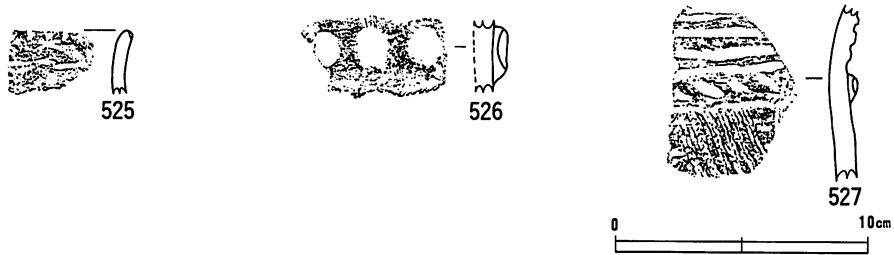
1. 10Y R% 褐色土 粉炭、焼土粒を含む。
2. 10Y R% 褐色土 焼土、粉炭、焼土粒を含む。

- A...A' B...B'
1. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
 2. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。炭化物、黄褐色土を含む。
 3. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
 4. 10Y R% 黄褐色土 やや軟らかい。
 5. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
 6. 10Y R% におい黄褐色土



VII D 2 h ~ 3 h グリッド
住居群の重複関係

第120図 VII D 3 h 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
525	VII D 3 h 住	Q 1 埋土	口唇右方向からの刻み。龍文後口唇部ナア、RL横、片結び鎖位絞絡文。						II 3	171
526	VII D 3 h 住	埋土	隆帯上指頭状圧痕。					剥落した隆帯部分。	II 6	171
527	VII D 3 h 住	埋土	沈線(凹線)。口頸部隆帯上棒状工具による刻み。	R × L 木目状摺糸文。					II 7 a	171

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
528	VII D 3 h 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.5	0.3	1.25	尖頭部の欠損は発掘時のものか、ごく新しいもの。	II b 1	171
529	VII D 3 h 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	2.9	2.2	0.6	2.90		II b 2	171
530	VII D 3 h 住	埋土	石匙	硬質泥岩	雫石西部	6.3	4.1	1.4	28.14		I b 2	171
531	VII D 3 h 住	Q 2 埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	2.3	2.8	0.8	4.00	折断面あり。刃部に潰滅痕あり。	I a 1	171
532	VII D 3 h 住	ベルト埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	3.2	2.6	0.4	3.93	折断面あり。不整形。	I a 2	171
533	VII D 3 h 住	Q 3 床直上	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	3.7	3.3	1.1	15.13	全周を巾広の剥離で二次加工。	VI	171
534	VII D 3 h 住	Q 3 床直上	石鏃	珉長質凝灰岩	北上山地	6.0	4.9	1.6	80		I	171

第121図 VII D 3 h 住居跡出土遺物

ⅦD 3 h - 2 住居跡 (遺構番号53)

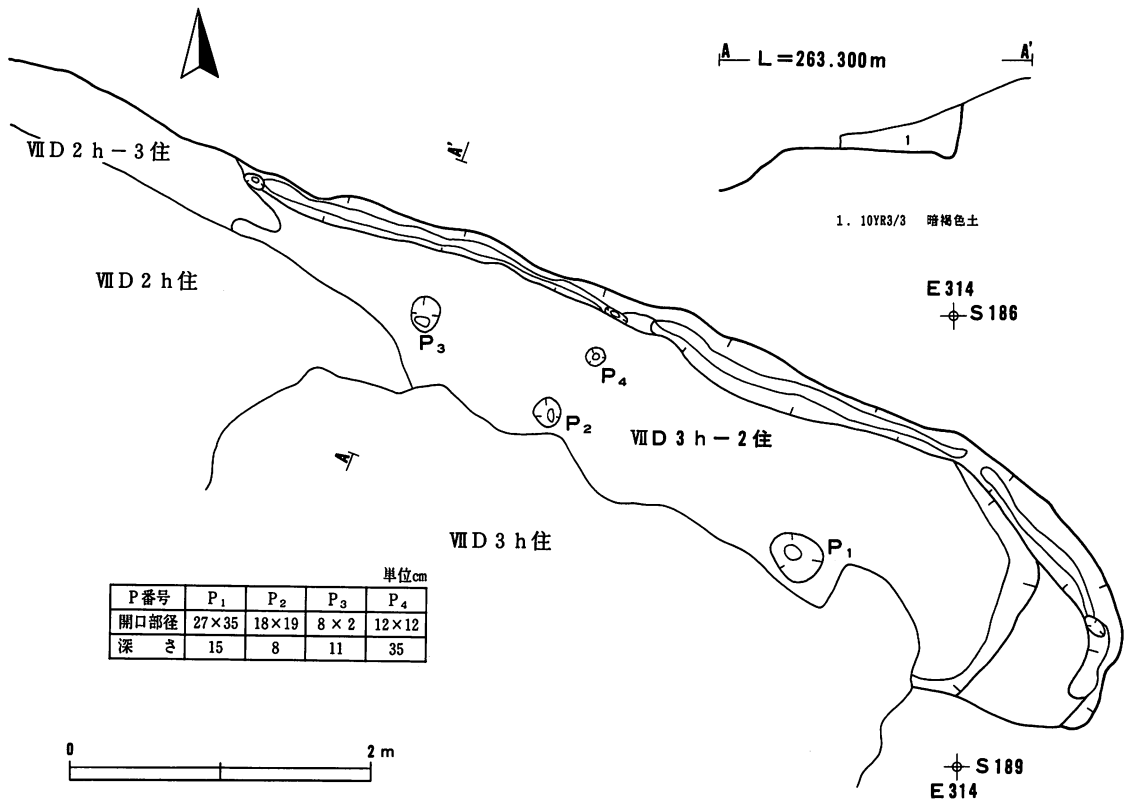
遺構 (第122図、写真図版38)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。ⅦD 2 h 住居跡の精査で検出した。本住居の北壁は、当初はⅦD 2 h 住居跡に帰属すると想定していたが、次の理由により別個の住居として認定した。すなわち、①ⅦD 2 h 住居跡と本住居跡の床面レベルが10cm程度異なること、②ⅦD 2 h 住居跡の周溝がその内側で帰結すること、③ⅦD 2 h 住居跡のものとは異なる周溝が検出されたことである。

新旧関係は、本住居のほうが古いと考えられる。それは、本住居の床面レベルが高いにもかかわらず重複部分の埋土はⅦD 2 h 住居跡の埋土と同じであることによる。図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 3 h 住居跡 ← ⅦD 2 h 住居跡 ← ⅦD 3 h - 2 住居跡 (旧)

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形状と推定される。規



第122図 ⅦD 3 h - 2 住居跡

模は、残存値で1.5×6.7mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は東壁15cm、北壁45cmである。

〈埋土〉固く締まる黒褐色土であり、長さ3cm程度の炭化物を混入する。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、ほぼ平坦である。柱穴は4個検出された。P1～P3はほぼ一直線状にのり、P4はそのラインにほぼ直交する線上に位置する。埋土は黒褐色土で固くしまり粉炭を含む。

周溝が、残存する壁に全て伴う。幅10～13cm深さは概ね10cmで、締まりを欠く黒褐色土を埋土とする。図示した場所は深さ20cm程度でやや住居の内側に傾く。

東側の一部に15cm程高くなった平坦部がある。周溝と埋土から重複は考えにくく、本住居に伴うものと判断した。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 遺物は、床面で石器？（径10cm、厚さ2cm）が1点検出されたが「あま石」化して取り上げることができなかった。土器はごく小さな破片が数点だけであり、文様は確認できない。

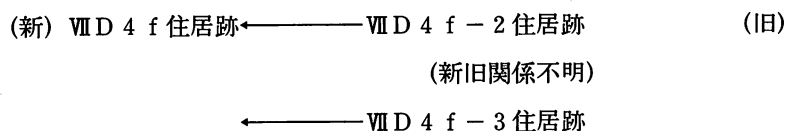
時期 時期を特定する資料を欠くが、重複関係から縄文時代前期後葉から末葉と推定される。

ⅦD 4 f 住居跡（遺構番号54）

遺構（第122図、写真図版39）

〈検出状況〉西尾根の南斜面中腹部に位置する。小角礫含みの暗褐色土層下位で検出した。少なくとも3棟の重複がある。本住居の床面下から検出された住居をⅦD 4 f - 2 住居跡、本住居より東側に広がるプランをもつ住居をⅦD 4 f - 3 住居跡とする。

本住居の炉はⅦD 4 f - 2 住居跡の埋土に形成されており、本住居のほうが新しい。また、ⅦD 4 f - 3 住居跡の埋土が本住居の西壁となることから、本住居のほうが新しい。ⅦD 4 f - 2 住居跡とⅦD 4 f - 3 住居跡の新旧関係は不明である。また、ⅦD 5 f 焼土がⅦD 4 f - 2 住居跡の埋土に形成されいる。同焼土がⅦD 4 f - 3 住居跡に伴う可能性もあるが、ⅦD 4 f - 3 住居跡の床面は焼土よりやや下にあると考えられたから、別の遺構として報告しておく。これを図式化すると次のようになる。



また、本住居の北壁および西壁には一定のラインを描けそうな段ないしは凹凸が見られるこ

とから、本住居はさらに重複している可能性がある。しかし、床面と考えられる明瞭な平坦部や明瞭な壁を確認できなかったので、稜線を図示して可能性を指摘するにとどめる。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、方形と推定される。規模は、東西4.4m、南北は残存値で2.8mである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固く、外傾気味に立ち上がる。壁高は東壁23cm、西壁5cm、北壁13cmである。

〈埋土〉暗褐色土～黒褐色土を主体とする。中位～下位の黒褐色土は固く締まっている。

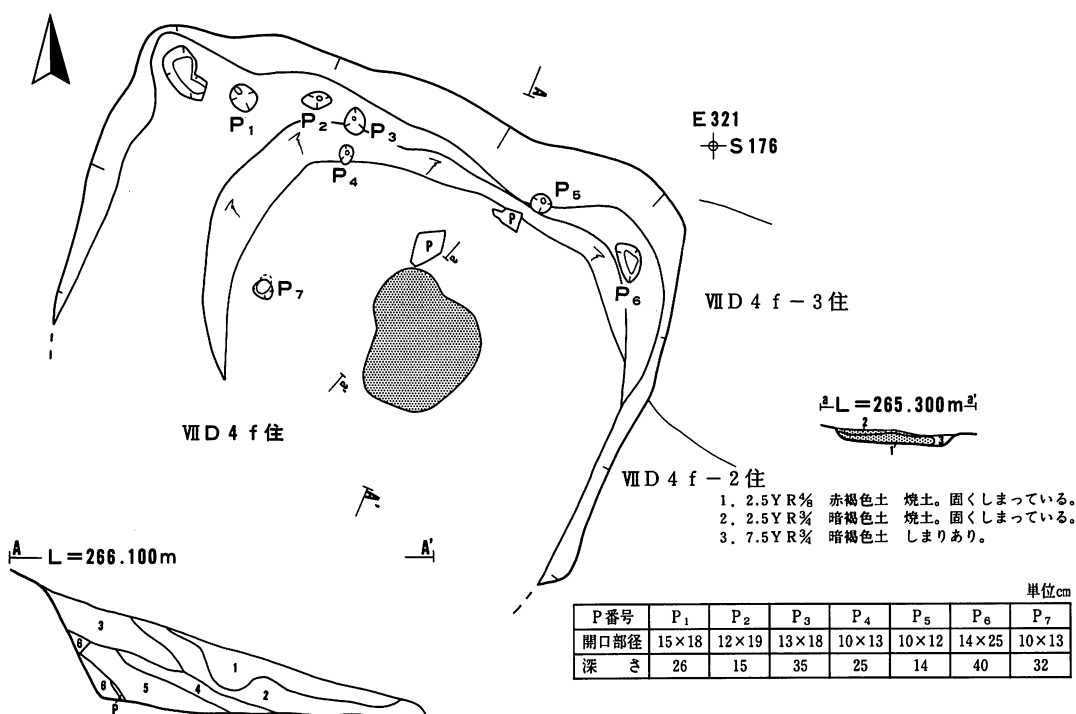
〈床・柱穴・施設〉北西側は基盤層で固く、南東側は重複するⅦD4f-2住居跡の埋土を床としている。全体的に斜面に沿って傾斜する。西壁寄りには凹凸があり不明瞭だが段になっている可能性がある。柱穴は7個検出された。うち6個は斜面上方に当たる北壁寄りに位置する。規模は一定しないものの、特にかげ離れた値を示すものもない。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は80×90cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。ⅦD4f-2住居跡の埋土に形成されており、全体に強い焼成を受けている。

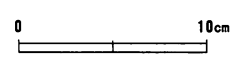
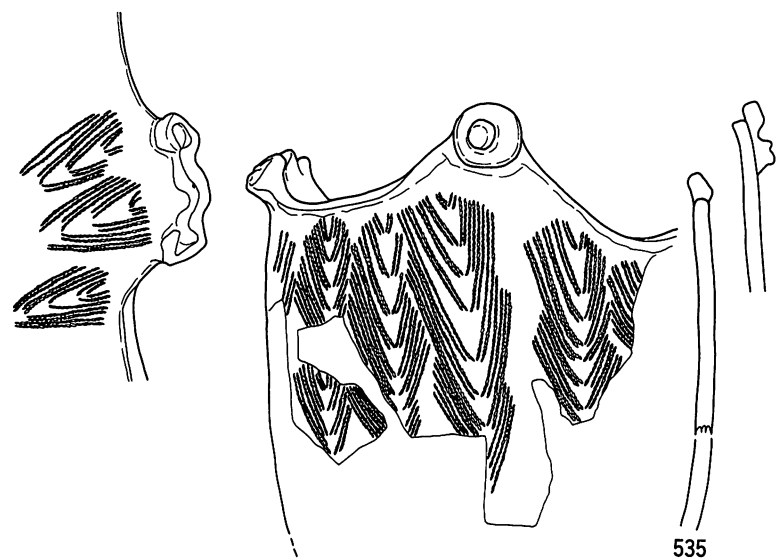
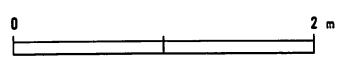
遺物（第123～126図、写真図版171～174）

〈土器〉埋土からは5580g出土した。535は北壁際床面から出土したものである。4つの頂部をもつ波状口縁で、口唇部はやや肥厚し平らになでられる。波状頂部には鋸歯状と円環状の装飾体を、対向させてそれぞれ2個1対つけている。円環状装飾体は盲孔で胴部とほぼ等しい傾きで貼り付けられる。鋸歯状装飾体の両端はやや円環状または渦巻き状となる。全体として器体に対して斜位につけられる。地文はL1段の木目状撚糸文である。外面はススの付着が著しい。536は網目状撚糸文を施文後に、無文の扁平な粘土紐を貼り付けている。537は撚糸文の上に縦位の綾絡文が施文される。538は平縁で、胴部は内弯気味に外傾するが、下半部は不明である。2段の縄を用いて器面全体に地文を施し、口縁部にはW字状に、口縁下には円弧状または波状に、粘土紐を貼り付けて断面形が半円状の隆帯としている。W字状の隆帯の上には、半截竹管の内面をもちいて刺突文が連続して施文される。口唇部はW字状の両端をつなぐ部分にも同様の刺突が施される。口縁下の波状隆帯上には1段の縄の側面を押圧している。隆帯貼り付け後に、矢羽状・弧状・鋸歯状等の沈線文が施される。焼成良好で硬質である。539は弁状突起の両端が若干角状に突出している。543は口唇部右側が欠損しているが細めの棒状工具を用いて押圧したもののか。

〈石器〉炉に隣接してのその東側から集中的に石鏃が出土した。形状・計測値が類似するばかりでなく、6点（552、554、556、557、560、563）は雫石産の流紋岩を用いている点も同一である。569はヒンジ・フラクチャーをおこした部分に粗い二次加工を疎らに施し、全体として均一性のある刃部を作り出している。図示した他にUフレ2点、フレーク33点（雫石

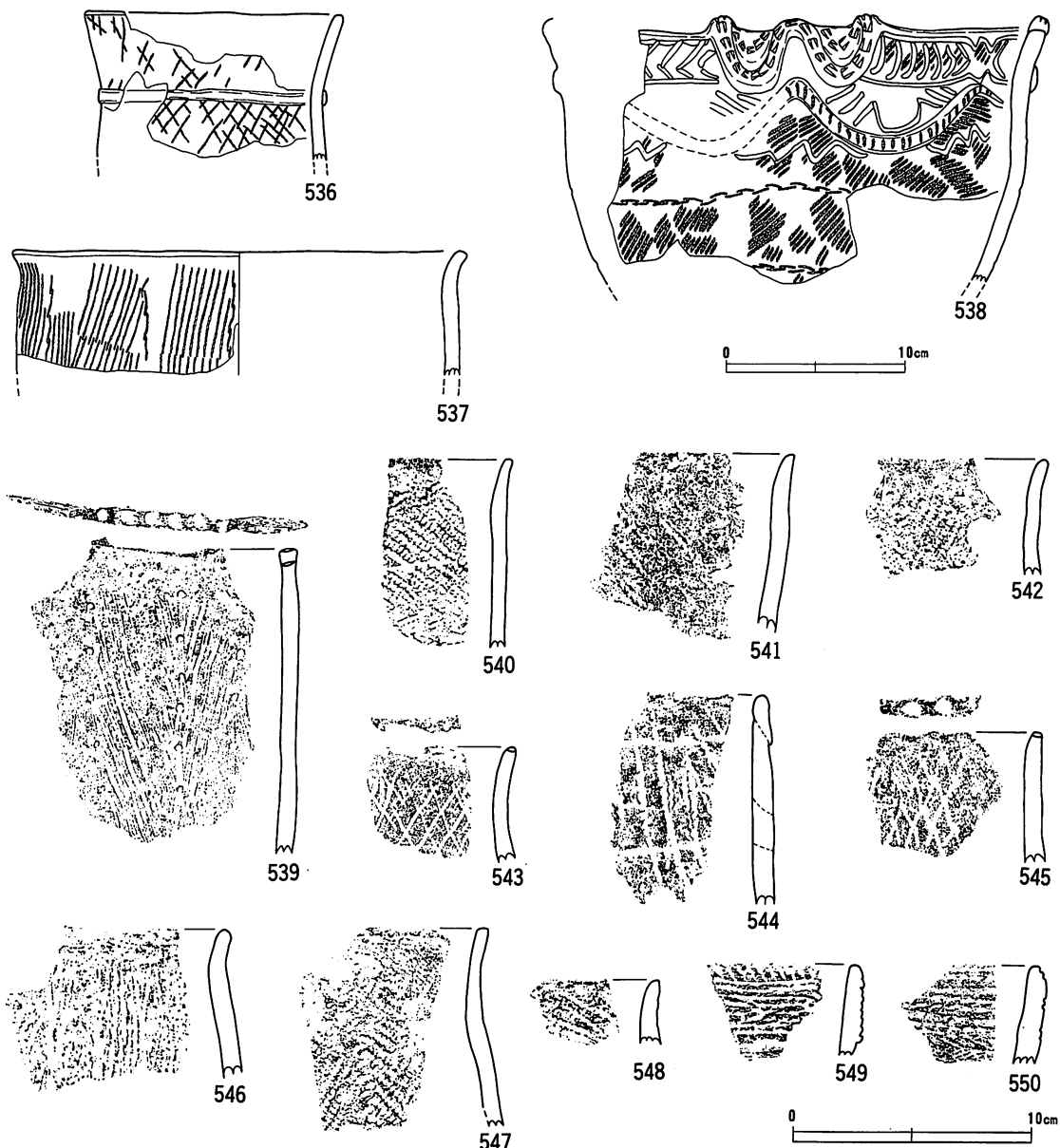


- A L = 266.100m
- 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。明褐色土をブロック状に含む。
 - 7.5Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。炭化物を含む。
 - 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物を含む。
 - 7.5Y R% 暗褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
 - 10Y R% 黒褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
 - 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を含む。



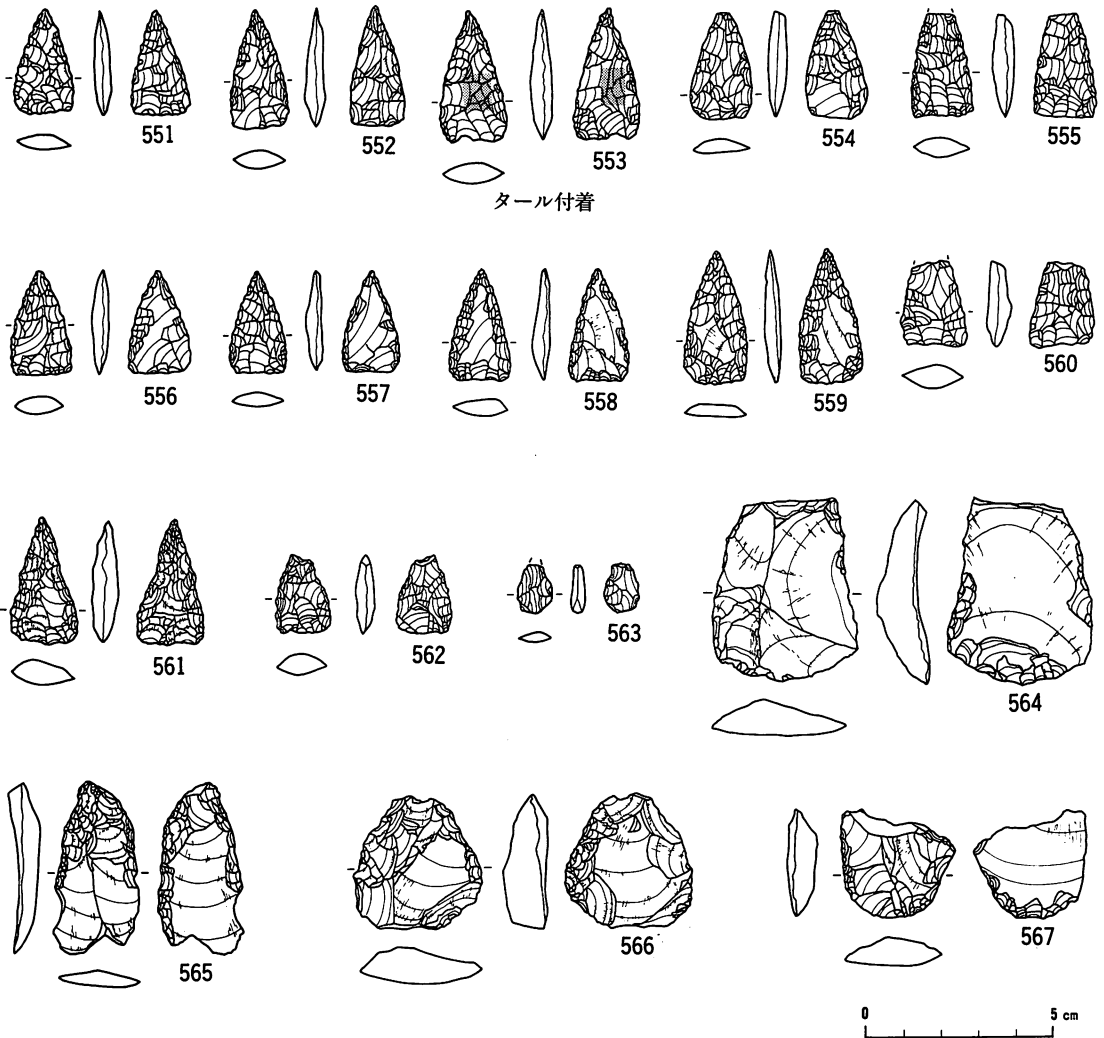
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
535	VII D 4 f 住	床面	口縁部鋸歯状裝飾体、円環状裝飾体	L木目状燃糸文	24.8	-	(22.8)		II6aア	171

第123図 VII D 4 f 住居跡・出土遺物(1)



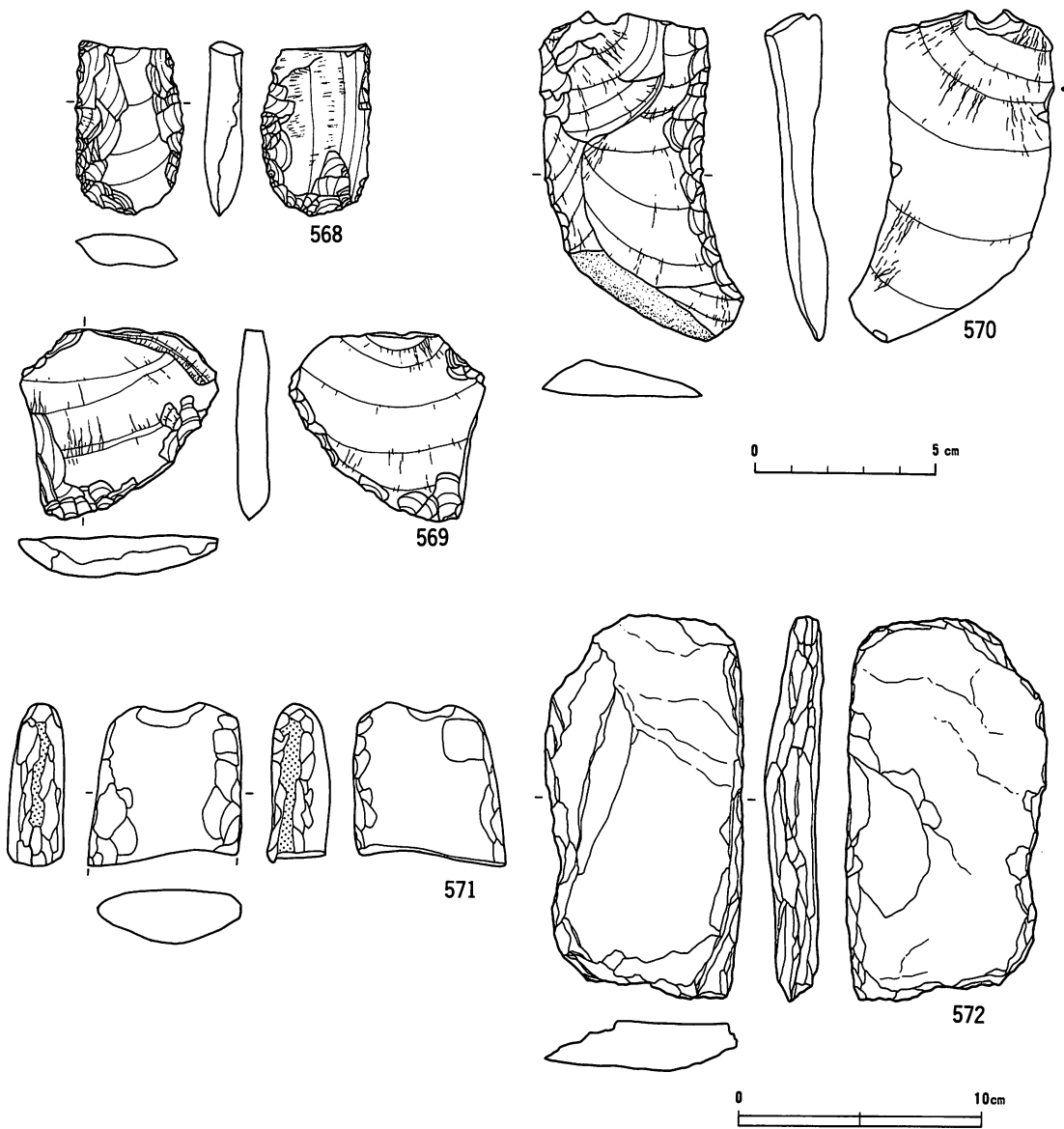
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
536	VII D 4 f 住	埋土	口頸部隆帯	R網目状燃糸文	[14.6]	-	(8.1)		II 6b-イ	171
537	VII D 4 f 住	埋土		R燃糸文、縦位綾結文。	[25.4]	-	(7.0)		II 6 b	171
538	VII D 4 f 住	埋土	口縁部W字状隆帯上半部縦竹管刺突、上半部波状隆帯上側面圧痕、棒状工具による沈跡	L R、横位綾結文。	[28.4]	-	(15.0)		II 7 b	172
539	VII D 4 f 住	埋土最下部	波状口縁。頂部弁状。指頭状圧痕。	r 2条目状燃糸文。					II 6a-イ	172
540	VII D 4 f 住	床面	横位燃糸文。	直前段反燃?				内面スズ顕著。		172
541	VII D 4 f 住	床面		L 2条木目状燃糸文					II 6	172
542	VII D 4 f 住	床面		L R × R L縦。						172
543	VII D 4 f 住	埋土	口唇部刺突 (工具不明)	L網目状燃糸文。					II 6	172
544	VII D 4 f 住	埋土		L燃糸文(太めの原体)。				輪径段外側まで明確。	II 6	172
545	VII D 4 f 住	埋土	口唇部指頭状圧痕。	網目状燃糸文。					II 6	172
546	VII D 4 f 住	埋土		R木目状燃糸文。					II 6	172
547	VII D 4 f 住	埋土		LR×RL第1種結葉羽状織文。						172
548	VII D 4 f 住	埋土		R L側面圧痕。					II 8a-イ	172
549	VII D 4 f 住	埋土	口唇端鋸状工具による刻み目。半截竹管平行沈跡・刺突・押しき。						II 9 d	172
550	VII D 4 f 住	埋土	半截竹管平行刺突。						II 9 d	172

第124図 VII D 4 f 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
551	VII D 4 f 住	床面	石鏃	泥質凝灰岩	礮石西部	2.8	1.6	0.5	1.66		I 2	172
552	VII D 4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	礮石	3.2	1.5	0.6	1.94		I 2	172
553	VII D 4 f 住	床面	石鏃	泥質凝灰岩	礮石西部	3.5	1.8	0.6	2.86		I 2	172
554	VII D 4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	礮石西部	2.9	1.6	0.4	1.91		I 2	172
555	VII D 4 f 住	床面	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	2.7	1.6	0.6	2.22		I 2	172
556	VII D 4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	礮石	2.8	1.6	0.45	1.73		I 2	172
557	VII D 4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	礮石	2.7	1.5	0.4	1.47		I 2	172
558	VII D 4 f 住	床面	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.6	0.5	1.82		I 2	172
559	VII D 4 f 住	床面	石鏃	粘板岩	北上山地	3.6	1.7	0.4	2.01		I 2	172
560	VII D 4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	礮石西部	(2.3)	1.7	0.6	(1.74)		I 1	172
561	VII D 4 f 住	床面	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	3.3	1.8	0.6	2.91		I 4	172
562	VII D 4 f 住	床面	石鏃	泥質凝灰岩	礮石西部	2.1	1.5	0.5	0.70		I 2	173
563	VII D 4 f 住	床面	石鏃	流紋岩	礮石西部	(1.3)	0.9	0.3	(0.20)			173
564	VII D 4 f 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.8	3.8	0.9	16.80		I b 2	173
565	VII D 4 f 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.6	2.3	0.4	5.27		I b 2	173
566	VII D 4 f 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.5	3.4	1.0	12.48		I c 1	173
567	VII D 4 f 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.9	3.0	0.8	6.11		I b 4	173

第125図 VII D 4 f 住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
568	ⅦD 4 f 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	4.8	3.0	1.0	16.88	周縁全体二次加工。一部両面加工。	Ⅵ	173
569	ⅦD 4 f 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	5.2	5.4	1.0	33.49		Ⅳ a	173
570	ⅦD 4 f 住	埋土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	9.0	4.6	1.0	40.62	大ぶり、相対する辺に一部加工痕あり。(使用痕か?)	Ⅰ b 3	173
571	ⅦD 4 f 住	埋土	敲磨器類A群	デイサイト質凝灰岩	磐石	(6.5)	6.1	2.3	(130)	挟り有り。	Ⅲ b 3	173
572	ⅦD 4 f 住	埋土	敲磨器類A群	凝灰質千枚岩	北上山地	15.7	8.2	2.0	390		Ⅲ c 3	174

第126図 ⅦD 4 f 住居跡出土遺物(4)

産・硬質泥岩、霽石産・凝灰質泥岩他)埋土から出土している。

時期 床面出土土器から縄文前期後葉に属する。

ⅦD4f-2住居跡(遺構番号55)

遺構(第127図、写真図版40)

〈検出状況〉ⅦD4f住居跡の南西部床面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。北東方向で、ⅦD4f-3住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないし長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、長軸4.15m、短軸は残存値で2mである。

〈壁・壁高〉基盤層まで掘り込んで壁としており、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁20cm、西壁15cm、北壁24cmである。

〈埋土〉黄褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である明黄褐色土で固い。やや中央部が窪む。柱穴が9個検出された。ほとんど斜面上方に当たる北壁際に位置する。P3、P4、P5、P8の底面はほぼ同じレベルを示す。

床面北西部で浅い土坑を検出した。円形の平面形で、規模は、径95×96cm深さ20cmである。埋土は上位は汚れた黄褐色土、下位は暗～黒褐色土で構成される。層中に細かい炭化物が1～3%程度混入する。いずれの層も締まりを欠く。土坑の埋土と住居の埋土がほぼ同じであることから、住居に伴うものと考えられる。土坑の東壁際に柱穴状土坑が検出された。埋土の観察から本土坑に先行するものと考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物(第127図、写真図版174)

〈土器〉埋土から573の他、網目状捺糸文、縦位の第1種結束羽状縄文の細片が出土した。574は円盤状土製品の破損品である。

〈石器〉575は尖頭部が意識的に作り出されている。尖頭器とすべきか。

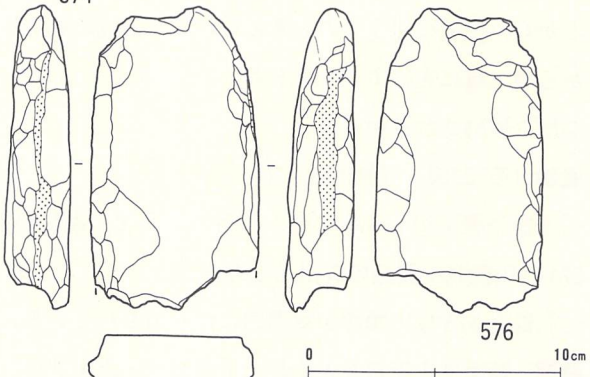
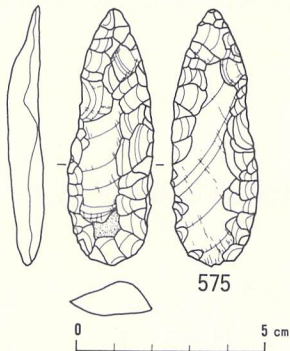
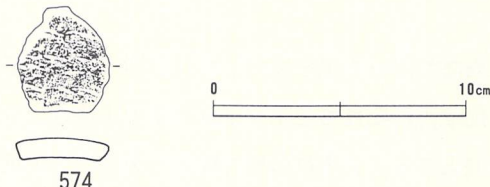
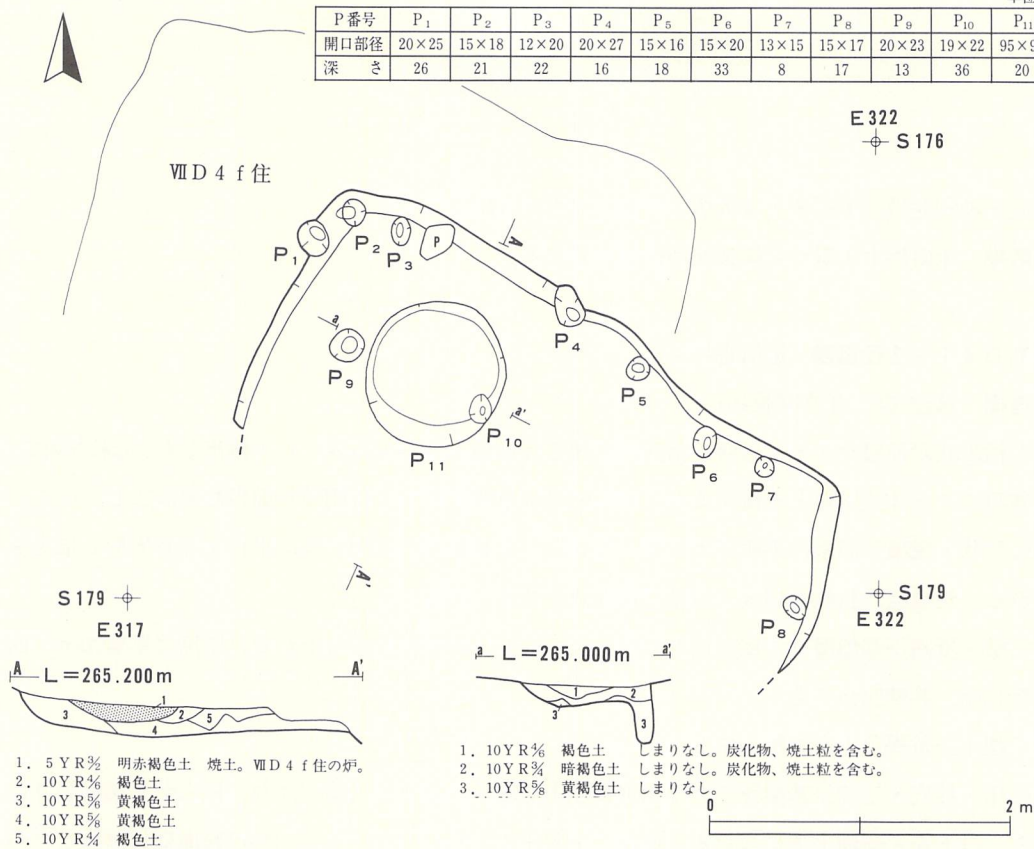
時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉と推定される。

ⅦD4f-3住居跡(遺構番号56)

遺構(第128図)

〈検出状況〉ⅦD4f住居跡の東壁からさらに東に延長する北壁を検出した。東側は倒木痕による攪乱を受けていて不明である。ⅦD4f住居跡と北壁と床面の一部を共有すると推定される。

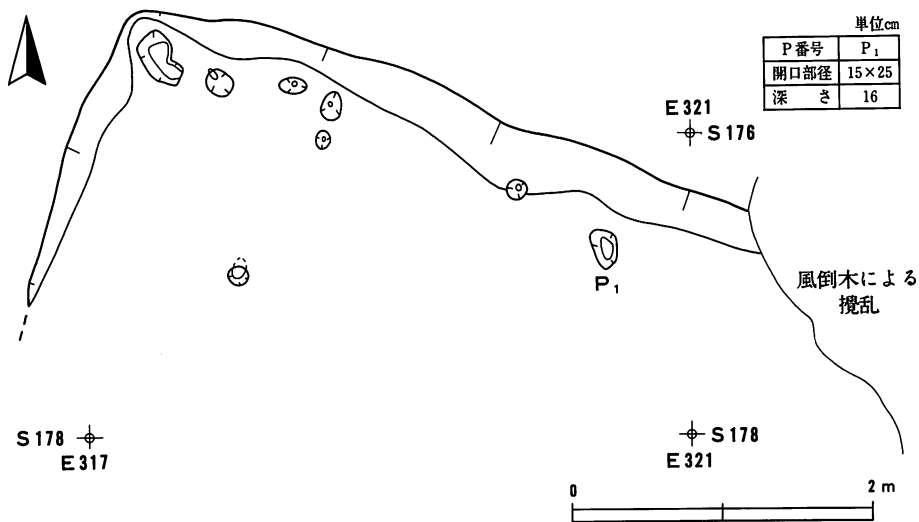
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
開口部径	20×25	15×18	12×20	20×27	15×16	15×20	13×15	15×17	20×23	19×22	95×96
深 さ	26	21	22	16	18	33	8	17	13	36	20



番号	出土地点	層土	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
573	VII D 4 f - 2 住	埋土		R 擦糸文。						174
574	VII D 4 f - 2 住	埋土						繊維混入。		174

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
575	VII D 4 f - 2 住	埋土	不定形石器	珉質泥岩	雫石西部	6.9	2.3	0.8	15.30		I e	174
576	VII D 4 f - 2 住	柱穴内	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(12.1)	6.7	2.6	(320)	抉り有り。	III b 3	174

第127図 VII D 4 f - 2 住居跡・出土遺物



第128図 VII D 4 f - 3 住居跡

西側でVII D 4 f 住居跡に切られる。南側でVII D 4 f - 2 住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

<形状・規模>北壁のみ残存し不明である。壁高は56cmである。

<壁・壁高>基盤層である明褐色土で固い。

<床・柱穴・施設>VII D 4 f 住居跡と同じレベルで基盤層で固い。斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴が2個検出された。柱穴の底面のレベルは等しい。

<炉>検出されなかった。

遺物 出土していない。

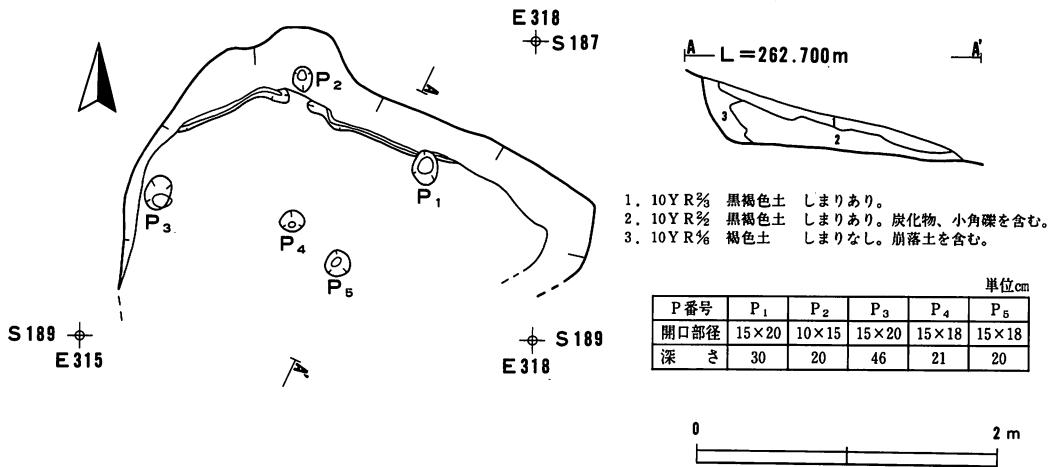
時期 特定する資料を欠くが、重複関係から縄文前期後葉と推定される。

VII D 4 h 住居跡 (遺構番号57)

遺構 (第129図、写真図版41・42)

<検出状況>西尾根の南麓に位置する。基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は流失のため不明である。

東側はVII D 4 h - 2 住居跡、VII D 4 h - 4 住居跡と重複する。新旧関係は平面で確認し、VII D 4 h - 2 住居跡、VII D 4 h - 4 住居跡の方が新しい。VII D 4 h - 4 住居跡はVII D 4 h - 2 住



第129図 VII D 4 h 住居跡

居跡に先行する。

〈形状・規模〉北壁と西壁のみ残存し詳細は不明であるが、楕円形と推定される。規模は残存値で、南北2m東西2.8mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、内湾気味に外傾する。壁高は、北壁47cm西壁10cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。黒褐色土主体で、下層は長さ5～6mmの炭化物を含む。第3層は壁の崩落土を混入する。いずれも固く締まっている。

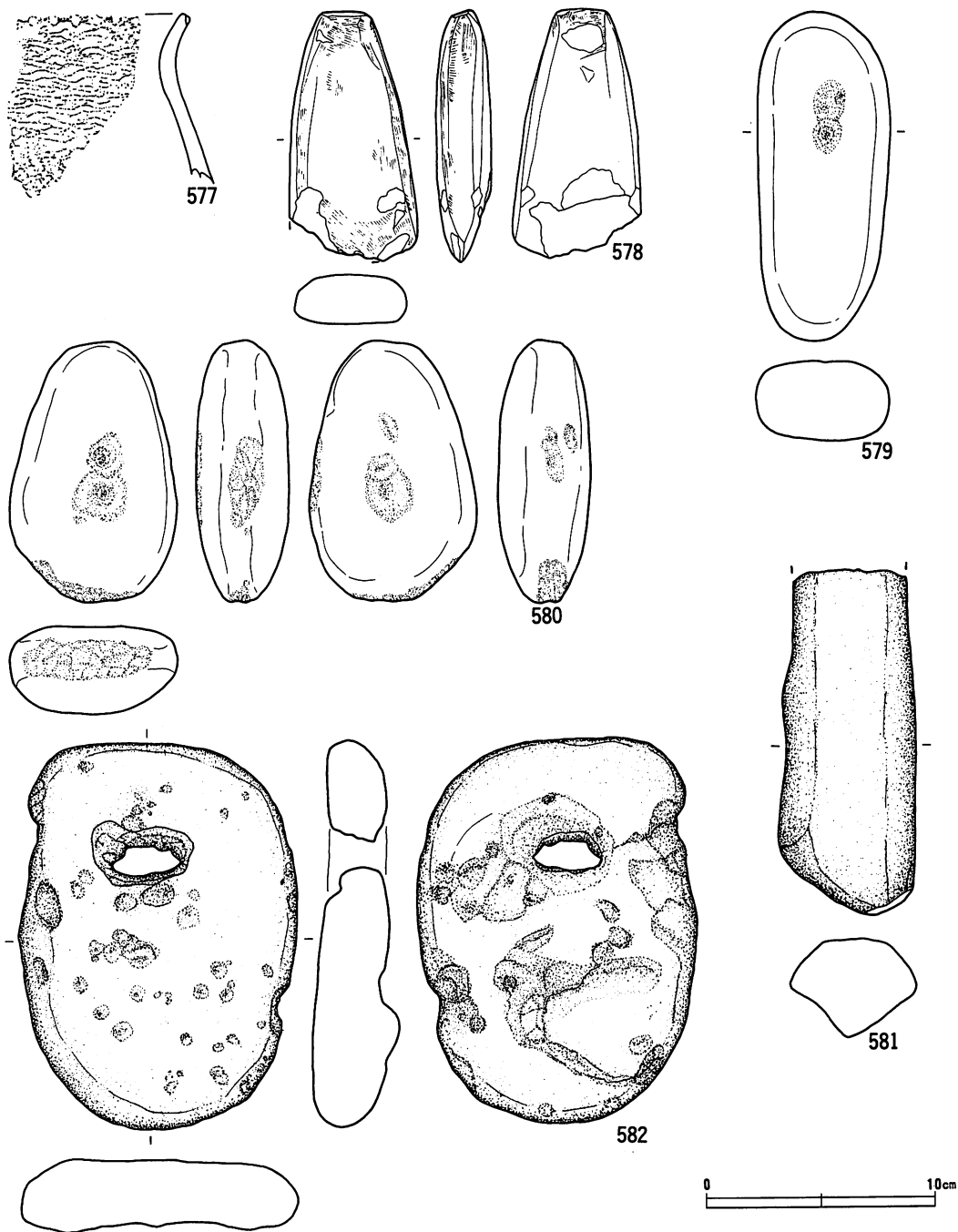
〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は5個検出された。埋土は10Y R2/3黒褐色土で固く締まる。規模はほぼ等しいが、底面のレベルには差異があり規則性はみられない。西壁際と北壁際の一部に周溝が検出された。埋土は柱穴と同じである。規模は幅10cm深さ2～5cmである。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第130図、写真図版174)

〈土器〉床面からは撚糸文破片が1点出土したが、細片のため図化はできなかった。埋土からは240g出土した。577の他は、網目状撚糸文、木目状撚糸文の小片である。

〈石器〉578は裏面にザラつきを残している。表面と側面はよく研磨されている。580は偏平な礫の両平坦部に凹部が形成され、側辺にも敲打痕が観察される。582は床直上から出土した有孔の石である。表面に小さな凹みが多数観察されるが、使用痕とは認め難く、自然石と思わ



番号	出土地点	層位	文様	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
577	ⅦD 4 h 住	埋土	口唇端刻み目。口縁部重層する綾絡文。				R L横。纖維わずかに含む。	Ⅱ3a	174

番号	出土地点	層位	品種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
578	ⅦD 4 h 住	埋土	磨製石斧	粘板岩	北上山地	(10.8)	5.6	2.1	(220)	裏面にザラつきを残す。表面と側面はよく研磨され、擦痕あり。	I	174
579	ⅦD 4 h 住	埋土	敲磨器類 B 群	凝灰岩	北上山地	14.4	5.8	3.3	400	偏平な自然礫の平坦な一面に浅皿状の敲打痕。	Ⅱ	174
580	ⅦD 4 h 住	床面	敲磨器類 B 群	琉長質凝灰岩	北上山地	11.3	7.3	3.7	440	偏平な礫の両方の平坦部に凹部。側面にも敲打痕。	Ⅵ	174
581	ⅦD 4 h 住		石棒	流紋岩	松尾(長者屋敷)	(10.9)	5.9	4.2	(540)			174
582	ⅦD 4 h 住	埋土	有孔石	凝灰角礫岩	奥羽山地	16.7	12.2	3.2	920			174

第130図 ⅦD 4 h 住居跡 出土遺物

れる。奥羽山地産であり、住居に持ち込まれたものと考えられる。581も自然石であるが松尾（長者屋敷）産の流紋岩であり、同様に持ち込まれたものであろう。図示した他にフレーク2点が埋土から出土した。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属するものと推定される。

ⅦD4h-2住居跡（遺構番号58）

遺構（第131図、写真図版41）

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。基盤層上面で、ⅦD4h住居跡の埋土プランを切る暗褐色土のプランとして検出した。本住居の床面下からはⅦD4h-3住居跡が検出されている。

〈規模・形状〉北壁と東壁の一部が残存し詳細は不明である。規模は残存値で、東西2.1m南北2.3mである。

〈壁・壁高〉ⅦD4h住居跡の埋土を壁とし、黒褐色土で固く締まる。ほぼ直立する。壁高は東壁20cm、北壁8cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。下位ほど褐色土や明褐色土のブロックが混入する。

〈床・柱穴・施設〉黄褐色土と黒褐色土の混土層と、ⅦD4h-3住居跡の埋土である黒褐色土で構成され、固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉本住居の床面のレベルで、本住居に伴うものと考えられる焼土を検出した。調査の手違いより北半部を掘りこんでしまった。5YR4/4にぶい赤褐色で固く締まり、厚さ3cmで断面形はレンズ状である。

遺物（第132図、写真図版175）

〈土器〉床面から766g、埋土から400g出土した。583は北西壁際床面から一括出土したものであるが上半部は不明である。584は木目状撚糸文としたが、撚糸文原体（絡条体）の末端処理した部分の可能性もある。図示した他に埋土から網目状撚糸文、木目状撚糸文、組縄縄文の破片が出土した。

〈石器〉586は石鏃としたが、やや対称性を欠く。他にフレークが床面から1点、埋土から2点出土した。

時期 床面出土土器と重複関係から、縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

ⅦD4h-3住居跡（遺構番号59）

遺構（第131図、写真図版41）

〈検出状況〉ⅦD4h-2住居跡の床面で黒褐色土の落ち込みとして、北壁のみを検出した。

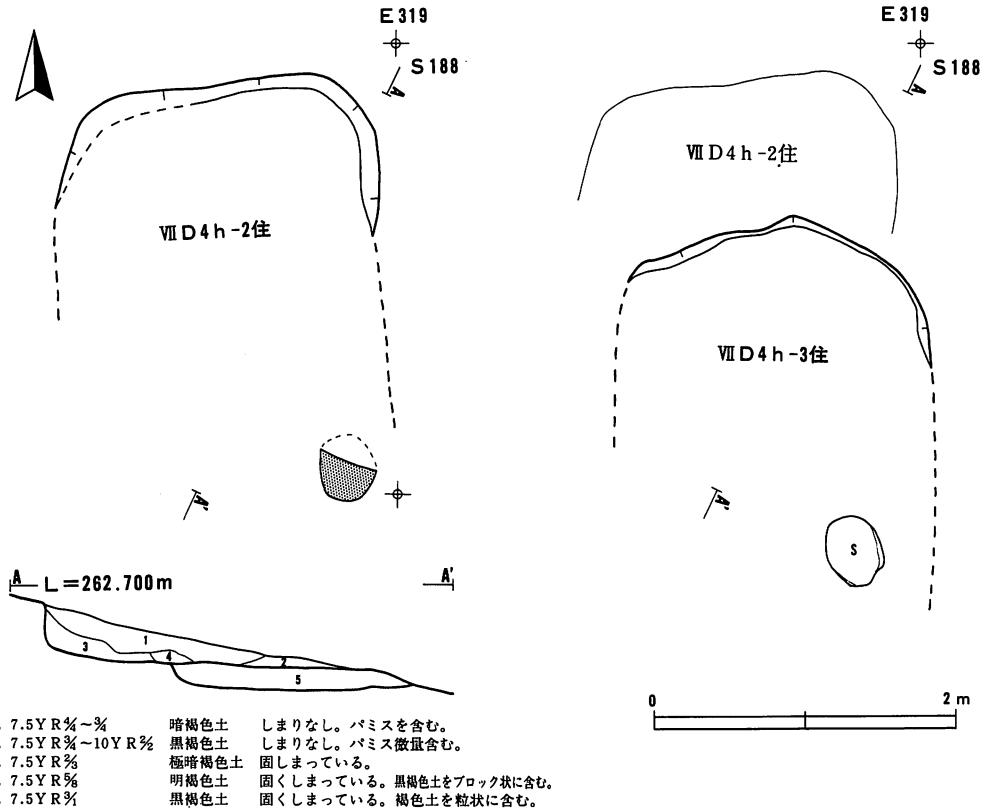
ⅦD4h-4住居跡と重複する。本住居は同住居の埋土の中に構築されており、同住居より新しい。これらを図式化するとつぎのようになる。

（新） ⅦD4h-2住居跡←ⅦD4h-3住居跡←ⅦD4h-4住居跡 （旧）

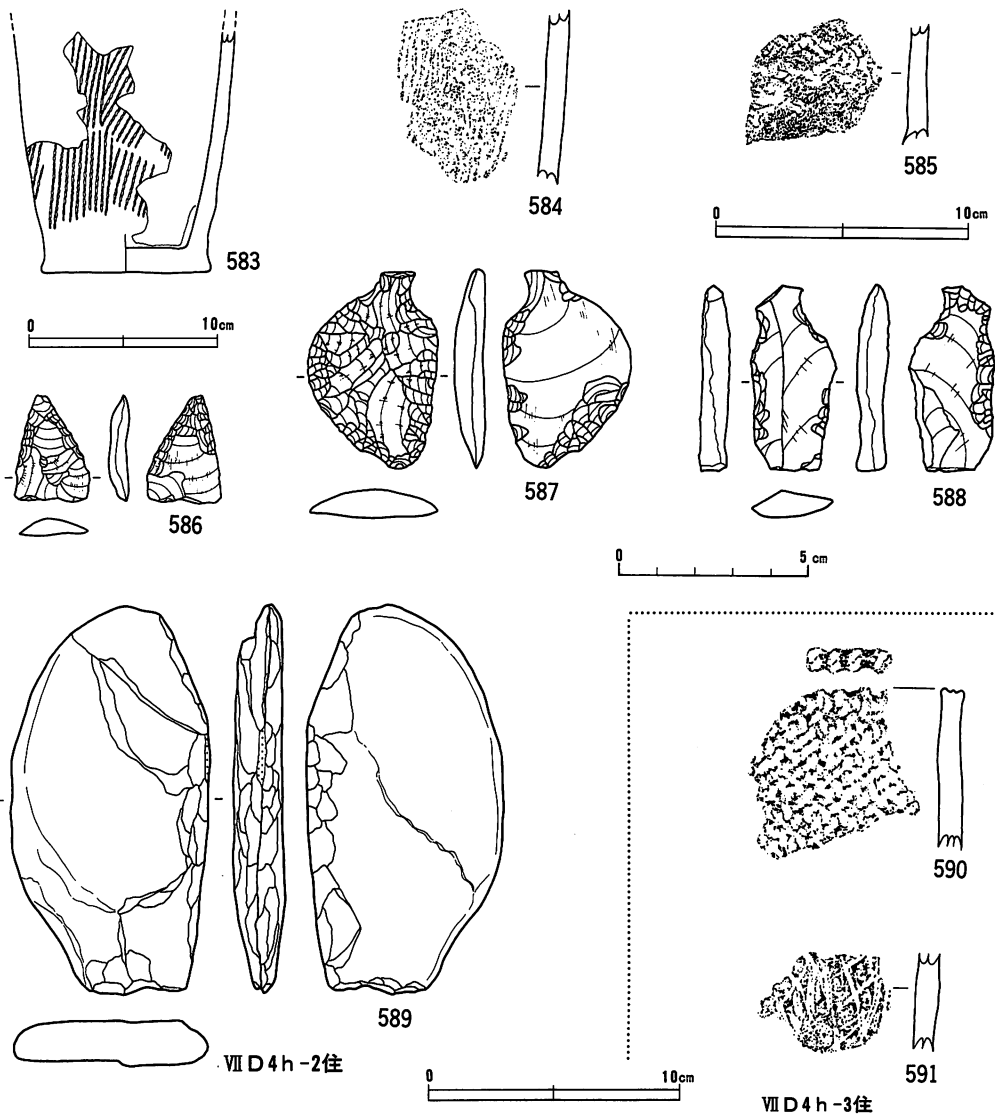
〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は残存値で、2.1×2.2mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、黄褐色土ブロックが混入する黒褐色土で固く、壁高13cmである。

〈埋土〉黒褐色土による単層で、固く締めり小角礫・粉炭・褐色土の細かいブロックをそれぞれ少量含む。



第131図 ⅦD4h-2・ⅦD4h-3住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
583	VII D 4 h - 2 住	床面		R 燃糸文。	-	(9.0)	(12.7)		II 6	175
584	VII D 4 h - 2 住	床直上		L 木目状燃糸文。					II 6	175
585	VII D 4 h - 2 住	床直上		R L 横。片結び横位綾結文。						175
590	VII D 4 h - 3 住	埋土		L R 結束横。				繊維混入。	II 1 b	175
591	VII D 4 h - 3 住	床直上	口唇部 L R 側面圧痕。	L 網目状燃糸文。				内面スス付着。	II 6	175

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
586	VII D 4 h - 2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.8	2.0	0.4	2.54			175
587	VII D 4 h - 2 住	埋土	石匙	珉質泥岩	磐石西部	5.2	3.4	0.8	12.97		I a 2	175
588	VII D 4 h - 2 住	埋土	石匙	硬質泥岩	磐石西部	4.9	3.3	0.9	7.52		I b 1	175
589	VII D 4 h - 2 住	埋土	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上産地	15.4	7.9	1.8	305		III c 2	175

第132図 VII D 4 h - 2・VII D 4 h - 3住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 4 h - 4 住居跡と同じレベルで一部を共有する。基盤層である黄褐色土で固い。柱穴は検出されなかった。床面に偏平な垂角礫が検出された。規模は径35×45cmで厚さは8cmである。ⅦD 4 h - 4 住居跡の焼土の上にいることから、本住居に帰属するものと考えた。

〈炉〉床面レベルで焼土を検出しているが、ⅦD 4 h - 4 住居跡に帰属するものと考えられた。それは、ⅦD 4 h - 4 住居跡で検出された複数の焼土の位置に規則性がありそれに合致すること、焼土と偏平な垂角礫とは時期差があると考えられること、の2点による。

遺物 (第132図、写真図版175)

〈土器〉埋土から590と木目状撚糸文、網目状撚糸文、撚糸文、単節斜縄文の細片(いずれも地文のみ)、床面から591と木目状撚糸文の細片が出土した。

〈石器〉剥片が4点出土した。うち1点には微小剥離が認められたが製品とは考えにくい。ほかはフレークである。

時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

ⅦD 4 h - 4 住居跡 (遺構番号60)

遺構 (第133図、写真図版42)

〈検出状況〉ⅦD 4 h - 2 住居跡の床面の下から検出された。南側は斜面のため流失している。

ⅦD 4 h - 3 住居跡と重複する。同住居の北壁は本住居の埋土中にあり、本住居が同住居に先行する。また、北壁の一部では、ⅦD 5 i - 3 土坑に切られ、ⅦD 5 i 住居跡によって北壁の一部と東壁を削平されていて原形をとどめず、範囲を確定することも困難である。ここでは残存した周溝によって東端とした。西側ではⅦD 4 h 住居跡の埋土を切っており、本住居の方が新しい。新旧関係を図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 4 h - 2 住居跡 ← ⅦD 4 h - 3 住居跡 (旧)
ⅦD 5 i 住居跡 ← ⅦD 4 h - 4 住居跡 ← ⅦD 4 h 住居跡
ⅦD 5 i - 3 土坑

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、長軸6.3m、短軸は残存値で2.6mである。

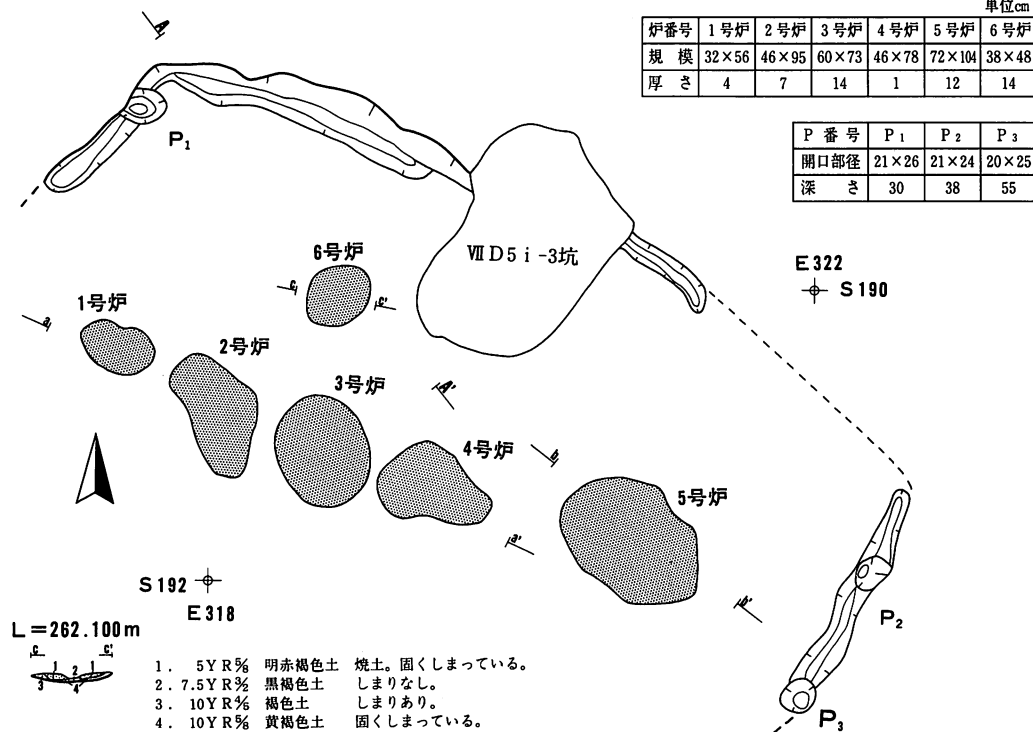
〈壁・壁高〉北壁は基盤層である黄褐色土、西壁はⅦD 4 h 住居跡の埋土を壁とし、いずれも固く締まっており、外傾する。壁高は北壁30cm、西壁15cmである。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、ⅦD 4 h - 3 住居跡の床面とレベルはほぼ等しい。周溝が西壁際と北壁際および東側の一部に巡る。規模は、幅10～35cm深さ5～7cmで底面

単位cm

炉番号	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	5号炉	6号炉
規模	32×56	46×95	60×73	46×78	72×104	38×48
厚さ	4	7	14	1	12	14

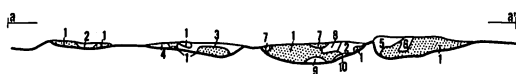
P番号	P ₁	P ₂	P ₃
開口部径	21×26	21×24	20×25
深さ	30	38	55



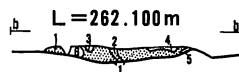
- L = 262.100 m
1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまっている。
 2. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。
 3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
 4. 10Y R% 黄褐色土 固くしまっている。



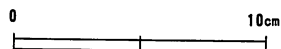
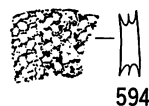
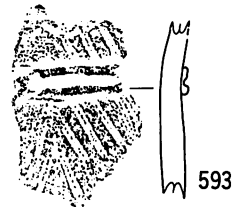
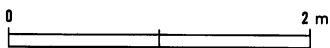
1. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。小角礫を含む。
3. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
4. 10Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物を含む。小角礫を含む。



1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。
3. 10Y R% 褐色土 しまりあり。
4. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
5. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。
6. 7.5Y R% 明褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。
7. 5Y R% 赤褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
8. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。焼土粒を含む。
9. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
10. 7.5Y R% 明褐色土 固くしまっている。若干焼成を受けている。



1. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 5Y R% 赤褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
3. 5Y R% 黒褐色土 しまりあり。
4. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
5. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
6. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
592	VII D 4 h - 4 住	埋土		R 網目状燃糸文。					II 6	175
593	VII D 4 h - 4 住	埋土	隆帯上沈線(凹線)と指頭状圧痕。	L 2 条木目状燃糸文。					II 6 b i	175
594	VII D 4 h - 4 住	埋土		組紐。					II 2	175

第133図 VII D 4 h -4住居跡・出土遺物

は凹凸がある。柱穴は3個検出されたが、全て周溝内にある。径は20数cmとほぼ等しく、深さは全て30cm以上ある。

〈炉〉地床炉が6基検出された。うち3基はⅦD 4 h - 3住居跡の床面ですでに検出されていたものである。6基のうち5基までが長軸線上に一直線に並ぶことから本住居に帰属すると考えた。残る1基はやや北に寄る。ⅦD 4 h - 3住居跡に帰属すると仮定すると、あまりに東壁に寄り過ぎ、炉としての機能が果たせたかどうか疑問であることから、本住居に伴うものと考えて図化したか明白ではない。レベルは6基ともほぼ等しい。長軸線上西側から東側にそれぞれ1号炉から5号炉とし、2・3号炉の北に位置するものを6号炉とする。3、4、5号炉は特に強い焼成を受けており、断面形レンズ状で厚さは10～14cm、固く締まっている。

	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	5号炉	6号炉	
分 布	32×53	46×95	60×73	46×78	72×104	38×48	
厚 さ	4	7	14	14	10	4	(単位cm)

遺物 (第133図、写真図版175)

〈土器〉埋土から605g出土した。図示した他、木目状捺糸文10点、網目状捺糸文3点、組縄縄文(いずれも地文のみ)が出土した。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

ⅦD 4 i 住居跡 (遺構番号61)

遺構 (第143図、写真図版43)

〈検出状況〉西尾根の南麓に位置する。耕作土を除去した基盤層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出した。大部分が耕作により削平され、北壁のみ確認された。

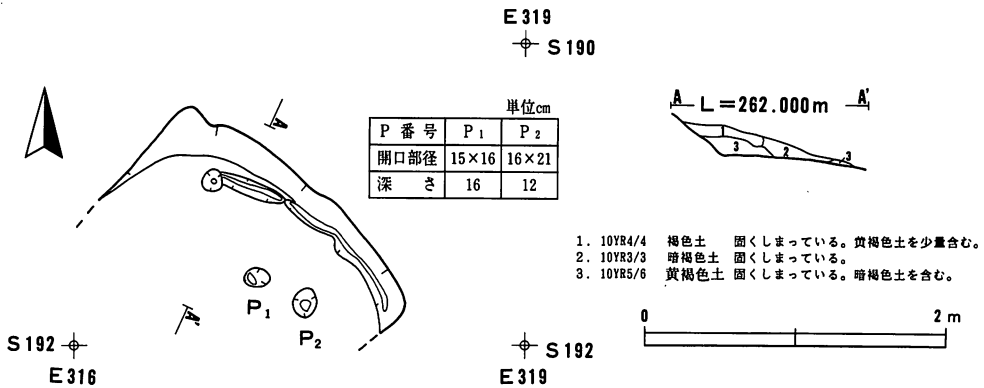
北側でⅦD 4 h - 4住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

〈形状・規模〉不明である。規模は残存値で、東西2m南北1mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、緩やかに外傾する。壁高は25cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。上位は褐色土と暗褐色土で壁際は崩落土である黄褐色土でいずれも固く締まる。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は2個検



第134図 VII D 4 i 住居跡

出された。規模はほぼ等しい。北壁際に周溝が検出された。規模は幅10～15cm、深さ7cm程度である。埋土は10Y R2/2黒褐色土で固く締まっている。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 本遺構に伴うとして取り上げられた遺物はない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況・埋土から推して縄文前期に属するものと推定される。

VII D 5 g - 2 住居跡 (遺構番号62)

遺構 (第135図、写真図版43)

〈検出状況〉西尾根の南斜面中腹に位置する。VII D 6 g - 2 住居跡の床面精査で、同住居に先行する周溝と壁を検出し、住居跡として認定した。南側は道路により削割されている。

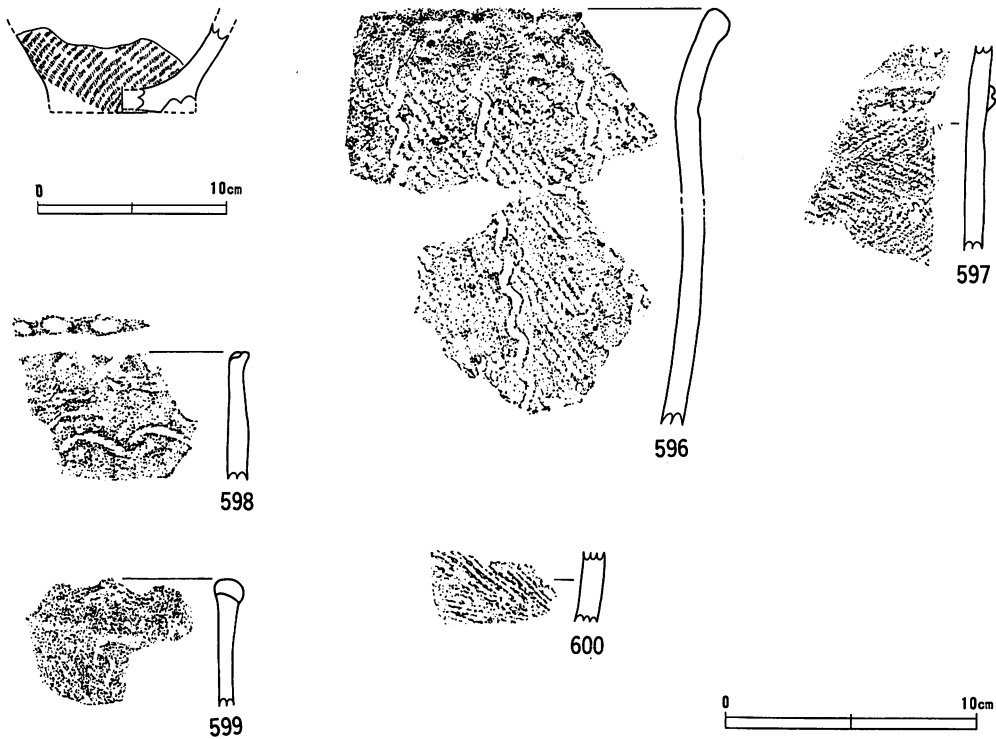
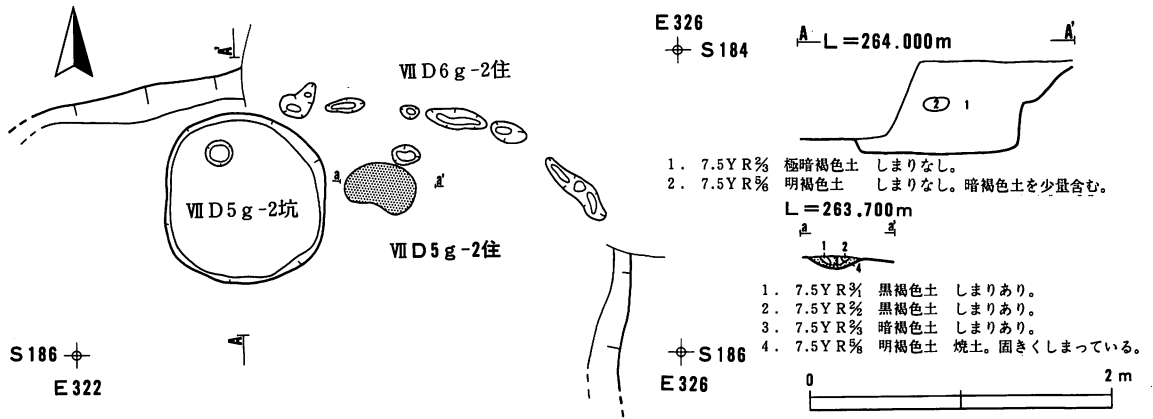
VII D 5 g - 2 土坑は、本住居およびVII D 6 g - 2 住居跡と重複する。埋土断面観察により同土坑が最も新しいと考えられる。これらを図式化すると次のようになる。

(新) VII D 5 g - 2 土坑 ← VII D 6 g - 2 住居跡 ← VII D 5 g - 2 住居跡 (旧)

〈規模・形状〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長丸または楕円形と推定される。規模は残存値で、長軸4.2m短軸1.35mである。

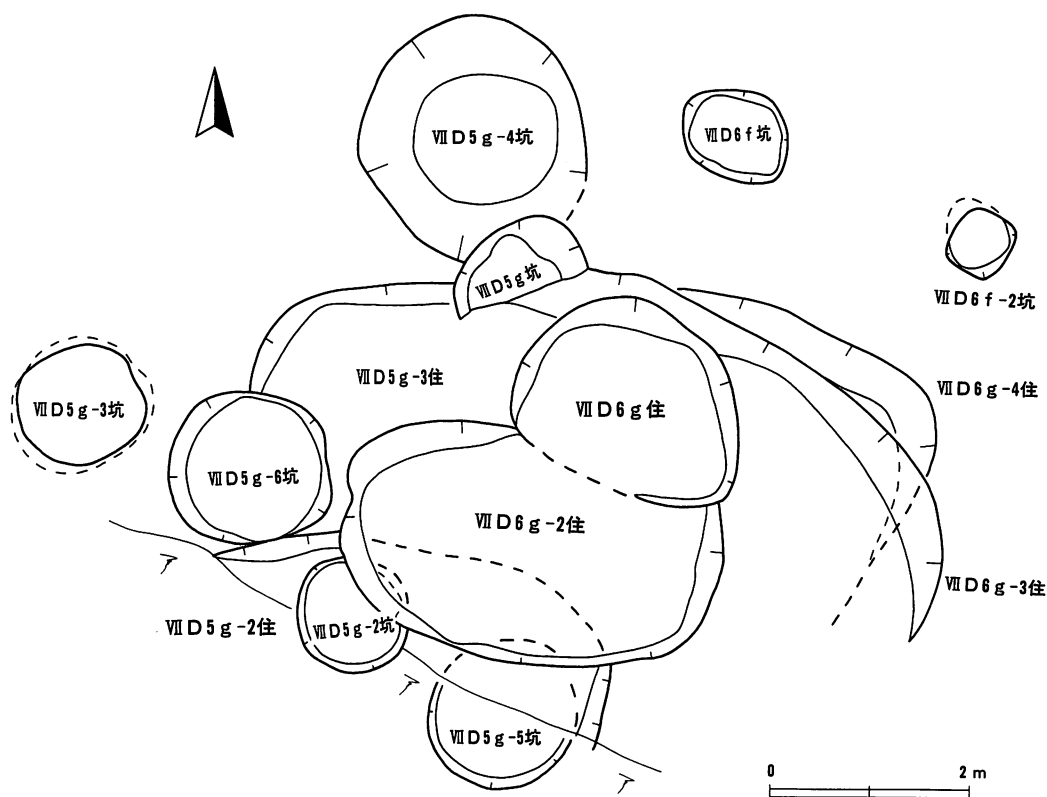
〈壁・壁高〉再堆積層である褐色土で固く締まっていてやや外傾する。壁高は東壁20cm、北壁34cmである。

〈床・柱穴・施設〉固くしまった褐色土で、細かな凹凸があるが全体的にはほぼ水平である。柱穴は検出されなかった。北壁の推定ラインから周溝と思われる断続的な窪みが検出された。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
595	VII D5 g-2住	埋土		R横。	-	(7.8)	(4.0)	繊維混入。		175
596	VII D5 g-2住	埋土		L R縦。片結び縦位綾絡文。						175
597	VII D5 g-2住	埋土	隆帯上右方向からの竹管刺突。	L R × R L 第1種結束羽状縄文。						175
598	VII D5 g-2住	埋土	口唇部指頭状圧痕。口縁部の一部外側に張り出す。横位綾絡文。						II 6 b 才	175
599	VII D5 g-2住	埋土	やや肥厚する山形口縁。	R 網目状燃糸文。					II 6 a	175
600	VII D5 g-2住	埋土		横位の木目状燃糸文。						175

第135図 VII D5 g-2住居跡・出土遺物



第136図 VII D5 g～6 g グリッド遺構群重複関係

深さは3～13cmと一定しないことと、VII D6 g-2住居跡との重複部分のみから検出していることから、周溝でない可能性もありうる。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は23×49cmの範囲に分布し、厚さは4cmである。中央部は木根により攪乱されている。

遺物（第135図、写真図版175）

〈土器〉埋土から2946g出土した。595の断面は細孔による間隙が多く比重が小さい。内面は急な曲線的カーブを描く。597の口縁部は無文である。599は3山状の肥厚する弁状突起部を有する破片である。600は木目状撚糸文の横位回転であるが、本遺跡では希有な例である。他に網目状撚糸文の破片が出土している。

〈石器〉フレーク2点が埋土から出土したのみで、製品はない。

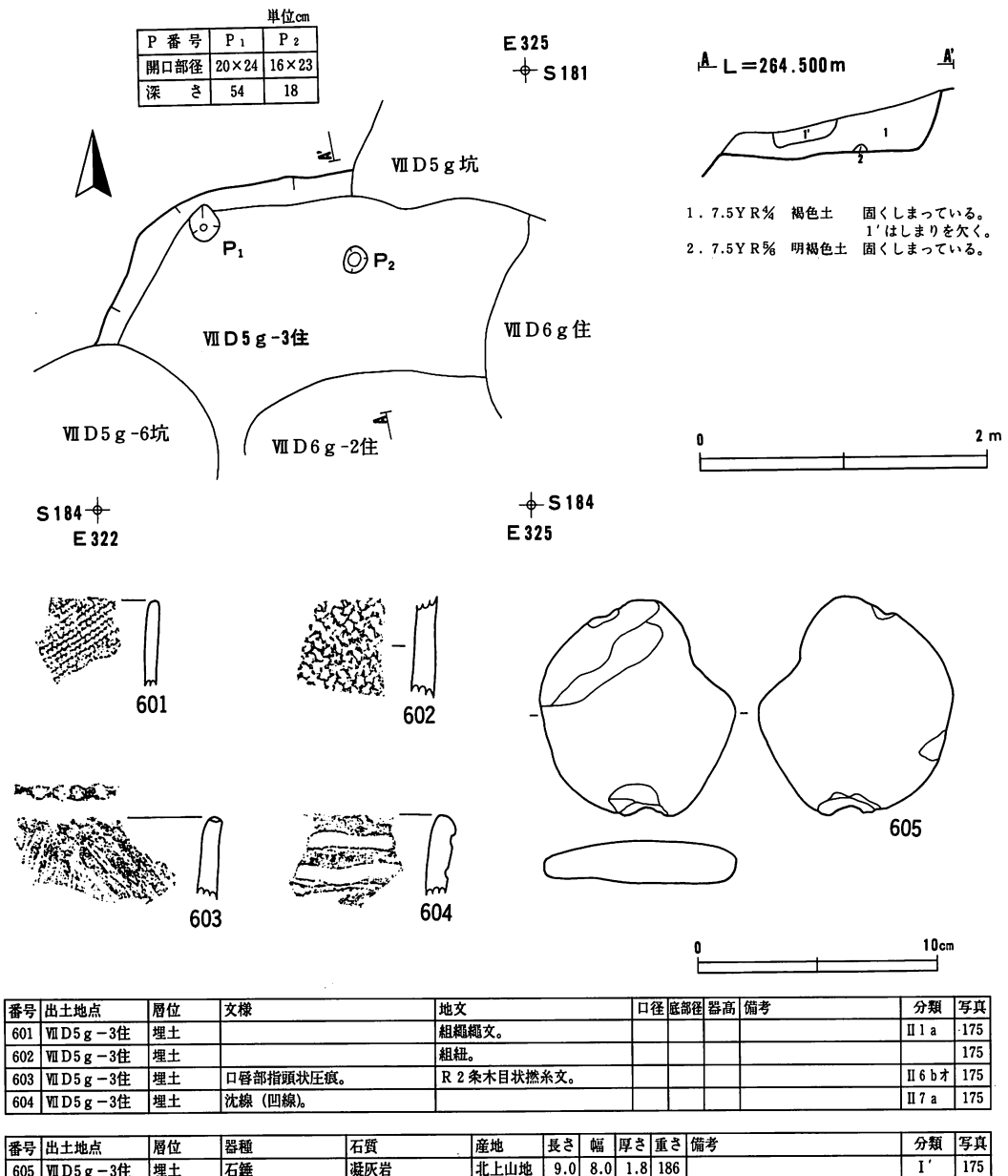
時期 時期を特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると思われる。

ⅦD5g-3住居跡（遺構番号63）

遺構（第137図、写真図版44）

＜検出状況＞ⅦD6g住居跡の西壁の精査で、さらに西に延びる壁を確認し、住居跡として認定した。

東側でⅦD6g住居跡と重複し、本住居の埋土中にⅦD6g住居跡の西壁が構築されること



第137図 ⅦD5g-3住居跡・出土遺物

から、本住居の方が古い。北側でⅦD 5 g 土坑、南西側でⅦD 5 g - 6 土坑と重複する。ⅦD 5 g 土坑は本住居の北壁でその断面を確認したもので、本住居の方が新しい。ⅦD 5 g - 6 土坑との関係では、同土坑の埋土観察から本住居の方が古い。これを図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 6 g 住居跡←ⅦD 5 g - 3 住居跡←ⅦD 5 g 土坑 (旧)

ⅦD 5 g - 6 土坑

本住居とⅦD 6 g - 4 住居跡は北壁のラインがほぼ一致し、床面のレベルも同様であることから、この2つの住居は同一のものである可能性がある。ここでは別個に検出されたことと、推定の域を出ないことから可能性の指摘にとどめ、それぞれ別個に記載する。仮に同一ものとするれば規模が長軸6.7m短軸残存値で2mの隅丸長方形となると考えられる。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は残存値で、1.5×2.7mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まっており、やや外傾する。壁高は西壁12cm、北壁28cmである。

〈埋土〉固く締まる褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、ほぼ平坦である。柱穴は2基検出された。P1は北西隅に位置し深さは54cmであり、主柱穴の可能性はある。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第137図、写真図版175・176)

〈土器〉埋土から863g出土した。603は、口唇部に指頭圧痕を施し細波状口縁状を呈する。604の沈線施文はやや雑な印象である。

〈石器〉605の1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

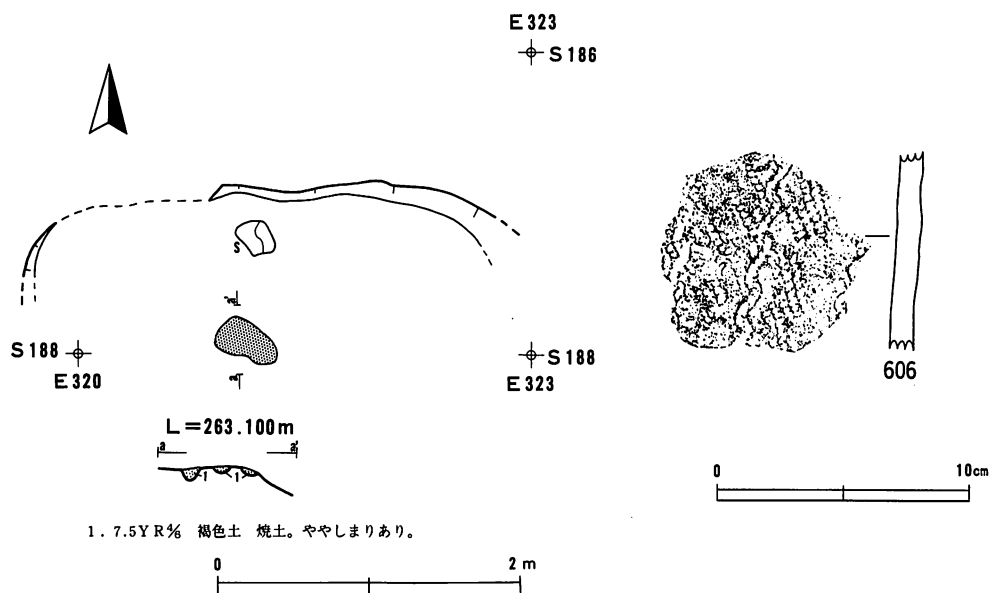
ⅦD 5 h 住居跡 (遺構番号64)

遺構 (第138図、写真図版44)

〈検出状況〉西尾根南麓旧道路下、黒褐色土層中に検出した。平面的なプランとしては確認できず、固さから壁を検出した。南側は耕作により削平されている。北壁の一部は確認できなかった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形を基調とするものと推定される。規模は、長軸3m短軸は残存値で1.15mである。

〈壁・壁高〉黒褐色土で堅く締まり、ほぼ直立する。壁高は北壁で14cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
606	VII D 5 h 住	埋土下位		LR縦。片結び縦位綾絡文。						176

第138図 VII D 5 h 住居跡・出土遺物

<床・柱穴・施設>黒褐色土である。埋土と床面との識別は固さによる。柱穴は検出されなかった。

<炉>地床炉が1基検出された。焼土は25×14cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。

遺物 (第138図、写真図版176)

<土器>図示した他に組縄縄文、無文の破片など250g出土した。

<石器>埋土からフレーク3点が出土したが、製品はない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉と推定される。

VII D 5 i 住居跡 (遺構番号65)

遺構 (第139図、写真図版95)

<検出状況>西尾根の南麓に位置する。耕作土を除去し基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。西側でVII D 4 h - 4 住居跡を切る。床下にはVII D 5 i - 2 住居跡とVII D 5 i - 3

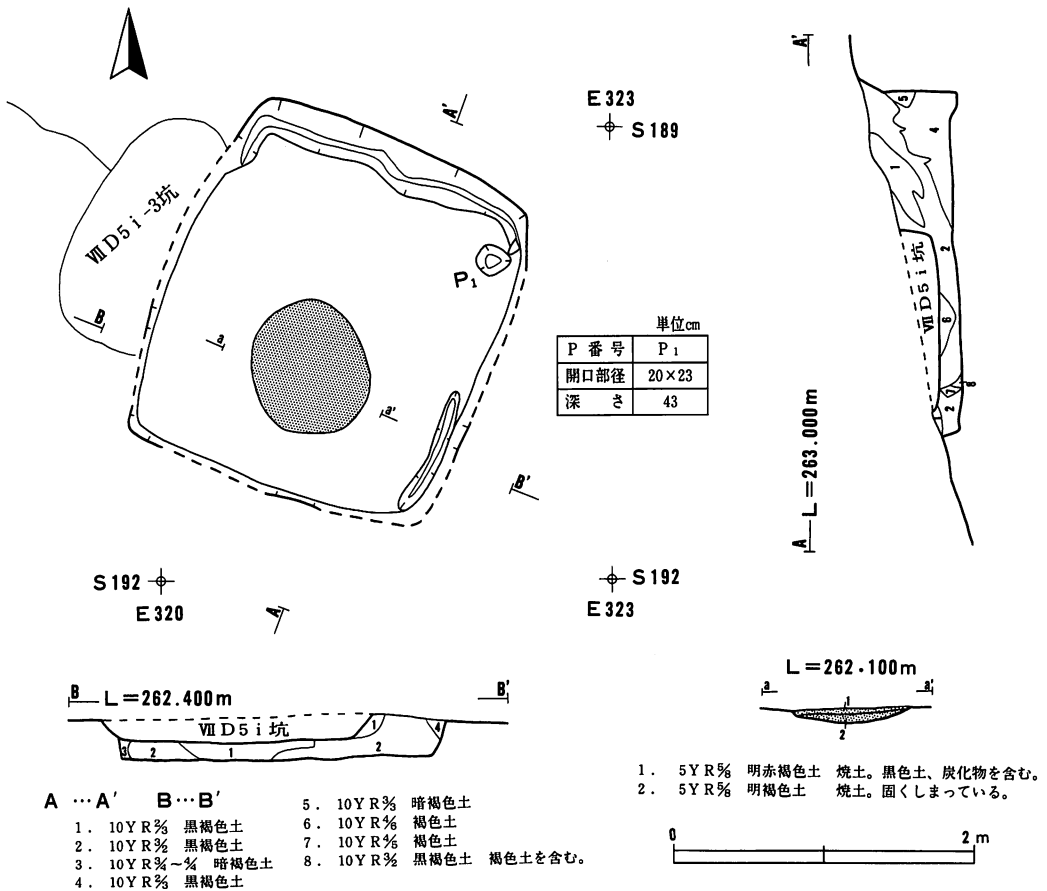
住居跡があり、本住居の埋土中にⅦD5 i 土坑がつくられる。重複が多いことから壁を確認できず、北壁を除き掘りすぎてしまった。埋土観察用ベルトで立ち上がりを確認して、範囲をとらえている。新旧関係を図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD5 i 土坑 ← ⅦD5 i 住居跡 ← ⅦD5 i - 2 住居跡 ← ⅦD5 i - 3 住居跡 (旧)
 ← ⅦD5 i - 3 土坑 ← ⅦD4 h - 4 住居跡

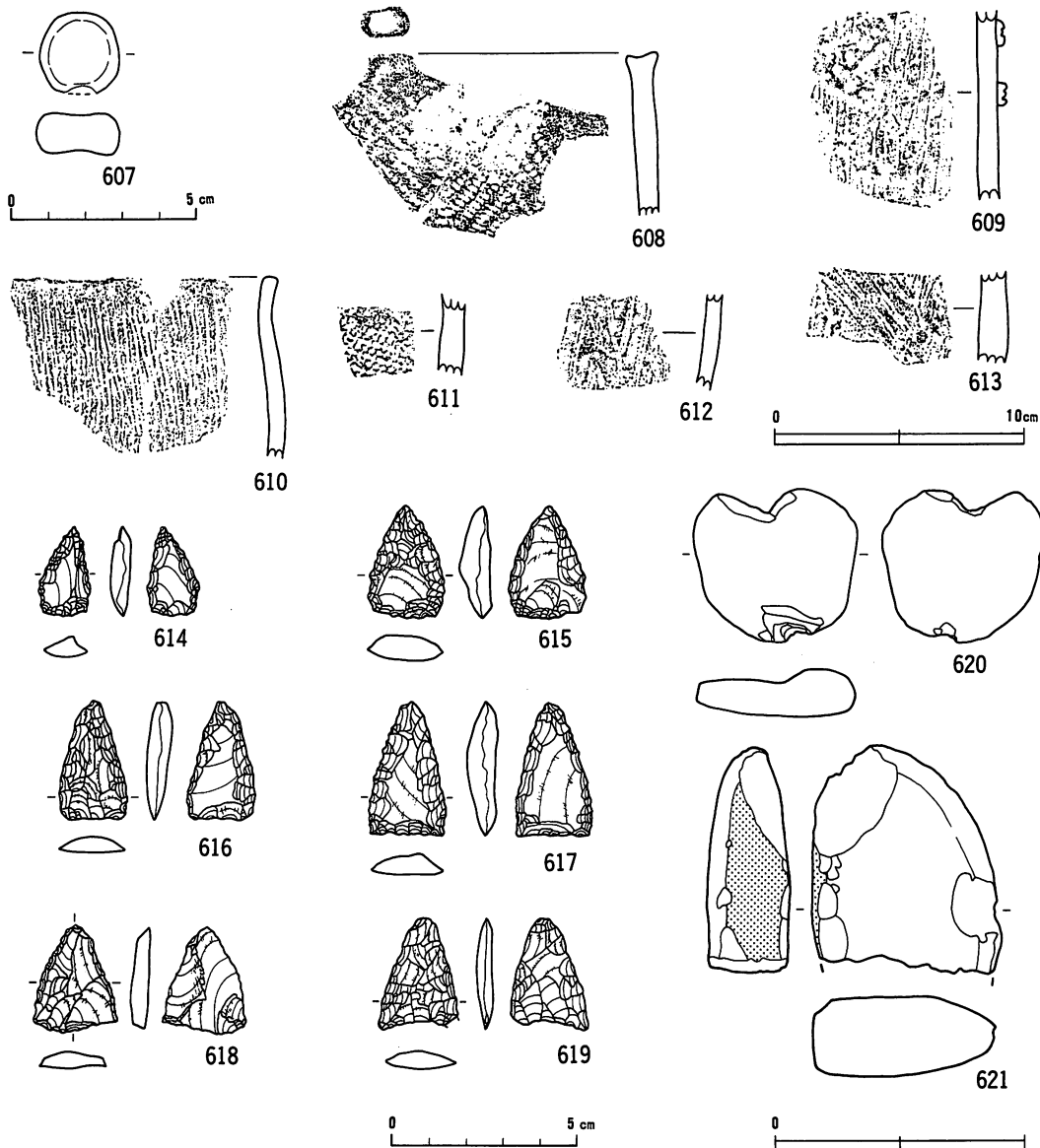
<形状・規模> やや南北に長い方形である。規模は、東西 2.3m 南北 2.5m である。

<壁・壁高> 北壁は基盤層である黄褐色土で固く締まる。ⅦD5 i - 3 土坑と重複する西壁部分では、暗褐色土を壁土として厚さ 7~8cm 程度貼っているように観察された。壁高は東壁 26cm、西壁 27cm、南壁 11cm、北壁 55cm である。

<埋土> 黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。埋土上部はⅦD5 i 土坑に切られる。



第139図 ⅦD5 i 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	長さ	幅	厚さ	備考	分類	写真
607	VII D 5 i 住	埋土	土製品(無文)		2.2	2.2	1.1			176
608	VII D 5 i 住	床直上	波状口縁。頂部やや凹む装飾物。	R L。					II 6 a ウ	176
609	VII D 5 i 住	床直上	縦位鋸歯状隆帯上に竹管刺突。	R 燃糸文。					II 6 b ア	176
610	VII D 5 i 住	床直上		L 燃糸文。					II 6 b カ	176
611	VII D 5 i 住	床直上		組紐。				繊維わずかに混入	II 2 a	176
612	VII D 5 i 住	床直上		R 2 条木目状燃糸文。					II 6	176
613	VII D 5 i 住	床直上		L + R の木目状燃糸文。				厚手。	II 6	176

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
614	VII D 5 i 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	笨石西部	2.3	1.4	0.6	1.41		I 2	176
615	VII D 5 i 住	Q1埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	笨石西部	3.0	2.0	0.7	4.10		I 2	176
616	VII D 5 i 住	Q1埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.2	1.8	0.6	3.06		I 2	176
617	VII D 5 i 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	笨石西部	3.6	2.1	0.8	5.03	先端部厚みがある。	I 2	176
618	VII D 5 i 住	Q1埋土	不定形石器	珪質泥岩	笨石西部	2.8	2.3	0.5	3.03		VI	176
619	VII D 5 i 住	Q1埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	2.1	0.5	2.15		II b 2	176
620	VII D 5 i 住	埋土ベルト	石鏃	砂質粘板岩	北上山地	6.1	6.6	1.9	100		I	176
621	VII D 5 i 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(8.4)	7.5	3.0	(290)	欠損品。	II a 1	176

第140図 VII D 5 i 住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、ほぼ水平で平坦である。柱穴は北東隅に1個検出された。規模は径20cm深さ42cmである。周溝が北壁際および東壁際の一部に巡る。幅10～15cm深さ4～6cmである。

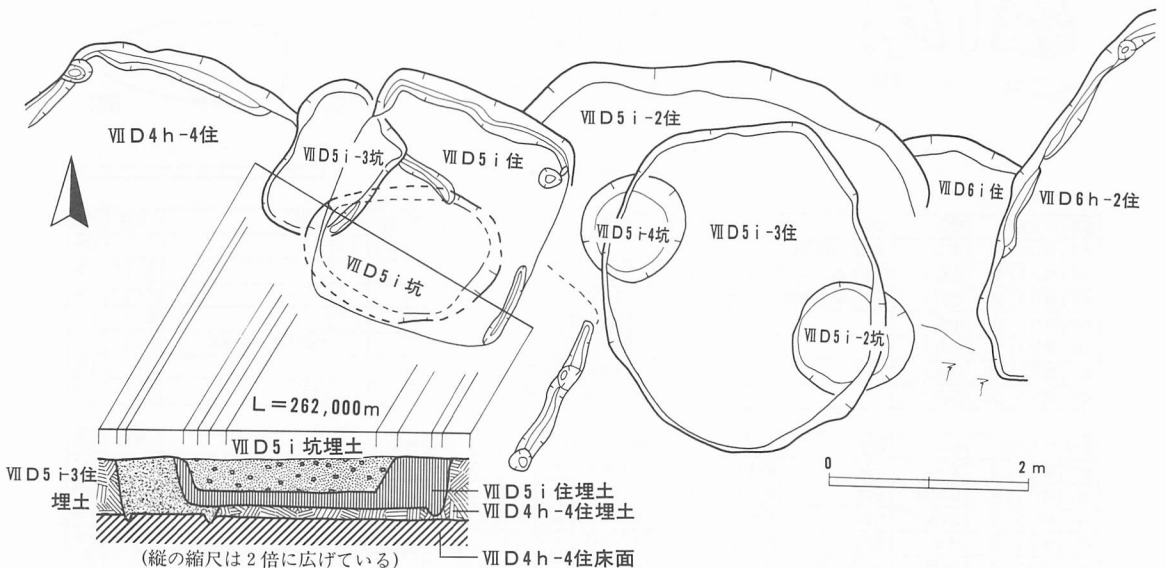
〈炉〉中央よりやや南に地床炉を1基検出した。焼土は84×86cmの不整な円形に分布し、厚さは最大10cmで、断面形はレンズ状である。上部には細かな炭化物がのりやや軟質であるが、下位はすこぶる固い。

遺物（第140図、写真図版176）

〈土器〉床直上から330g、埋土から2657g出土した。607は本遺跡では唯一の円形の土製品である。608は弁状突起が縮小化したような突起を有する。609は隆帯が剥落して一部のみ残存しているが、円形竹管が刺突された鋸歯状隆帯が垂下している。他に埋土から、木目状擦糸文、擦糸文、縦位綾絡文、重層する横位綾絡文の破片が出土した。

〈石器〉614は石鏃としたが、裏面の加工は未製品の印象がある。617の尖頭部は厚みがありやや鈍い。図示した他にUフレ3点（うち床面1点）、フレーク35点（同7点）が出土している。

時期 重複関係と床直上破片資料から、縄文時代前期後葉に属するものと推定される。



第141図 VII D 4 h～VII D 5 i グリッド遺構群重複関係

ⅦD 5 i - 2 住居跡 (遺構番号66)

遺構 (第142図、写真図版46)

〈検出状況〉西尾根の南麓旧道路下斜面に位置する。基盤層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。

西壁はⅦD 5 i 住居跡に切られる。本住居の床下からⅦD 5 i - 3 住居跡が検出されている。東側でⅦD 6 i 住居跡と重複するが、同住居との新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉詳細は不明であるが、不整円形と推定される。規模は残存値で、3.2×4.25 m である。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まっていおり、外傾する。壁高は西壁23cm、北壁37cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、上位には木根による攪乱がある。壁際には壁の崩落土が混入する。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 5 i - 3 住居跡の埋土中にあり、固く締まっている。径5 mmの粒状の炭化物を含んでいる。検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は48×60cmの楕円形の範囲に分布し、厚さは3 cmである。中央部は木根により攪乱されている。

遺物 (第142図、写真図版176)

〈土器〉床面から木目状捺糸文の破片102 g、埋土から網目状捺糸文、木目状捺糸文の破片390 g が出土した。地文のみの小片のため図化は割愛した。

〈石器〉622の他、フレーク13点が埋土から出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代後葉に属すると推定される。

ⅦD 5 i - 3 住居跡 (遺構番号67)

遺構 (第143図、写真図版47)

〈検出状況〉ⅦD 5 i - 2 住居跡の床面下から黒褐色土の落ち込みとして検出された。本住居の床面下からは、ⅦD 5 i - 2 土坑が検出されている。

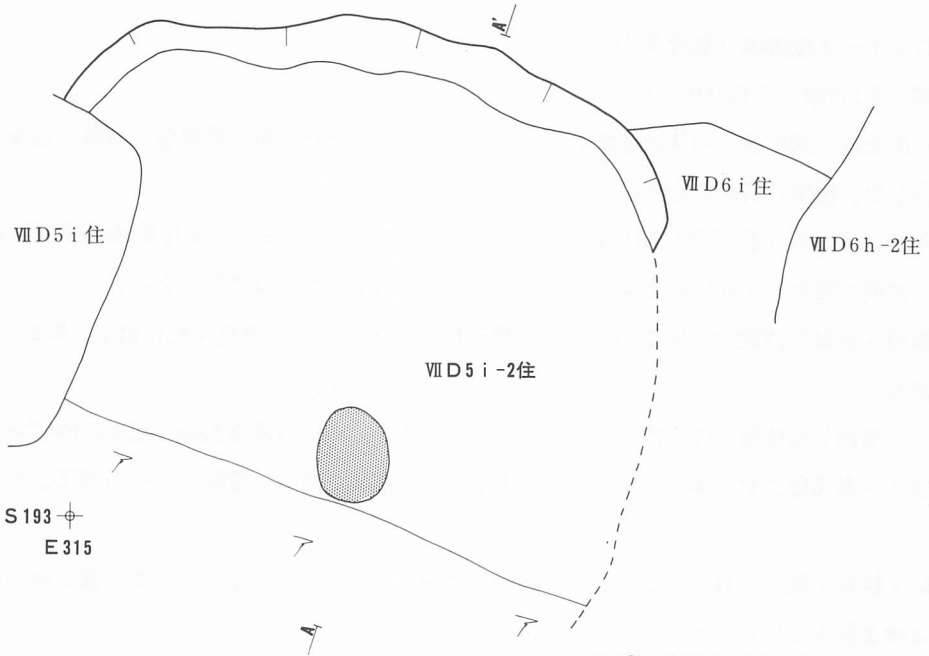
〈形状・規模〉楕円形に近い不整円形で、短軸2.8m長軸3.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっている。壁高は、東壁20cm、西壁10cm、南壁4 cm、北壁17cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、壁から40cm程内側には暗褐色土が堆積する。固く締まり、全体に炭化物を粒状に含む。

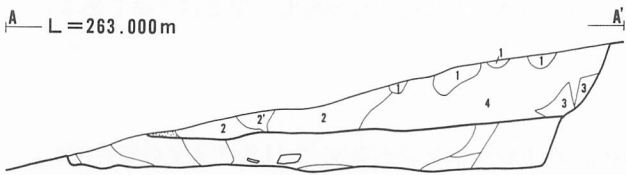
〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く、ほぼ平坦である。南壁よりは8～10cm程度高い平坦部がある。柱穴は2個検出された。いずれも北壁際に位置し、規模はほぼ等しい。埋土は締まりを欠

E 319
 ⊕ S 189

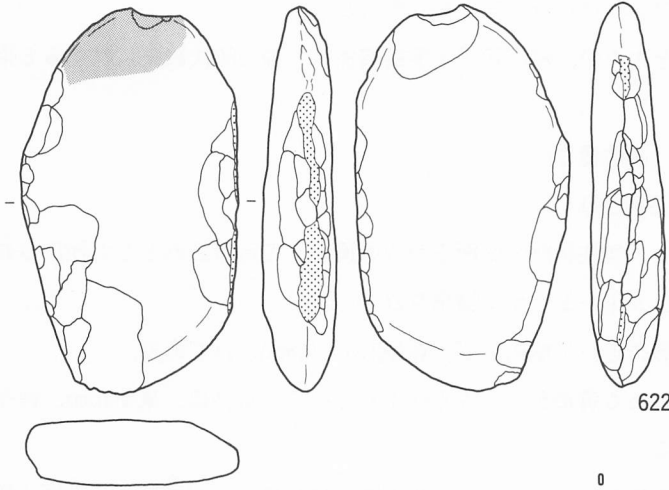
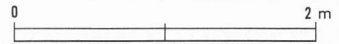


S 193 ⊕
 E 315

A — L = 263.000m



1. 10Y R 2/6 暗褐色土 しまりなし。
 1'は1層より固い。
2. 10Y R 2/6 黒褐色土 固くしまっている。パミスを含む。
 2'は2層に褐色土を含む。
3. 10Y R 2/6 ~ 2/8 暗褐色土 崩落土。
4. 10Y R 2/6 ~ 2/8 黒褐色土 固くしまっている。

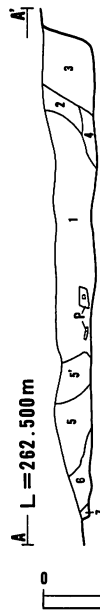
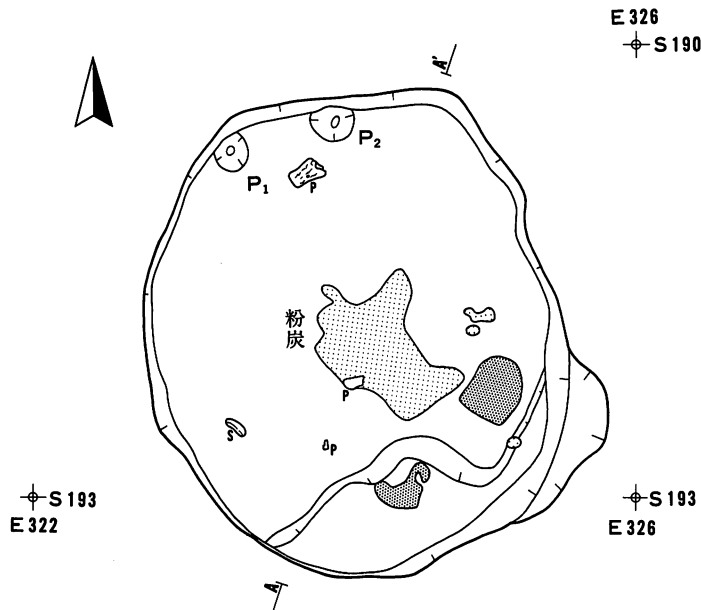


番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
622	VII D 5 i - 2 住	埋土上位	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	15.2	8.6	2.5	490	挟り有り。タール付着。	III b 2	176

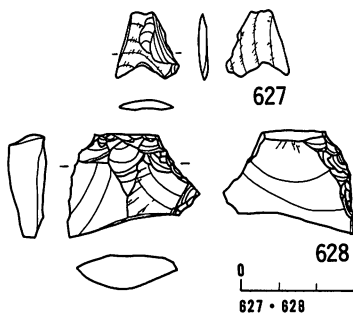
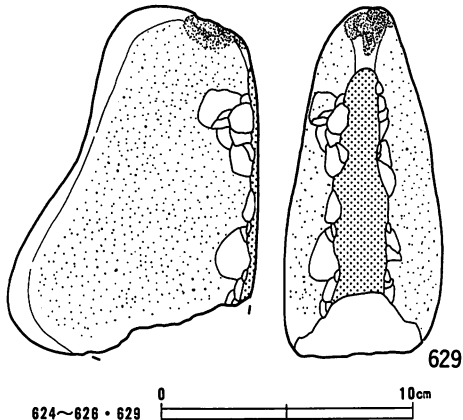
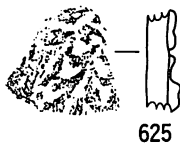
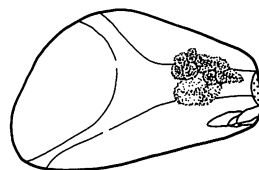
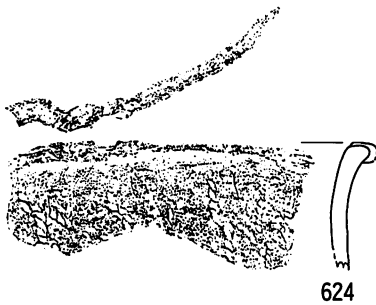
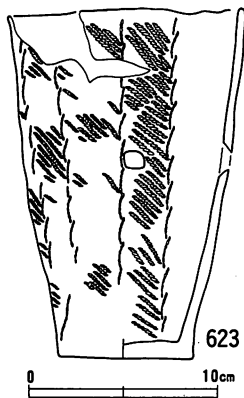
第142図 VII D 5 i - 2住居跡・出土遺物

単位cm

P 番号	P ₁	P ₂
開口部径	20×26	23×26
深 さ	51	44
埋 土	10Y R 5/1 赤褐色土	同 左



1. 7.5Y R 5/1 黒褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
2. 7.5Y R 5/1 暗褐色土 しまりあり。焼土粒を含む。
3. 7.5Y R 5/1 黒褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
4. 10Y R 5/1 明黄褐色土 しまりあり。焼土粒、炭化物を含む。
5. 7.5Y R 5/1 暗褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
- 5'は、5層に褐色土ブロックを含む。
6. 7.5Y R 5/1 暗褐色土 固くしまっている。焼土粒を含む。
7. 7.5Y R 5/1 黒褐色土 しまりあり。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
623	VII D 5 i-3 住	床直上		L R 縦、縦位綾絡文。	12.6	7.2	18.7		II 6 bカ	177
624	VII D 5 i-3 住	埋土	L R 縦。	L R 縦。片結び縦位綾絡文。					II 6 aア	177
625	VII D 5 i-3 住	Q4埋土	陸帯上に篋状工具による斜め方向からの刺突。	R 燃糸文。						177
626	VII D 5 i-3 住	床面		R 網目状燃糸文。						177

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
627	VII D 5 i-3 住		石鏃	硬質泥岩	磐石西部	1.8	1.7	0.2	0.58		I a 2	177
628	VII D 5 i-3 住	Q4埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	2.7	3.5	1.0	8.69	折断面あり。	I a 1	177
629	VII D 5 i-3 住	床直上	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(12.7)	1.6	5.5	(940)	+ 敲石。平滑面2面。		177

第143図 VII D 5 i-3住居跡・出土遺物

く10YR3/4暗褐色土である。

〈炉〉焼土は3箇所検出された。断面観察では、厚さ2cm程度で発色も淡いもので、一定期間同一場所で火を使用した痕跡とはいえない。中央部には細炭・粉炭が分布する。樹種はクリとケヤキである。

遺物(第143図、写真図版177)

〈土器〉床面から623他88g、埋土からは1272g出土している。623は北側の床面に横倒しの状態で出土したものである。縄端を結束した2段の縄で器面全体に施文している。胴部のほぼ中央部に孔が穿たれるが、焼成後のものである。内側がより剥がれていることから、外側から力が加えられたものと考えられる。全体に薄手で内面の剥落が激しい。624は口唇部を平坦になで、やはり平坦な粘土紐を鋸歯状に貼り付けたものである。625は横位隆帯とそこから左右両側に斜走する隆帯からなるが、先端がやや三角形状の筥状工具によって斜位刺突されている。他は木目状撚糸文、網目状撚糸文の地文のみの破片である。

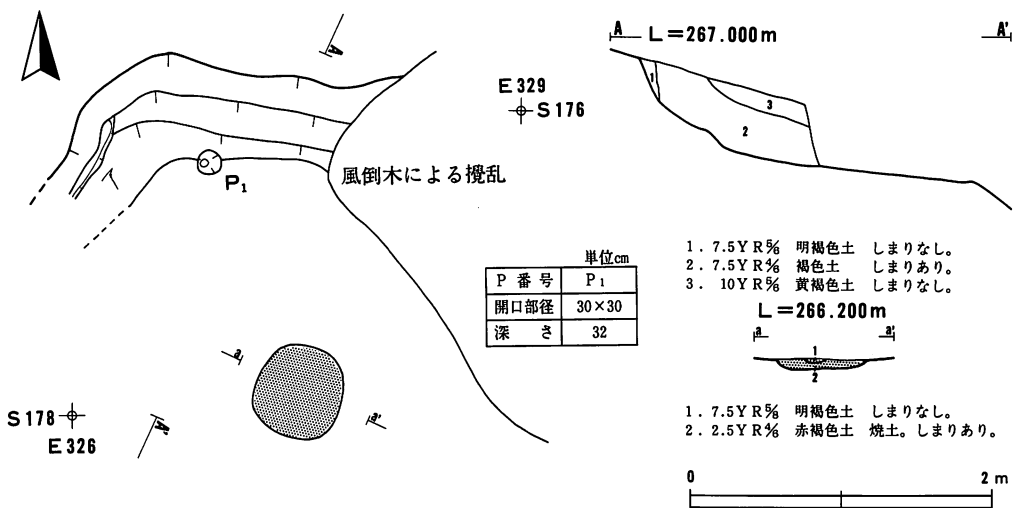
〈石器〉627は石鏃の未成品かと思われる。埋土上位から半円状花崗岩質岩が1点、フレークが13点出土している。

時期 床面出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

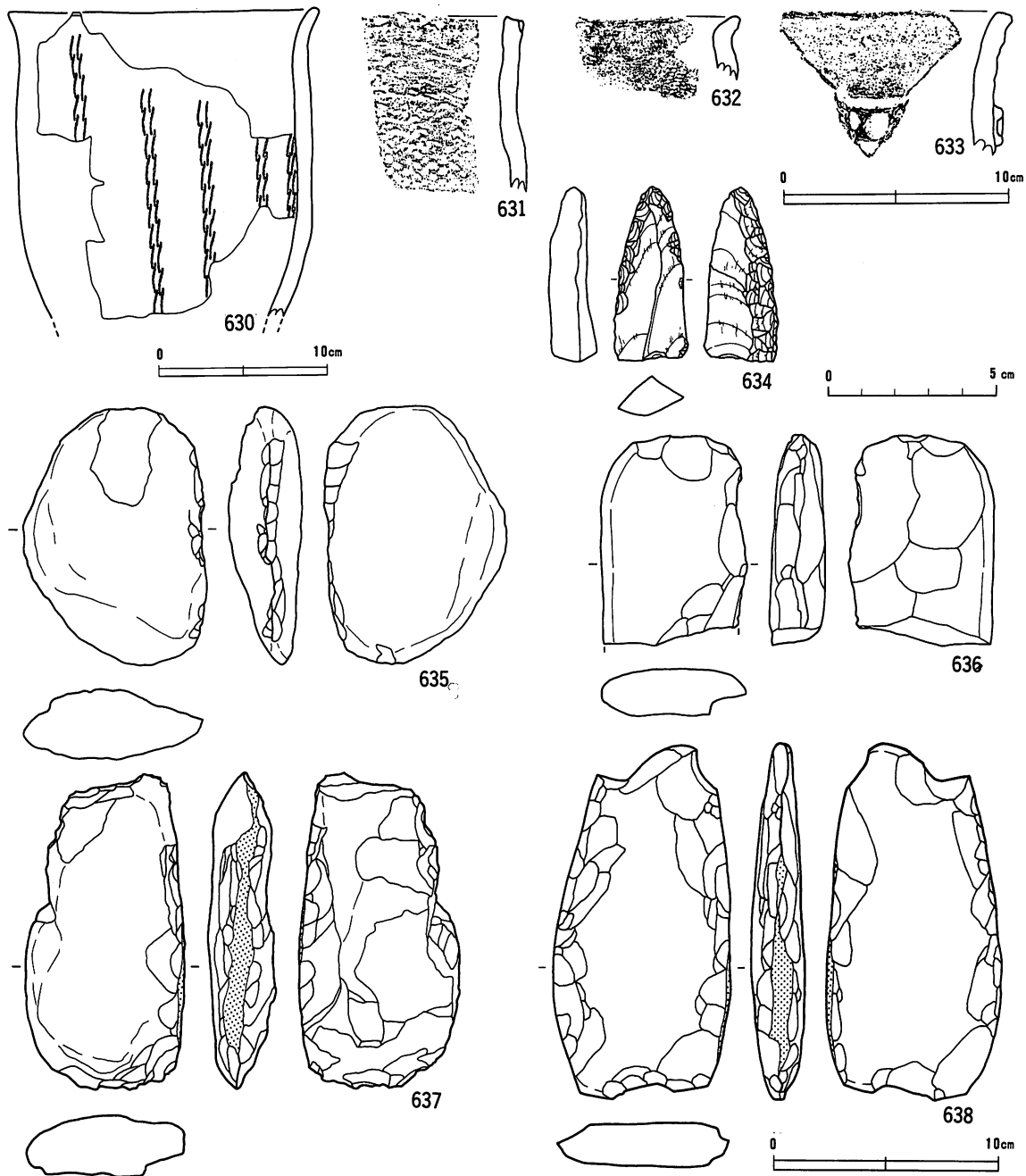
VII D 6 f 住居跡(遺構番号68)

遺構(第144図、写真図版47)

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、斜面



第144図 VII D 6 f 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
630	VII D 6 f 住	埋土		縦位縦結文 (2条1単位)	(18.4)	-	(18.3)			177
631	VII D 6 f 住	埋土	口唇端右からの刻み。口縁部 r (節不明瞭) 縦結文。	組紐。						177
632	VII D 6 f 住	埋土下位	液状口縁。金魚鉢形の器形か。	R L 縦。						177
633	VII D 6 f 住	埋土	隆帯上に指頭状圧痕。口縁部はナデにより無文。						III 1	177

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
634	VII D 6 f 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	平石西部	5.2	2.2	1.2	12.36	側面観が鋸歯状となる。	I b 2	177
635	VII D 6 f 住	埋土	敲磨器類 A 群	凝灰質千枚岩	北上山地	11.6	8.1	3.3	330		II c 2	177
636	VII D 6 f 住	埋土下位	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	(9.1)	6.4	2.1	(180)		III c 2	177
637	VII D 6 f 住	埋土	敲磨器類 A 群	凝灰質千枚岩	北上山地	14.1	7.1	3.0	380		III b 3	177
638	VII D 6 f 住	埋土	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	15.4	7.9	2.0	390	抉り有り。	III b 3	177

第145図 VII D 6 f 住居跡出土遺物

上方において基盤層の立上りを確認し、住居として認定した。東側は倒木痕により攪乱を受けている。西側は、平面的な検出ができなかったことから掘りすぎてしまった。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。方形ないしは長方形を基調とするものか。規模は残存値で2.5×3.3mである。

〈壁・壁高〉北壁は基盤層、西壁は上位は暗褐色土層で下位は基盤層である。若干段差があり、緩やかに立ち上がる。壁高は、北壁62cm、西壁38cmである。

〈埋土〉よく締まった褐色土を主体とし、壁際は締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿って緩く傾斜し最大比高20cmである。北側は基盤層を、南側は暗褐色土層を床面とする。北西隅に、柱穴が1個検出された。

〈炉〉地床炉が1基検出された。焼土は58×62cmの不整円形状に分布し、厚さは最大7cmである。上位に一部攪乱があるものの、床面が強く焼成を受けたもので固く締まっている。

遺物（第145図、写真図版177）

〈土器〉埋土から2100g出土した。630は器面全体に横方向にハケメ状の調整が見られる。2条1単位の綾絡文を縦位に施文する。綾絡文の周囲に短い斜縄文が僅かに観察されるようにも見えるが、不明瞭であり図示はしていない。他に木目状捺糸文、網目状捺糸文の破片が出土した。

〈石器〉634は側面観がやや鋸歯状となる。

時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から中期初頭の範囲に属すると考えられる。

VII D 6 g 住居跡（遺構番号69）

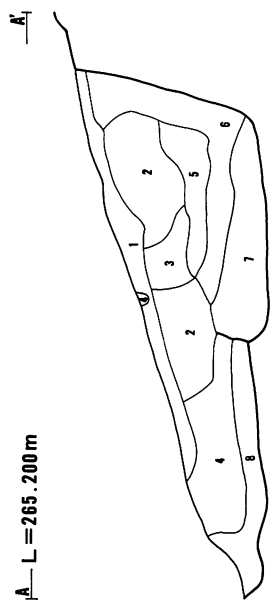
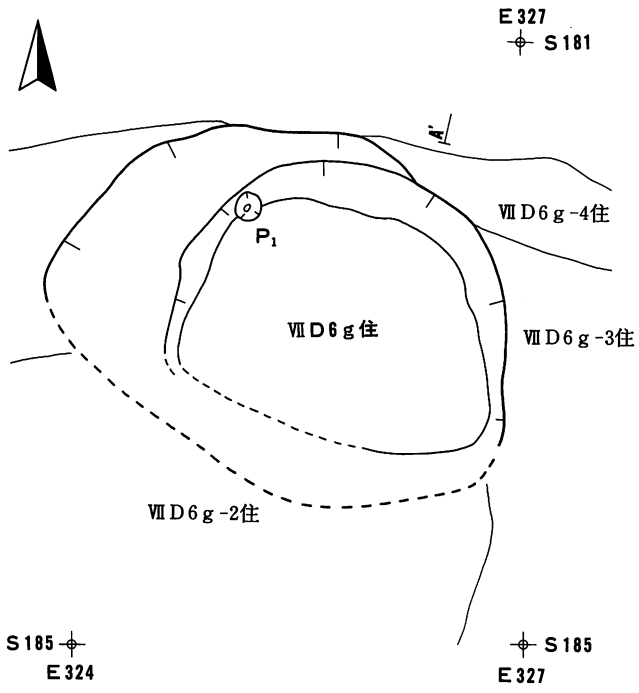
遺構（第146図、写真図版48）

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。VII D 5 g-3住居跡、VII D 6 g-2住居跡、VII D 6 g-3住居跡、VII D 6 g-4住居跡と重複する。それらどの住居よりも新しいと考えられる。

〈形状・規模〉床面は不整な台形状で、規模は1.9m×3.2mである。

〈壁・壁高〉下位は基盤層である黄褐色土を、上位は暗褐色土層および重複する住居の埋土を壁とする。北壁はほぼ直立し、東壁と西壁は緩やかに立ち上がる。南壁は一旦直立した後、段をもって立ち上がるのがベルトで確認された。壁高は東壁103cm、西壁112cm、南壁30cm、北壁138cmである。

〈埋土〉上半部は締まりを欠く暗褐色土を主体とし、中間に固い黄褐色土がブロッジ層をつくる。壁際から埋土下位にかけては崩落土と思われる褐色土層で、最下位は暗褐色土で固く締まっている。

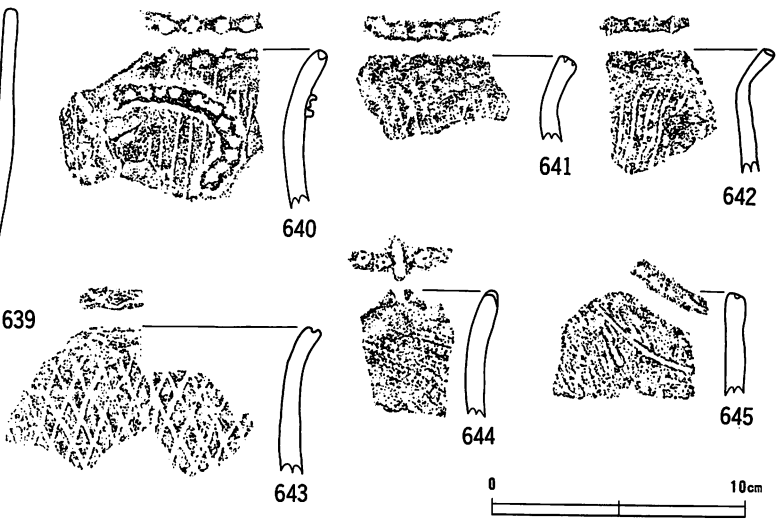
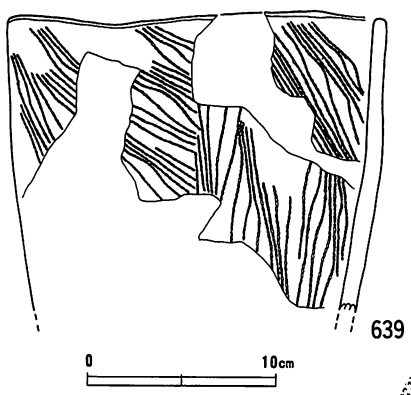
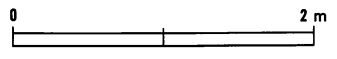


- しまりなし。小角礫を含む。
 しまりなし。小角礫を含む。
 しまりなし。小角礫を含む。
 しまりあり。黄緑色土をブロック状に含む。
 固くしまっている。小角礫を含む。
 しまりあり。
 しまりあり。小角礫を含む。
- 褐色土
 暗褐色土
 黄褐色土
 暗褐色土
 褐色土
 暗褐色土
 褐色土
1. 10YR 6/4
 2. 10YR 6/4
 3. 10YR 6/4
 4. 10YR 6/4
 5. 10YR 6/4
 6. 10YR 6/4
 7. 10YR 6/4
 8. 10YR 6/4

S 185 E 324

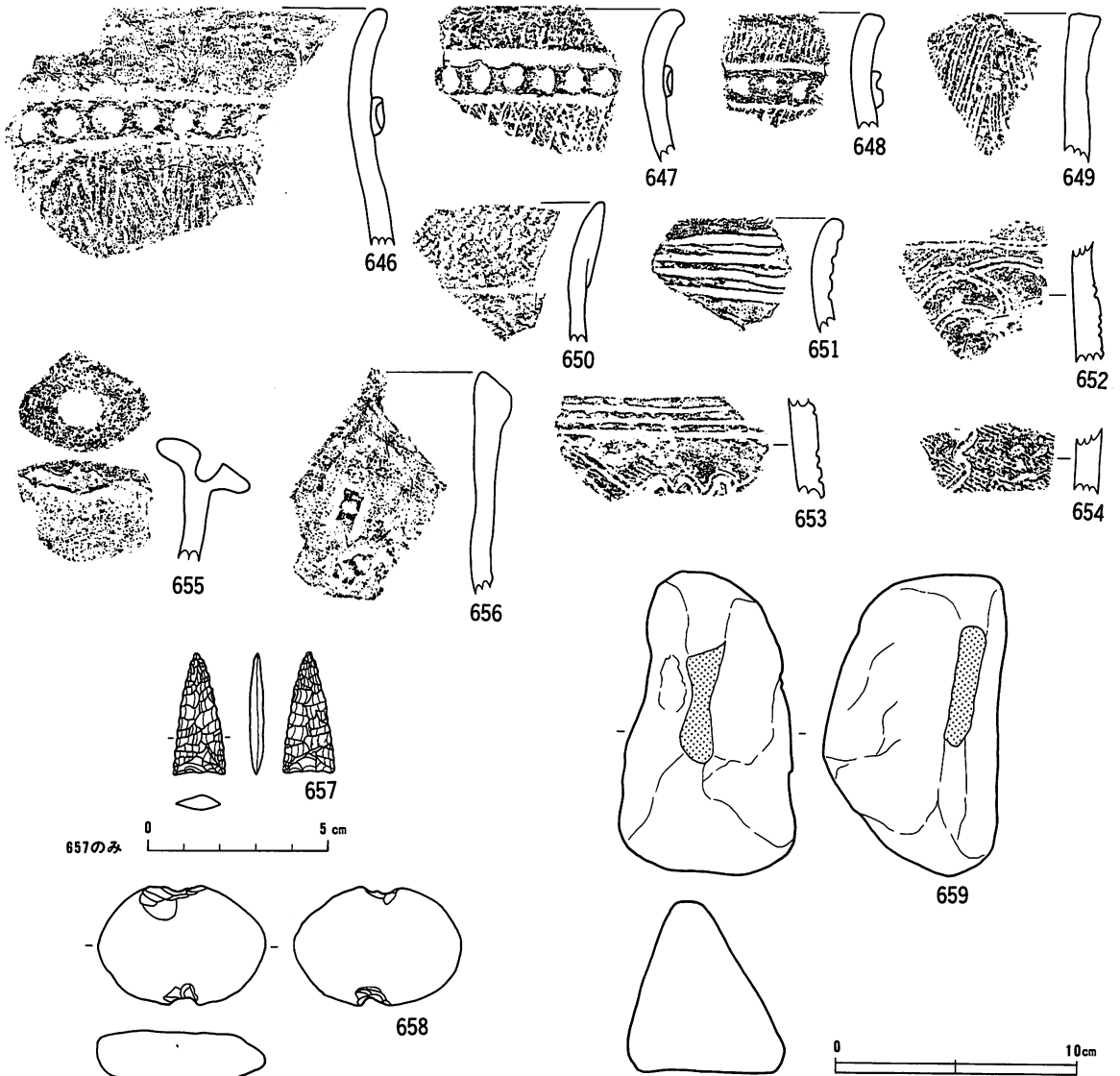
単位cm

P 番号	P ₁
開口部径	17×20
深さ	13



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
639	VII D 6 g 住	埋土		R 燃系文。	(20.2)	-	(16.0)		II 6 b 力	178
640	VII D 6 g 住	埋土	口唇部竹管刺突。隆帯上竹管刺突。	R 燃系文。				隆帯刺落。	II 6 b 7	178
641	VII D 6 g 住	埋土	口唇部竹管刺突。	R 網目状燃系文。					II 6	178
642	VII D 6 g 住	埋土	口唇部指頭状圧痕。	L 燃系文。					II 6 b 才	178
643	VII D 6 g 住	埋土	口唇部網目状燃系文 (胴部と同じ原体)。	L 網目状燃系文。					II 6	178
644	VII D 6 g 住	埋土	波状口縁。頂部 2 山。口唇部竹管刺突。	R L 横。0 段多条。					II 6	178
645	VII D 6 g 住	埋土	波状口縁。口唇部竹管による右方向からの斜位刺突。沈線 (凹線)。	L R 縦。						178

第146図 VII D 6 g 住居跡・出土遺物(1)



番号	Ⅶ出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
646	ⅦD 6 g 住	東西ベルト埋土	隆帯上指頭状圧痕。	r (又はあまいR) 2条木目状				661と同一個体?	Ⅱ6bイ	178
647	ⅦD 6 g 住	埋土	隆帯上左方向からの指頭状圧痕。	L網目状燃糸文。					Ⅱ6bイ	178
648	ⅦD 6 g 住	埋土	隆帯上、木端が内外の彫状工具による右方向からの縦位線状(三角彫痕)。	R燃糸文。					Ⅱ6bイ	178
649	ⅦD 6 g 住	埋土	波状口縁。頂部やや肥厚し平坦。	L木目状燃糸文。					Ⅱ6aイ	178
650	ⅦD 6 g 住	埋土	複合口縁。口唇部LR横筋文後縁位の側面圧痕。	L R縦。					Ⅱ1bイ	178
651	ⅦD 6 g 住	埋土	沈線(凹線)。						Ⅱ7	178
652	ⅦD 6 g 住	埋土	半截竹管平行沈線。						Ⅱ7	178
653	ⅦD 6 g 住	埋土	沈線(凹線)。半截竹管平行沈線波状文。	R L横。				654と同一個体。	Ⅱ6aウ	178
654	ⅦD 6 g 住	埋土	半截竹管平行沈線波状文。	R L横。				653と同一個体。		178
655	ⅦD 6 g 住	埋土ベルト	口縁部円文裝飾体。						Ⅱ7	178
656	ⅦD 6 g 住	埋土	大波状口縁。隆帯上爪形圧痕。						Ⅱ7	178

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
657	ⅦD 6 g 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.3	1.4	0.4	1.37	抉りの部分が小さい。	Ⅱa 2	178
658	ⅦD 6 g 住	埋土	石鏃	チャート	北上山地	4.9	7.0	2.1	100		Ⅱ	178
659	ⅦD 6 g 住	ベルト埋土	敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	12.6	7.3	7.0	830	磨面2面。	I a 1	178

第147図 ⅦD 6 g 住居跡出土遺物(2)

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く、ほぼ水平で平坦である。柱穴は北西隅に1個検出された。規模は径20cm深さ13cmである。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第146・147図、写真図版178）

〈土器〉埋土から8100g出土した。640～645は口唇部にも施文されたものである。640は円形竹管刺突が施された馬蹄形の隆帯が口頸部に貼り付けられる。643は胴部地文と同じ減退によって押圧されたものであろう。644は波状口縁頂部を棒状工具で刻みを入れて2山にしたものである。646～648はタガ状に巡る隆帯を有するものである。651～654は竹管を主体とする施文である。656は平らな隆帯を口縁に沿って貼り付けたものと思われるが剥落している。上面観が変形花卉状口縁を呈する。他に多軸絡条体、横位の羽状縄文などの破片が出土した。

〈石器〉図示した他にUフレ1点が埋土から出土した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から中期初頭に属すると思われる。

ⅦD 6 g - 2 住居跡（遺構番号70）

遺構（第148図、写真図版48）

〈検出状況〉小角礫含みの暗褐色土層上面でⅦD 6 g 住居跡と同時に検出された。当初は、同一の住居と想定して精査に入ったが、床面および埋土断面の観察から2棟の重複であり、本住居の方が先行することが分かった。

他に、北西部分でⅦD 5 g - 3 住居跡と、東側でⅦ 6 g - 3 住居跡・Ⅶ 6 g - 4 住居跡と、南側でⅦD 5 g - 2 住居跡・ⅦD 5 g - 2 土坑と重複する。埋土断面観察から、本住居跡はⅦD 5 g - 2 住居跡より新しい。他の遺構との新旧関係は不明である。

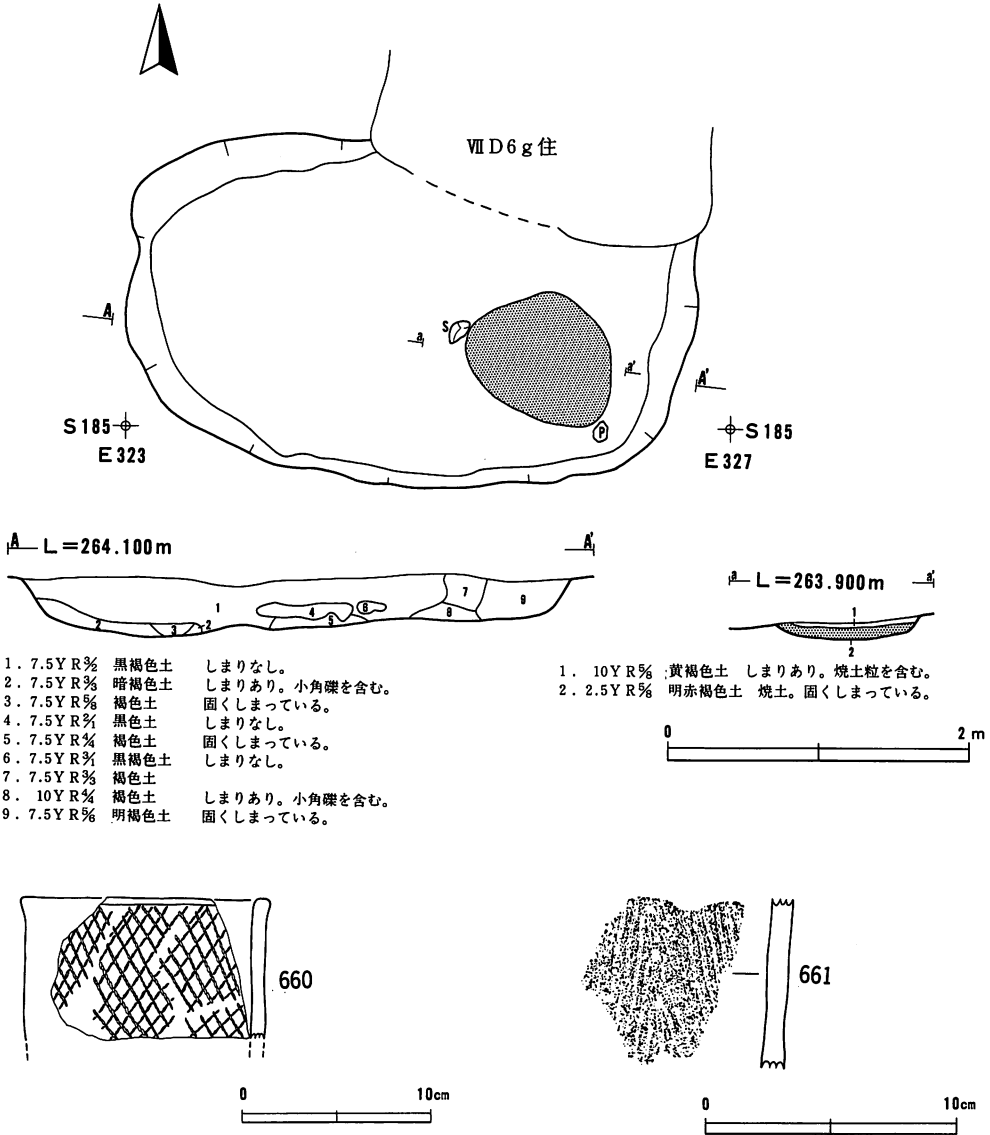
〈規模・形状〉北側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は長軸3.7m、短軸2.2mである。

〈壁・壁高〉北壁の一部はⅦD 6 g 住居跡によって切られている。他は小角礫含みの暗褐色土で外傾する。壁高は東壁17cm、西壁25cm、南壁32cm、北壁64cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で、小さな凹凸があるが、ほぼ水平である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉南東寄りに地床炉を1基検出した。焼土は82×106cmの楕円形の範囲に分布し、厚さは8cmで、断面形がレンズ状である。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部口径	器高	備考	分類	写真
660	Ⅶ D6 g -2住	床面		L 網目状燃糸文	(13.2)	-	(7.5)		II 6	179
661	Ⅶ D6 g -2住	床面		r (又はあまいR) 2 条木目状				646と同一個体?	II 6	179

第148図 Ⅶ D6 g -2住居跡・出土遺物

遺物 (第148図、写真図版179)

<土器>床面から350g出土した。660は口縁部がやや肥厚する。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

ⅦD 6 g - 3 住居跡 (遺構番号71)

遺構 (第149図、写真図版49)

〈検出状況〉ⅦD 6 g 住居跡の東壁のダメ押しで、壁と平坦部を検出し住居として認定した。本住居はⅦD 6 g 住居跡によって切られる。また、本住居の床面下からⅦD 6 g - 4 住居跡が³検出されている。図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 6 g 住居跡←ⅦD 6 g - 3 住居跡←ⅦD 6 g - 4 住居跡 (旧)

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は、残存値で2×3mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土で外傾する。壁高は、東壁22cm、北壁70cmである。

〈埋土〉上位は締まりを欠く暗褐色土、下位はやや締まる褐色土である。

〈床・柱穴・施設〉ⅦD 4 g - 4 住居跡の埋土を床面とし固く締まっており、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が¹基検出された。22×44cmの不整な楕円形状に分布する。断面形観察では、上位にレンズ状に形成された他に、更にその下からも焼土が³検出された。上位の焼土の厚さは最大8cmである。地床炉としていいものと思われる。下位の焼土の性格は不明である。

遺物 (第149図、写真図版179)

〈土器〉埋土から815g出土した。663は口縁部にやや折り返し状の部分が観察されるが³、構造的、装飾的意図は感じられない。図示した他に縦位羽状縄文、木目状燃糸文、縦位綾絡文の破片が出土している。

〈石器〉図示した他にフレーク3点(うち床面2点)が出土している。

時期 特定する資料を欠くが³、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅦD 6 g - 4 住居跡 (遺構番号72)

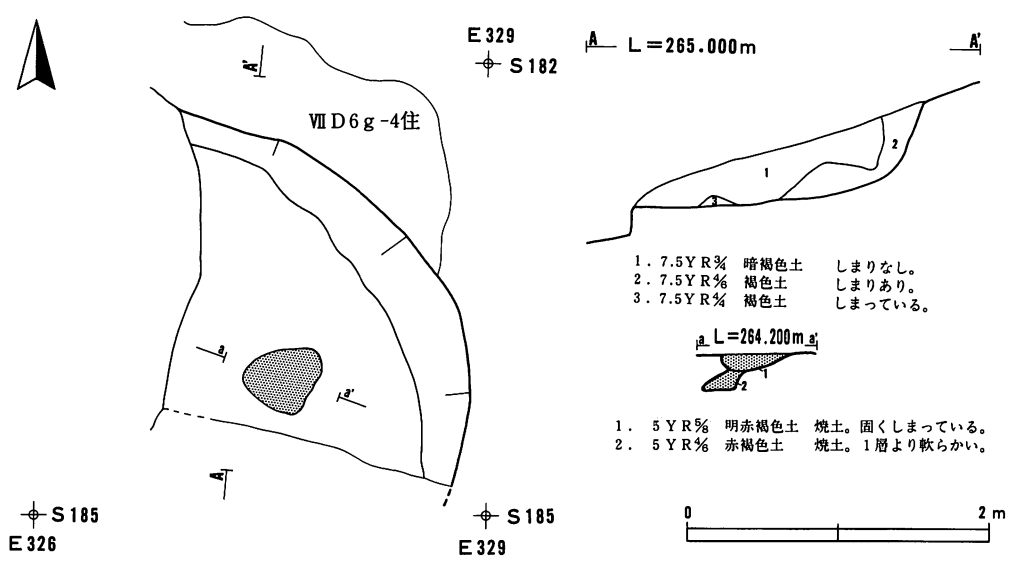
遺構 (第150図、写真図版49)

〈検出状況〉ⅦD 6 g - 3 住居跡の床面から約20cm下で、焼土および固く締まった平坦な部分と立ち上がり検出し、住居として認定した。

ⅦD 5 g - 3 住居跡と、北壁のラインが一致し、床面のレベルも等しいことから、本住居と同住居は同一のものである可能性がある。仮に同一とすれば、長軸6.7m、短軸残存値で2mの規模となる。ここでは、一応別個のものとして報告する。

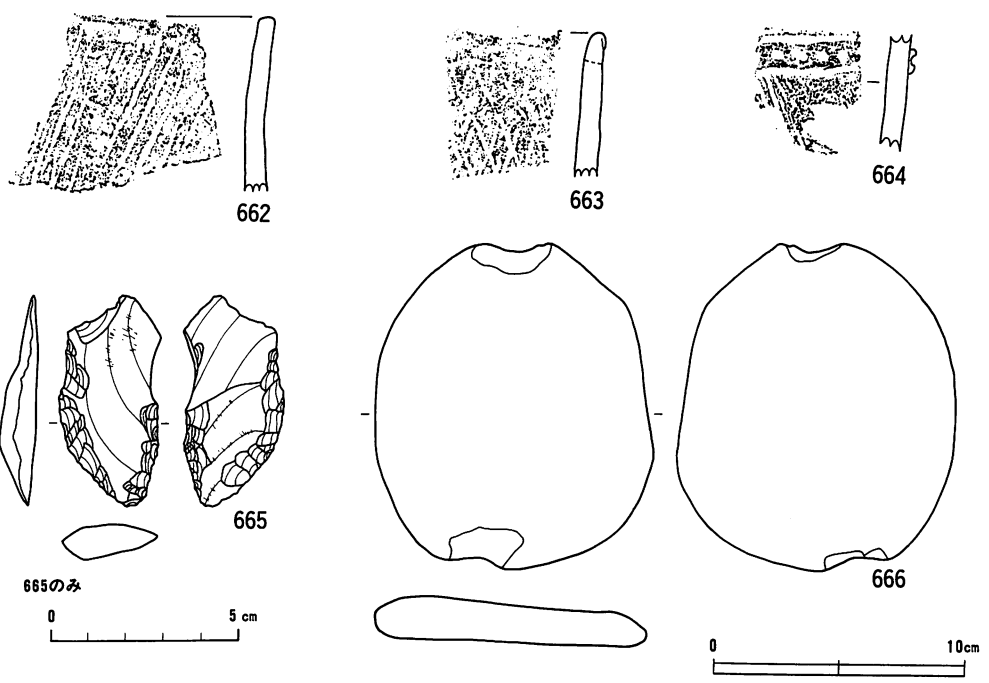
〈形状・規模〉不明であるが³、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は残存値で2×3.5mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、北壁95cm、東壁40cmである。



1. 7.5 Y R% 暗褐色土 しまりなし。
2. 7.5 Y R% 褐色土 しまりあり。
3. 7.5 Y R% 褐色土 しまっている。

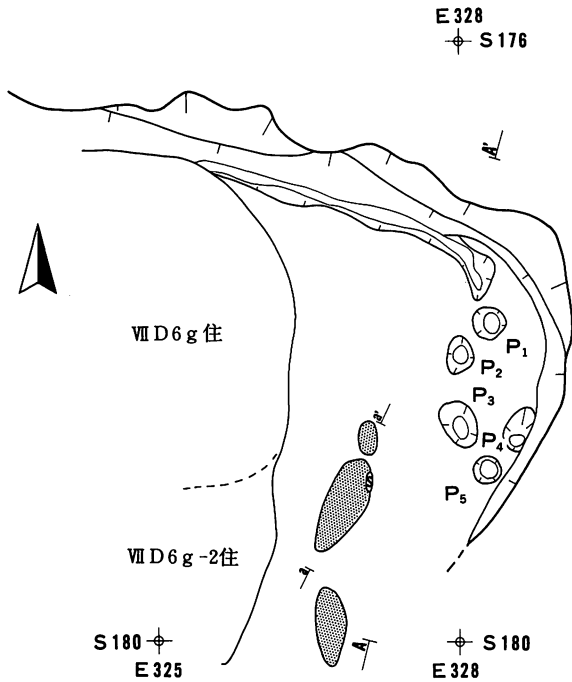
1. 5 Y R% 明赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 5 Y R% 赤褐色土 焼土。1層より軟らかい。



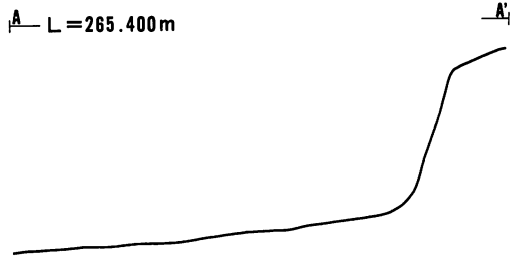
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
662	VII D 6 g -3 住	埋土		L燃糸文。					II 6	179
663	VII D 6 g -3 住	埋土	波状口縁? 複合口縁。	L R 網目状燃糸文。					II 6	179
664	VII D 6 g -3 住	埋土	隆帯上刺突(竹管かどうかは不明。刺突底面は凹凸)。	L燃糸文。						179

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
665	VII D 6 g -3 住	埋土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	5.6	2.6	0.9	11.23	右辺は使用痕かとも見える。尖頭部を形成する。	I b 2	179
666	VII D 6 g -3 住	埋土	石錘	凝灰質硬砂岩	北上山地	12.9	11.0	1.7	410		I	179

第149図 VII D 6 g -3住居跡・出土遺物



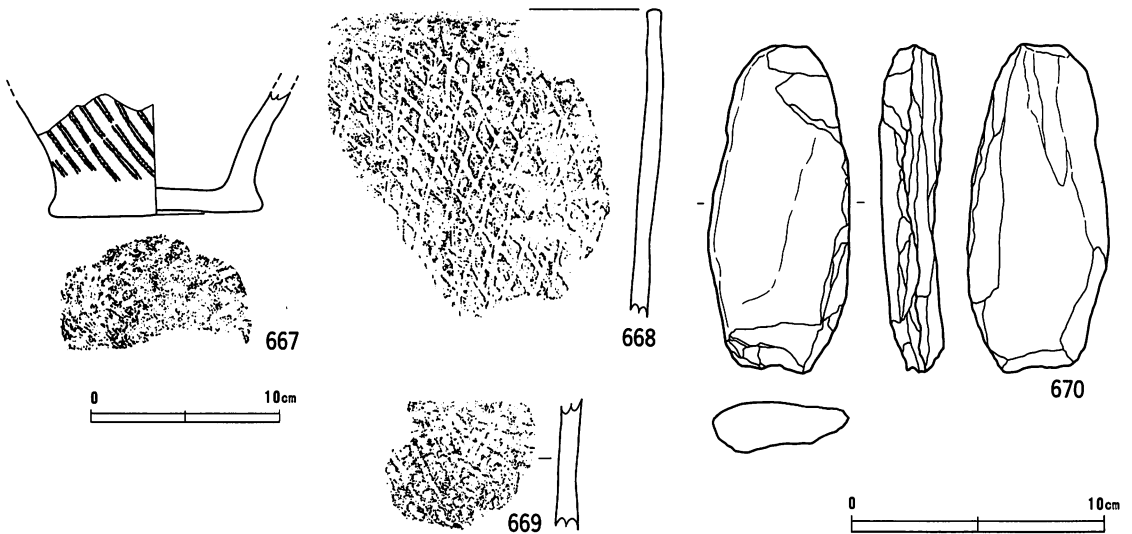
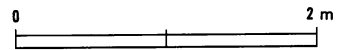
単位cm					
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	22×24	18×26	21×81	15×34	17×20
深 さ	26	19	45	26	62



a—L = 264.100 m



1. 5Y R 6/6 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 5Y R 6/6 赤褐色土 焼土。固くしまっている。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
667	VII D 6 g-4住	埋土		L + Rの木目状燃糸文。	-	(11.4)	(6.3)			179
668	VII D 6 g-4住	埋土	波状口縁?	R + rの網目状燃糸文。					II 6 bカ	179
669	VII D 6 g-4住	埋土		L RにR附加条。					II 6 bカ	179

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
670	VII D 6 g-4住	埋土	敲磨器類A群	粘板岩	北上山地	13.0	5.6	2.0	210	挟り有り。	III c 2	179

第150図 VII D 6 g-4住居跡・出土遺物

〈埋土〉4層で構成され、自然堆積の様相を示す。断面の実測図をとらないでしまった。上位は10YR 4/6 褐色土で粉炭と焼土粒を僅かに含み、層厚10cm程度。中位は10YR 5/8 黄褐色土で、層厚20～30cm。下位は10YR 4/3 にぶい黄褐色土で粉炭を僅かに含み、層厚10cm程度である。中位と下位の間に10YR 4/6 褐色土を部分的に挟む。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿って緩く傾斜し最大比高20cmである。北側は基盤層を、南側は暗褐色土層を床面とする。柱穴が5個検出された。P1とP5はしっかりした規模・形状であり主柱穴となる可能性がある。

〈炉〉焼土が3基検出された。規模の点で疑問もあるが、いずれも強い焼成をうけており、一応全て炉という想定の下に、北から南へ1号炉・2号炉・3号炉と呼称する。1号炉の焼土は13×12cmの楕円形状に分布し、厚さは最大12cmである。2号炉の焼土は26×70cmの楕円形状に分布し、厚さは最大5cmである。3号炉の焼土は22×52cmの楕円形状に分布する。3号炉の断面図をとっていないが、いずれも固く締まっている。

遺物 (第150図、写真図版179)

〈土器〉埋土から1373g出土した。667は底面が外側に張り出す。668の口縁左側がやや高いが波状口縁となるものか、あるいは単に整形上のミスか。図示した他に木目状捺糸文、縦位羽状縄文、縦位綾絡文の破片が出土している。

〈石器〉図示した他に岩手火山起源の熔岩1点が床面から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

Ⅶ D 6 h 住居跡 (遺構番号73)

遺構 (第151図)

〈検出状況〉西尾根南麓に位置する。平面的な検出はできず、土層観察用のベルト断面で壁の立上がりを確認したものの、調査の不手際により、断面図をとらないうちに掘りこんでしまった。検出が遅れたためベルト以外の大部分を掘りすぎてしまい、詳細は不明である。焼土とベルトに残った平坦部および壁の存在から、住居跡として認定したものである。

〈形状・規模〉不明である。

〈壁・壁高〉褐色土層で、固く締まっていて外傾する。壁高は、北壁27.5cmである。

〈埋土〉10YR4/4褐色土で締まりあり、径5mmの炭化物粒を含む。

〈床・柱穴・施設〉褐色土で埋土より固い。

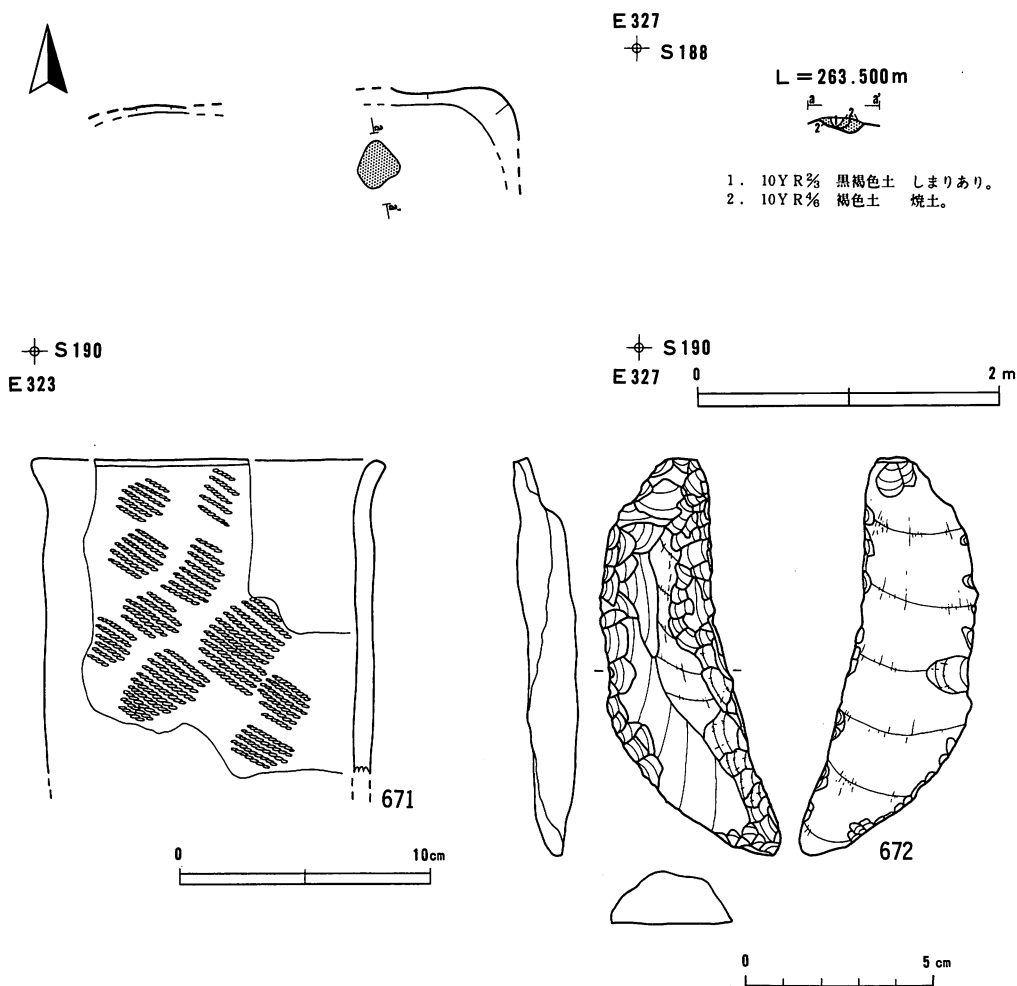
〈炉〉焼土が1基検出された。28×34cmの不整な円形に分布し、断面形がレンズ状に形成され固く締まっている。上位に攪乱がある。

遺物 (第151図、写真図版179)

<土器> 671には礫が多く混入し、内外面とも剥落している。口唇部は平らになでられ断面形は角張る。他に埋土から、網目状撚糸文の細片1点が出土した。

<石器> 672はノッチの形成が弱いので石匙には含めなかった。表に自然面を残す。図示した他にUフレ1点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと思われる。



- 1. 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。
- 2. 10Y R% 褐色土 焼土。

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
671	VII D 6 h 住	埋土		L R 縦。	(12.4)	-	(11.2)		II 6 bカ	179

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
672	VII D 6 h 住	埋土	不定形石器	珉質泥岩	磐石西部	10.6	3.5	1.4	49.85	相対する2側縁に二次加工。	I b 3	179

第151図 VII D 6 h 住居跡・出土遺物

ⅦD 6 h - 2 住居跡 (遺構番号74)

遺構 (第152図、写真図版50)

〈検出状況〉小角礫含みの暗褐色土上面で、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が不整形に分布することから検出された。南側は斜面のため流失している。

北壁でⅦD 7 i 住居跡、東壁でⅦD 8 i 住居跡と重複する。本住居の埋土断面観察から、いずれも本住居の方が新しい。ⅦD 7 i 住居跡とⅦD 8 i 住居跡は直接の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は長軸6.9m、短軸は残存値で4mである。

〈壁・壁高〉上位には暗褐色土が僅かにあるものの、下位側の大半は黄褐色の基盤層で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は東壁9cm、西壁58cm、北壁85cmである。

〈埋土〉17層に細別したが、大きくは上位暗褐色土、中位黒褐色土、下位褐色土に大別できる。全体に固く締まっており、小角礫と黄褐色土ブロックを含む。

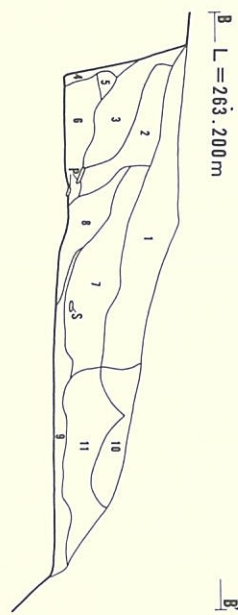
〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で固く締まり、細かな凹凸はあるがほぼ水平で平坦である。本住居と重複するⅦD 7 i 住居跡の床面から16cm下がる。

本住居の床面で柱穴を17個検出した。この中には、埋土がⅦD 7 i 住居跡に類似するものがあり、あるいは同住居に帰属する可能性も考えられる。周溝が北壁際、東壁際、西壁際に断続的に巡る。幅10～20cm、深さ10cmで、埋土は10YR 4/3 に近い黄褐色土である。西壁際より内側の周溝は、位置関係から本住居に先行するもので、建て替えをしている可能性が高い。あるいはⅦD 7 i 住居跡の深く掘られた周溝が残存したとも考えられるが、床面の比高からみて妥当かどうか疑問が残る。

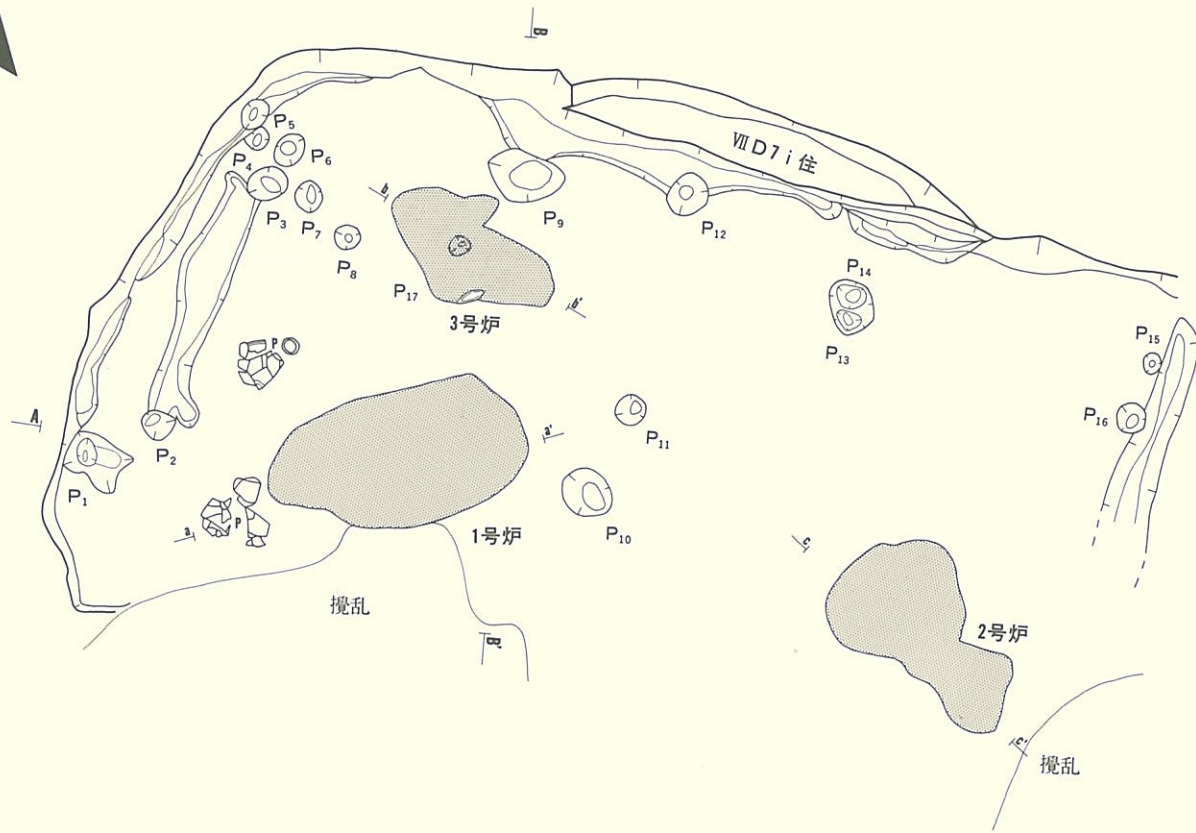
〈炉〉西寄りに2基、東寄りに1基、計3基の地床炉を検出した。西側からそれぞれ1号炉、2号炉、3号炉と呼称する。1号炉の焼土は90×175cmの楕円形の範囲に分布し、厚さは最大9cmで、断面形がレンズ状に焼成を受けている。2号炉の焼土は70×145cmの不整形に分布し、厚さは最大4cmである。断面形は2単位のレンズ形状を示すが、平面形では分離できない。本炉の下からP17が検出された。3号炉の焼土は74×120cmの範囲に分布し、厚さは最大5cmで、断面形はレンズ状である。いずれも固く締まるが、特に1号炉は強く被熱している。

遺物 (第153～155図、写真図版179～181)

〈土器〉床面から5340g、埋土から9925g出土した。673と674は同一個体である。1号炉に隣接した西南方向の床面で一括出土したものである。口縁部と胴部が接合しなかったが、底部から曲線的に外反し胴上半部で最大径となり再びすぼんで口縁直下から直立する器形である。器高は38cm程度となろう。口縁下に粘土紐を貼り付けて隆帯とし、その上に沈線と指頭圧痕を



S 193
E 326



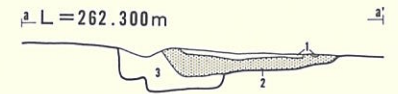
A L=263.000m



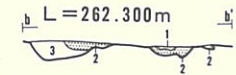
- A...A' B...B'
1. 10YR 暗褐色土
 2. 10YR 褐色土 小角礫を含む。
 3. 10YR 黄褐色土
 4. 10YR 暗褐色土
 5. 10YR 黒褐色土
 6. 10YR 黒褐色土
 7. 10YR 黒褐色土
 8. 10YR 灰黄褐色土
 9. 10YR 褐色土

10. 7.5YR 黒褐色土
11. 7.5YR 黒色土
12. 10YR 黒色土 固くしまっている。焼土粒を含む。
13. 7.5YR 黒色土 小角礫、褐色土ブロックを含む。
14. 7.5YR 黒褐色土 粘土質。固くしまっている。小角礫、褐色土ブロックを含む。
15. 10YR 褐色土 固くしまっている。小角礫、炭化物を含む。
16. 7.5YR 黒褐色土 小角礫、褐色土ブロックを含む。
17. 10YR 褐色土

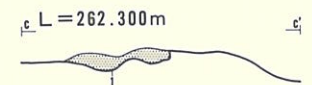
E 335
S 188



1. 5YR 赤褐色土 焼土。
2. 2.5YR 明赤褐色土 焼土。
3. 10YR 黒褐色土



1. 10YR% 灰黄褐色土 焼土粒を含む。
2. 5YR% 明赤褐色土 焼土。
3. 10YR% にふい黄褐色土 焼土粒を含む。



1. 5YR% 明赤褐色土 焼土。

S 193
E 335

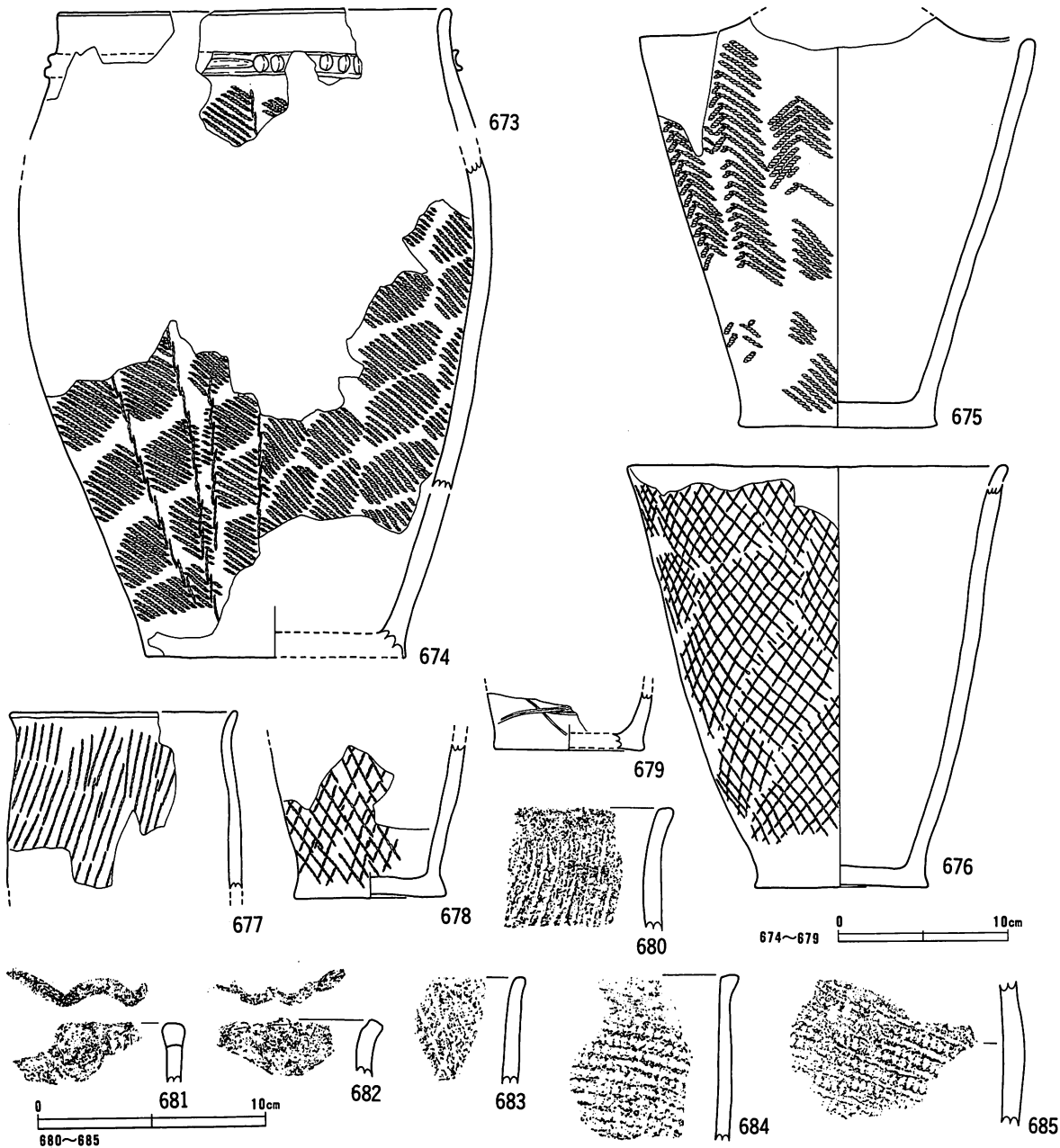
単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
開口部径	28×45	18×21	22×26	15×16	18×22	19×22	17×21	17×19
深 さ	48	10	41	17	41	29	44	11
埋 土	10YR% にふい 黄褐色	ロームを はる	10YR% にふい 黄褐色	10YR% 暗褐色		10YR% 暗褐色	10YR% 6に似る	10YR% にふい 黄褐色 3,6に似る

P 番	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
開口部径	34×53	30×37	20×21	28×30	13×15	16×20	13×15	18×20	13×15
深 さ	24	33	21	32	41	42	9	37	23
埋 土		10YR% にふい 黄褐色	10YR% 黄褐色		10YR% 黒褐色	10YR% 黒褐色 土器が混入			10YR% 黄褐色

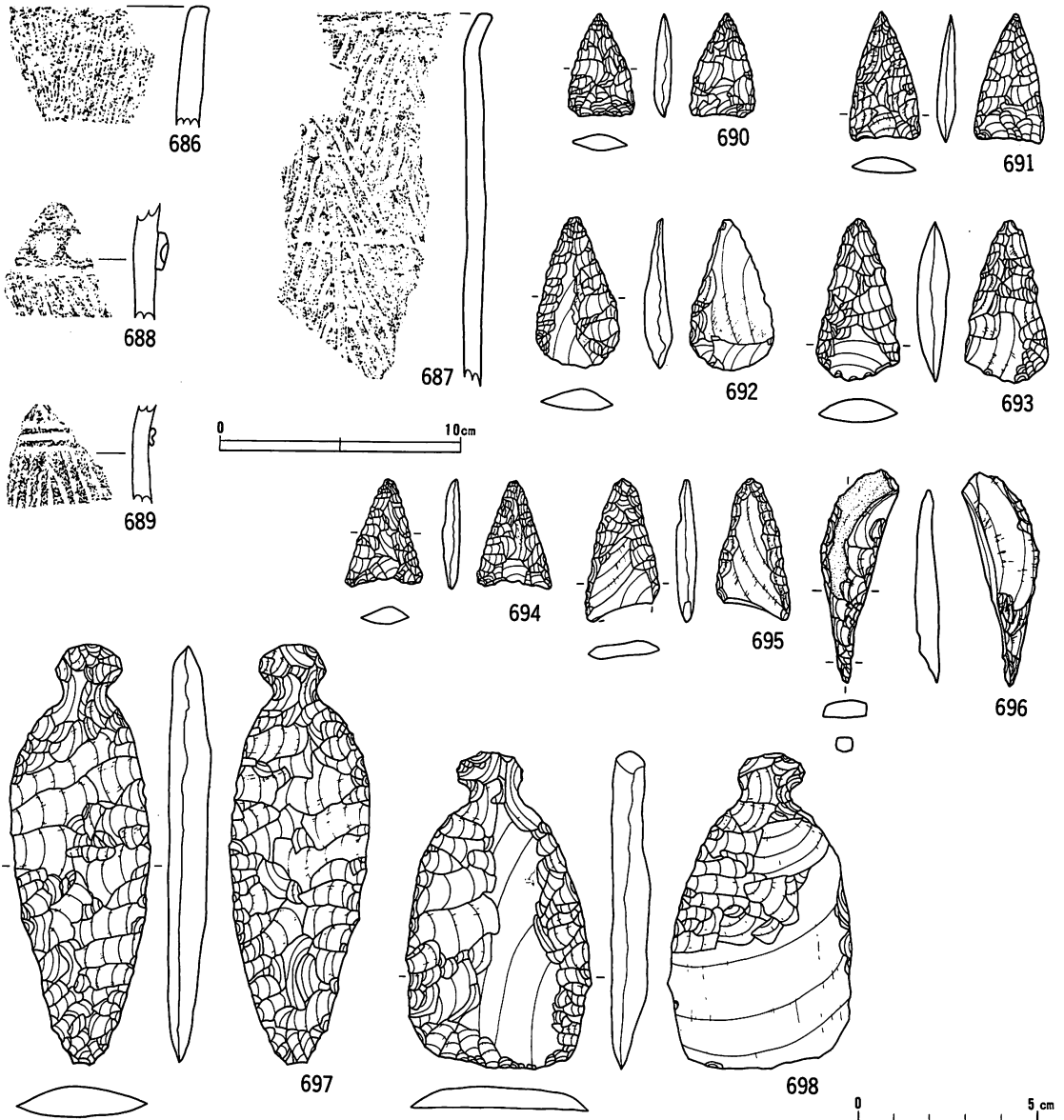


第152図 VII D6h-2・VII D7 i 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底径	器高	備考	分類	写真
673	VII D 6 h-2 住	床面	口頸部隆帯上指頭状丘痕と沈線(凹線)。	L R縦、縦位綾絡文。	(23.2)	-	(8.0)	674と同一個体。	II 6 b 4	179
674	VII D 6 h-2 住	床面		L R縦、縦位綾絡文。	-	(15.2)	(29.8)	673と同一個体。	II 6 b 4	179
675	VII D 6 h-2 住	東西ベルト埋土	波状口縁。	L R×R L第1種結東羽状縄文。	(23.3)	11.8	(24.3)		II 6 a ヲ	180
676	VII D 6 h-2 住	床面		R網目状燃糸文。	(22.5)	10.0	(25.1)		II 6 b カ	180
677	VII D 6 h-2 住	埋土		R燃糸文。	(13.5)	-	(10.5)		II 6 b カ	180
678	VII D 6 h-2 住	床ビット17		L網目状燃糸文。	-	(9.0)	(9.0)			180
679	VII D 6 h-2 住	埋土	草木類によるキズ?				(9.0) (3.5)			180
680	VII D 6 h-2 住	埋土		L燃糸文。						180
681	VII D 6 h-2 住	埋土	口縁部裝飾体。(半円状?)						II 6 a ヲ	180
682	VII D 6 h-2 住	埋土	口縁部裝飾体(上面観鋸歯状)。						II 6 a ア	180
683	VII D 6 h-2 住	埋土		L網目状燃糸文。					II 6	180
684	VII D 6 h-2 住	埋土		L R縦。				撚りがあまい。	II 6	180
685	VII D 6 h-2 住	埋土		L RにR附加条。					II 6	180

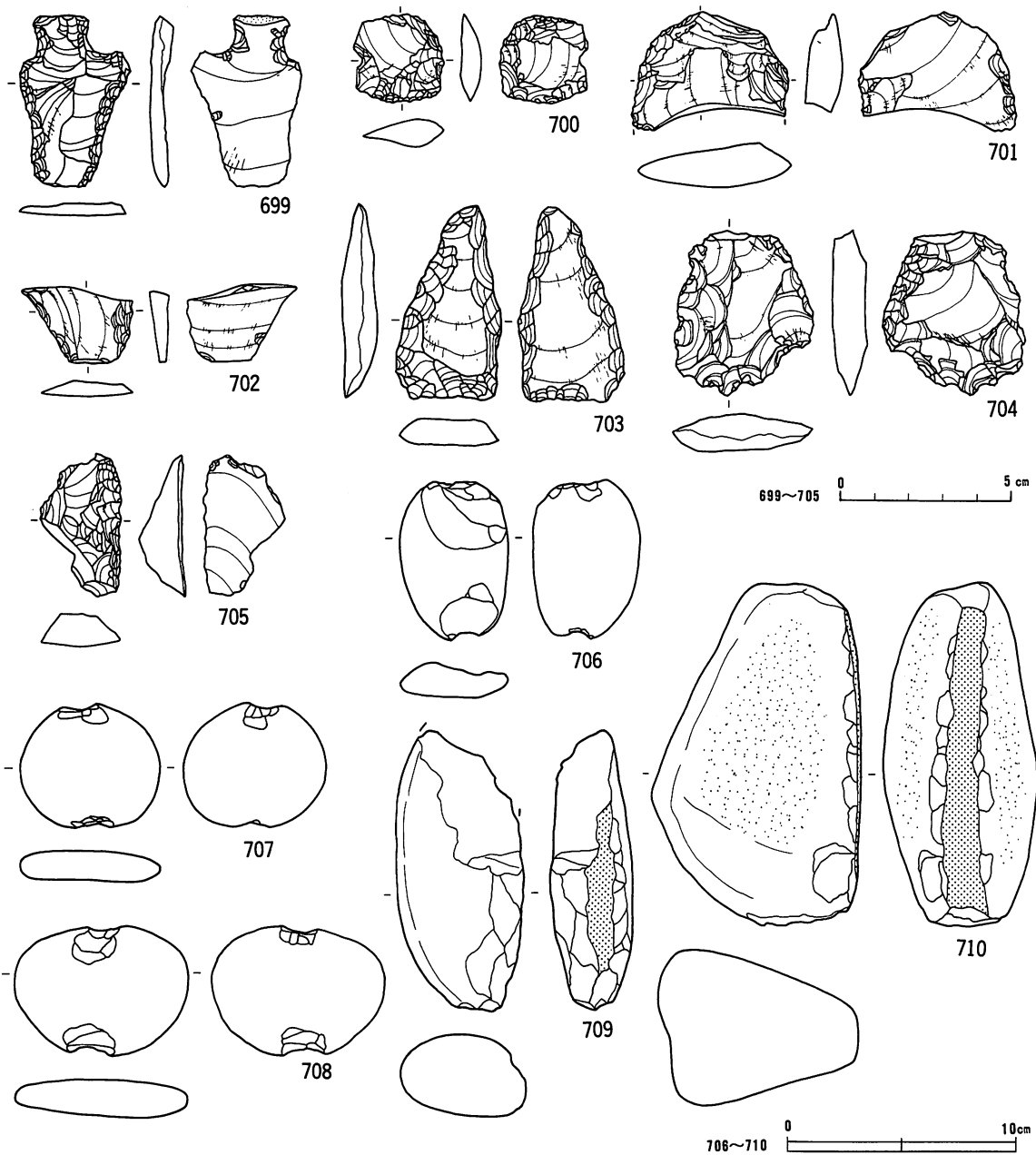
第153図 VII D 6 h-2住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
686	VII D 6 h-2 住	埋土	L 2 条	L 2 条木目状燃糸文。				外面スス顕著。	II 6 b	180
687	VII D 6 h-2 住	床面		R 木目状燃糸文。					II 6 b 4	180
688	VII D 6 h-2 住	埋土	隆帯上指頭状圧痕。	r 2 条木目状燃糸文。					II 6 b 4	180
689	VII D 6 h-2 住	埋土	隆帯上沈線 (凹線)。	L 燃糸文。					II 6 b 4	180

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
690	VII D 6 h-2 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	2.9	1.9	0.5	1.88		I 2	180
691	VII D 6 h-2 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	3.6	2.0	0.4	2.97		I 2	180
692	VII D 6 h-2 住	埋土	尖頭器様石器	硬質泥岩	礫石西部	4.2	2.3	0.8	4.82			180
693	VII D 6 h-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	4.5	2.3	0.8	6.81		III 1	181
694	VII D 6 h-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	2.1	0.5	2.12		II b 1	181
695	VII D 6 h-2 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	礫石西部	(4.0)	2.1	0.4	(3.50)			181
696	VII D 6 h-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	6.0	1.6	0.5	6.08			181
697	VII D 6 h-2 住	埋土	石匙	硬質泥岩	礫石西部	11.7	3.9	1.1	43.61		I a 1	181
698	VII D 6 h-2 住	埋土	石匙	硬質泥岩	礫石西部	8.9	5.1	1.0	38.29		I b 2	181

第154図 VII D 6 h-2住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
699	ⅦD6h-2住	埋土	石匙	赤色凝灰岩	北上山地	5.0	3.2	0.7	7.26	つまみ部頂部に打面を残す。先端部は加工せず。	I b 1	181
700	ⅦD6h-2住	床直上	ピエス・ピエスキュー	珪質泥岩	磐石西部	2.6	2.7	0.8	4.19			181
701	ⅦD6h-2住	埋土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	(3.5)	4.6	1.1	(16.29)		IV	181
702	ⅦD6h-2住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	2.2	3.2	0.5	4.18		I c 3	181
703	ⅦD6h-2住	埋土	不定形石器	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	5.7	2.9	0.8	15.75		I e	181
704	ⅦD6h-2住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	4.8	4.1	1.0	20.22	刃部の裏面を大きく調整後に、表に鋸歯状剥離。	I a 1	181
705	ⅦD6h-2住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	4.1	2.6	1.4	9.23		I a 1	181
706	ⅦD6h-2住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	6.9	4.8	1.6	80		I	181
707	ⅦD6h-2住	埋土	石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	5.4	6.2	1.4	75		II	181
708	ⅦD6h-2住	Q3埋土	石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	5.6	7.6	1.7	110		II	181
709	ⅦD6h-2住	埋土	敲磨器類A群	輝石安山岩	奥羽山地	(12.3)	(5.6)	(3.6)	(300)	欠損品。	II b 2	181
710	ⅦD6h-2住	埋土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	14.8	9.1	8.5	1100	平滑面3面。+敲石?	I a 2	181

第155図 ⅦD6h-2住居跡出土遺物(3)

施すがその長さ・単位は不明である。。沈線は棒状工具または竹管の外面を器面に当てたものである。指頭圧痕は左側から施され爪跡が明瞭に残っている。675は波状口縁の土器であるが頂部を欠損している。残存する口縁の形状から頂部は2個であるとおもわれるが詳細は不明である。欠損部の器厚は13mmと他に比べやや厚い。679は繊維質と思われる物による沈線が観察されるが、施文とするより単なるキズと考えたほうが妥当かもしれない。681は弁状突起で上面観が半円状となるものである。

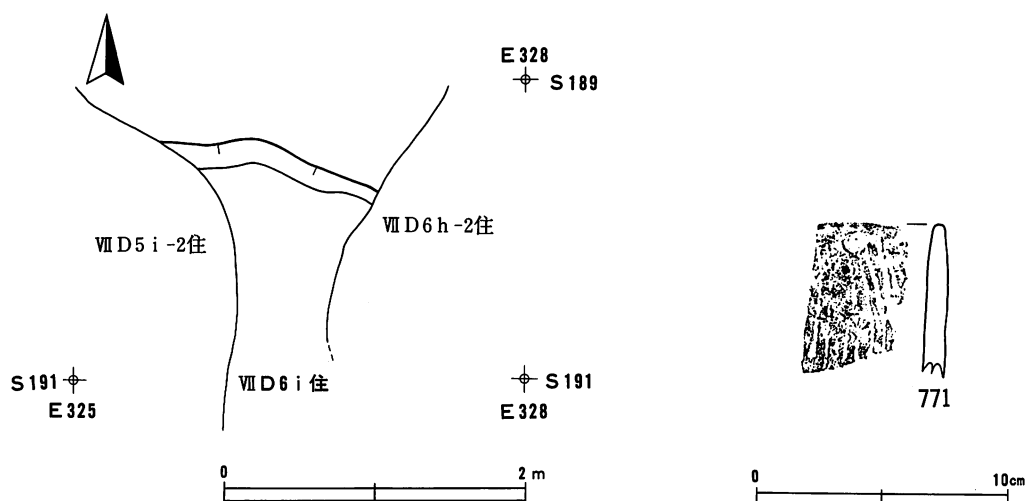
<石器> 692は平面形は石鏃に類似するが、裏面は無加工である。693を石鏃としたが、重さが本遺跡出土中で最大値を示す。703は石筥としたが、側辺の加工は一方のみ急角度で対称性を欠く。尖頭部が意図的に作り出されている。700は1対の両極剝離が観察されることからピエス・エスキューとした。702は欠損品であろう。他に埋土から半円状崗岩質岩が1点、Uフレが7点、フレークが24点（雫石産・硬質泥岩、雫石産・凝灰質泥岩他）出土している。

時期 床面直上出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

VII D 6 i 住居跡（遺構番号75）

遺構（第156図、写真図版51）

<検出状況> VII D 5 i - 2 住居跡の東壁の精査で検出した。重複により遺存状態が悪い。土坑の可能性も考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
711	VII D 6 i 住	埋土		L 燃糸文。					II b	182

第156図 VII D 6 i 住居跡・出土遺物

VII D 5 i - 2 住居跡およびVII D 6 h - 2 住居跡に切られている。

<形状・規模>残存状況が悪く不明である。規模は、残存値で1.2×2.9mである。

<壁・壁高>北壁のみ残存する。基盤層の黄褐色土で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は30cmである。

<床・柱穴・施設>VII D 5 i - 2 住居跡の床面より約10cm、VII D 6 h - 2 住居跡床面より約20cmそれぞれ高く、基盤層を床として固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

<炉>検出されなかった。

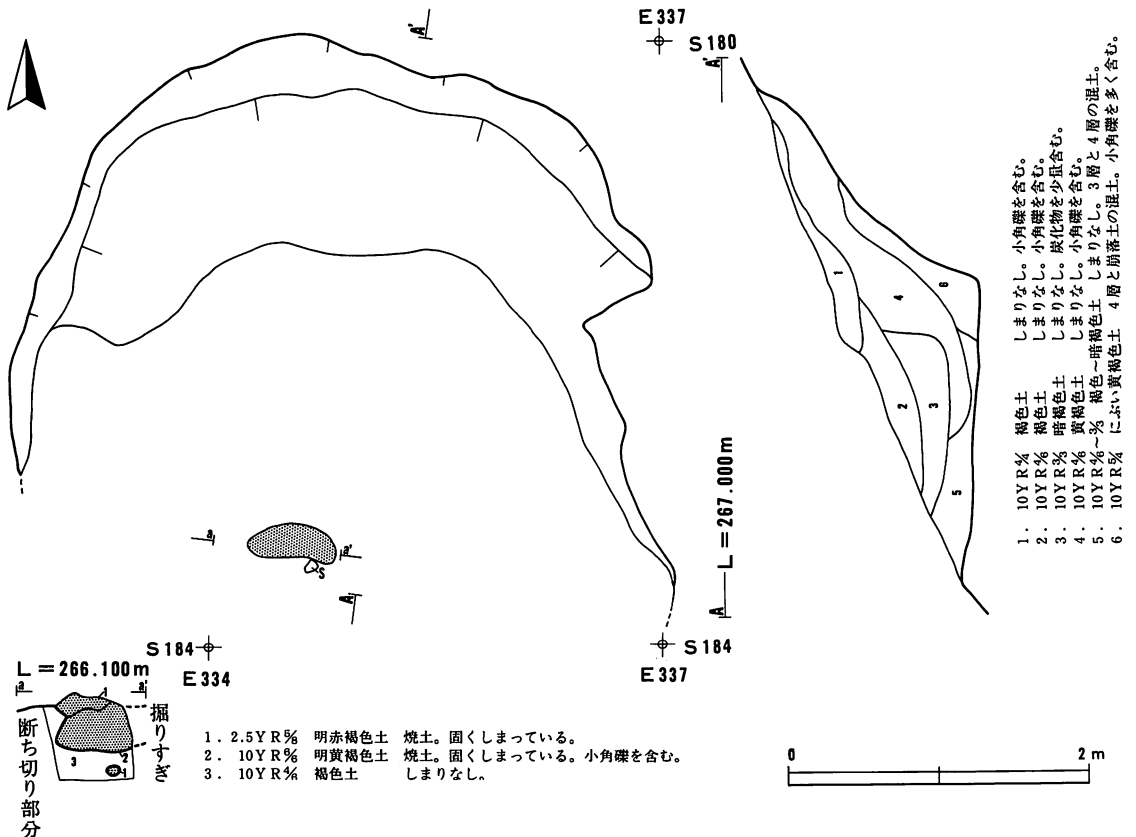
遺物 (第156図、写真図版182)

<土器>埋土から711が1点出土したのみである。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・破片資料から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

VII D 7 g 住居跡 (遺構番号76)

遺構 (第157図、写真図版51)



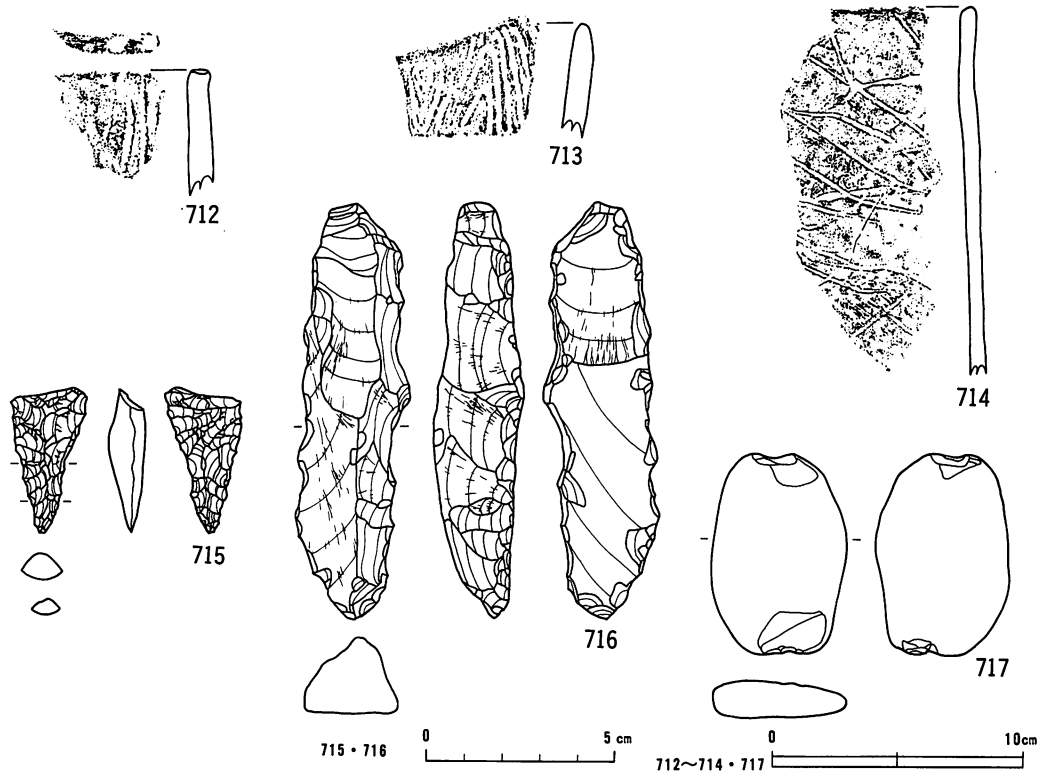
第157図 VII D 7 g 住居跡

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、その斜面上方において基盤層を掘り込む壁を確認し、住居として認定した。南側は斜面のため流失して不明である。本住居跡の床面下からⅦD 7 g - 2 住居跡が検出されている。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径 4 m 前後の円形と推定される。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は基盤層および礫層まで掘りこんでおり、凹凸が大きい。床から30cmまではほぼ直立するが、斜面上方に大きく外傾する。壁高は、東壁64cm、西壁31cm、北壁159cmである。

〈埋土〉6層で構成される。大別すると、上位は褐色土、中位に暗褐色土を挟んで、下位には崩落土を混入する層がある。全体的に締まりに欠け、小角礫を含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
712	ⅦD 7 g 住	埋土	口唇部指頭状圧痕。(左方向から)。	L 燃糸文。					Ⅱ 6 b オ	182
713	ⅦD 7 g 住	埋土		R 木目状燃糸文。					Ⅱ 6	182
714	ⅦD 7 g 住	埋土	沈線。(工具は軟質の植物繊維状のものか?)。							182

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
715	ⅦD 7 g 住	埋土	石錘	硬質泥岩	磐石西部	3.8	2.0	0.9	4.92	全面に二次加工。刃部と身部の境界不明瞭。		182
716	ⅦD 7 g 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	11.0	2.9	2.0	68.90	断面三角形。	I c	182
717	ⅦD 7 g 住	埋土	石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	7.9	5.4	1.5	95		I	182

第158図 ⅦD 7 g 住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土層で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土の範囲は22×58cmと平面的には広い分布は見られないにもかかわらず、厚さは最大36cmで固く締まっている。ⅦD 7 g - 2 住居跡の炉は本住居の炉のほぼ真下に位置するが、本住居の焼土とは間層を挟み明瞭に区別できる。

遺物（第158図、写真図版182）

〈土器〉埋土から1360 g 出土した。712 の口唇部施文は全周せず部分的である。714 はモチーフが不明で装飾性に乏しい。図示した他に埋土から、網目状撚糸文、木目状撚糸文、縦位羽状縄文、縦位綾絡文（いずれも地文のみ）の胴部破片が出土している。

〈石器〉716 は断面三角形で1側面に二次加工が施されている。使用痕は2辺にステップ状剥離として残っている。剥離がやや磨耗しており、他の石器より古い時期のものか。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅦD 7 g - 2 住居跡（遺構番号77）

遺構（第158図、写真図版52）

〈検出状況〉ⅦD 7 g 住居跡の床面下から検出された。同住居の床面とは、約40cmのレベル差がある。南側は斜面のため流失していて不明である。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線に斜交する不整な長円形を基調と推定される。規模は残存値で、4×4.7 mである。

〈壁・壁高〉基盤層および礫層で凹凸が大きい。壁高は、東壁81cm、西壁33cm、北壁38cmである。

〈埋土〉5層からなる。褐色～明褐色土で小角礫を含み、再堆積層起源の埋土である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層および礫層で斜面に沿って傾斜し、比高最大値は40cmもある。柱穴は検出されない。

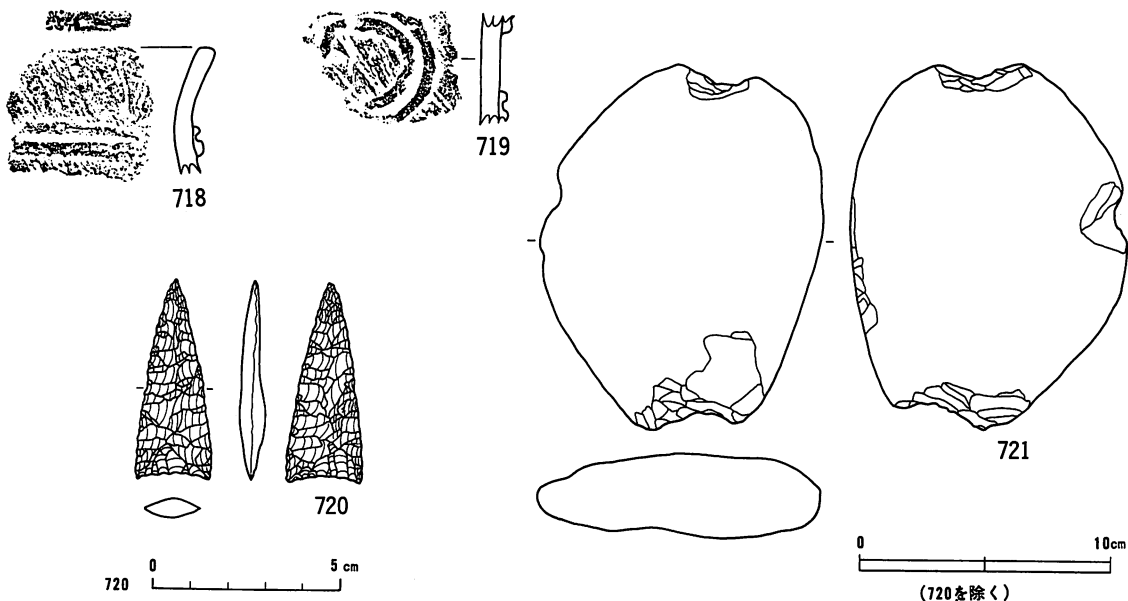
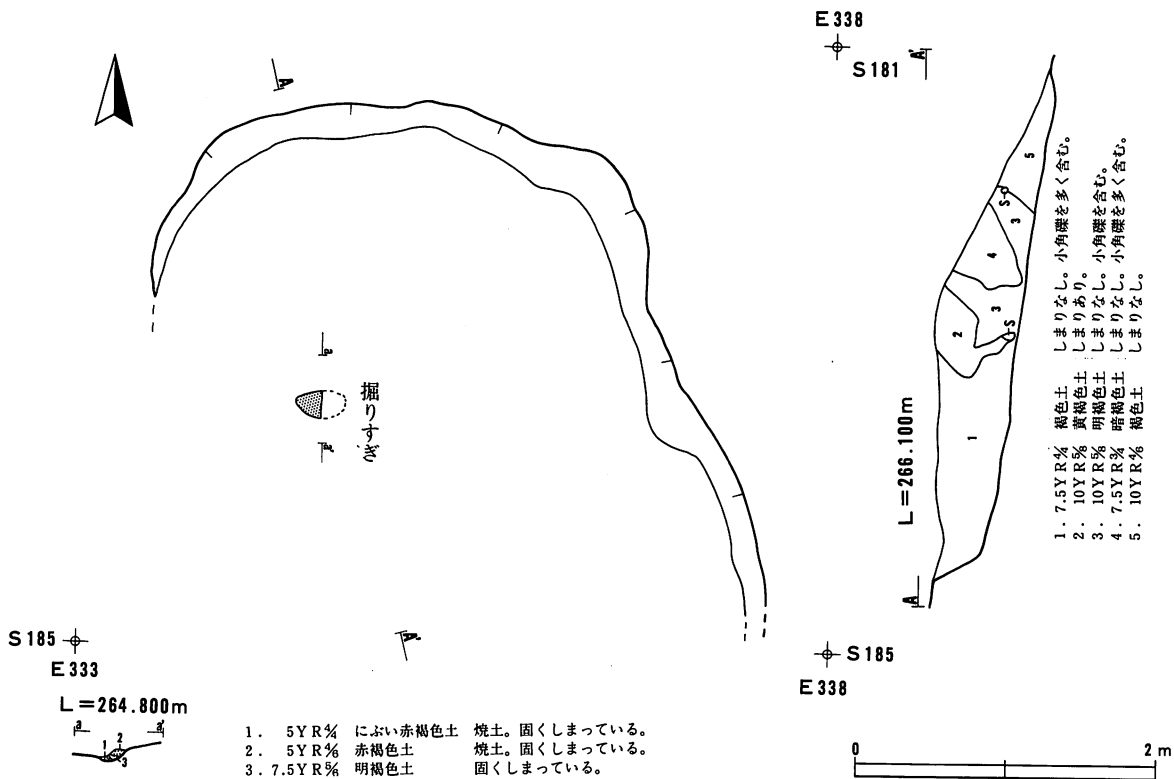
〈炉〉地床炉が1基検出された。ⅦD 7 g 住居跡の焼土の断面観察のため東側を誤って掘りすぎてしまった。残存値で18×17cmの範囲に分布するが、東側に広がる楕円形状の平面形を有すると思われる。厚さは6 cmで固く締まっている。

遺物（第158図、写真図版182）

〈土器〉埋土から1070 g 出土した。718 と 719 は同一個体かも知れない。図示した他には網目状撚糸文、木目状撚糸文、単節斜縄文の胴部破片（いずれも地文のみ）が出土している。

〈石器〉720 は大ぶりの石鏃で丁寧な加工である。

時期 特定資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると推定される。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
718	VII D 7g-2住	埋土	隆帯上沈線 (凹線)	R 2 条木目状燃糸文。					II 6 b 4	182
719	VII D 7g-2住	埋土	隆帯上沈線 (凹線)	R 2 条燃糸文。					II 6 b 7	182

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
720	VII D 7g-2住	埋土	石鏃	珪質泥岩	磐石西部	5.3	2.0	0.7	4.68		II a 2	182
721	VII D 7g-2住	埋土	石錘	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.4	11.3	3.4	780		III	182

第159図 VII D 7g-2住居跡・出土遺物

ⅦD7h住居跡（遺構番号78）

遺構（第160図、写真図版52・53）

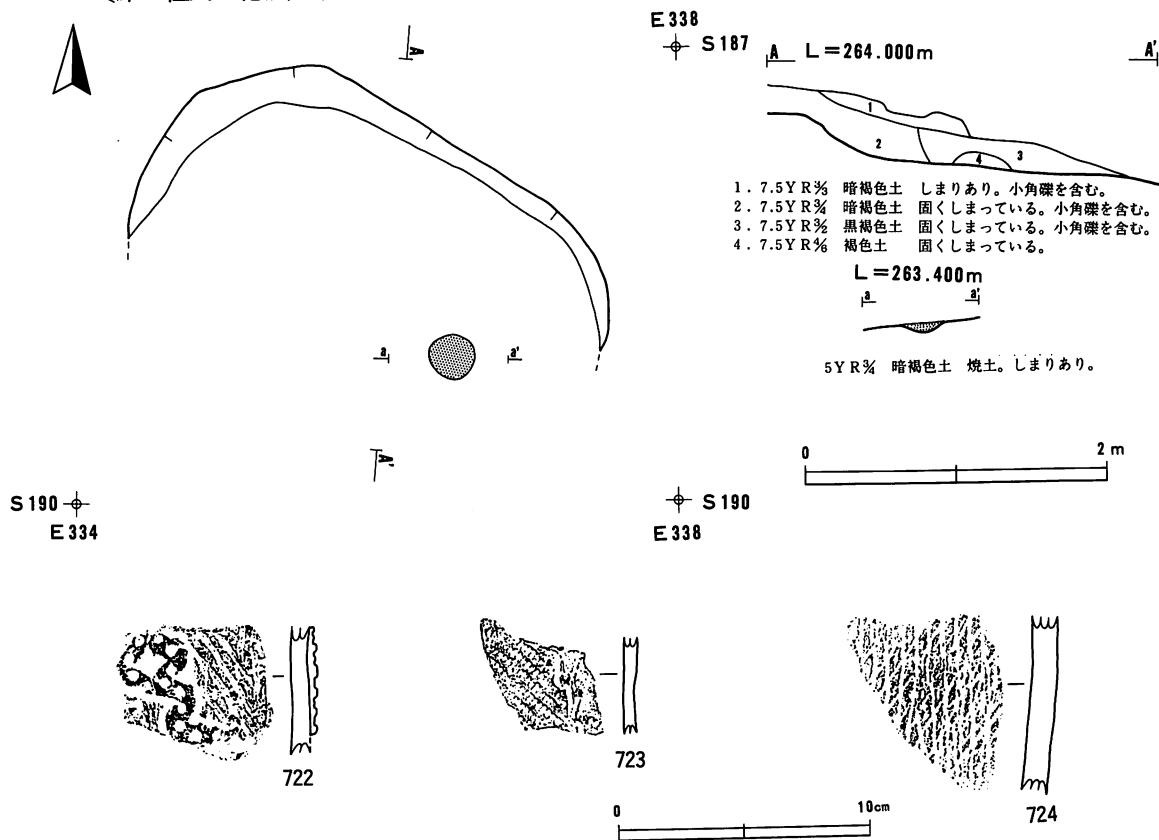
〈検出状況〉西尾根南斜面に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、斜面上方においてそれに対応すると想定される壁を確認し、住居として認定した。南側は斜面のために流失および道路によって削剝されている。

〈規模・形状〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形と推定される。規模は長軸3.2m、短軸は残存値で2.2mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土で固く締まっており、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁6cm、北壁21cmである。

〈埋土〉斜面上方は暗褐色土、下方は黒褐色土で、上方からの流れ込みの様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉暗褐色土で固く締まっている。斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は検出さ



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器考	備考	分類	写真
722	ⅦD7h住	埋土	隆帯上竹管刺突。	L2 桑木目状燃糸文。					Ⅱ6b7	182
723	ⅦD7h住	埋土		L R縦。片結び縦位縦絡文。						182
724	ⅦD7h住	埋土		L網目状燃糸文。					Ⅱ6	182

第160図 ⅦD7h住居跡・出土遺物

れなかった。

〈炉〉東寄りに地床炉 1 基を検出した。焼土は29×30cmのほぼ円形に分布し、厚さは最大7cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。

遺物 (第160図、写真図版182)

〈土器〉埋土から 340 g 出土した。722 は剥落しているが、2本の鋸歯状隆帯が線対称に垂下している。他に単節斜縄文の胴部破片が出土している。

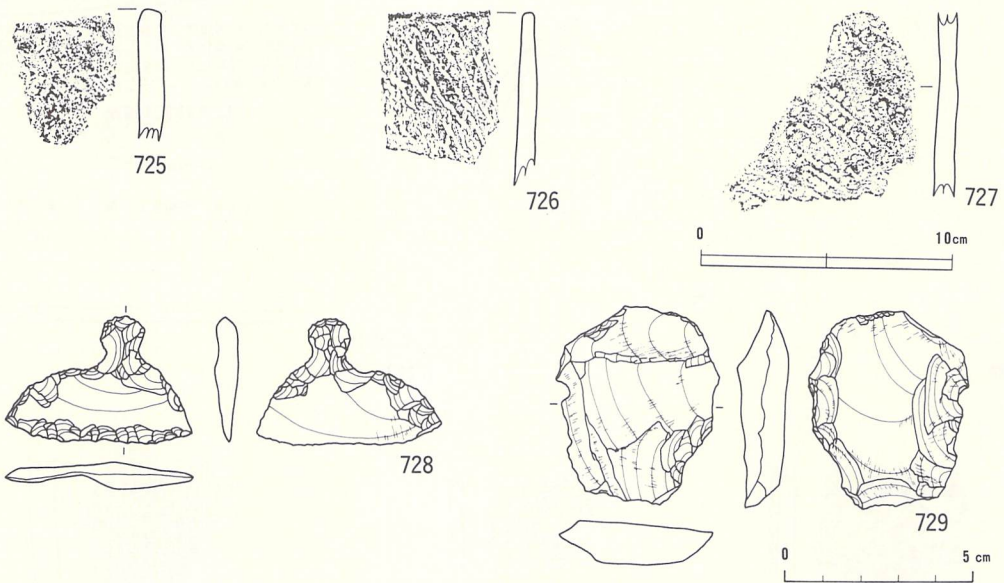
〈石器〉図示は省略したが、埋土から5.8×5.3×4.2cm大の卵形の白色細粒凝灰岩が出土した。奥羽山地零石産であることから持ち込まれたものと考えられる。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物・検出状況から縄文前期後葉のものとして推定される。

ⅦD7i 住居跡 (遺構番号79)

遺構 (第152図)

〈検出状況〉ⅦD6h-2住居跡の精査で検出した。本住居の大半は同住居に切られ不明であ



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
725	ⅦD7i住	埋土		縦位綾絡文。						182
726	ⅦD7i住	埋土		L網目状燃糸文。					II 6	182
727	ⅦD7i住	埋土		縄巻縄文。					II 6	182

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
728	ⅦD7i住	埋土	石匙	硬質泥岩	零石西部	3.3	5.0	0.7	5.89	打点はつまみ方向。	II a 2	182
729	ⅦD7i住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	零石西部	5.2	4.3	1.1	29.65		IV	182

第161図 ⅦD7i 住居跡出土遺物

る。北側の壁のおよび床面の一部が残存し、同住居の床面よりも16cm程高い。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存する。基盤層の黄褐色土で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は36cmである。

〈埋土〉壁寄りには黄褐色土主体で、崩落土をブロック状に含む層が断面鋸歯状に入り込む。南側は黒褐色土主体である。

〈床・柱穴・施設〉北側に一部残存する床面は基盤層で固く、ほぼ平坦である。ⅦD 6 h-2 住居跡の床面で検出された柱穴のうち、本住居と同じ黄褐色土ブロックを含む埋土を有するものは、本住居に帰属する可能性も考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第161図、写真図版182）

〈土器〉埋土からの出土である。図示した他には横位羽状縄文、単節斜縄文、無節斜縄文の胴部破片（いずれも地文のみ）が出土している。

〈石器〉図示した他にはUフレ1点、フレーク11点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から末葉と考えられる。

ⅦD 8 c 住居跡（遺構番号80）

遺構（第162図、写真図版53）

〈検出状況〉西尾根東斜面中腹に位置する。小角礫含みの暗褐色土層中に焼土を検出し、その斜面上方において基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡として認定した。

ⅦD 8 c 土坑と東側で重複するが、斜面のため本住居の埋土および床面が流失していて新旧関係は不明である。北壁は木根により一部攪乱されている。

〈形状・規模〉東側は不明であるが、径5m前後の円形と推定される。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁は礫層まで掘りこんでおり、凹凸が大きい。緩やかに立ち上がる。壁高は、西壁33cm、北壁60cmである。

〈埋土〉上位には黄褐色土が流れ込んでいる。床上は、多量の粉炭が混入する暗褐色土である。いずれも締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉基盤層および一部礫層で、固く締まっている。斜面に沿って南東方向に傾斜し、最大比高25cmである。柱穴は検出されなかった。

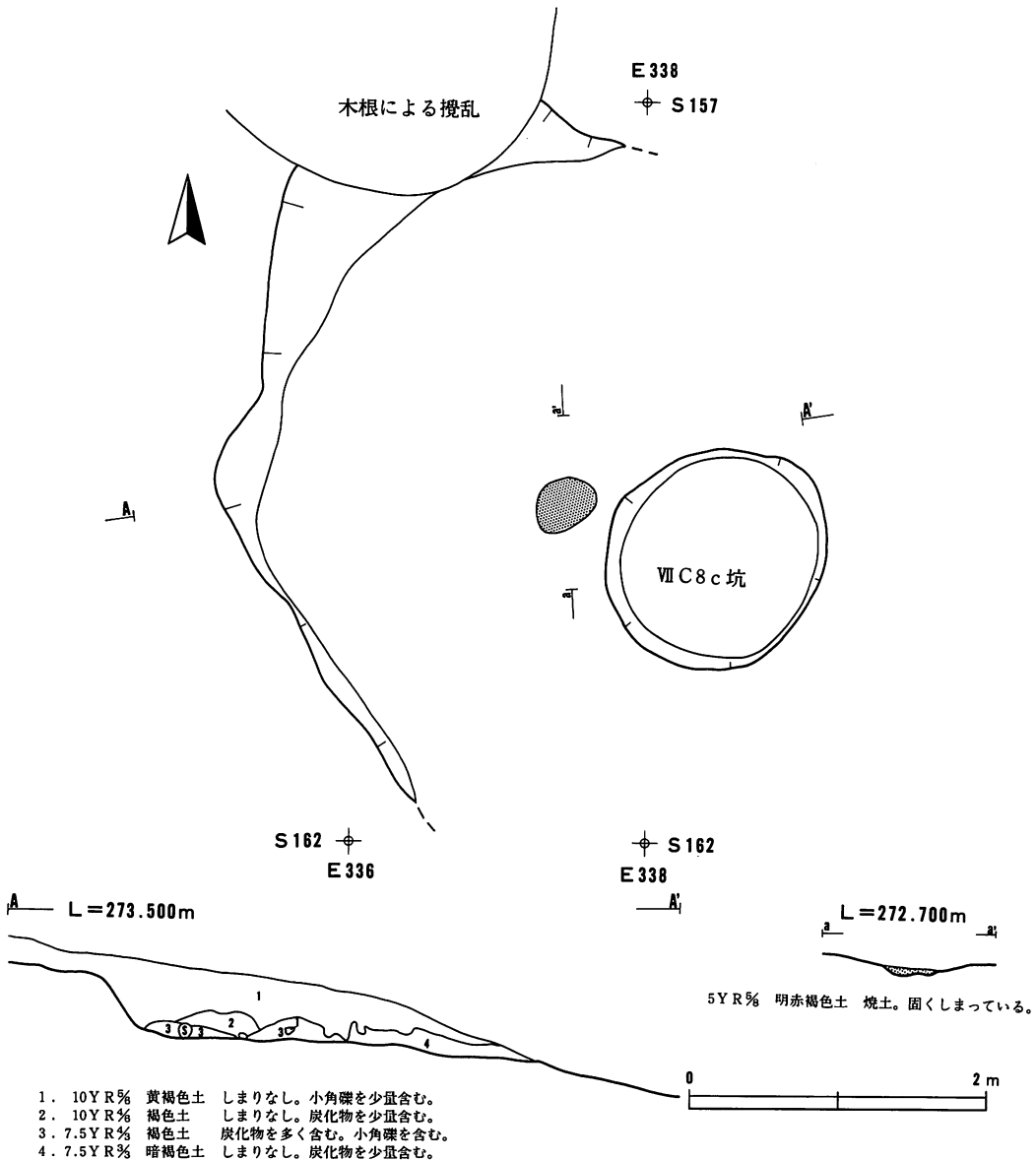
〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土の範囲は32×44cmの卵形状に分布し厚さは最大6cmで、断面形はレンズ状である。

遺物（第163・164図、写真図版182～184）

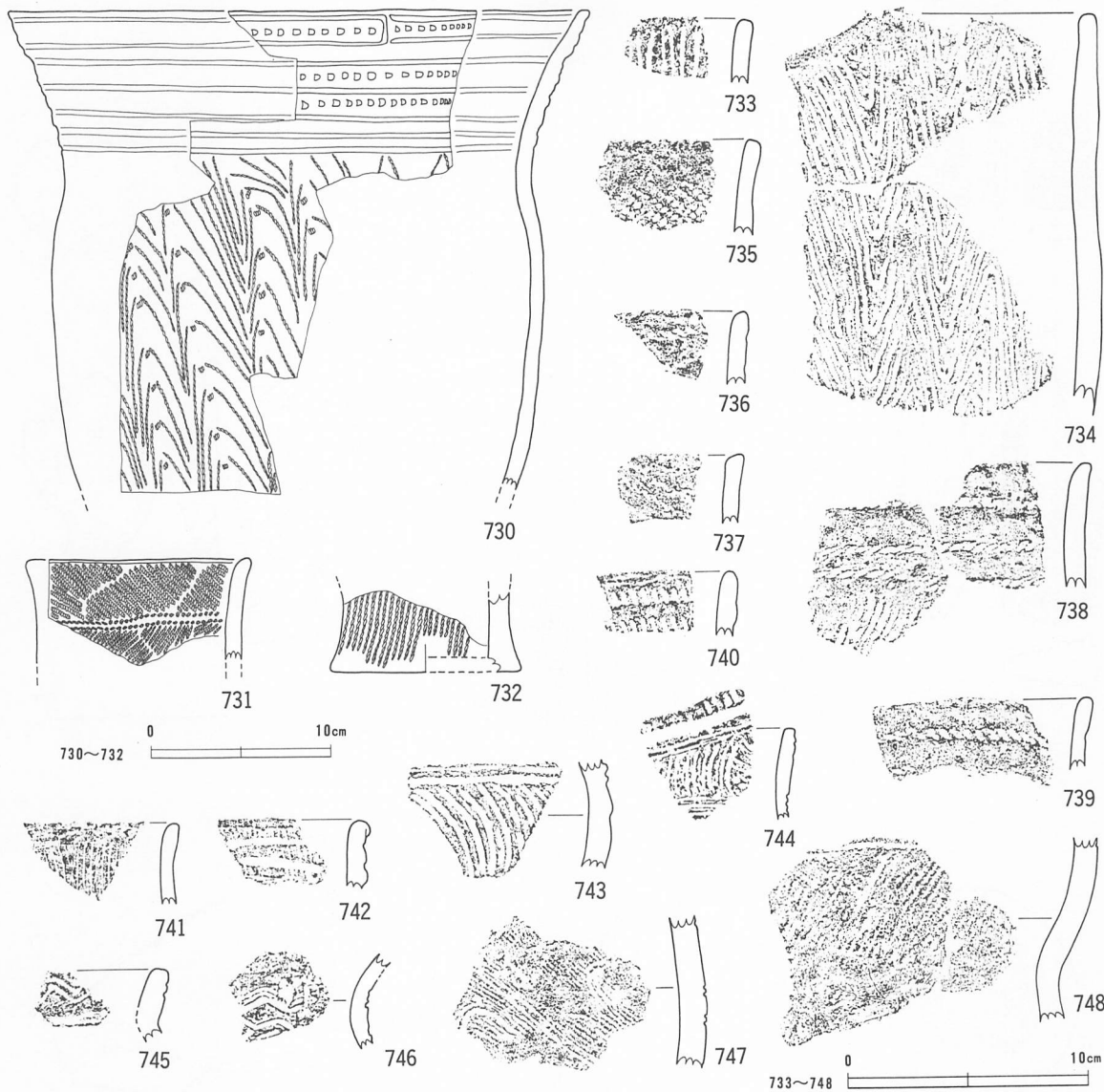
〈土器〉埋土から6615g出土した。730は口縁部は半截竹管の外面で器面に対して斜位に刺突

しているが、刺突列の最上段は平行沈線で区画されている。どのような単位の区画か詳細は分からない。740は波状口縁である。図示した他に網目状撚糸文、横位羽状縄文、縦位綾絡文の胴部破片（いずれも地文のみ）が出土している。

<石器> 752 は自然面を残しやや不整形であるが断面形がかまぼこ状であり石筥とした。753は素材の傾斜を利用して刃部としている。755は急角度の大きな剥離が連続する。図示した他にUフレ2点、フレーク18点（隕石産・硬質泥岩他）が埋土から出土している。

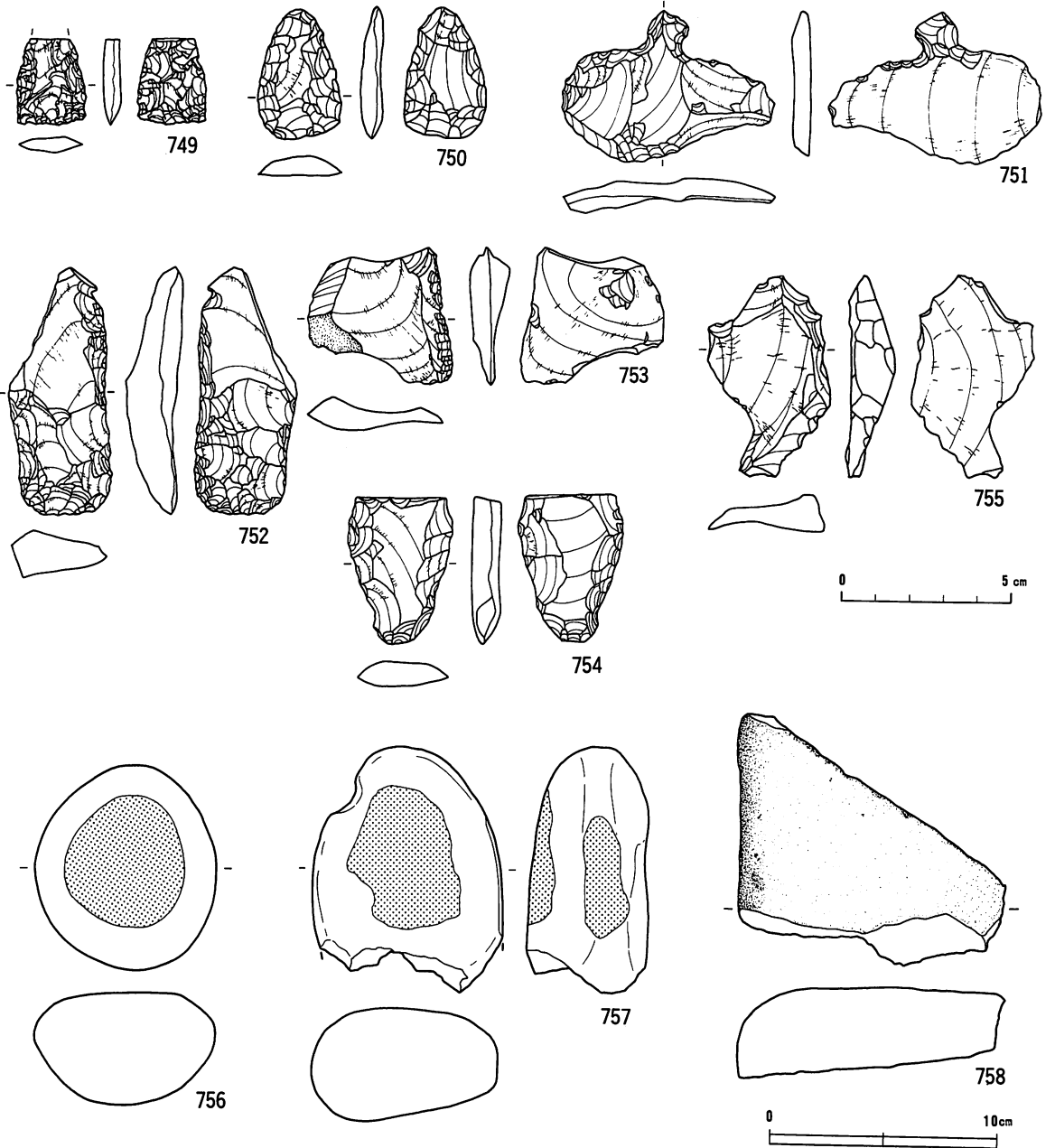


第162図 VII D 8 c 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
730	VII D 8 c 住	埋土	沈線(凹線)、棒状工具による刺突。	L木目状燃糸文。	[32.4]	-	(26.4)		II 7 a	182
731	VII D 8 c 住	埋土	R L側面压痕。	R L	(12.6)	-	(5.8)	纖維混入。		183
732	VII D 8 c 住	埋土		L燃糸文。	-	[10.6]	(4.5)			183
733	VII D 8 c 住	埋土		L燃糸文。					II 6	183
734	VII D 8 c 住	Q 1埋土	波状口縁。	R木目状燃糸文。					II 6	183
735	VII D 8 c 住	埋土		L R縦。						183
736	VII D 8 c 住	Q 4埋土	L R側面压痕。						II 8 a 7	183
737	VII D 8 c 住	Q 4埋土	L R側面压痕。						II 8 a 7	183
738	VII D 8 c 住	埋土上位	R側面压痕。						II 8 a 7	183
739	VII D 8 c 住	Q 4埋土	L R側面压痕。						II 8 a 7	183
740	VII D 8 c 住	Q 4埋土	L R多軸絡条体压痕。						II 8 b	183
741	VII D 8 c 住	Q 4埋土	櫛歯状沈線。							183
742	VII D 8 c 住	埋土上位	櫛歯状沈線施文後沈線(凹線)。						II 7	183
743	VII D 8 c 住	埋土上位	沈線(凹線)。						II 7	183
744	VII D 8 c 住	埋土上位	口唇部棒状工具による压痕。半截竹管平行沈線(横位)。弧状沈線。						II 7	183
745	VII D 8 c 住	埋土上位	半截竹管波状沈線。						II 7 b	183
746	VII D 8 c 住	埋土上位	波状沈線(凹線)。						II 7 b	183
747	VII D 8 c 住	埋土上位	半截竹管平行沈線。	L燃糸文。					II 7 b	183
748	VII D 8 c 住	埋土上位	半截竹管平行沈線。	L R横。				金魚鉢形の器形。	II 7 b	184

第163図 VII D 8 c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
749	ⅦD8c住	Q3埋土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	2.4	2.0	0.4	2.51	尖頭部折損	I 2	184
750	ⅦD8c住	埋土	尖頭器様石器	硬質泥岩	礮石西部	3.8	2.5	0.6	7.33			184
751	ⅦD8c住	Q1埋土	石匙	硬質泥岩	礮石西部	4.4	6.2	0.6	15.45		II b	184
752	ⅦD8c住	埋土	石匙	硬質泥岩	礮石西部	7.3	3.0	1.3	28.71	短冊形。側縁と端縁に刃部。	II	184
753	ⅦD8c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.0	4.2	0.9	10.64	素材の傾斜を利用して、刃部を形成する。	I a 1	184
754	ⅦD8c住	Q3埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.4	3.1	0.5	14.92	加工が粗く大きい。	I c 2	184
755	ⅦD8c住	Q4埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.4	5.9	1.0	16.25		I c	184
756	ⅦD8c住	埋土上位	敲磨器類B群	硬砂岩	北上山地	9.0	8.0	5.0	560	片面に磨面。平滑で光沢あり。	I	184
757	ⅦD8c住	埋土上位	敲磨器類B群	硬砂岩	北上山地	(10.8)	8.4	5.0	(670)	片面と側辺に磨面。平坦部は光沢あり。	I	184
758	ⅦD8c住	埋土上位	石皿・台石類	凝灰質硬砂岩	北上山地	(11.0)	(11.7)	(4.0)	(670)			184

第164図 ⅦD8c住居跡出土遺物(2)

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期末葉に属すると考えられる。

ⅦD 8 h 住居跡 (遺構番号81)

遺構 (第165図、写真図版54)

〈検出状況〉西尾根南斜面中腹に位置する。小角礫含みの褐色土層上面で検出した。西壁の一部には倒木痕があり攪乱を受けている。

〈形状・規模〉径2.5 m程度の不整な円形である。

〈壁・壁高〉上半部は褐色土層、下半部は基盤層で、ほぼ直立する。壁高は、東壁41cm、南壁6 cm、北壁84cmである。

〈埋土〉上位は暗褐色土、下位は褐色土を主体とする。いずれも小角礫を多量に含み固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層で、埋土より固く締まっている。殆ど凹凸がなくほぼ水平である。柱穴状ピットが2個検出されているが位置・規模から柱穴でない可能性が高い。北壁際の床面に偏平な自然礫が検出された。加工痕も使用痕も見られないが、他の住居にも同様の例があることから記載しておく。規模は18×35cm、厚さ5 cmである。石質は凝灰質千枚岩で古生界の北上山地である。

〈炉〉南壁寄りに石囲炉が1基検出された。外法で東西55cm、南北62cmのやや南北に長い円形に、長さが10～11cmの大きさの11個の角礫を用いている。礫を埋めた掘り方は検出されなかった。礫の内側の部分には強い熱を受けた痕跡が残る。内側には一面に焼土が形成されている。厚さは最大で6 cmで固く締まっていおり、西側は一部攪乱を受けている。

遺物 (第165図、写真図版185)

〈土器〉埋土から560 g出土した。いずれも小破片である。図示した他には木目状撚糸文、網目状撚糸文が多く、横位羽状縄文(第1種結束)、縦位綾絡文が少量出土している。

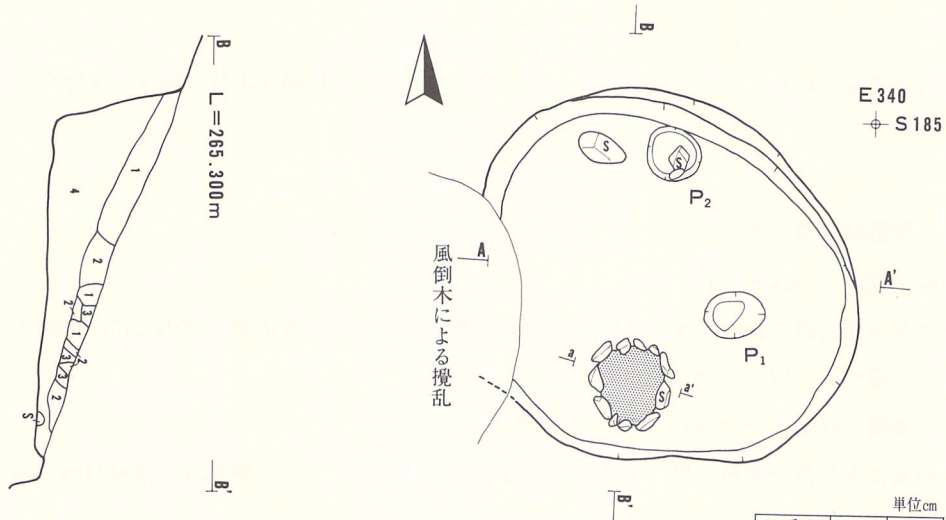
〈石器〉図示した1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉から中期初頭と考えられる。

ⅦD 8 i 住居跡 (遺構番号82)

遺構 (第166図、写真図版55)

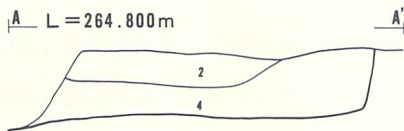
〈検出状況〉西尾根南斜面に位置する。腐植土の黒色土上面でⅦD 8 i - 2 住居跡、ⅦD 8 i - 3 住居跡の北壁のラインを検出し、本住居はその精査で確認された。南側は耕作のため削平



単位cm

P 番号	P ₁	P ₂
開口部径	30×42	36×39
深さ	12	21

S 188 ⊕
E 337



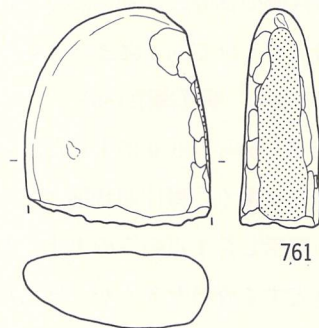
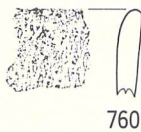
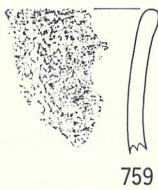
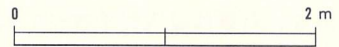
A' ... A' B ... B'

1. 7.5YR% 暗褐色土 しまりあり。
2. 7.5YR% 黒色土 しまりあり。炭化物を含む。
3. 7.5YR% 極暗褐色土 しまりあり。
4. 7.5YR% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。

L = 264.300m



1. 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 7.5YR% 褐色土 固くしまっている。
3. 5YR% 赤褐色土 しまりあり。
4. 5YR% におい赤褐色土 焼土。固くしまっている。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
759	VII D 8 h 住	埋土		L R 縦。片結び縦位綾絡文。						185
760	VII D 8 h 住	埋土		R 網目状撫糸文。					II 6	185

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
761	VII D 8 h 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(8.6)	7.4	2.9	(270)		III a	185

第165図 VII D 8 h 住居跡・出土遺物

されていて不明である。

ⅦD 6 h - 2 住居跡、ⅦD 8 i - 2 住居跡、ⅦD 8 i - 3 住居跡と重複する。ⅦD 6 h - 2 住居跡の埋土断面観察から、本住居のほうが古い。ⅦD 8 i - 2 住居跡、ⅦD 8 i - 3 住居跡は本住居の床面下から検出されており、本住居のほうが新しい。これを図式化すると次のようになる。

(新) ⅦD 6 h - 2 住居跡←ⅦD 8 i 住居跡←ⅦD 8 i - 2 住居跡←ⅦD 8 i - 3 住居跡 (旧)

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形と推定される。規模は残存値で2.6×3.8mである。
〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっており、やや外傾する。壁高は東壁15cm、北壁10cmである。

〈埋土〉上位は褐色土、下位は黒色土が主体となる。北壁際には角礫混じりの極暗褐色土堆積する。

〈床・柱穴・施設〉焼土より北側は基盤層である黄褐色土で固く締まっている。南側は基本層序では黒色土であるが、にぶい黄褐色土を貼って斜面を平らにしている。柱穴は5個検出された。埋土・規模ではP2とP3がほぼ等しいが、位置・規模からはP1とP4が主柱穴となるかもしれない。周溝が、残存する壁際に全周する。規模は幅15cm、深さ10cm程度で、埋土は10YR 2/2 黒色土でP2やP3の埋土に近い。

〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は100×160cmの不整形に分布し、厚さは最大7cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。

遺物 (第167図、写真図版185)

〈土器〉埋土から505g出土した。762は器厚がやや厚く、内面は凹凸がある。底部が外側に張り出す。763は隆帯を貼り付けて鋸歯状としたものである。図示した他には木目状捺糸文、網目状捺糸文の胴部破片が出土している。

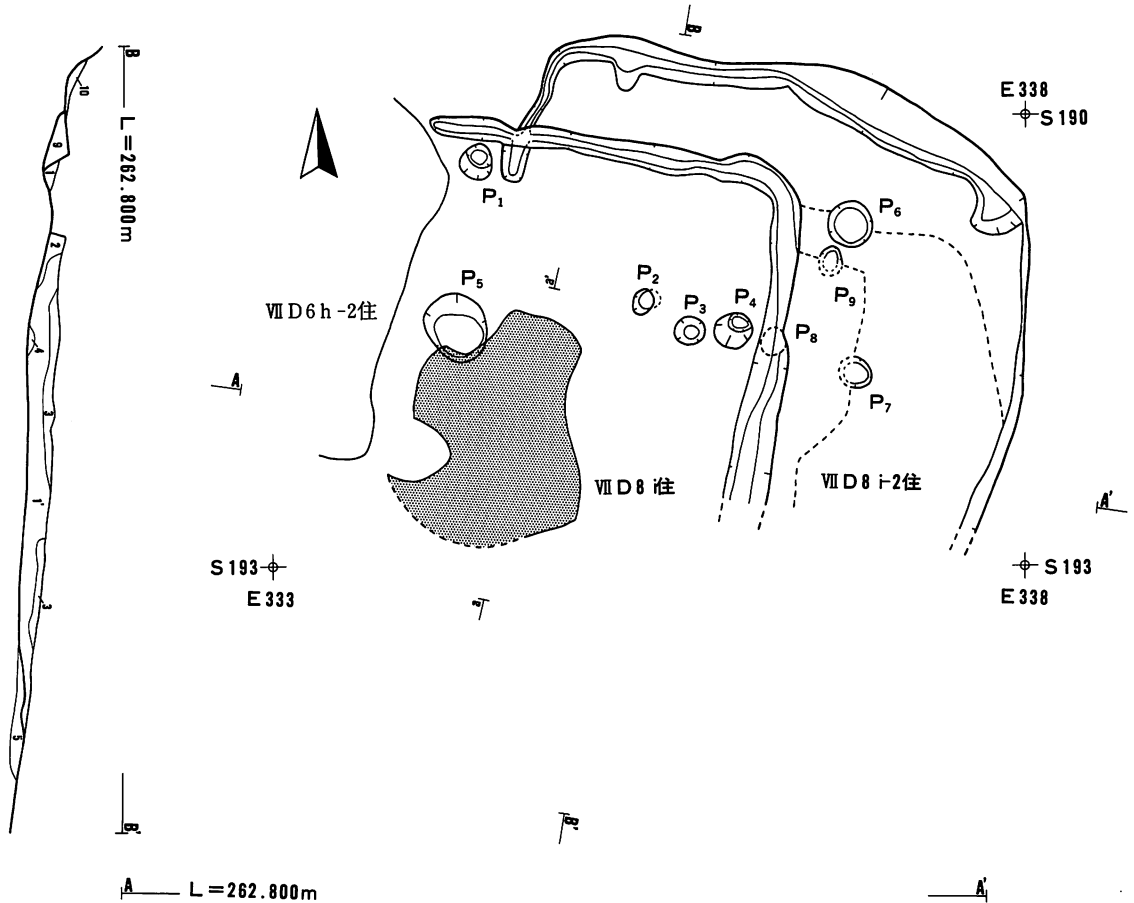
〈石器〉765は尖頭部の形成に着目し、石錐とした。他にフレーク5点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属するものと推定される。

ⅦD 8 i - 2 住居跡 (遺構番号83)

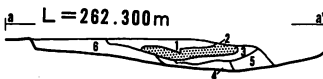
遺構 (第166図、写真図版55図)

〈検出状況〉腐植土である黒色土上面で本住居の北壁のラインを検出した。ⅦD 8 i 住居跡、ⅦD 8 i - 3 住居跡と重複する。埋土断面観察及び貼り床の切り合いなどから、ⅦD 8 i 住居跡より本住居のほうが古い。壁・焼土・周溝の切り合いから、本住居はⅦD 8 i - 3 住居跡よ



A...A' B...B'

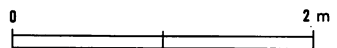
- | | | | |
|------------------|------------------|-------------------|---------------------------|
| 1. 7.5Y R% 黒色土 | しまりあり。 | 6. 10Y R% 黄褐色土 | |
| 2. 7.5Y R% 極暗褐色土 | 1'は、1層に小角礫を少量含む。 | 7. 10Y R% 黒褐色土 | 黄褐色土を粒状に含む。 |
| 3. 7.5Y R% 暗褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | 8. 10Y R% 黒褐色土 | (VII D 8 i-2住埋土) |
| 4. 7.5Y R% 褐色土 | しまりあり。小角礫を少量含む。 | 9. 10Y R% におい黄褐色土 | 灰黄褐色土を含む。(VII D 8 i-2住の床) |
| 5. 7.5Y R% 暗褐色土 | しまりあり。黒褐色土を少量含む。 | 10. 10Y R% 褐色土 | しまりあり。 |
| | | 11. 10Y R% 黒褐色土 | しまりあり。黄褐色土を含ふ。 |



- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 7.5Y R% 褐色土 | 焼土を含む。 |
| 2. 5Y R% 明赤褐色土 | 焼土。 |
| 3. 7.5Y R% 黒褐色土 | 焼土を含む。 |
| 4. 10Y R% 褐色土 | 焼土を含む。 |
| 5. 10Y R% 黒褐色土 | 攪乱。 |
| 6. 10Y R% 黄褐色土 | 焼土を多く含む。 |

単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
開口部径	20×23	13×17	18×20	22×27	40×45	29×30	18×23	16×17	15×18
深さ	34	25	28	57	29	16	8	25	15
埋土	10Y R% 灰黄褐色	10Y R% 黒褐色	10Y R% 黒褐色	(上部) 灰褐色 10Y R% (下部) 灰褐色 10Y R%	(上部) 灰褐色 10Y R% (下部) 灰褐色 10Y R%	10Y R% におい黄褐色 ロームを多量 に含む。	10Y R% 黒褐色土 ロームを多量 に含む。		10Y R% におい黄褐色 ロームを多量 に含む。



第166図 VII D 8 i・VII D 8 i-2住居跡

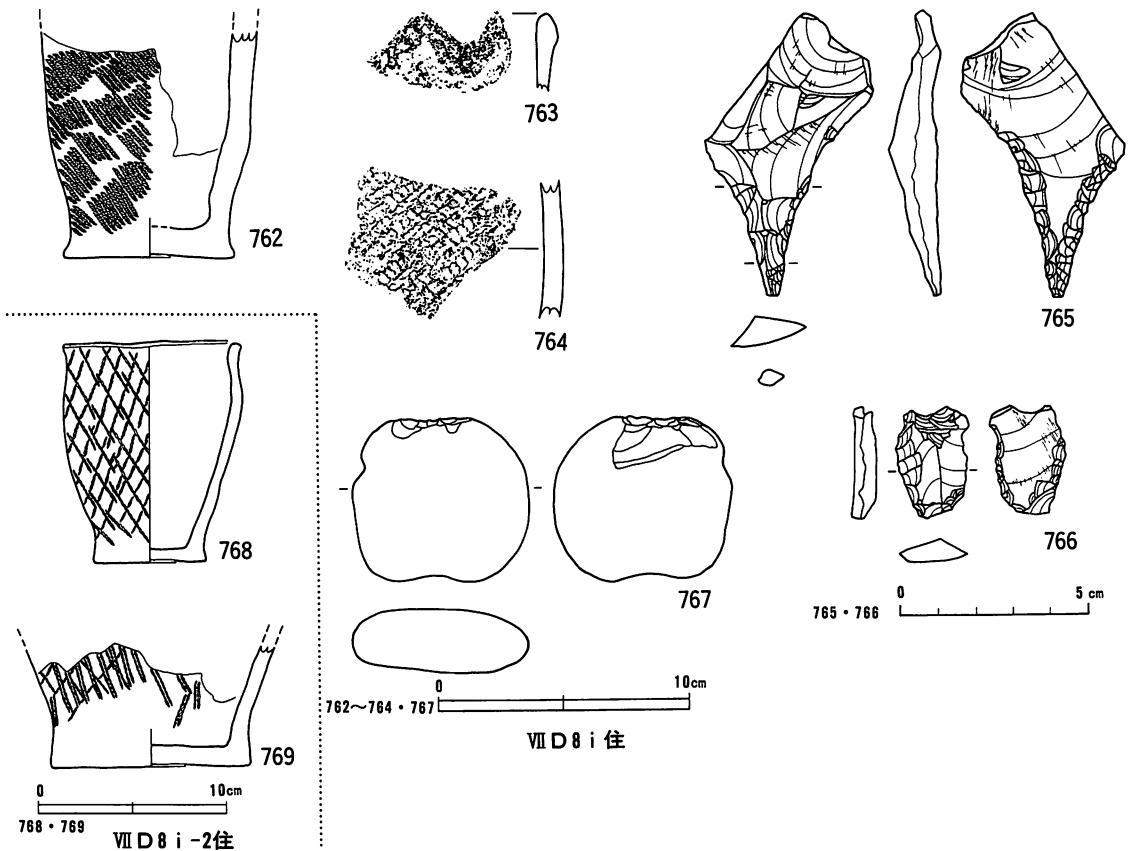
り新しい。

<形状・規模>西側と南側は不明であるが、方形と推定される。規模は、東西3.4m、南北は残存値で3.4mである。

<壁・壁高>上半部は腐植土の黒色土で下半部は基盤層であり、やや外傾する。壁高は東壁14cm、北壁35cmである。

<埋土>締まりある黒褐色土で単層として把握した。

<床・柱穴・施設>北壁寄りには基盤層を床面としているが、南側は標準土層の黒色土に貼り床をしている。厚さ7cmの10YR5/4にぶい黄褐色土を貼り床に用いているが、大半はVII D 8 i 住



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
762	VII D 8 i 住	埋土		L R縦。	-	(9.0)	(12.0)		II 6	185
763	VII D 8 i 住	埋土	鋸歯状裝飾体。帯状に肥厚。						II 6 a 7	185
764	VII D 8 i 住	埋土		繩巻繩文					II 6	185
768	VII D 8 i - 2 住	柱穴内		R 網目状燃糸文。	9.5	6.0	11.6		II 6 b 力	185
769	VII D 8 i - 2 住	床		L 燃糸文。	-	(10.6)	(6.5)		II 6	185

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
765	VII D 8 i 住	埋土	石錐	粘板岩	北上山地	7.5	4.5	1.3	17.35	尖頭部一部欠損。素材の形を大きく残す。		185
766	VII D 8 i 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.9	1.9	0.6	3.69	素材の形を大きく残す。薄い。	I c 2	185
767	VII D 8 i 住	Q 1 埋土	石錐	珪長質凝灰岩	北上山地	6.5	7.1	2.5	185		II	185

第167図 VII D 8 i・VII D 8 i - 2 住居跡出土遺物

居跡に切られて、東側のみ残存する。柱穴は、P6～P8の4個が確定であるが、P5もⅦD8 i 住居跡より先行することから、本住居に属するものと思われる。埋土にはいずれも細かな黄褐色土ブロックを含む。周溝が北壁際と西壁際の一部に巡る。幅10cm深さ14cm程度で埋土は灰黄褐色土で、住居の埋土と異なる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第167図、写真図版185）

〈土器〉床面から600g、埋土から340g出土した。768はP4の埋土から出土した完形品である。口唇部は平らになでられ、外側にめくれるようにやや外反する。外面にススが付着している。

時期 出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅦD8 i - 3 住居跡（遺構番号84）

遺構（第168図、写真図版55）

〈検出状況〉ⅦD8 i - 2 住居跡の精査で、それに先行する壁と焼土を検出した。大半はⅦD8 i - 2 住居跡によって切られ、詳細は不明である。

〈形状・規模〉不明である。

〈壁・壁高〉北壁の一部のみ残存するが、基盤層である黄褐色土で固く締まっており、外傾する。壁高は10cmである。

〈埋土〉ⅦD8 i - 2 住居跡の床面を構成する黒褐色土であり、固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉北側は基盤層である黄褐色土、東側はⅦD8 i - 2 住居跡の貼り床の10cm下で黒褐色土でいずれも固く締まっている。東側の壁はダメ押しによっても確認できず、床面がどこまで広がるかは分からなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。ⅦD8 i 住居跡の周溝によってその中央部を切られ、かつⅦD8 i - 2 住居跡の貼り床の下から検出されている。焼土は70×100cmの不整形に分布し、厚さは最大4cmで、断面形はレンズ状である。

遺物（第168図、写真図版185）

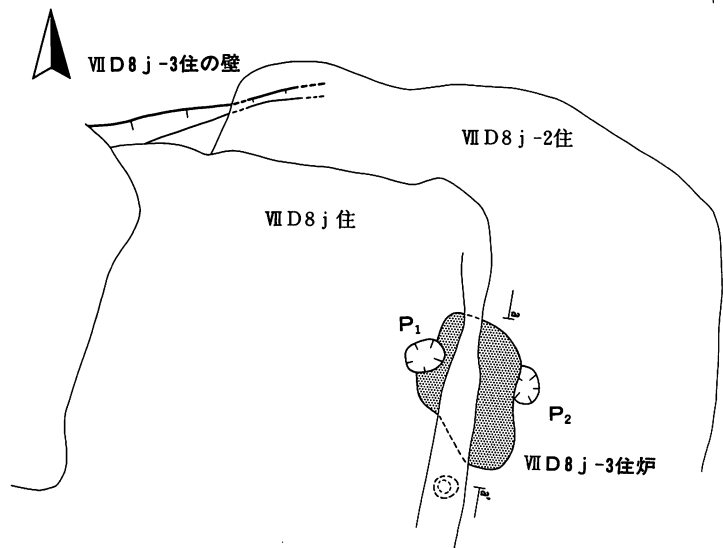
〈土器〉床面から370g、埋土から160g出土した。図示した他には木目状撚糸文の破片がある。

〈石器〉773はエンド方向に階段状の剥離が施されている。ノッチ状の部分も観察される。775はよく研磨され光沢を帯びる。刃部に大きめの刃こぼれが観察される。

時期 重複関係・床面出土土器から、縄文前期後葉から末葉に属すると推定される。

E 338

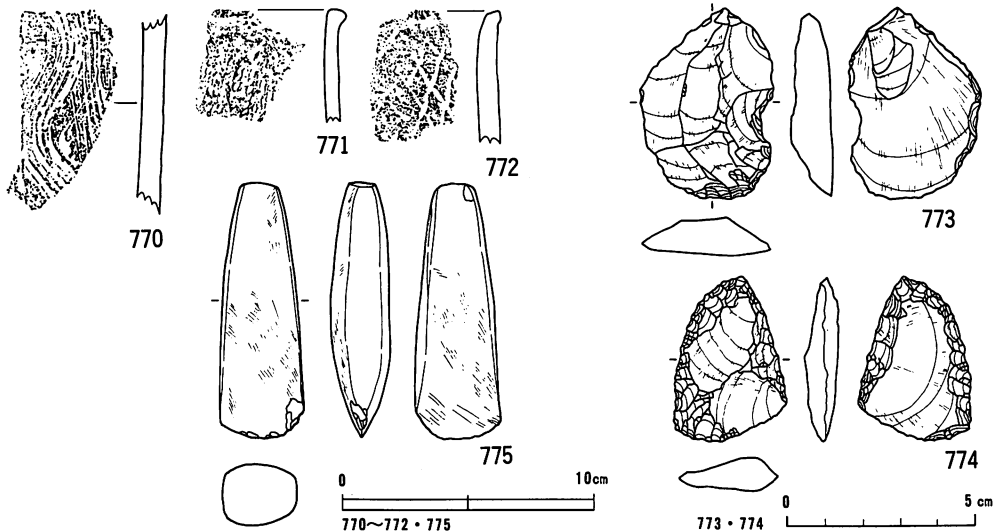
S 189



単位cm		
P 番号	P ₁	P ₂
開口部径	20×26	12×25
深さ	26	6

L = 262.300 m

5XR% 5YR% 赤褐色土 焼土。

S 193
E 334S 193
E 338
0 2 m

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
770	VII D 8 i - 3 住	床面	櫛齒状沈線。						II 9	185
771	VII D 8 i - 3 住	埋土	波状口縁。	L 燃糸文。					II 6	185
772	VII D 8 i - 3 住	床下		R 網目状燃糸文。					II 6	185

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
773	VII D 8 i - 3 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	5.1	3.6	1.1	17.62	ノッチ状の部分あり。	I a 2	185
774	VII D 8 i - 3 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	4.4	3.0	0.9	10.45	扁平。対称性に欠ける。	I b 2	185
775	VII D 8 i - 3 住	床面	磨製石斧	粘板岩	北上山地	10.1	3.3	2.3	130	擦り切り手法。刃こぼれ。	III	185

第168図 VII D 8 i - 3住居跡・出土遺物

ⅦD 9 c 住居跡 (遺構番号85)

遺構 (第169図、写真図版56)

〈検出状況〉西尾根東斜面中腹に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。斜面のため南側の一部は流失している。北側でⅦD 9 c - 2 住居跡と重複する。東西方向および南北方向の埋土断面観察から、本住居のほうが古い。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長方形である。北側部分が重複のため、本住居の範囲は不明であるが、残存値で4.9×4.5mである。

ⅦD 9 c - 2 住居跡の西側に一段高くなっている部分がある。これが本住居の床面である可能性もあるが、埋土はⅦD 9 c - 2 住居跡のものと同じであり同住居のテラス状施設として把握した。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁は上半部は暗褐色土層、下半部は基盤層で、他は暗褐色土層であり、ほぼ直立する。壁高は、南壁9cm、西壁24cm、北壁30cmである。

〈埋土〉3層で構成され、上位は締まりを欠く黒褐色土とやや締まる暗褐色土、下位は締まりを欠く褐色土である。南壁寄りに部分的に粉炭を含む。

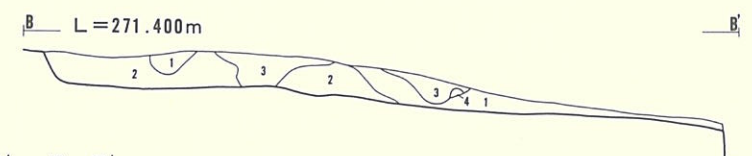
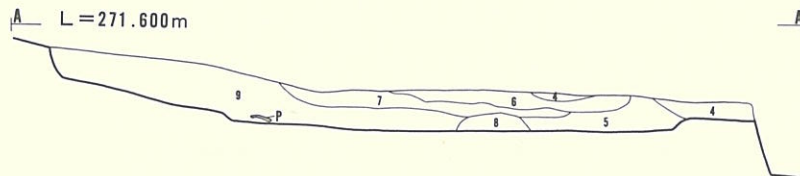
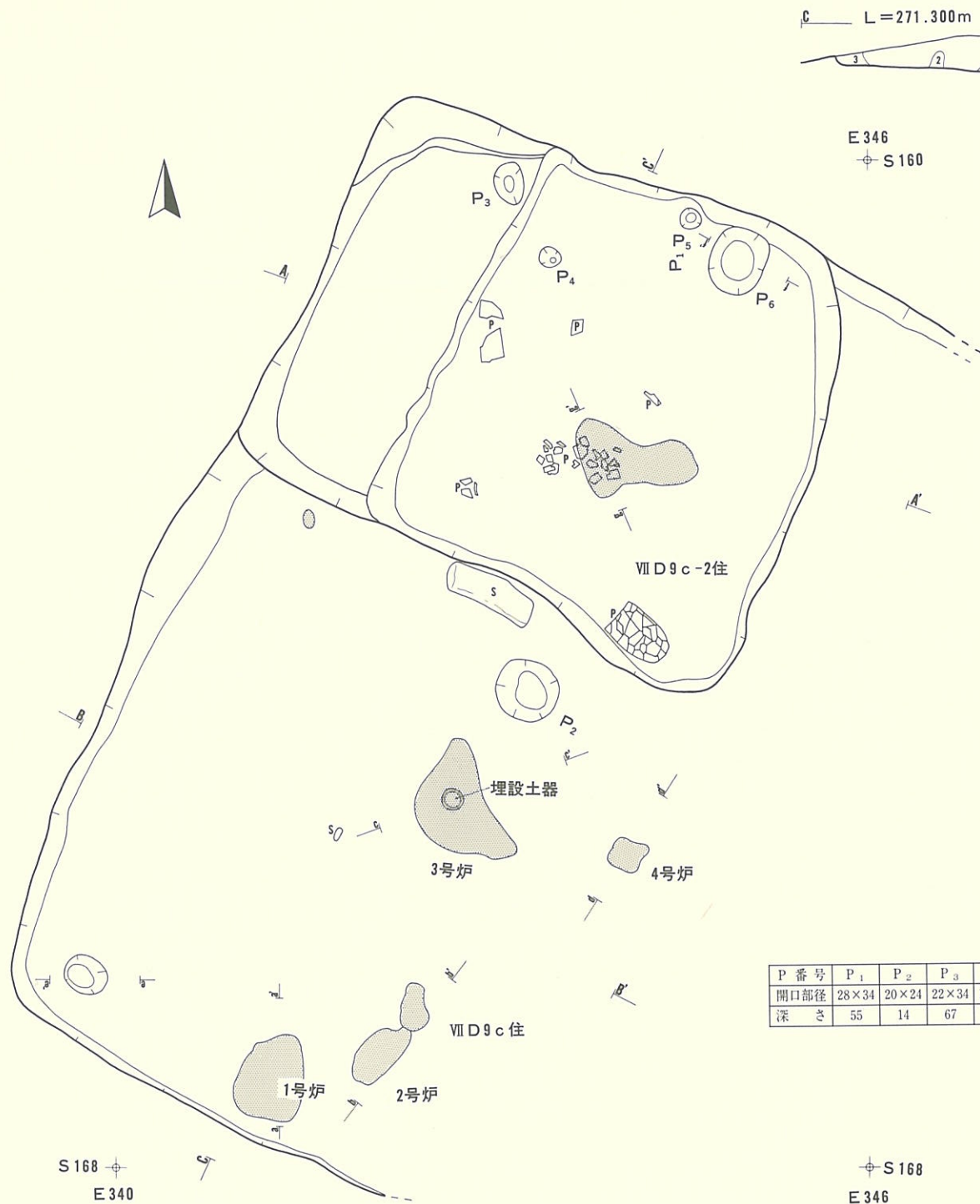
〈床・柱穴・施設〉南西四半分は基盤層を、他は暗褐色土層を床とし、斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴状ピットは3個検出されたが、規模・位置に対応関係は見出だせない。断面形状からはP2は柱穴とはならないであろう。

〈炉〉地床炉が6基検出された。焼土の規模は表に示した。特に1号炉、4号炉は強い焼成を受けている。4号炉のほぼ中央部、焼土の下から埋設された土器が検出された。4号炉と埋設土器との関係は不明であるが、焼土は同土器の上に形成されていること、土器の法量と焼土の範囲などから、土器埋設炉とは性格を異にするとと思われる。

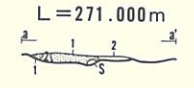
遺物 (第170・171図、写真図版186・187)

〈土器〉本住居とⅦD 9 c - 2 住居跡の床面および埋土から合わせて10kgほど出土しているが、住居の範囲を確認する前にとりあげたものもあり、埋土出土の土器についてはその帰属を明確にすることができないものが多い。776は4号炉の焼土の下から検出された埋設土器である。口唇部の一部に棒状の工具を押圧して装飾性をもたせている。押圧が2単位の部分と4単位以上の部分が、対向してそれぞれ1対あるものと考えられる。777は胴部がややふくらみもち、口縁部で緩やかに外反する。779は縄文施文後に半截竹管により平行沈線が施されるが整正なものではない。

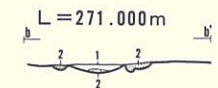
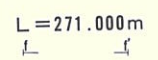
〈石器〉783、786は尖頭部が欠損しているが、前者は縦方向の衝撃によるもの、後者は横折れである。791は扁平でほぼ左右対称であるが尖頭部の形成が弱い。803は両面に自然面を残す。表面の先端部は丁寧な加工が施されている。図示した他にUフレ2点(うち床面1点)、



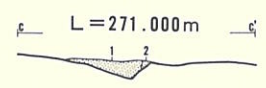
- A...A' B...B'
- | | | | |
|-------------------------------|--------------------|--------------------------------|-----------------|
| 1. 10Y R _{6/2} 黒褐色土 | しまりあり。 | 7. 10Y R _{6/2} 明黄褐色土 | 固くしまっている。 |
| 2. 10Y R _{6/2} 褐色土 | しまりあり。黄褐色土を少量含む。 | 8. 10Y R _{6/2} 褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 3. 7.5Y R _{6/2} 暗褐色土 | しまりあり。 | 9. 10Y R _{6/2} 暗褐色土 | しまりなし。炭化物を少量含む。 |
| 4. 10Y R _{6/2} 暗褐色土 | しまりあり。明黄褐色土を粒状に含む。 | 10. 10Y R _{6/2} 褐色土 | しまりなし。 |
| 5. 10Y R _{6/2} 褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | 11. 10Y R _{6/2} 明黄褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 6. 10Y R _{6/2} 黄褐色土 | しまりあり。明黄褐色土を含む。 | | |



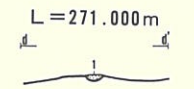
- | | |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 5Y R _{6/2} 明赤褐色土 | 焼土。極めて固くしまっている。 |
| 2. 7.5Y R _{6/2} 褐色土 | しまりあり。 |



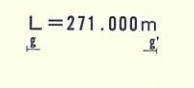
- | | |
|-------------------------------|--------------|
| 1. 10Y R _{6/2} 褐色土 | 固くしまっている。 |
| 2. 10Y R _{6/2} 明黄褐色土 | 焼土。固くしまっている。 |



- | | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 5Y R _{6/2} 赤褐色土 | 焼土。極めて固くしまっている。 |
| 2. 2.5Y R _{6/2} 極暗赤褐色土 | 焼土。極めて固くしまっている。 |



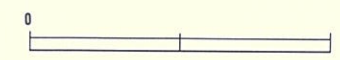
- | | |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 5Y R _{6/2} にぶい褐色土 | 焼土。極めて固くしまっている。 |
|-------------------------------|-----------------|



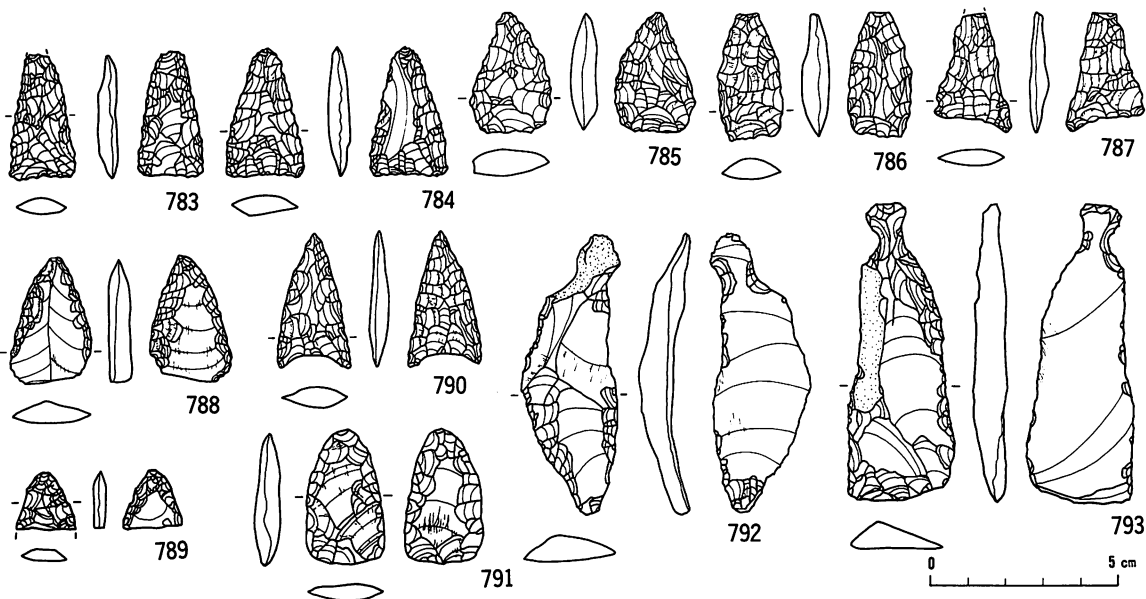
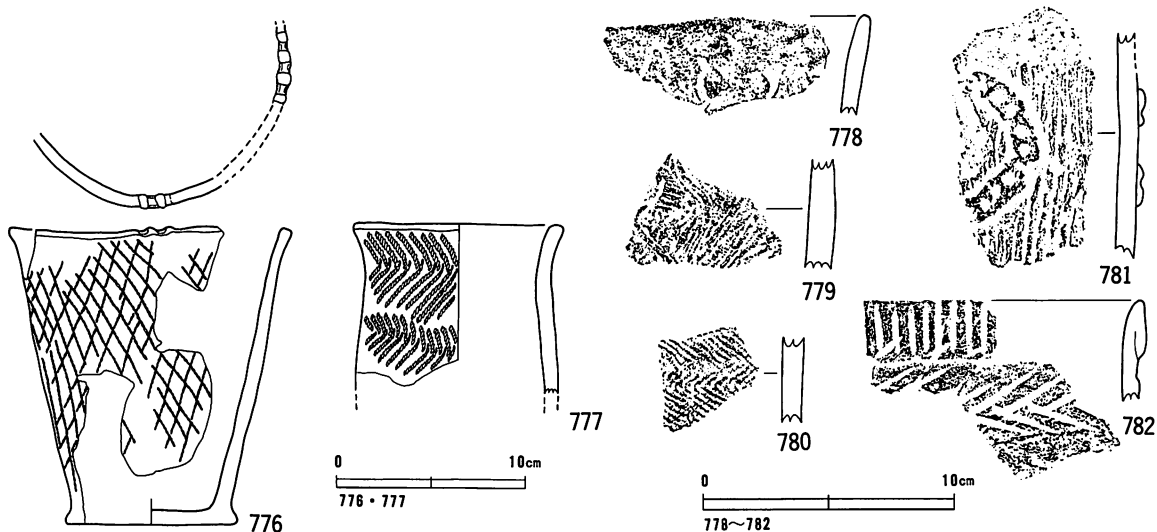
- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1. 5Y R _{6/2} 暗赤褐色土 | 焼土。しまりあり。小角礫を少量含む。 |
| 2. 5Y R _{6/2} にぶい赤褐色土 | しまりなし。
2'は、2層に炭化物を少量含む。 |

	単位cm					
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
開口部径	28×34	20×24	22×34	16×17	16×18	43×54
深さ	55	14	67	47	12	16

S 168
E 346



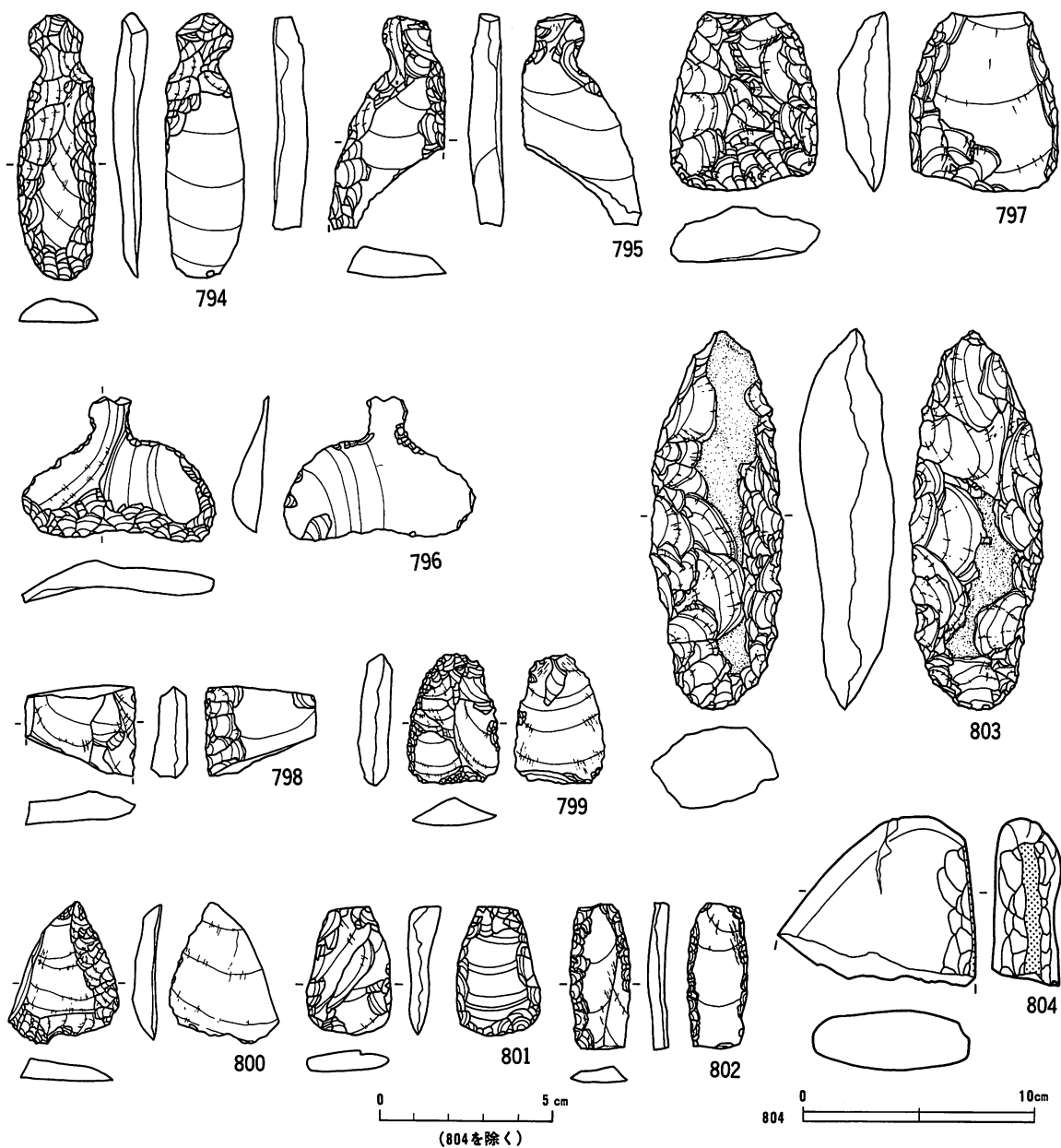
第169図 VII D9c・VII D9c-2住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
776	ⅦD9c住	埋設土器	一部口唇部棒状工具による刻み(2種類4か所?)	R網目状燃糸文。	(15.0)	(9.0)	15.9		Ⅱ6bカ	185
777	ⅦD9c住	埋土		LR×RL第1種結束羽状縄文。	(12.0)	-	(8.7)			185
778	ⅦD9c住	床面		縦位綾絡文。						186
779	ⅦD9c住	床面	半截竹管平行沈線。	RL?						186
780	ⅦD9c住	床面		LR×RL第1種結束羽状縄文。				焼成良好。硬質。黒褐色。		186
781	ⅦD9c住	埋土	隆帯上棒状工具刺突。(底部凹凸あり)	R燃糸文。					Ⅱ6b7	186
782	ⅦD9c住	埋土	沈線(凹線)。						Ⅱ7	186

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
783	ⅦD9c住	埋土	石鏃	硬質泥岩	隼石西部	(3.4)	1.8	0.6	(2.54)		I 1	186
784	ⅦD9c住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.4	2.1	0.6	3.12		I 2	186
785	ⅦD9c住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.2	2.1	0.7	5.26		I 2	186
786	ⅦD9c住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.3	1.7	0.5	3.81		I 3	186
787	ⅦD9c住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	(3.1)	2.0	0.4	(1.65)		Ⅱb 4	186
788	ⅦD9c住	埋土	石鏃	珪質泥岩	隼石西部	2.3	2.1	0.6	4.23		Ⅲ2	186
789	ⅦD9c住	埋土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	隼石西部	(1.5)	1.5	0.3	(0.94)	基部欠損、尖頭器の可能性もある。		186
790	ⅦD9c住	埋土	石鏃	珪質泥岩	隼石西部	3.6	1.9	0.5	2.77		Ⅱe 2	186
791	ⅦD9c住	埋土	尖頭器棒石器	硬質凝灰質泥岩	隼石西部	3.6	2.1	0.5	4.56			186
792	ⅦD9c住	埋土	石匙	硬質泥岩	隼石西部	7.4	2.6	1.3	11.13	打点は先端部。素材の形を大きく残している。	I a 2	186
793	ⅦD9c住	埋土	石匙	硬質泥岩	隼石西部	8.0	2.9	0.9	15.20		I b 2	186

第170図 ⅦD9c住居跡出土遺物



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
794	ⅦD9c住	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	7.7	2.2	0.8	15.63		I b 3	186
795	ⅦD9c住	埋土	石匙	赤色凝灰岩	北上山地	(6.1)	(3.4)	1.0	(15.12)		I	186
796	ⅦD9c住	埋土	石匙	珪質泥岩	礮石西部	4.2	5.5	1.3	12.82	撻器状の刃部。つまみ部の作り出しは弱い。	II b	187
797	ⅦD9c住	埋土	石篋	珪質極細粒凝灰岩	礮石西部	5.1	4.3	1.5	33.31	側縁は粗い加工。	I	187
798	ⅦD9c住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.6	3.2	0.8	8.23		I a 1	187
799	ⅦD9c住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	礮石西部	3.7	2.6	0.8	7.73		I a 2	187
800	ⅦD9c住	床面	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	4.0	3.2	0.6	6.14	典型的なスクレーパーエッジをもつ。	I b 2	187
801	ⅦD9c住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.2	2.0	0.7	6.86		I d 2	187
802	ⅦD9c住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.2	1.8	0.4	5.21	刃部側面観は鋸歯状となる。	I d 2	187
803	ⅦD9c住	埋土	打製石斧	珪質泥岩	礮石西部	10.8	3.9	2.3	101.97	両面に自然面。刃部は丁寧な剥離がある。	II	187
804	ⅦD9c住	埋土	敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	(7.0)	(8.6)	2.4	(240)		III b	187

第171図 ⅦD9c住居跡出土遺物(2)

フレーク7点(うち床面3点)が出土している。

時期 床面出土土器片・重複関係から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅦD9c-2住居跡(遺構番号86)

遺構(第169図、写真図版56)

〈検出状況〉ⅦD9c住居跡と同時に検出した。埋土観察から同住居より新しい。斜面上方にあたる西側の床面が一段高く、テラス状の施設となる。

〈形状・規模〉長軸が等高線にはほぼ直交する長方形で、3.3×4.2mである。

〈壁・壁高〉西壁および北・南壁の一部は基盤層である黄褐色土で他は小角礫を含む暗褐色土層である。西壁は外傾し、他はほぼ直立する。壁高は東壁7cm、南壁25cm、北壁25cmである。

〈埋土〉締まりある褐色～暗褐色土を主体とする。床上では粉炭を含む。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層で、中央から東側にかけては暗褐色土である。柱穴は2個検出された。径はほぼ等しいが深さが大きく異なり、対応するものとは考えにくい。

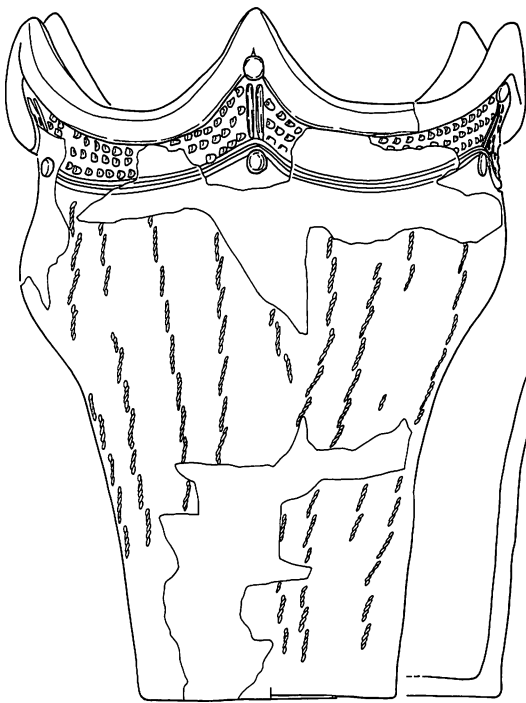
〈炉〉地床炉1基を検出した。焼土は29×101cmの不整形に分布し、厚さは最大3cmである。断面はレンズ状で固く締まっている。

遺物(第172～174図、写真図版187～189)

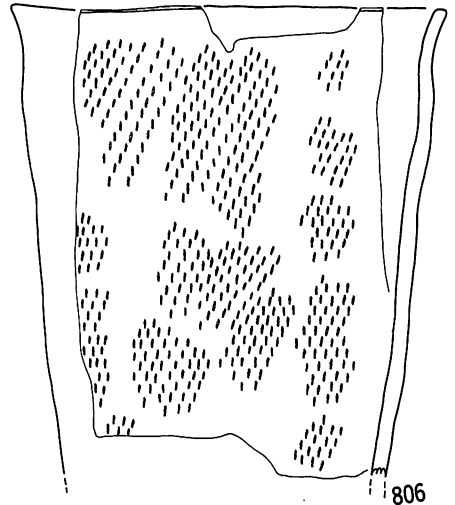
〈土器〉810は南東壁際に横倒しの状態で一括出土した土器である。埋設土器の可能性を考えて精査したが、掘り込みは確認できなかった。口縁部は欠損しているので器形は明らかではないが、胴中央部が膨らむ。地文は2段の縄を縦回転したもので、無文帯は磨り消したのではなく無施文によるものである。内部の土は住居埋土の最下層土にはほぼ等しい。805、808、806は床面からの出土である。805は折り返しによる複合口縁で6つの頂部を有する大波状口縁である。頂部の隆帯下と口縁部文様帯の下端にボタン状の小突起が貼り付けられる。口縁部は半截竹管の内面を用いた平行沈線で文様帯を区画し、その間を円形の竹管による斜位の刺突文によって充填する。806の地文は2段の縄を用いた多軸絡条体による。807は上面観が花卉状口縁の変形となる。口縁部に棒状工具により沈線を施し、頸部には扁平な粘土紐を貼り付け、その上には爪形の圧痕を施す。地文は806に類似しており多軸絡条体であると思われるが、節が若干異なる。原体復元はできなかった。821は波長単位が大きい花卉状口縁である。

〈石器〉823は形にまとまりがあるが尖頭部を意識した加工はしていない。831は側面観が鋸歯状となる。835は石斧の欠損品であるが、全体的に敲打痕が残る。図示した他に岩手火山起源の溶岩1点、フレーク13点(うち1点が床面)が出土している。

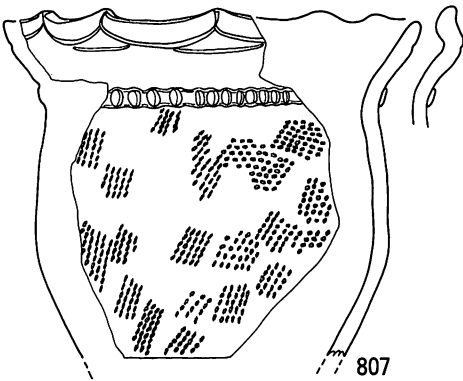
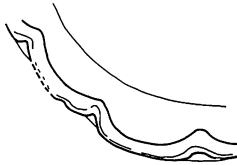
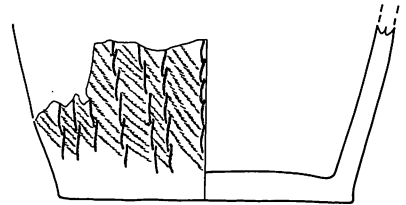
時期 床面出土土器から、縄文前期末葉に属すると考えられる。



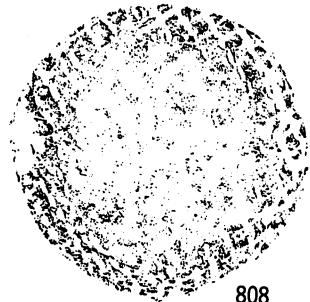
805



806



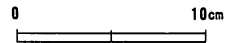
807



808

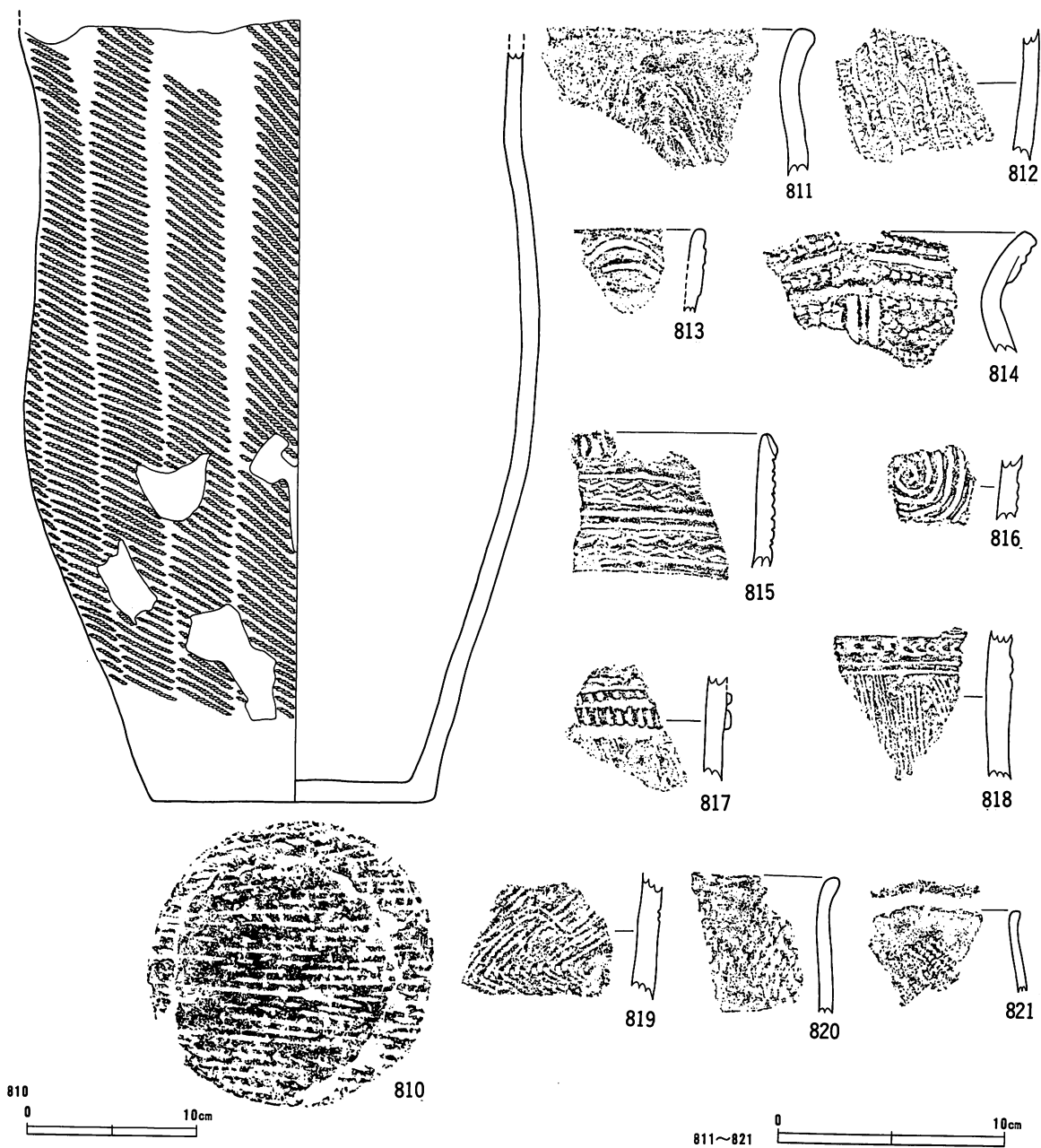


809



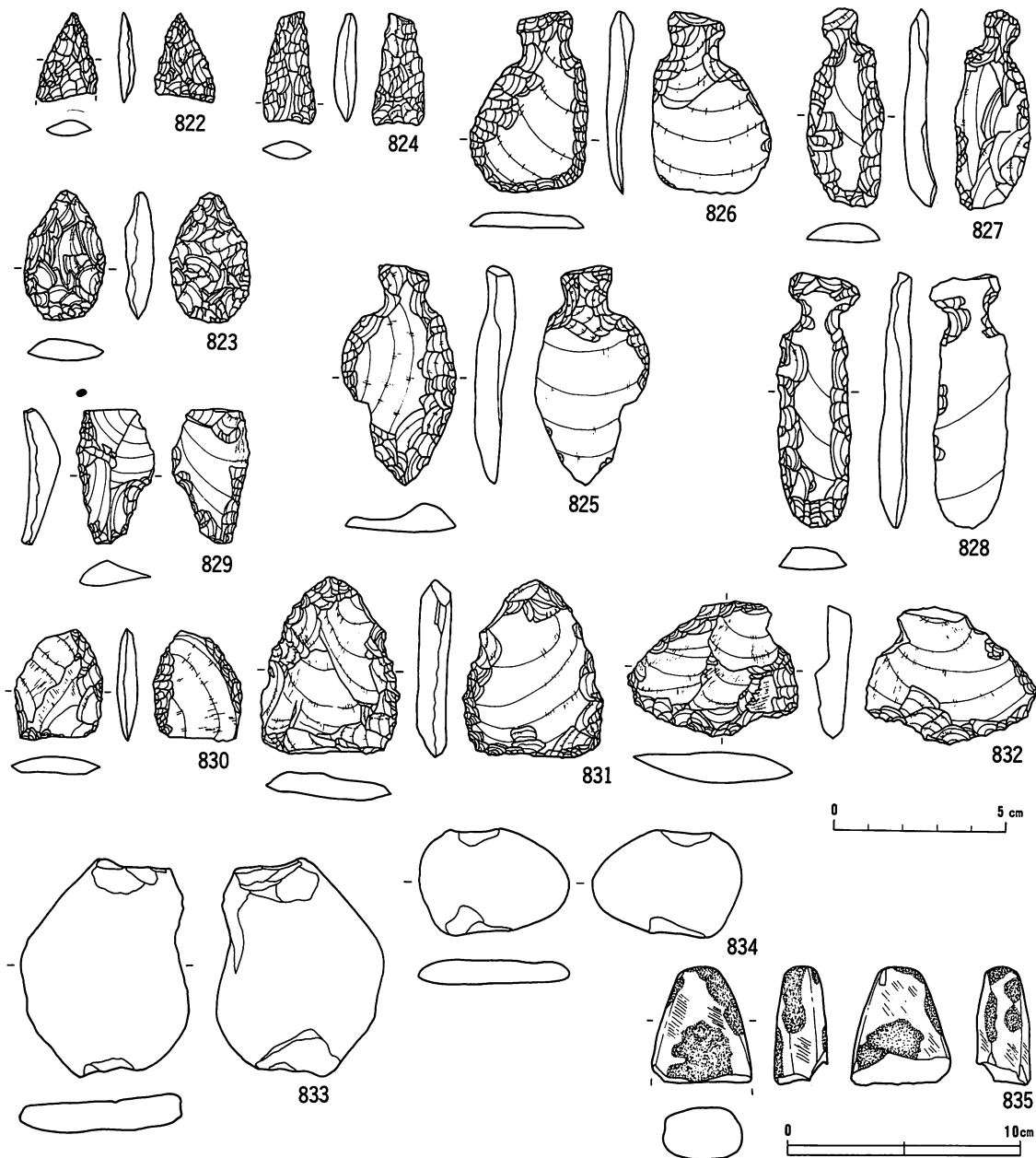
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
805	VII D 9 c - 2 住	床面	波状口縁、複合口縁、頂部下ボタン状突起、沈線、棒状工具による右方向からの割裂。	縦位綾結文。	26.0	13.5	36.7		II 7 b	187
806	VII D 9 c - 2 住	床面		多軸結条体。	(23.2)	—	(25.0)			188
807	VII D 9 c - 2 住	床面	変形花卉状口縁、隆帯上指頭状圧痕（爪跡顕著）	多軸結条体(詳細不明)	(22.2)	—	(18.5)			188
808	VII D 9 c - 2 住	床面		L 縦、縦位綾結文。	—	15.7	(9.2)			188
809	VII D 9 c - 2 住	埋土		R L 横。	—	(6.4)	(3.4)			188

第172図 VII D 9 c - 2住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
810	VII D 9c-2 住	床面	縦位に無文帯あり。	L R 縦。	-	17.0	(47.0)			188
811	VII D 9c-2 住	床面		R 2 条による木目状燃糸文。					II 6	188
812	VII D 9c-2 住	床面		縄巻縄文						188
813	VII D 9c-2 住	埋土	沈線 (凹線)。						II 7	188
814	VII D 9c-2 住	埋土	竹管刺突 (外面を使用)。沈線 (凹線)。						II 7 b	188
815	VII D 9c-2 住	埋土	三角形彫刻文。半截竹管平行沈線。						III 1 a	188
816	VII D 9c-2 住	埋土	沈線 (凹線)。						III 1	188
817	VII D 9c-2 住	埋土	隆帯上棒状工具による刻み。	R 燃糸文。						188
818	VII D 9c-2 住	埋土	半截竹管刺突。沈線。	L 木目状燃糸文。						188
819	VII D 9c-2 住	埋土	半截竹管平行沈線。	L R × R L 第 1 種結束羽状縄文。						188
820	VII D 9c-2 住	埋土		L R 多軸絡糸体。						188
821	VII D 9c-2 住	埋土	花卉状口縁。	R L 横。					II 6 b Ⅰ	188

第173図 VII D 9c-2住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
822	VII D9 c-2 住	埋土	石鏃	凝灰岩	礮石西部	2.5	1.7	0.5	1.20		II b 2	188
823	VII D9 c-2 住	埋土	尖頭器縁石器	珪質泥岩	礮石西部	3.7	2.3	0.6	6.39			189
824	VII D9 c-2 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.1	1.5	0.5	2.26		I 4	189
825	VII D9 c-2 住	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	6.3	2.2	1.0	14.42		I a 1	189
826	VII D9 c-2 住	埋土	石匙	珪質泥岩	礮石西部	5.2	3.4	0.7	13.05		I b 1	189
827	VII D9 c-2 住	埋土	石匙	粘板岩	北上山地	5.7	2.2	1.0	9.03	打点は横。	I b 3	189
828	VII D9 c-2 住	埋土	石匙	砂質粘板岩	北上山地	7.3	2.4	0.8	14.46	打点はつまみ方向。	I b 3	189
829	VII D9 c-2 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.8	2.2	1.1	5.73		I c 1	189
830	VII D9 c-2 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.2	2.5	0.5	4.33	扁平。対称性には欠けるが縁加工。	I b 2	189
831	VII D9 c-2 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	5.1	4.0	0.7	18.85		II	189
832	VII D9 c-2 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.9	4.9	0.9	14.79	粗い剝離	IV	189
833	VII D9 c-2 住	ベルト埋土	石鏃	凝灰岩千枚岩	北上山地	9.3	7.3	1.3	135		I	189
834	VII D9 c-2 住	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	4.5	6.5	1.1	50		II	189
835	VII D9 c-2 住	埋土	磨製石斧	凝灰岩	北上山地	(5.1)	(4.4)	2.4	(80)			189

第174図 VII D9 c-2住居跡出土遺物(3)

ⅦD9f 住居跡 (遺構番号87)

遺構 (第175図、写真図版57)

<検出状況>西尾根南東斜面中腹に位置する。小角礫を含む暗褐色土層上面で検出した。東側は壁の立上りを確認できなかった。南側は斜面のため流失している。

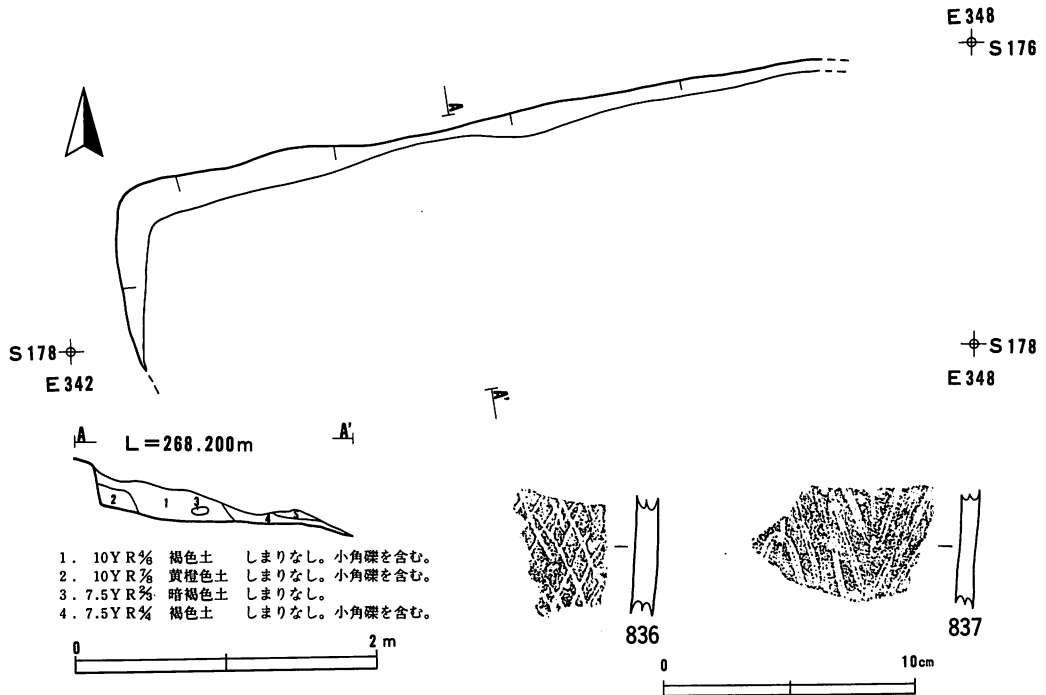
<形状・規模>詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、残存値で東西5m、南北1.8mである。

<壁・壁高>基盤層である明褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は西壁41cm、北壁34cmである。

<埋土>締まりを欠く褐色～黄褐色土を主体とし、壁際にはやや大きめの礫を含む黄褐色土が堆積する。崩落土と考えられる。

<床・柱穴・施設>北壁寄りには基盤層である明褐色土で、南側は褐色土である。斜面に沿ってやや傾斜し、比高15cm程である。柱穴は検出されなかった。

<炉>検出されなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部口径	器高	備考	分類	写真
836	ⅦD9f住	埋土		R網目状燃系文。					Ⅱ6	190
837	ⅦD9f住	埋土		L木目条燃系文。					Ⅱ6	190

第175図 ⅦD9f 住居跡・出土遺物

遺物（第175図、写真図版190）

<土器>埋土から610g出土した。図示した他に縦位綾絡文の胴部破片が出土している。

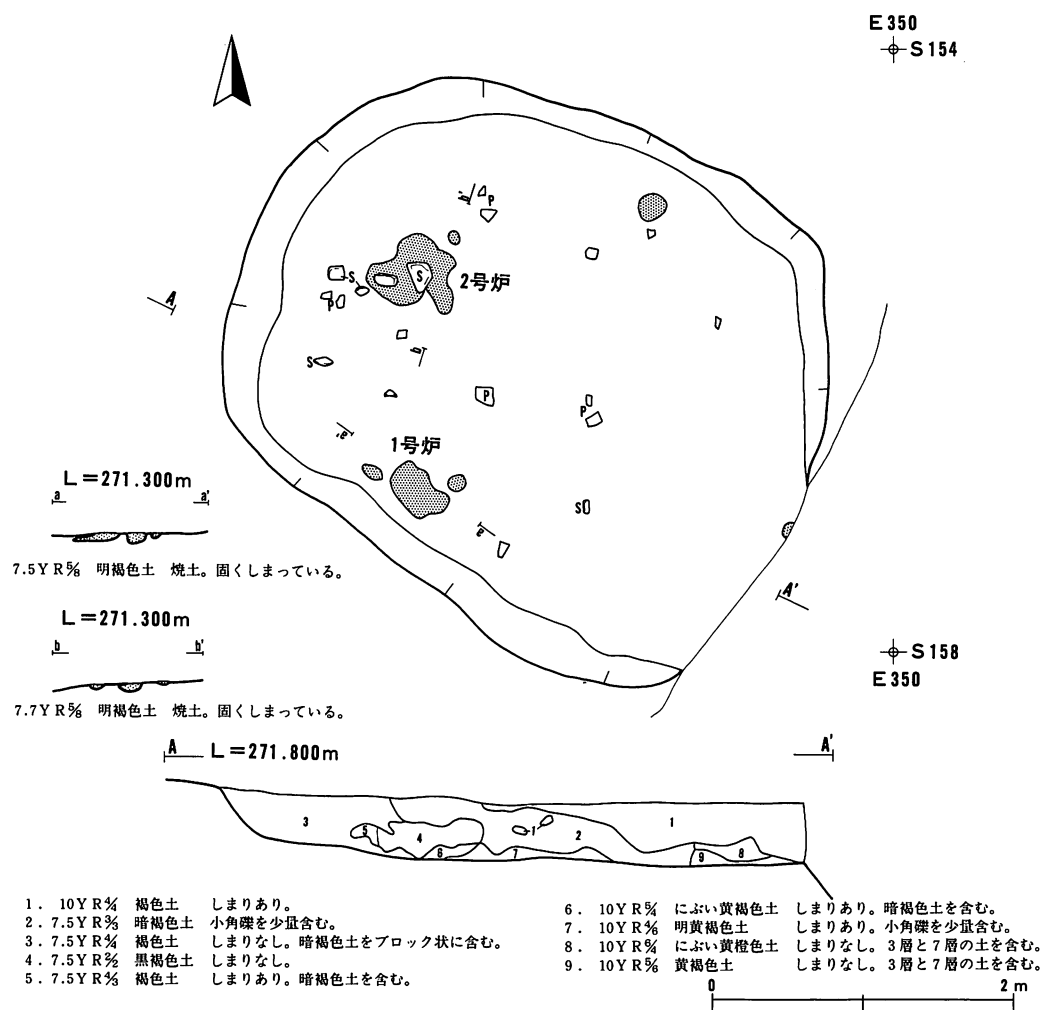
<石器>フレークが7点埋土から出土してたのみである。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代後葉から末葉に属すると考えられる。

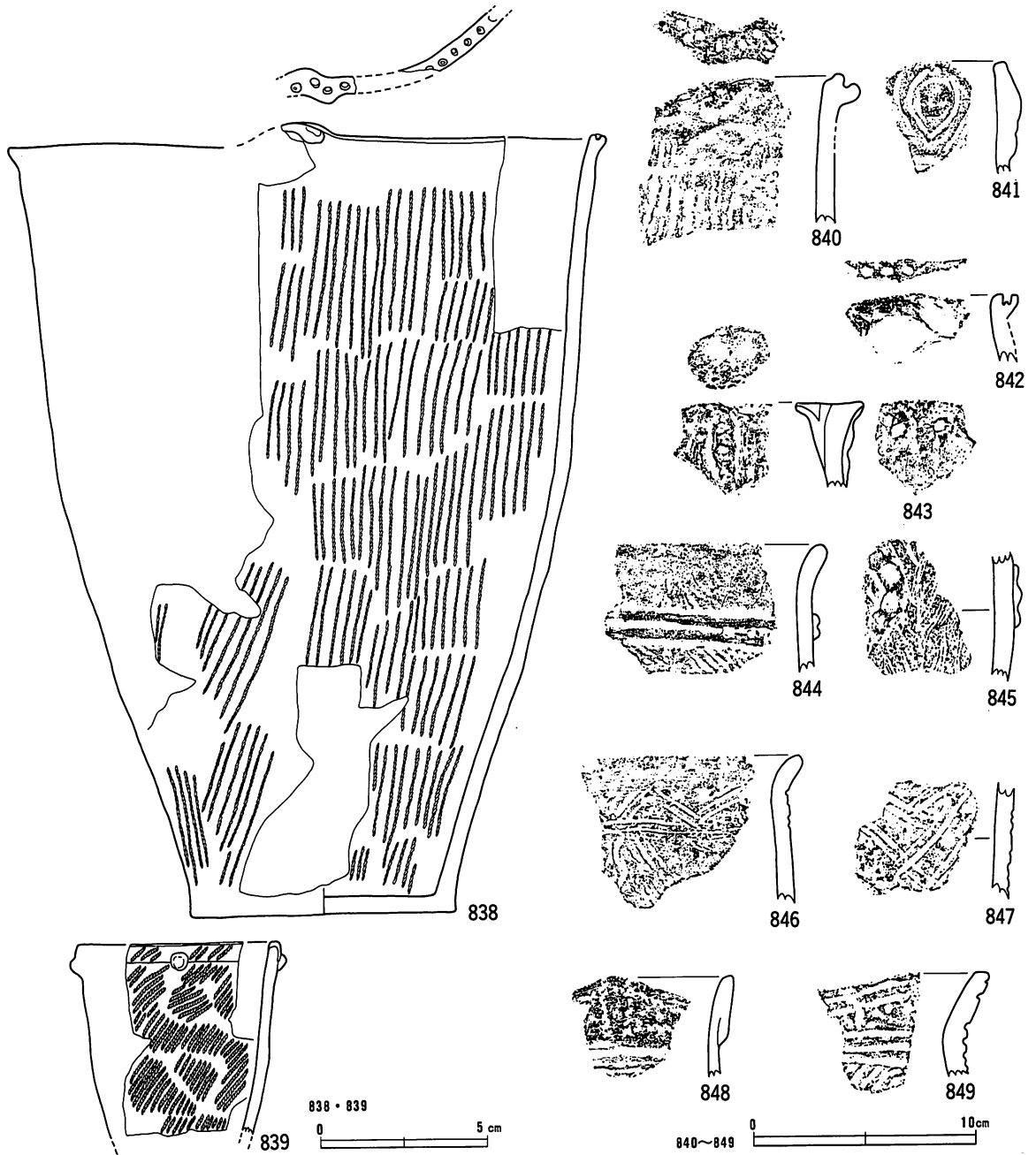
VII D 0 b 住居跡（遺構番号88）

遺構（第176図、写真図版57）

<検出状況>西尾根東斜面中腹に位置する。再堆積層上面で検出した。東側は試掘トレンチに

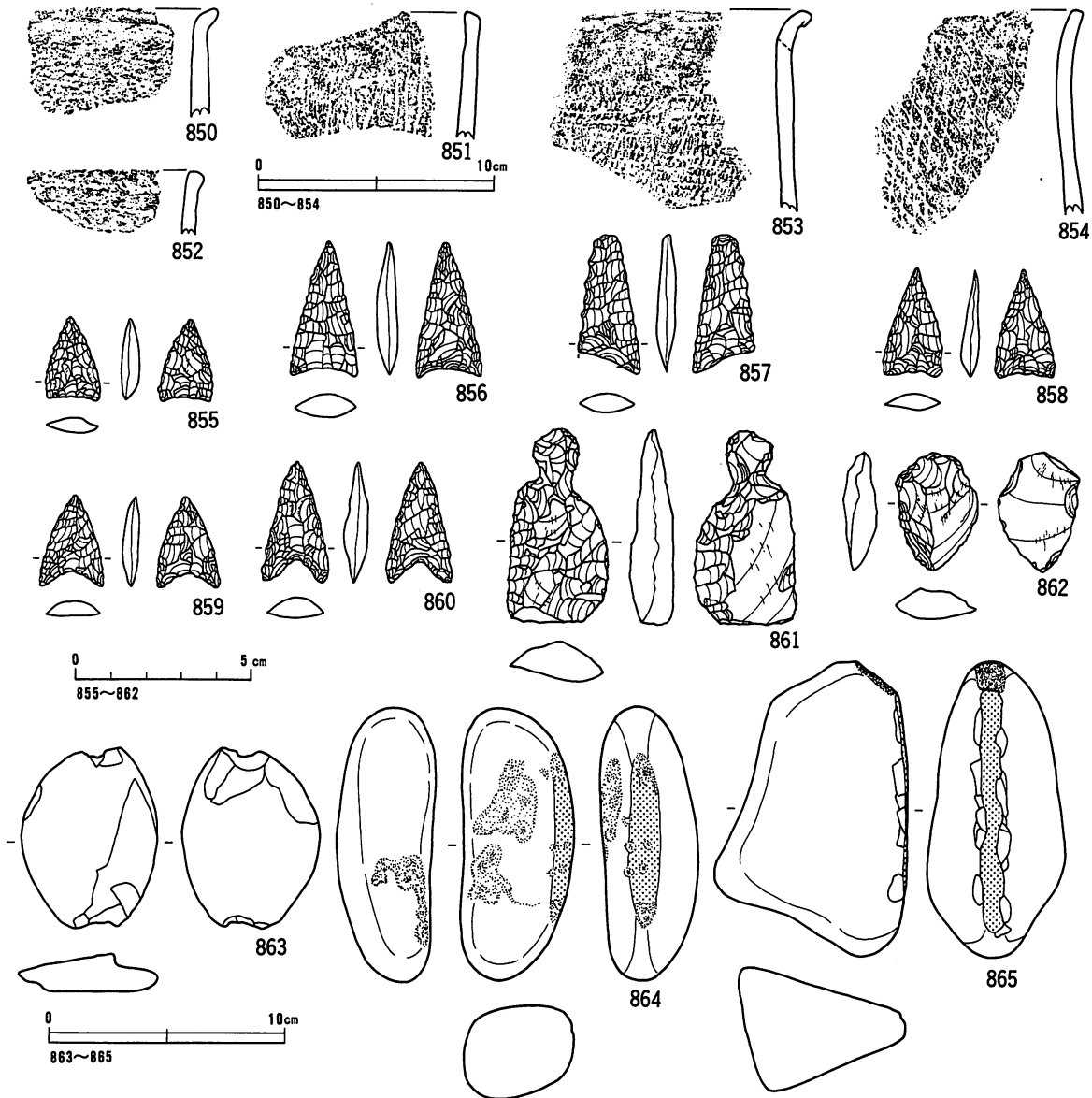


第176図 VII D 0 b 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
838	VII D 0 b 住	床面	鋸歯状裝飾体、口唇部と裝飾体上竹管刺突。	L 燃糸文。	(36.0)	16.0	47.6	840、842と同一個体。	II 6 a 7	190
839	VII D 0 b 住	埋土	複合口縁、ボタン状突起。	L R 横。	(12.0)	-	(11.6)	瘤状貼付。		190
840	VII D 0 b 住	床面	鋸歯状裝飾体。口唇部に竹管刺突。	L 燃糸文。				838、842と同一個体。	II 6 a 7	190
841	VII D 0 b 住	床直上	沈線。						II 7	190
842	VII D 0 b 住	床面	口唇部竹管刺突。					838、840と同一個体。	II 6 a 7	190
843	VII D 0 b 住	埋土	口縁部裝飾体。母帯上指頭状圧痕。上面2個の穿孔。	R 燃糸文。					II 6 a 7	190
844	VII D 0 b 住	埋土	母帯上沈線(凹線)。一部竹管刺突。	L 縦。縦位綾絡文。					II 6 b 4	190
845	VII D 0 b 住	埋土	母帯上指頭状圧痕。	R 2条による木目状燃糸文。					II 6 b 7	190
846	VII D 0 b 住	埋土	半截竹管平行沈線。鋸歯状。	L R 縦。縦位綾絡文。					III 1	190
847	VII D 0 b 住	埋土	半截竹管平行沈線。					胎土に粗砂多く含む。	II 7	190
848	VII D 0 b 住	埋土	L R 側面圧痕。						II 1	190
849	VII D 0 b 住	埋土	波状口縁。沈線。						III 1	190

第177図 VII D 0 b 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
850	ⅦD0b住	埋土		多軸絡条体? (原体不明)。						190
851	ⅦD0b住	埋土	波状口縁。	R撚糸文。					Ⅱ6	190
852	ⅦD0b住	埋土	L R側面圧痕。						Ⅱ8a	190
853	ⅦD0b住	埋土		多軸絡条体。						190
854	ⅦD0b住	埋土		R網目状撚糸文。				外面スス付著。	Ⅱ6bカ	190

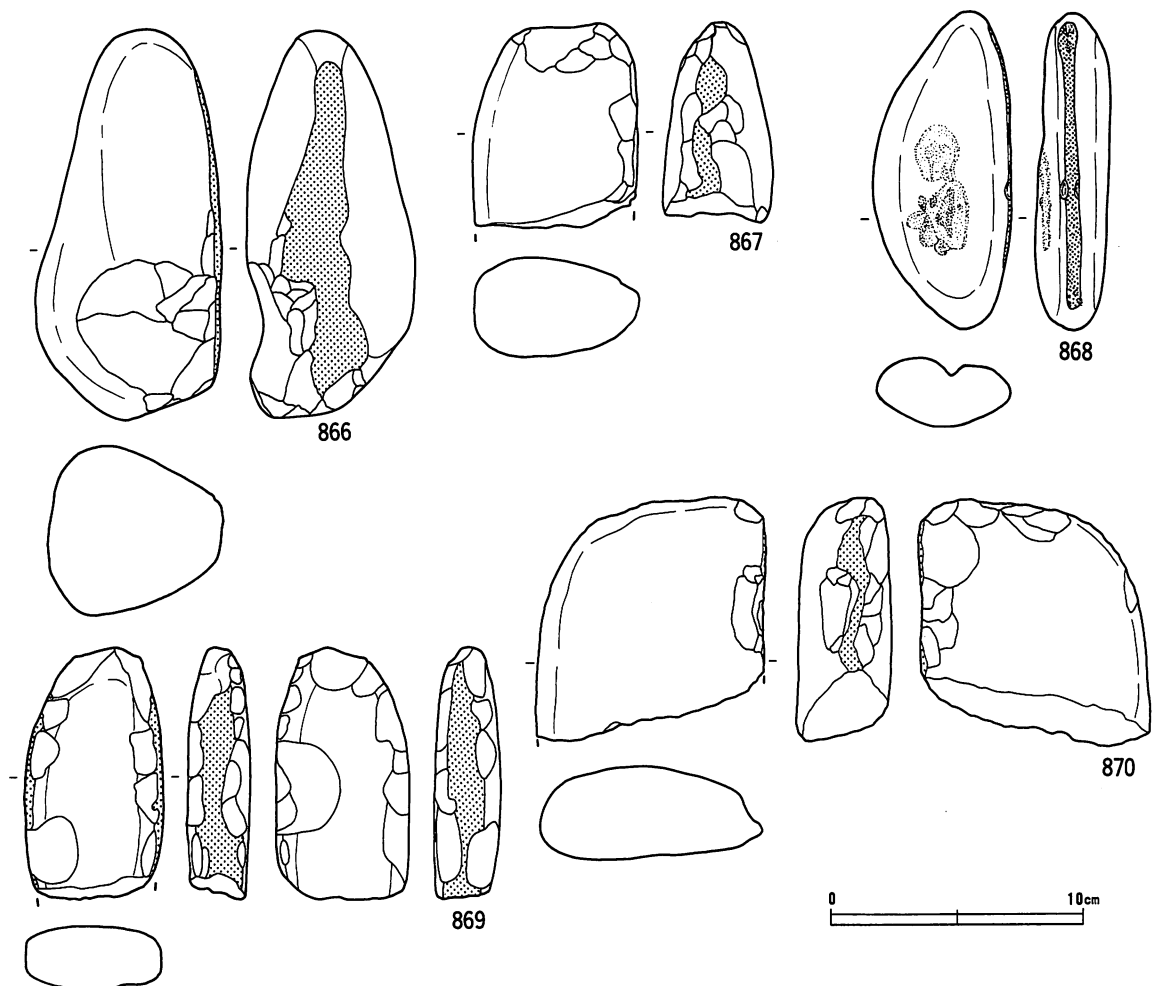
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
855	ⅦD0b住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.2	1.5	0.5	1.33		Ⅱa2	190
856	ⅦD0b住	ベルト埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.8	1.9	0.6	3.02		Ⅱb1	190
857	ⅦD0b住	埋土	石鏃	流紋岩	礮石	3.9	1.7	0.5	(2.98)		Ⅱb1	190
858	ⅦD0b住	埋土	石鏃	泥質凝灰岩	礮石西部	3.0	1.7	0.4	1.94		Ⅱb2	190
859	ⅦD0b住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	2.5	1.8	0.4	1.53		Ⅱb2	190
860	ⅦD0b住	埋土下位	石鏃	泥質凝灰岩	礮石西部	3.4	1.9	0.5	2.43	挟りの部分大きい。	Ⅱc2	191
861	ⅦD0b住	埋土	石匙	泥質凝灰岩	礮石西部	5.5	2.9	1.2	17.27		Ⅰb1	191
862	ⅦD0b住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.3	2.3	1.0	6.26		Ⅰa1	191
863	ⅦD0b住	埋土	石鏃	凝灰岩	北上山地	7.5	5.8	1.6	100		Ⅰ	191
864	ⅦD0b住	埋土	被磨器類A群	凝灰質硬砂岩	北上山地	11.5	4.4	3.8	295	+凹石。	Ⅰa1	191
865	ⅦD0b住	埋土下位	被磨器類A群	硬砂岩	北上山地	12.4	8.1	5.1	660		Ⅰa1	191

第178図 ⅦD0b住居跡出土遺物(2)

より一部削剥されている。本住居の床面下からⅦD0b-2住居跡、ⅦD0b-3住居跡、ⅦD0b-4住居跡が検出された。本住居が最も新しい。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ直交する不整な楕円形で、短軸3.4m、長軸4mである。

〈壁・壁高〉小角礫含みの暗褐色土層を壁とし、やや外傾する。壁高は西壁36cm、南壁33cm、北壁48cmである。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	分類
866	ⅦD0b住	埋土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	15.4	7.5	6.6	1010		I a 2	191
867	ⅦD0b住	埋土	敲磨器類A群	凝灰岩	北上山地	(8.0)	6.6	4.3	(350)		I b 2	191
868	ⅦD0b住	埋土	敲磨器類A群	珪長質凝灰岩	北上山地	12.5	5.5	2.4	230	+凹石。	II a 1	191
869	ⅦD0b住	埋土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(9.8)	5.4	2.5	(220)	磨面2面。	II b 2	191
870	ⅦD0b住	埋土	敲磨器類A群	灰質硬砂岩	北上山地	(9.7)	9.0	3.7	(490)		III b 2	191

第179図 ⅦD0d住居跡出土遺物(3)

〈埋土〉暗褐色土から褐色土を主体として明瞭に区分できる層位を示す。自然堆積と思われる。

〈床・柱穴・施設〉北半部はⅦD0b-3住居跡の埋土を、南半部はⅦD0b-2住居跡の埋土をそれぞれ床面とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土を4箇所検出したが、うち2箇所は層厚もなく淡いものである。残る2箇所については、断面観察から地床炉と考えられる。南壁寄りのものを1号炉、西壁寄りのものを2号炉とする。1号炉の焼土は26×48cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大8cmである。2号炉の焼土は40×50cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。いずれも固く締まっている。

遺物（第177～179図、写真図版190・191）

〈土器〉床面から460g、埋土から12360g出土した。838は床面と埋土の破片を接合したものである。840も同一個体である。口縁部に鋸歯状の装飾体が貼り付けられ、その上面には円形竹管が、装飾体に沿って鋸歯状に連続的に刺突される。平縁部分にも、その口唇部に装飾体部分と同様の竹管刺突が施される。839は埋土出土である。折り返しによる複合口縁をなしその境界部分にボタン状の突起が貼り付けられている。地文は成形後に、折り返し部分を含め器面全体に施される。内面は棒状工具により調整されている。846は半（多？）截竹管による平行沈線で鋸歯状文が口頸部に巡る。沈線は浅い。850は節が縦横斜めにそれぞれ揃っていること、および個々の節が左から右方向に突き刺さるように表れていることなどが特徴である。原体は不明である。

〈石器〉図示したものの他に、半円状花崗岩質岩が埋土下位から2点、フレイクが17点埋土から出土している。

時期 床面出土土器から、縄文前期後葉に属すると考えられる。

ⅦD0b-2住居跡（遺構番号89）

遺構（第187図、写真図版58）

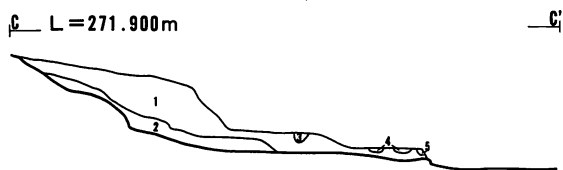
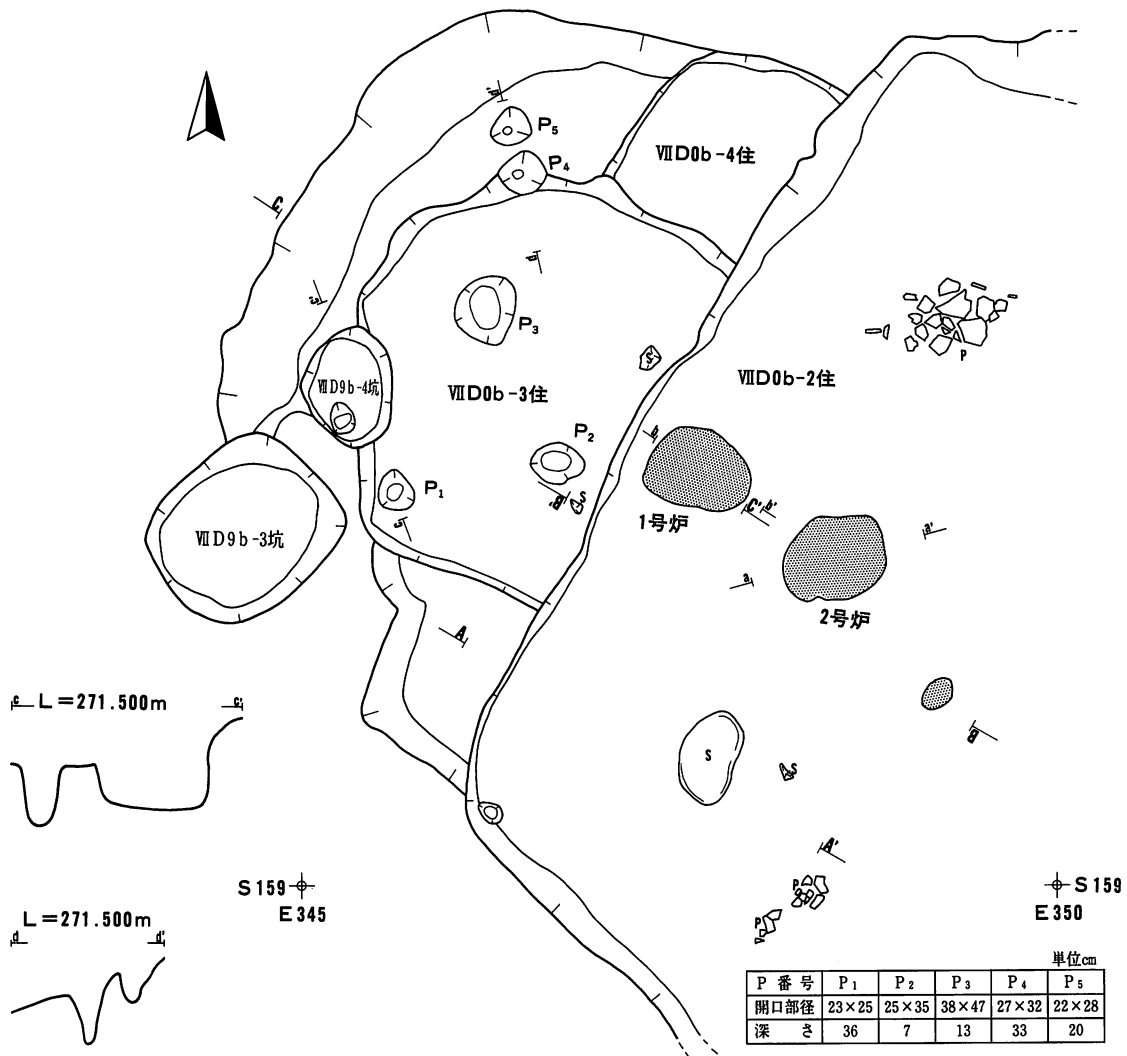
〈検出状況〉ⅦD0b住居跡の床面下から検出された。南側は斜面のため流失している。

北側でⅦD0b-3住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。ⅦD0b-3住居跡の床面より本住居のそれは15cm程低い。

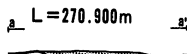
〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形であると推定される。規模は長軸6.5m、短軸は残存値で2.75mである。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっている。壁高は、西壁8cm、南壁20cm、北壁23cmである。

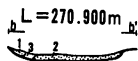
〈埋土〉暗褐色土～褐色土を主体とし、ⅦD0b住居跡の壁および床面を構成していた層は固



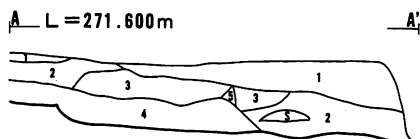
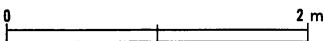
1. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。炭化物を少量含む。
2. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりあり。炭化物を含む。
3. 2.5Y R% 赤褐色土 固くしまっている。(VII D0b 住のもの)
4. 7.5Y R% 黒褐色土 しまりなし。
5. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。焼土粒を少量含む。



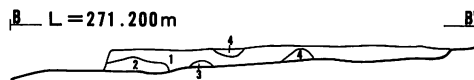
- 5Y R% 明黄褐色土 焼土。固くしまっている。



1. 2.5Y R% 橙褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 2.5Y R% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
3. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。



1. 10Y R% 暗褐色土 しまっている。小角礫を含む。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。小角礫を極く少量含む。
3. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
4. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。
5. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物を少量含む。



1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
2. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。
3. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
4. 10Y R% 黒褐色土 しまっている。

第180図 VII D0b-2・VII D0b-3・VII D0b-4住居跡

く締まっているものの、より下層は締まりを欠く。下位には粉炭を少量含む。

〈床・柱穴・施設〉北壁は基盤層を、南側は小角礫含みの暗褐色土層を床面とする。全体的に固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が3箇所検出された。うち1基は範囲も狭く発光も淡いが、残る2基は地床炉と考えられる。西壁寄りのものを1号炉、1号炉の東側に位置するものを2号炉とする。1号炉の焼土は、50×70cmの楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。2号炉の焼土は60×70cmの楕円形状に分布し、厚さは最大5cmである。

遺物（第181図、写真図版192・193）

〈土器〉床面から5235g、埋土から4750g出土した。871は原体の末端片結びによる綾絡文が縦位に展開する。872は緩い波状口縁をなすものらしい。873は底部外面の断面形が鋭角をなして外側に強く張り出す。底面は平坦である。874・875の装飾体は内側が欠損している。

〈石器〉図示した他にUフレ2点が埋土から出土している。

時期 床面出土土器・重複関係から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

ⅦD0b-3住居跡（遺構番号90）

遺構（第180図、写真図版58）

〈検出状況〉ⅦD0b住居跡の床面下から検出した。他にⅦD0b-2住居跡、ⅦD0b-4住居跡、ⅦD9b-4土坑と重複する。ⅦD0b-2住居跡、ⅦD9b-4土坑との新旧関係は不明である。本住居の埋土断面観察からⅦD0b-4住居跡の方が古い。

〈形状・規模〉東側は不明であるが方形を基調とするものと推定される。規模は南北2.7m、東西残存値で、2.6mである。ただし、西壁はかなり崩れている。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっている。西壁は段を有し緩やかに立ち上がり、これは崩落しているものと考えられる。壁高は西壁50.5cm、北壁8cm、南壁13cmである。

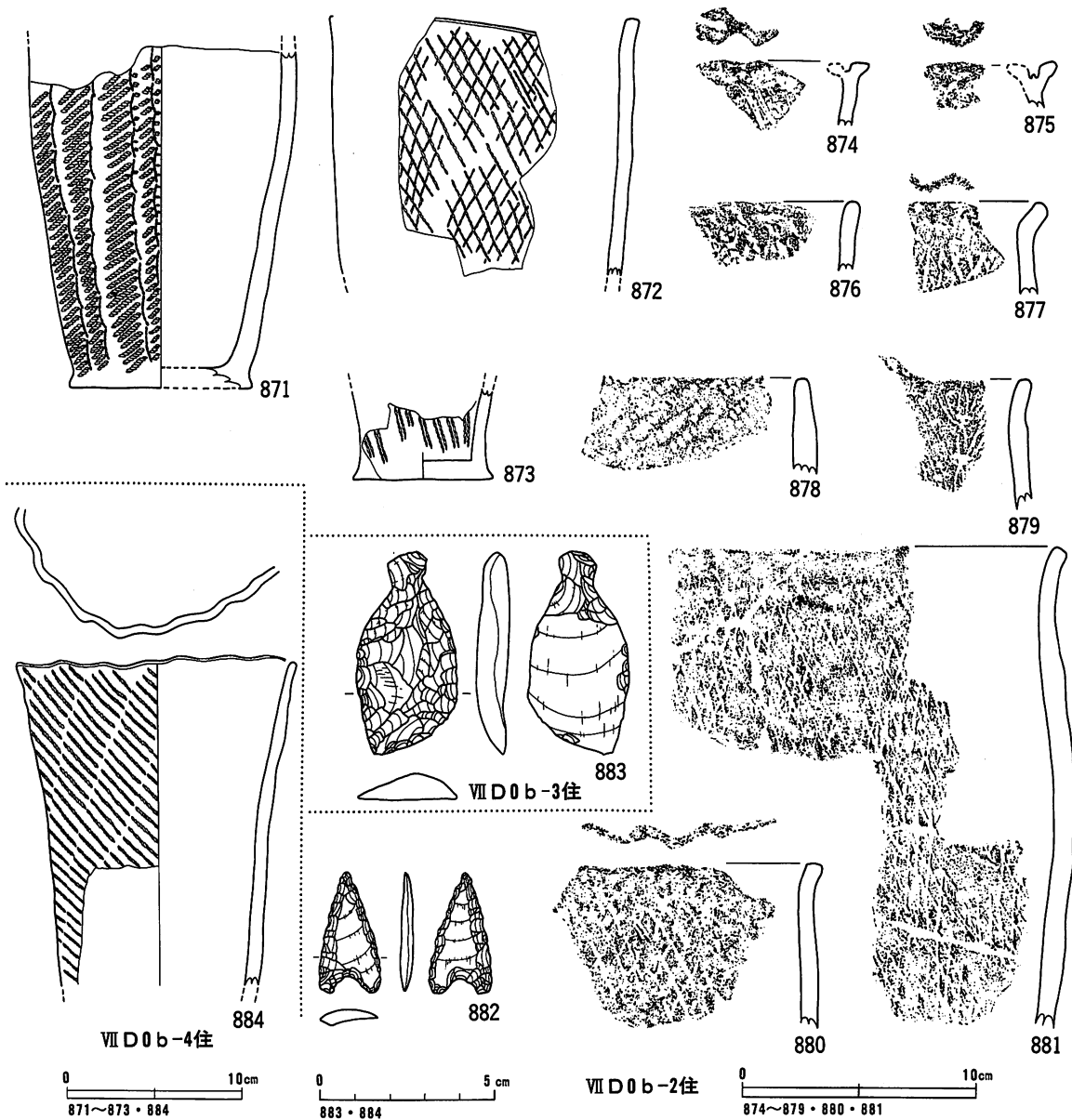
〈埋土〉2層で構成される。締まりある褐色～暗褐色土を主体とする。床上では粉炭を含む。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層で、中央から東側にかけては暗褐色土である。斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高27cmである。柱穴状土坑は5個検出された。P3は規模から柱穴にはならないと思われる。P1とP4が対応する可能性がある。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第181図、写真図版193）

〈土器〉埋土から955g出土したが、縄文時代前期の網目状燃糸文、多軸絡条体の地文のみの小破片であり図化は省略した。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
871	VII D 0 b-2住	床面		R L縦、縦位綾絡文。	-	(10.4)	(19.3)			192
872	VII D 0 b-2住	床面	緩い波状口縁。	R網目状燃糸文。	(19.6)	-	(14.5)		II 6 bカ	192
873	VII D 0 b-2住	埋土		L燃糸文。	-	(8.0)	(5.0)			192
874	VII D 0 b-2住	床面	口縁部裝飾体。上面竹管刺突と沈線。	L + Rの燃糸文。					II 6 aア	192
875	VII D 0 b-2住	埋土	口縁部裝飾体(円文)。上面竹管刺突。						II 6 aウ	192
876	VII D 0 b-2住	埋土		R燃糸文。					II 6	192
877	VII D 0 b-2住	埋土	波状(弁状)。口縁? 頂部上面観鋸齒状。	網目状燃糸状					II 6 aア	192
878	VII D 0 b-2住	床面		L R横。					II 6	192
879	VII D 0 b-2住	埋土	波状口縁。頂部鋸齒状?	L木目状燃糸文。						192
880	VII D 0 b-2住	埋土	弁状口縁。頂部上面観鋸齒状	網目状燃糸文					II 6 aア	192
881	VII D 0 b-2住	埋土		R網目状燃糸文。					II 6 bカ	192
884	VII D 0 b-4住	埋土	花卉状口縁。	L燃糸文	(16.0)	-	(18.6)		II 6 bエ	193

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
882	VII D 0 b-2住	ベルト埋土	石鏃	泥質凝灰岩	礮石西部	3.5	1.8	0.4	2.03	挟りの部分が大きいの。	II c 2	193
883	VII D 0 b-3住	埋土	石匙	珪質泥岩	礮石西部	5.8	2.9	0.9	12.32		I a 2	193

第181図 VII D 0 b-2・VII D 0 b-3・VII D 0 b-4住居跡出土遺物

〈石器〉883の1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉に属すると考えられる。

ⅦD0b-4住居跡（遺構番号91）

遺構（第180図、写真図版58）

〈検出状況〉ⅦD0b-3住居跡の精査時に検出された。ⅦD0b-3住居跡の南北に平坦な部分と壁の立上がりを確認し、平坦部のレベルと西壁のラインがほぼ一致することから、同一の住居と考えた。埋土断面では確認できなかったため、異なる遺構である可能性もあるが、ここでは野外調査時点の観察に従い1棟としておく。東側はⅦD0b-2住居跡によって切られている。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、南北は推定値で5.2m、東西は残存値で1mである。北側部は南北1.2m、東西1m、南側部は南北1.2m、東西1.1mである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固く締まっており、北壁部はほぼ直立する。南側部は外傾する。壁高は北側部の北壁32cm、西壁15cm、南側部の西壁11cm、南壁10cmである。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である明褐色土で、斜面にそってやや傾斜する。北側部と南側部の各中央部の比高は1.5cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第181図、写真図版193）

〈土器〉埋土から370g出土した。884の口縁は前後波状となる花卉状口縁であるが、指頭大の凹凸が顕著に残っている。口唇部断面は丸みを帯びる。他に埋土から網目状撚糸文、木目状撚糸文の胴部破片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉に属すると考えられる。

ⅦD0h住居跡（遺構番号92）

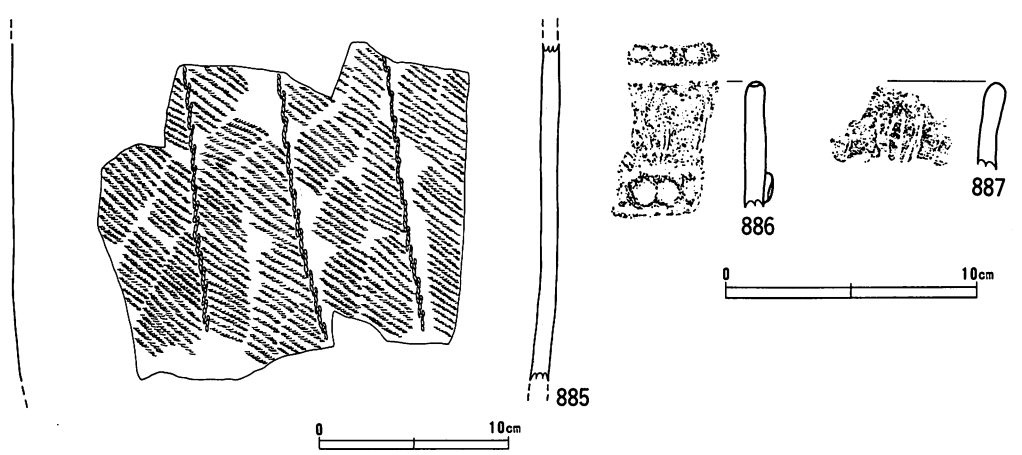
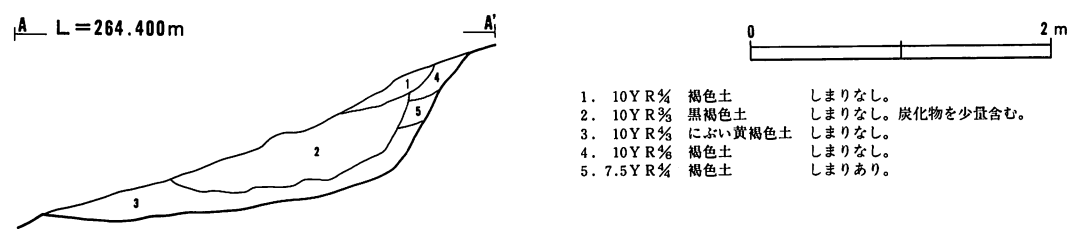
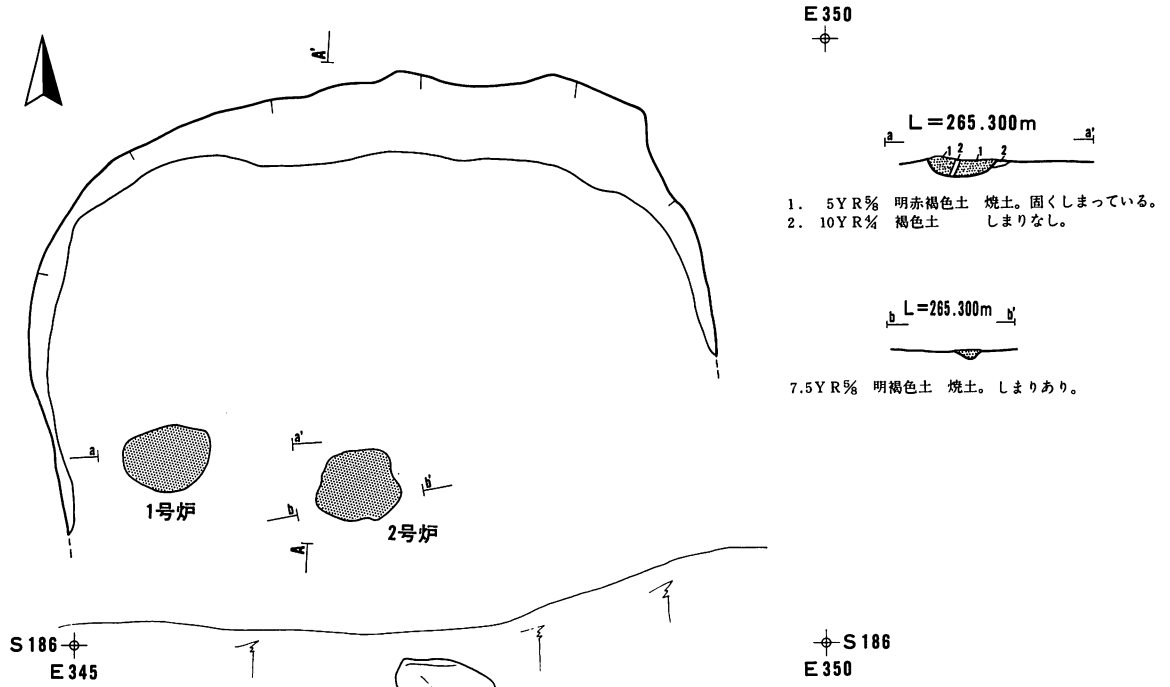
遺構（第182図、写真図版59）

〈検出状況〉西尾根南東斜面に位置する。小角礫含みの暗褐色土層上面で検出した。南側は斜面のため流失していて不明である。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、隅丸方形と推定される。東西4.5m、南北は残存値で2.9mである。

〈壁・壁高〉暗褐色土層を壁とし、外傾する。壁高は東壁17cm、西壁34cm、北壁101cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、床面直上は基盤層起源のにぶい黄褐色土である。全体に締まり



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
885	VII D0h住	埋土		L縦、縦位縦結文。	-	-	(18.0)			193
886	VII D0h住	埋土	隆帯上指頭状圧痕。	R木目状燃糸文。					II 6 b 4	193
887	VII D0h住	埋土	波状口縁。	木目状燃糸文。					II 6	193

第182図 VII D0h住居跡・出土遺物(1)

を欠く。

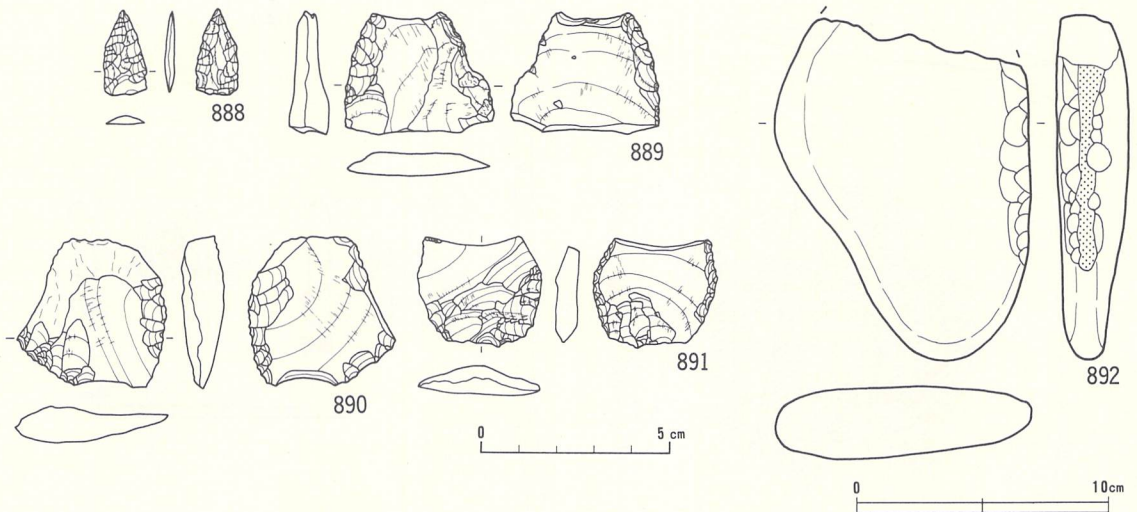
〈床・柱穴・施設〉北半部はⅦD0b-3住居跡の埋土を、南半部はⅦD0b-2住居跡の埋土をそれぞれ床面とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土を4箇所検出したが、うち2箇所は層厚もなく淡いものである。残る2箇所については、断面観察から地床炉と考えられる。南壁寄りのものを1号炉、西壁寄りのものを2号炉とする。1号炉の焼土は26×48cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大8cmである。2号炉の焼土は40×50cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大5cmである。いずれも固く締まっている。

遺物 (第182図、写真図版193)

〈土器〉埋土から1540g出土した。885は縦位に綾絡文が施されるが、その周囲には若干のなでが観察される。他に埋土から多軸絡条体の小片が出土している。

〈石器・石製品〉図示した他に、石刀・溶岩・花崗岩質岩が埋土から出土した。石刀は北上山地産の粘板岩を用いたものであるが、大幅な欠損品である。溶岩は岩手火山起源である。また、脆弱化した半円状花崗岩質岩が1点、Uフレ3点、Rフレ1点、フレーク7点が出土している。
時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属するものと考えられる。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
888	ⅦD0h住	床直上	石鏃	硬質泥岩	磐石西部	2.3	1.1	0.2	0.61		I 2	193
889	ⅦD0h住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	磐石西部	3.3	4.0	0.6	12.12		I a 2	193
890	ⅦD0h住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	磐石西部	4.0	4.4	1.1	16.57		I c 2	193
891	ⅦD0h住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	磐石西部	2.9	3.3	0.6	6.01		I d 2	193
892	ⅦD0h住	埋土	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	(12.7)	10.1	2.3	(590)		III b	193

第183図 ⅦD0h住居跡出土遺物(2)

VII C 1 g 住居跡 (遺構番号93)

遺構 (第184図、写真図版59)

〈検出状況〉VII C 0 g - 3 住居跡の床面精査で、その東側において検出した。他に VII C 0 g - 2 住居跡、VIII C 1 g - 2 住居跡と重複する。VIII C 1 g - 2 住居跡が埋没後に本住居が構築されることから、本住居の方が新しい。VII C 0 g - 2 住居跡に伴う焼土が、本住居の埋土に形成されることから本住居の方が古い。これを図式化すると次のようになる。

(新) VII C 0 g - 2 住居跡 ← VII C 0 g - 3 住居跡 ← VIII C 1 g 住居跡 ← VIII C 1 g - 2 住居跡 (旧)
東側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形と推定される。規模は残存値で東西 5.1 m、南北 4.4 m である。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁は基盤層である黄褐色土で固く締まっている。北壁は小角礫含みの暗褐色土層で比較的軟質である。ほぼ直立している。壁高は、西壁 20cm、北壁 32cm である。

〈埋土〉2層に大別できる。上位は植生根を多く含み、締まりを欠く褐色土、下位はやや締まる褐色土で粉炭を含む。壁際には崩落土が混入する。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる西側は基盤層である黄褐色土を、東側は VIII C 1 g - 2 住居跡の埋土を床面とし、やや凹凸がある。斜面にそって幾分傾斜し、最大比高 15cm である。柱穴は 3 個検出された。規模・位置から P2 と P3 が対応する可能性がある。周溝が西壁際と北壁際に検出されたが、北西隅部分の一部とぎれる。幅 10~28cm、深さ 12~14cm である。

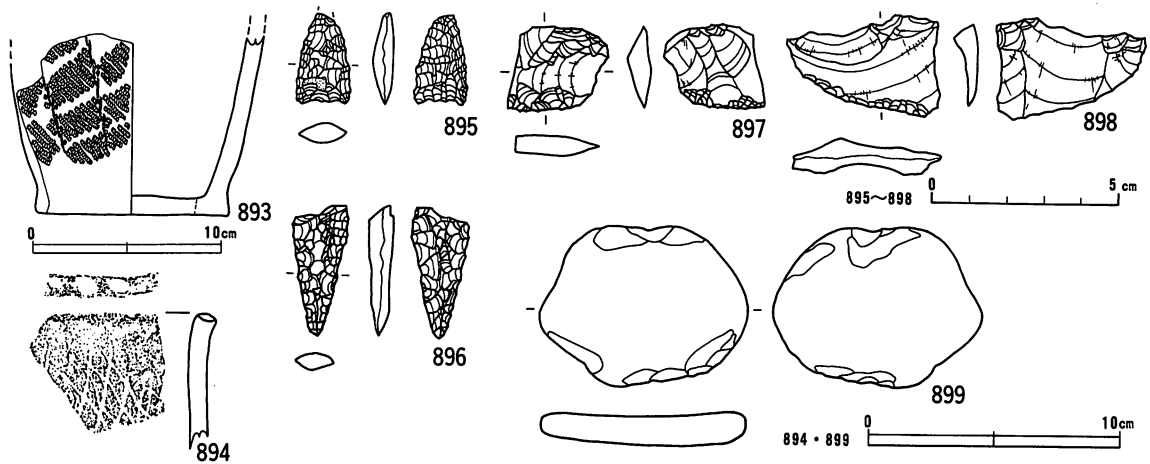
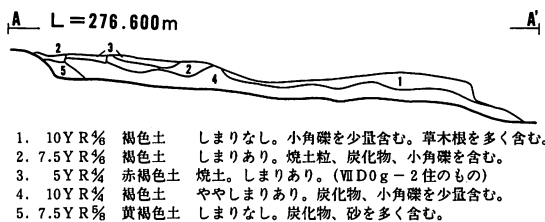
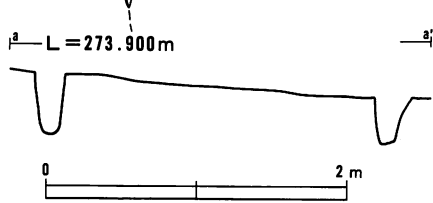
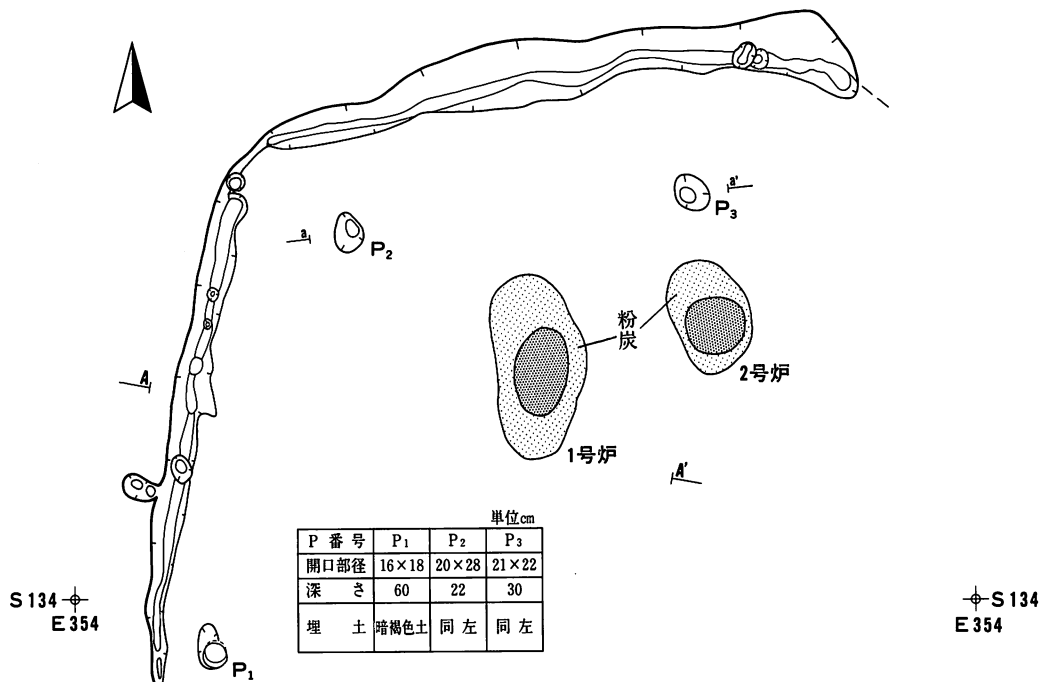
〈炉〉地床炉が 2 基検出された。西側のものを 1 号炉、東側のものを 2 号炉とする。1 号炉の焼土は 36×60cm の楕円形状に分布し、厚さは最大 9 cm である。2 号炉の焼土は 37×40cm の円形状に分布し、厚さは最大 7 cm である。いずれも固く締まっている。炉の周囲には同心円状に粉炭が分布する。

遺物 (第184図、写真図版194)

〈土器〉埋土から 275 g 出土した。893 の胎土は砂などの混入物が少なく粘土の量が多い。縄文施文後に縦位の綾絡文が施される。底面には草木類による網代痕が一部観察されるが明瞭ではない。図示した他に埋土から縦位綾絡文の小片が出土している。

〈石器〉895 の尖頭部は横折れしている。図示した他に、半円状花崗岩質岩が 1 点、Uフレが 1 点、フレークが 14 点埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
893	ⅦC1g住	埋土		L R縦、縦位縦絡文。	-	[10.2]	(9.6)			194
894	ⅦC1g住	床面	口唇部指頭状圧痕。	R網目状燃糸文。					II 6b才	194

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
895	ⅦC1g住	埋土	石鏃	珪質泥岩	礫石西部	(2.4)	1.4	0.5	(1.5)		II e 2	194
896	ⅦC1g住	埋土	石錐	硬質泥岩	礫石西部	3.5	1.5	0.6	2.92	基部は素材面を残し、折損状である。		194
897	ⅦC1g住	埋土	ピエス・エスキーユ	硬質泥岩	礫石西部	3.1	2.4	0.8	4.48			194
898	ⅦC1g住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	2.7	4.0	0.6	5.78		I a 2	194
899	ⅦC1g住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	6.4	8.3	1.2	100		II	194

第184図 ⅦC1g住居跡・出土遺物

VIII C 1 g - 2 住居跡 (遺構番号94)

遺構 (第185図、写真図版60)

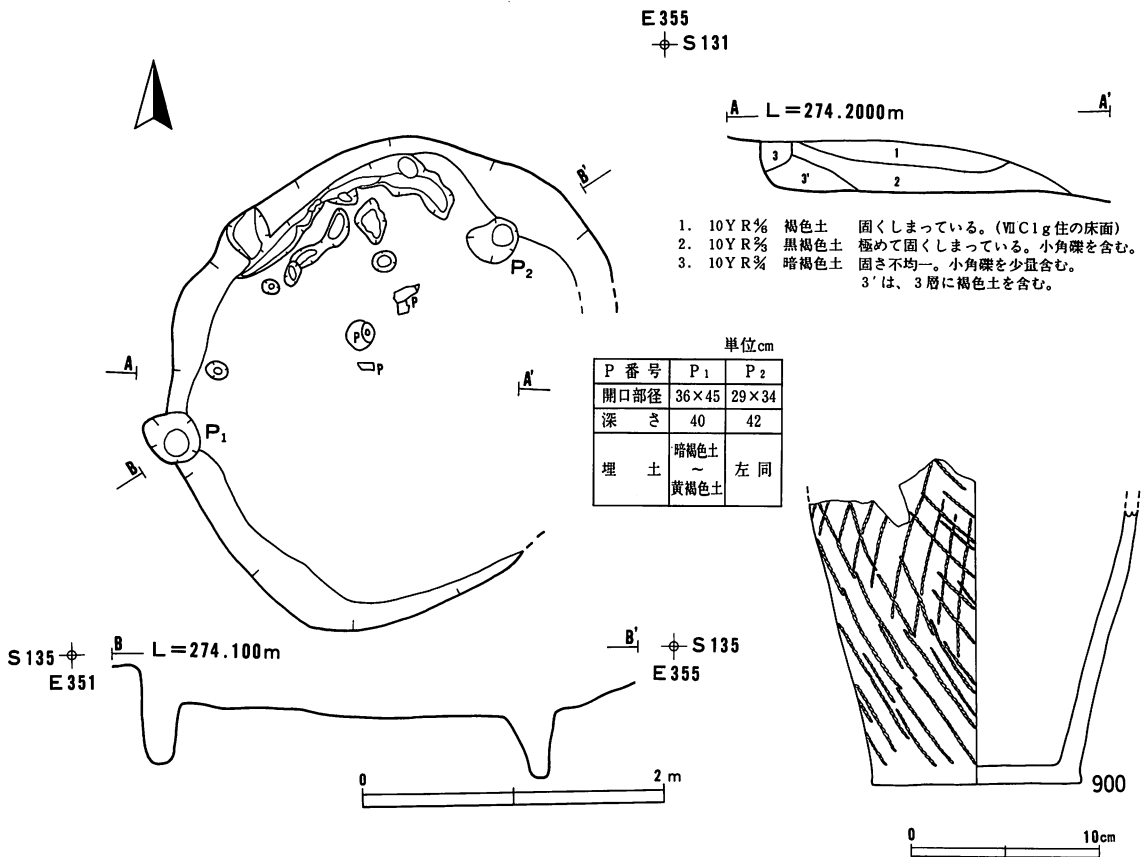
<検出状況>VIII C 1 g 住居跡の東側の床面下から検出した。東側は斜面のため流失している。

<形状・規模>やや歪な円形で2.9×3.2mの規模をもつ。

<壁・壁高>斜面上方に当たる西側は基盤層である黄褐色土を、他は小角礫を含む暗褐色土層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、西壁35cm、南壁16cm、北壁36cmである。

<埋土>4層で構成されるが、上位は褐色土で非常に固い。下位は小角礫を含む黒褐色土で固く締まっている。壁際には崩落土が混入する。

<床・柱穴・施設>西側は基盤層で、中央から東側にかけては暗褐色土である。斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高12cmである。柱穴が2個検出された。位置・規模が対応すると考えられる。西壁際の一部に周溝が巡る。幅10~20cm、深さは5~7cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
900	VIII C 1 g - 2 住	床面		R 燃糸文。	-	(11.1)	(17.4)		II 6	194

第185図 VIII C 1 g - 2住居跡・出土遺物

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第185図、写真図版194)

〈土器〉床面から1278g、埋土から425g出土した。900は床面出土で、やや太めの撚紐を用いた撚糸文である。埋土出土は網目状撚糸文、附加条の土器小片である。

時期 床面出土遺物・重複関係から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

VIII C 1 h 住居跡 (遺構番号95)

遺構 (第186図、写真図版61)

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。本住居の東側でVIII C 1 h - 2 住居跡、北側でVIII C 1 h 土坑と重複する。本住居は、これらの遺構の上に構築されており、本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、南北は4.7m、東西は残存値で3.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層である明褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、西壁23cm、北壁51cmである。

〈埋土〉6層で構成される。いずれも締まりを欠き、自然堆積の様相を示す。北壁寄りの床面直上に粉炭が分布する。第5層からブロック状に混入するが、第6層の下位において著しい。焼土粒も埋土断面において縞状に分布する。このことから焼失住居と考えられる。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層である明褐色土を床面とする。東側はVIII C 1 h 土坑の埋土の上に貼り床しているほか、VIII C 1 h - 2 住居跡との重複部分も同様に暗褐色土により貼り床している。全体として斜面にそって傾斜し、西壁際と東端の比高は29cmになる。周溝が西壁際に巡る。幅16~26cm、深さ7~13cmである。一部二重になるところがあるが、埋土や深さに差異は認められなかった。そのため住居の重複は想定しなかった。柱穴が2個検出された。主柱穴は確認できない。

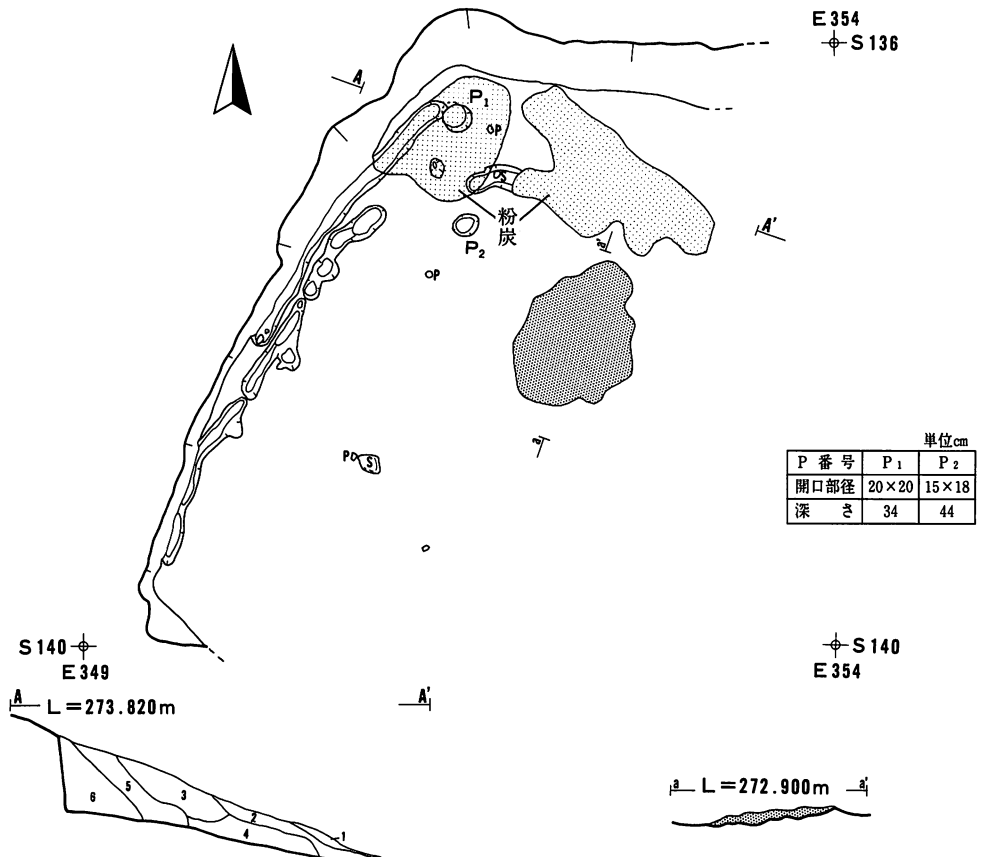
〈炉〉地床炉を1基検出した。焼土は78×110cmの不整楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。断面形はレンズ状で、固く締まっている。

遺物 (第186図、写真図版194)

〈土器〉床面から104g、埋土から400g出土した。床面出土は901の他、網目状撚糸文の小破片、横位の綾絡文の小破片である。

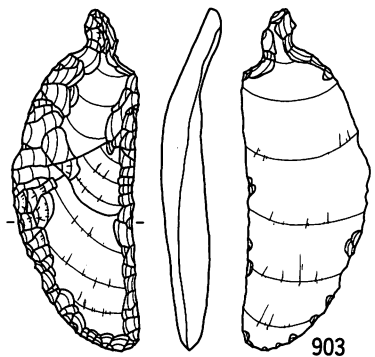
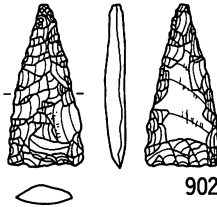
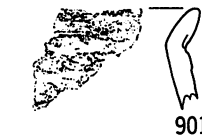
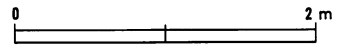
〈石器〉図示した他にはUフレ1点、フレーク13点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。



1. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土を粒状に少量含む。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。砂を多く含む。
3. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。炭化物、小角礫を少量含む。
4. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。炭化物を微量、灰黄褐色の礫を多く含む。最下位に炭化物、焼土粒を縞状に含む。
5. 7.5Y R% 褐色土 しまりなし。炭化物をブロック状に、小角礫を少量含む。
6. 10Y R% 褐色土 しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。最下位に炭化物、焼土粒を縞状に含む。

2.5Y R% 明赤褐色土 しまりあり、炭化物を上面に微量含む。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
901	VIII C 1 h 住	床面	複合口縁。微隆帯。					内外面ミガキ顯著。		194

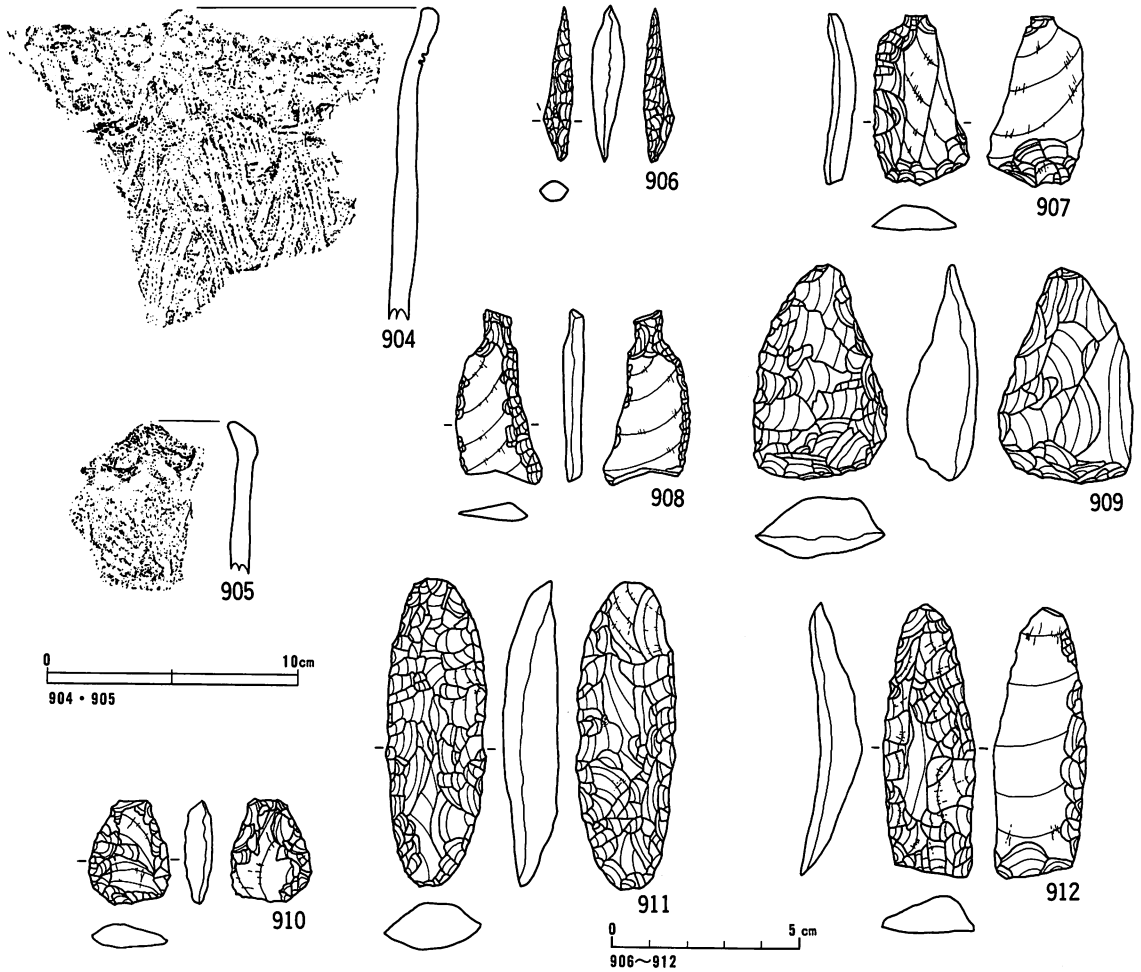
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
902	VIII C 1 h 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礫石西部	4.3	2.0	0.5	3.60		I 2	194
903	VIII C 1 h 住	ベルト埋土	石匙	珉質泥岩	礫石西部	9.2	3.2	0.9	26.85	精巧な作り。つまみ方向からの縦長剥片を利用。	I a 2	194

第186図 VIII C 1 h 住居跡・出土遺物

VIII C 1 h - 2 住居跡 (遺構番号96)

遺構 (第98図、写真図版61)

<検出状況>西尾根東斜面に位置する。西側でVIII C 1 h 住居跡・VIII C 1 h 土坑、南側でVII C 0



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
904	VIII C 1 h - 2 住	床面	竹管刺突。	R + L 燃糸文。					II 6 bウ	194
905	VIII C 1 h - 2 住	埋土	鋸齒状裝飾体。	L R 縦。縦位縦絡文。					II 6 aア	194

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
906	VIII C 1 h - 2 住	焼土の中	石錐	珪長質細粒凝灰岩	礮石西部	(4.1)	(0.7)	0.7	(1.67)	欠損品。		194
907	VIII C 1 h - 2 住	埋土	石匙	硬質泥岩	礮石西部	4.5	2.4	0.8	7.60	つまみ部の作り出しが弱い。	I b 2	194
908	VIII C 1 h - 2 住	埋土	石匙	珪質泥岩	礮石西部	4.6	2.1	0.6	4.02	1刃は表、もう1刃は裏面に二次加工する。先端部は葉材の形。	I b 1	194
909	VIII C 1 h - 2 住	床面	石筥	珪質泥岩	礮石西部	5.7	3.5	1.8	33.39	波瀾線あり。対称性やや崩れ。右側が高い。左側縁は片刃で鋭い。	II	194
910	VIII C 1 h - 2 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	2.7	2.1	0.6	3.49		I d 2	195
911	VIII C 1 h - 2 住	床面	打製石斧	珪質細粒凝灰岩	礮石西部	8.1	2.6	1.3	32.64			195
912	VIII C 1 h - 2 住	床面	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	7.2	2.4	1.0	16.31		I e	195

第187図 VIII C 1 h - 2 住居跡出土遺物

h住居跡・ⅦC0h-2住居跡と重複する。ⅦC1h住居跡の炉が、本住居の埋土の上に形成されていることから、本住居の方が古い。ⅦC1h土坑・ⅦC0h住居跡・ⅦC0h-2住居跡は、本住居によって切られていることから本住居の方が新しい。これらの遺構の新旧関係を図式化すると次のようになる。

(新) ⅦC1h住居跡←ⅦC1h-2住居跡←ⅦC1h土坑 (旧)
←ⅦC0h-2住居跡←ⅦC0h住居跡

<形状・規模>詳細は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する歪な長方形と推定される。規模は残存値で、東西は2.4m、南北は4.7mである。

<壁・壁高>基盤層である黄褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、西壁30cm、北壁35cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、壁とは明瞭に区別される。全体に締まりを欠く。

<床・柱穴・施設>基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴P7の埋土は住居のそれとは異なる褐色土で砂粒を多く含む。P4・P5はⅦC0h-2住居跡に所属する可能性もある。

<炉>地床炉を1基検出した。焼土の範囲は80×110cmの楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。断面形はレンズ状で、固く締まった焼土である。

遺物 (第187図、写真図版194・195)

<土器>904は緩い波状口縁で、口縁に沿って竹管刺突が連続する。905は器体に対して斜位に粘土紐を鋸歯状に貼り付けたものである。図示した他には網目状撚糸文、撚糸文、縦位綾絡文の土器小片が出土している。

<石器>908の表面右辺は裏側から、左辺は表側から二次加工を施す。912は中央部に瘤状に素材面を残す。911は疑問もあるが、断面形・刃部加工から打製石斧とした。他にフレーク1点が床面から、Uフレ2点が埋土から出土している。

時期 床面出土土器片、重複関係から、縄文時代前期後葉に属すると推定される。

ⅦC2h住居跡 (遺構番号97)

遺構 (第188図、写真図版62)

<検出状況>基盤層の上ののる小角礫含みのにぶい黄褐色土層中に褐色土の落ち込みとして検出した。北壁の一部は倒木痕により攪乱を受けている。

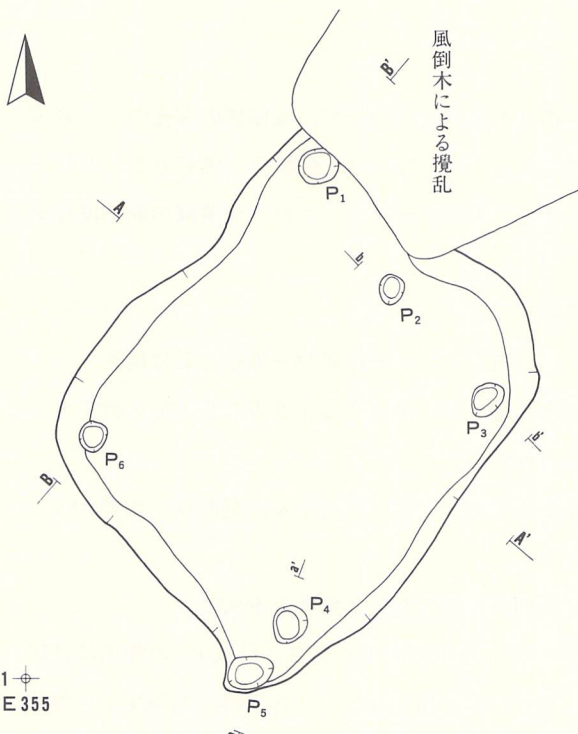
<形状・規模>長軸が等高線にほぼ平行する歪な長方形を基調とする。規模は短軸2.6m、長軸2.9mである。

<壁・壁高>一部基盤層、他はにぶい黄褐色土層で、ほぼ直立する。壁高は、東壁9cm、西壁

単位cm

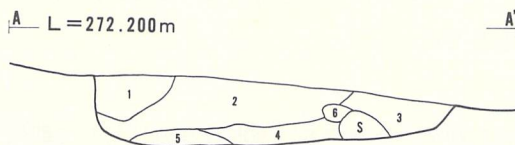
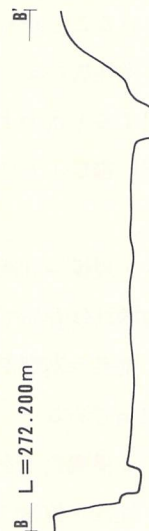
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
開口部径	22×26	17×20	20×22	23×24	22×30	16×20
深さ	16	11	10	15	25	9

E 359
S 137



S 141
E 355

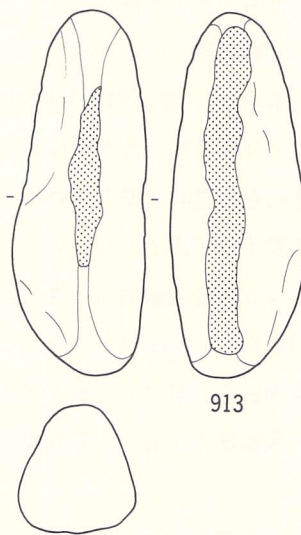
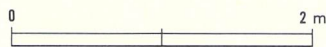
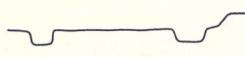
S 141
E 359



- 7.5YR% 黒褐色土 しまりあり。炭化物、焼土、砂を少量含む。
- 10YR% 褐色土 しまりあり。焼土、炭化物を粒状に、砂を少量含む。
- 10YR% 暗褐色土 しまりなし。黄褐色土を縞状に、小角礫を少量含む。
- 10YR% 黒褐色土 しまりあり。焼土粒、砂を微量含む。
- 10YR% 黒褐色土 しまりなし。炭化物を多く、焼土粒、砂を微量含む。
- 10YR% 黒褐色土 しまりなし。砂を少量含む。

a L = 271.900m a'

b L = 271.800m b'



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
913	VIII C 2 h 住	床面	敲磨器類 A 群	チャート	北上山地	14.5	5.4	5.2	490	磨面 2 面。剥離無し。	I a 1	195

第188図 VIII C 2 h 住居跡・出土遺物

48cm、南壁20cm、北壁23cmである。

〈埋土〉褐色土を主体とし、その上位および下位に黒褐色土の層が占める。全体に砂粒を含み、下位には粉炭を混入する。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる西側は基盤層である黄褐色土を、東側はにぶい黄褐色土層を床面とし、ほぼ水平で平坦である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第188図、写真図版195)

〈土器〉出土していない。

〈石器〉図示した1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況・埋土・床面出土石器から縄文時代前期に属するものと考えられる。

VIII C 2 j 住居跡 (遺構番号98)

遺構 (第189図)

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。基盤層の上ののる小角礫を含みにぶい黄褐色土層上面で、暗褐色土の落ち込みとして検出した。東側は削平されており不明である。本住居の床面下からはVIII C 2 j 土坑・VIII C 2 j - 2 土坑が検出されている。

〈形状・規模〉東側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する隅丸長方形と推定される。規模は南北5.6m、東西は残存値で3mである。

〈壁・壁高〉にぶい黄褐色土層で、壁高は西壁49cm、南壁16cm、北壁58cmである。

〈埋土〉上位は暗褐色土、下位は黒褐色土で、全体に締まりを欠く。下位には粉炭を多く含み、焼失住居と考えられる。

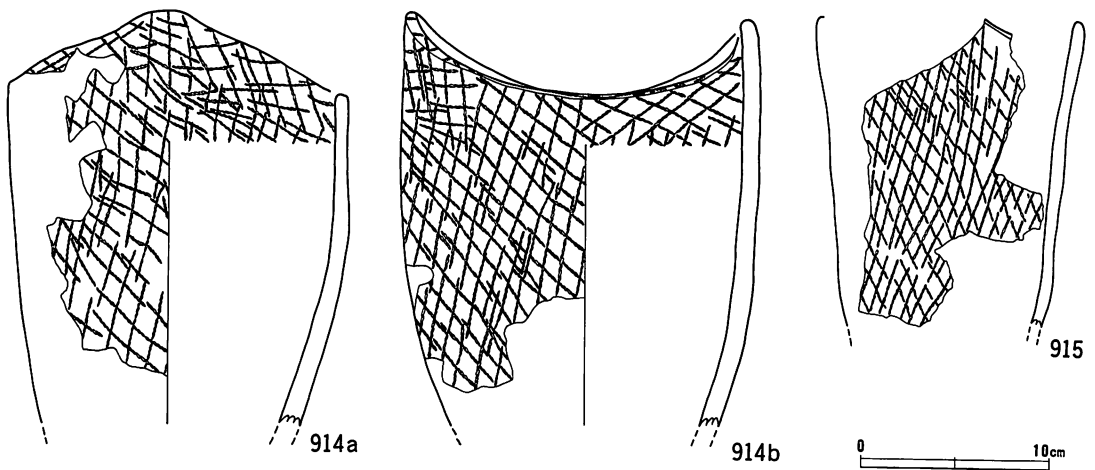
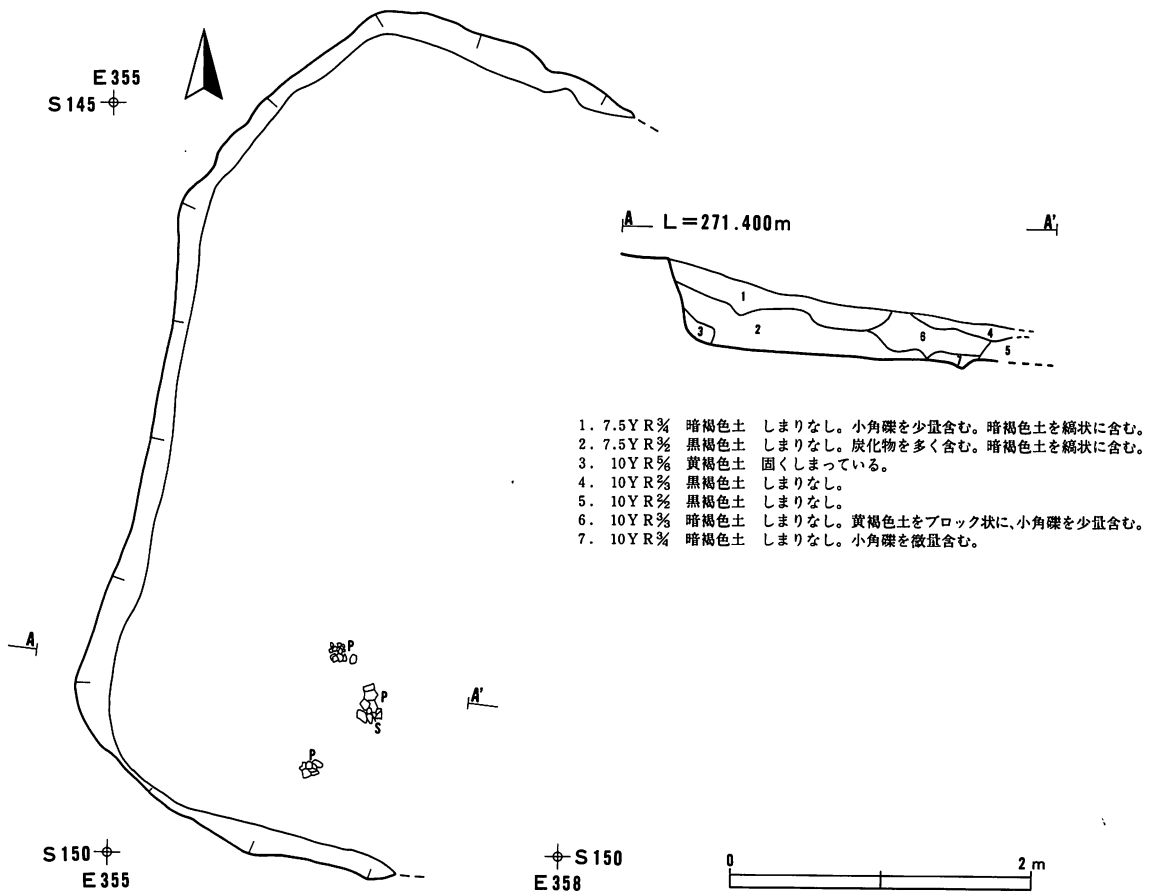
〈床・柱穴・施設〉にぶい黄褐色土で固い。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第189～191図、写真図版195・196)

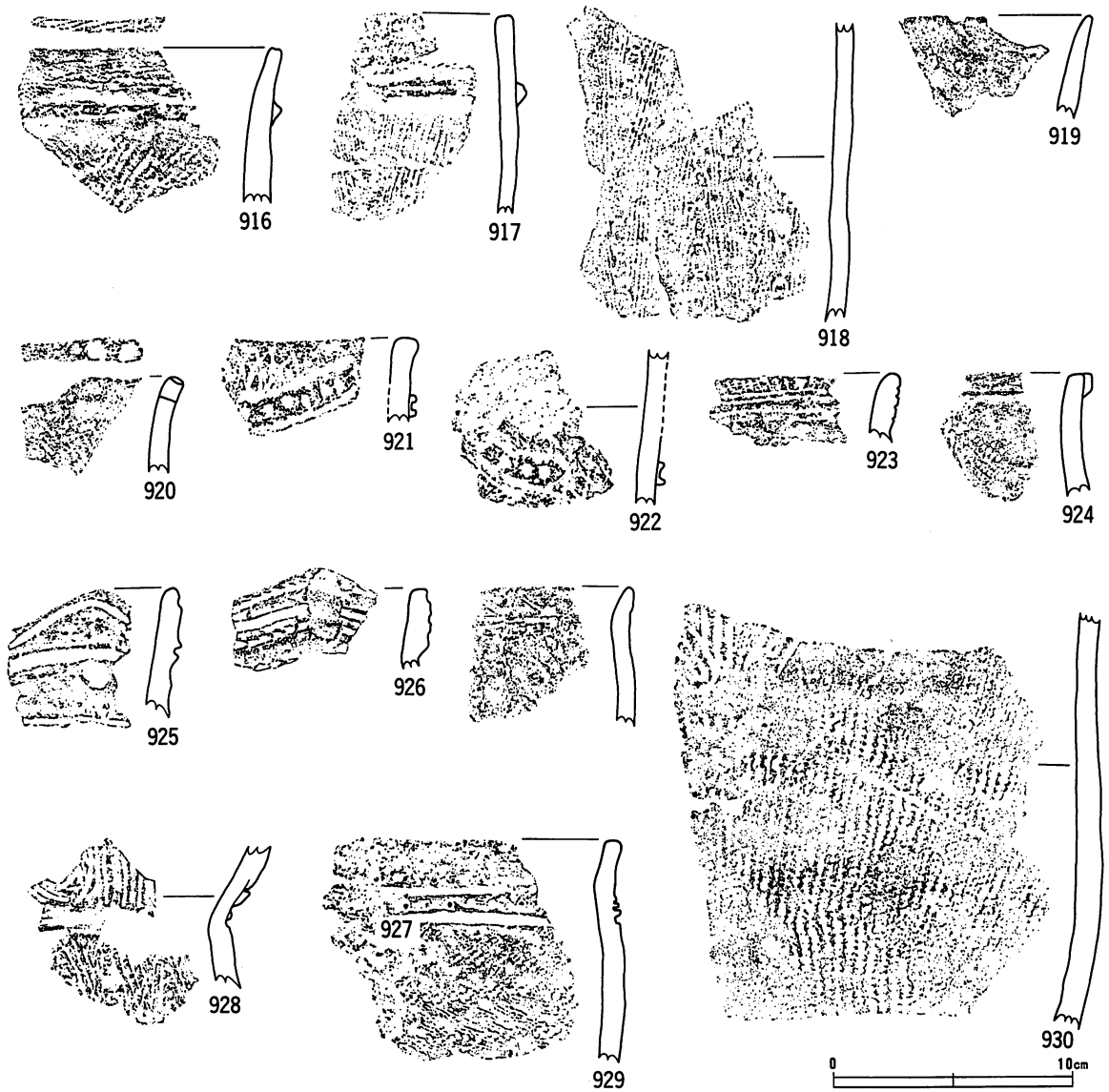
〈土器〉埋土から7565g出土した。914の器形はやや石炭バケツ状で長軸方向に1対の頂部をもつ波状口縁である。胴部と同じ原体で口唇部にも施文されている。胎土に細礫を多く含み、内外面とも剥落多い。915は比較的急な波状口縁となるらしい。916は隆帯で区画された狭い口縁部文様帯に、原体の側面圧痕が横位にやや不整に施文されている。920は弁状突起上に施文のあるものである。922の隆帯は剥落しているが、円を描くらしい。925～930は竹管文を主体とする。

〈石器〉933は黒曜石を素材とする。これは青森県出来島産の可能性が高いという鑑定の結果



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
914	VII C 2 j 住	埋土	一対の頂部をもつ波状口縁、石炭バケツ形。	R 網目状燃糸文	(18.5)	-	(22.0)	横断面楕円形	II 6 b 方	195
915	VII C 2 j 住	埋土	波状口縁。	R 網目状燃糸文	(14.0)	-	(16.3)		II 6 b 方	195

第189図 VII C 2 j 住居跡・出土遺物(1)

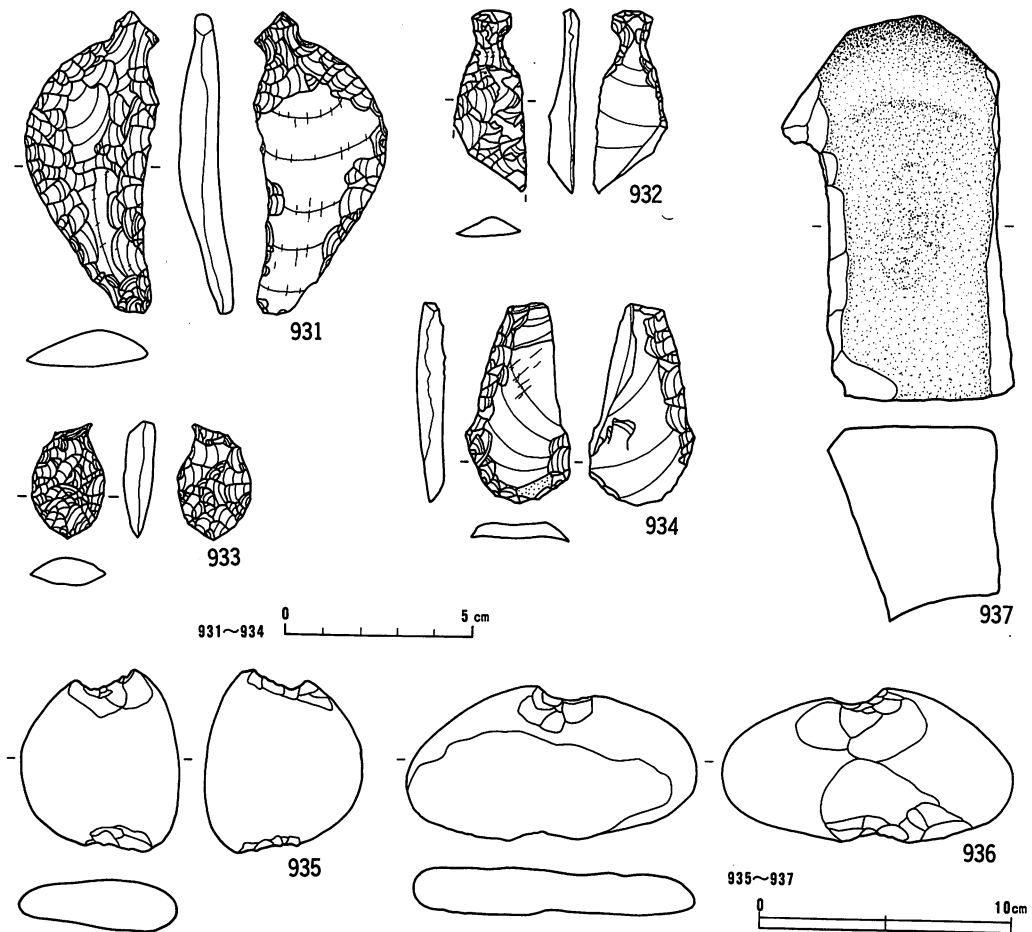


番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
916	VIII C 2 j 住	床面	L側面圧痕。隆帯上R L側面圧痕。	L R × R L第1種結束羽状縄文。						195
917	VIII C 2 j 住	床面	絡条体圧痕。隆帯上刺突?	R木目状燃糸文。						195
918	VIII C 2 j 住	床面		R木目状燃糸文。					II 6	195
919	VIII C 2 j 住	床面	無文。							195
920	VIII C 2 j 住	埋土	舟状口縁。頂部口唇部指頭状圧痕(爪跡明瞭に残る)。	燃糸文。					II 6 a 1	195
921	VIII C 2 j 住	埋土	波状口縁。隆帯上棒状工具による刺突(底面凹凸あり)。	L燃糸文。						195
922	VIII C 2 j 住	埋土	隆帯上棒状工具による刺突(底面凹凸あり)。	L網目状燃糸文。					II 6 b 7	195
923	VIII C 2 j 住	埋土	口唇縮斂状工具による刻み。半截竹管平行沈線。押し引き。							195
924	VIII C 2 j 住	埋土	複合口縁。	L R縦。						195
925	VIII C 2 j 住	埋土	波状口縁。沈線(凹線)。円形凹文。						II 7	195
926	VIII C 2 j 住	埋土	波状口縁。竹管外面による割突(押し引き)。沈線(凹線)。縦位貼り付け部剥落。						II 7	195
927	VIII C 2 j 住	埋土	沈線(草木類?)。	L R縦。綾絡文。					III 1	195
928	VIII C 2 j 住	埋土	沈線(横位沈線は押し引き)。	R木目状燃糸文。					II 7 b	195
929	VIII C 2 j 住	埋土	沈線(凹線)。竹管刺突。	L R × R R第1種結束羽状縄文。					II 7	195
930	VIII C 2 j 住	埋土	半截竹管平行沈線。	R L縦。					II 7	196

第190図 VIII C 2 j 住居跡出土遺物(2)

が出ている（付篇5参照）。図示した他に、台石の可能性ある破碎礫、半円状花崗岩質岩が各1点、フレークが12点埋土から出土した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
931	VIII C 2 j 住	埋土	石匙	泥質凝灰岩	磐石西部	8.0	3.4	1.0	23.80	縦長に近いが、45度(つまみ方向と刃部の角度)	I a 2	196
932	VIII C 2 j 住	整地層下位	石匙	泥質凝灰岩	磐石西部	(4.8)	(2.0)	0.8	(4.18)		I	196
933	VIII C 2 j 住	埋土	石匙	黒曜石	青森出来島	3.1	2.0	0.8	4.02	尖頭部を作り出す。つまみ部破損。	I a 1	196
934	VIII C 2 j 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	5.3	2.8	0.8	10.18	側面観鋸歯状となる。	I b 4	196
935	VIII C 2 j 住	埋土	石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	7.3	6.2	2.0	130		I	196
936	VIII C 2 j 住	埋土	石錘	凝灰質硬砂岩	北上山地	6.3	11.5	1.8	170		II	196
937	VIII C 2 j 住	埋土	石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	(15.2)	(9.2)	(9.7)	(1570)	浅いが、敲打によるものと思われる窪みがある。		196

第191図 VIII C 2 j 住居跡出土遺物(3)

ⅧC 3 f 住居跡 (遺構番号99)

遺構 (第192図、写真図版62)

〈検出状況〉西尾根東斜面に位置する。近現代の削平および盛土が行われている。基盤層の上ののる小角礫含みのにぶい黄褐色土層上面で、暗褐色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉不整な円形で、径は長いところで2.7m、短いところで2.5mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる西壁の一部は下位が基盤層であるが、他はにぶい黄褐色土層で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、東壁37cm、西壁70cm、南壁12cm、北壁49cmである。

〈埋土〉上位は暗褐色土、中位は黒褐色土、下位は褐色土および暗褐色土で、いずれも固く締まっている。断面レンズ状で、自然堆積の様相を示す。混入物は殆どないが、一部に壁の崩落土を含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で、ほぼ水平で平坦である。中央西寄りに柱穴を1個検出したが、深さは9cmであり、主柱穴となるか疑問である。周溝が西壁際に巡る。幅8～15cm、深さ6～10cmで、底部に深さ4～5cmの小穴を連続的に穿つ。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第192図、写真図版196)

〈土器〉床面から255g、埋土から570g出土した。図示した他に、床面から多軸絡条体、網目状燃糸文、埋土から燃糸文、木目状燃糸文の破片が出土したが、地文のみの小破片であり図化は省略した。

〈石器〉941は相対する二辺に二次加工が施されているが、裏面右側縁は刃部とは認め難い。他に床面からUフレが1点、フレークが1点、埋土からフレークが8点出土している。

時期 床面出土土器片から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅧD 2 g 住居跡 (遺構番号100)

遺構 (第193図、写真図版63)

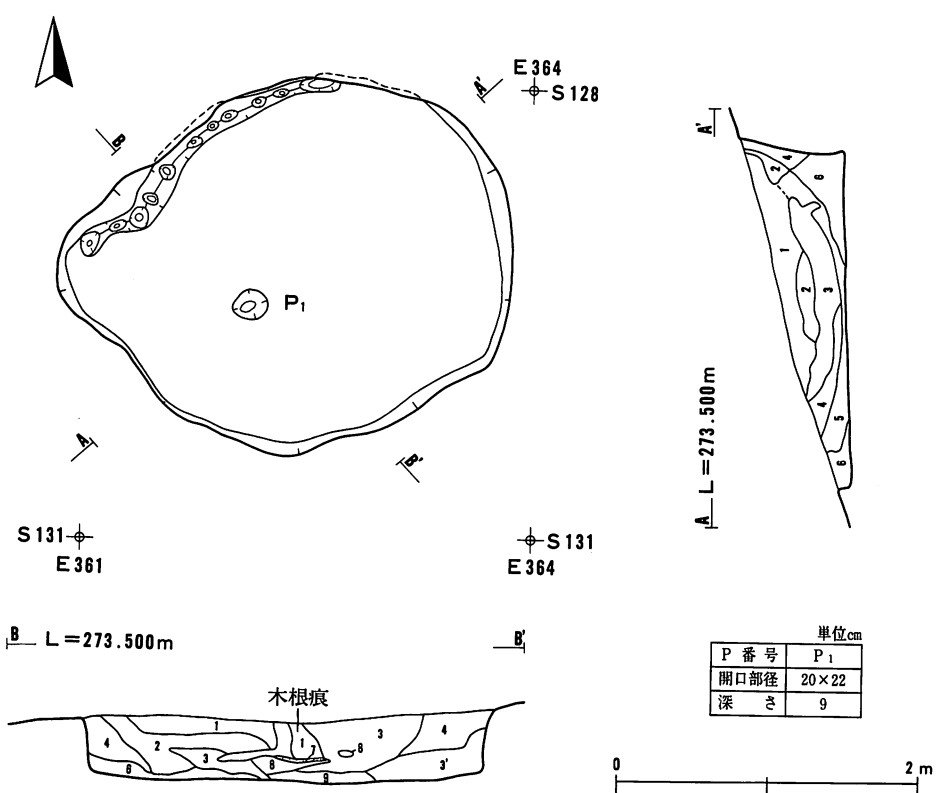
〈検出状況〉西尾根東麓に位置する。基盤層である黄褐色土上面で、黒褐色土の落ち込みとして検出した。北壁でⅧD 2 g 土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

周溝が3条巡ること、および埋土断面観察から、本住居は3時期の建替えがあると考えられる。埋土断面から、内側の周溝を伴うものが最も新しいと考えられる。これをⅧD 2 g 住居跡とし、内側から外側へ向かって、ⅧD 2 g - 2 住居跡、ⅧD 2 g - 3 住居跡とする。

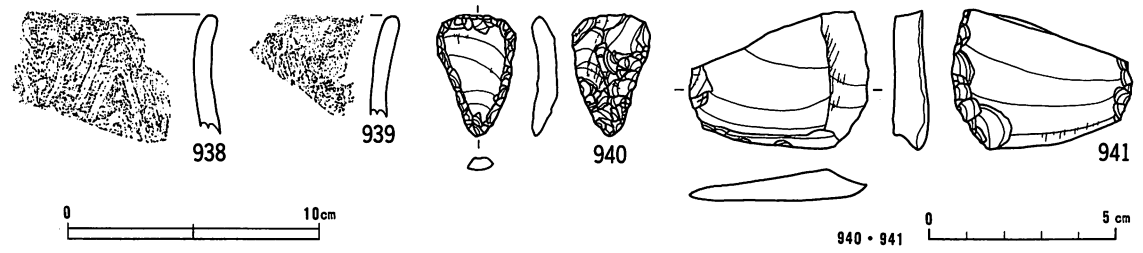
南壁と西壁の一部は斜面のため流失しており、南西隅は木根により攪乱を受けている。

〈形状・規模〉1辺が2.7m～3mの方形である。

〈壁・壁高〉基盤層である黄褐色土で固く締まっており、ほぼ直立する。壁高は、東壁22cm、



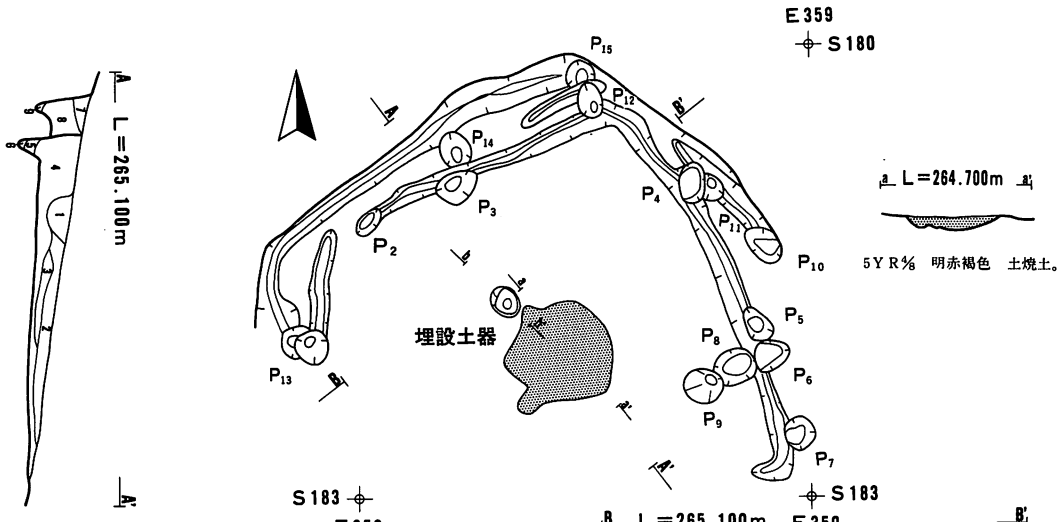
- A...A' B...B'
- 10Y R% 暗褐色土 固さ不均一。
 - 10Y R% 暗褐色土 1層より若干赤味がかっている。
 - 10Y R% 黒褐色土 固くしまっている。小角礫を少量含む。
 - 10Y R% 褐色土 しまりなし。
 - 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。
 - 10Y R% 褐色土 しまりあり。パミスを含む。
 - 炭化物
 - 10Y R% 褐色土 固くしまっている。
 - 10Y R% 黒褐色土 しまりあり。



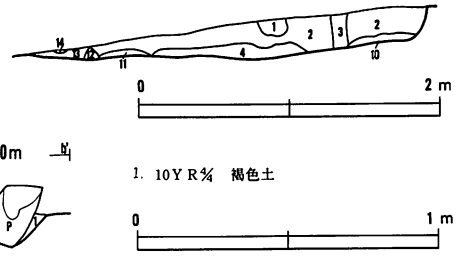
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
938	VII C 3 f 住	床直上		L 2条の木目条燃糸文。					II 6	196
939	VII C 3 f 住	埋土		R 網目状燃糸文。					II 6	196

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
940	VII C 3 f 住	埋土	石錐	硬質泥岩	礫石西部	3.2	2.0	0.5	4.12			196
941	VII C 3 f 住	床直上	不定形石器	泥質凝灰岩	礫石西部	3.7	4.8	0.9	15.29	左辺にも二次加工があるが、刃部とは考えがたい。	I a 2	196

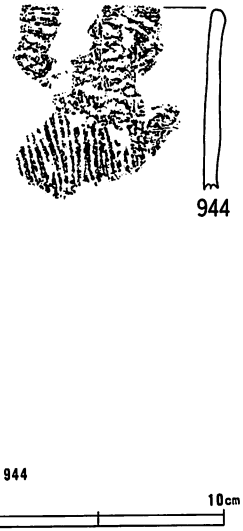
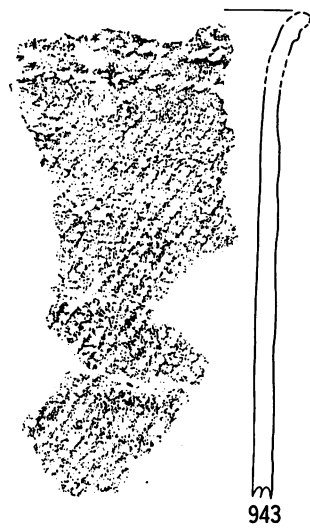
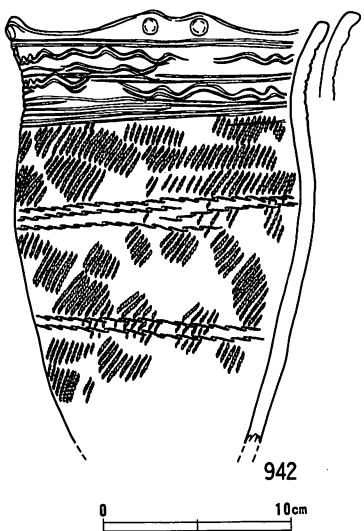
第192図 VII C 3 f 住居跡・出土遺物



- A...A' B...B'
1. 10YR% 黒褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
 2. 10YR% 黒色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
 3. 10YR% 黒褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
 4. 7.5YR% 黒褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
 5. 10YR% 黒褐色土 焼土粒を微量含む。
 6. 10YR% 褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。やや粘性あり。
 7. 7.5YR% 黒褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。
 8. 10YR% 黒褐色土 炭化物、焼土粒を微量含む。黄褐色土を含む。
 9. 10YR% 褐色土 炭化物を含む。
 10. 7.5YR% 橙色土 しまりあり。
 11. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。褐色土を含む。
 12. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。褐色土を含む。
 13. 10YR% 黒褐色土 しまりあり。粘土質土。
 14. 10YR% 黄褐色土 しまりあり。

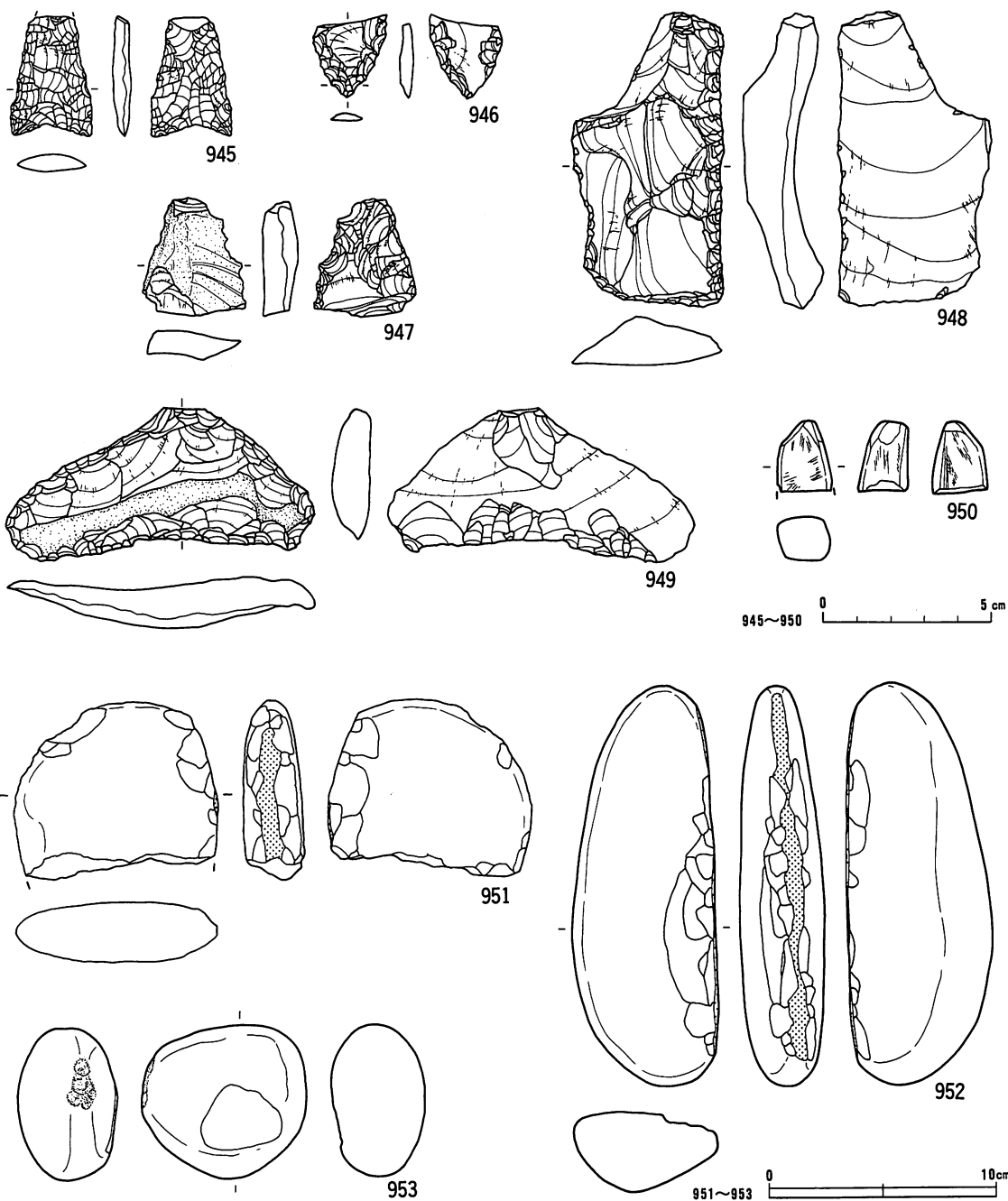


P 番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
開口部径	23×23	12×20	21×30	18×28	17×25	20×24	20×22	23×30	23×17	18×29	17×21	16×23	20×22	20×25	19×21
深さ	26	11	20	16	25	20	13	12	18	13	33	21	19	42	2



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
942	VIII D 2 g 住	埋設土器	縦波状口縁、山形(2山)状突起、凹文、半截竹管波状平行沈線。	L R 横、横位綾絡文。	17.2		(23.1)		II 7 a	196
943	VIII D 2 g 住	埋土	R L R 側面圧痕。	R L R 縦。					II 8 a	196
944	VIII D 2 g 住	床直		不整捺糸文。					II 9	196

第193図 VIII D 2 g 住居跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
945	VII D 2 g 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	礫石西部	(3.5) 2.4	0.5	0.5	(4.35)		II d 1	197
946	VII D 2 g 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	2.4	1.6	0.3	1.67		I b 2	197
947	VII D 2 g 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	3.5	3.0	0.7	8.61	1面に奥まで入る二次加工あり。刃部とは認めがたい。	II	197
948	VII D 2 g 住	埋土	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	8.6	4.5	1.4	59.01		I a 1	197
949	VII D 2 g 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	3.9	9.1	1.3	41.42	自然面を中央に残す。	I d 3	197
950	VII D 2 g 住	埋土	磨製石斧	粘板岩	北上山地	(2.1) 1.6	1.4	(10)		欠損品。		197
951	VII D 2 g 住	Q 3 埋土	敲磨器類 A 群	硬砂質	北上山地	(7.8) 9.0	2.7	(280)		欠損品。	III b 2	197
952	VII D 2 g 住	埋土上位	敲磨器類 A 群	硬砂質	北上山地	17.6	6.4	3.8	500		II b 2	197
953	VII D 2 g 住	Q 4 埋土	敲磨器類 B 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	7.2	6.8	4.2	300	端部に浅い敲打痕あり。	III	197

第194図 VII D 2 g 住居跡出土遺物(2)

西壁11cm、北壁24cmである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、粉炭と焼土粒を全体に含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で、中央部がやや凹む。全体的に斜面そってやや傾斜する。炉の北側は礫が多く固いが、他は総じて比較的軟質である。

炉の北側に埋設土器が検出される。床面から10cm程掘り込み、やや斜位に埋められている。柱穴は3棟含めて、15個検出された。位置関係からP1～P9が本住居に伴うものと考えられる。周溝は幅10cm、深さ15cmで住居の埋土よりややロームを多く含む。

〈炉〉ほぼ中央に地床炉を1基検出した。焼土の範囲は74×68cmの不整形に分布し、厚さは最大9cmである。断面形はレンズ状で、固く締まった焼土である。

VIII D 2 g - 2 住居跡 (遺構番号101)

VIII D 2 g 住居跡の周溝の北および西の外側に一部残存する周溝を伴う住居をVIII D 2 g - 2 住居跡とする。本住居に伴う柱穴は、位置関係からP10～P12と考えられる。周溝は幅10cm、深さ6～8cmの規模で、ごく一部が残存したものと推定される。

VIII D 2 g - 3 住居跡 (遺構番号102)

VIII D 2 g 住居跡の周溝の外側に西壁際を中心に巡る周溝を伴う住居をVIII D 2 g - 3 住居跡とする。本住居に伴う柱穴は、位置関係からP13～P15と考えられる。周溝は幅8cm、深さ6～8cmの規模で、ごく一部が残存したものと推定される。

遺物 (第193・194図、写真図版196・197)

出土遺物は、そのほとんどが最も新しいVIII D 2 g 住居跡のものであると考えられるが詳細は不明である。

〈土器〉床面から5309を含めて1415g、埋土から715g出土した。942は炉の北側に埋設されていた土器で胴上半部にススが付着している。2山で1単位の頂部を4単位有する波状口縁の土器である。2山の頂部下にはそれぞれに指頭大の凹文がつけられる。口縁部文様帯は半截竹管の内面を用いて波状沈線と平行沈線を描くが、その順序は不規則で施文も粗雑であり、装飾的水準は低いという印象をもつ。2本1単位の沈線のうち、口縁に近い方の条が深く刻まれている。内面は繊維質の平らな工具でなでられている。埋土からは他に網目状撚糸文、木目状撚糸文、縦位綾絡文の小破片が出土している。

〈石器〉945は尖頭部が横折れしている。950は小型の磨製石斧の基部のみが残ったものである。他にUフレ1点、フレーク1点が床面から、フレーク2点が埋土から出土している。

時期 VIII D 2 g 住居跡は、床面埋設土器から縄文時代前期末葉に属する。他の住居もほぼ同時期と考えられる。

ⅧD 0 i 住居跡 (遺構番号103)

遺構 (第195図、写真図版64)

〈検出状況〉東尾根と西尾根に挟まれた狭隘な谷底平野部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層面で、黒色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する楕円形である。規模は短軸 2.6 m、長軸 3.8 m である。

〈壁・壁高〉褐色土層で、やや外傾する。壁高は、東壁20cm、西壁14cm、南壁 8 cm、北壁26cm である。

〈埋土〉黒色土を主体とし、締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉褐色土であるが、極めて軟質である。そのため、固く締まった黄褐色土まで掘り込んでしまった。仮にその面を床面とすると、炉と想定される焼土が床面から浮いてしまう結果となる。住居焼失に伴う焼土の可能性もないではないが、焼土の断面観察からは地床炉と考えられた。このことから、固さについては疑問があるものの、焼土のレベルが床面であったと考えられる。

〈炉〉地床炉が 2 基検出された。西側のものを 1 号炉、東側のものを 2 号炉とする。1 号炉の焼土は 80×120 cm の不整形に分布し、厚さは最大 10cm である。2 号炉の焼土は 43×52cm の不整形に分布し、厚さは最大 12cm である。全体的に軟質ではあるが、褐色土および基盤層である黄褐色土が焼成を受けたものである。

遺物 (第195図、写真図版197)

〈土器〉床面から 1080 g 出土しているが、図示した他に網目状撚糸文、組縄縄文、竹管文などの小片が混入している。

〈石器〉図示した他にフレーク 6 点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出面・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

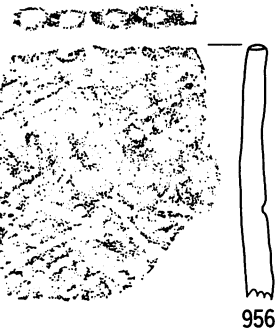
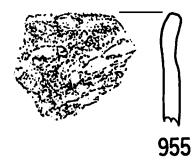
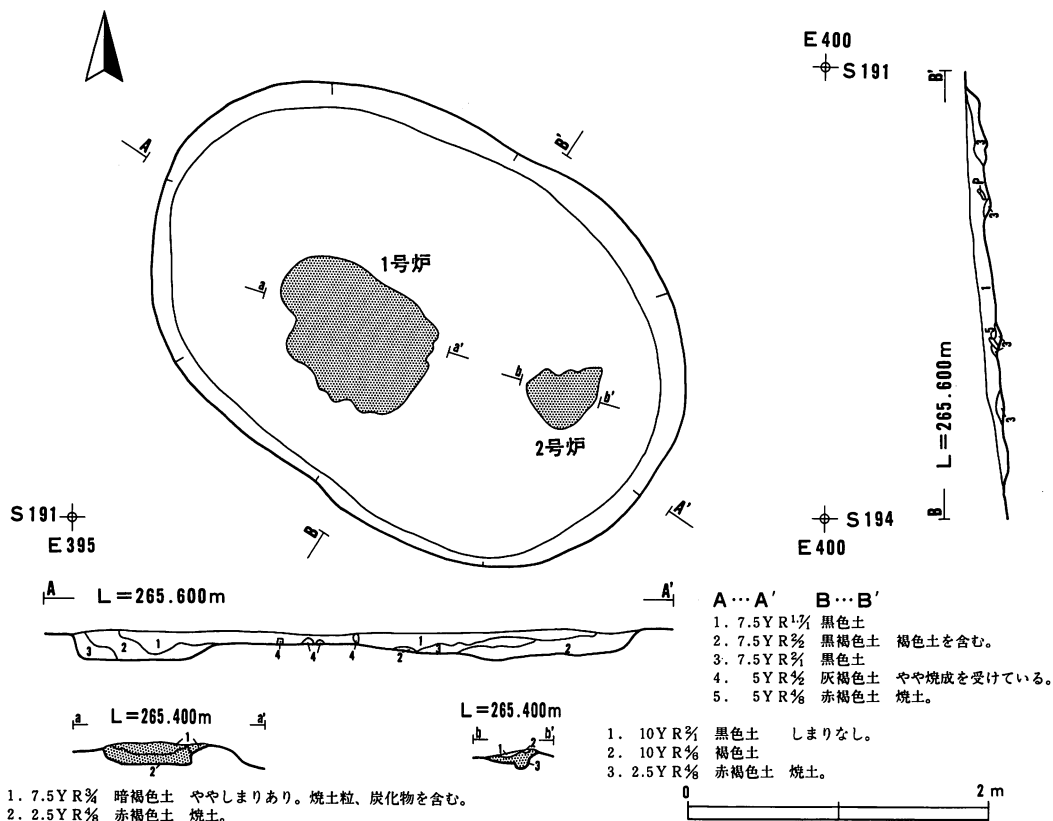
ⅧE 7 a 住居跡 (遺構番号104)

遺構 (第196図、写真図版65)

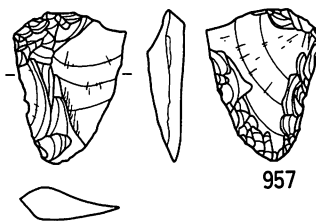
〈検出状況〉東尾根南麓ないし東尾根と西尾根に挟まれた狭隘な谷底平野部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層上面で検出した。

〈形状・規模〉径 3 m 前後のほぼ円形である。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層にあたる黄褐色土層で、地形的に常時水を含む位置にあるためやや軟質である。壁高は東壁20cm、西壁 3 cm、南壁11cm、北壁36cm である。



954~956 0 10 cm



957 0 5 cm

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底口径	器高	備考	分類	写真
954	VII D 0 i 住	床面	櫛歯状沈線。						II 9	197
955	VII D 0 i 住	床面		不明。						197
956	VII D 0 i 住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L R 横。片結び横位綾絡文。					II 6 b オ	197

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
957	VII D 0 i 住		不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	4.0	3.0	1.0	8.22	対称性にやや欠けるが、形にまとまりあり。	I b 2	197

第195図 VII D 0 i 住居跡・出土遺物

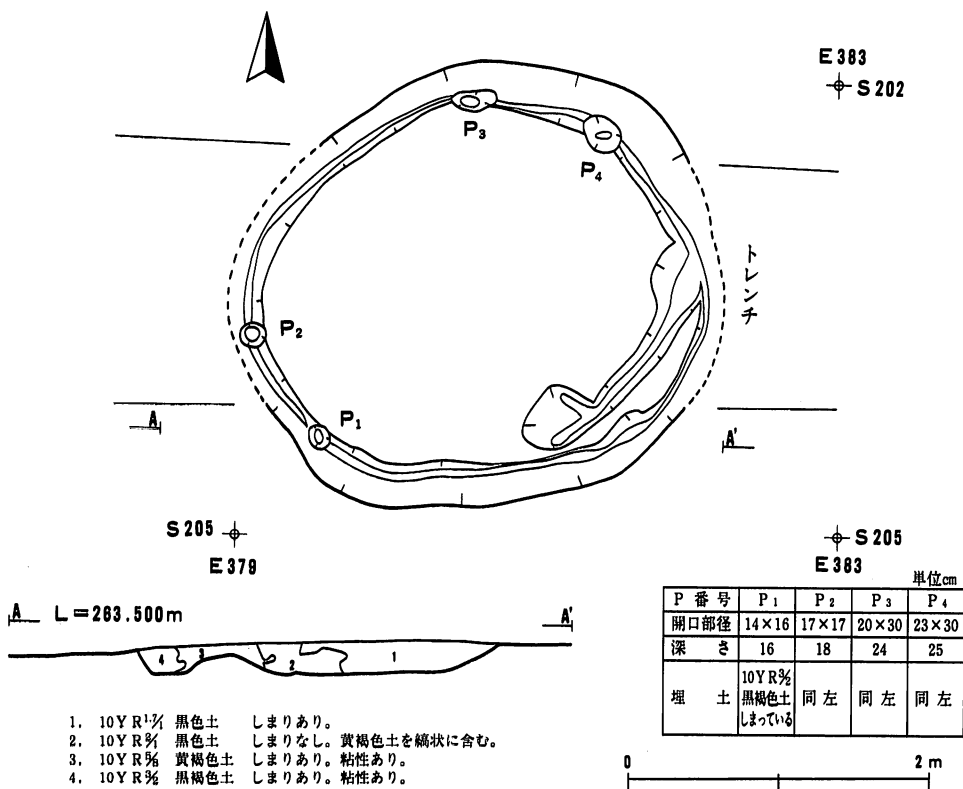
＜埋土＞住居中央部で断面観察できなかったが、黒色土、褐色土、およびそれらと黄褐色土との混土によって構成される。

＜床・柱穴・施設＞基盤層に当たる黄褐色土であるが、水分を多く含み表面は比較的軟質である。ほぼ水平で平坦である。柱穴は4個検出された。いずれも壁際周溝内に位置する。規模的に主柱穴とは考えにくい。埋土は黒褐色土で住居埋土に類似する。周溝が壁際に全周する。幅15～20cm、深さ10～20cmで、埋土は柱穴のそれと等しい。住居内南西方向に周溝が2重となる部分がある。建替えの可能性もあるが、埋土では区別できず、一応単一の住居としておく。

＜炉＞検出されなかった。

遺物＜土器＞埋土から、縄文前期に属すると考えられる無節の斜縄文の極小破片2点のみの出土である。図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、検出面・出土遺物から縄文時代前期と考えられる。



第198図 VII E 7 a 住居跡

VIII E 9 b 住居跡 (遺構番号105)

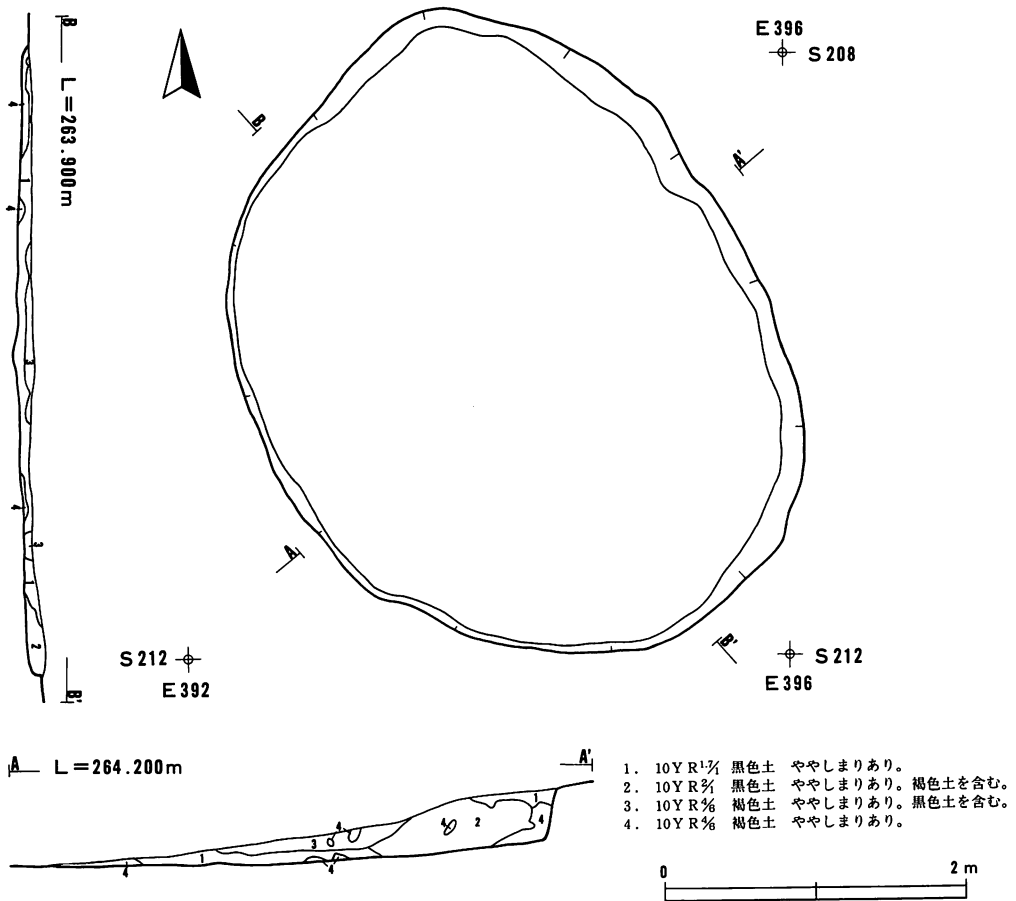
遺構 (第197図、写真図版65)

<検出状況>東尾根南麓の平坦部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層上面で検出した。

<形状・規模>長軸が等高線にほぼ平行する楕円形で、短軸3.4m、長軸4.5mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層を、下位は基盤層にあたる黄褐色土層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は東壁30cm、西壁2cm、南壁3cm、北壁30cmである。

<埋土>腐植土である黒色土およびそれと褐色土との混土を基調とする。自然堆積の様相を示す。



第197図 VIII E 9 b 住居跡

〈床・柱穴・施設〉基盤層に当たる黄褐色土で、固く締まっている。ほぼ水平であるが植生根により小さな凹凸がある。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から、沈線1条を有する他は無文の極小破片が1点出土したのみである。

図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、検出面・出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。

VIII E 0 a 住居跡（遺構番号106）

遺構（第198図、写真図版66）

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。腐植に富む黒色土の下層の褐色土層上面で検出した。西側は、掘りすぎてしまった。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉不明である。残存値で南北3.5m、東西4.8mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁22cm、北壁21cmである。

〈埋土〉腐植土である黒色土および黒褐色土で構成される。締まりは全体によくない。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層である黄褐色土で、南側は褐色土である。西側に3～4cm低い部分があり、そこに焼土が形成される。建替えの可能性もあるが、埋土は等しく、単一の住居と考えられる。全体に斜面沿ってやや傾斜し、南側は北側より10cm程低い。柱穴は検出されなかった。

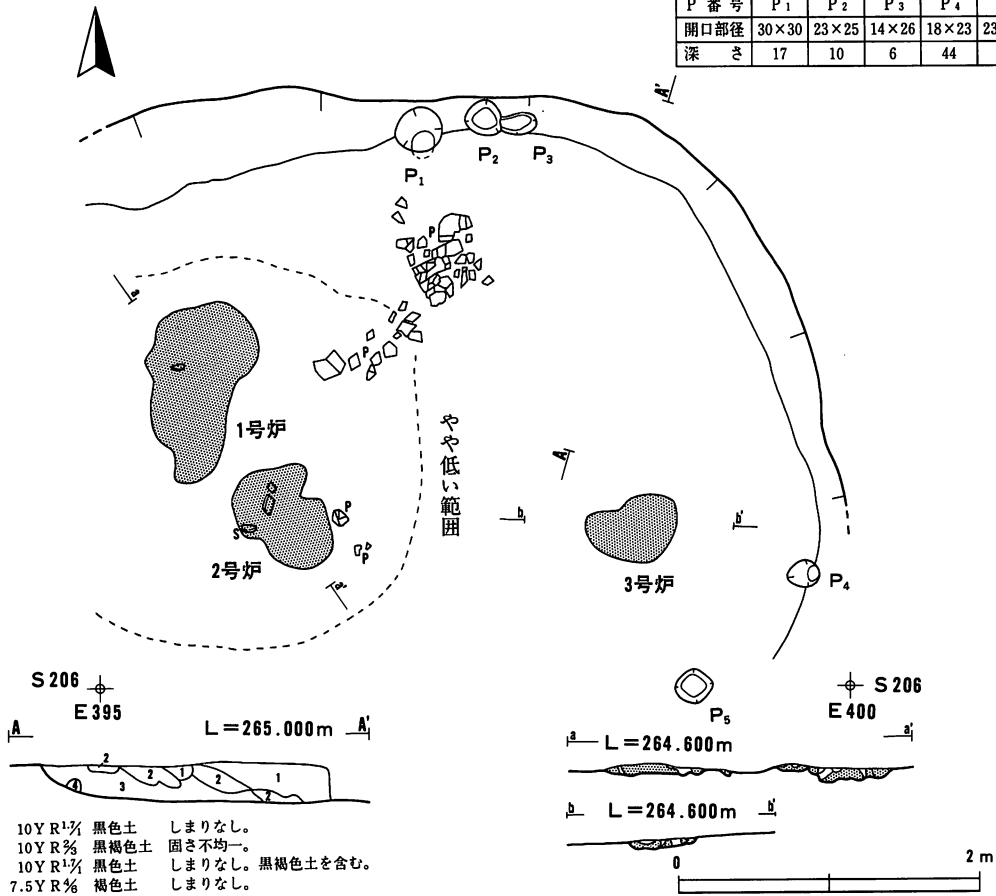
〈炉〉焼土が3基検出された。断面からいずれも標準土層が焼成を受けたものと観察されることから、地床炉と考えられる。西側から1号炉、2号炉、3号炉と命名する。1号炉の焼土は65×110cmの不整形に分布し、厚さは最大10cm、2号炉のそれは60×70cmの不整形に分布し、厚さは最大6cm、3号炉のそれは40×60cmの不整形に分布し、厚さは最大8cmである。やや軟質な部分もあるが、断面形はほぼレンズ状である。

遺物（第198～200図、写真図版197・198）

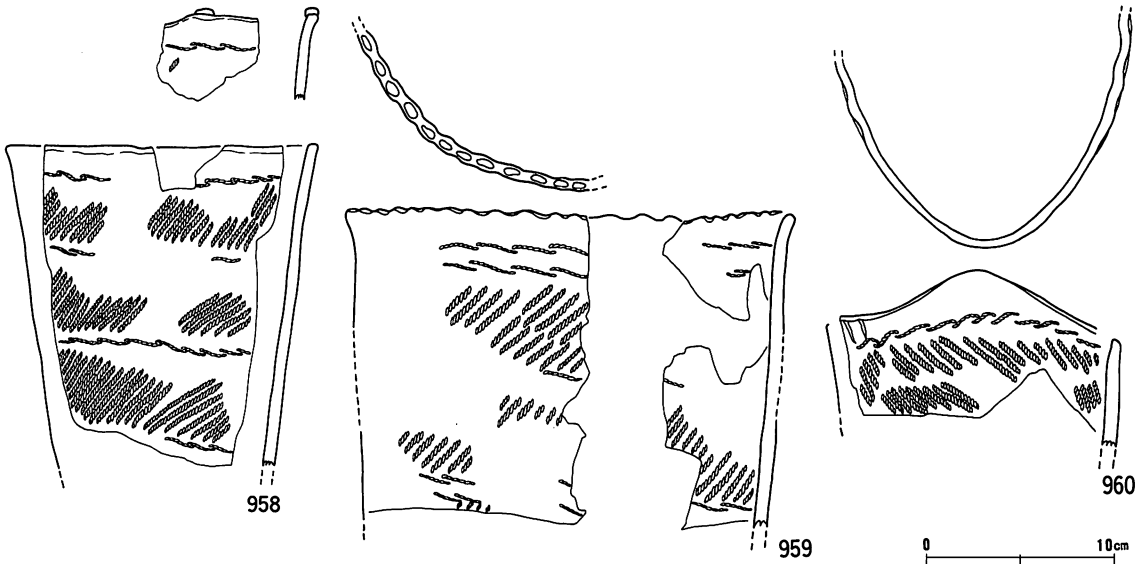
〈土器〉床面から6095g、埋土から2115g出土した。958は口唇部に小さな瘤が貼り付けられるが、口唇部に数箇所の剥落部分があることから、貼瘤は複数個あった可能性が高い。器表面は磨耗していて不明瞭であるが、綾絡文は斜縄文原体の縄端片結びによるものと思われる。959は脆弱化していて剥落が著しく明瞭ではないが、縄端片結びによると考えられる綾絡文が口縁下に2条走る。胴部についてはその単位は不明である。口唇部には指頭状の圧痕が右斜め方向から施される。内面にはハケメ状の調整が施される。胎土に繊維は含まれない。960は石炭バケツ形の器形の土器と思われる。対向する位置に頂部を配し、その間を花卉状口縁で連絡

単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	30×30	23×25	14×26	18×23	23×25
深さ	17	10	6	44	14

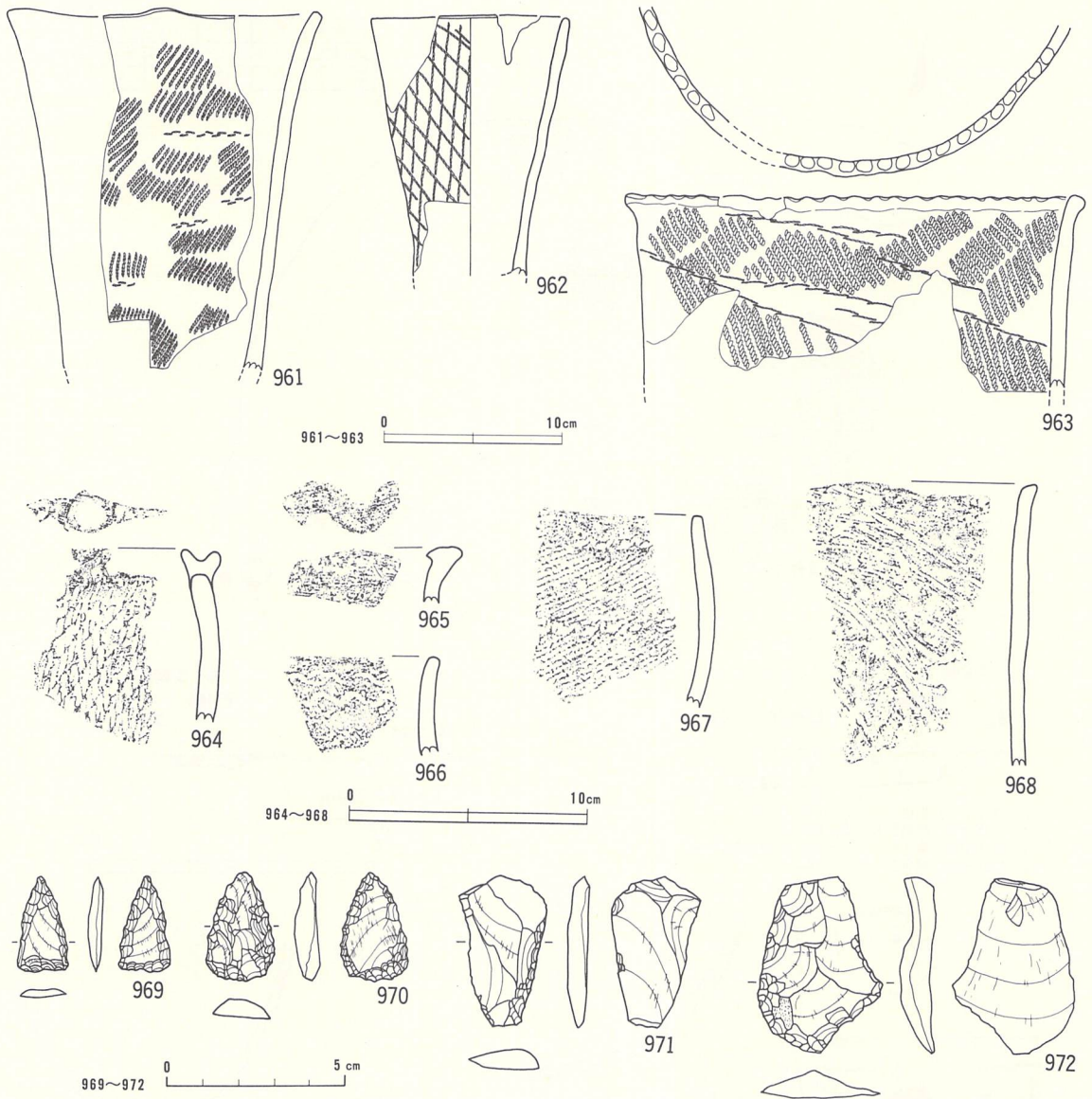


1. 10Y R^{1/2} 黒色土 しまりなし。
2. 10Y R^{2/3} 黒褐色土 固さ不均一。
3. 10Y R^{1/2} 黒色土 しまりなし。黒褐色土を含む。
4. 7.5Y R^{2/3} 褐色土 しまりなし。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	備考	備考	分類	写真
958	VII E 0 a 住	床面	口縁部に瘤状の貼付け。	L R 横、横位綫絡文。	(16.6)	—	(17.0)		II 6 a ヲ	197
959	VII E 0 a 住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L R 横、横位綫絡文。	(23.8)	—	(17.0)		II 6 b オ	197
969	VII E 0 a 住	床面	波状口縁、一部花卉状口縁、石炭バケツ形。	R L 横、横位綫絡文。	—	—	(7.8)		II 6 b ヲ	198

第198図 VII E 0 a 住居跡・出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
961	VIII E 0 a 住	床面	緩い波状口縁。	L R 横、横位綾絡文。	(8.9)	—	(20.0)		II 6 b ㇿ	198
962	VIII E 0 a 住	床面		R 網目状燃糸文。	(11.2)	—	(14.4)		II 6 b ㇿ	198
963	VIII E 0 a 住	埋土		L R、綾絡文。	(26.0)	—	(10.7)		II 6 b ㇿ	198
964	VIII E 0 a 住	埋土	口縁部裝飾体(円文)。頂部凹み。	RR ? (直前段反撚)					II 6 a ウ	198
965	VIII E 0 a 住	埋土	口縁部鋸歯状裝飾体。1						II 6 a 7	198
966	VIII E 0 a 住	埋土	横位綾絡文。	L R 横。						198
967	VIII E 0 a 住	埋土		L R 横。片結び横位綾絡文。					II 6	198
968	VIII E 0 a 住	埋土	草木類? による調整。							198

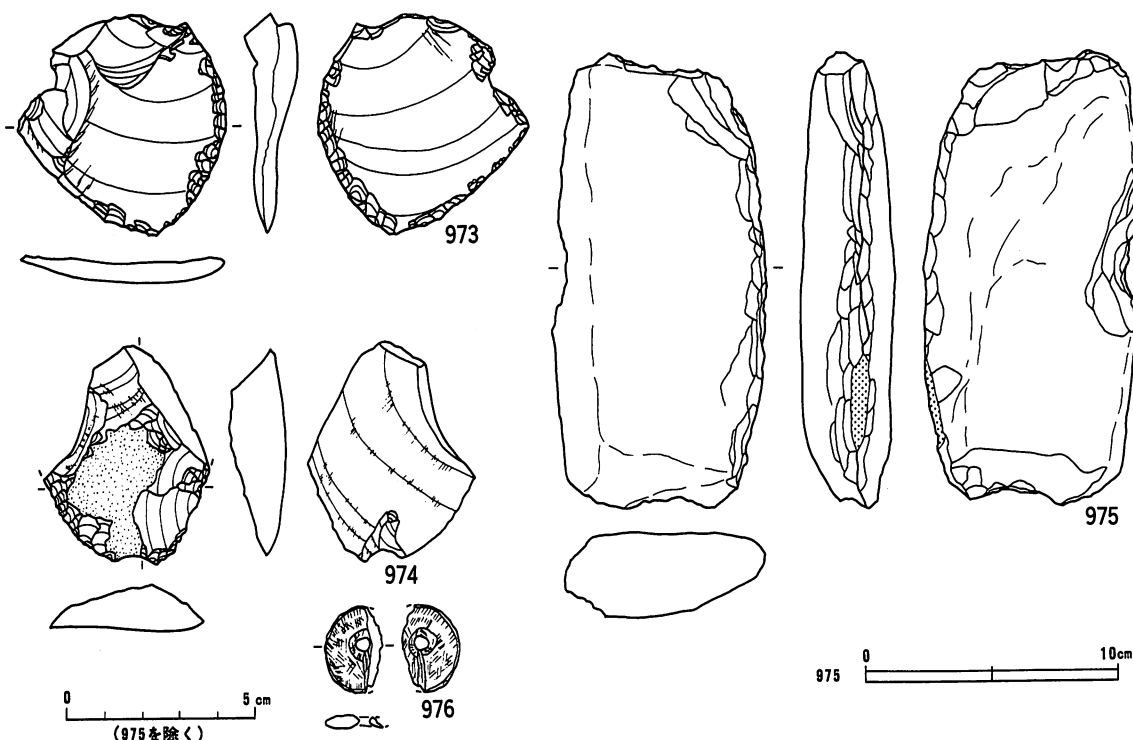
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
969	VIII E 0 a 住	埋土	石鏃	泥質凝灰岩	礫石西部	2.7	1.4	0.4	1.29		I 2	198
970	VIII E 0 a 住	埋土	尖頭器様石器	チャート質粘板岩	北上山地	3.0	1.9	0.7	3.31			198
971	VIII E 0 a 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.2	2.5	0.6	4.86		I a 1	198
972	VIII E 0 a 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.9	3.4	0.8	11.24	3 辺に使用が認められる。1 辺は微小剝離。	I c 2	198

第199図 VIII E 0 a 住居跡出土遺物(2)

するものであろう。地文は斜縄文と縄端片結びによる綾絡文と考えられる。胎土に黒雲母を含む。961は低平な頂部を有する緩い波状口縁をなすが、その単位は不明である。横位の綾絡文は斜縄文原体の縄端片結びによるものと思われる。内面はなでによって調整され、その胴下半部にはスガが付着している。963は口縁部がやや肉厚で口唇部には指頭状の圧痕が施される。地文は斜縄文と縄端片結びによる綾絡文であるが、縄文は節が縦横斜めに揃う印象もある。胎土に細礫を多く含む。

<石器・石製品> 970は表面の加工は粗く、特に尖頭部左辺は加工されていない。976の中央部の溝は表裏両側から加工しているが未貫通である。図示したほかに、岩手火山起源の溶岩が2点、フレークが1点埋土から出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
973	VII E 0 a 住		不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	5.8	5.6	0.7	25		I b 2	198
974	VII E 0 a 住		不定形石器	粘板岩	北上山地	(5.8)	(4.4)	1.5	(29.4)	撞器	I a 2	198
975	VII E 0 a 住		敲磨器類 A 群	凝灰質千枚岩	北上山地	18.0	8.5	3.7	790	挟り有り。	II b 2	198
976	VII E 0 a 住	炉付近	耳飾	チャート	北上山地	2.2	(1.5)	0.3	(1.73)			198

第200図 VII E 0 a 住居跡出土遺物(3)

Ⅸ D 1 e 住居跡 (遺構番号107)

遺構 (第201図、写真図版67)

〈検出状況〉東尾根西斜面下位の傾斜変換点に位置する。小角礫含みの褐色土層上面で暗褐色土～黒褐色土の落ち込みとして検出した。西側は一部倒木痕により攪乱を受け、また斜面のため流失している。

〈形状・規模〉西側は不明であるが長軸が等高線にほぼ平行する長円形基調と推定される。規模は長軸6m、短軸は残存値で3.1mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層である黄褐色土を壁とする。植生根による小さな凹凸が顕著である。全体的には緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁45cm、南壁17cm、北壁23cmである。

〈埋土〉斜面上方に当たる東側では、崩落土を含む。西側では倒木痕の影響を受けた黒褐色土が埋土となる。下位は極めて固い暗褐色土が主体をなすが、ブロック状に剥がれ、土器破片、フレークを多く含む。

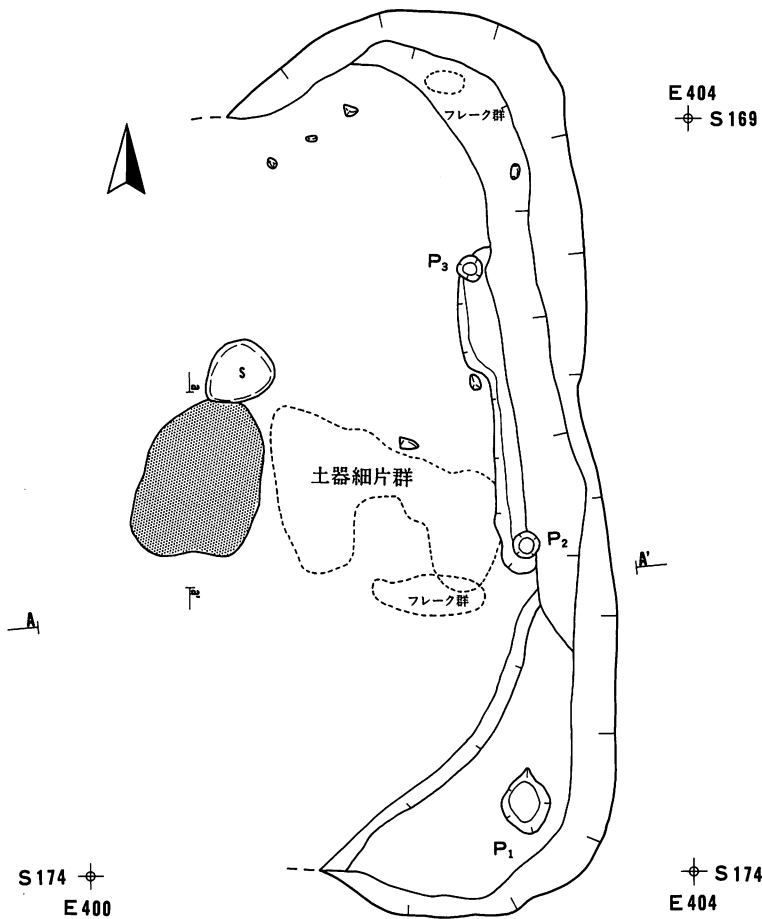
〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土であるが、斜面下方に当たる西側は褐色土を床とする。小さな凹凸あり、全体としては住居中央部が皿状にやや凹む。南側に7～10cm程度高い部分がある。建替えの可能性もあるが、埋土で区別できなかったことから、単一の住居として考えた。柱穴は3個検出された。埋土は住居の埋土よりやや黄味がかり、粉炭を混入する。P2とP3は、東壁際に部分的に巡る周溝の両端に位置し、対応するものと思われる。周溝の規模は幅15～30cm、深さ12～20cmで、住居の埋土である暗褐色土と等しい。焼土の北に隣接して偏平な垂角礫が検出された。加工痕・使用痕は肉眼では観察できない。

〈炉〉焼土が1基検出された。80×120cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大12cmである。基盤層である黄褐色土が被熱して漸移的に赤変したものであるが、倒木痕の影響を受けて黒褐色土が入り込んでいる部分がある。

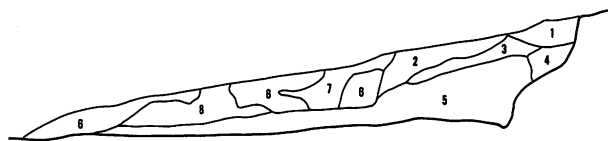
遺物 (第202・203図、写真図版199)

〈土器〉床面から4451g、埋土から1595g出土した。977は床面及びその直上から纏まって出土した破片を接合したものである。破線で図示した部分がそれである。口縁部は不明であるが、胴部は比較的太めの縄を用いて地文のみが施文される。内面は剥落が著しい。978は棒状の工具による縦方向のミガキが顕著である。胎土には細礫を多く含む。

〈石器〉986は偏平で石鏃の可能性があるが対称性を欠き、表裏の加工が大きく異なる。988は幅の広い剥離でやや粗い加工である。側面観が鋸歯状となる。図示した他に、半円状花崗岩質岩が1点、Uフレカが4点、フレーク・チップ類が115点出土している。フレーク・チップ類は床面に多く、その分布は全体に広がるが特に多かったのが図示した部分である。フレークの



A L = 270.000m



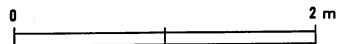
1. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
2. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
3. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。
4. 10Y R% 黄褐色土 ややしまりあり。
5. 10Y R% 暗褐色土 固さ不均一。
6. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。
7. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。
8. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。褐色土をブロック状に含む。

単位cm			
P 番号	P ₁	P ₂	P ₃
開口部径	33×44	18×18	17×17
深さ	17	25	32
埋土	住居埋土よりやや黄色味がかかる。炭化物が混入する。		

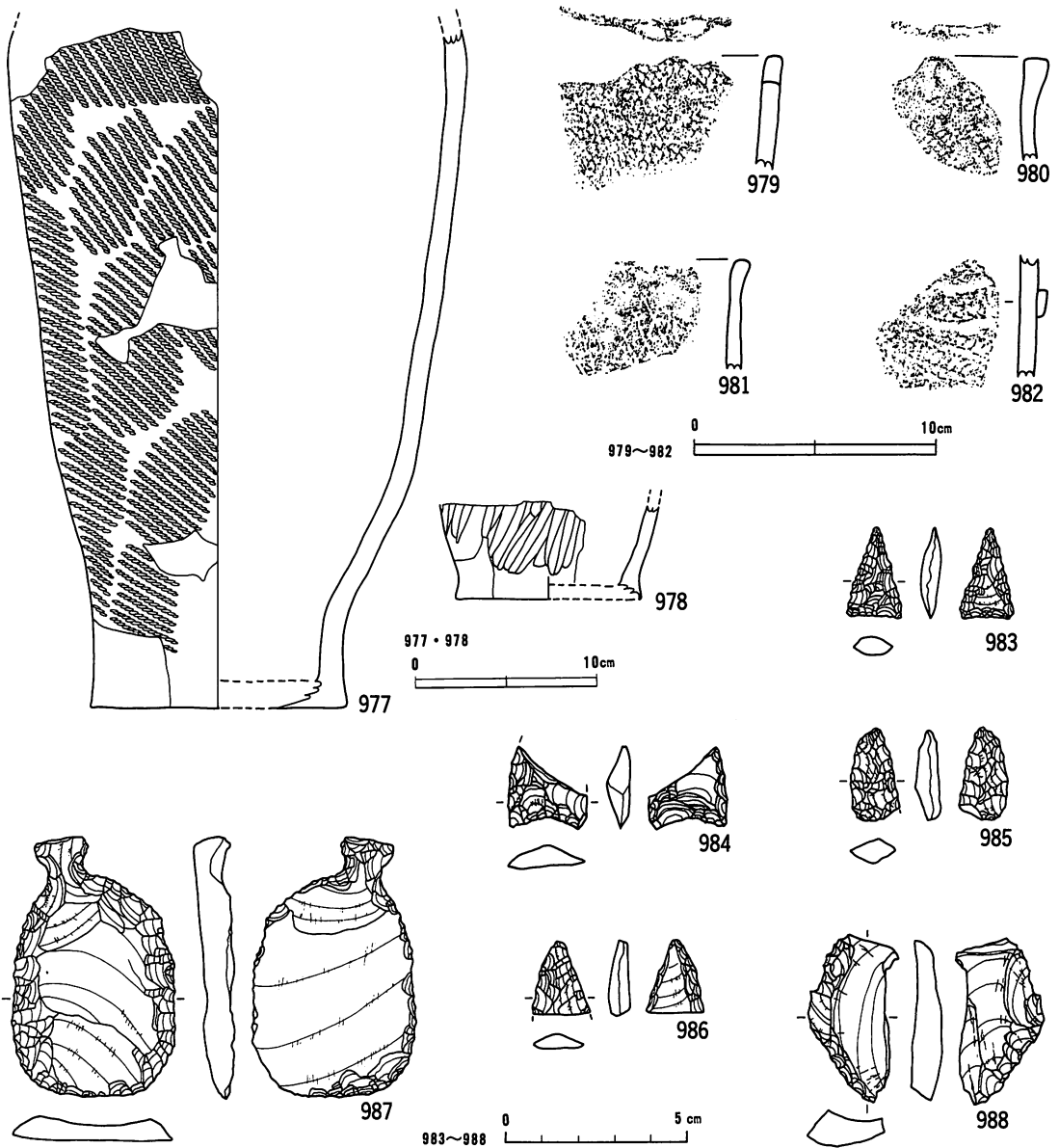
A L = 296.200m



1. 7.5Y R% 暗褐色土 しまりなし。
2. 5Y R% 橙色土 焼土。固くしまっている。



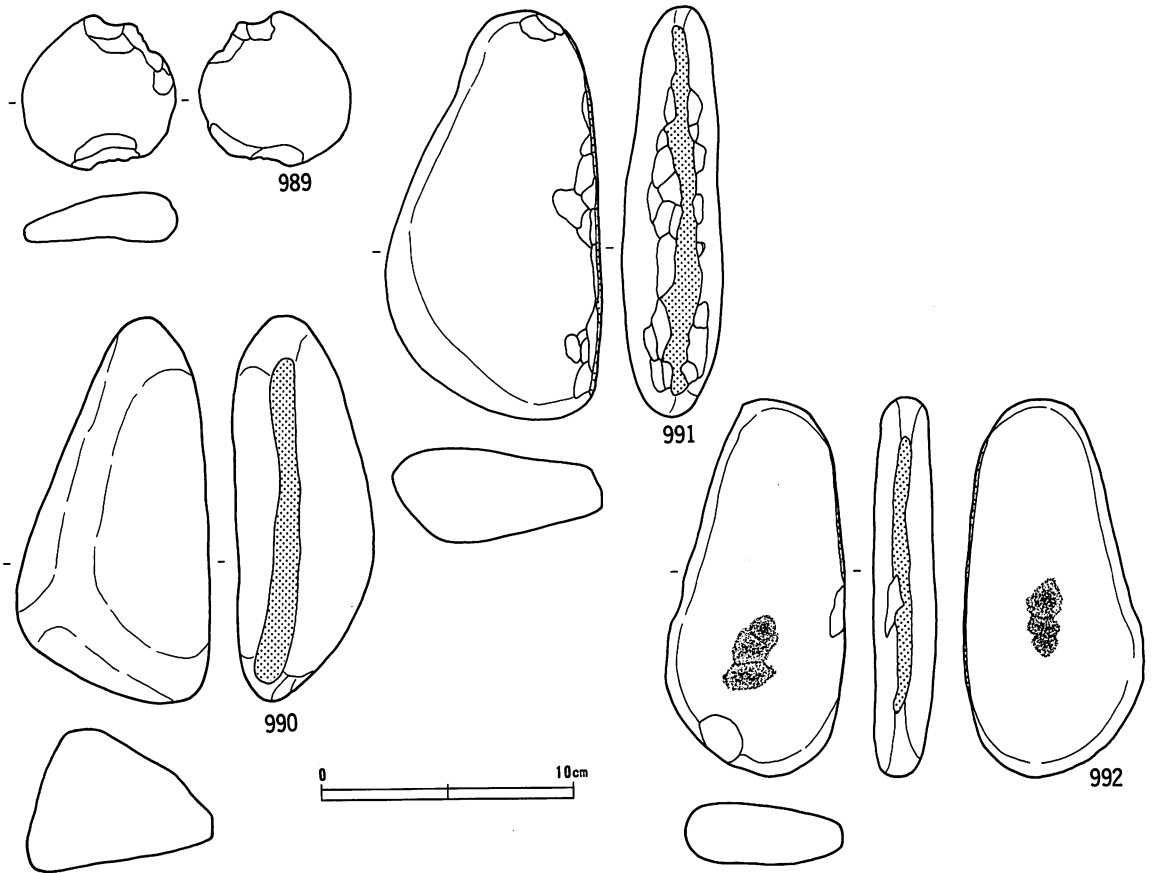
第201図 IX D1 e 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
977	IX D 1 e 住	床面		L R 縦。	—	(14.2)	(37.6)	輪積み痕。	II 6	199
978	IX D 1 e 住	Q 4 埋土			—	(10.2)	(5.2)	底部付近篋状工具によるケズリ。		199
979	IX D 1 e 住		山形口縁。頂部口唇部凹み。	多軸緒条体? (不明)。					II 6 aウ	199
980	IX D 1 e 住		山形口縁。	R L 横。					II 6 aウ	199
981	IX D 1 e 住			L 網目状燃糸文。					II 6	199
982	IX D 1 e 住		陸帯上縄文。	縄巻縄文						199

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
983	IX D 1 e 住	床面	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.5	0.5	1.33		I 1	199
984	IX D 1 e 住		石鏃	流紋岩	礫石西部	(2.2)	2.2	(0.6)	(1.47)	尖頭部側の半分以上がない。	II b 2	199
985	IX D 1 e 住	床面	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礫石西部	2.6	1.3	0.5	(0.93)		III 1	199
986	IX D 1 e 住		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	(2.0)	(1.6)	1.4	(1.53)	基部側の大半が欠損。横折れ。	I e	199
987	IX D 1 e 住		石匙	珪質泥岩	礫石西部	7.2	4.5	1.1	26.99		I b 1	199
988	IX D 1 e 住		不定形石器	硬質泥岩	礫石西部	4.6	2.4	1.0	8.19	側面観鋸歯状。	IV	199

第202図 IX D 1 e 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
989	ⅨD1e住	床面	石錘	チャート	北上山地	6.1	6.1	2.0	90		I	199
990	ⅨD1e住	床面	敲磨器類A群	兩輝石安山岩	奥羽山地	15.3	7.7	5.5	760	剝離無し。	I a 1	199
991	ⅨD1e住	床面	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	16.2	8.4	3.8	680		I b 1	199
992	ⅨD1e住	床面	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	14.9	7.2	2.3	380	+凹石。	Ⅲ a 1	199

第203図 ⅨD1e住居跡出土遺物(2)

一部について石質鑑定をした結果、北上山地産・粘板岩、同・チャート、雫石産・珪質泥岩、同・凝灰質泥岩であることが分かった。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD1h住居跡 (遺構番号108)

遺構 (第204図、写真図版68)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。小角礫を含む褐色土層下位で極暗褐色土の落ち込みとして検出した。北側でⅨD1h土坑と僅かに重複するが、新旧関係は不明である。

〈形状・規模〉長軸が斜面に平行する長円形で、規模は長軸3.3m、短軸2.2mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、外傾する。壁高は東壁34cm、西壁23cm、南壁6cm、北壁64cmである。

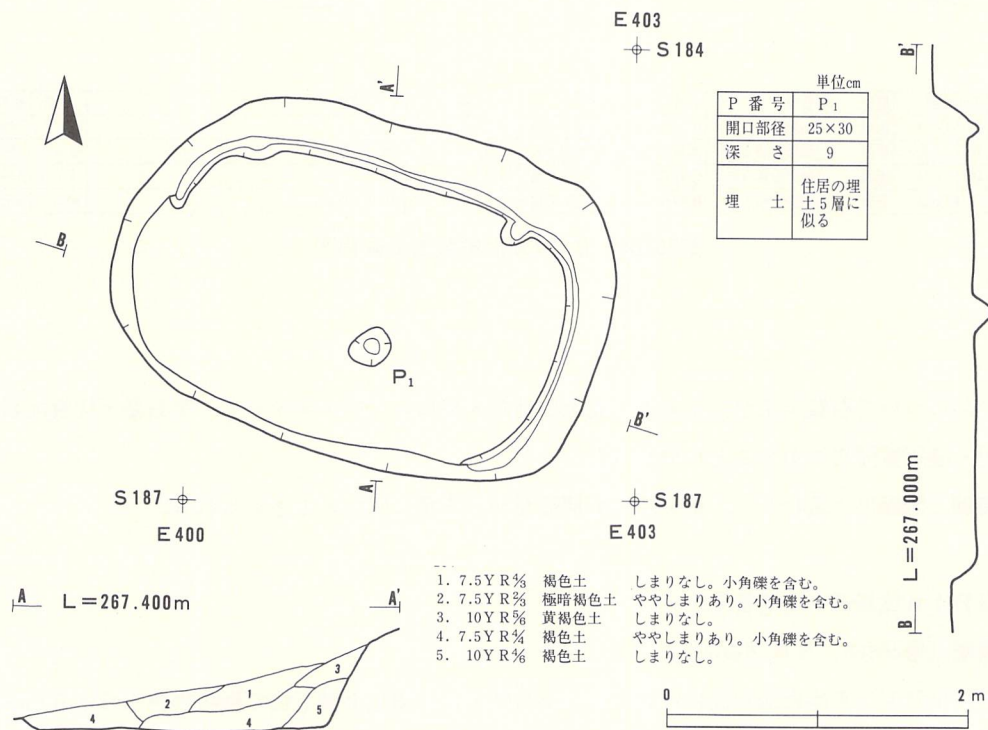
〈埋土〉上位中央部は極暗褐色土であるが、下位は褐色土主体で壁際には崩落土を含む。全体的に締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層である黄褐色土を、南側は褐色土を床とし、ほぼ水平で平坦である。固く締まっている。中央部に柱穴状の小土坑を検出したが、規模・形状から柱穴とはならないと思われる。埋土は住居の埋土に似る。周溝が、西壁際の一部、東壁際および北壁際に巡る。幅10~20cm、深さ7~10cmで、埋土は住居の第5層に等しい。

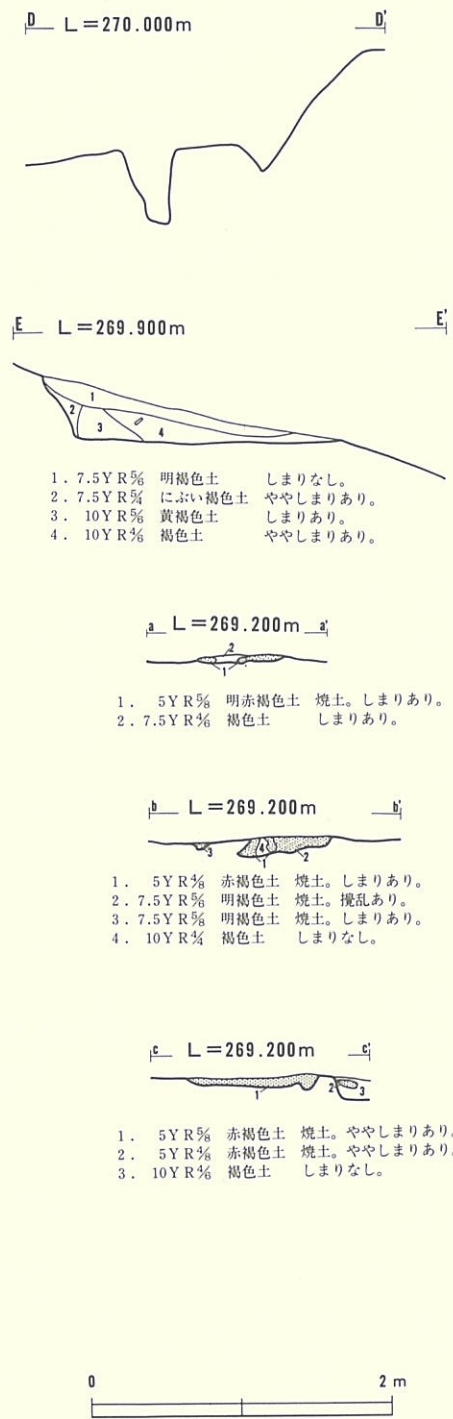
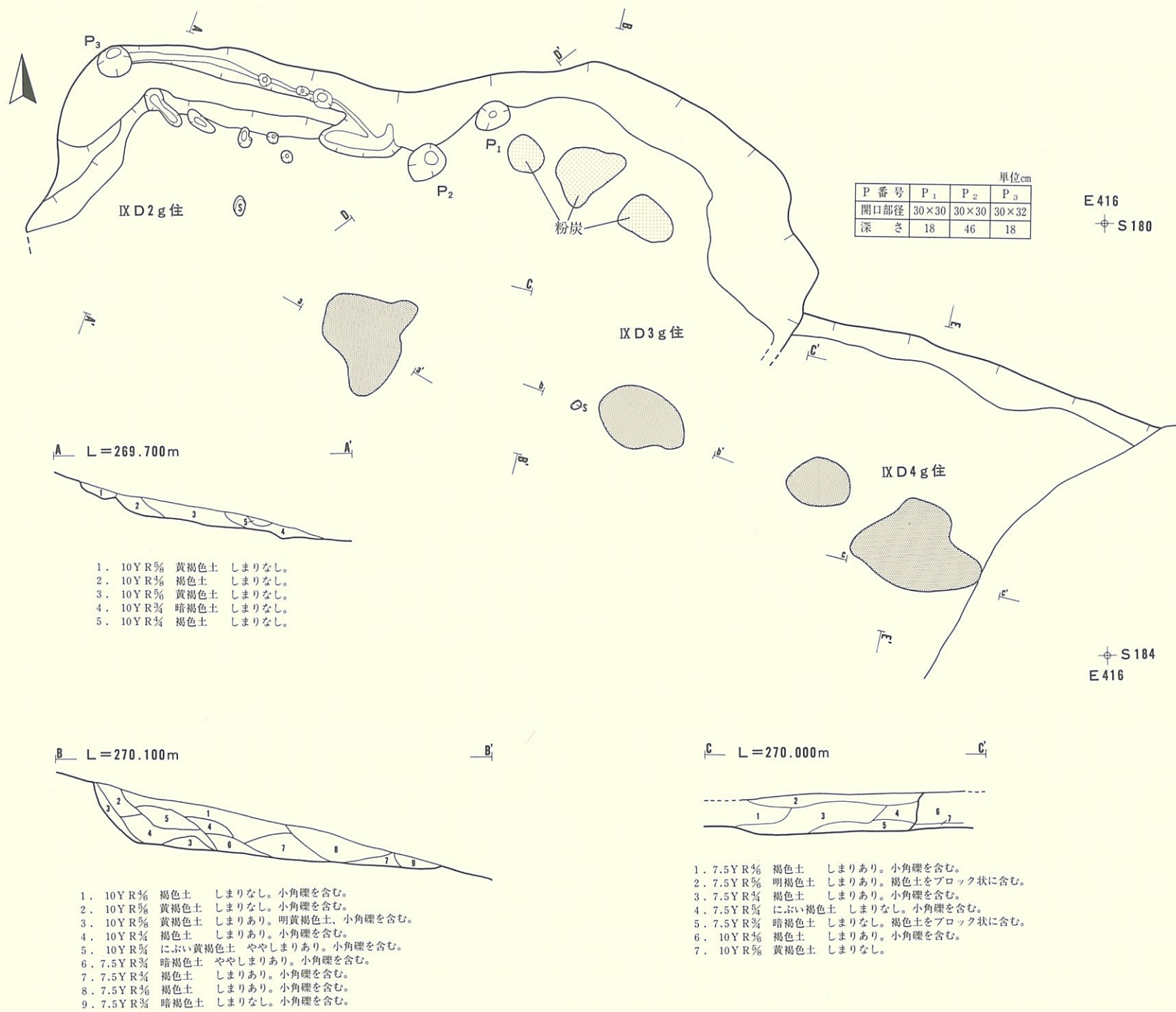
〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から縄文時代前期の横位の綾絡文と多軸絡条体の小破片が各1点出土したのみである。図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・埋土・出土遺物から縄文時代前期に属するものと思われる。



第204図 IX D1 h 住居跡



1. 7.5YR^{5/6} 明褐色土 しまりなし。
2. 7.5YR^{5/6} にぶい褐色土 ややしまりあり。
3. 10YR^{5/6} 黄褐色土 しまりあり。
4. 10YR^{5/6} 褐色土 ややしまりあり。

1. 5YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。しまりあり。
2. 7.5YR^{5/6} 褐色土 しまりあり。

1. 5YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。しまりあり。
2. 7.5YR^{5/6} 明褐色土 焼土。攪乱あり。
3. 7.5YR^{5/6} 明褐色土 焼土。しまりあり。
4. 10YR^{5/6} 褐色土 しまりなし。

1. 5YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。ややしまりあり。
2. 5YR^{5/6} 赤褐色土 焼土。ややしまりあり。
3. 10YR^{5/6} 褐色土 しまりなし。

第205図 IX D2 g・IX D3 g・IX D4 g住居跡

IX D 2 g 住居跡 (遺構番号109)

遺構 (第205図、写真図版68)

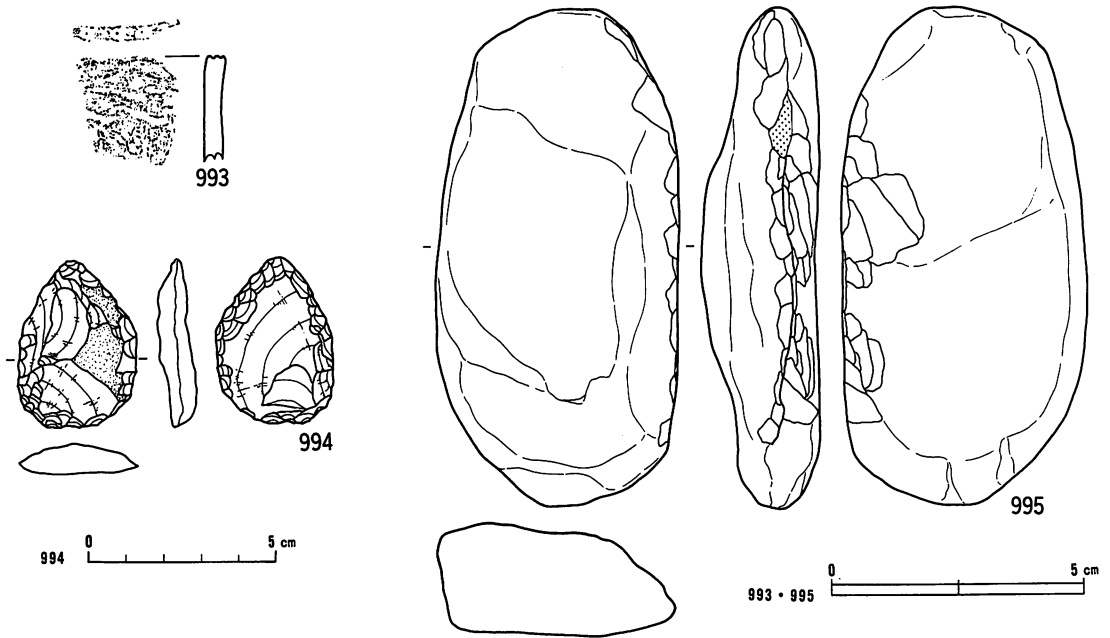
〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。平面的には検出できなかったが、褐色土層上面で炉と考えられる焼土を検出、その斜面上方で基盤層まで掘り込んだ壁を確認し、住居跡として認定した。東側でIX D 3 g 住居跡と重複するが、埋土からその境界および新旧関係を判断することはできなかった。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側および東側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は南北は残存値で2.5m、東西は不明である。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層であるにぶい黄褐色土を壁とし、北壁は階段状となる。壁高は西壁34cm、北壁48cmである。

〈埋土〉斜面上方は基盤層起源の黄褐色土を、下方は暗褐色土ないし褐色土を埋土とする。全体に締まりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方は基盤層を、下方は褐色土層を床面とする。ほぼ平坦であるが、



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
993	IX D 2 g 住	A-A'	ベルト	弁状口縁。頂部口唇部竹管刺突。横位綫結文。LR横。					II 6 a 1	200

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
994	IX D 2 g 住	床面	尖頭器椽石器	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	3.8	3.6	0.8	13.32			200
995	IX D 2 g 住	埋土	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	19.7	9.7	4.3	1220		II b 1	200

第206図 IX D 2 g 住居跡出土遺物

斜面沿って傾斜し、比高9cmである。柱穴がP2・P3の2個検出されたが、P2についてはIXD3g住居跡のものか所属不明である。周溝が北壁際に巡る。幅10～20cm、深さ6～7cmで底面には小さな凹凸がある。埋土は10YR6/6明黄褐色土で締まりを欠く。住居の埋土よりやや明るみがある。床面から壁への変換点にも窪みが数箇所検出されたが、周溝とも柱穴ともならない。〈炉〉地床炉が1基検出された。規模は74×90cmの不整形に分布し、厚さは最大4cmである。一部攪乱があるものの、床面を構成する褐色土層が焼土化したものがある。

遺物 (第206図、写真図版200)

〈土器〉床面から横位の綾絡文を1条有する土器片と多軸絡条体によって施文された小さい破片が合わせて480g出土したが図化は省略した。埋土からは993の他に網目状撚糸文、縦位綾絡文の小破片270gが出土した。

〈石器〉図示した他にUフレ3点、フレイク14点(うち床面7点)が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属するものと考えられる。

IXD2g-2住居跡(遺構番号110)

遺構 (第207図、写真図版69)

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。IXD2h住居跡の精査中に、同住居の北側に、一段高い平坦部と壁とを確認し、住居跡として認定した。南西側は流失している。

埋土断面観察から、本住居はIXD2h住居跡より古いと考えられる。

〈形状・規模〉不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西4.55m、南北は残存値で1.3mである。

〈壁・壁高〉小角礫を含む褐色土層を壁とし、やや外傾する。壁高は東壁18cm、西壁16cm、北壁24cmである。

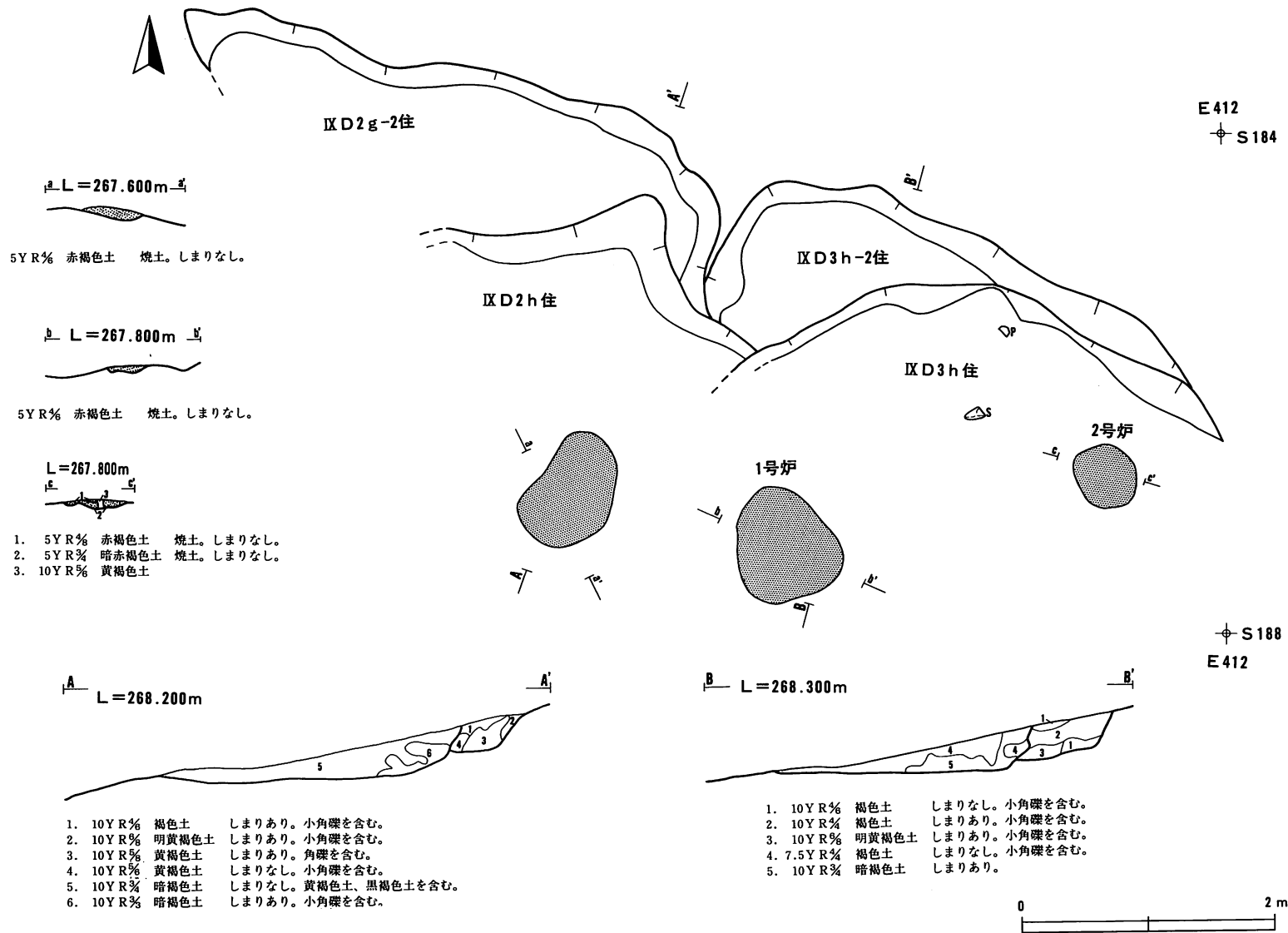
〈埋土〉西側では褐色土と暗褐色土で構成され、固さにむらがあり、ブロック状に剥がれやすい。

〈床・柱穴・施設〉褐色土層でほぼ水平で平坦であり、固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から、縄文時代前期の撚糸文の極小破片が4点(同一固体)出土したが、図化に耐えないので省略した。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。



ⅨD 2 h 住居跡 (遺構番号111)

遺構 (第207図、写真図版69)

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。平面的な検出はできなかった。小角礫を含む褐色土層上面で焼土を検出、その斜面上方に基盤層まで掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。北側でⅨD 2 g - 2 住居跡と、東側でⅨD 3 h 住居跡と重複する。埋土断面観察から、ⅨD 2 g - 2 住居跡より新しいと考えられる。

ⅨD 3 h 住居跡とは境界を明瞭にできなかった。ⅨD 3 h 住居跡の炉は、本住居の床面より10cmほど高いことから本住居のほうが古いと考えられる。

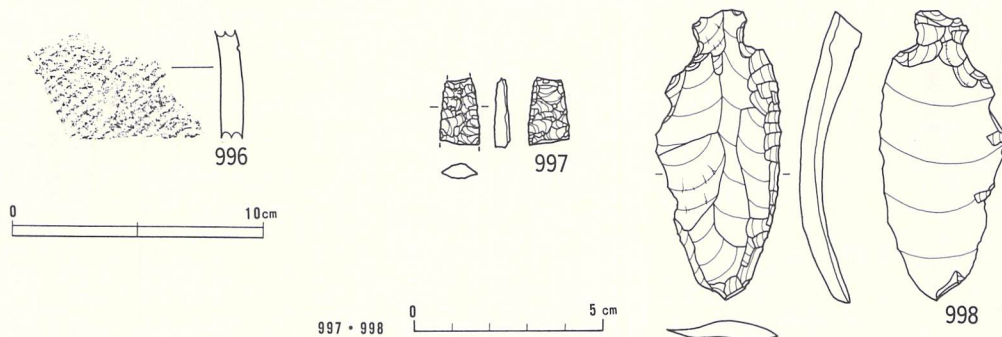
〈形状・規模〉南側は斜面のため流失しており、東側はⅨD 3 g 住居跡との重複により不明である。規模も不明であるが、焼土から北壁までは3mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、褐色土層ないし基盤層およびⅨD 2 g - 2 住居跡の埋土を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は20cmである。

〈埋土〉黒褐色土と黄褐色土を混入する暗褐色土を主体とする。固さにむらがありブロック状に割られる。

〈床・柱穴・施設〉褐色土層を床面とし、ほぼ水平で平坦である。比較的軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が1基検出された。65×90cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。床面を構成する褐色土層が焼土化したものである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真		
996	ⅨD 2 h 住	焼土内		L R 横。片結び横位綾絡文。						200		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
997	ⅨD 2 h 住	焼土の中	石鏃	粘板岩	北上山地	(1.7)	1.1	0.4	(0.81)	基部、尖頭部両方も欠損。		200
998	ⅨD 2 h 住		石匙	泥質凝灰岩	雫石西部	7.7	3.3	0.8	16.26	刃部に相対する辺は粗い加工(素材)のまま。	1 a 2	200

第208図 ⅨD 2 h 住居跡出土遺物

遺物 (第208図、写真図版200)

〈土器〉996 の他、埋土から繊維を混入する土器小片が数点出土している。

〈石器〉997 は基部、尖頭部両方とも欠損している。尖頭部側はステップ状剥離、基部側は横折れである。

時期 出土遺物から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD 3 c 住居跡 (遺構番号112)

遺構 (第209図、写真図版70)

〈検出状況〉東尾根西斜面から平坦部への変換点に位置する。小角礫を含む褐色土層上面で検出した。西側と北側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉西半分は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は残存値で、南北5.5m、東西3.2mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、外傾する。壁高は東壁28cm、南壁33cmである。

〈埋土〉壁際は締まりにむらがあつてブロック状に剥がれやすい。床に接する部分では、固く締まり遺物を含む。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる東側は基盤層である黄褐色土、南側は褐色土層を床面とする。斜面に沿ってやや傾斜し、基盤層の部分は高く、比高16cmである。柱穴が南東隅に1個検出された。周溝が、東壁際および南壁際の一部に巡る。規模は、幅15~25cm、深さ4~10cmで住居の埋土と大差ない褐色~黄褐色土で締まりに欠ける。

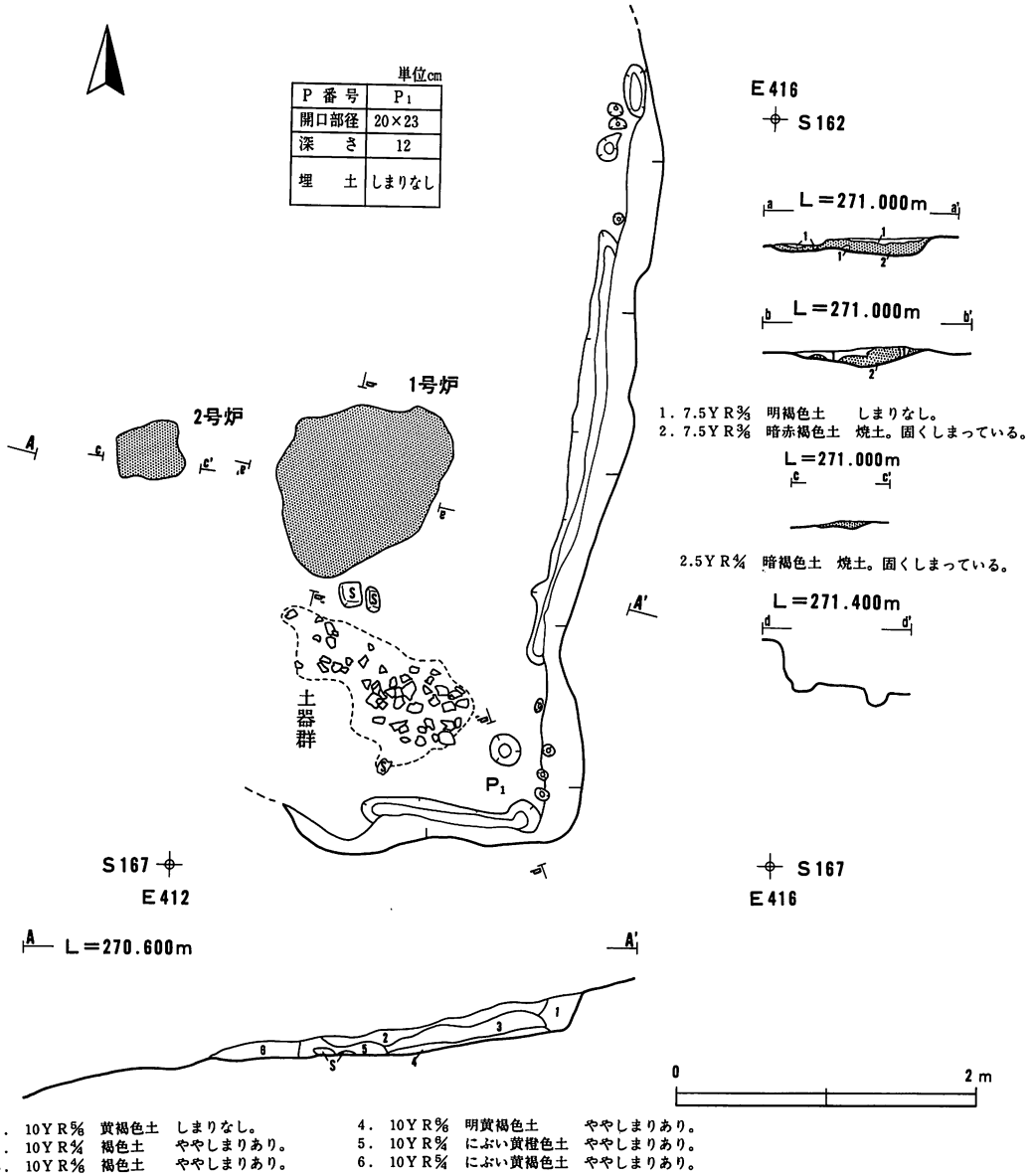
〈炉〉焼土が2基検出された。いずれも断面がレンズ状で基盤層まで漸移的に焼土化がおよぶことから地床炉と考えられる。東側のものを1号炉、西側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は105×13cmの不整形に分布し、厚さは最大14cmである。2号炉の焼土は47×54cmの不整形に分布し、厚さは最大6cmである。

遺物 (第210~213図、写真図版200・201)

〈土器〉南壁よりに一括して出土したのが、999・1000・1001 (1002と同一個体) の3個体である。床面から床上20cmにかけて、原形をとどめることなく渾然として出土したものであり、共伴すると把えていいものである。999はやや石炭バケツ状に類似する器形で、口縁部には上面観が鋸歯状となる装飾体が2単位、対向して位置する。装飾体の両端には三角形の山形突起が配される。口縁部下には胴部と区画するように隆帯が走り、その上を棒状の工具による連続突起が施される。装飾体の口縁部分には口縁部下と同様の隆帯が鋸歯状に走るが、その屈折部分は折り返し手法によるものではない。一方は3個の三角形を形成するのに対し、他方は4

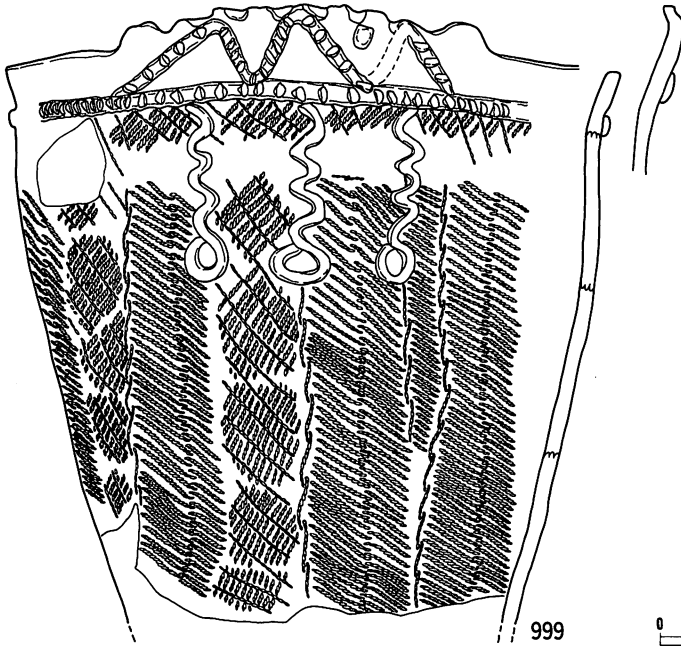
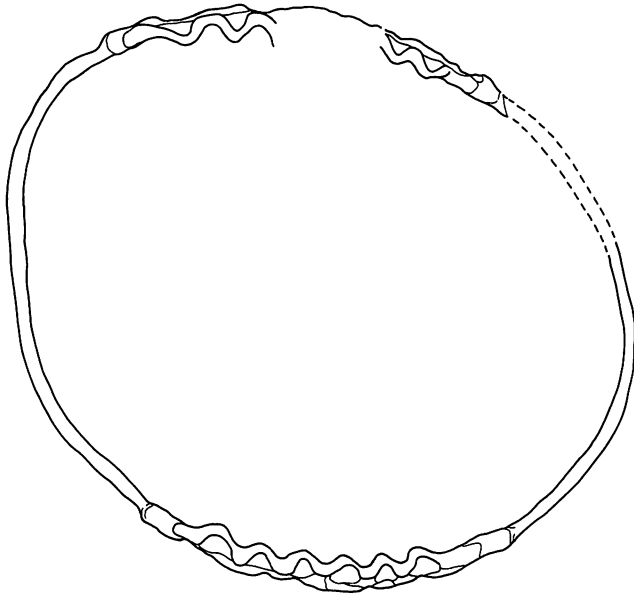
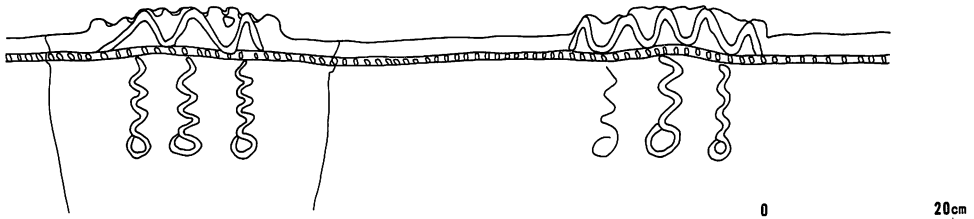


単位cm	
P 番号	P ₁
開口部径	20×23
深 さ	12
埋 土	しまりなし



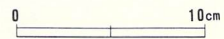
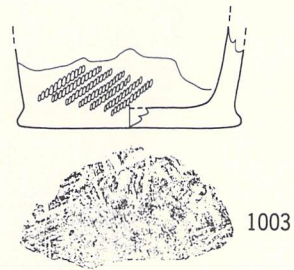
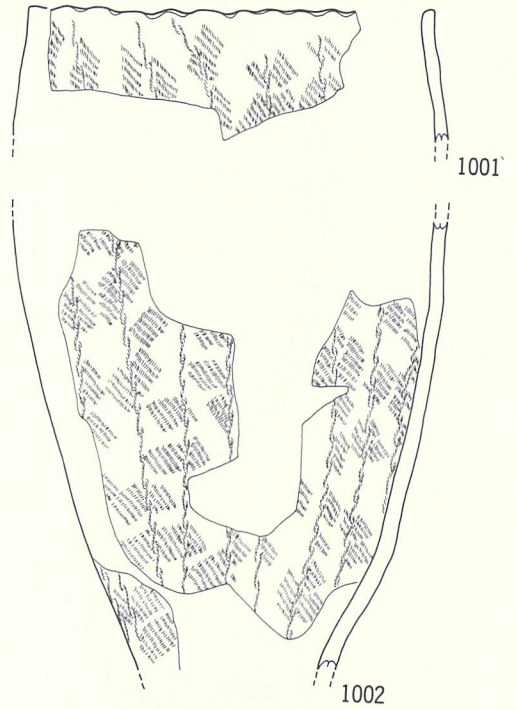
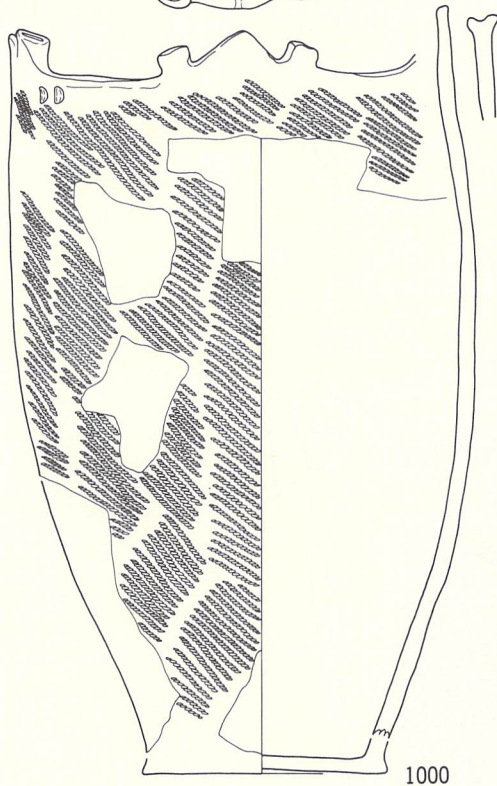
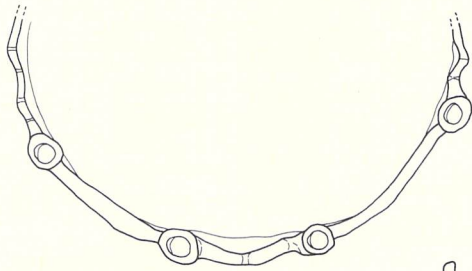
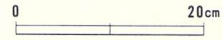
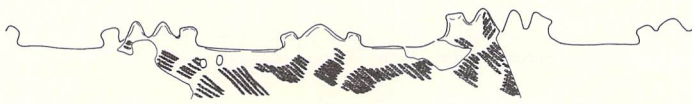
- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1. 10Y R% 黄褐色土 しまりなし。 | 4. 10Y R% 明黄褐色土 ややしりあり。 |
| 2. 10Y R% 褐色土 ややしりあり。 | 5. 10Y R% におい黄褐色土 ややしりあり。 |
| 3. 10Y R% 褐色土 ややしりあり。 | 6. 10Y R% におい黄褐色土 ややしりあり。 |

第209図 Ⅸ D3c 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
999	ⅨD3c 住	床面	鋸齒状裝飾体、隆帯上棒状工具による刻み、ボタン状突起。	L R 結束、L R 軸に R 巻き付け?	32.9	-	(32.8)	内面ケズリ	Ⅱ6a7	200

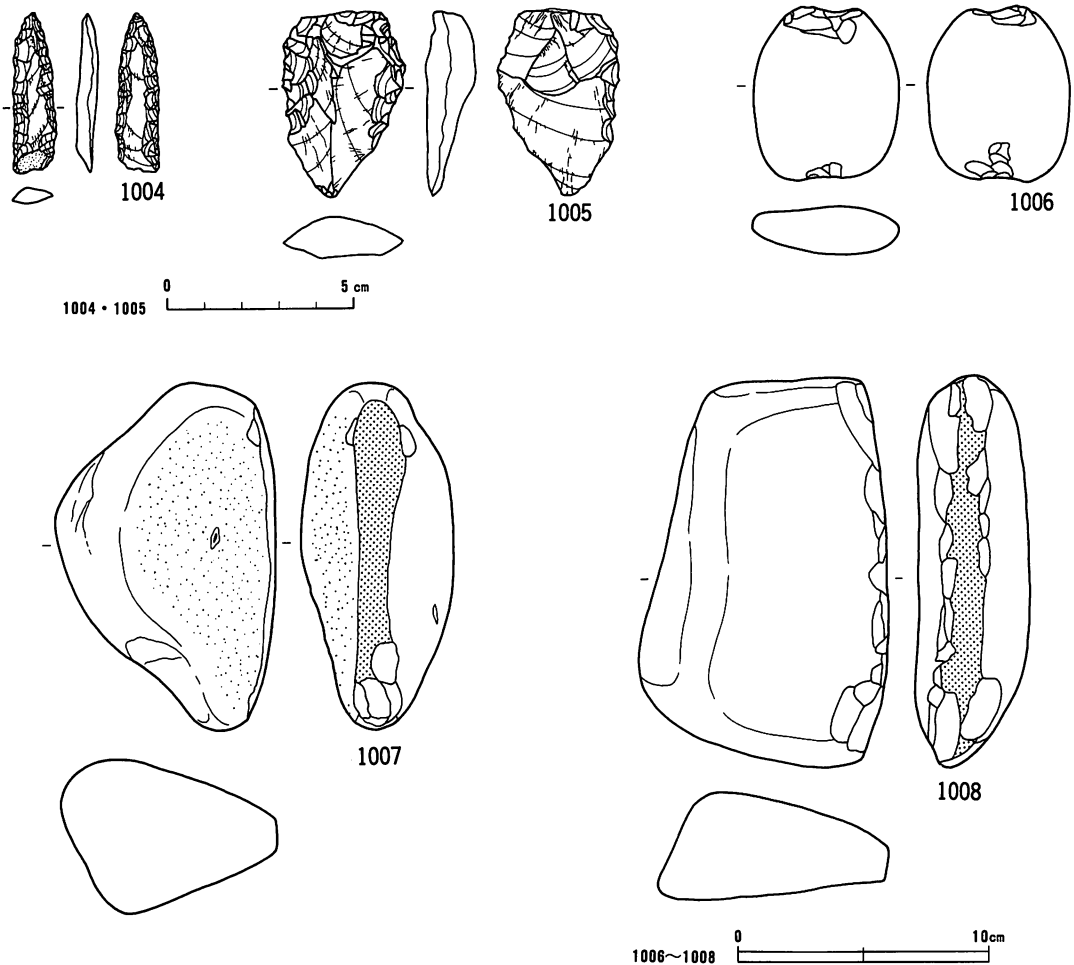
第210図 ⅨD3c 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1000	IX D 3 c 住	床面	口縁部山形状突起。凹文。	L R 縦。	23.4	13.1	40.8	補修孔。	II 6 a ヲ	200
1001	IX D 3 c 住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L 縦、縦位綾絡文。	(21.6)	—	(7.0)	1002 と同一個体。	II 6 b オ	200
1002	IX D 3 c 住	床面		L 縦、縦位綾絡文。	—	—	(14.8)		II 6 b オ	200
1003	IX D 3 c 住			L R 横。	—	(12.0)	(4.2)	網代痕。		200

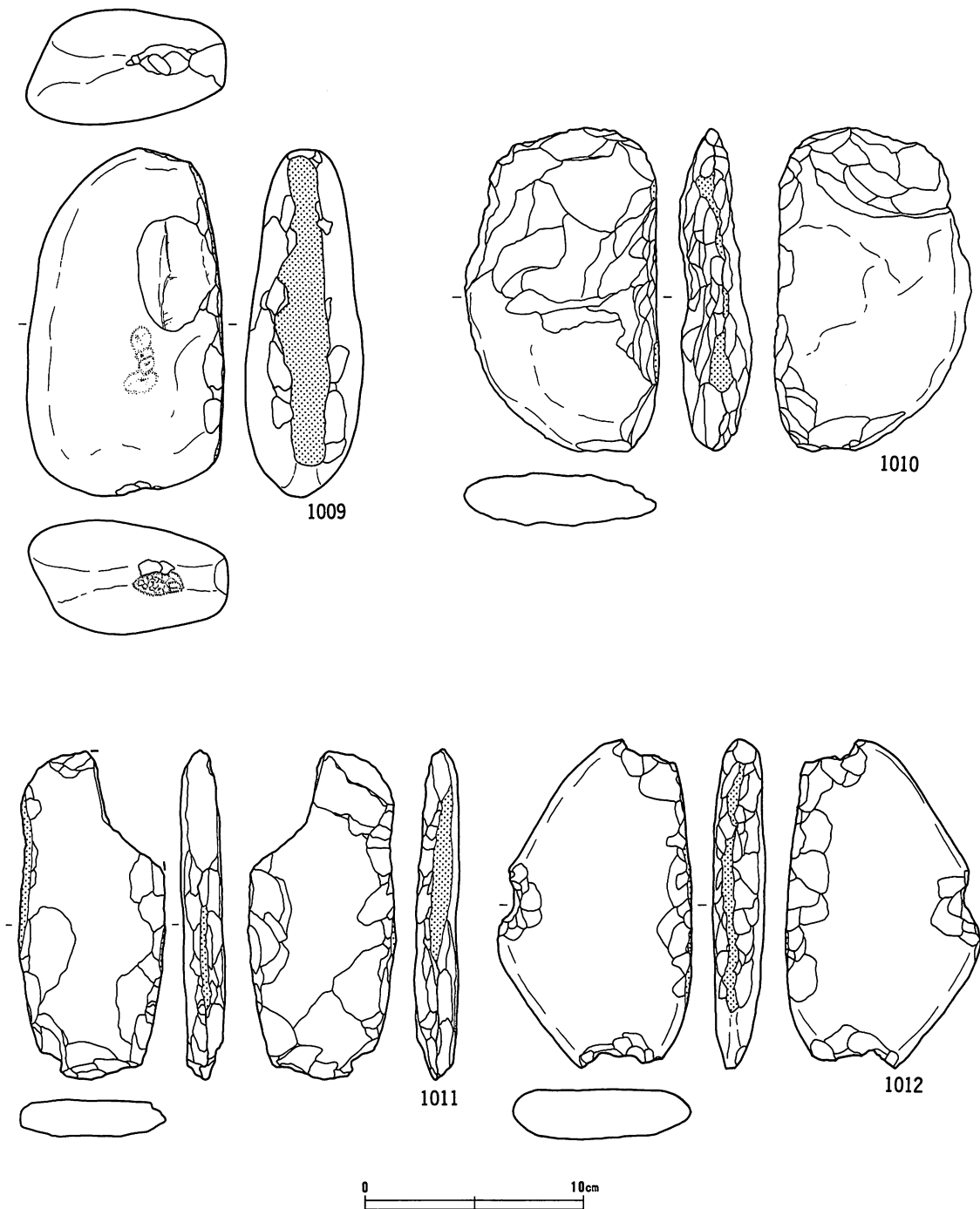
第211図 IX D 3 c 住居跡出土遺物(2)

個であり一定していない。口縁部下の隆帯から胴上半部に波状の粘土紐が3本垂下し、その末端は円を描くように閉じられる。粘土紐上には施文されない。口縁部にボタン状の瘤が貼り付けられるが、1個のみであり、他の場所には剥落した痕跡は全くうかがえない。地文は複数の原体を用いている。LRを結束させ縄端を片結びしたものの縦回転、LRの縄端を片結びし、Rを巻き付けたものと観察して実測したが、撚戻しと見られる部分もあり断定は避けた。地文施文後、口縁部は磨消して無文としている。ハケメ状の調整が施されている。1000は口縁部に3単位の突起が残存している。完全なものは1単位のみでその形状は、中央部に三角形の



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1004	IXD3c住		石鏃	粘板岩	北上山地	4.2	1.1	0.4	2.63			200
1005	IXD3c住	埋土中位	不定形石器	硬質泥岩	零石西部	5.0	3.3	1.3	16.49	二次加工の部分は一部に限られる。	IV	200
1006	IXD3c住	埋土中位	石鏃	凝灰岩	北上山地	6.8	5.8	1.9	115		I	200
1007	IXD3c住	埋土	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	13.8	8.7	6.1	780		I a 1	201
1008	IXD3c住	埋土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	15.5	10.0	4.4	1070		I a 1	201

第212図 IXD3c住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1009	Ⅸ D 3 c 住	床面	敲磨器類 A 群	珉長質凝灰岩	北上山地	15.7	9.0	8.0	1170	+凹石。+敲石。	I a 2	201
1010	Ⅸ D 3 c 住	床面	敲磨器類 A 群	緑色片岩	北上山地西縁	(14.7)	8.8	3.4	(510)		Ⅲ b 2	201
1011	Ⅸ D 3 c 住		敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	14.8	6.6	1.6	(250)		Ⅲ b 3	201
1012	Ⅸ D 3 c 住	埋土	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	14.9	8.9	2.3	430	挟り有り。	Ⅲ b 2	201

第213図 Ⅸ D 3 c 住居跡出土遺物(4)

山形を置き、その両側に中央部を凹ませた円文状突起を配する。欠損している他の2単位は、中央部の山形を2個おいてその両端に円文状突起を配するものと考えられる。これらの残存状況から、都合4単位の突起があつて、対向する1対がそれぞれセットになるものであろう。地文は斜縄文で、装飾体部分まで施文されている箇所がある。口縁部付近に補修孔があるが、貫通せず盲孔のままである。焼成は良好で硬質である。内面はハケメ状の調整が施されている。胴下半部にはススが附着する。

〈石器〉図示した他にフレークが4点埋土から出土している。

時期 出土土器から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

IXD 3 g 住居跡 (遺構番号113)

遺構 (第205図、写真図版71)

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。平面的には検出できなかったが、褐色土層上面で炉と考えられる焼土を検出、その斜面上方で基盤層まで掘り込んだ壁を確認し、住居跡として認定した。西側でIXD 2 g 住居跡、東側でIXD 4 g 住居跡と重複する。埋土の判別が困難だったため、IXD 2 g 住居跡との境界は明らかにできなかった。IXD 4 g 住居跡との境界は、埋土断面観察によって判断し、本住居のほうが新しいと考えられた。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉範囲を明瞭に把握できず、形状は不明である。規模は南北は残存値で3.4 m、東西は不明である。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、上位は褐色土層、下位は基盤層であるにぶい黄褐色土を壁とし、外傾する。壁高は66cmである。

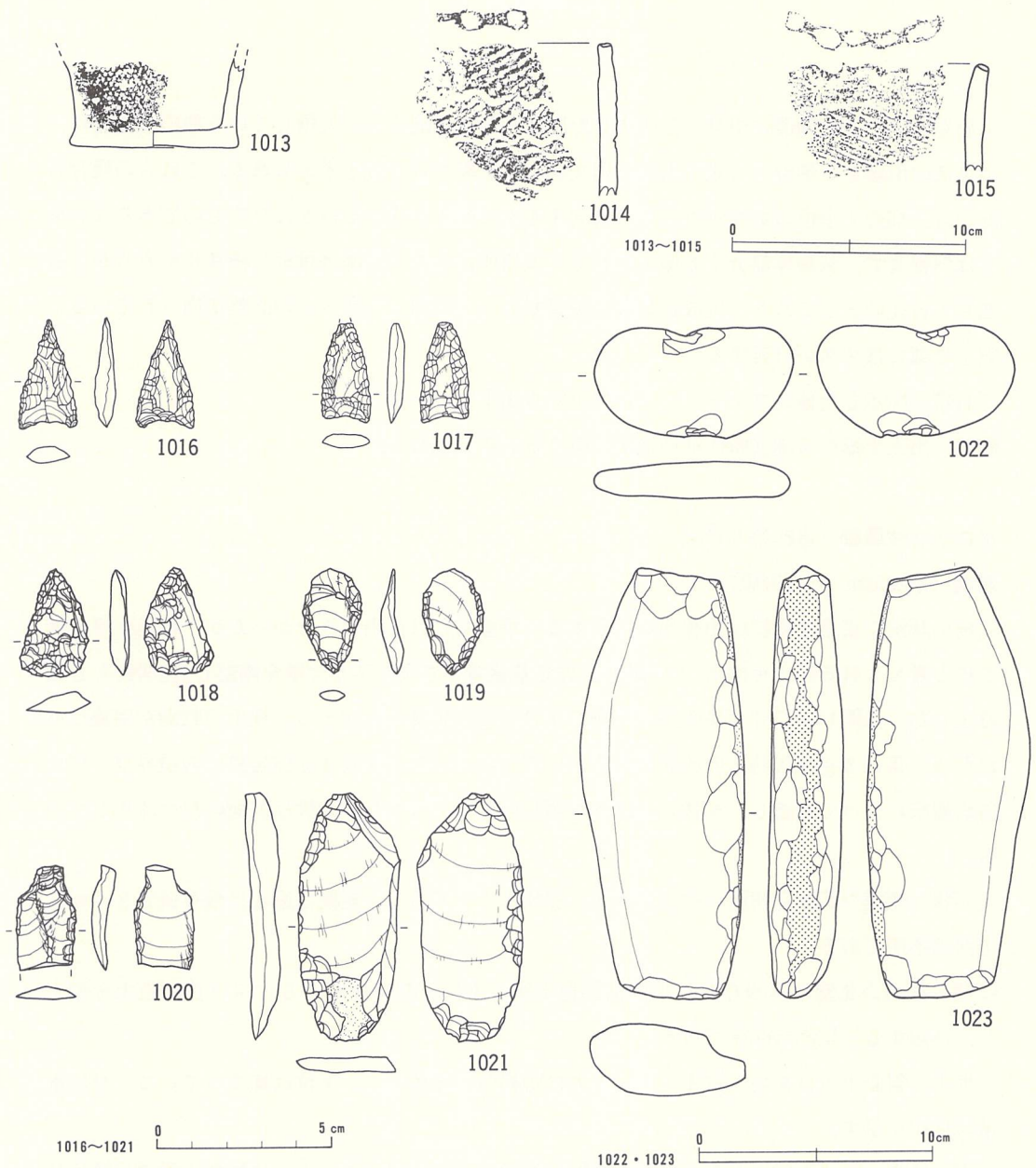
〈埋土〉斜面上方は褐色～黄褐色土、下方は暗褐色～褐色土で、下位は締まっている。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層で固く締まり、南側は褐色土層で比較的軟質である。斜面に沿って傾斜し、比高20cmである。北壁側に粉炭が3箇所集中的に分布する。厚さは1 cm程度である。P1は断面形が摺鉢状で浅く、柱穴とはならないと考えられる。P2は本住居のものか、重複するIXD 2 g 住居跡のものか所属不明である。

〈炉〉地床炉が1基検出された。規模は55×85cmの不整楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。一部攪乱があるものの、床面を構成する褐色土層が焼土化したもので固く締まっている。

遺物 (第214図、写真図版201・202)

〈土器〉床面から545 g、埋土から962 g出土した。1013は床面において底面を上にして出土したものである。網代痕が観察されるが不鮮明なので図化は省略した。胴下半部の地文の原体



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1013	IX D 3 g 住	床面		オオバコ花軸 (詳細不明)	-	9.7	(4.6)			201
1014	IX D 3 g 住	ベルト埋土	口唇部指頭状圧痕。	L R 横。片結び横位綾絡文。					II 6 b 才	201
1015	IX D 3 g 住	Q 4 埋土	口唇部指頭状圧痕。	R 燃系文。					II 6 b 才	201

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	備考	分類	写真
1016	IX D 3 g 住	Q 1 埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	3.1	1.7	0.6	1.95			II b 2	201
1017	IX D 3 g 住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	(2.8)	1.4	0.4	(1.52)			II b 2	201
1018	IX D 3 g 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	2.0	0.5	3.01			III 2	201
1019	IX D 3 g 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	雫石西部	3.0	1.7	0.7	1.96	基部は扁平、身部はやや厚い。身部のつくり出しは短く弱い。			201
1020	IX D 3 g 住	埋土	石匙	硬質泥岩	雫石西部	(3.0)	1.7	0.4	(2.39)			I	201
1021	IX D 3 g 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	雫石西部	7.0	2.9	0.6	17.70	裏面からの調整である。		I a 2	201
1022	IX D 3 g 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	4.7	8.5	1.6	100			II	201
1023	IX D 3 g 住	埋土	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	18.2	6.9	2.9	630			II b 2	201

第214図 IX D 3 g 住居跡出土遺物

は、多軸絡糸体かと思われるが、個々の節は斜め上方向からの浅い刺突のようにも見え、不明である。1014・1015は地文は異なるが胎土および口唇部施文は類似する。他に網目状撚糸文の土器片が出土している。

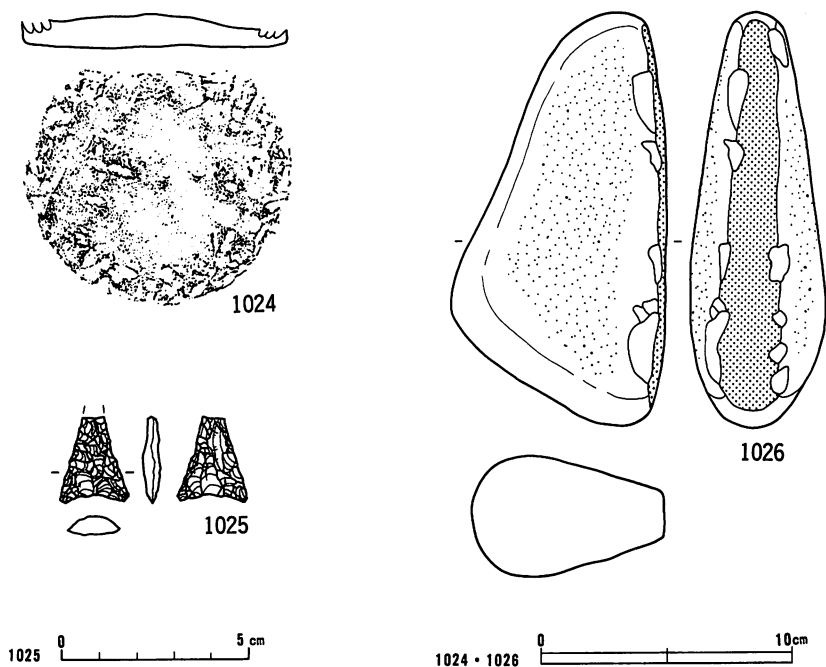
<石器>1017は横折れである。1018は表右辺が欠損又は未加工、裏右辺も未加工で対称性を欠く。1019は尖頭部がやや抉られているとみて錐としたが、石鏃かも知れない。図示した他に岩手火山起源の溶岩が2点、Uフレが3点、フレークが4点埋土から出土している。

時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD3h住居跡（遺構番号114）

遺構（第207図、写真図版72）

<検出状況>東尾根南斜面中腹に位置する。平面的な検出はできなかった。褐色土層上面で焼土を検出、その斜面上方に基盤層まで掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真		
1024	ⅨD3h住	床面	網代痕。							202		
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1025	ⅨD3h住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地西縁	(2.2)	1.9	0.5	(1.22)		Ⅱb4	202
1026	ⅨD3h住	床面	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	16.5	8.4	4.9	960	平滑面2面。	Ia1	202

第215図 ⅨD3h住居跡出土遺物

北側でⅨD 3 h-2 住居跡、西側でⅨD 2 h 住居跡と重複する。埋土断面観察から、ⅨD 3 h-2 住居跡より新しい。ⅨD 2 h 住居跡とは境界を明瞭にできず、また新旧関係も明白にできなかったが、本住居の炉が一段高いこととその位置から、本住居の方が新しいと考えられる。

また本住居の床面下からⅨD 3 h 土坑が検出された。

<形状・規模>南側は斜面のため流失しており、西側はⅨD 2 h 住居跡との重複により不明である。規模も不明であるが、南北方向の残存値は2.1mである。

<壁・壁高>北壁のみ残存する。基盤層である黄褐色土で、やや外傾し、壁高8cmである。

<埋土>壁際と床直上の暗褐色土は、固さにむらがあり、ブロック状に剥がれる。

<床・柱穴・施設>西側は基盤層を、東側はⅨD 3 h 土坑の埋土を、南側は褐色土層を床面とする。斜面に沿ってやや傾斜し、比高15cmである。柱穴は検出されなかった。

<炉>地床炉が2基検出された。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は83×90cmの不整形に分布し、厚さは最大5cmである。平面的には広い分布をみせるものの、層厚はあまり大きな値を示さない。2号炉の焼土は45×53cmの不整円形状に分布し、厚さは最大8cmである。いずれも床面を構成する褐色土層が焼土化したものである。

遺物 (第215図、写真図版202)

<土器>床面から1024が1点、埋土からは文様不明の極細片が1点出土したのみである。

<石器>1025の尖頭部は、裏方向から力の加わった横折れである。他に埋土からフレーク4点が出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD 3 h-2 住居跡 (遺構番号115)

遺構 (第207図、写真図版72)

<検出状況>東尾根南斜面中腹部に位置する。ⅨD 3 h 住居跡の精査中に、同住居の北側に一段高い平坦部と壁とを確認し、住居跡として認定した。大半はⅨD 3 h 住居跡に壊されている。

<形状・規模>残存状況が悪く不明である。規模は残存値で東西3.8m、南北1.4mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、西壁17cm、北壁26cmである。

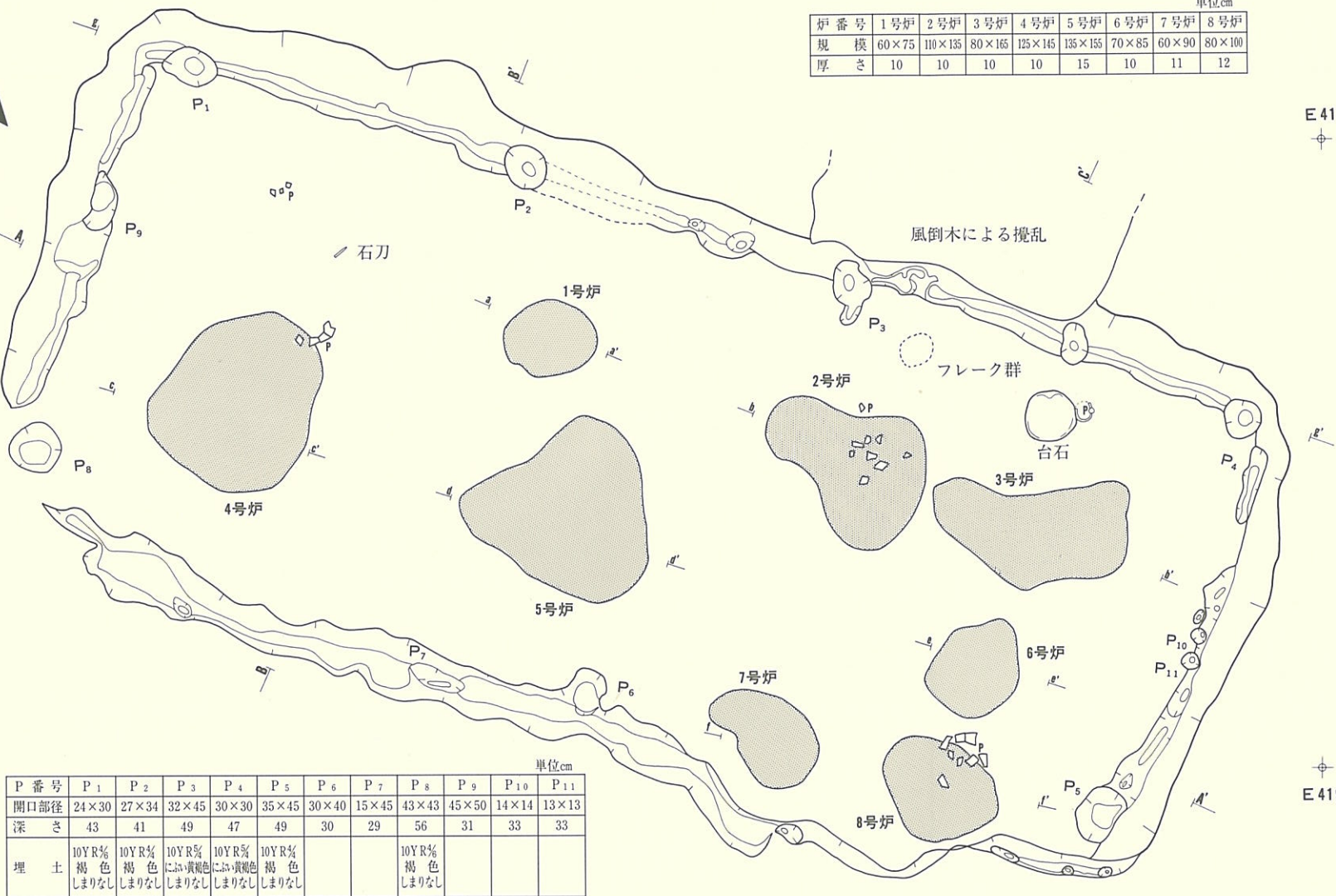
<埋土>3層に細別したが、部分的な混土であり、褐色土1層で把握できる。重複するⅨD 3 h 住居跡の埋土との区別は色調から明瞭である。

<床・柱穴・施設>一部褐色土層を床とするが、壁寄りには基盤層で固く締まる。斜面に沿ってやや傾斜し、比高10cmである。柱穴は検出されなかった。

<炉>検出されなかった。

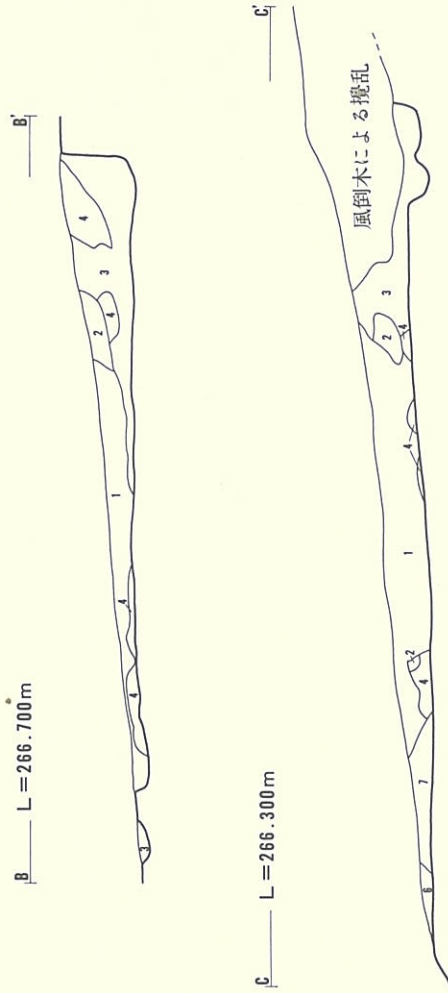
L = 266.900m

炉番号	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	5号炉	6号炉	7号炉	8号炉
規模	60×75	110×135	80×165	125×145	135×155	70×85	60×90	80×100
厚さ	10	10	10	10	15	10	11	12



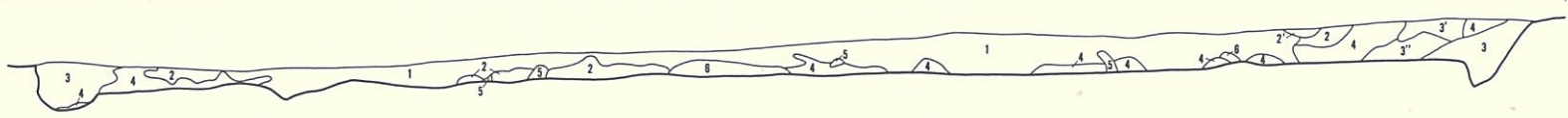
P番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
開口部径	24×30	27×34	32×45	30×30	35×45	30×40	15×45	43×43	45×50	14×14	13×13
深さ	43	41	49	47	49	30	29	56	31	33	33
埋土	10YR _{7/1} 褐色 しまりなし	10YR _{7/1} 褐色 しまりなし	10YR _{7/1} にぶい黄褐色 しまりなし	10YR _{7/1} にぶい黄褐色 しまりなし	10YR _{7/1} 褐色 しまりなし			10YR _{7/1} 褐色 しまりなし			

E 419
S 193



- A...A' B...B' C...C'
- 10YR_{7/1} 黒色土 しまりなし。
 - 10YR_{7/1} 黒褐色土 しまりなし。褐色土を含む。
 - 10YR_{7/1} にぶい黄褐色土 しまりなし。褐色土を多く含む。
 - 10YR_{7/1} 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
 - 10YR_{7/1} 黄褐色土 3'は、暗褐色土を含む。小角礫を含まない。
 - 10YR_{7/1} 暗褐色土 しまりなし。木根による攪乱。
 - 10YR_{7/1} 暗褐色土 しまりなし。黒褐色土を含む。
 - 10YR_{7/1} 暗褐色土 しまりなし。赤褐色焼土粒を多く含む。

L = 266.600m



第216図 IX D3 j 住居跡(1)

遺物 <土器>埋土から極細片が数点35g出土したが、文様不明瞭であり図化は省略した。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・重複関係から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

IX D 3 j 住居跡 (遺構番号116)

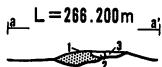
遺構 (第216・217図、写真図版73)

<検出状況>東尾根南麓の傾斜変換点付近に位置する。褐色土層上面で黒色土が分布することから検出した。北壁の一部は倒木痕により攪乱を受けている。南側は斜面のため壁は流失して、周溝と柱穴がかるうじて検出され、本住居の範囲を把握することができた。

<形状・規模>長軸が等高線にほぼ平行する長方形で、長軸は10.1m、短軸は4.7mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層でほぼ直立する。壁高は東壁40cm、西壁20cm、北壁41cmである。

<埋土>上位には漆黒の締まりのない腐植土、下位には褐色土および崩落土である黄褐色土が堆積している。自然堆積の様相である。



1. 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 10YR% 暗褐色土 しまりなし。
3. 7.5YR% 明褐色土 ややしまりあり。



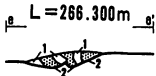
1. 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
3. 7.5YR% 褐色土 ややしまりあり。
4. 7.5YR% 褐色土 しまりなし。



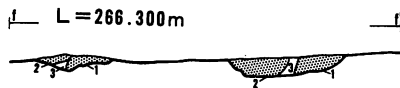
1. 5YR% 明赤褐色土 焼土。
2. 5YR% 黒褐色土 しまりなし。



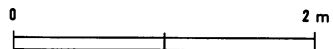
1. 5YR% 赤褐色土 焼土。



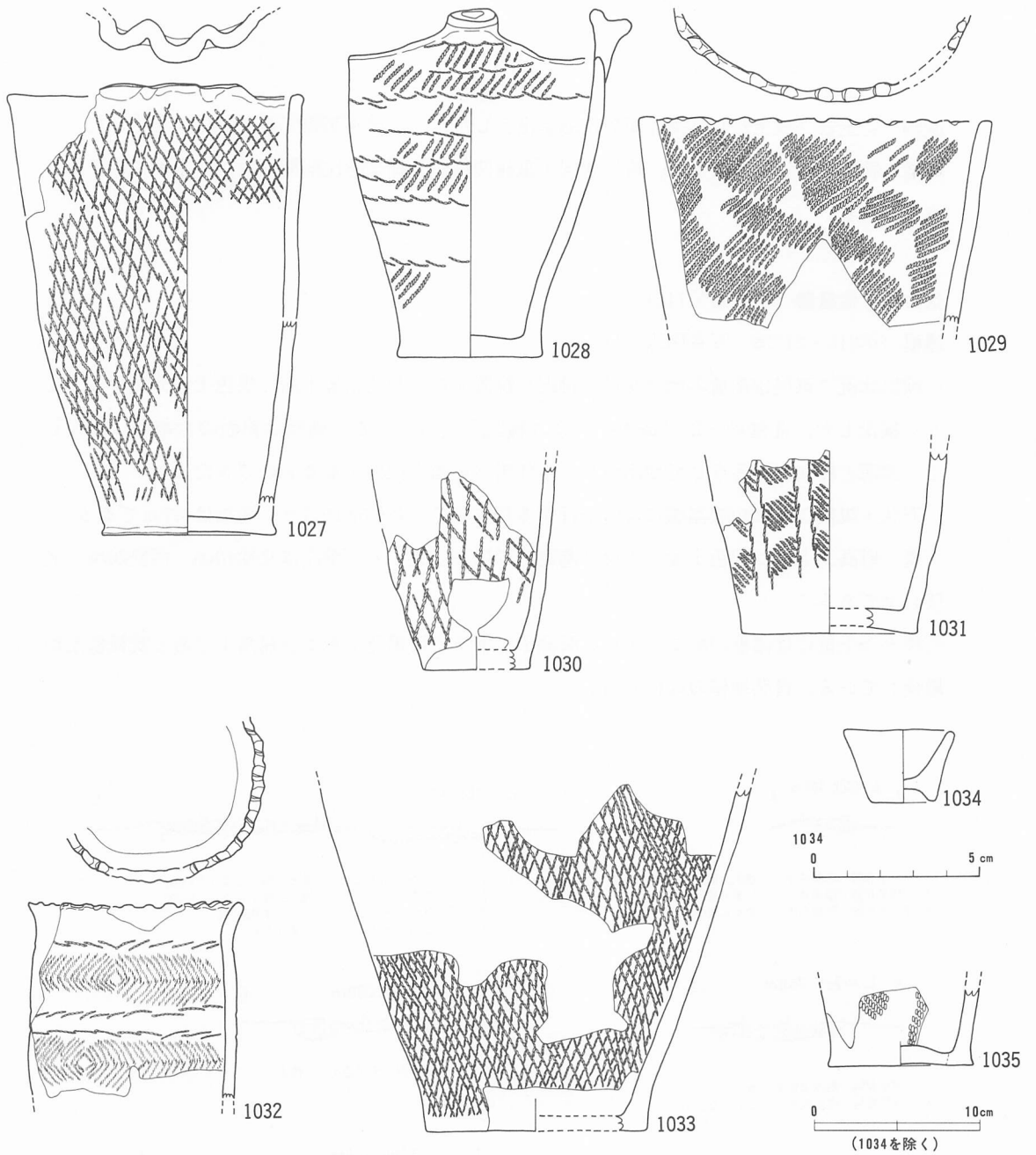
1. 5YR% 明赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 5YR 1.4 黒色土 しまりなし。



1. 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
2. 5YR% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
3. 10YR% 黄褐色土 ややしまりあり。

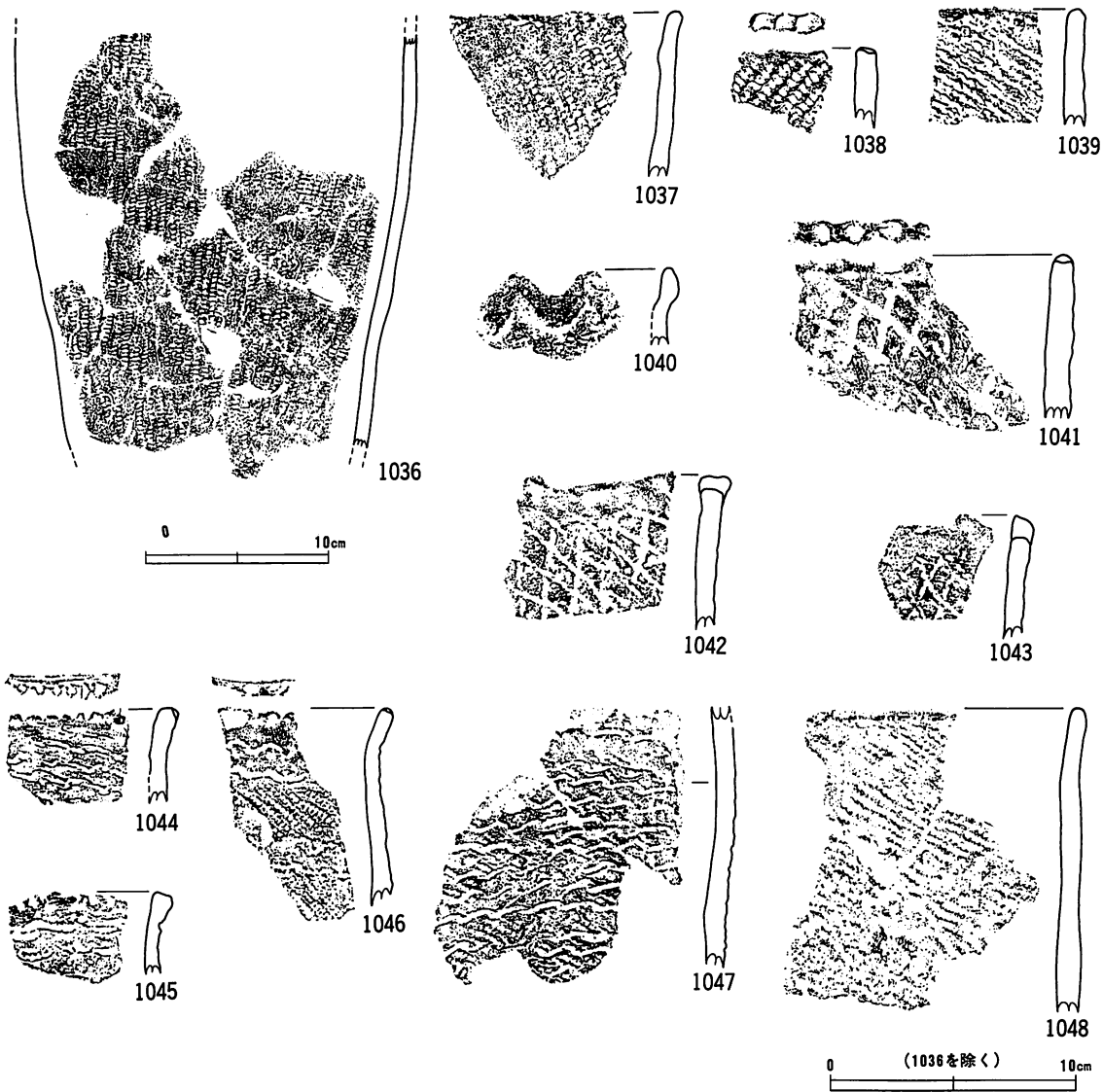


第217図 IX D 3 j 住居跡(2)



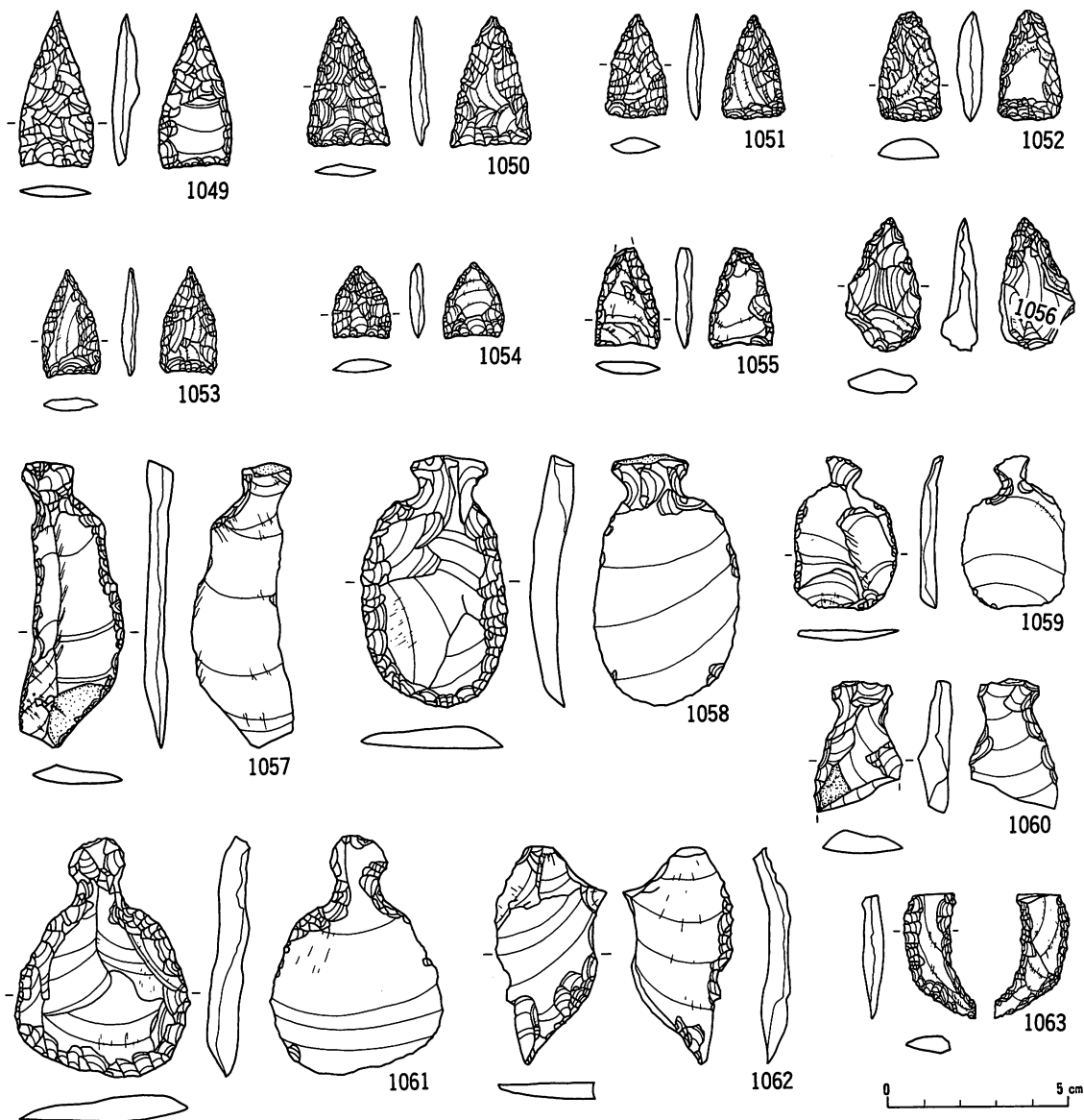
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1027	IX D 3 j 住	床面	鋸歯状裝飾体。	L 網目状襷系文。	(18.0)	(10.6)	27.2		II 6 a ア	202
1028	IX D 3 j 住	床面	波状口縁、口縁部凹文状裝飾体。	L R 横、横位綾絡文	15.5	8.8	21.0		II 6 a ウ	202
1029	IX D 3 j 住	床面	口唇部右方向からの指頭状圧痕。	L R 横。	(21.2)	—	(12.2)		II 6 b オ	202
1030	IX D 3 j 住	床面		R 網目状襷系文。	—	(6.4)	(12.2)		II 6	203
1031	IX D 3 j 住	床直上		L R 縦、縦位綾絡文。	—	(10.6)	(10.8)			203
1032	IX D 3 j 住	Q 4 埋土	口唇部右方向からの指頭状圧痕。	L × R 第 1 種結束羽状襷文。	(13.0)	—	(12.0)		II 6 b	203
1033	IX D 3 j 住	埋土		R 網目状襷系文。	—	(13.4)	(20.8)		II 6	203
1034	IX D 3 j 住	埋土	無文、小型土器。		3.4	2.2	2.2			203
1035	IX D 3 j 住	埋土		R L 横。	—	(8.8)	(4.6)			203

第218図 IX D 3 j 住居跡出土遺物(1)



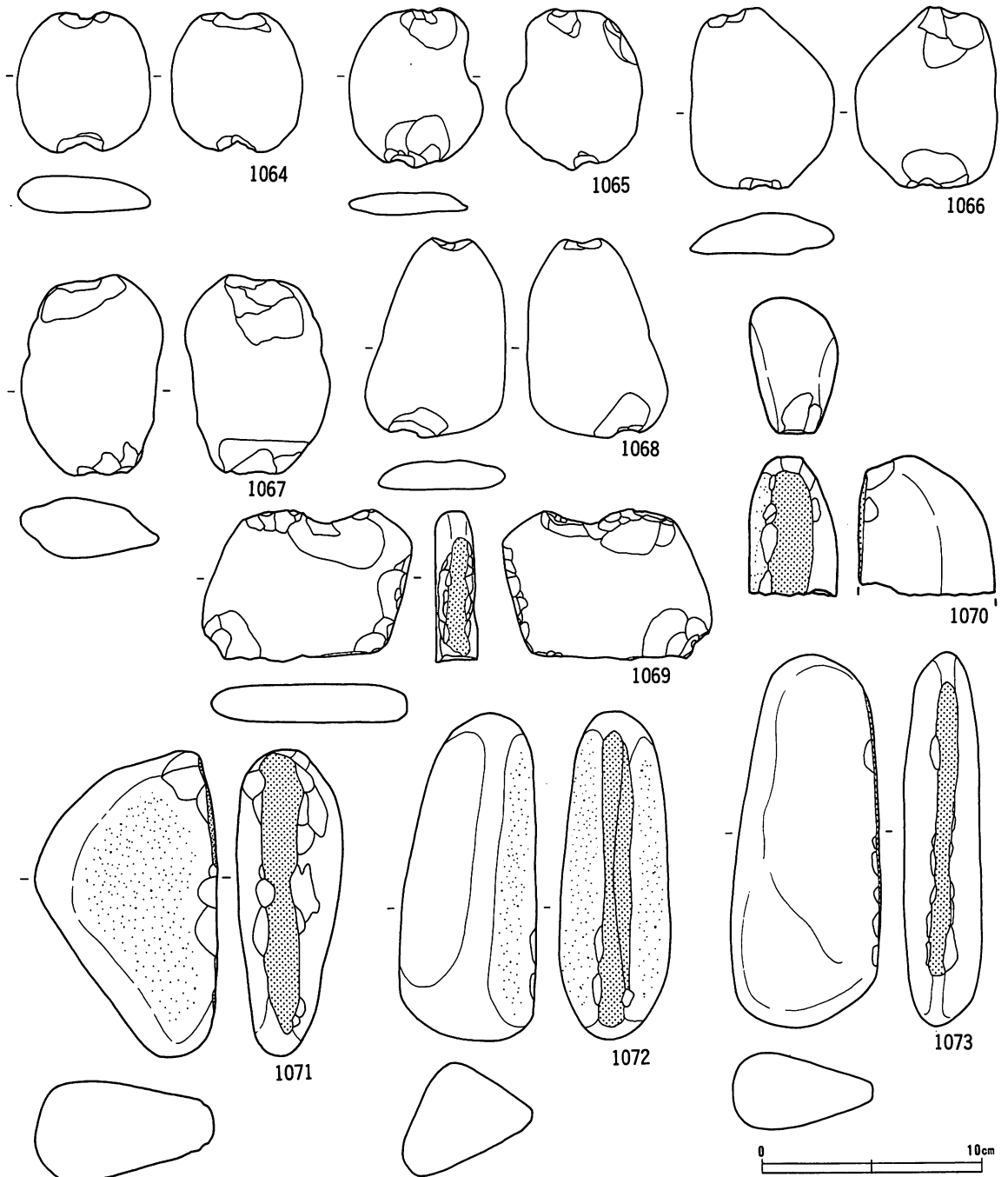
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1036	IX D 3 j 住	床面		R L横。	-	-	(22.5)	1037と同一個体。	II 6	203
1037	IX D 3 j 住	床面		R L横。				1036と同一個体。	II 6	203
1038	IX D 3 j 住	床面	口唇部右方向からの指頭状圧痕。	L R横。					II 6 b 才	203
1039	IX D 3 j 住	床面		R R (直前段反燃) ?					II 6	203
1040	IX D 3 j 住	埋土	口縁部鋸歯状装飾体。						II 6 a 7	203
1041	IX D 3 j 住	Q 3 埋土	口唇部指頭状圧痕。	R 網目状燃糸文。					II 6	203
1042	IX D 3 j 住	埋土	山形口縁 ?	R 網目状燃糸文。				1043と同一個体。	II 6	203
1043	IX D 3 j 住	埋土	山形口縁 ?	R 網目状燃糸文。				1042と同一個体。	II 6	203
1044	IX D 3 j 住	埋土	波状口縁。口唇部鋸歯状工具による斜み。口唇部竹管平行沈痕。横位綾絡文。						II 3 a	203
1045	IX D 3 j 住	床面	波状口縁。口唇部鋸歯状工具による方向からの斜み。横位綾絡文。						II 3 a	203
1046	IX D 3 j 住	Q 3 埋土	口唇部指頭状圧痕。横位綾絡文。	R L横。片結び横位綾絡文。					II 3 a	203
1047	IX D 3 j 住	埋土		重層する横位綾絡文。				繊維含まず。	II 3 b	203
1048	IX D 3 j 住	埋土	口縁下 L R 側面圧痕。	L R横。					II 6	203

第219図 IX D 3 j 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1049	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	3.6	2.4	0.5	3.65		I 2	204
1050	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	流紋岩	礮石西部	3.5	2.3	0.5	2.58		I 2	204
1051	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	2.9	1.7	0.4	1.70		III 2	204
1052	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	3.0	1.8	0.5	3.41		I 2	204
1053	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	3.0	1.6	0.4	1.46		II a 2	204
1054	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	珪質泥岩	礮石西部	2.0	1.6	0.4	1.20		II a 2	204
1055	IX D 3 j 住	埋土	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	(2.8)	1.7	0.3	(1.76)	基部側は平坦、尖頭部側は肉厚。尖頭部欠損(横折れ)。	II a 2	204
1056	IX D 3 j 住	床面	石鏃	硬質泥岩	礮石西部	3.7	2.0	1.0	5.70		II a	204
1057	IX D 3 j 住	埋土	石匙	砂質粘板岩	北上山地	7.9	2.5	0.5	12.35		I b 1	204
1058	IX D 3 j 住	埋土	石匙	砂質泥岩	礮石西部	6.9	4.1	1.2	22.23		I b 3	204
1059	IX D 3 j 住	埋土	石匙	チャート	北上山地	4.2	2.8	0.7	3.73	刃のつくり出し、ノッチのつくり出しも弱い。	I b 1	204
1060	IX D 3 j 住	埋土	石匙	チャート	北上山地	(3.6)	2.3	0.8	(6.19)	欠損品。	I b	204
1061	IX D 3 j 住	埋土	石匙	赤色凝灰岩	北上山地	6.6	4.8	1.2	22.73	四角形状。つまみ方向からの打撃。	III	204
1062	IX D 3 j 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	6.0	3.0	1.1	11.19	素材の形を大きく残す。	II	204
1063	IX D 3 j 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	礮石西部	3.5	2.0	0.6	2.67		I d 2	204

第220図 IX D 3 j 住居跡出土遺物(3)

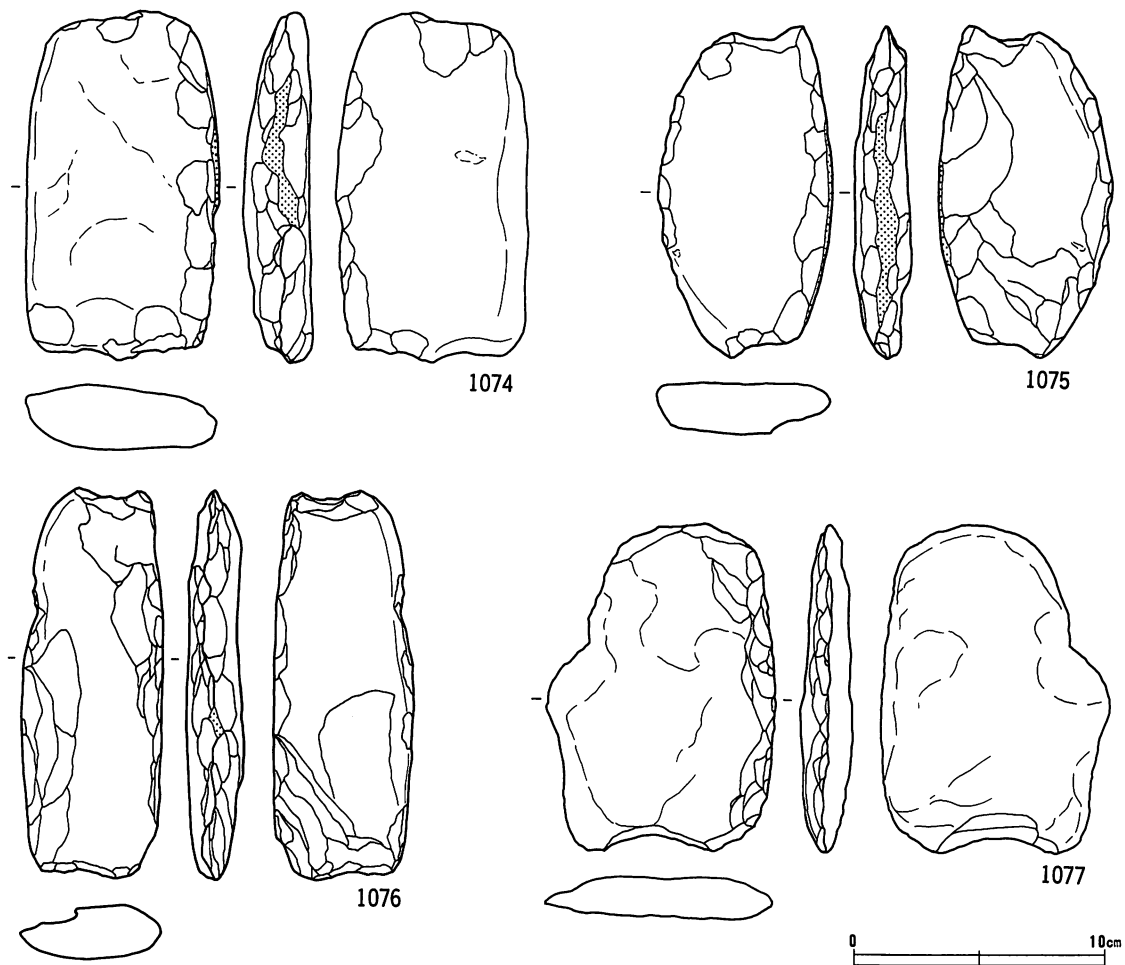


番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1064	IX D 3 j 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	6.3	6.1	1.7	105		I	204
1065	IX D 3 j 住	埋土	石錘	アルコース砂岩	北上山地	7.2	6.1	1.1	68.12		I	205
1066	IX D 3 j 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	8.2	6.5	1.9	150		I	205
1067	IX D 3 j 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	9.0	6.2	2.7	180		I	205
1068	IX D 3 j 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	9.0	5.8	1.3	145		I	205
1069	IX D 3 j 住	埋土	石錘	珪長質凝灰岩	北上山地	6.9	9.6	1.7	180		III	205
1070	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	(6.2)	(4.0)	(6.3)	(240)	平滑面 1 面。	I a	205
1071	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	14.0	8.4	4.9	890	平滑面 1 面。	I a 1	205
1072	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	14.8	6.3	4.8	625	平滑面 2 面。	I a 1	205
1073	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	凝灰質硬砂岩	北上山地	17.0	6.8	6.4	660		I a 1	205

第221図 IX D 3 j 住居跡出土遺物(4)

〈床・柱穴・施設〉住居中央部は固く締まっている。北壁際は軟質で一部掘り過ぎ周溝の確認ができなかった。ほぼ水平で平坦である。柱穴を11個検出した。P1～P4の間隔は2.9～2.7mでほぼ等しい。P5～P8の場合は最大4m、最小1.2mと大きな差がある。規模・位置から対応関係を把握できるのは、北側の4個(P1～P4)と南側の2個(P5とP8)である。P6とP7は出入り口の施設などの可能性が考えられる。

周溝がほぼ全周する。北壁際と西壁際のは幅20～30cm、深さ15cm程でほぼ均一であるのに対し、東壁際のは一部がとぎれ、また南側のは深さ10～15cm、幅22～52cmと規模に



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1074	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	13.7	7.6	2.6	420		III b 2	205
1075	E 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	13.0	6.9	2.0	260	挟り有り。	III b 3	205
1076	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	緑簾石片岩	北上山地	15.3	5.5	2.0	260	挟り有り。	III b 3	205
1077	IX D 3 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	13.0	9.1	2.0	270	挟り有り。	III c 2	206

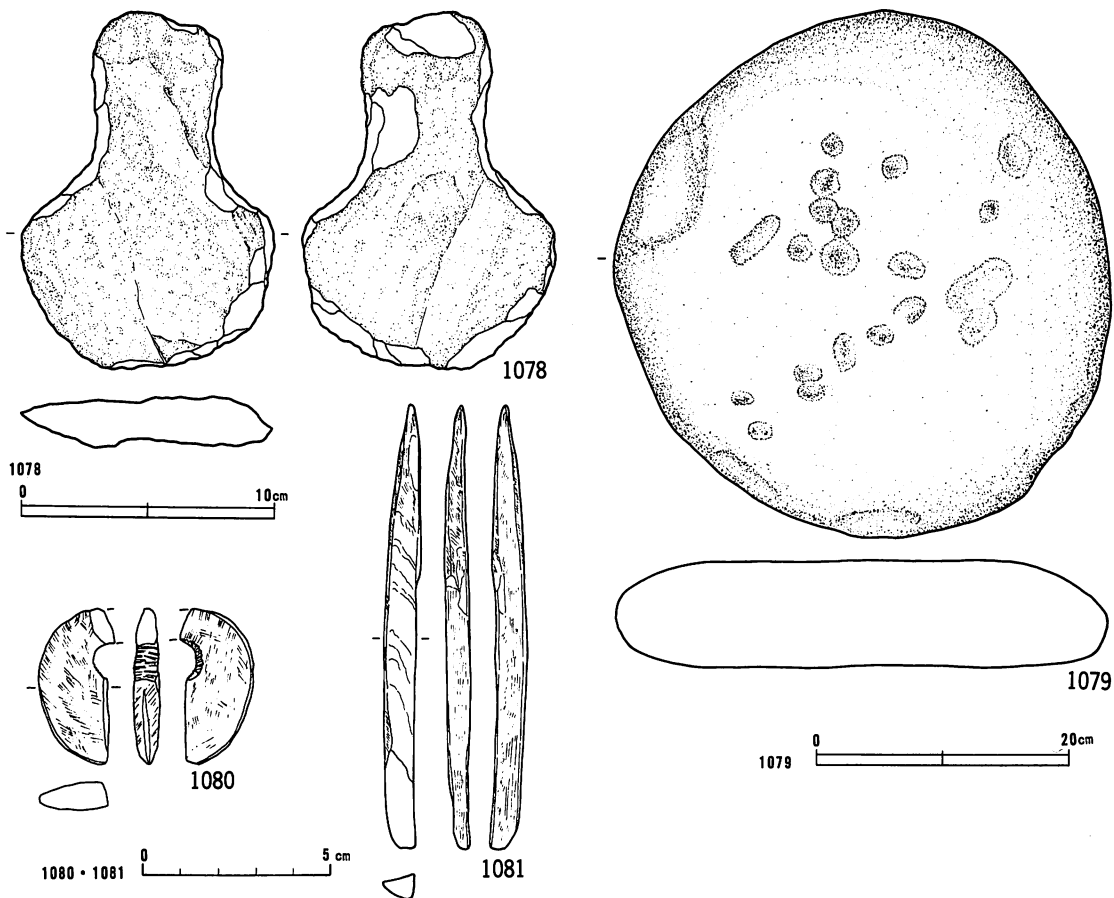
第222図 IX D 3 j 住居跡出土遺物(5)

幅がある。埋土は締まりを欠く暗褐色土である。

〈炉〉焼土が8基検出された。いずれも床面を構成する黄褐色土が焼土化したもので地床炉と考えられる。住居の埋土および焼土の中あるいはその下に炭化材は殆ど混入しない。断面形は概ねレンズ状で、厚さはいずれも10cm以上である。北西方向から南東方向へ、それぞれ1号炉～8号炉と命名する。炉の位置は、住居の長軸方向に1～3号炉、4～6号炉、7・8号炉がそれぞれ一直線上に並ぶ。

遺物(第218～223図、写真図版202～205)

〈土器〉床面から4725g、埋土から11,020g出土した。1027は口縁部に上面観が鋸歯状となる装飾部が1個のみ残存する。焼成は良好で硬質である。装飾体上は意識的に平坦につくられ、



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1078	ⅨD3j住	埋土	石鍬	ホルンフェルス	北上山地	14.2	10.1	2.0	360			206
1079	ⅨD3j住	床面	石皿・台石類	珉長質凝灰岩	北上山地	41.8	39.3	8.4	20450			
1080	ⅨD3j住	床面	耳飾	チャート	北上山地	4.1	(2.0)	0.7	(7.80)			206
1081	ⅨD3j住	Q1埋土	石刀	粘板岩	北上山地	17.6	1.4	0.9	30			206

第223図 ⅨD3j住居跡出土遺物(6)

口唇部も同様である。胴下半部にススが付着する。1028は床面北東隅の1079の東に隣接して置かれていたものである。口縁部に中央が凹む円文状の突起を対向する位置に1対配する。1029は口唇部に右方向から指頭状の圧痕が施され、その部分は上面観がややふくらむ。1031は胎土に細礫を多く含む。1032は1段の縄端を処理した綾絡文が横走する。口唇部は指頭圧痕で爪形が明瞭に残る。1034の小型土器は埋土からの出土である。1040は鋸歯状粘土紐を、器体にほぼ平行に貼り付けたものである。

<石器>1055は基部側は平坦、尖頭部側は肉厚である。尖頭部は横折れしている。1059は二次加工の剝離は浅く小さい。つまみ部の加工も素材の形状を利用して最低限である。1069は1側面に磨面がある。敲磨器類からの転用か。1072は磨面中に稜線が走り、2面の使用痕が残存する。1078は表面が磨耗しているが、端部の使用痕は明瞭である。1079は床面北東方向に置かれていたもので、台石様の凹みが観察される。1080は穿孔のための加工痕が残っている。図示した他に40×42×6cm大の台石様の破碎礫（珪長質凝灰岩）が床面から出土している。他にフレークが144点（うち床面から52点）出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

IX D 4 d 住居跡（遺構番号117）

遺構（第224図、写真図版74）

<検出状況>東尾根の西側鞍部に位置する。平面的な検出できなかつたが、褐色土層で炉と考えられる焼土を検出、その斜面上方で基盤層まで掘り込んだ壁を確認し、住居跡として認定した。西側は斜面のため流失している。北側に一部張り出し部がある。掘り過ぎや重複の可能性を想定したが、埋土からはその両方とも考えられなかつた。

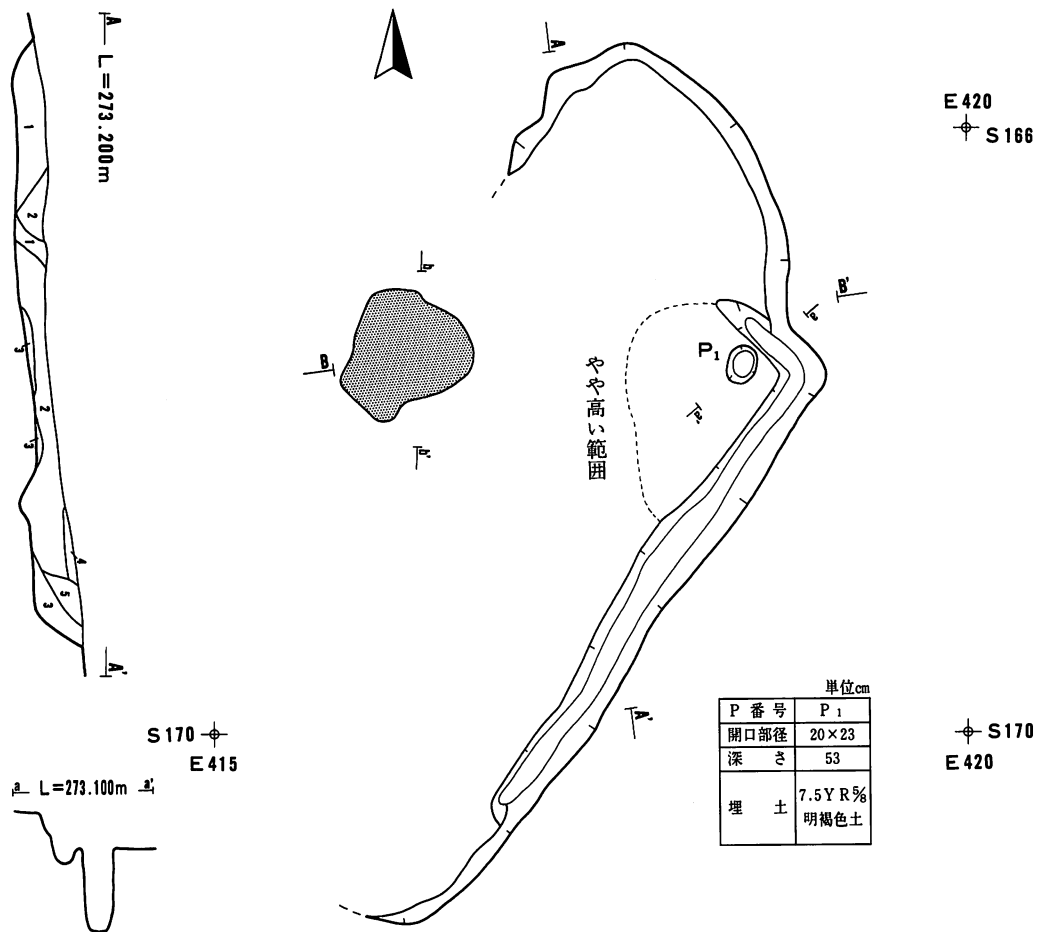
<形状・規模>一部張り出し部をもつが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形基調と考えられる。規模は残存値で東西2.9m、南北は5.5mである。

<壁・壁高>東壁は岩盤の風化層を、張り出し部は褐色土層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁35cm、北壁（張り出し部）18cmである。

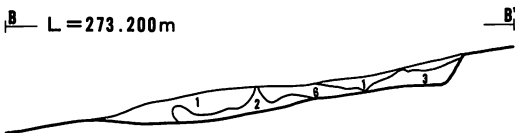
<埋土>褐色～黄褐色土で締まりを欠く。第3層、第5層は岩盤風化層の崩落土である。

<床・柱穴・施設>北東寄りには岩盤風化層を床とし、他よりやや高い平坦部がある。南側は凹凸が大きい。全体に斜面に沿って傾斜し、最大比高23cmである。柱穴が1個、北東隅に検出された。埋土は住居の埋め土の第5層に等しい。締まりを欠く。周溝が斜面上方に当たる東壁際に巡る。規模は、幅17cm、深さ9～16cmで、岩盤風化層の崩落土である。南側はとぎれる。

<炉>地床炉が1基検出された。規模は75×97cmの不整形に分布し、厚さは最大10cmである。一部攪乱があるものの、床面を構成する基盤層が焼土化したもので固く締まっている。

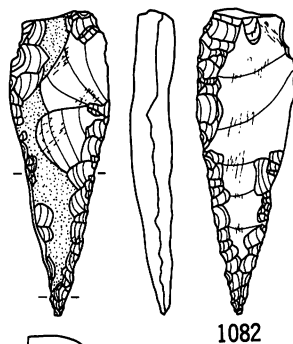
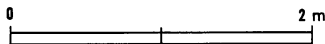


単位cm	
P 番号	P ₁
開口部径	20×23
深さ	53
埋土	7.5Y R% 明褐色土



- | A...A' | B...B' | |
|-------------------|--------|----------------|
| 1. 10Y R% 黄褐色土 | | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 2. 10Y R% 褐色土 | | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 3. 10Y R% 黄褐色土 | | 明褐色土をブロック状に含む。 |
| 4. 10Y R% 黄褐色土 | | しまりなし。 |
| 5. 7.5Y R% 明褐色土 | | しまりなし。 |
| 6. 10Y R% にふい黄褐色土 | | しまりなし。 |

- | |
|--------------------|
| 1. 7.5Y R% 明褐色土 |
| 2. 7.5Y R% 褐色土 |
| 3. 7.5Y R% 橙色土、焼土。 |



1082



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1082	IX D 4 d 住	Q 1 埋土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	8.1	2.7	1.3	20.78	基部と身部は連続した直線。		206

第224図 IX D 4 d 住居跡・出土遺物

遺物 (第224図、写真図版206)

<土器>埋土から横位の綾絡文と繊維を含む縄文のみの細片が数点出土しているが、図化に耐えないので省略した。

<石器>1082は錐としたが、右側縁は刃部としての機能も有するかと思われる。他にフレーク1点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土土器から縄文時代前期と考えられる。

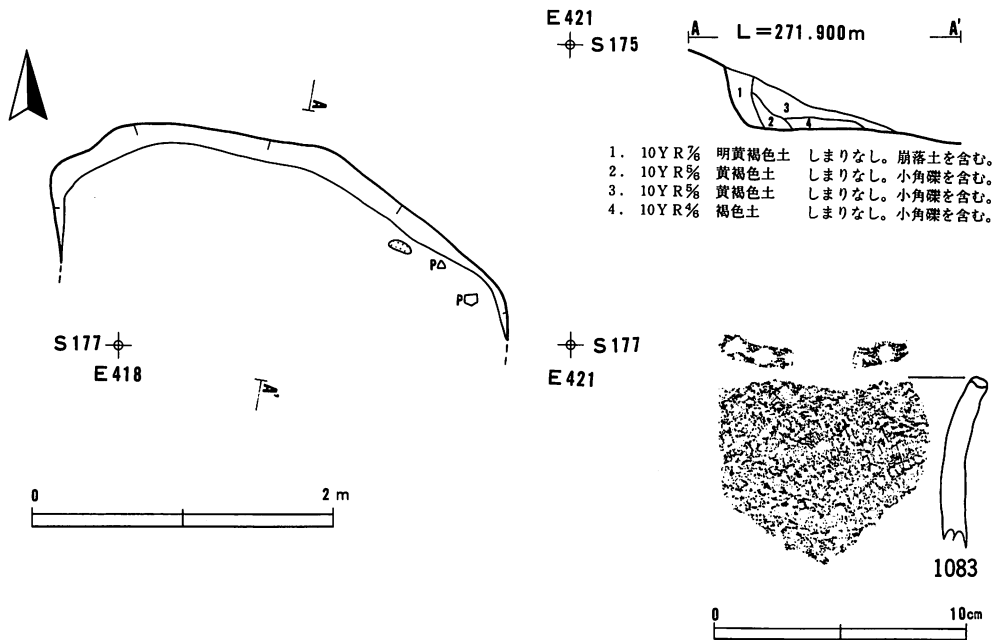
ⅨD4f 住居跡 (遺構番号118)

遺構 (第225図、写真図版75)

<検出状況>東尾根南斜面に位置する。基盤層上面で検出した。南側は斜面のため流失している。

<形状・規模>残存状況が悪く、不明である。規模は、東西3.1m、南北は残存値で1.2mである。

<壁・壁高>黄橙色の基盤層で、ほぼ直立する。壁高は東壁13cm、西壁16cm、北壁36cmである。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1083	ⅨD4f 住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L R 横。片結び横位綾絡文。				口縁部中央部分は欠落している。	Ⅱ6bオ	206

第225図 ⅨD4f 住居跡・出土遺物

〈埋土〉4層に分けられる。いずれも締まりに欠ける。第1層には壁の崩落土をブロック状に含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を直接床とし、やや凹凸があるが、全体としてはほぼ水平である。柱穴は検出されなかった。床面の東側で焼土と粉炭が検出された。いずれも層厚がなく異地性のものと考えられる。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第225図、写真図版206）

〈土器〉1083の口縁部は一部欠落しているが、指頭状圧痕が全周するものと考えられる。埋土からは横位の綾絡文、単節斜縄文の細片が出土したが、図示は割愛した。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

ⅨD 4 g 住居跡（遺構番号119）

遺構（第205図、写真図版75）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹部に位置する。褐色土層上面で焼土を検出し、その斜面上方で基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡として認定した。南側は斜面のため流失している。

西側でⅨD 3 g 住居跡、東側でⅨD 4 g - 2 住居跡と重複する。ⅨD 3 g 住居跡との新旧関係は、埋土断面観察から本住居の方が先行する。ⅨD 4 g - 2 住居跡との関係は明瞭には把握できなかった。本住居の東壁が確認できなかったことから、ⅨD 4 g - 2 住居跡によって壊されたものと理解し、本住居の方が古いと考えた。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は残存値で東西2.6m、南北2.8mである。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存し、上位は褐色土層、下位は基盤層で、ほぼ直立する。壁高は45cmである。

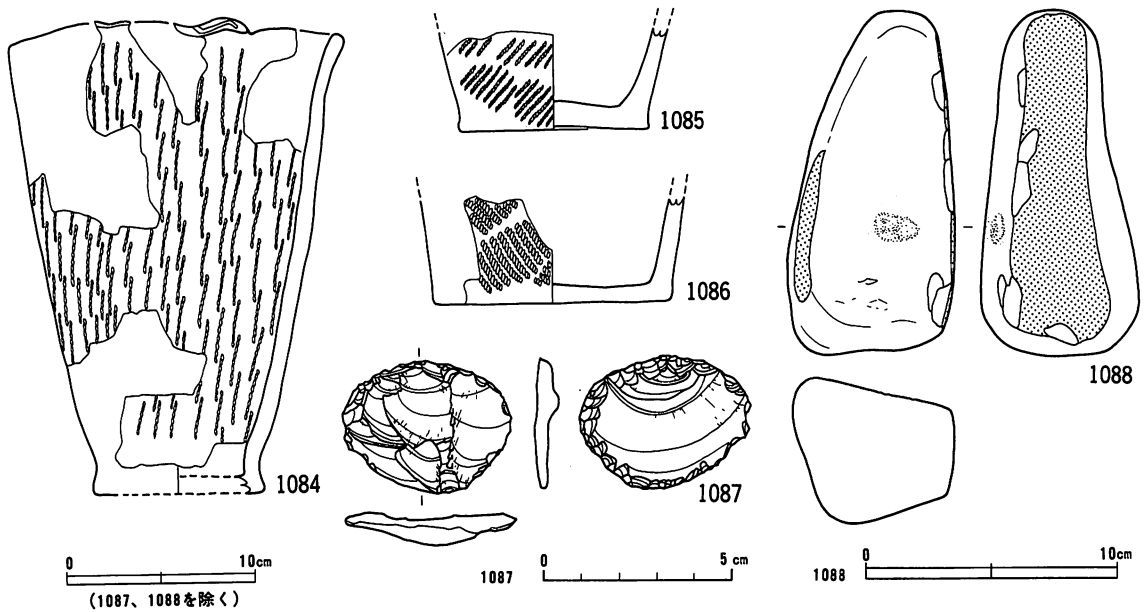
〈埋土〉4層で構成される。自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉一部褐色土層を床とするが、壁寄りには基盤層で固く締まる。斜面に沿ってやや傾斜し、比高12cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が2基検出された。西側の1基は層厚が殆どないことから断面図は省略した。東側のものは床面を構成する褐色土層が焼土化したもので地床炉と考えられる。焼土は85×125cmの不整形に分布し、厚さは最大8cmである。断面形はほぼレンズ状で、固く締まっている。

遺物（第226図、写真図版206）

〈土器〉床面から1240g、埋土から675g出土した。1084は口縁部の対向する位置に2単位の装飾体をつける。いずれもその中央部分が欠損しているので明らかではないが、鋸歯状になるものと考えられ、頂部平坦部（口唇部）に篋状工具によって鋸歯状沈線が施される。その深さ



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1084	ⅨD 4g 住	床面	口縁部鋸歯状装飾体、装飾体上沈線。	縦位綾絡文(2条1単位)	(17.8)	(9.1)	25.4		Ⅱ6aア	206
1085	ⅨD 4g 住	床面		L R 横。	-	10.0	(5.2)			206
1086	ⅨD 4g 住	床面		R L 横。	-	(12.6)	(5.5)			206

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1087	ⅨD 4g 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	3.5	4.5	0.9	9.12		I d 2	206
1088	ⅨD 4g 住	床面	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	13.5	6.6	5.5	770	磨面2面。+凹石。	I a 1	206

第226図 ⅨD 4g 住居跡出土遺物

は一樣ではなく、やや粗雑な印象がある。他に網目状撚糸文、多軸絡条体の破片が出土している。

<石器>1087は裏側の全周を加工している。一次剝離面はリングが発達し凹凸が大きい。1088には磨面が2面観察される。他に埋土からフレーク6点が出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

ⅨD 4g - 2 住居跡 (遺構番号 120)

遺構 (第227図、写真図版76)

<検出状況>東尾根南斜面中腹に位置する。ⅨD 4g 住居跡・ⅨD 5g - 2 住居跡の精査で確認した。南壁は斜面のため流失している。東壁は、埋土観察用のベルトによってわずかに確認したものである。

西側でⅨD 4g 住居跡、東側ではⅨD 5g - 2 住居跡と重複するが、新旧関係は必ずしも明白ではない。ⅨD 4g 住居跡の東壁が確認できないことから本住居の方が古いと考えた。また、

ⅨD 5 g - 2 住居跡の床面に貼られた黄褐色土が重複部分では確認されないことから、本住居によって切られたと考えた。さらに、本住居の床下から、ほぼ同規模のⅨD 4 g - 3 住居跡が検出された。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西6.5m、南北は残存値で4.1mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層でほぼ直立する。壁高は東壁18cm、西壁37cm、北壁72cmである。

〈埋土〉暗褐色土～褐色土および崩落土で、下位ほど締まりあり、自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉北壁寄りには基盤層を、南側はⅨD 4 g - 3 住居跡の埋土を床とし、いずれも固く締まっている。ほぼ水平で平坦である。柱穴を2個検出した。埋土は締まりを欠く暗褐色土で住居の埋土に類似する。P1は先行する炉を壊してつくられている。

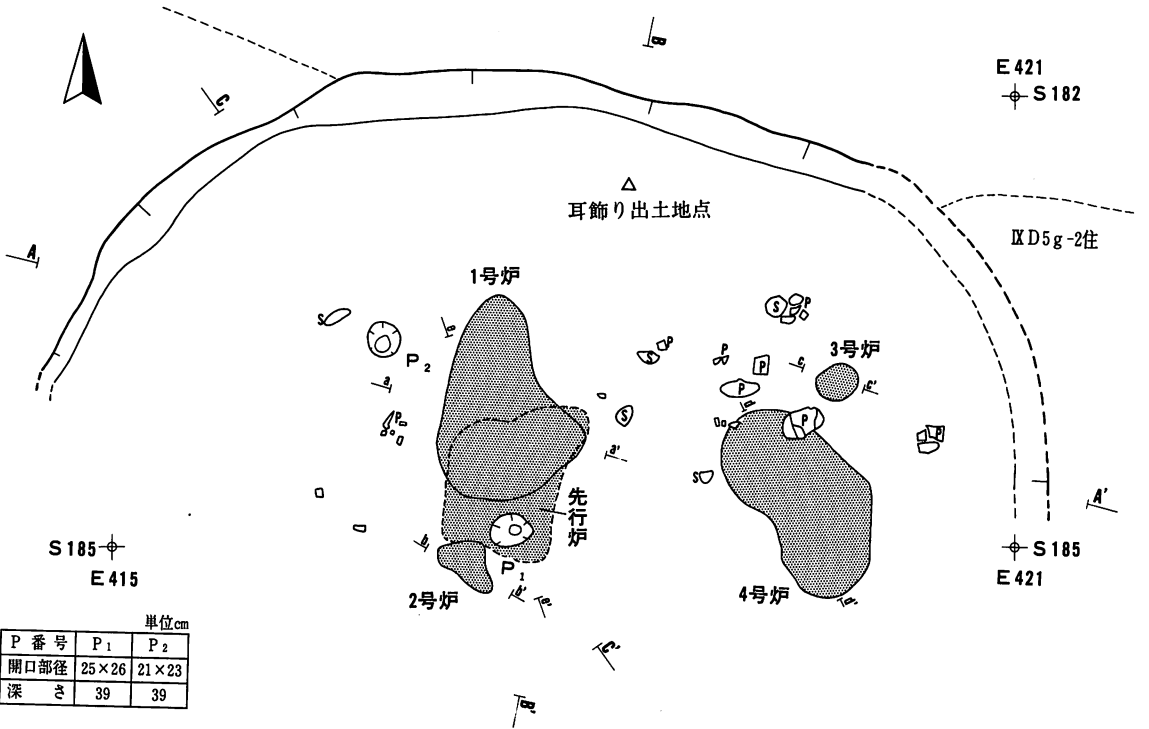
〈炉〉地床炉が4基検出された。1号炉・4号炉は、住居の中軸線上にあり、焼土の分布範囲および厚さから長期間の使用が想定される。

〈先行炉〉1号炉の下10cmのレベルで、1号炉に先行する焼土が検出された。P1はこの焼土を壊してつくられ、埋土に焼土のブロックが混入する。焼土の範囲は100×130cm、厚さは最大5cmである。後述するⅨD 4 g - 3 住居跡の床面より高レベルにあり、同住居に伴うものではない。
遺物（第228～231図、写真図版206～209）

〈土器〉床面から6655g、埋土から5510g出土した。1089は底部から大きく外反する器形である。1090は口縁部に2条の綾絡文が横走するが、押圧にむらがあり装飾性は高くない。口唇部には篋状工具により刻みが施される。器体表面は小さな凹凸がある。内面には全体にススが附着している。1092は口唇部全体に右方向から指頭状の押圧が施される。地文は太めの原体を用い、その回転方向を種々変えることにより羽状・菱形状となるが、装飾性を意識したような規則性はみられない。内面はハケメ状の調整が施されている。1093は胴下半部で底部に近い部分の破片である。1095は中央部がやや凹む偏平な円文状突起を有する。1個のみ残存するが、対向する位置に2単位あったものと考えられる。地文は胴上半部はRL、下半部はLRを横回転したものらしい。RL側には縄端処理による綾絡文が一部観察される。胎土には黒雲母を多く含み、内面は小さな凹凸があり指で押さえて調整したものであろう。1100の花弁状口縁は、全体に外側にまくれるような印象がある。1104は波状口縁頂部を指頭状の押圧により2山としている。1108は緩い波状口縁で、断面が角張っている。

〈石器〉1113は加工痕の上に微小打滅痕が観察される。1114は床面のダメ押し時に出土したもので、重複するⅨD 4 g - 3 住居跡に所属するものかも知れない。粗雑な加工である。1115は側面観が鋸歯状となる。1辺は粗く大きい剥離が3単位施されている。1116はよく研磨され滑

E 421
 ⊕ S 182



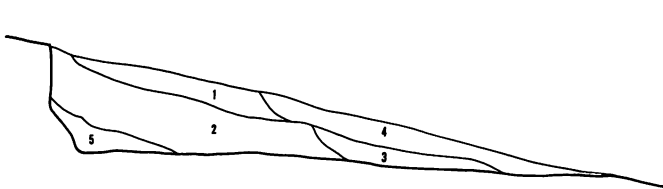
単位cm

P 番号	P ₁	P ₂
開口部径	25×26	21×23
深さ	39	39

A — L = 269.100m — A'



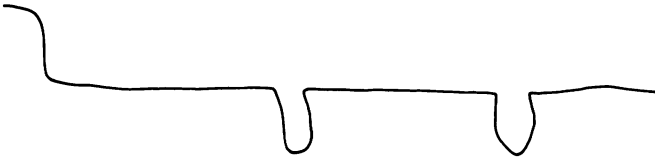
B — L = 269.600m — B'



A...A' B...B'

- | | | |
|-------------------------|---------|------------------|
| 1. 7.5YR ^{5/6} | 明褐色土 | しまりあり。 |
| 2. 7.5YR ^{4/6} | 褐色土 | 固くしまっている。小角礫を含む。 |
| 3. 10YR ^{4/6} | 褐色土 | 固くしまっている。小角礫を含む。 |
| 4. 7.5YR ^{3/6} | 暗褐色土 | ややしまりあり。小角礫を含む。 |
| 5. 7.5YR ^{2/6} | 暗褐色土 | 固くしまっている。小角礫を含む。 |
| 6. 10YR ^{2/6} | 褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 7. 7.5YR ^{1/6} | 極暗褐色土 | しまりなし。小角礫を含む。 |
| 8. 10YR ^{1/6} | 黄褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 |
| 9. 7.5YR ^{1/6} | 暗褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 |
| 10. 10YR ^{1/6} | にぶい黄褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 |

C — L = 268.200m — C'



a — L = 268.800m — a'



- | | | |
|-------------------------|-------|----------------|
| 1. 7.5YR ^{3/6} | 暗褐色土 | しまりあり。炭化物少量含む。 |
| 2. 5YR ^{3/6} | 明赤褐色土 | しまりあり。 |
| 3. 10YR ^{4/6} | 褐色土 | しまりなし。 |

L = 268.800m



- | | | |
|-----------------------|-------|-------------|
| 1. 5YR ^{3/6} | 明赤褐色土 | 焼土。しまりあり。 |
| 2. 5YR ^{2/6} | 明赤褐色土 | 焼土。暗褐色土を含む。 |

L = 268.800m



- | | | |
|--------------------|-------|-----------|
| 5YR ^{3/6} | 明赤褐色土 | 固くしまっている。 |
|--------------------|-------|-----------|

d — L = 268.800m — d'

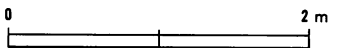


- | | | |
|--------------------|-----|--------|
| 5YR ^{4/6} | 褐色土 | しまりなし。 |
|--------------------|-----|--------|

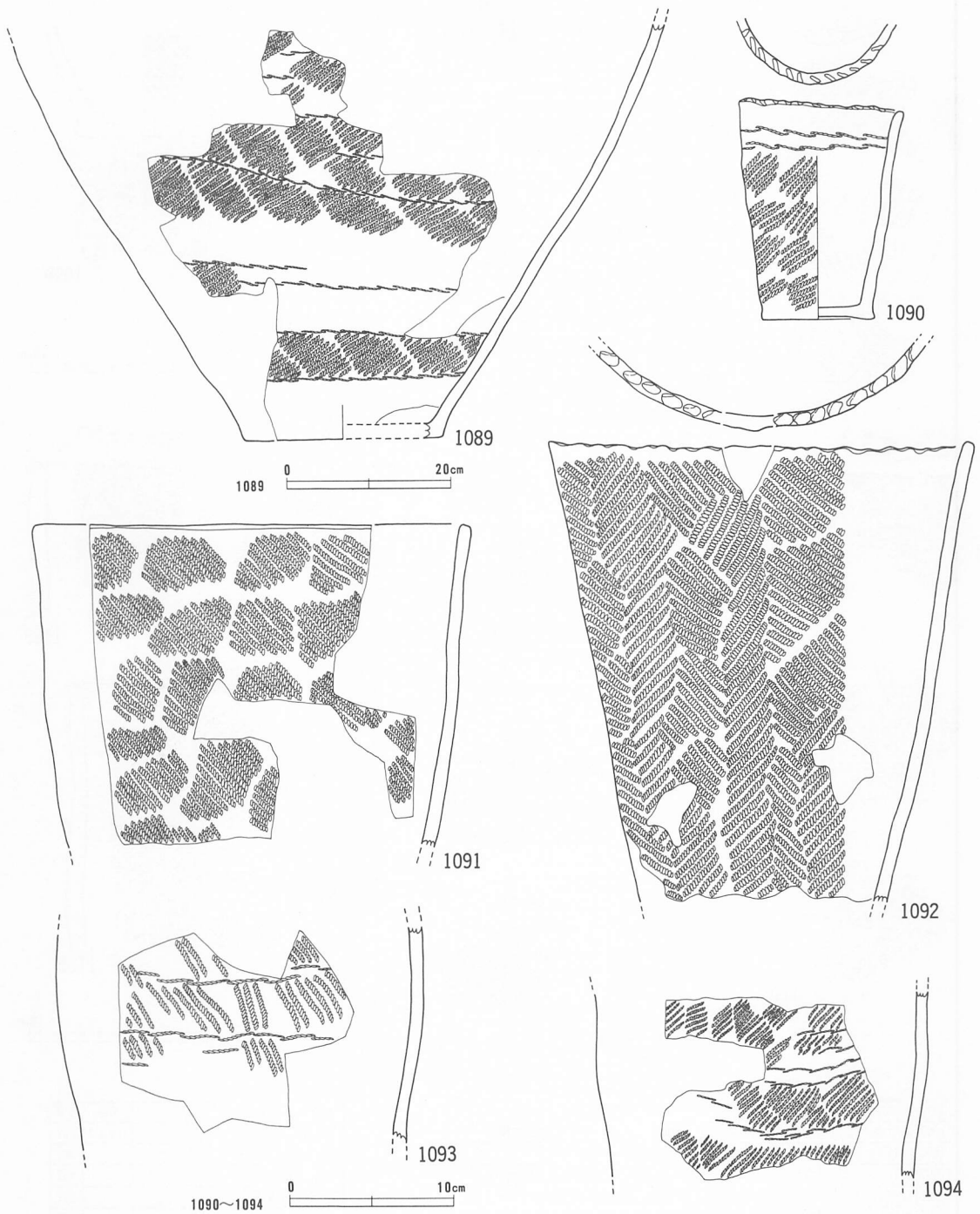
e — L = 268.700m — e'



- | | | |
|-----------------------|------|--------|
| 1. 5YR ^{3/6} | 赤褐色土 | しまりあり。 |
| 2. 5YR ^{2/6} | 赤褐色土 | しまりなし。 |

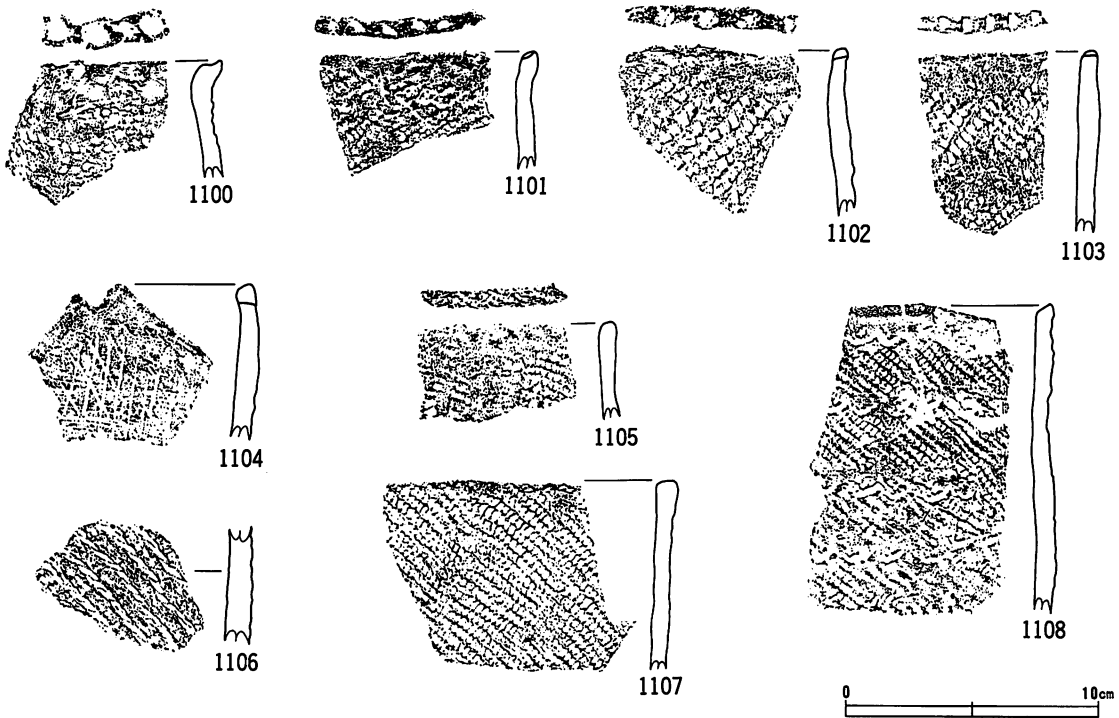
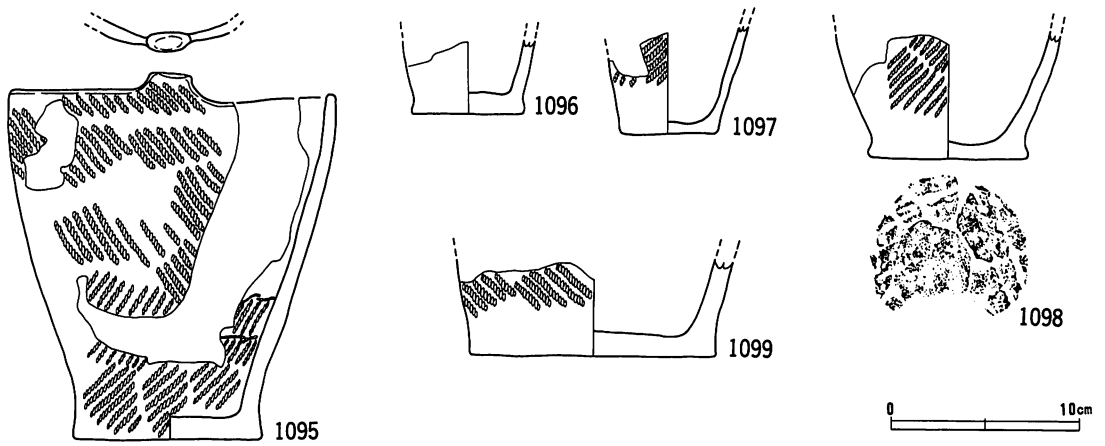


第227図 IX D 4 g-2住居跡



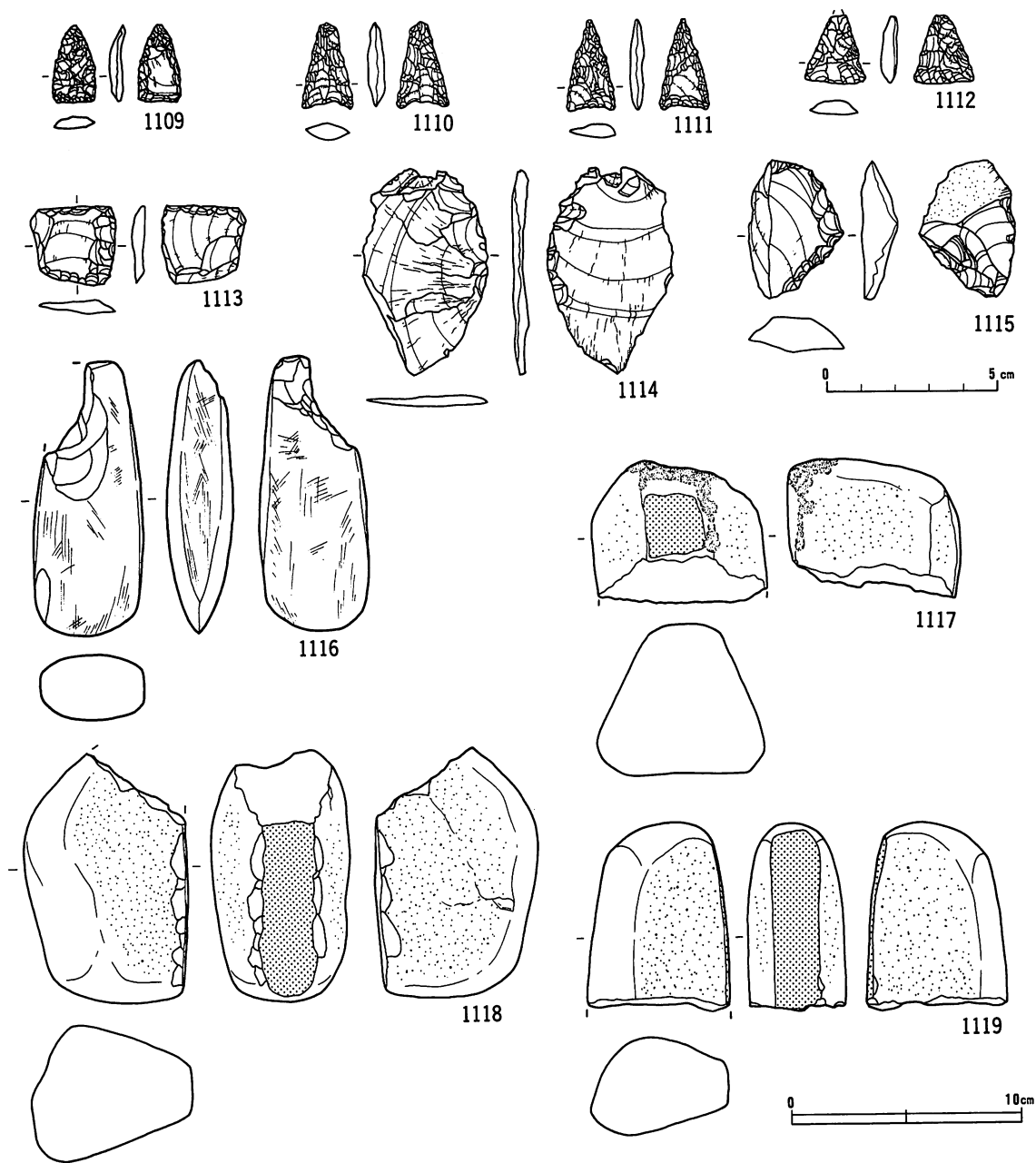
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1089	IX D 4 g-2 住	床面		L R 横、横位綾絡文。	—	(18.0)	(37.5)		II 6	206
1090	IX D 4 g-2 住		口唇部棒状工具による刻み、口頸部横位綾絡文。	L R 横	(10.2)	7.0	13.6		II 6 bウ	207
1091	IX D 4 g-2 住			R L 横	(26.8)	—	(19.7)		II 6 bカ	207
1092	IX D 4 g-2 住	床直上	口唇部右方向からの指頭状圧痕。	R L の回転方向を変えた羽状。	(25.8)	—	(28.3)		II 6 bオ	207
1093	IX D 4 g-2 住			R L 横、横位綾絡文。	—	—	(12.0)		II 6	207
1094	IX D 4 g-2 住			L R 横、横位綾絡文。	—	—	(11.0)		II 6	207

第228図 IX D 4 g-2住居跡出土遺物(1)



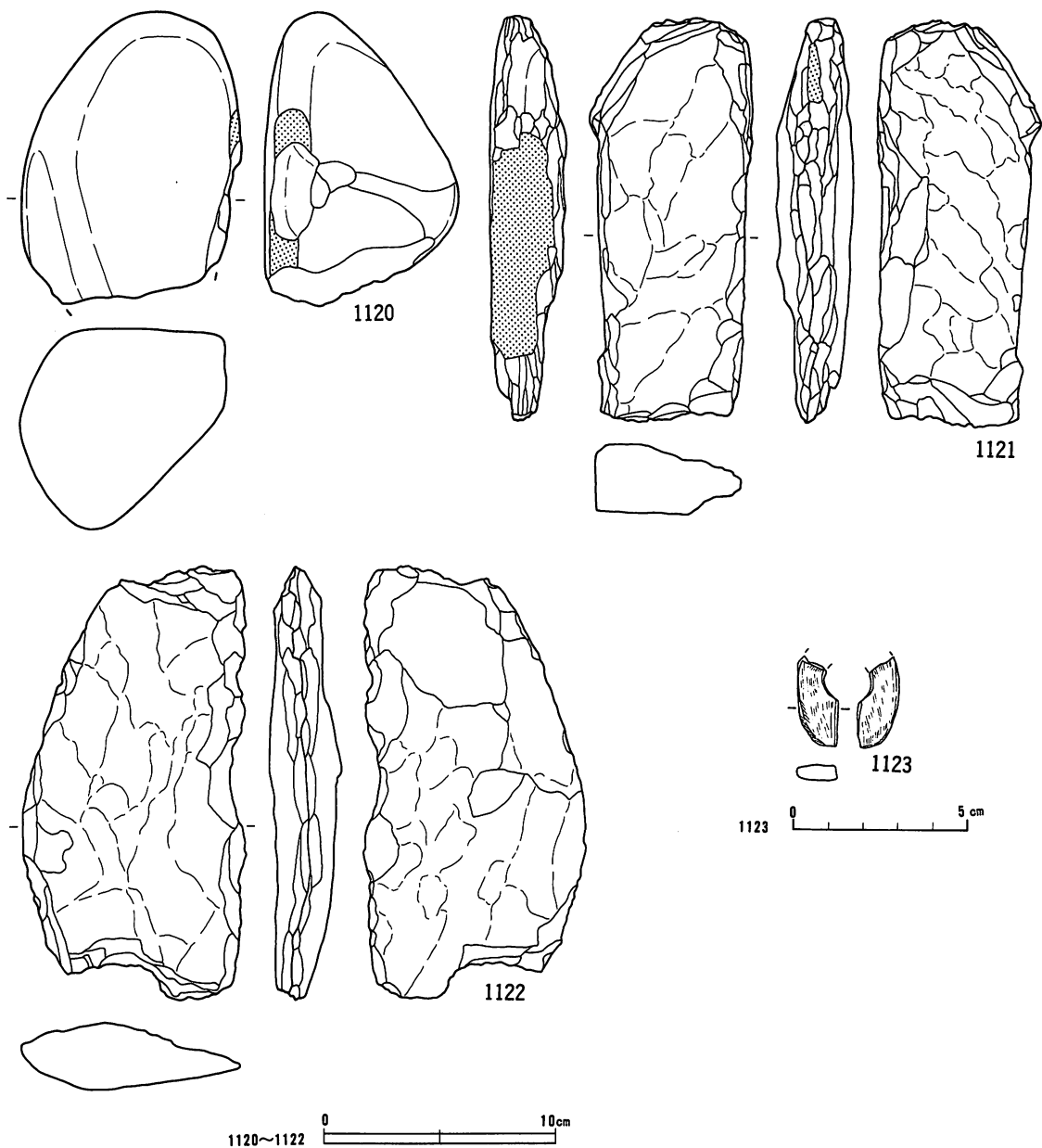
番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1095	IX D 4 g - 2 住	埋土	弁状突起、頂部凹文。	L R 横	17.5	10.0	19.4		II 6 a ヲ	207
1096	IX D 4 g - 2 住		無文		-	(6.0)	(3.8)			207
1097	IX D 4 g - 2 住	床面		L R 横	-	(5.2)	(5.6)			207
1098	IX D 4 g - 2 住			L R 横	-	8.4	(6.5)	網代痕。		207
1099	IX D 4 g - 2 住	埋土		R L 横	-	13.0	(5.0)	網代痕。		207
1100	IX D 4 g - 2 住	床面	花卉状口縁。	L L ?				指頭による花卉状口縁明瞭。	II 6 b オ	207
1101	IX D 4 g - 2 住	埋土	口唇部刺突(繩端又は棒状工具)。	R L 横。片結び横位綾絡文。					II 6 b オ	207
1102	IX D 4 g - 2 住		口唇部右方向からの指頭状圧痕(爪跡明瞭)。	L R 横。					II 6 b オ	207
1103	IX D 4 g - 2 住	埋土	口唇部籠状工具による右方向からの圧痕。	L R 横。片結び。					II 6 b オ	207
1104	IX D 4 g - 2 住	床面	波状口縁。頂部 2 山。	R 網目状燃糸文。					II 6 a ヲ	207
1105	IX D 4 g - 2 住	床面	口唇部施文 (L 圧痕?)。	L R × R L 第 1 種結葉羽状縦位。						207
1106	IX D 4 g - 2 住	床面		R 燃糸文。						207
1107	IX D 4 g - 2 住	床面		R L 横。						208
1108	IX D 4 g - 2 住	埋土		R L 横。片結び横位綾絡文。						208

第229図 IX D 4 g - 2 住居跡出土遺物(2)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1109	IXD 4 g-2住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.2	1.2	0.3	1.05		I 2	208
1110	IXD 4 g-2住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.5	0.5	1.40		II b 1	208
1111	IXD 4 g-2住	埋土	石鏃	流放岩	雫石西部	2.7	1.4	0.35	1.00		II b 2	208
1112	IXD 4 g-2住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	(2.0)	1.8	0.4	(1.20)		III 1	208
1113	IXD 4 g-2住	埋土	ピュス・エスキュー	硬質凝灰質泥岩	雫石西部	2.3	2.5	0.4	3.67	打痕あり。		208
1114	IXD 4 g-2住	床ダメ押し	不定形石器	粘板岩	北上山地	6.0	3.7	0.4	8.78	薄く。	I a 2	208
1115	IXD 4 g-2住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.1	2.8	1.1	9.64	側面観が盛歯状。1辺は粗く大きい3単位の剝離。	VII	208
1116	IXD 4 g-2住	床面	磨製斧	凝灰岩	北上山地	12.0	4.8	2.8	(230)	基部一部欠損。沢があり、滑らかである。	I	208
1117	IXD 4 g-2住	床面	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(6.2)	7.5	7.3	(430)	磨面2面。平滑面3面。+敲石？	I a	208
1118	IXD 4 g-2住	埋土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(10.8)	7.1	5.9	(650)	平滑面2面。	I a	208
1119	IXD 4 g-2住	埋土	敲磨器類A群	硬砂岩	北上山地	(8.2)	6.2	6.1	(330)	平滑面2面。	I a	208

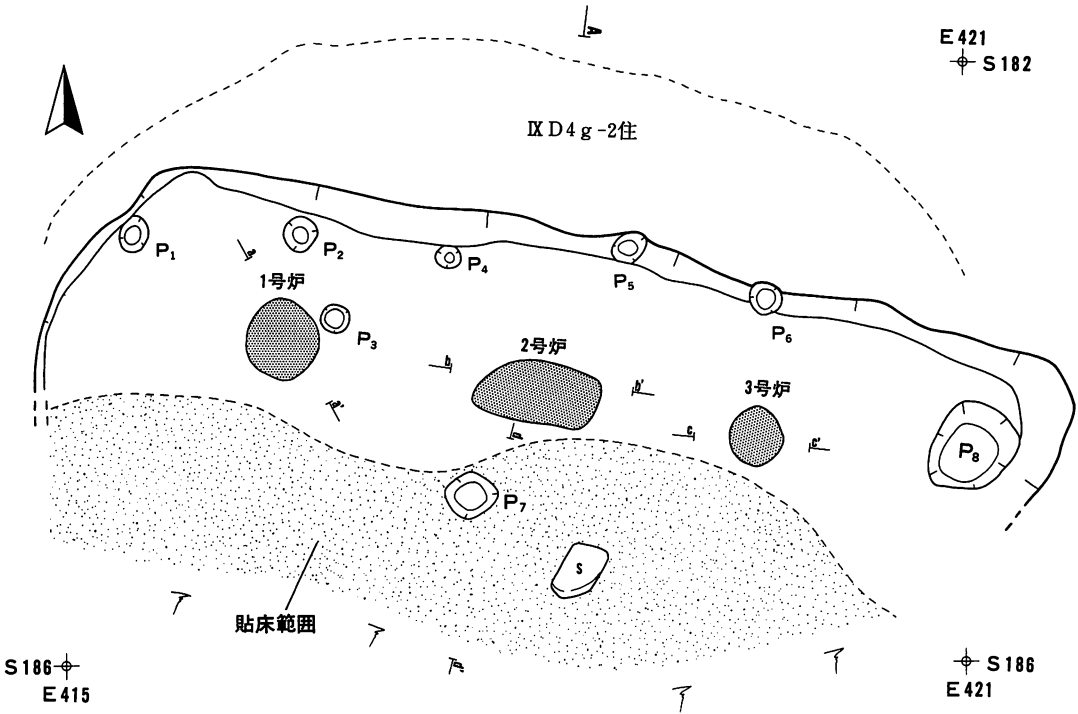
第230図 IXD 4 g-2住居跡出土遺物(3)



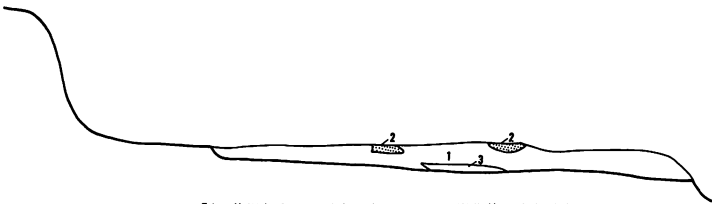
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1120	IX D 4 g-2 住	床面	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	(12.2)	8.8	8.5	(1020)		I a	208
1121	IX D 4 g-2 住	床面	敲磨器類 A 群	粘板岩質千枚岩	北上山地	17.3	7.0	3.2	510		I b 3	208
1122	IX D 4 g-2 住	床面	敲磨器類 A 群	粘板岩質千枚岩	北上山地	18.6	9.5	3.0	560	挟り有り。	III c 3	209
1123	IX D 4 g-2 住	床直上	耳飾	チャート質凝灰岩	北上山地	(2.6)	(1.1)	0.4	(2.25)			209

第231図 IX D 4 g-2住居跡出土遺物(4)

E 421
 S 182



A L=269.600m



- 1. 10Y R% 黄褐色土 固くしまっている。炭化物、小角礫を含む。
- 2. 5Y R% 明赤褐色土 焼土。(IX D4 g-2住のもの)
- 3. 10Y R% 暗褐色土 固くしまっている。炭化物を含む。

a L=268.600m a'

5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

b L=268.600m b'

5Y R% 明赤褐色土 焼土。しまりあり。

c L=268.600m c'

5Y R% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

d L=266.500m d'



- 1. 10Y R% 明黄褐色土 固くしまっている。
- 2. 10Y R% 褐色土 固くしまっている。暗褐色土を含む。

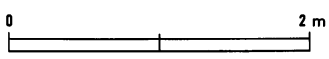
単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
開口部径	20×24	24×24	18×20	16×18
深 さ	14	34	24	33

P 番号	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
開口部径	18×25	21×21	34×35	50×65
深 さ	41	41	20	6

単位cm

炉 番号	1号炉	2号炉	3号炉
規 模	50×55	40×75	37×40
厚 さ	3	3	2



第232図 IX D4 g-3住居跡

らかで光沢がある。1119は擦面以外も磨きにより調整している。他にも特殊磨石1点が出土しているが大幅な欠損品であり図化は省略した。またUフレが3点、フレークが27点、半円状花崗岩質岩が1点出土している。

時期 出土遺物・重複関係から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

ⅨD4 g-3 住居跡 (遺構番号121)

遺構 (第232図、写真図版77)

〈**検出状況**〉ⅨD4 g-2 住居跡の床面下、約20cmのところ検出された。南側は斜面のため流失している。

〈**形状・規模**〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形と推定される。規模は、東西6.7m、南北は残存値で2.2mである。

〈**壁・壁高**〉基盤層で外傾する。壁高は東壁19cm、西壁20cm、北壁12cmである。

〈**埋土**〉ⅨD4 g-2 住居跡の床を構成する、固く締まった黄褐色土である。

〈**床・柱穴・施設**〉凹凸は殆どないが、やや西側に傾斜する。北側は基盤層で固く締まっている。南側は基盤層の傾斜に沿って最大18cmの厚さで貼り床されている。柱穴が7個検出された。うち5個は北壁際に位置し、規模はP1の深さがやや不足する他はほぼ等しく、またおよそ1m間隔に並ぶ。東壁際に土坑が1基検出された。径50×65cm、深さ6cmと小規模のものである。

〈**炉**〉住居の中軸線上に3基の焼土が検出された。いずれも層厚は薄いものの床面が焼土化したもので地床炉と考えられる。1号炉の上には粉炭の層が約2～3cmの厚さで乗る。

遺物 (第233図、写真図版209)

〈**土器**〉床面から1170g出土している。1124はrの捺糸文であるが、施文は不明瞭であり網目状である可能性もある。口唇部は平坦で断面が角ばる。器体表面は小さな凹凸がある。

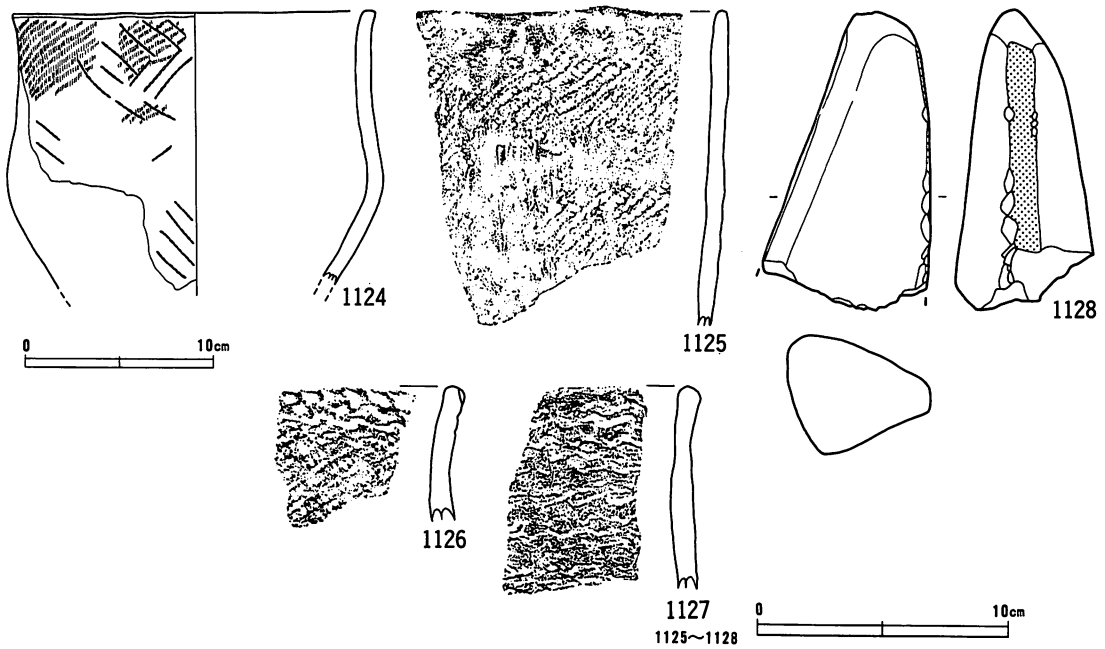
時期 出土土器・重複関係から、縄文時代前期後葉に属すると推定される。

ⅨD4 h 住居跡 (遺構番号122)

遺構 (第234図、写真図版78)

〈**検出状況**〉褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。

当初は単独遺構と想定して精査に入ったが、ⅨD4 h-2 住居跡・ⅨD5 h 住居跡・ⅨD5 i 住居跡の計4棟の重複であることが分かった。本住居は重複するいずれの住居の埋土も切っていることから、本住居が最も新しい。また、ⅨD5 h 住居跡の埋土をⅨD5 i 住居跡が切ることからⅨD5 i 住居跡の方が新しい。新旧関係を図式化すると次のようになる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1124	ⅨD 4 g-3 住	床直上		RにR巻き付け?	(19.2)	-	(14.5)			209
1125	ⅨD 4 g-3 住	床直上		L R襷。片結び。				縦位にケズリ。	Ⅱ 6	209
1126	ⅨD 4 g-3 住	床直上	口唇端筒状工具による方向からの刻み。横位綾絡文。	L RにR附加条?。						209
1127	ⅨD 4 g-3 住	床直上		重層する横位綾絡文。					Ⅱ 3	209

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1128	ⅨD 4 g-3 住	埋土	敲磨器類A群	両輝石安山岩	奥羽山地	(11.8)	(6.7)	4.6	(400)		I a 1	209

第233図 ⅨD 4 g-3住居跡出土遺物

(新) ⅨD 4 h 住居跡 ← ⅨD 4 h-2 住居跡 (旧)

← ⅨD 5 i 住居跡 ← ⅨD 5 h 住居跡

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西7.9m、南北は残存値で4.5mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層で、やや外傾する。壁高は東壁9cm、西壁16cm、北壁36cmである。

〈埋土〉下位は褐色土主体で、上位に漆黒の腐植土が乗る。床面直上には粉炭混じりの暗褐色土が分布する。

〈床・柱穴・施設〉北壁側は基盤層を床とし、南側は貼り床されている。北壁から約70cmの距離に低い段差があり、ほぼその段差のラインに柱穴が位置する。この段差の存在と柱穴の位置から建替えの可能性も考えられるが、埋土の第8層の存在から、1棟と把握した。柱穴より南

側は比較的軟質で、10～15cmの厚さに貼り床される。柱穴が15個検出された。主柱穴は、規模と配置から、P2・P3・P5・P7・P13・P14の6個と考えられる。周溝が、北壁際に巡る。北東壁際で一部断続的となる。幅は15cm前後であるが、深さは10～20cmと一定しない。ただし、底面に大きな凹凸は観察されない。

〈炉〉地床炉が8基検出された。いずれも貼り床された軟質の暗褐色土が焼土化したものである。住居の中軸線上に一直線に並ぶように位置する。このうち2号炉の焼土が特に発達している。

遺物（第235・236図、写真図版209・210）

〈土器〉埋土から5910g出土した。1129は胴部の四半分弱が残存しているが表面の剝落が著しく文様等は明瞭でない。口縁部に鋸歯状の装飾体を有する。その頂部（口唇部）には棒状または篋状の工具を用いて沈線が施される。それは連続的に一気に施文されたものではなく、一画一画施したものである。幅・深さは一様ではなく、やや粗雑な印象がある。実測図右側は正面の装飾体より高い位置にまで口縁部が波状を描く。1133・1134は胎土・焼成・器厚などが1129に酷似し、同一個体と考えられる。2種の装飾体を、対向する位置に各1対配するものであろう。

〈石器〉1109は断面形が直角三角形で、二次加工は素材の角度を大きく変更するものではない。1141は尖頭部が横おれにより折損している。他に岩手火山起源の溶岩、つまみ部のみ残存した石匙、Uフレ1点、フレーク27点（うち床面4点）が出土したが図化は省略した。フレークはその一部について石質鑑定した結果、北上山地産・粘板岩、雫石産・硬質泥岩であることが分かった。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

IXD4h-2住居跡（遺構番号123）

遺構（第234図、写真図版78）

〈検出状況〉IXD4h住居跡の精査で検出した。南側は同住居によって切られており、北壁のみ残存する。

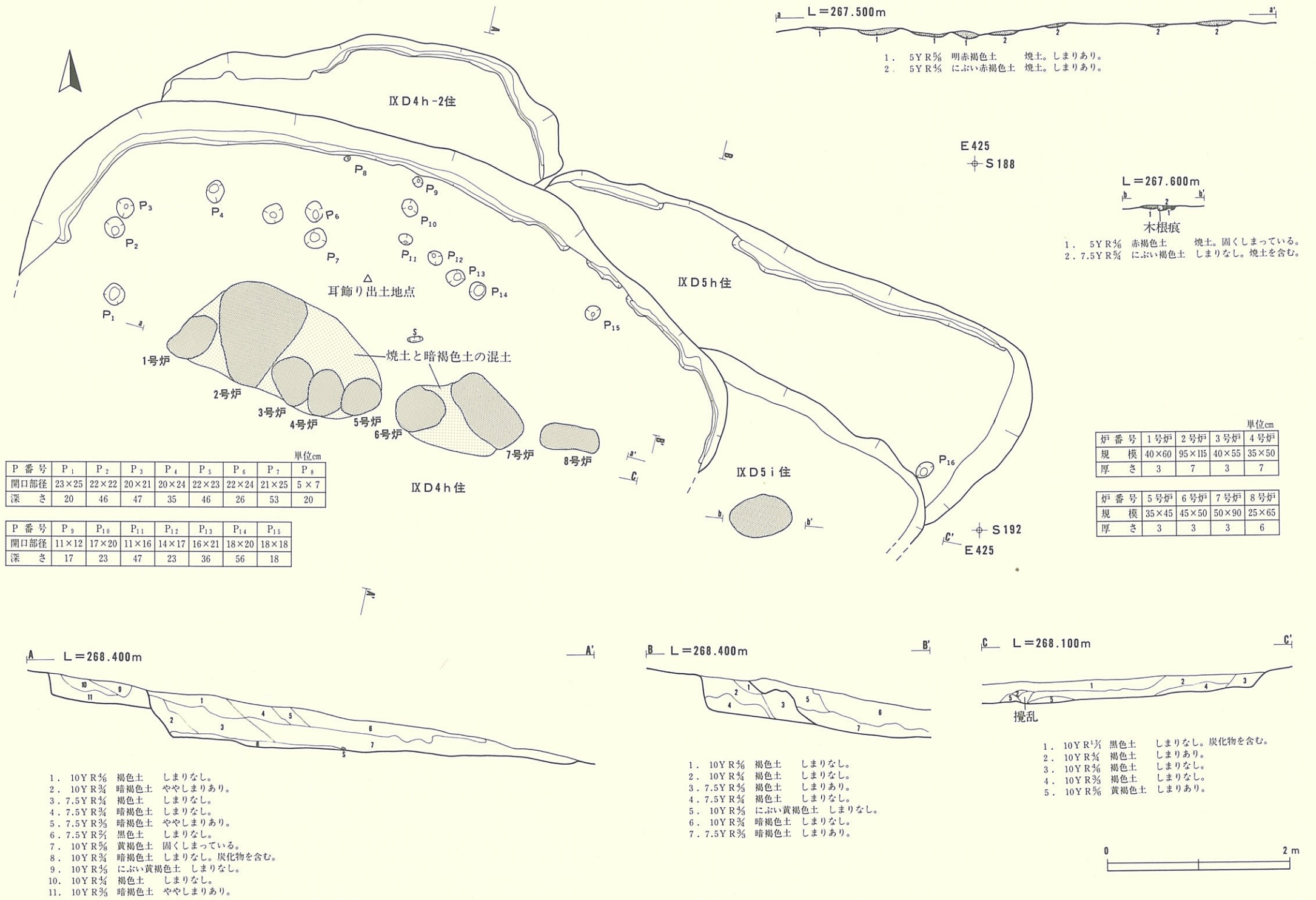
〈形状・規模〉残存状況が悪く、不明である。規模は、残存値で東西4.3m、南北1.1mである。

〈壁・壁高〉標準土層第IV層で構成されほぼ直立する。壁高は東壁28cm、北壁33cmである。

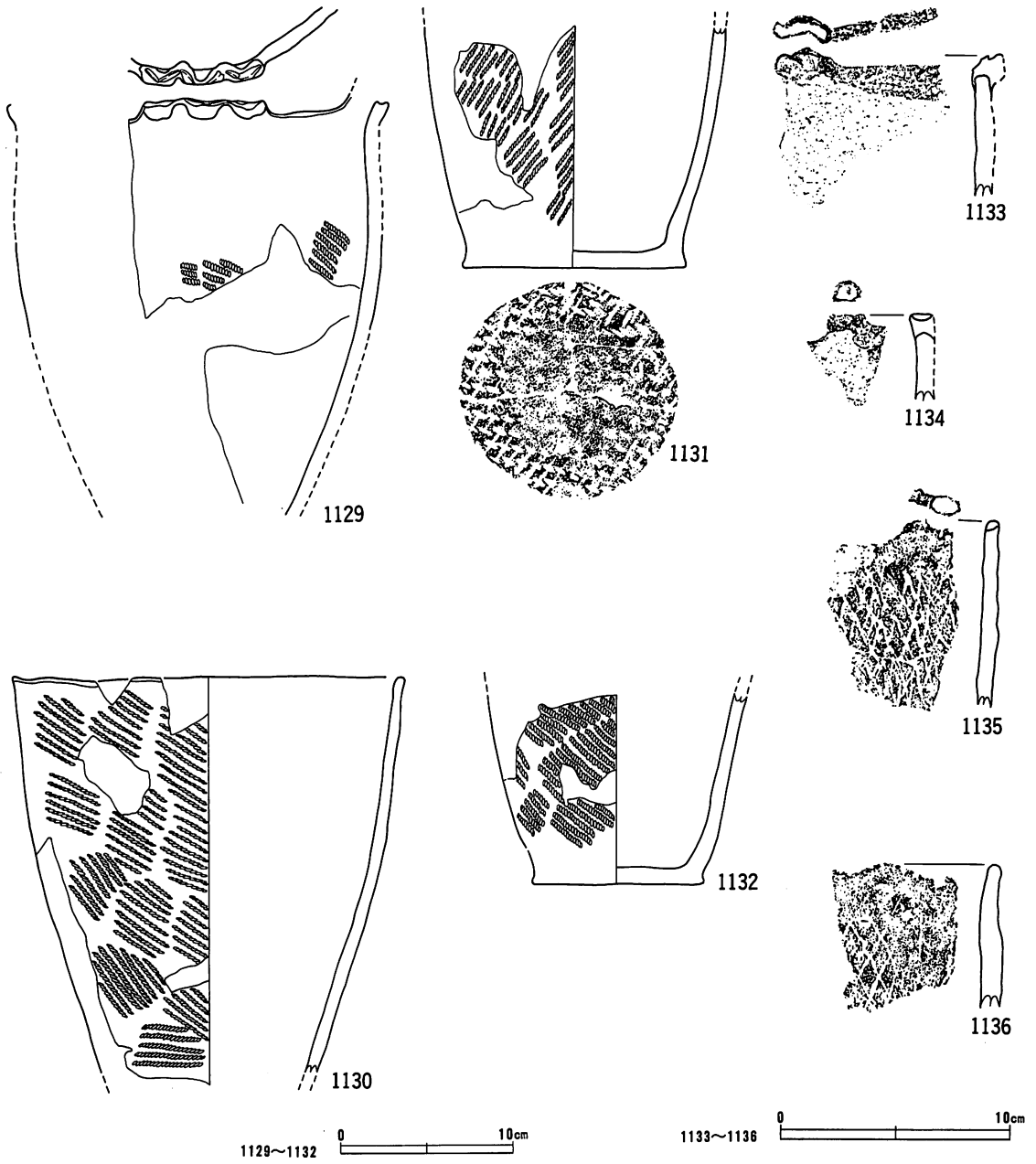
〈埋土〉やや締まる暗褐色土を主体とする。西側の一部で壁と区別が不明瞭だった。

〈床・柱穴・施設〉斜面に沿ってやや傾斜するが、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。周溝が北壁際の一部に巡る。幅10cm前後で深さ4～10cmで、底面に大きな凹凸は見られない。

〈炉〉検出されなかった。

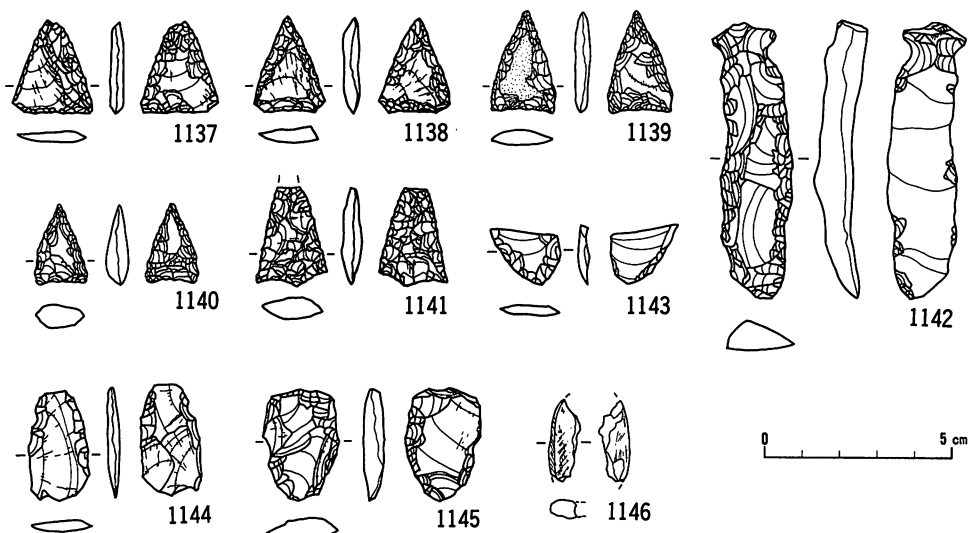


第234図 IX D4 h・IX D4 h-2・IX D5 h・IX D5 i 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1129	IX D 4 h 住	埋土上位	口縁部窟歯状裝飾体、裝飾体口唇部沈線(凹線)。	R L 横。	(22.0)	-	(24.0)	1133、1134 と同一個体。	II 6 a 7	209
1130	IX D 4 h 住	埋土		L R 横。	(22.8)	-	(23.8)		II 6 b カ	209
1131	IX D 4 h 住	埋土上位		L R 横。	-	13.0	(14.0)	網代痕。		209
1132	IX D 4 h 住	埋土		R L 横。	-	9.9	(11.8)			209
1133	IX D 4 h 住	埋土上位	口縁部窟歯状裝飾体、裝飾体口唇部沈線(凹線)。	R L。				1129、1134 と同一個体、剝落著しい。	II 6 a 7	210
1134	IX D 4 h 住	埋土上位	口縁部裝飾体。頂部凹み。					1129、1133 と同一個体。	II 6 a 7	210
1135	IX D 4 h 住	埋土下位	口唇部指頭状圧痕。	L 網目状燃糸文。					II 6 a ヅ	210
1136	IX D 4 h 住	埋土	波状口縁。	R 網目状燃糸文。					II 6	210

第235図 IX D 4 h 住居跡出土遺物(1)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1137	IX D 4 h 住	埋土上位	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	2.4	2.1	0.3	1.24		I 1	210
1138	IX D 4 h 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.5	1.9	0.4	1.60		II a 1	210
1139	IX D 4 h 住	埋土上位	石鏃	硬質凝灰質泥岩	礮石西部	2.7	1.7	0.4	1.57		II a 2	210
1140	IX D 4 h 住	埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	2.1	1.3	0.6	1.43		II a 2	210
1141	IX D 4 h 住	埋土上位	石鏃	凝灰質硬質泥岩	礮石西部	(2.7)	1.9	0.5	(1.74)	茎のつくり出しが不明瞭である。尖頭部欠損(横折れ)。	VI	210
1142	IX D 4 h 住	埋土	石匙	珪質泥岩	礮石西部	7.3	2.1	1.4	12.46	断面形三角形。	I a 2	210
1143	IX D 4 h 住	床面	不定形石器	粘板岩	北上山地	1.5	1.9	0.3	0.72	折損または、折断。薄く小さい。	I b 2	210
1144	IX D 4 h 住	埋土上位	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	2.9	1.6	0.3	1.90	薄く扁平。不整形。	I c 2	210
1145	IX D 4 h 住	埋土上位	不定形石器	珪質泥岩	礮石西部	3.0	2.0	0.6	3.47	扁平な不整形。側面観鋸歯状。	III	210
1146	IX D 4 h 住	床面	耳飾	チャート	北上山地	(2.1)	(0.9)	0.5	(1.73)			210

第236図 IX D 4 h 住居跡出土遺物(2)

遺物 出土していない。検出作業時に比較的多くの遺物が出土したが、遺構外遺物として取り上げており、本住居の埋土の遺物も含まれているかもしれない。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

IX D 5 c 住居跡 (遺構番号124)

遺構 (第237図、写真図版79)

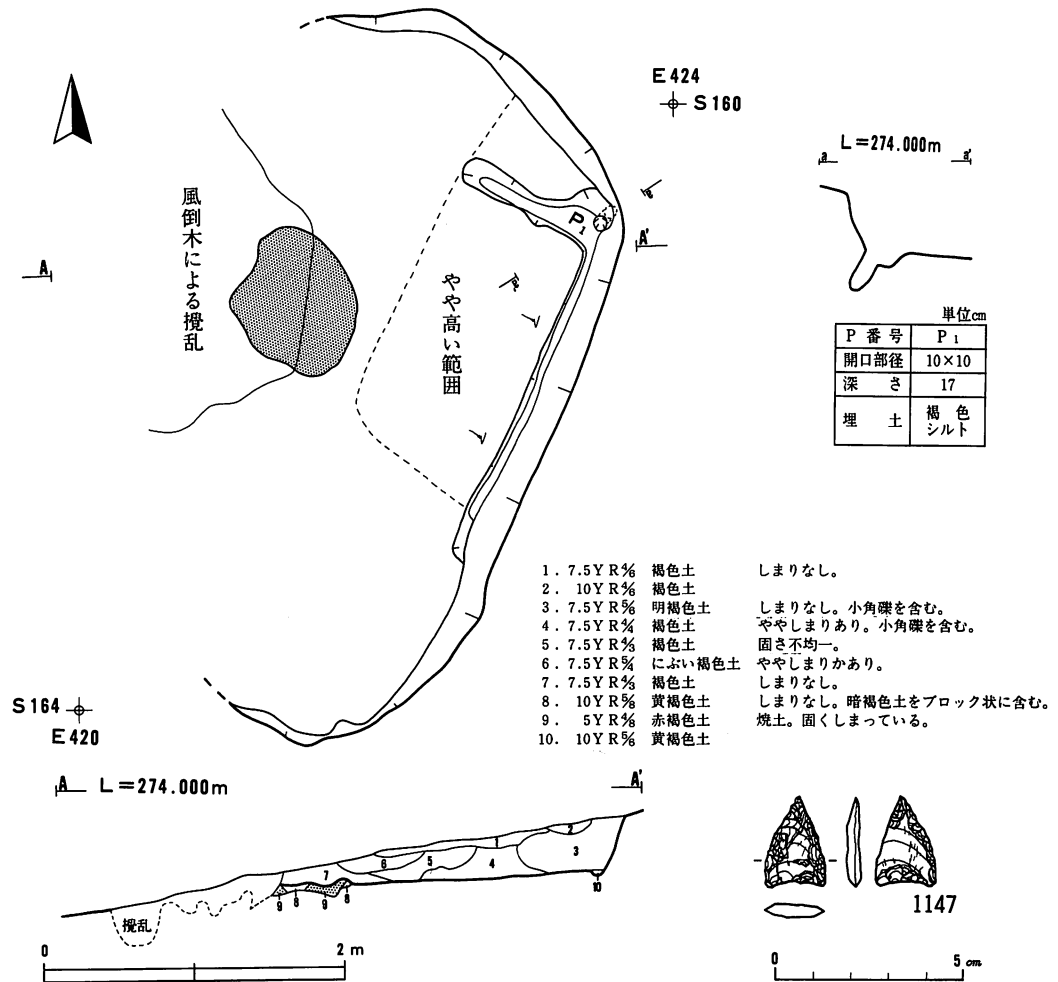
<検出状況>東尾根西斜面に位置する。平面的な検出はできず、褐色土層上面で焼土を検出し、その斜面上方で基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡として認定した。西側は斜面により、流失している。また一部倒木痕により壊されている。

<形状・規模>西側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長円形基調と推定される。規模は、南北4.6m、東西は残存値で2.7mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁38cm、南壁20cm、北壁38cmである。

<埋土>斜面上方にあたる東壁側はしまりを欠く褐色土、崩落土を含む明褐色土で自然堆積の様相を示す。斜面下方では、倒木痕により層序が乱れる。

<床・柱穴・施設>東壁寄りには基盤層を、炉の付近は褐色土層を床とする。北東四半部は一段高く、西側に向かって緩やかに傾斜する。柱穴が北東隅に1個検出された。径10cm、深さ17cm、



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1147	IX D 5c 住	埋土	石鉢	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	2.4	1.6	0.3	1.05		II a 2	210

第237図 IX D 5c 住居跡・出土遺物

締まりを欠く褐色土を埋土とする。住居内側に向かって斜位につくられる。周溝は、幅12cm前後、深さ7～8cm、締まりを欠く黄褐色土を埋土とする。床面の一段たかまった部分を囲むように巡る。北側では壁からはなれ、南側では検出されない。

<炉>焼土が1基検出された。西側の一部が攪乱を受けているが焼土が残存し、その範囲を推定できる。焼土は83×100cmの範囲に分布し、厚さは最大7cmである。攪乱を受けない部分では床を構成する層が焼土化したもので地床炉と考えられる。

遺物（第237図、写真図版210）

<土器>床面から網目状撚糸文、横位の綾絡文をそれぞれ有する小破片が各1点出土している。図示は割愛した。

<石器>石鏃1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、床面出土土器片から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

IX D 5 g 住居跡（遺構番号125）

遺構（第238図、写真図版80）

<検出状況>東尾根南斜面中腹に位置する。褐色土層上面で検出した。南側でIX D 5 g - 2住居跡と重複する。埋土断面の観察から本住居の方が新しい。斜面のため南側は流失している。

<形状・規模>南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3.4m、南北は残存値で1.8mである。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、内湾気味に外傾する。壁高は東壁12cm、西壁27cm、北壁35cmである。

<埋土>褐色土のほぼ単層で、壁際に崩落土の層が混入する。

<床・柱穴・施設>東側は褐色土層、西側は基盤層を床とし、やや凹凸がある。斜面に沿って緩やかに傾斜する。柱穴は検出されなかった。

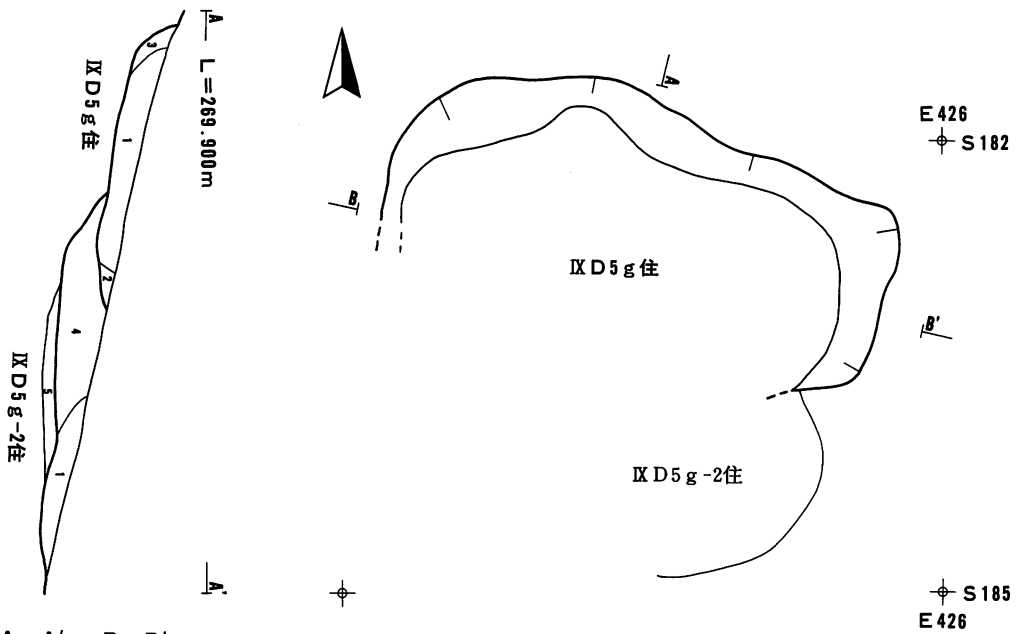
<炉>検出されなかった。

遺物（第239図、写真図版210）

<土器>床面からは1148、埋土からは1149の他は単節斜縄文の小片が出土した。

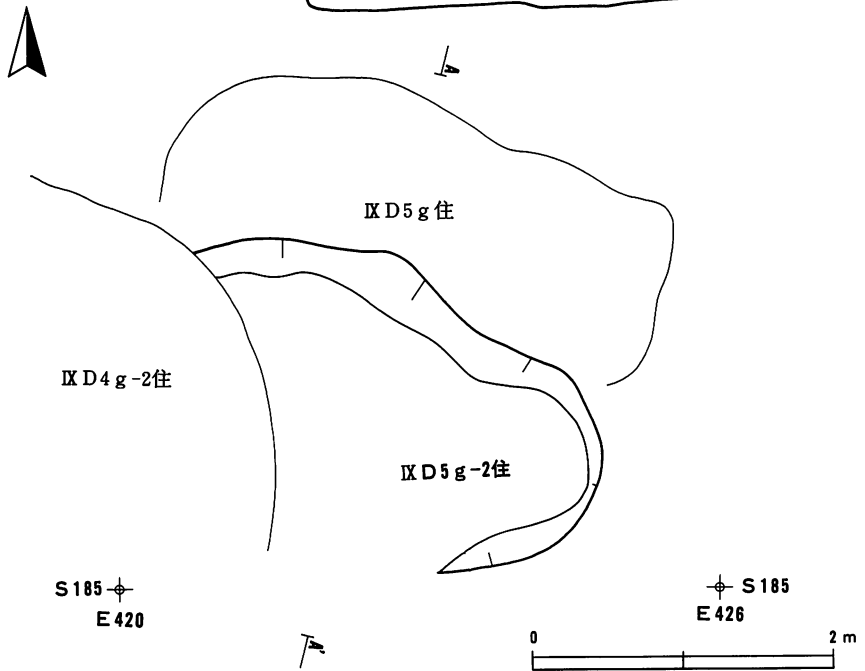
<石器>1150は尖頭部側が肉厚なのに対し基部側は扁平である。1151は鋭い尖頭部を作り出している。表面中央部には素材の一部が瘤状に残る。他にUフレ1点、Rフレ1点、フレーク7点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉と推定される。



A...A' B...B'

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| 1. 10YR% 褐色土 | しまりなし。 |
| 2. 10YR% 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 10YR% 黄褐色土 | しまりなし。 |
| 4. 10YR% 褐色土 | しまりあり。炭化物を含む。 |
| 5. 10YR% 褐色土
(貼床) | 極めて固くしまっている。
黄褐色土をブロック状に含む。 |



第236図 IX D5 g・IX D5 g-2住居跡

IX D 5 g - 2 住居跡 (遺構番号126)

遺構 (第238図、写真図版80)

<検出状況> IX D 5 g 住居跡と同時に検出した。当初同一の住居と考えられ、同時に精査に入ったが、床面レベルが異なり、2棟の重複と分かった。埋土の断面観察から本住居の方が先行する。IX D 4 g - 2 住居跡と西側で重複する。本住居の貼り床がIX D 4 g - 2 住居跡にまで及んでいないことから、本住居の方が古いと考えられる。

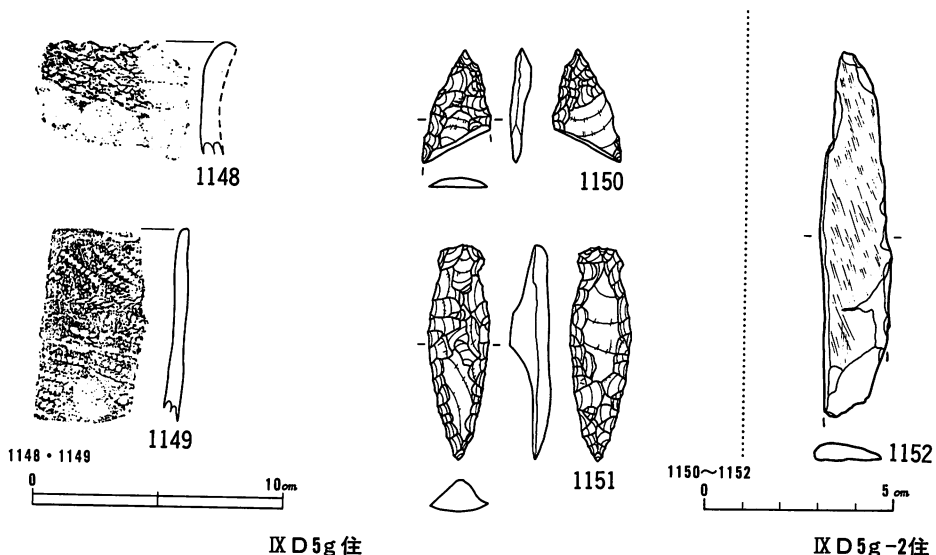
南側は斜面のため流失している。

<形状・規模> 南側は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3m、南北は残存値で2.5mである。

<壁・壁高> 基盤層で、外傾する。壁高は東壁22cm、北壁22cmである。

<埋土> 褐色土であるが、締まりと炭化物の混入の有無により2層に分けられる。

<床・柱穴・施設> 東側がやや高いが、中央部分はほぼ水平で平坦である。南側は約9cmの厚



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1148	IX D 5 g 住	床面	波状口縁。口唇端(縄端による?)刻み。重層する綾結文。						II 6	210
1149	IX D 5 g 住	埋土		R L 横。片結び横位綾結文。					II 6	210

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1150	IX D 5 g 住		石鏃	硬質泥岩	礮石西部	(3.1)	(1.6)	(0.4)	(1.84)	尖頭部が肉厚。基部は扁平で折断又は折損してゐる。		210
1151	IX D 5 g 住		石匙	泥質凝灰岩	礮石西部	5.7	1.6	1.1	6.67	鋭い尖頭部を作り出す。素材のこぶを一部に残す。	I a 1	210
1152	IX D 5 g-2 住	埋土	石刀	粘板岩	北上山地	(14.5)	2.9	0.7	(30)			210

第239図 IX D 5 g・IX D 5 g-2住居跡出土遺物

さで貼り床される。柱穴は検出されなかった。

<炉>検出されなかった。

遺物 (第239図、写真図版210)

<土器>埋土から単節縄文の小破片1点出土したのみであり、図化は省略した。

<石製品>石刀1点、フレーク3点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係から縄文時代前期後葉と推定される。

IX D 5 h 住居跡 (遺構番号127)

遺構 (第234図、写真図版78)

<検出状況>IX D 4 h 住居跡の精査中に、その東側において同住居と異なる壁を検出した。南側は同住居およびIX D 5 i 住居跡によって切られており、北壁と東壁のみ残存する。

<形状・規模>詳細は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、残存値で東西7.7m、南北2mである。

<壁・壁高>暗褐色土層でほぼ直立する。壁高は東壁16cm、北壁36cmである。

<埋土>締まりの程度で4層に細分したが、大局的には褐色土の単層で把握できる。

<床・柱穴・施設>北西部分は基盤層を、東側は基盤層への漸移層である褐色土層を床とする。ほぼ水平で平坦である。柱穴が東壁際に1個検出された。周溝が北壁際に断続的に巡る。幅17~26cm、深さ4~7cmである。

遺物 <土器>埋土から、縄文時代前期に属するRL縦回転に横位の綾絡文を有する小破片が少量出土しているが図化は省略した。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物・重複関係から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

IX D 5 i 住居跡 (遺構番号128)

遺構 (第234図、写真図版78)

<検出状況>IX D 4 h 住居跡の精査で、同住居の周溝の外側に焼土と壁を検出し、住居跡として認定した。埋土断面の観察では、切り合い関係は不明であり、同住居の付属施設の可能性もあるが、床面レベルが同住居より10~15cm高く、焼土を伴うことから重複として把握した。埋土全体は、IX D 4 h 住居跡に傾斜することから、本住居の方が先行すると考えられる。

<炉>検出されなかった。

(新) IX D 4 h 住居跡←IX D 5 i 住居跡←IX D 5 h 住居跡 (旧)

<形状・規模>詳細は不明であるが、長軸が等高線にはほぼ平行する長円形と推定される。規模

は、残存値で東西2.6m、南北2mである。

<壁・壁高>基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、北壁15cmである。

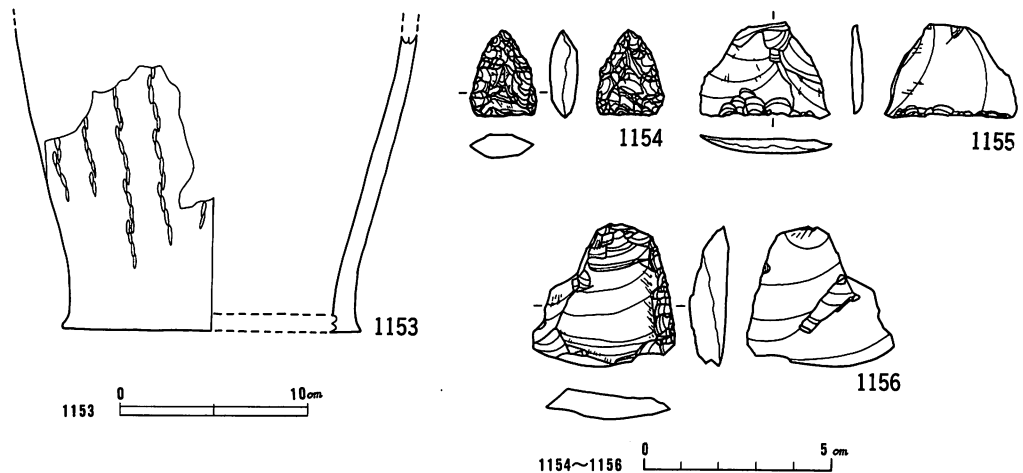
<埋土>斜面上方にあたる東壁側はしまりを欠く褐色土、崩落土を含む明褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。斜面下方では、倒木痕により層序が乱れる。

<床・柱穴・施設>東壁寄りには基盤層を、炉の付近は褐色土層を床とする。北東四半部は一段高く、西側に向かって緩やかに傾斜する。柱穴が北東隅に1個検出された。径10cm、深さ17cm、締まりを欠く褐色土を埋土とする。住居内側に向かって斜位につくられる。周溝は、幅12cm前後、深さ7~8cm、締まりを欠く黄褐色土を埋土とする。床面の一段たかまった部分を囲むように巡る。北側では壁からはなれ、南側では検出されない。

<炉>焼土が1基検出された。西側の一部が攪乱を受けているが焼土が残存し、その範囲を推定できる。焼土は83×100cmの範囲に分布し、厚さは最大7cmである。攪乱を受けない部分では床を構成する層が焼土化したもので地床炉と考えられる。

遺物 (第240図、写真図版210)

<土器>1153はやや太めの原体を結節回転させているが、その押圧は一様でなく粗雑な印象が



番号	地点	層位	文様	出土地点	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真	
1153	IX D 5 i 住				縦位綾絡文。	-	(16.0)	(15.8)			210	
番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1154	IX D 5 i 住	埋土	石鏃	凝灰質硬質泥岩	礫石西部	2.2	1.8	0.6	2.54	全体に肉厚。尖頭部はやや鈍い。	I 2	210
1155	IX D 5 i 住	埋土	不定形石器	泥質凝灰岩	礫石西部	2.5	3.5	0.5	2.71	扁平な台形。	I a 3	210
1156	IX D 5 i 住		不定形石器	珪質泥岩	礫石西部	3.8	3.8	1.1	9.75	素材の傾斜面を利用したの刃部形成。	I a 1	210

第240図 IX D 5 i 住居跡出土遺物

あり装飾性を欠く。

〈石器〉1154は全体に肉厚で、尖頭部はやや鈍い。1155は偏平な台形状の形状で、側面観は鋸歯状となる。1156は素材の縁辺の傾斜を利用して刃部形成をしている。他に、石鏃の欠損品、Uフレ2点、フレーク14点が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると考えられる。

IX D 5 j 住居跡（遺構番号129）

遺構（第241図、写真図版81）

〈検出状況〉東尾根南麓に位置する。褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長円形で、長軸5.3m、短軸3.5mである。

〈壁・壁高〉褐色土層および基盤層で、ほぼ直立する。壁高は東壁65cm、西壁68cm、南壁41cm、北壁82cmである。

〈埋土〉9層に分けられる。黒色土ないし黒褐色土と明褐色土ないし黄褐色土とが、レンズ状に互層をなす。全体に粉炭と小角礫を含み、固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、全体に固く締まっている。東側がやや高く、西側・南側に緩く傾斜し、最大比高22cmである。柱穴がP1～P8の8個検出された。規模・埋土はほぼ等しく・位置はおおむね対応関係を有するが、P5に対応する位置には柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第242図、写真図版211）

〈土器〉床面から160g出土したが、いずれも繊維を混入する小破片である。

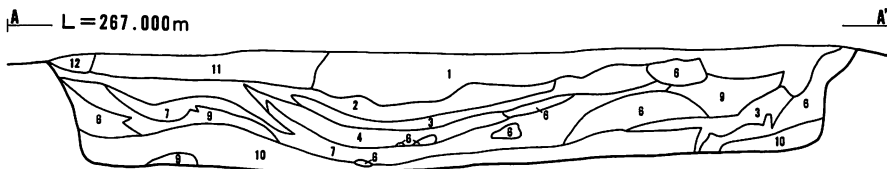
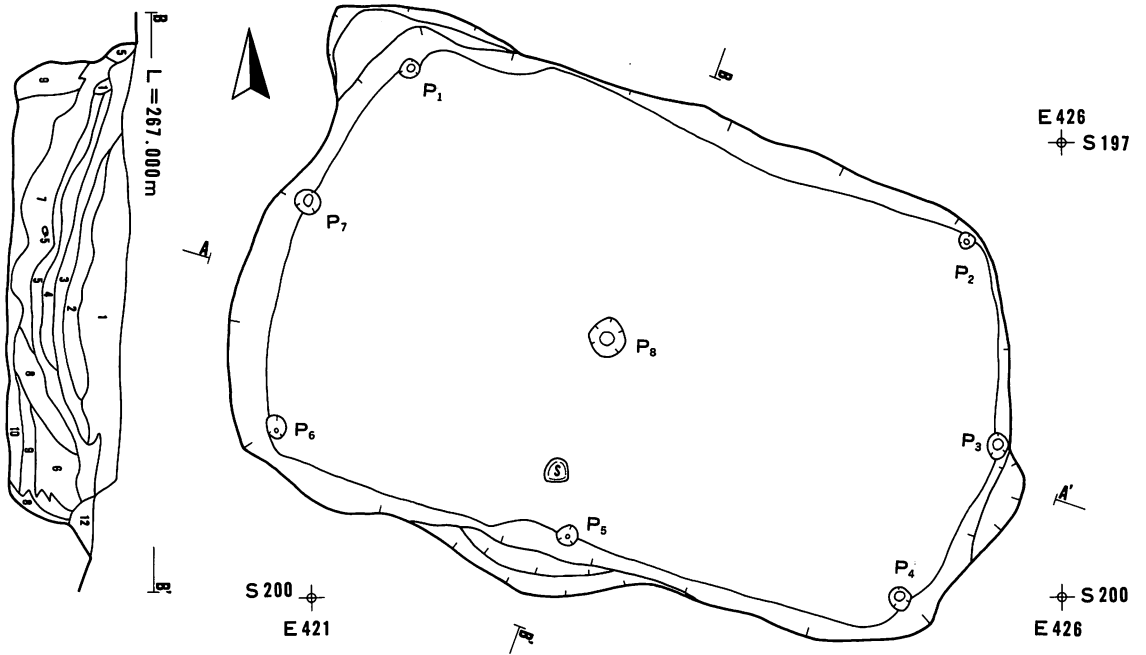
〈石器〉1161・1162の尖頭部は鋭い。1163の剝離は粗いが微小な打滅痕が観察され、楔としても用いられた可能性がある。他にフレーク8点が床面から出土している。

時期 床面出土土器片から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

IX D 6 f 住居跡（遺構番号130）

遺構（第243図、写真図版81・82）

〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。褐色土層上面で粉炭と焼土を検出し、その斜面上方に基盤層を掘りこむ壁を確認したことから、住居跡として認定した。当初は単独遺構という想定のもとに調査したが、炉の位置・壁の平面形などから西半部と東半部の重複遺構と考えられる。西半部をIX D 6 f 住居跡、東半部をIX D 6 f - 2 住居跡とする。東端に一段高い部分があり、他の遺構との重複の可能性も考えたが、埋土断面観察からは切り合い関係を確認すること

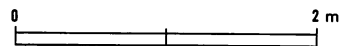


A...A' B...B'

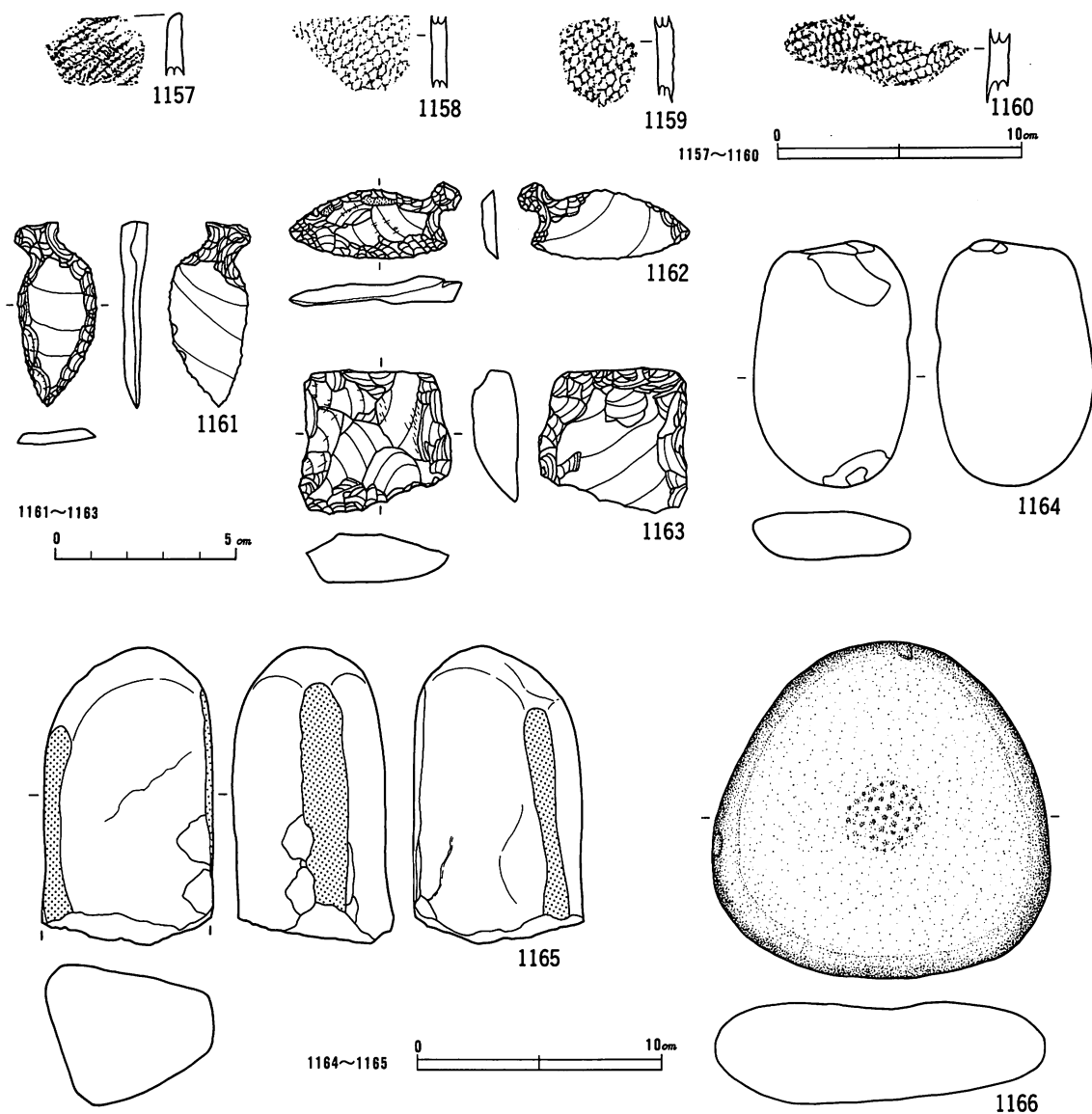
- | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 10Y R ^{1/2} % 黒色土 | しまりなし。小角礫、草木根を含む。 |
| 2. 10Y R% 黒褐色土 | ややしまりあり。炭化物、小角礫を少量含む。 |
| 3. 10Y R% 黒褐色土 | ややしまりあり。炭化物、小角礫を少量、褐色土をブロック状に含む。 |
| 4. 7.5Y R% 黒褐色土 | しまりあり。炭化物、小角礫を少量、褐色土を粒状に含む。 |
| 5. 7.5Y R% 黒褐色土 | しまりなし。黄褐色土をブロック状に含む。 |
| 6. 10Y R% 黄褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。 |
| 7. 7.5Y R% 黒色土 | しまりあり。炭化物、小角礫を少量含む。褐色土をブロック状に含む。 |
| 8. 10Y R% 明褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。 |
| 9. 10Y R% 褐色土 | しまりあり。炭化物、小角礫を少量含む。暗褐色土をブロック状に含む。 |
| 10. 10Y R% 黒褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。褐色土をブロック状に含む。 |
| 11. 10Y R% 黒褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。 |
| 12. 7.5Y R% 極明褐色土 | しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。 |

単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
開口部径	11×11	11×14	13×15	13×14	13×13	13×13	14×16	20×23
深 さ	19	24	23	17	34	34	26	43
埋 土	10Y R% にふい 黄褐色	同左	同左	同左	同左	同左	同左	10Y R% 褐色 粘性あり しまりなし



第241図 IX D5 j 住居跡



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1157	IX D 5 j 住	床面		R L縦。				繊維混入。	II 1 b	211
1158	IX D 5 j 住	床面		組縄縄文。				繊維混入。	II 1 a	211
1159	IX D 5 j 住	床面		組縄縄文。				繊維混入。	II 1 a	211
1160	IX D 5 j 住	床面		組縄縄文。				繊維混入。	II 1 a	211

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1161	IX D 5 j 住	埋土	石匙	珉質泥岩	半石西部	5.1	2.2	0.8	6.00		I a 2	211
1162	IX D 5 j 住	埋土	石匙	珉質泥岩	半石西部	1.9	4.7	0.8	4.41	鋭い尖頭部をつくり出す、つまみ方向からの打撃	II a 1	211
1163	IX D 5 j 住	埋土	不定形石器	粘板岩	北上山地	4.0	4.2	1.3	26.07	ピエヌエスキューユとしても用いられたような打痕あり。	IV	211
1164	IX D 5 j 住	埋土	石錘	凝灰岩	北上山地	10.1	6.4	2.0	235		I	211
1165	IX D 5 j 住	埋土	敲磨器類 A 群	両輝石安山岩	奥羽山地	(12.1)	7.0	5.7	(780)	磨面 3 面。欠損品。	I a	211
1166	IX D 5 j 住	床面	石皿・台石類	硬砂岩	北上山地	13.9	13.9	4.2	1290	中央部に敲打痕が集中する。窪みは浅い。		211

第242図 IX D 5 j 住居跡出土遺物

はできなかつたことから、テラス状の施設として把握した。

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西は推定値で4.2m、南北は残存値で3.1mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、西壁22cm、北壁83cmである。

〈埋土〉暗褐色～褐色土を主体とする。ⅨD 6 f - 2 住居跡との重複部分では黄褐色土が混入し、層理はかならずしも明瞭ではない。南北方向の土層は自然堆積の様相を示している。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北壁寄りには基盤層を、南側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。中央部がやや低く、西壁寄りと中央部の比高20cmである。柱穴は17個検出されたが、本住居の推定範囲内にはP1～P6、P11の7個が入る。対応関係は不明であるが、壁際に位置するP1～P4、P6はほぼ同規模であり、同じ性格を有するものと考えられる。

〈炉〉床面において地床炉が5基検出された。本住居の推定範囲内にあるものは1号炉～3号炉・5号炉であるが、その全てが同時に用いられたか否かは位置関係から若干疑問がある。5号炉の上には粉炭が5cm厚さで堆積している。

遺物（第244図、写真図版211）

当初は単独遺構と想定したことから、ⅨD 6 f - 2 住居跡の遺物も本住居のものとして取り上げ、処理してしまった。

〈土器〉埋土から1167と1168の2点のみの出土である。

〈石器〉1170は基部縁辺が傾斜し、対称性を欠く。1171は側面観がやや鋸歯状を呈する。他にUフレ2点、フレーク17点が埋土から出土している。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。

ⅨD 6 f - 2 住居跡（遺構番号131）

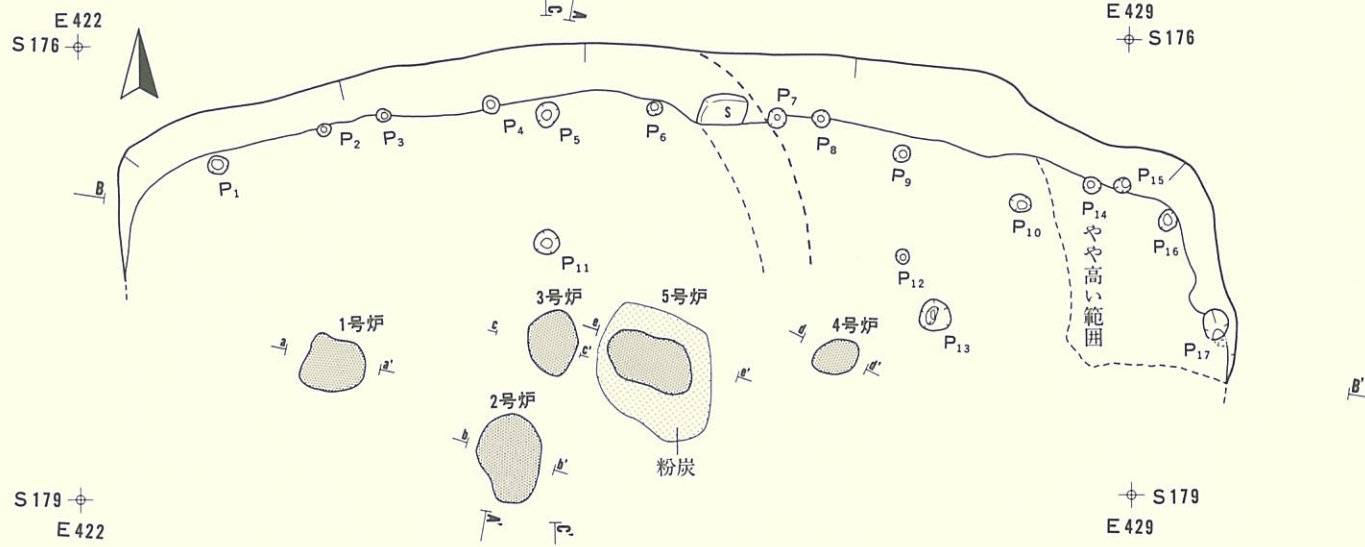
遺構（第243図、写真図版81・82）

〈検出状況〉ⅨD 6 f 住居跡と重複し、その東側に位置する。東端に一段高い部分があり、他の遺構との重複の可能性も考えたが、埋土断面観察からは切り合い関係を確認することはできなかつたことから、テラス状の施設として把握した。

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は残存値で南北2.5m、東西は不明である。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁27cm、北

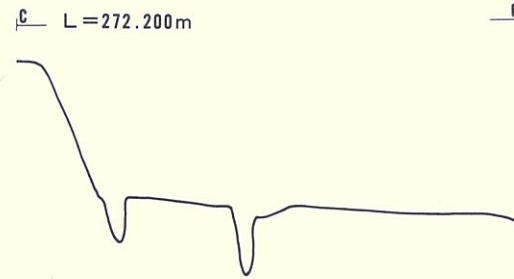
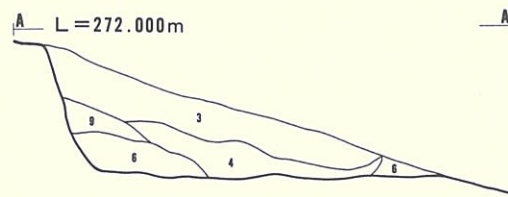
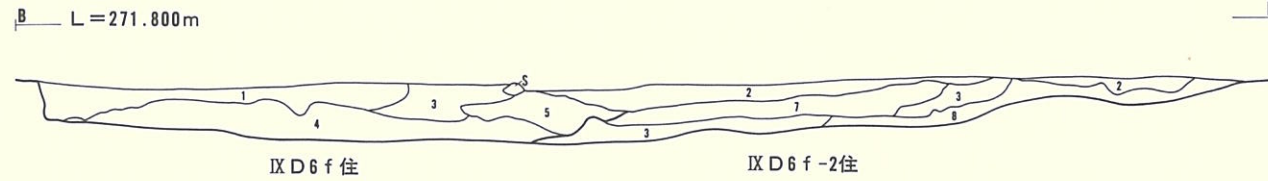


単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
開口部径	10×13	7×9	9×10	9×10	17×20	8×9	12×12	11×11	10×11
深さ	17	14	16	23	35	11	26	18	18
埋土	明褐色	10Y R ₆ % 明黄褐色	10Y R ₆ % 明黄褐色	10Y R ₆ % 黄褐色	10Y R ₆ % 明黄褐色	10Y R ₆ % 黄褐色	10Y R ₆ % 黄褐色	10Y R ₆ % 黄褐色	10Y R ₆ % にふい 黄褐色

P 番号	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
開口部径	14×14	16×17	20×20	20×25	10×11	11×11	11×12	17×20
深さ	19	45	32	46	12	16	17	19
埋土	10Y R ₆ % 褐色	10Y R ₆ % 黄褐色	10Y R ₆ % 黄褐色	7.5Y R ₆ % 明褐色	10Y R ₆ % 褐色	10Y R ₆ % 褐色	7.5Y R ₆ % 褐色	7.5Y R ₆ % にふい 褐色

炉番号	1号炉	2号炉	3号炉	4号炉	5号炉
規模	40×47	45×63	33×43	23×35	30×70
厚さ	4	5	5	3	5



- A...A' B...B'
- 7.5Y R₆% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
 - 7.5Y R₆% 黄褐色土 しまりなし。
 - 10Y R₆% 黄褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
 - 10Y R₆% 褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
 - 10Y R₆% 黄褐色土 しまりなし。
 - 7.5Y R₆% 褐色土 しまりなし。
 - 10Y R₆% 暗褐色土 しまりなし。
 - 7.5Y R₆% 褐色土 しまりあり。
 - 10Y R₆% 褐色土 しまりあり。小角礫を含む。

a L = 271.300m a'



- 5Y R₆% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
- 7.5Y R₆% 褐色土 しまりなし。

b L = 271.200m b'



- 5Y R₆% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

c L = 271.100m c'



- 5Y R₆% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。

d L = 271.200m d'



- 5Y R₆% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
- 10Y R₆% 黄褐色土 しまりあり。粘性なし。

e L = 271.100m e'



- 5Y R₆% 赤褐色土 焼土。固くしまっている。
- 10Y R₆% 褐色土 しまりなし。

第243図 IX D6 f・IX D6 f-2住居跡

壁83cmである。

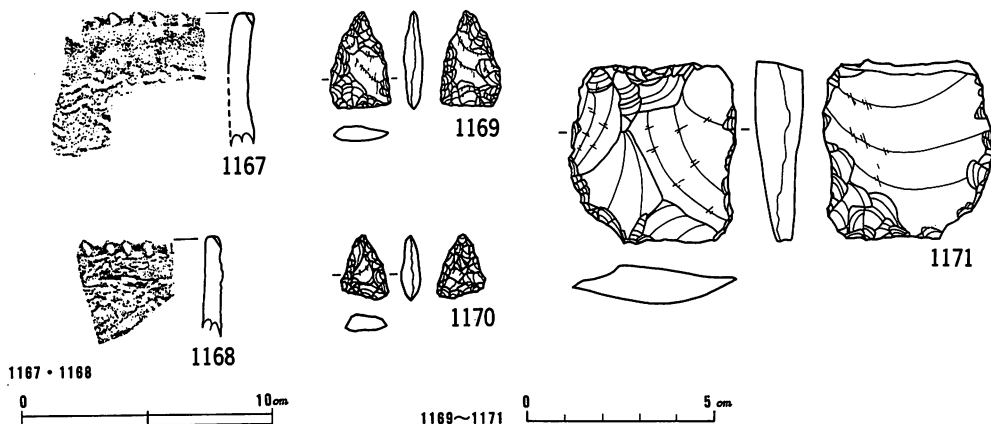
〈埋土〉褐色土～黄褐色土を主体とし、IXD6f住居跡との重複部分では層理はかならずしも明瞭ではない。南北方向の土層は自然堆積の様相を示している。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北壁寄りには基盤層を、南側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。柱穴は、IXD6f住居跡のものを含めて17個検出された。その帰属関係は明白ではないが、本住居の推定範囲内にあるP7～P10はほぼ同規模であり、同じ性格を有するものと考えられる。

〈炉〉重複するIXD6f住居跡のものも含め地床炉が5基検出された。本住居の推定範囲内にあるものは4号炉であるが、3号炉または5号炉とセットになる可能性も否定できない。

遺物 本住居の遺物も、IXD6f住居跡のものとして処理した可能性がある。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係・出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1167	IXD6f住	埋土	口唇端篋状工具による右方向からの刻み。重層する横位綾絡文。						II3a	211
1168	IXD6f住	埋土	口唇端棒状工具による刻み。横位綾絡文。	L R横。					II3a	211

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1169	IXD6f住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	2.5	1.6	0.3	1.36		I 2	211
1170	IXD6f住	埋土	石鏃	凝灰岩	磐石西部	1.7	1.3	0.4	0.73	基部縁辺が傾斜し、対称性に欠ける。小型。		211
1171	IXD6f住	埋土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	4.8	4.5	1.3	23.58	側面観が鋸歯状。	VII	211

第244図 IXD6f・IXD6f-2住居跡出土遺物

IX D 7 j 住居跡 (遺構番号132)

遺構 (第245図、写真図版82)

〈検出状況〉東尾根南麓に位置する。基盤層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3.6m、南北は残存値で1.8mである。

〈壁・壁高〉基盤層で緩やかに立ち上がる。壁高は東壁12cm、西壁12cm、北壁28cmである。

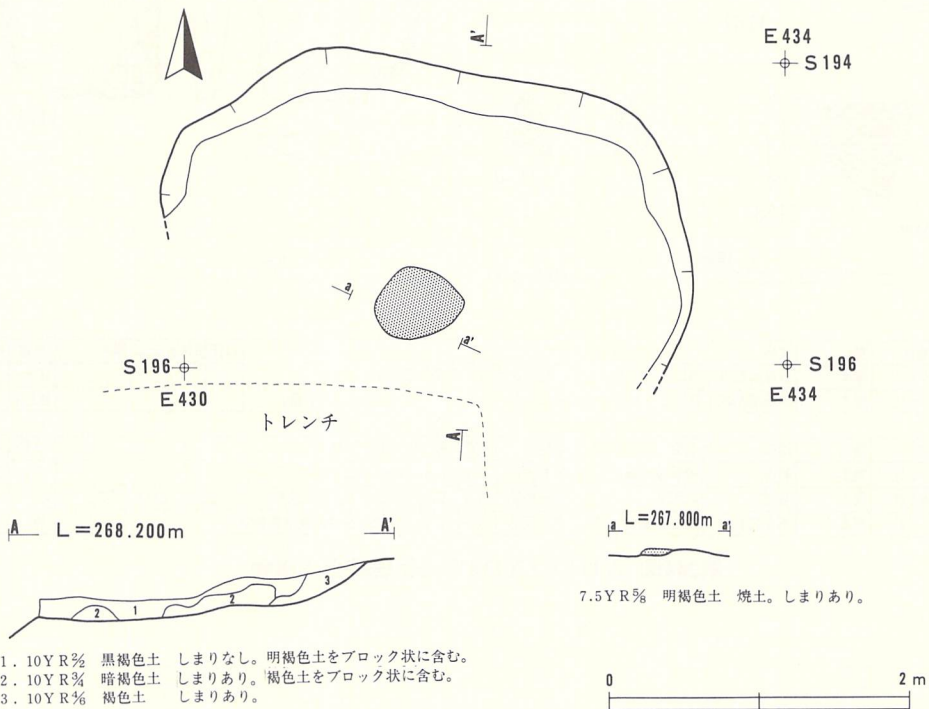
〈埋土〉黒褐色土と崩落土およびその混土で構成される。

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層を床とする。西側はやや凹凸がある。全体としては斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高15cmである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が1基検出された。47×60cmの楕円形状に分布し、厚さは最大4cmである。

遺物 フレーク4点が埋土から出土したのみである。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・住居形態から縄文時代前期と考えられる。



第245図 IX D 7 j 住居跡

ⅨD 8 f 住居跡 (遺構番号133)

遺構 (第246図、写真図版83)

〈検出状況〉褐色土層上面で、暗褐色土の落ち込みとして検出した。南側でⅨD 8 g 住居跡、ⅨD 8 f 土坑と重複する。ⅨD 8 g 住居跡との新旧関係は、精査時点の観察では、本住居の方が古いと考えられた。また、ⅨD 8 f 土坑は本住居の床面で検出されたことから、本住居の方が新しいと考えられる。

〈形状・規模〉南側に不明な部分があるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形である。規模は、東西3.6m、南北2.3mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁28cm、西壁28cm、北壁48cmである。

〈埋土〉暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。全体に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉概ね基盤層を床とし、全面固く、凹凸なくほぼ平坦である。斜面に沿ってやや傾斜し、最大比高17cmである。柱穴状土坑が2個検出された。このうちP1としたものは断面形状が摺鉢状であり、柱穴にならない可能性がある。東壁寄りに土坑が位置する。床面で検出されたことから、本住居の施設として処理してきた。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第246図、写真図版211)

〈土器〉1172は床面において、土坑上で検出された。4つの頂部を有する小波状口縁である。口唇部には指頭状の圧痕が施される。図示したほかには組縄縄文、横位の綾絡文を有する小土器片が埋土から出土したのみである。

〈石器〉石鏃1点とUフレ1点が出土した。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期に属すると考えられる。1172の土器の時期の位置づけが不明であり、よって遺構の時期も詳細は明らかにできない。

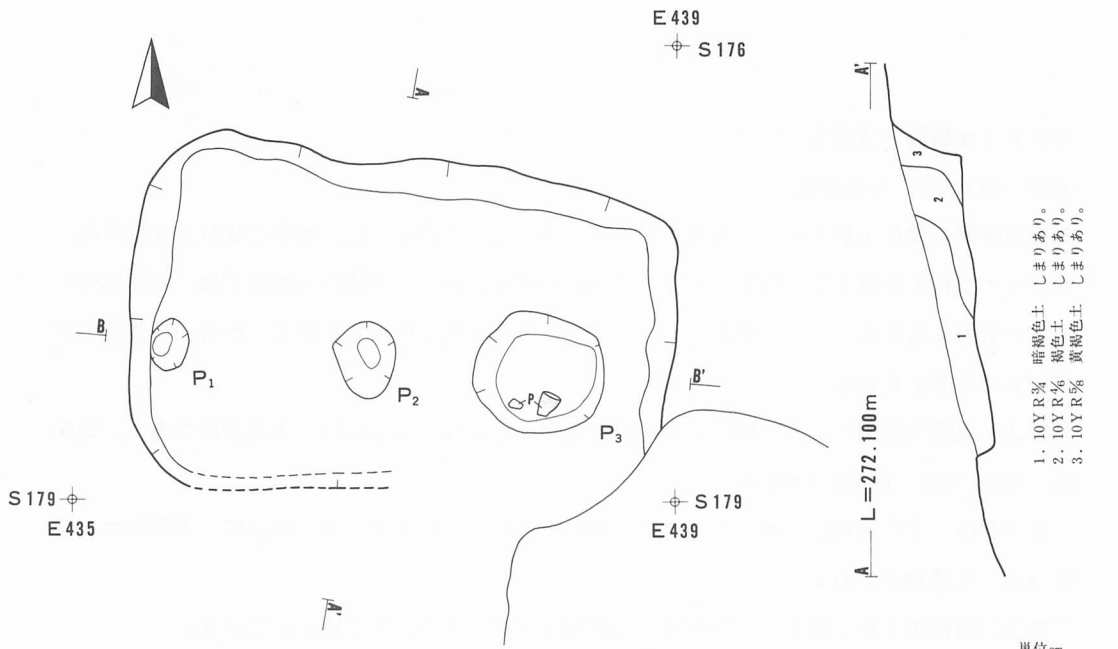
ⅨD 8 f - 2 住居跡 (遺構番号132)

遺構 (第247図、写真図版84)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面でにぶい褐色土の落ち込みとして検出した。壁の立上がりは緩やかではあるが、平坦な部分を床面として把握し、住居跡として認定した。南側は斜面のため流失している。

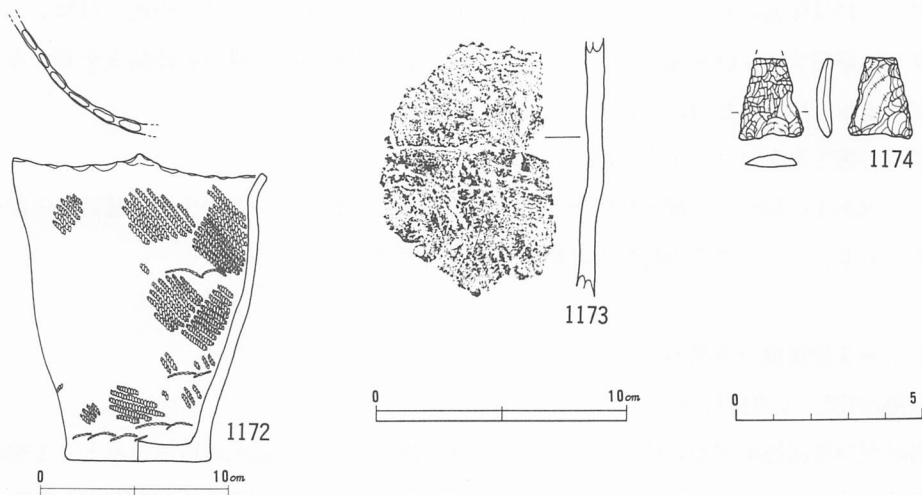
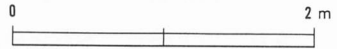
〈形状・規模〉残存状況が悪く不明である。規模は、東西3.1m、南北は残存値で1.7mである。

〈壁・壁高〉西側は基盤層を、東側は褐色土層を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁



P 番号	P ₁	P ₂	P ₃
開口部径	27×35	46×50	80×88
深 々	29	28	24

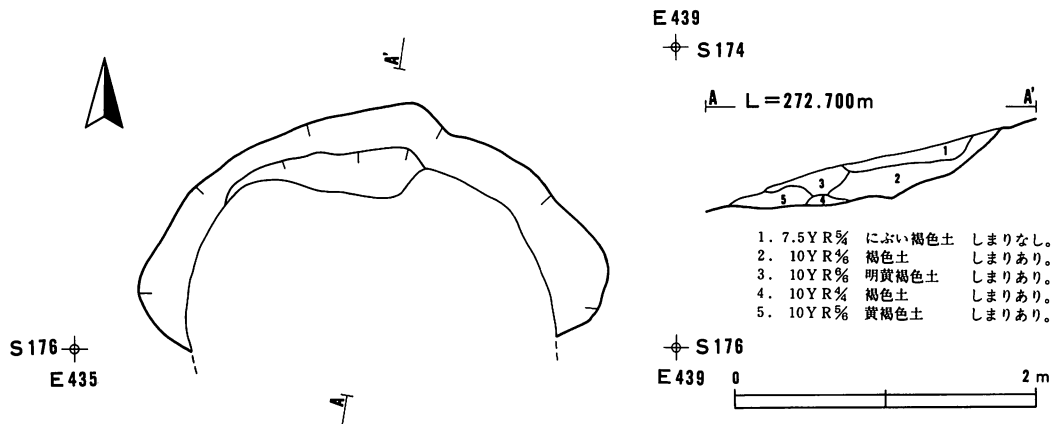
- 単位cm
1. 10Y R% 暗褐色土 しまりあり。
 2. 10Y R% 褐色土 炭化物を微量含む。
 3. 10Y R% 黄褐色土 しまりあり。
 4. 10Y R% 黒褐色土 ややしまりあり。褐色土をブロック状に含む。
 5. 10Y R% 濃い黄褐色土 しまりあり。
 6. 10Y R% 黒褐色土 しまりなし。炭化物を微量含む。
 7. 10Y R% 暗褐色土 しまりなし。炭化物、小角礫を少量含む。
- 7'は、7層よりややしまりあり。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1172	IX D 8 f 住	床面	4つの頂部を有する緩い波状口縁。口唇部指頭状圧痕。	R L 横。	14.3	7.8	15.7		II 9	211
1173	IX D 8 f 住	床面		R L 0 段条。繩端結節。						211

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1174	IX D 8 f 住	P 3 埋土	石鏃	粘板岩	北上山地	(2.9)	1.7	0.3	(0.93)		II a 2	211

第246図 IX D 8 f 住居跡・出土遺物



第247図 IX D 8 f -2住居跡

5 cm、西壁25cm、北壁44cmである。

〈床・柱穴・施設〉西側は基盤層を、東側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 出土していない。

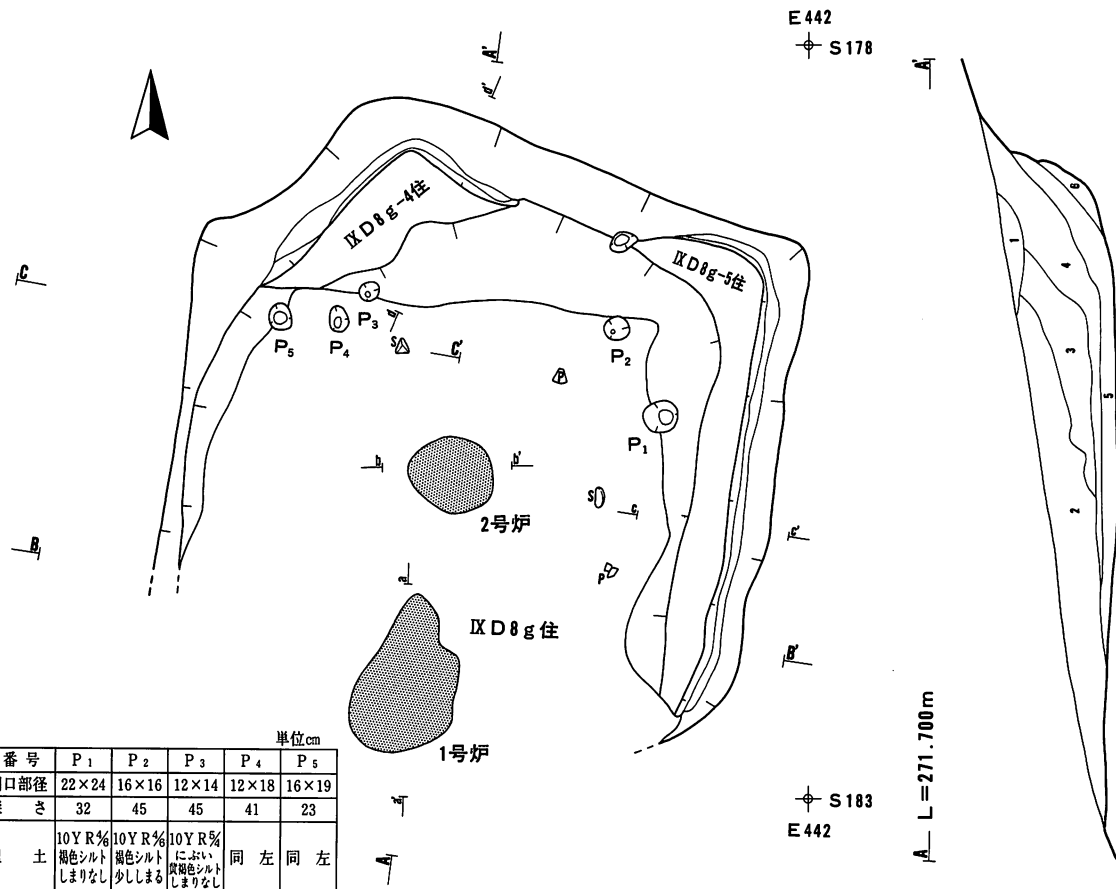
時期 特定する資料を欠き不明であるが、形態から縄文時代に属すると思われる。

IX D 8 g 住居跡 (遺構番号135)

遺構 (第248図、写真図版84・85)

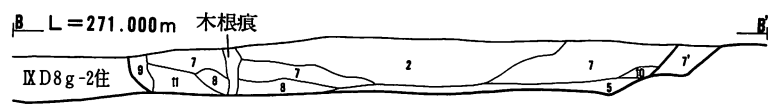
〈検出状況〉東尾根南斜面中腹に位置する。褐色土層上面で黒色土の落ち込みとして検出した。当初は単独の遺構を想定していたが、床面精査の段階で、床面レベル、壁・周溝の方向等から3回の建替えと考えられた。埋土断面観察から中央部が最も新しい。これをIX D 8 g 住居跡とする。北西隅のやや高い部分をIX D 8 g - 4 住居跡、東壁際の一段高い部分を床面とするものをIX D 8 g - 5 住居跡とする。IX D 8 g - 4 住居跡とIX D 8 g - 5 住居跡の新旧関係は不明である。

南西隅でIX D 8 g - 2 住居跡、西側でIX D 8 g - 3 住居跡と重複する。この2住居は本住居の床より下から検出されたこと、および本住居の埋土断面観察から本住居の方が新しいと考えられる。

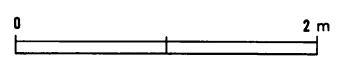
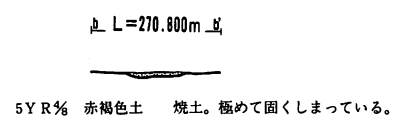
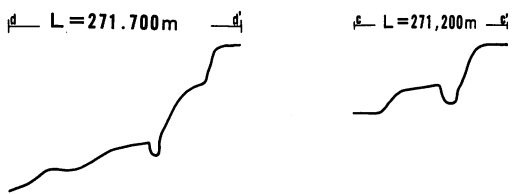
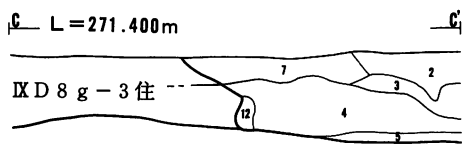


単位cm

P 番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
開口部径	22×24	16×16	12×14	12×18	16×19
深さ	32	45	45	41	23
埋土	10YR% 褐色シルト しまりなし	10YR% 褐色シルト 少ししまる	10YR% にぶい 黄褐色シルト しまりなし	同左	同左



- | | | | | | |
|----------------|---------------|---------------|-----|-------------|---------------------|
| A...A' | B...B' | C...C' | 7 | 7.5YR% 褐色土 | 固さ不均一。
7'はしまりあり。 |
| 1. 10YR% 褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | | 8. | 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。 |
| 2. 10YR% 黒色土 | しまりなし。小角礫を含む。 | | 9. | 10YR% 黄褐色土 | しまりあり。 |
| 3. 10YR% 暗褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | | 10. | 10YR% 暗褐色土 | しまりあり。 |
| 4. 10YR% 明黄褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | | 11. | 7.5YR% 褐色土 | しまりあり。 |
| 5. 10YR% 暗褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | | 12. | 7.5YR% 暗褐色土 | しまりあり。 |
| 6. 10YR% 黄褐色土 | しまりあり。小角礫を含む。 | | | | |



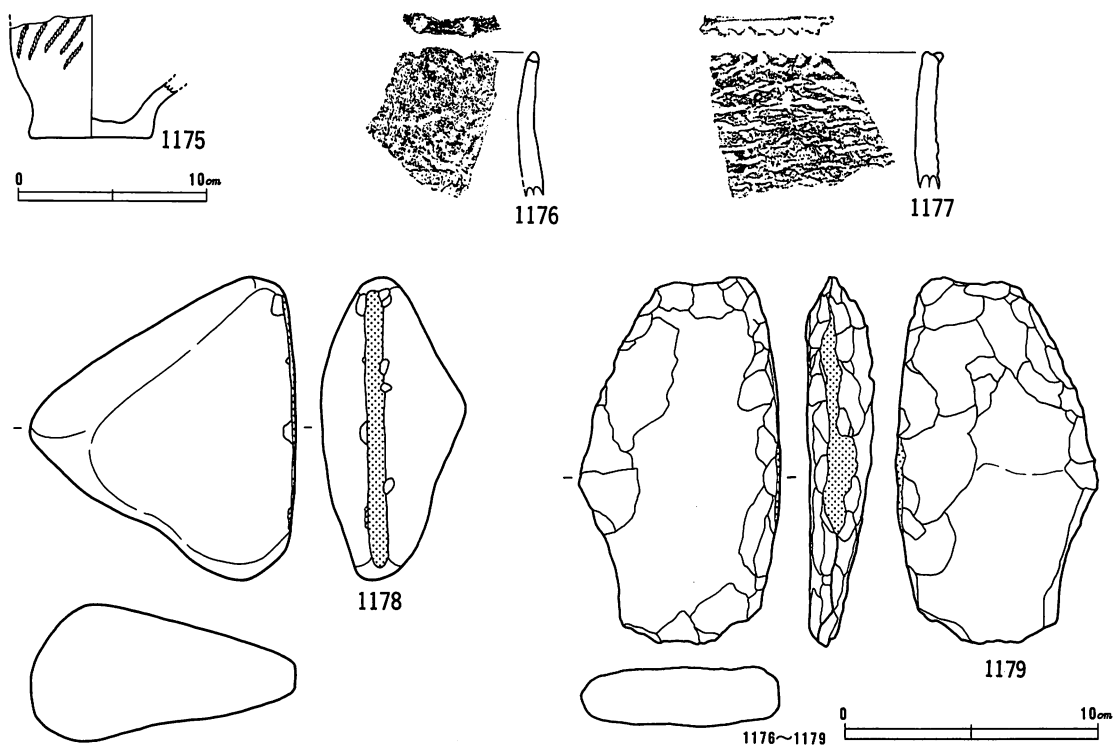
第248図 IXD8g・IXD8g-4・IXD8g-5住居跡

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であり、北側もプランを確定することは困難であるが、長軸が等高線にほぼ直交する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西3.4 m、南北は残存値で4.5 mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、東壁40cm、西壁31cm、北壁96cmである。

〈埋土〉上位から黒色土、暗褐色土、明黄褐色土、暗褐色土の4層が主体をなし、自然堆積の様相を示す。すこぶる固く締まっている。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1175	IX D 8 g 住	床面		L R 横。	-	6.6	(8.9)			212
1176	IX D 8 g 住	床面	口唇部圧痕が施文され小波状口縁となる。	横位綾絡文(破片の下端)。					II 6	212
1177	IX D 8 g 住	Q 3 埋土	口唇部沈線(凹線)施文後外側鋭状工具による右側からの刻み、重層する綾絡文。						II 3	212

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1178	IX D 8 g 住	埋土下位	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	12.0	10.6	5.4	690		I a 1	212
1179	IX D 8 g 住	床面	敲磨器類 A 群	両輝岩石安山岩	奥羽山地	14.5	8.1	2.3	380		III b 3	212

第249図 IX D 8 g 住居跡出土遺物

〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層を、南側は褐色土層を床とし、全体に固く締まっている。柱穴は5個検出された。規模と位置からP2とP3の対応関係が考えられるが、他は不明である。

〈炉〉南北方向中軸線上に地床炉が2基検出された。いずれも断面形がレンズ状である。

遺物 (第249図、写真図版212)

〈土器〉1175は東壁際の床上5cmの高さで出土した。底部から外反気味に大きく湾曲する器形である。地文の原体は太めである。図示した他には、埋土から組縄縄文、網目状撚糸文の小片が出土している。

〈石器〉図示した他に北西四半部の埋土からUフレが2点、フレークが8点出土している。

時期 床面出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

IXD 8 g - 2 住居跡 (遺構番号136)

遺構 (第250図、写真図版86)

〈検出状況〉IXD 8 g 住居跡の西南隅の床面下から検出された。本住居の方が古い。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形と推定される。規模は、東西は推定値で3.7m、南北は残存値で2.2mである。

〈壁・壁高〉基盤層で、内湾気味に外傾する。壁高は東壁22cm、北壁35cmである。

〈埋土〉5層で構成されるが、黒褐色土が主体をなす。第4層はIXD 8 g 焼土である。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く締まっており、小さな凹凸がある。斜面に沿ってやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。44×54cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大6cmである。

遺物 (第250図、写真図版213)

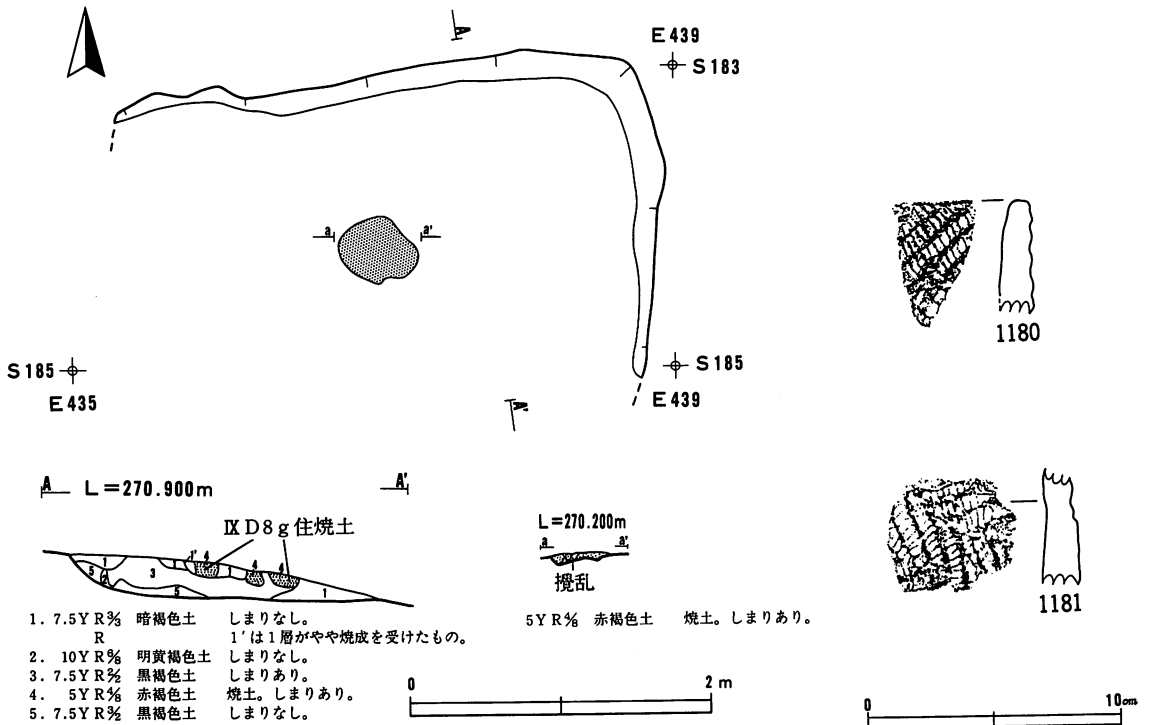
〈土器〉埋土からのみの出土である。図示した2点は、同一個体と考えられる。0段多条のLRとRLにより羽状縄文をつくり出している。

時期 出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉に属すると推定される。

IXD 8 g - 3 住居跡 (遺構番号137)

遺構 (第251図、写真図版86)

〈検出状況〉北側でIXD 8 g 土坑、東側でIXD 8 g 住居跡と重複する。本住居とIXD 8 g 土坑の埋土断面観察から、同土坑は本住居の埋土堆積後に構築されたと考えられる。またIXD 8 g 住居跡との関係では、同住居の東西埋土断面観察により、本住居の方が先行すると考えられる。



1. 7.5 Y R% 暗褐色土 しまりなし。
R 1'は1層がやや焼成を受けたもの。
2. 10 Y R% 明黄褐色土 しまりなし。
3. 7.5 Y R% 黒褐色土 しまりあり。
4. 5 Y R% 赤褐色土 焼土。しまりあり。
5. 7.5 Y R% 黒褐色土 しまりなし。

5 Y R% 赤褐色土 焼土。しまりあり。

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1180	IX D 8 g-2住	埋土下位		LR×RL第1種結束羽状縄文。				LR、RLとも0段多条。纖維混入。	II c 4	212
1181	IX D 8 g-2住	埋土下位		LR×RL第1種結束羽状縄文。				LR、RLとも0段多条。纖維混入	II c 4	212

第250図 IX D 8 g-2住居跡・出土遺物

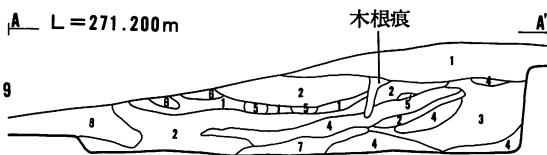
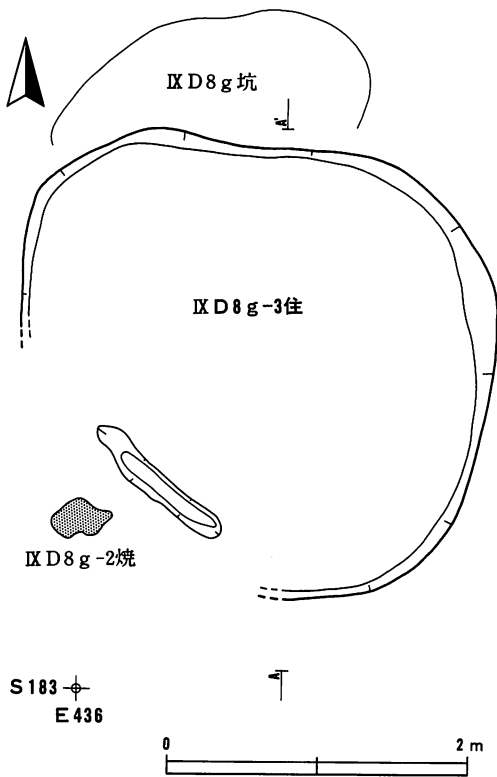
南側は斜面のため流失している。

<形状・規模>南側に不明な部分があるが、径3m程度の不整な円形と考えられる。

<壁・壁高>基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、東壁8cm、西壁11cm、北壁37cmである。

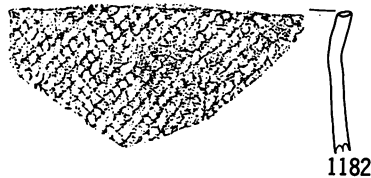
<埋土>褐色土と黒色～黒褐色土が互層をなし、自然堆積の様相を示す。

<床・柱穴・施設>基盤層を床とし、全面固い。小さな凹凸がある。柱穴は検出されなかった。床面南西側に部分的な溝が検出された。規模は幅7～9cm、長さ108cm、深さ8cmである。本住居の推定プランと一致しないこと、床面の他の位置に溝が検出されないことから、周溝とするには疑問がある。また、溝に近接した位置に焼土が検出された。本住居に伴う可能性がないとはいえないが、本住居の推定範囲外と考えられ、IX D 8 g-2焼土として別に報告す

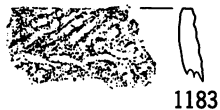


1. 10Y R 6/8 黒褐色土 ややしまりあり。小角礫を多量に含む。
2. 10Y R 6/8 褐色土 しまりあり。小角礫を多量に含む。
3. 10Y R 6/8 黒褐色土 しまりあり。小角礫、黒色土を含む。
4. 10Y R 6/8 黒色土 しまりあり。炭化材を含む。腐植に富む。
5. 10Y R 6/8 褐色土 しまりあり。
6. 10Y R 6/8 褐色土 小角礫を含む。
7. 10Y R 6/8 黒褐色土 しまりあり。褐色土を含む。小角礫を含む。
8. 10Y R 6/8 褐色土 黒褐色土を含む。小角礫を含む。

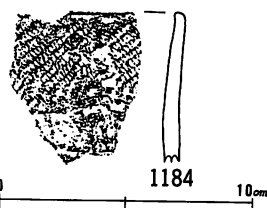
IX D 8 g-2 焼



1182



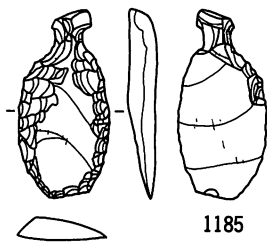
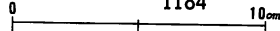
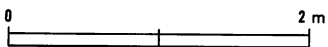
1183



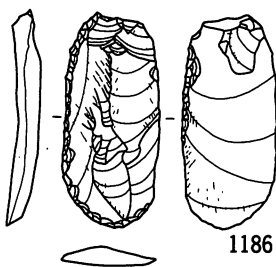
1184

S 183
E 436

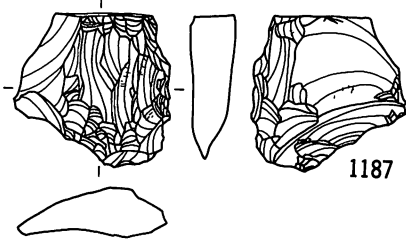
S 183
E 439



1185



1186



1187



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1182	IX D 8 g-3 住	埋土	口唇部指頭状圧痕。					繊維混入。	II b	212
1183	IX D 8 g-3 住	Q 4 埋土		LR 横。横位綫絡文。					II b	212
1184	IX D 8 g-3 住	埋土		LR 横。					II b	212

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1185	IX D 8 g-3 住	埋土	石匙	珪質泥岩	磐石西部	5.0	2.4	0.7	7.54	1 刃は急角度、1 刃は鋭い角度。	I b 3	212
1186	IX D 8 g-3 住	埋土	不定形石器	硬質泥岩	磐石西部	5.7	2.6	0.8	9.87	右辺には使用痕と思われる微小刺離もある。	I b 4	212
1187	IX D 8 g-3 住	埋土	石核	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	4.1	4.2	1.3	24.28			212

第251図 IX D 8 g-3 住居跡・出土遺物

る。

遺物 (第251図、写真図版212)

<土器>埋土からのみの出土である。図示した他には、埋土から組縄縄文、織維を含む斜め縄文の小さい破片が出土している。

<石器>1187は表面に縦方向の打撃による剥離が数回観察されることから石核とした。

時期 出土遺物・重複関係から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると推定される。

IX D 8 g - 4 住居跡 (遺構番号137) ・ IX D 8 g - 5 住居跡 (遺構番号138)

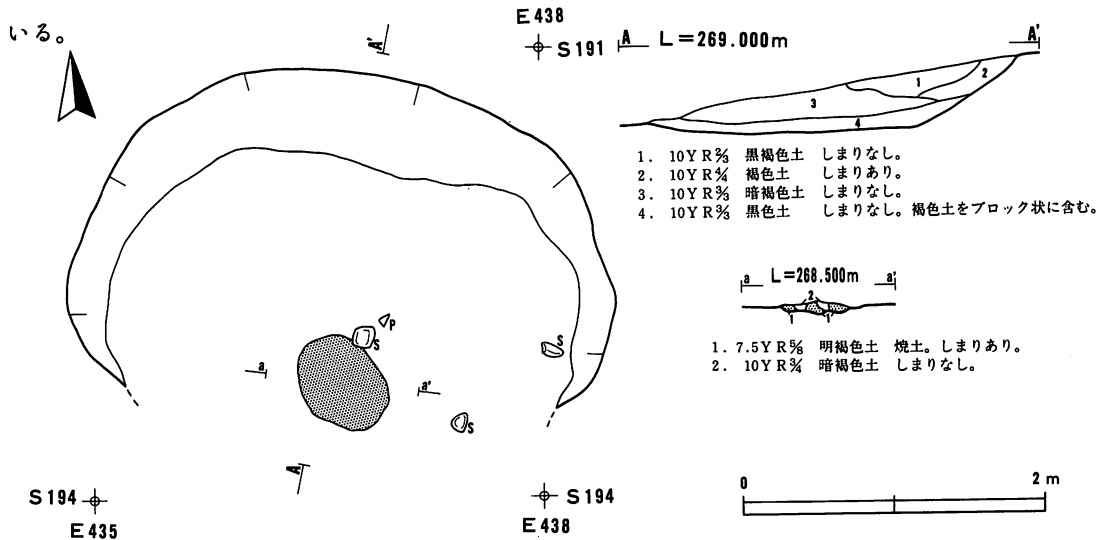
遺構 (第248図、写真図版85)

IX D 8 g 住居跡の床面で検出した。同住居の北西隅床面の一段高い平坦部とそれに付随する周溝は、同住居に先行する住居跡の残欠部と考えられる。これをIX D 8 g - 4 住居跡とする。また、東側床面の一段高い平坦部とそれらに付随する周溝も、同様にIX D 8 g 住居跡に先行する住居跡の残欠部と考えられる。これをIX D 8 g - 5 住居跡とする。これらの住居の床面はIX D 8 g 住居跡の床面より約20~30cmほど高い。周溝は両者とも幅約13~18cm、深さ約10cmで同規模である。IX D 8 g - 4 住居跡とIX D 8 g - 5 住居跡は単一の住居である可能性もあるが、壁の軸方向が異なることから別個のものとして取り上げた。

IX D 8 i 住居跡 (遺構番号140)

遺構 (第252図、写真図版87)

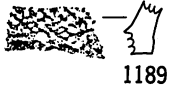
<検出状況>褐色土層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。南側は斜面のため流失している。



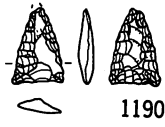
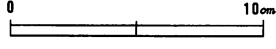
第252図 IX D 8 i 住居跡



1188



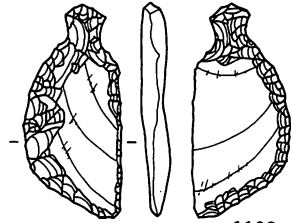
1189



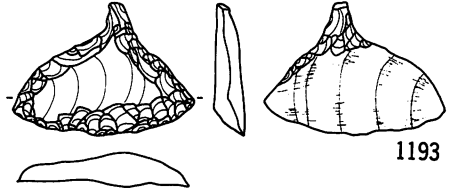
1190



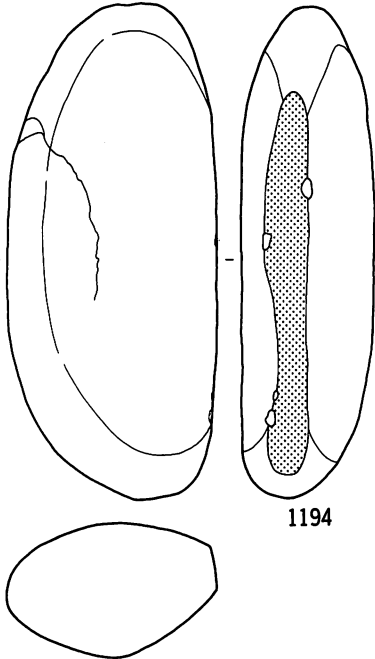
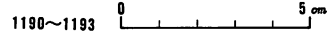
1191



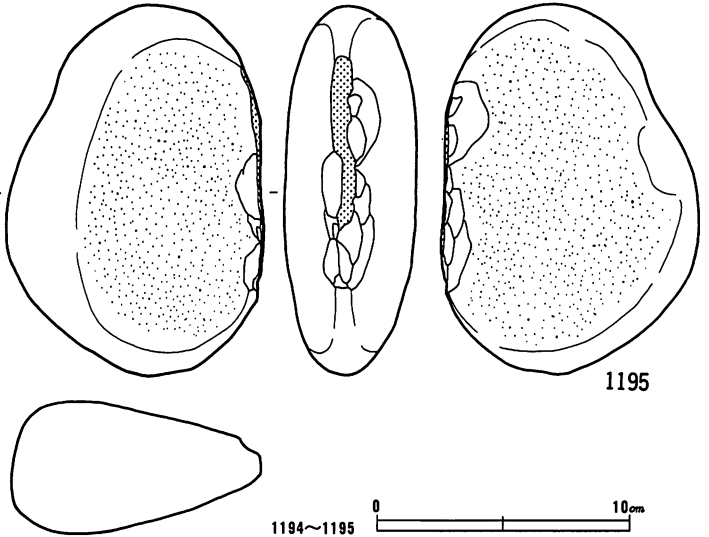
1192



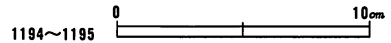
1193



1194



1195



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1188	ⅨD 8 i 住	Q 3 埋土		組縄縄文。				繊維混入。	Ⅱ 1 a	212
1189	ⅨD 8 i 住	床面	R L 横。						Ⅱ 1 b	212

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1190	ⅨD 8 i 住	ベルト埋土	石鉢	硬質泥岩	罕石西部	(2.0)	1.3	0.3	(0.72)		Ⅱ e 2	212
1191	ⅨD 8 i 住	Q 3 埋土	石鉢	粘板岩	北上山地西縁	1.4	1.4	0.3	0.79		Ⅱ a 2	212
1192	ⅨD 8 i 住	Q 1 埋土	石匙	泥質凝灰岩	罕石西部	5.7	2.6	0.8	8.60	尖頭部つくり出し。	I a 2	212
1193	ⅨD 8 i 住	Q 3 埋土	石匙	硬質泥岩	新第三系中新統	3.6	4.8	0.7	10.04		Ⅱ a 1	212
1194	ⅨD 8 i 住	床面	敲磨器類 A 群	硬砂岩	北上山地	19.7	8.3	5.1	1360		Ⅱ a 1	213
1195	ⅨD 8 i 住	床面	敲磨器類 A 群	珪長質凝灰岩	北上山地	14.6	10.7	10.0	1000	平滑面 2 面。	I b 1	213

第253図 ⅨD 8 i 住居跡出土遺物

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する楕円形と推定される。規模は、東西3.6m、南北は残存値で2.6mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁22cm、西壁17cm、北壁49cmである。

〈埋土〉4層で構成されるが、いずれも締まりを欠く。第4層は褐色土をブロック状に含む。

〈床・柱穴・施設〉基盤層で固く締まっており、小さな凹凸がある。中央部にやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。50×70cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大8cmである。

遺物 (第253図、写真図版212・213)

〈土器〉床面から、0段多条の繊維を含む微小破片が出土した。埋土からは図示した2点の他組縄縄文の小片が出土しているが図化は省略した。

〈石器〉図示した他に岩手火山起源の熔岩が1点、フレークが19点埋土から出土している。

時期 床面出土遺物から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

IX D 9 f 住居跡 (遺構番号141)

遺構 (第254図、写真図版88)

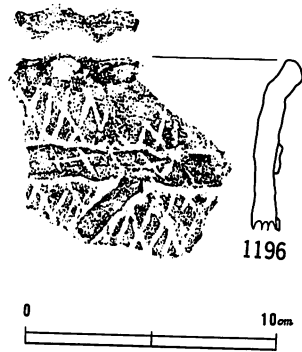
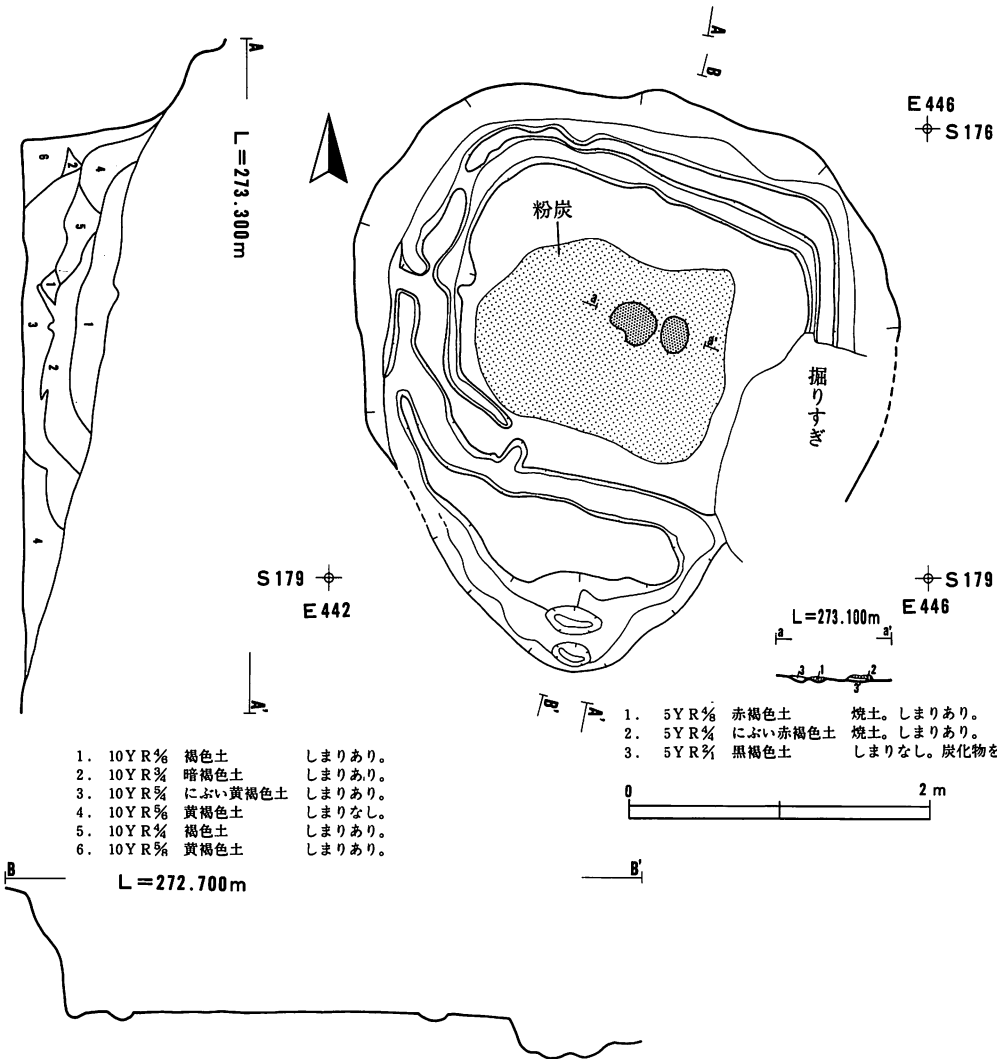
〈検出状況〉褐色土層上面で検出した。東側は誤って掘りすぎてしまった。周溝が2条巡ることから、建替えと思われるが、埋土断面から切り合いは確認できないことから、拡張したものと考えられる。現存する壁と外側の周溝を有する新期のものをIX D 9 f 住居跡、内側の周溝を有する古期のものをIX D 9 f - 2 住居跡とする。

〈形状・規模〉斜面下方に当たる南側の壁は流失しており、詳細は不明であるが、出入り口にかかわるものかと思われる張り出し部が周溝から確認される。その部分を除くと、長軸が斜面に平行する隅丸長方形で、長軸にあたる東西は3.7m、短軸に当たる南北は推定値で3mである。

〈壁・壁高〉褐色土層と基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁82cm、西壁63cm、北壁84cmである。

〈埋土〉6層に分けられるが、全体がレンズ状の層をなす自然堆積の様相を示す。

〈床・柱穴・施設〉基盤層を床とし、全面固い。ほぼ全面に粉炭が分布する。厚さは1cm程度である。柱穴は検出されなかった。周溝が2条巡る。外側のものが本住居に伴い、内側のものが本住居に先行するIX D 9 f - 2 住居跡に伴うと考えられる。外側の周溝は幅13~25cm、深さ6~11cmで、締まりある明褐色土(10YR6/8)を埋土とする。南側に張り出した部分は、規模が一定せず、埋土は締まりを欠く褐色土(10YR4/4)である。壁際のものとは性格を異にする



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1196	IXD9f住	Q3埋土	花弁状口縁。隆帯上木目状燃糸文施文。	R木目状燃糸文。					II6b7	213

第254図 IXD9f・IXD9f-2住居跡・出土遺物

ものと考えられる。

〈炉〉焼土が2基検出された。東側のものは粉炭の上に乗ることから、炉とは考えられない。西側のものは、24×30cmの不整形に分布し、厚さは最大3cmと薄いものではあるが、床を構成する層が焼土化したものであり、一応地床炉としておく。

遺物（第254図、写真図版213）

〈土器〉埋土のみの出土である。1196は花卉状口縁で隆帯が口頸部を巡り、胴部にも同隆帯が展開するがモチーフは不明である。隆帯上には地文と同じ原体で施文される。焼成は良好で硬質である。他に組縄縄文、横位の綾絡文を有する土器小片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉に属すると推定される。

IX D 9 f - 2 住居跡（遺構番号142）

遺構（第254図、写真図版88）

IX D 9 f 住居跡の床面の内側を巡る周溝を伴う住居跡である。周溝は幅10～22cm、深さ6～8cmで南側は、断続的である。規模は、東西2.4m、南北2mである。

IX D 9 g 住居跡（遺構番号143）

遺構（第255図、写真図版89）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で焼土を検出し、その斜面上方において基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。南側でIX D 9 g - 2 住居跡と重複する。本住居の焼土は一部IX D 9 g - 2 住居跡の埋土に形成されており、本住居のほうが新しい。

南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3.6m程度の円形基調と推定される。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は東壁24cm、西壁16cm、北壁41cmである。

〈埋土〉粉炭を含む褐色土を主体とし、全体に締まりを欠く。

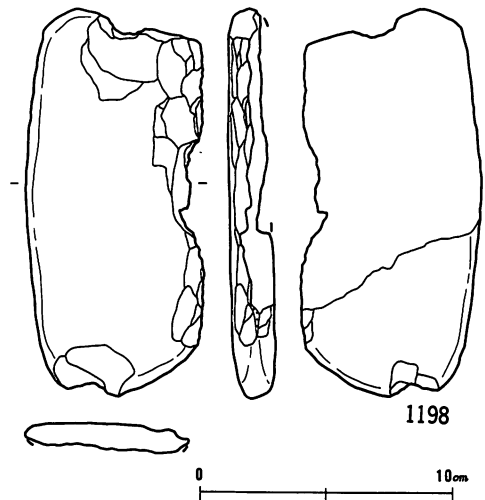
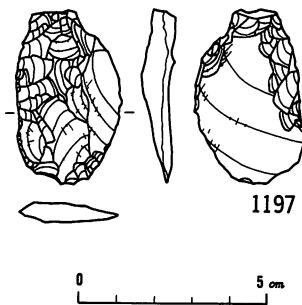
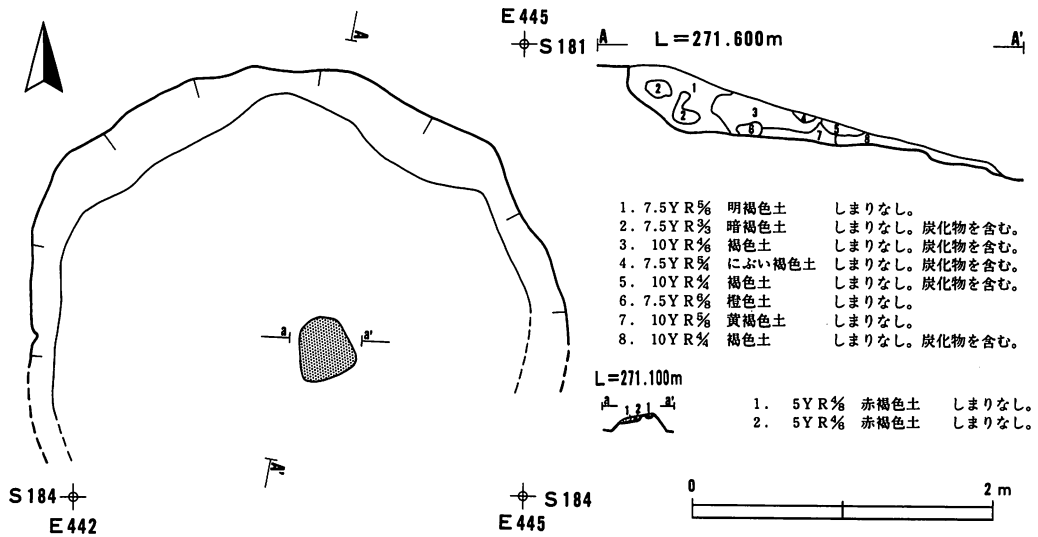
〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層ないしIX D 9 g - 2 住居跡の埋土を床とし、小さな凹凸が激しい。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。南側の一部はIX D 9 g - 2 住居跡の埋土に形成される。35×40cmの楕円形状に分布し、厚さは最大4cmである。一部攪乱を受けている。

遺物 (第255図、写真図版213)

〈石器〉図示した2点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況から推して縄文時代前期に属すると推定される。



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1197	IX D9 g 住		不定形石器	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	4.6	2.8	0.9	7.94		1 b 1	213
1198	IX D9 g 住	床面	敲磨器類 A群	硬砂岩	北上山地	15.3	7.1	(1.8)	(220)	抉り有り。		213

第255図 IX D9 g 住居跡・出土遺物

IX D 9 g - 2 住居跡 (遺構番号144)

遺構 (第250図、写真図版89)

<検出状況> IX D 9 g 住居跡の床面下から検出された。同住居に先行する。南側は斜面のため流失している。

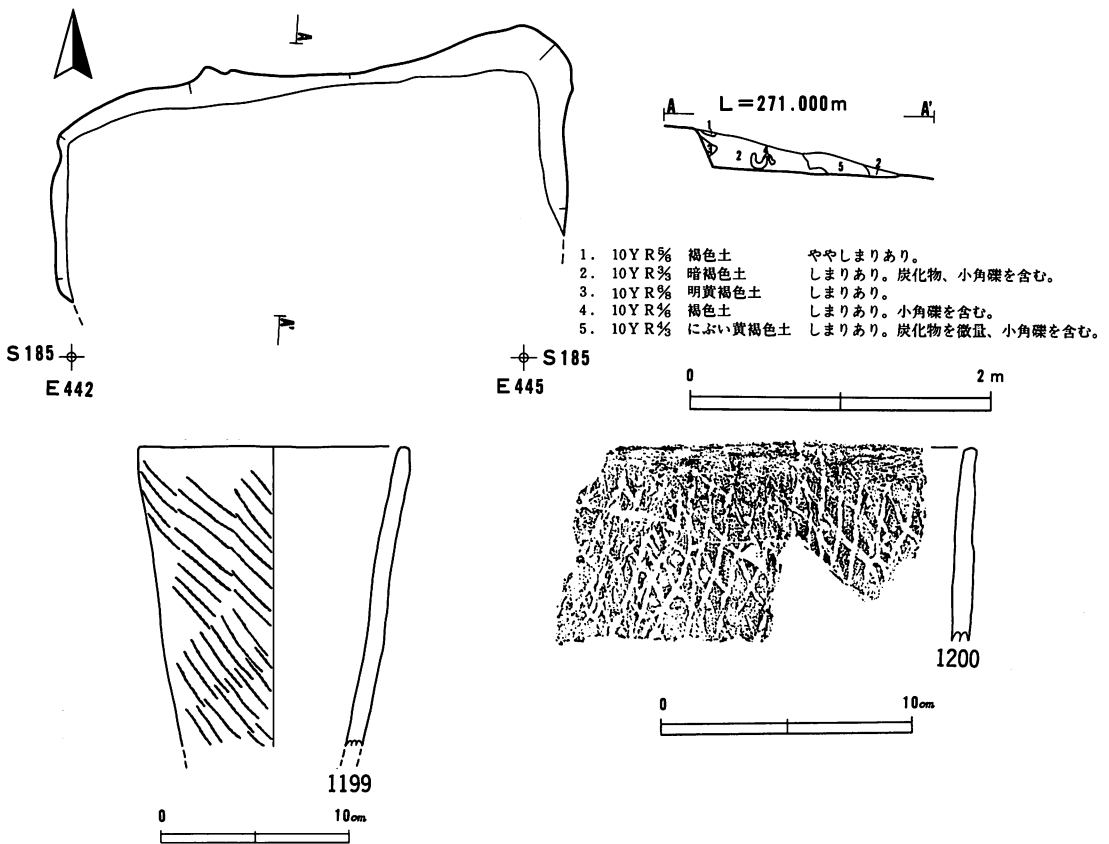
<形状・規模> 南側は不明であるが、方形ないしは長方形基調と推定される。規模は、東西3.5 m、南北は残存値で1.8 mである。

<壁・壁高> 上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は東壁16cm、西壁9 cm、北壁24cmである。

<埋土> 粉炭を含む暗褐色土を主体とし、全体に固く締まっている。

<床・柱穴・施設> 斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層を床面とする。

ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1199	IX D 9 g - 2住	埋土下位		R 燃糸文	(14.4)	-	(16.0)		II 6 b カ	213
1200	IX D 9 g - 2住	埋土		L R 網目状燃糸文。					II 6 b カ	213

第256図 IX D 9 g - 2住居跡・出土遺物

<炉>検出されなかった。

遺物 (第256図、写真図版213)

<土器>埋土からのみの出土である。1199の地文の原体はやや太めのものを用いている。焼成は良好である。図示した他には横位の綾絡文を有する土器小片が1点出土している。

時期 出土土器から、縄文時代前期後葉から末葉に属すると考えられる。

IX D 9 h 住居跡 (遺構番号145)

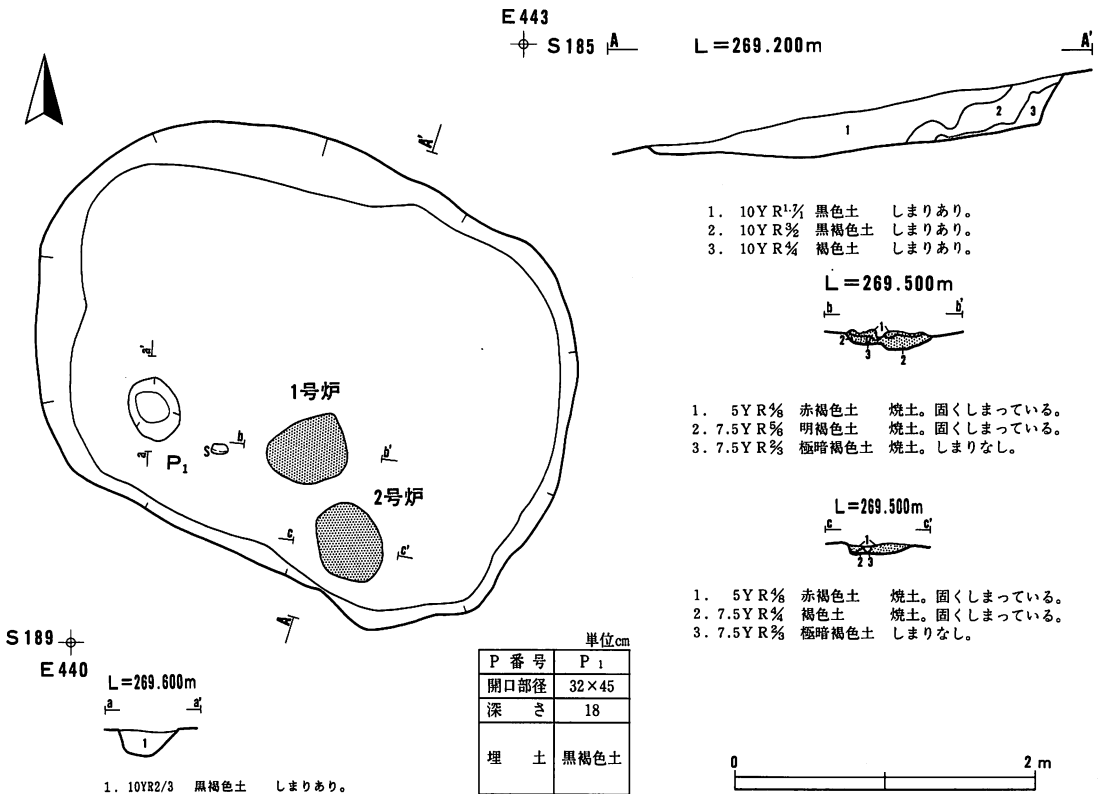
遺構 (第257図、写真図版87図)

<検出状況>東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出した。

<形状・規模>長軸が等高線にほぼ平行する長円形である。規模は、東西 3.7 m、南北 2.8 m である。

<壁・壁高>上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、外傾する。壁高は、東壁19cm、西壁16cm、南壁4cm、北壁53cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を示す。



〈床・柱穴・施設〉斜面上方に当たる北側は基盤層、南側は褐色土層を床とする。やや凹凸があり、中央部はやや低い。柱穴を1個検出した。

〈炉〉南西四半部に地床炉2基を検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、45×52cmの楕円形状に分布し、厚さは最大12cmである。2号炉の焼土は、40×55cmの楕円形状に分布し、厚さは最大7cmである。一部に攪乱があるが、2基とも基盤層にまで焼成がおよび、断面形はレンズ状で固く締まっている。

遺物 〈土器〉床面から繊維を含む組縄縄文が1点（厚さ1cm）、他に細片が数点出土しているが図化に耐えないので割愛した。

〈石器〉フレークが3点出土したのみである。

時期 床面出土破片から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

IXD0f 住居跡（遺構番号146）

遺構（第258図、写真図版90）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。平面的な検出はできなかった。褐色土層上面で焼土を検出し、住居跡を想定して精査を行った結果、本住居とIXD0f-2住居跡が重複していることが分かった。埋土断面観察から、本住居の方が新しいと考えられる。

当初は重複に気付かなかったことから、古期のIXD0f-2住居跡の精査を先行させたため、本住居の床面を掘り進んでしまった。そのため埋土観察用のベルトによって本住居の範囲を把握した。南側は斜面のため流失している。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形ないしは長方形基調と推定される。規模は東西は2.8m、南北は残存値で2.3mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁44cm、西壁20cm、北壁69cmである。

〈埋土〉3層で構成される。褐色土層起源の埋土で自然堆積の様相を示す。

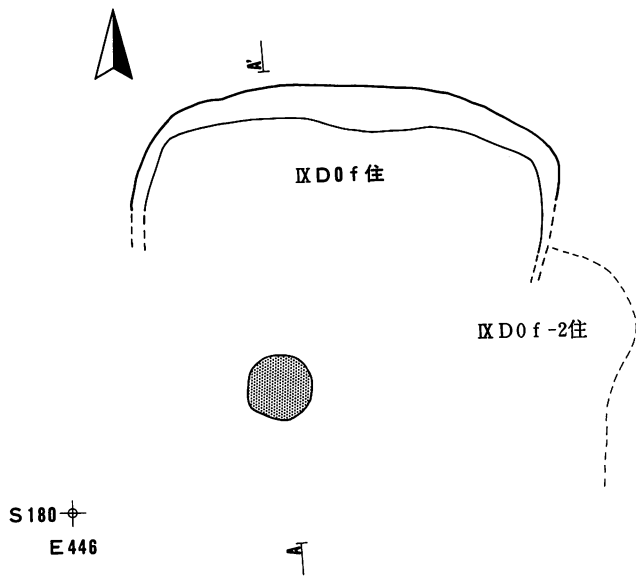
〈床・柱穴・施設〉北側は基盤層、南側はIXD0f-2住居跡の埋土を床とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉を1基検出した。径40cmの円形に分布し、厚さは最大10cmである。本住居の床面として用いられたIXD0f-2住居跡の埋土に形成される。

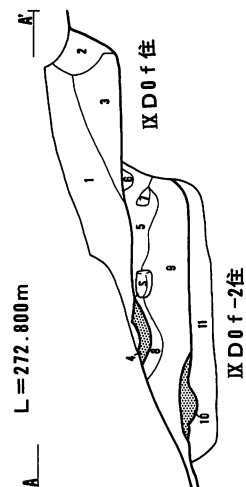
遺物 〈土器〉単節斜縄文の細片が数点出土しているが図化に耐えないので割愛した。

〈石器〉Uフレ1点、フレーク21点が埋土から出土したのみである。

時期 出土遺物・重複関係から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。



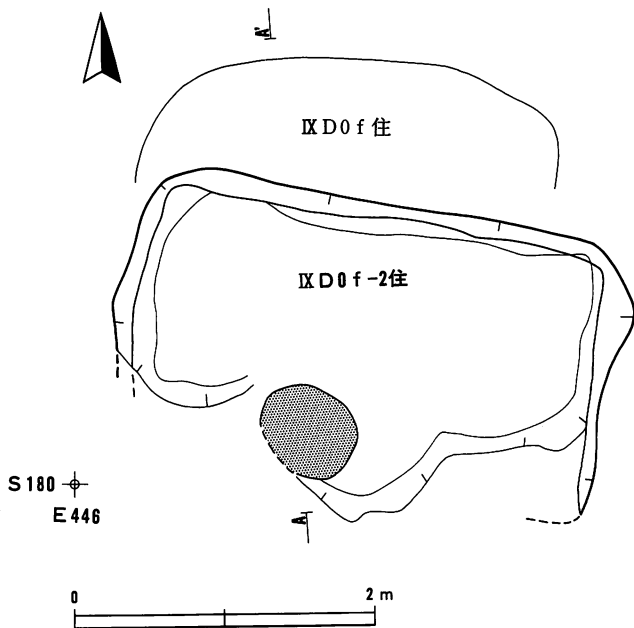
E 450
S 177



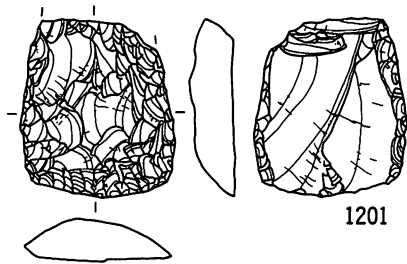
S 180
E 450

1. 10Y R% 暗褐色土 ややしまりあり。小角礫を含む。
2. 7.5Y R% 褐色土 しまりあり。
3. 10Y R% 暗褐色土 褐色土、小角礫を含む。
4. 5Y R% 赤褐色土 焼土。
5. 10Y R% 黒褐色土 褐色土、小角礫を含む。
6. 7.5Y R% 褐色土 固くしまっている。
7. 10Y R% 黒褐色土
8. 7.5Y R% 暗褐色土
9. 7.5Y R% 黒色土 固くしまっている。
10. 5Y R% 赤褐色土 焼土。
11. 7.5Y R% 黒色土 固くしまっている。暗褐色土との混土。

S 177
E 450



S 180
E 450



1201

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1201	IX D0 f-2住	埋土	石筥	珪長質細粒凝灰岩	礫石西部	(4.7)	4.1	1.1	(8.2)	基部欠損。刃部の調整は丁寧。	I	213

第258図 IX D0 f・IX D0 f-2住居跡・出土遺物

ⅨD0f-2住居跡（遺構番号 147）

遺構（第258図、写真図版90・91）

〈検出状況〉褐色土層上面で焼土を検出し、精査に入った。北側でⅨD0f住居跡と重複する。本住居の方が同住居より古い。南側は斜面のため流失している。

本住居の地床炉と考えられる焼土のレベルを床面と把握したが、そこから更に15cmほどの深さで、基盤層を掘り込んでいることが確認された。その掘り込みの平面形は、本住居の内側で完結する。北側は本住居と殆ど一致するが、南側では不整な出入りがある。埋土は、本住居の主体をなす黒褐色土に類似する。底面は、基盤層である黄褐色土で、焼土・柱穴等は検出されない。

本住居の床面がここまで下がるという想定もできる。また、建替えまたは独立した住居の重複をとらえることも可能である。しかし、前者の立場に立つと、焼土が原位置を保っていると考えられたことと整合しない。後者に立つと南側の壁のラインは不自然である。いずれも積極的根拠を見出だせず、不明である。ここでは野外調査時点の想定に基づき、とりあえず本住居の掘り方・貼り床として報告する。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形ないしは長方形と推定される。規模は、東西3.3m、南北は残存値で2mである。

〈壁・壁高〉基盤層で固く締まり、ほぼ直立する。壁高は東壁20cm、西壁21cm、北壁44cmである。

〈埋土〉下位の黒褐色土が主体をなす。小角礫を多く含み、非常に固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉地床炉と考えられる焼土のレベルを床面ととらえた。埋土と殆ど区別がつかない黒褐色土を、南側の一部を除くほぼ全面に15cm程の厚さで貼り床している。掘り方の底面は基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が1基検出された。径40cm程度の円形に分布し、厚さは最大10cmである。断面形はレンズ状で、原位置を保っているものと考えられることから、地床炉とする。

遺物（第258図、写真図版213）

〈土器〉埋土上位から繊維を含む組縄縄文、および埋土中位から網目状撚糸文、撚糸文の小破片が数点出土したが図化は省略した。

〈石器〉1201は基部側を欠損しているが刃部は精巧な加工である。1点のみの出土である。

時期 特定する資料を欠くが、出土土器から縄文時代前期に属すると考えられる。

Ⅸ E 2 b 住居跡 (遺構番号148)

遺構 (第259図、写真図版92)

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。褐色土層上面において、黒色土の落ち込みとして、比較的明瞭にプランを検出できた。

〈形状・規模〉長軸が等高線に平行する楕円形である。規模は、東西3.1m、南北2mである。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質で、やや外傾する。壁高は東壁17cm、西壁18cm、南壁9cm、北壁12cmである。

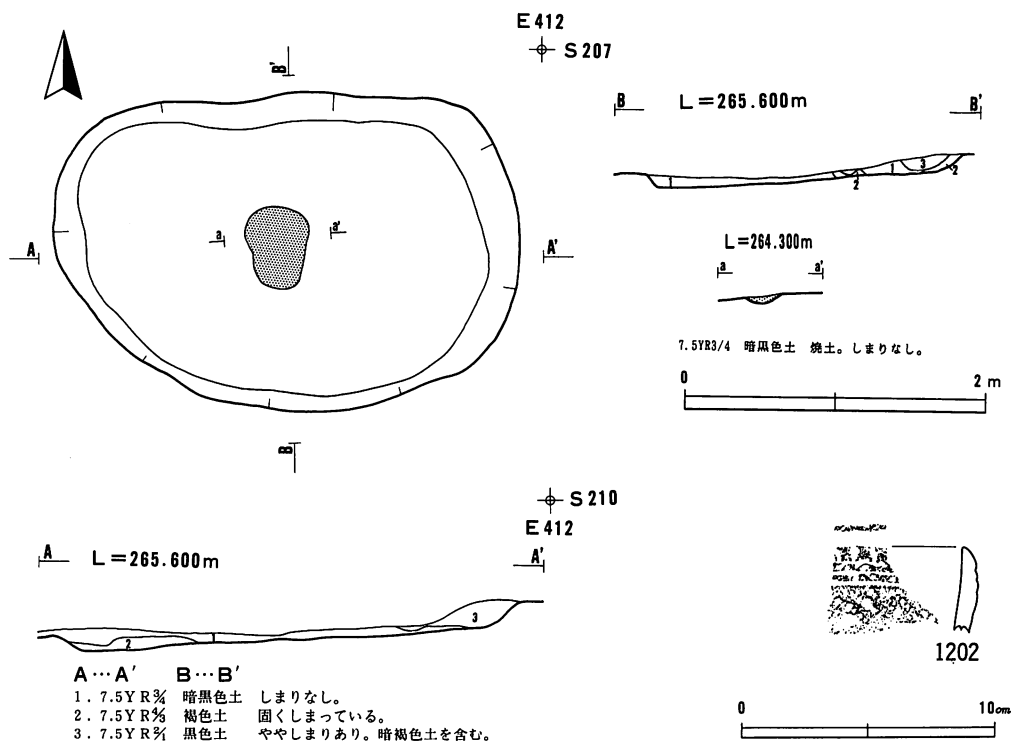
〈埋土〉3層で構成される。上位から、黒色土・暗褐色土・褐色土が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質であり、埋土との区別が困難だった。南側にやや傾斜する。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉中央部に地床炉を1基検出した。40×52cmの範囲に分布し、厚さは最大6cmである。断面形はレンズ状である。

遺物 (第258図、写真図版213)

〈土器〉床面から0段多条の小破片 (厚さ1.3cm、繊維を含む)、埋土から1202の他網目状撚糸



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1202	Ⅸ E 2 b 住	埋土	口唇端篋状工具による右方向からの刻み。半截竹管平行沈線。	R L横。						213

第259図 Ⅸ E 2 b 住居跡・出土遺物

文、木目状撚糸文、横位の綾絡文を有する小破片が出土している。

時期 特定する資料を欠くが、出土遺物から縄文時代前期に属すると考えられる。

IX E 5 a 住居跡 (遺構番号149)

遺構 (第260図、写真図版93)

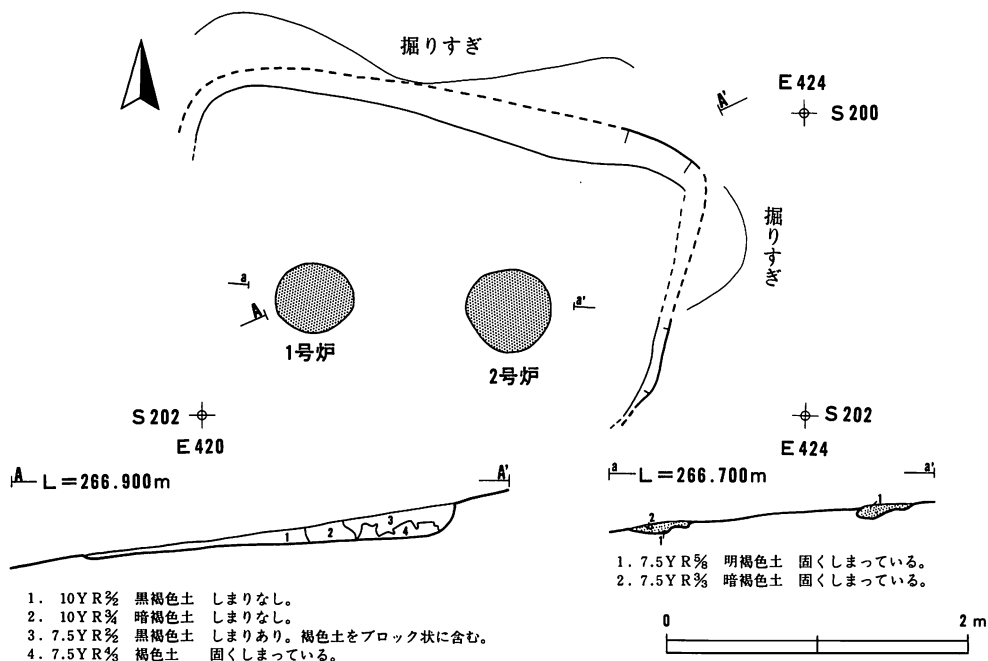
〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。黒褐色土と黄褐色土の混土層上面において、焼土を検出し、その北東部に壁のたちあがりの一部を確認したことから、住居跡と認定した。埋土と壁の区別がつかず、範囲を確定することはできなかったが、床面の土色・固さから、およその範囲を推定した。

〈形状・規模〉不明である。推定では長軸が等高線にはほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、2×3 m程度と推定される。

〈壁・壁高〉一部残存する北東壁は、黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質で、内湾気味に外傾する。壁高は20cmである。

〈埋土〉4層で構成される。いずれもしまりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。



第260図 IX E 5 a 住居跡

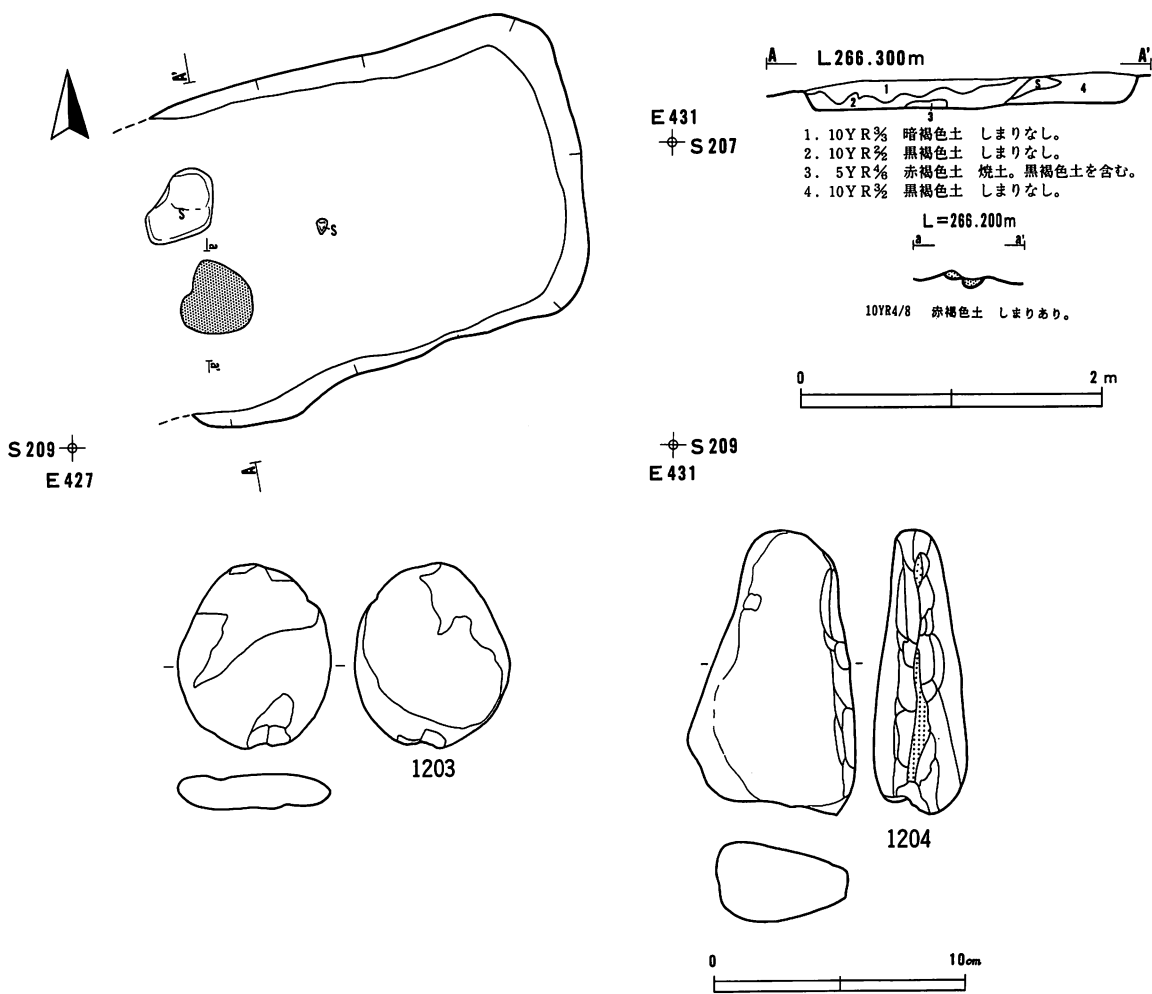
〈炉〉推定長軸線上に地床炉を2基検出した。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は径50cm程度の円形に分布し、厚さは最大7cmである。2号炉の焼土は径55cm程度の円形に分布し、厚さは最大10cmである。いずれも断面形はレンズ状である。

遺物 本遺構に伴う遺物は無い。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

IX E 6 b 住居跡 (遺構番号150)

遺構 (第261図)



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1203	IX E 6 b 住	床面	石錘	赤色凝灰岩	北上山地	7.3	6.1	1.3	100		I	213
1204	IX E 6 b 住	床面	敲磨器類 A 群	凝灰質千枚岩	北上山地	10.9	6.7	3.5	350		I b 1	213

第261図 IX E 6 b 住居跡・出土遺物

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。黒褐色土と黄褐色土の混土層上面において焼土を検出し、その後に壁のたちあがり³を一部確認したことから、住居跡と認定した。埋土と壁の区別が難しく、北側は掘りすぎてしまった。西側は不明である。

〈形状・規模〉西側が不明であるが³、長軸が等高線にはほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西は残存値で3 m、南北は2.2 mである。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、やや外傾する。壁高は、東壁14 cm、南壁10 cm、北壁17 cmである。

〈埋土〉4層で構成される。黒色土を主体とする。いずれもしまりを欠く。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉1基検出された。径50 cmの歪な円形状に分布し、厚さは最大8 cmである。断面形はレンズ状となる。

遺物（第261図、写真図版213）

〈土器〉埋土から繊維を含む斜縄文の小破片が6点出土したが、図化に耐えないので省略した。

〈石器〉図示した2点が出土した。

時期 特定する資料を欠くが、出土土器から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

X D 1 g 住居跡（遺構番号151）

遺構（第262図、写真図版94）

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。試掘トレンチの断面に原位置を保つ焼土³があり、その斜面上方に基盤層を掘り込む壁を確認し、住居跡と認定した。北壁は明瞭だが東西壁ははっきりしない。

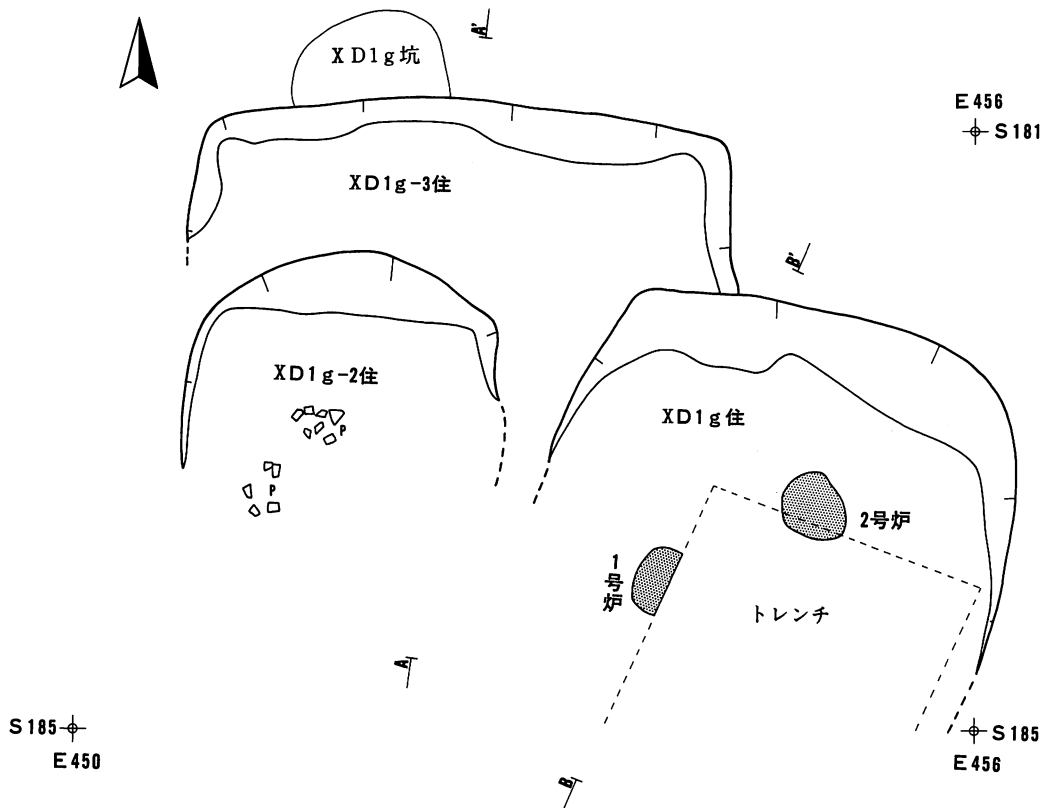
西隣には、X D 1 g - 2 住居跡³が位置する。本住居と直接の切り合いはない。北西壁で X D 1 g - 3 住居跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形と推定される。規模は東西3.1 m、南北は残存値で3 mである。

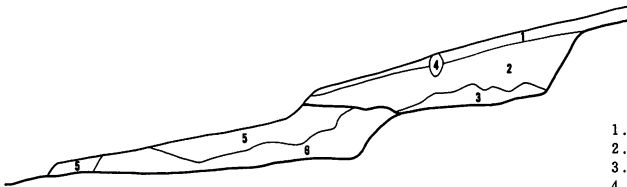
〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は、上位は褐色土層、下位は基盤層でやや外傾する。壁高は、東壁13 cm、西壁27 cm、北壁39 cmである。

〈埋土〉黒色土と暗褐色土の混土層が主体で、締まりを欠く。埋土最上部から十和田 a 降下火山灰が検出されている（付篇1参照）。

〈床・柱穴・施設〉床面の大半は試掘トレンチによって削剝され、詳細は不明である。北壁際は基盤層である黄褐色土であるが³、南側は暗褐色土～黒色土であり、全体に固く締まっている。

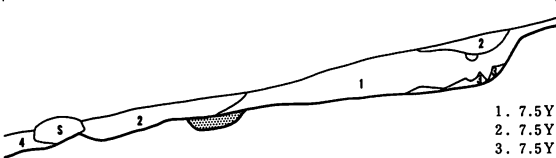


A L = 272.100m

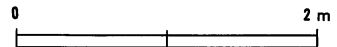


1. 7.5Y R^{5/6} 暗褐色土 しまりなし。小角礫を含む。
2. 7.5Y R^{5/6} 暗褐色土 しまりなし。黒色土との混土。
3. 7.5Y R^{5/6} 暗褐色土 小角礫を含む。
4. 7.5Y R^{1/1} 黒色土
5. 7.5Y R^{5/6} 暗褐色土 黒色土を含む。
6. 7.5Y R^{1/1} 黒色土 小角礫を含む。

B L = 271.600m



1. 7.5Y R^{1/1} 黒色土 暗褐色土との混土。しまりなし。小角礫を多く含む。
2. 7.5Y R^{5/6} 暗褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。
3. 7.5Y R^{5/6} 褐色土
4. 7.5Y R^{5/6} 褐色土 しまりなし。小角礫を多く含む。



第262図 XD1g・XD1g-2・XD1g-3住居跡

残存した部分では、柱穴は検出されなかった。

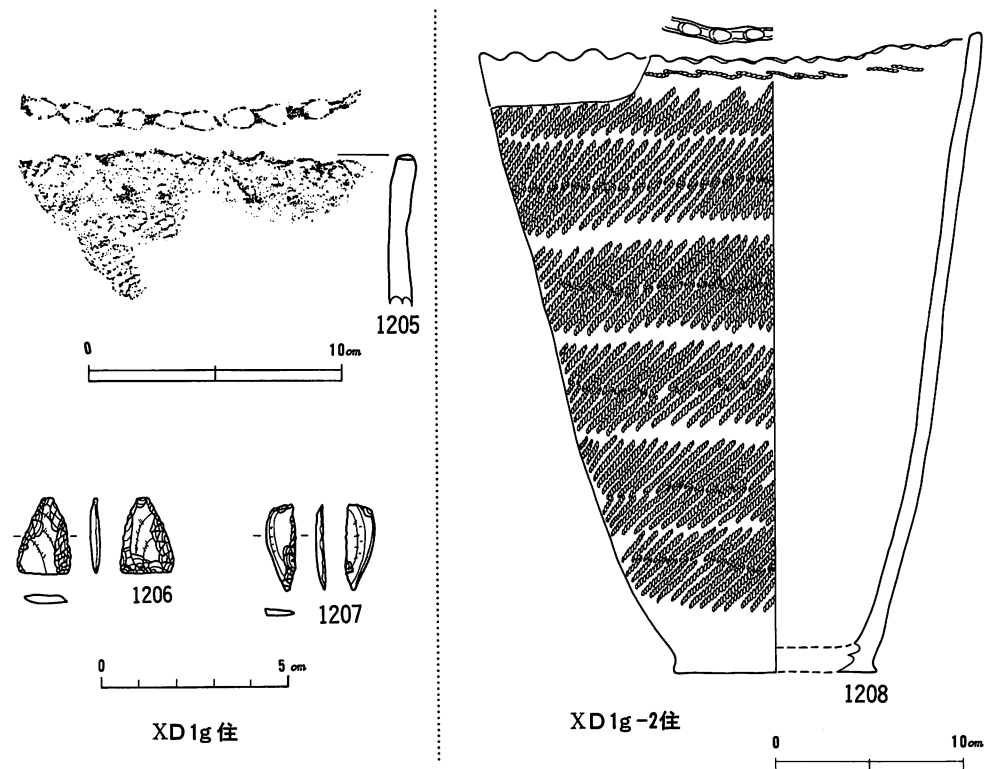
〈炉〉地床炉が2基検出された。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は南北40cmで、厚さは10cm程度である。2号炉の焼土は40×50cmの楕円形状に分布する。

遺物（第263図、写真図版214）

〈土器〉1205の他、埋土から繊維を含む斜縄文、横位の綾絡文を有する土器小片が出土した。

〈石器〉図示した2点の他Uフレカが1点、フレークが2点出土している。

時期 特定する資料を欠くが、検出状況・出土遺物から縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1205	XD1g 住	埋土	口唇部左方向からの指頭状圧痕。	L R横。					II 6 b 才	213
1208	XD1g-2住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L R × L R 第1種結束。	(26.7)	(10.8)	33.6		II 6 b 7	214

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1206	XD1g 住	埋土	石鏃	硬質凝灰質泥岩	磐石西部	2.0	1.4	0.3	0.76		I 2	214
1207	XD1g 住	埋土	不定形石器	凝灰質硬質泥岩	磐石西部	2.3	0.8	0.2	0.39	扁平	VII	214

第263図 XD1g・XD1g-2住居跡 出土遺物

X D 1 g - 2 住居跡 (遺構番号152)

遺構 (第262図、写真図版94)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。褐色土層上面で検出した。北側で X D 1 g - 3 住居跡と重複する。埋土断面観察から、本住居の方が先行すると考えられる。

当初は重複に気付かず、本住居の調査を先行させたため、X D 1 g - 3 住居跡の床面まで掘りすぎてしまった。

斜面のため南側は流失している。

〈形状・規模〉詳細は不明であるが、方形ないしは長方形と推定される。規模は東西 2 m、南北は残存値で 3 m である。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は、やや外傾する。壁高は、東壁 2 cm、西壁 9 cm、北壁 34 cm である。

〈埋土〉上位は褐色土を、下位は黒色土を主体とし、壁際は崩落土が混入する。

〈床・柱穴・施設〉北壁際は基盤層である黄褐色土であるが、南側は暗褐色土～黒色土であり、全体に固く締まっている。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第263図、写真図版214)

〈土器〉1208は R L を結束させて横回転しているが、口縁直下の横走る綾絡文は原体の末端処理によるものである。実測図には表れないが胴部にも一部観察される。口唇部は右方向から指頭状の圧痕が施される。焼成は良好である。

〈石器〉台石様の破砕礫が出土しているが図示は割愛した。

時期 出土遺物から、縄文前期後葉から末葉に属すると考えられる。

X D 1 g - 3 住居跡 (遺構番号153)

遺構 (第262図、写真図版94)

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。X D 1 g - 2 住居跡の精査時に検出した。同住居と重複し、埋土断面観察から本住居のほうが新しいと考えられる。X D 1 g - 2 住居跡の精査を先行させたため、誤って、本住居の床面の一部を掘りすぎてしまった。南側はベルトによって範囲を把握した。

南東側で X D 1 g 住居跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

北側で X D 1 g 土坑と重複する。切り合い関係を表す断面図はとれなかったが、本住居精査後に北壁との床面から同土坑の掘り込みが確認されたこと、および本住居の埋土断面に同土坑の立上がりは確認できないことから、同土坑は本住居に先行すると考えられる。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、方形ないしは長方形と推定される。規模は、東西3.6 m 南北は残存値2 mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁は上位は褐色土層を、下位は基盤層を壁とし、比較的明瞭である。一部XD1 g土坑の埋土を壁とする。東西壁は、褐色土層でありはっきりしない。壁高は、東壁7 cm、西壁15 cm、北壁23 cmである。

〈埋土〉黒色土を混入する褐色土を主体とし、床面直上に締まりを欠く黄褐色土層が堆積する。

〈床・柱穴・施設〉北側は基盤層である黄褐色土およびXD1 g土坑の埋土を、南側は褐色土層およびXD1 g-2住居跡の埋土を床とする。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期後葉から末葉に属すると推定される。

XD1 j 住居跡 (遺構番号154)

遺構 (第264図、写真図版94)

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。試掘トレンチにおいて黒色土が広がることから、本住居の東半部を検出した。

東側でXD1 g-2住居跡と重複する。実測図は取れなかったが、精査時の観察では本住居の方が新しい。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3.5 m程度の円形ないしは長軸が同程度の楕円形と推定される。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、ほぼ直立する。試掘トレンチにより削られてたことと、試掘トレンチで検出したため、壁高残存値は3~5 cm程度であるが、ベルトで確認した立上がりでは35 cm程度となる。

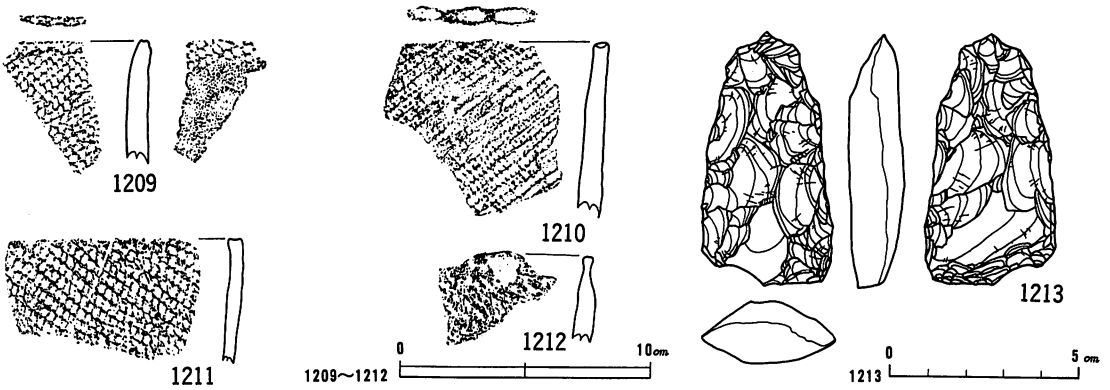
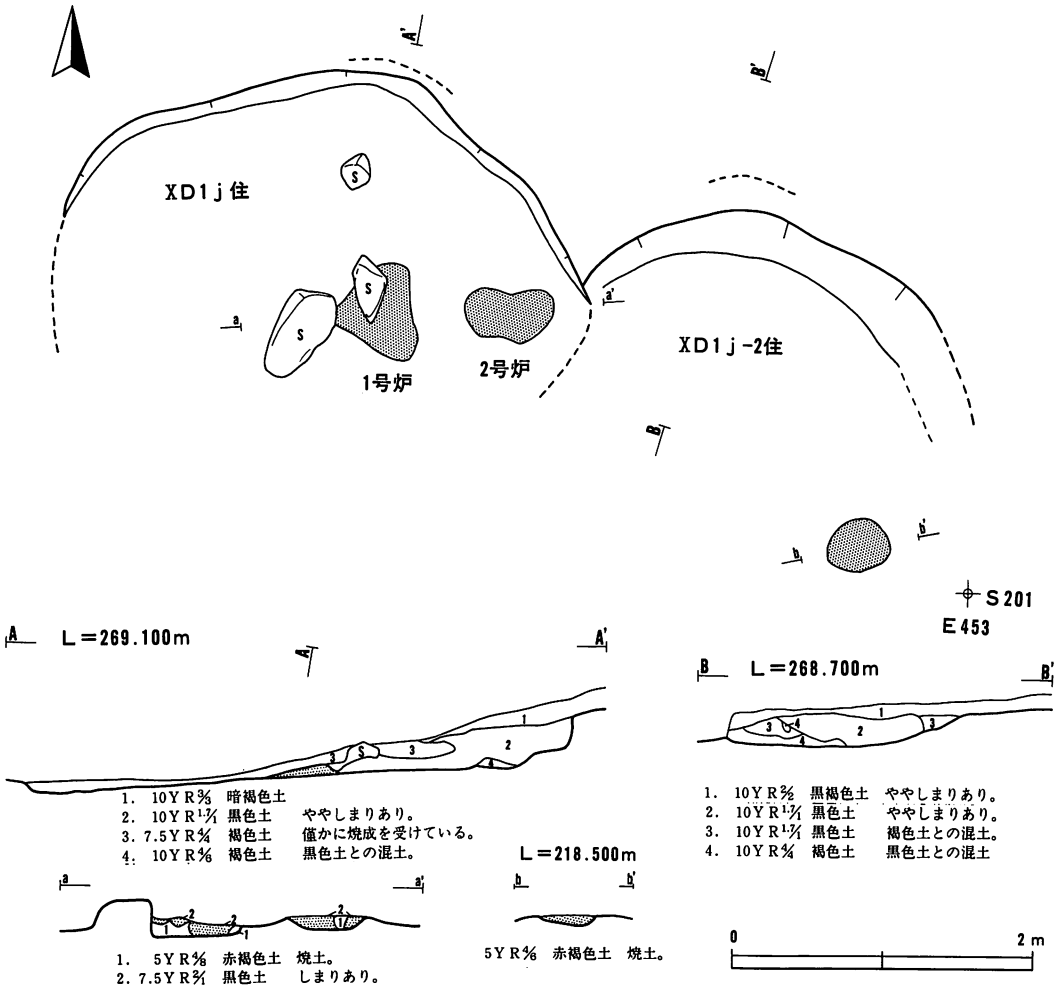
〈埋土〉腐植土である黒色土を主体とする。締まりはあまりない。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が2基検出された。いずれも断面形はレンズ状である。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は60×60 cmの不整形に分布し、厚さは最大8 cmである。2号炉の焼土は33×60 cmの楕円形状に分布し、厚さは最大10 cmである。固く締まっている。

遺物 (第264図、写真図版214)

〈土器〉図示した他に、埋土から繊維を含む組縄縄文、綾絡文を有する土器小片が出土した。



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1209	XD1j住	埋土	口唇部と口唇端にも施文。口縁部内面にも施文。	組縄縄文。				繊維混入。	II 1 a	214
1210	XD1j住	床面	口唇部指頭状圧痕。	L R横。				繊維混入。	II 1 b	214
1211	XD1j住	埋土		R L横。					II 1 a	214
1212	XD1j住	埋土	小波状口縁。頂部側面の凹文は意図的か？	R L横。				繊維混入。	II 1 b	214

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1213	XD1j住	埋土	石鏡	硬質泥岩	礫石西部	6.6	3.5	1.5	33.93	刃部は潰減痕。	II	214

第264図 XD1j・XD1j-2住居跡・出土遺物

〈石器〉1213の刃部は、強い打撃によると思われる階段状剝離を示す。

時期 出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

X D 1 j - 2 住居跡 (遺構番号155)

遺構 (第264図、写真図版96)

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。試掘トレンチにおいて黒色土が広がることから検出した。南側は不明である。西側でX D 1 j 住居跡と重複する。精査時の観察では本住居の方が古い。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3.5 m程度の円形ないしは長軸が同程度の楕円形と推定される。

〈壁・壁高〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、緩やかに立ち上がる。試掘トレンチにより削られており、壁高は最大で13cmである。

〈埋土〉腐植土である黒色土を主体とする。締まりはあまりない。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が1基検出された。34×44cmの楕円形状に分布し、厚さは最大7cmである。断面形はレンズ状である。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠くが、重複関係およびX D 1 j 住居跡と類似する住居形態であることから縄文時代前期初頭から前葉と推定される。

X D 2 i 住居跡 (遺構番号156)

遺構 (第265図、写真図版96)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。試掘トレンチにおいて焼土が検出されており、その斜面上方において、僅かではあるが壁の立ち上がりを確認し、住居跡と認定したものである。

〈形状・規模〉残存状況が悪く不明であるが、長方形基調か。規模は残存値で東西4 m、南北2 mである。

〈壁・壁高〉斜面上方に当たる北壁のみ残存し、黒色土と黄褐色土の混土層で、壁高は最大で8 cmである。

〈埋土〉層厚5 cm程度の単層で、締まりを欠く黒色土である。

〈床・柱穴・施設〉黒色土と黄褐色土の混土層でやや固めである。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉焼土が2基検出された。発達が良くないが、床面を構成する層が焼成をうけたものと考えられる。

えられ、一応地床炉としておく。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は25×48cmの不整な楕円形状に分布し、厚さは最大4cmである。2号炉の焼土は40×47cmの不整形に分布し、厚さは最大3cmである。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明である。検出状況から縄文時代前期と推定される。

X D 3 h 住居跡 (遺構番号157)

遺構 (第266図、写真図版97)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。黒色土と黄褐色土の混土層上面において黒色土の広がりとして検出した。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長円形で、規模は、東西3.2m南北2.1mである。

〈壁・壁高〉上位は黒色土と黄褐色土の混土層を、下位は基盤層である黄褐色土を壁とし、北壁と西壁はほぼ直立し、南壁と東壁はそれよりやや外傾する。壁高は、東壁40cm、西壁20cm、南壁28cm、北壁45cmである。

〈埋土〉上位は腐植土である黒色土で、やや粘性があり固い。下位は褐色のロームを主体とする層で、固く締まっている。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 〈土器〉埋土から繊維を含む組縄縄文の土器小片が2点出土したのみである。剥落が著しいので図示は割愛した。

時期 出土土器から縄文前期初頭から前葉に属すると考えられる。

X D 3 i 住居跡 (遺構番号158)

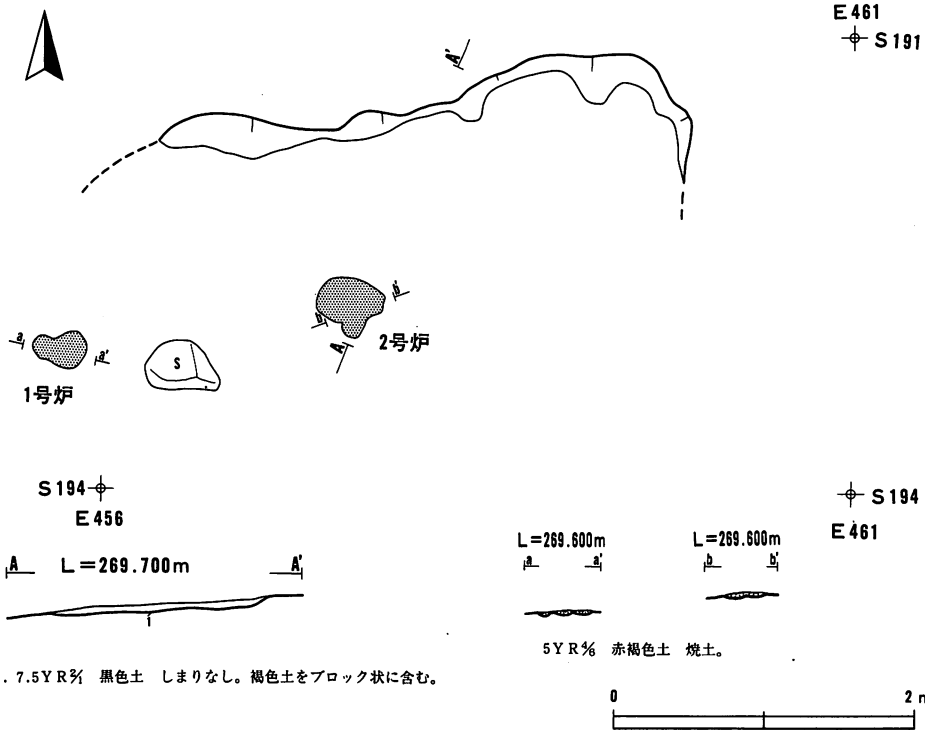
遺構 (第267図、写真図版97)

〈検出状況〉東尾根南麓の平坦部に位置する。黒色土と黄褐色土の混土層上面で焼土を検出し、その斜面上方に10cm程度であるが壁の立上りを認め、住居跡と認定した。

南側は斜面のため流失している。

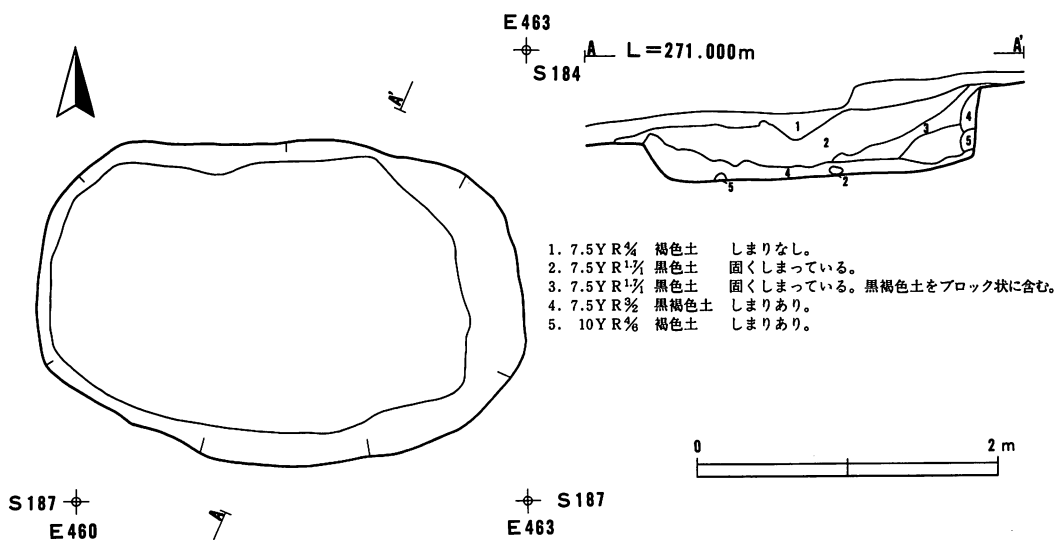
〈形状・規模〉南側は不明であるが、径3m程度の円形ないしは長軸が同程度の楕円形と推定される。

〈壁・壁高〉北壁のみ残存する。黒褐色土と黄褐色土の混土層で軟質であり、外傾する。壁高は10cmである。



1. 7.5YR% 黒色土 しまりなし。褐色土をブロック状に含む。

第265図 XD2 i 住居跡



第266図 XD3 h 住居跡

〈埋土〉しまりを欠く褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉黒褐色土と黄褐色土の混土層で、やや軟質である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が1基検出された。45×55cmの歪な楕円形状に分布し、厚さは最大10cmである。断面形はレンズ状である。

遺物 出土していない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

X D 4 f 住居跡 (遺構番号159)

遺構 (第268図、写真図版98)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。基盤層上面で検出したが、断面観察からは上層の褐色土層を掘り込んでいることが分かる。北東部は倒木痕により攪乱を受けている。

〈形状・規模〉攪乱部と南側は不明であるが、長軸が等高線にほぼ平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西3.4m、南北は推定値で2mである。

〈壁・壁高〉上位は褐色土層、下位は基盤層を壁とし、やや外傾する。壁高は、北壁45cm、である。東壁・西壁は、検出した基盤層上面からの計測値で、それぞれ18cm・13cmである。

〈埋土〉腐植土である黒色土と黒褐色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉基盤層である黄褐色土層で、固く締まっている。柱穴は検出されなかった。床面東側で土坑を検出した。埋土断面観察からは、本住居の床面からの掘り込みと考えられることから、本住居に伴うものとしておく。規模は、径66×70cm、深さ35cmで、底面は平坦である。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第268図、写真図版214)

〈石器〉図示した他に台石様の破碎礫が埋土から出土している。

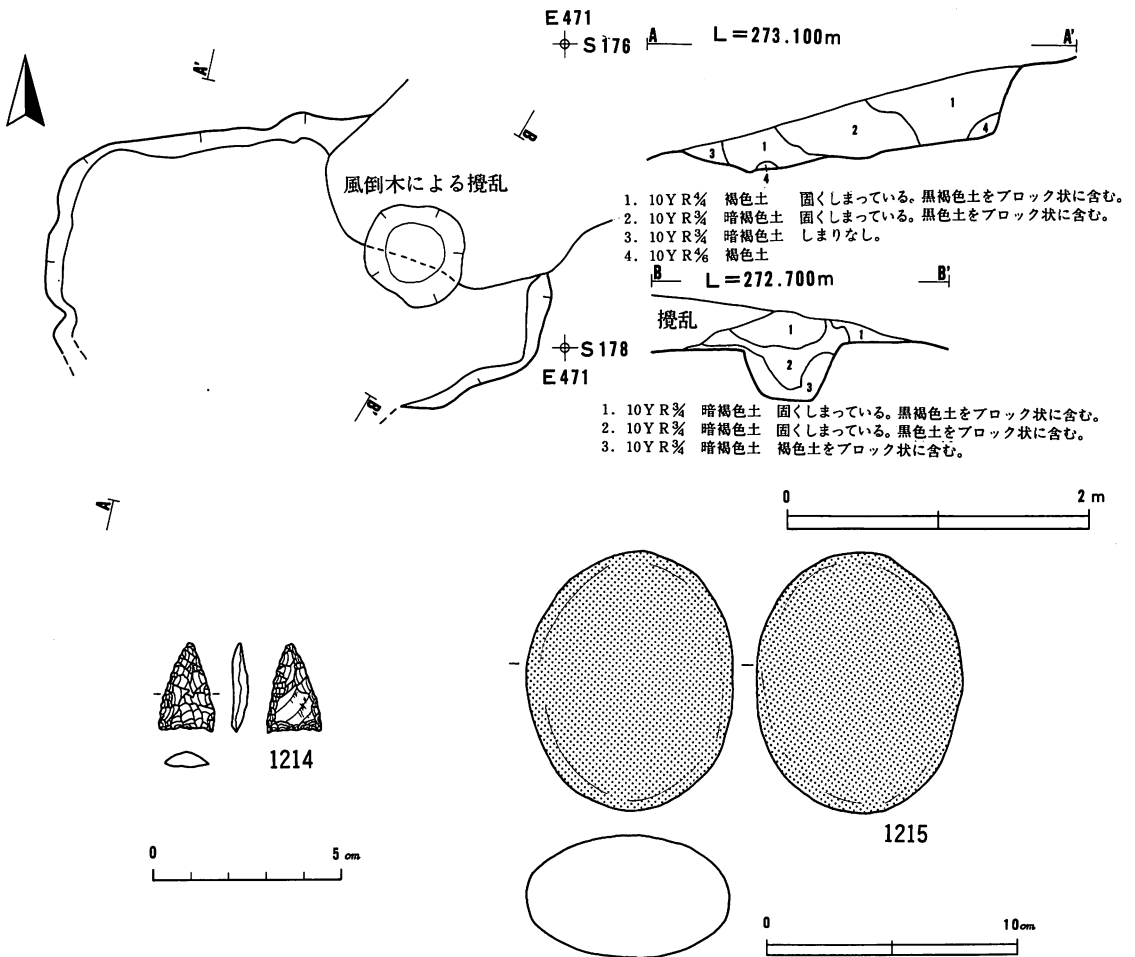
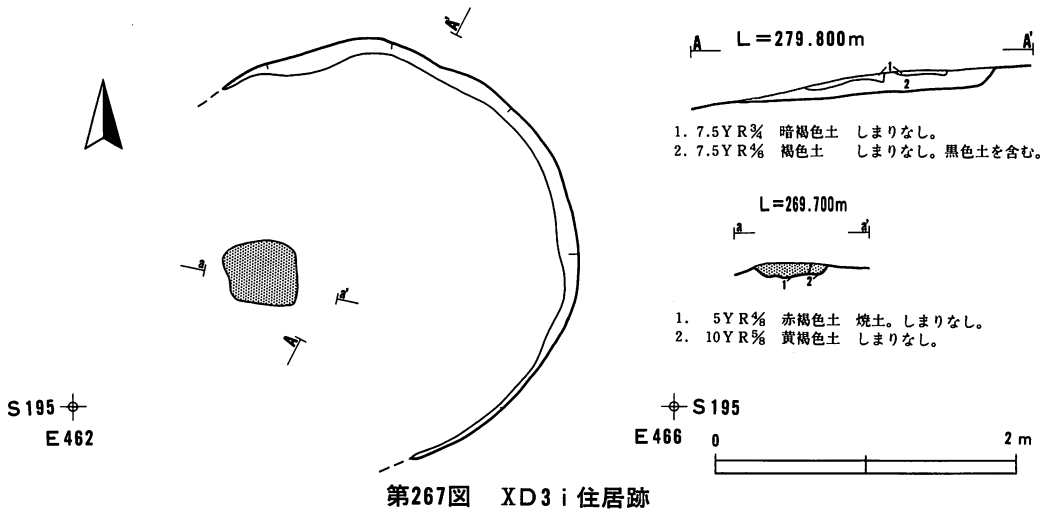
時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

X D 4 g 住居跡 (遺構番号160)

遺構 (第269図、写真図版98・99)

〈検出状況〉東尾根南斜面に位置する。試掘トレンチで、黒色土と黄褐色土の混土層上面において黒色土の落ち込みとして検出した。断面観察から上層の褐色土層から掘り込まれていることが確認された。

地床炉と考えられる焼土が分布する面を、本住居の床面として把握したが、その面から更に



番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1214	XD4f住	埋土	石鏃	埴質泥岩	礫石西部	2.4	1.4	0.4	1.05		II a 2	214
1215	XD4f住	埋土	敲磨石類B群	硬砂岩	北上山地	10.2	8.2	4.9	615	全面に磨面光沢あり。	I	214

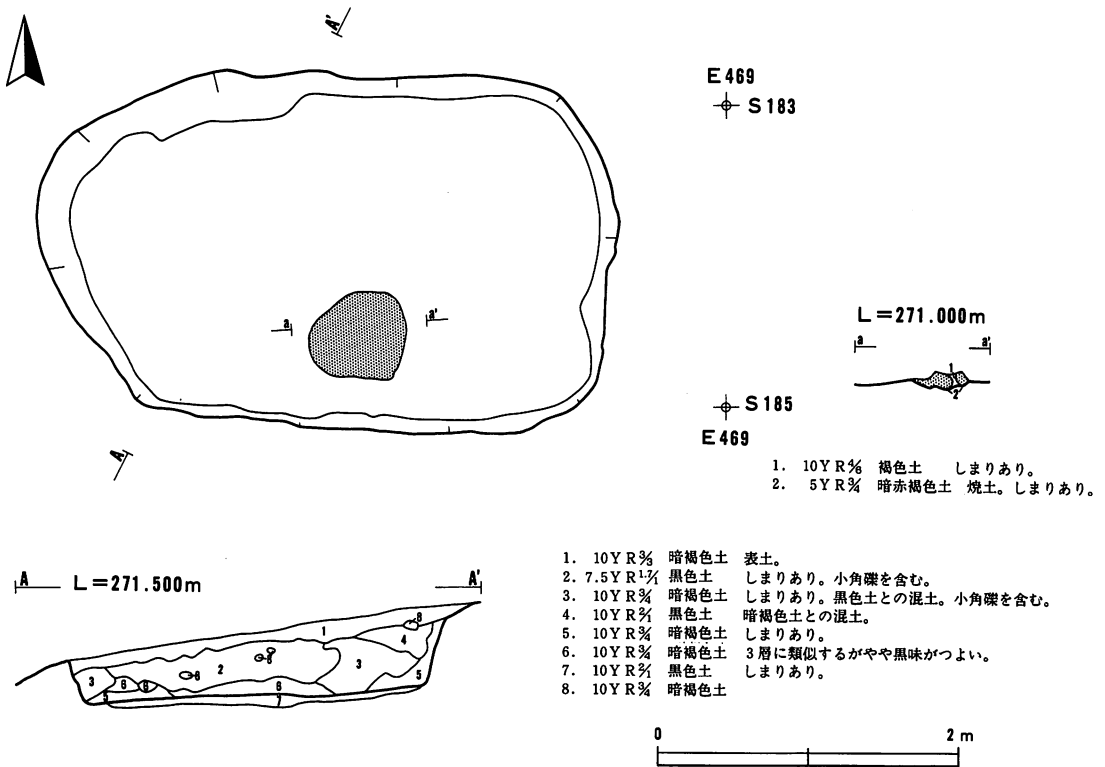
深さ7～8cmほど基盤層を掘り込んでいることが確認された。その掘り込みの平面形は本住居のそれと一致する。埋土は、本住居のものより黒味を多く帯び、固く締まっている。掘り込みの底面は概ね平坦であり、炉や柱穴などの施設は検出されない。この掘り込みの性格について詳細は不明であるが、調査時点の想定に基づき、本住居に伴う掘り方とし、その埋土を貼り床として報告する。

〈形状・規模〉長軸が等高線にほぼ平行する長円形で、規模は東西3.8m、南北2.3mである。

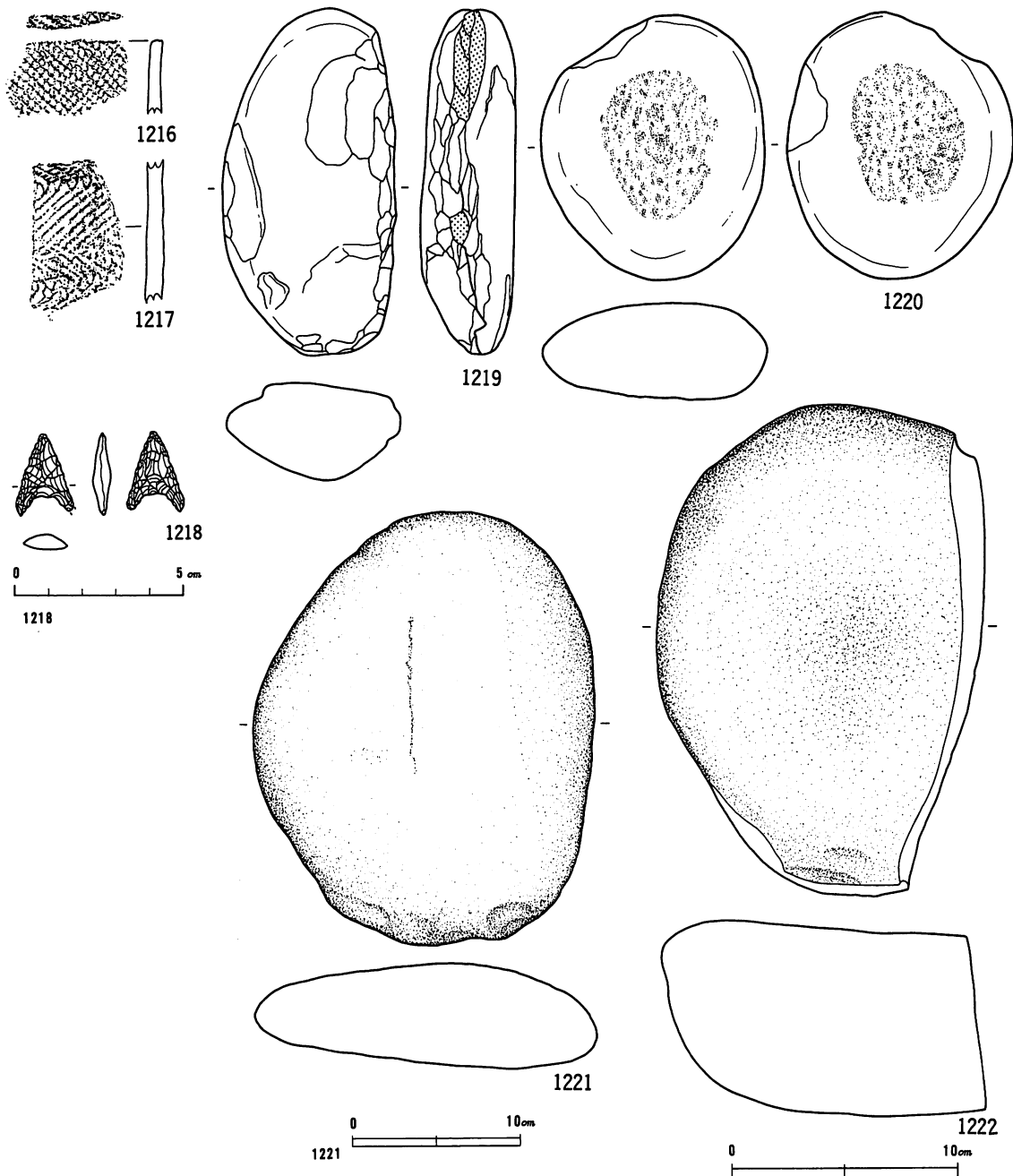
〈壁・壁高〉上位は黒色土と黄褐色土の混土層を、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁30cm、西壁12cm、南壁10cm、北壁44cmである。

〈埋土〉腐植土である黒色土層と、黒色土と褐色土の混土層を主体とする。粘性があり、よく締まっている。

〈床・柱穴・施設〉後述する焼土を地床炉として把握した。その検出面が本住居の生活面と考えられる。床面は固く締まった黒色土の層で構成され、その厚さは7～8cmである。この下の面が基盤層である。平面形が完全に一致しており、重複や建替えと考えるにはやや不自然な感じは否めない。一応、掘り方および貼り床としておく。柱穴は検出されなかった。



第269図 XD4g 住居跡



(1218・1221を除く)

番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1216	X D 4 g 住	埋土	口唇部縄文施文。	R L R 横。粗縄文 ?				繊維混入。	II 1 a	215
1217	X D 4 g 住	埋土		L R × R L 第 1 種結束羽状縄文。				繊維混入。	II 1 c	215

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1219	X D 4 g 住	床面	敲磨器類 A 群	赤色凝灰岩	北上山地	15.4	7.6	4.0	700		II b 2	215
1220	X D 4 g 住	床面	敲磨器類 B 群	両輝石安山岩	奥羽山地	11.6	9.9	4.2	670		III	215
1221	X D 4 g 住	床面	石皿・台石類	不明	不明	25.7	20.1	6.1	1450			215
1222	X D 4 g 住		石皿・台石類	珪長質凝灰岩	北上山地	(28.9)	(19.3)	12.2	(9500)			215

第270図 X D 4 g 住居跡・出土遺物

〈炉〉南壁寄りに焼土が1基検出された。径40cm程度の歪な円形に分布し、厚さは最大10cmで、床面を構成する層が焼土化したもので、地床炉と考えられる。

遺物 (第270図、写真図版216)

〈土器〉埋土から組縄縄文、0段多条、横位の結束羽状縄文等の土器小片6点が出土した。内4点は繊維を含む。

〈石器〉1220は平坦部両面に、浅い凹凸がほぼ円形に分布する。1221は明瞭な使用痕は観察できないが床面から出土したものである。他にフレーク4点が出土している。

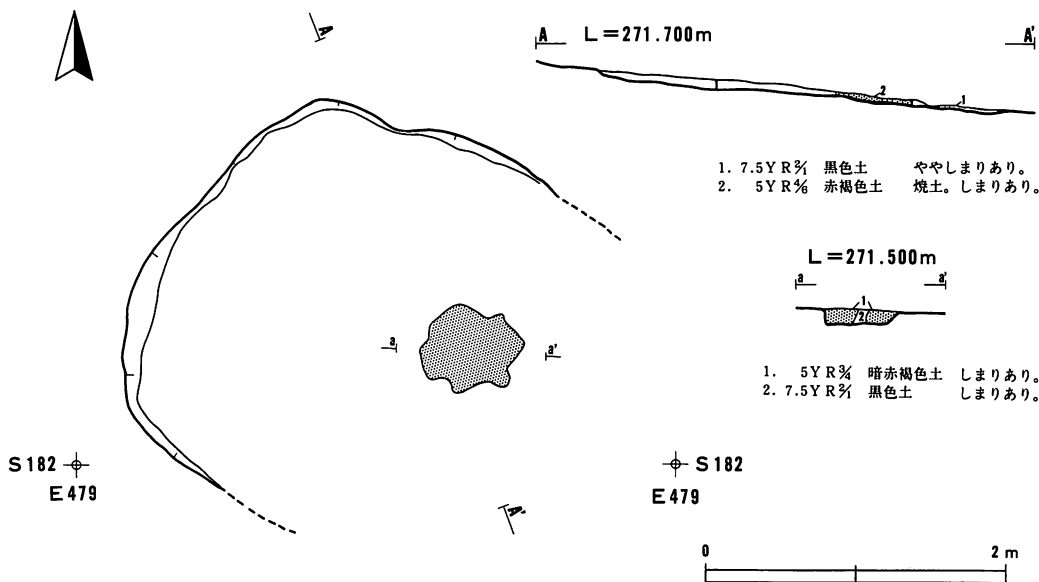
時期 出土土器から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

XD 6 g 住居跡 (遺構番号 161)

遺構 (第271図、写真図版100)

〈検出状況〉東尾根南斜面の谷へ移行部に位置する。黒色土と黄褐色土の混土层上面で焼土を検出し、その斜面上方において、僅かであるが壁の立上がりを確認し、住居跡と認定した。平面的な検出はできず、土の固さによって壁を決定した。埋土の方が明らかに軟質である。検出が遅れたことから、壁の大部分は掘り過ぎにより残存しない。

〈形状・規模〉不明であるが、長軸が等高線に斜交する長方形基調と推定される。規模は、東西は残存値で2.5m、南北は2.8mである。



第271図 XD 6 g 住居跡

<壁・壁高>黒色土と黄褐色土の混土層で、壁高は、西壁4cm、北壁6cmである。

<埋土>やや締まる黒色土であるが、壁よりは明らかに軟質である。

<床・柱穴・施設>黒色土と黄褐色土の混土層で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

<炉>地床炉が1基検出された。55×70cmの不整形の範囲に分布し、厚さは最大10cmである。一部攪乱がある。

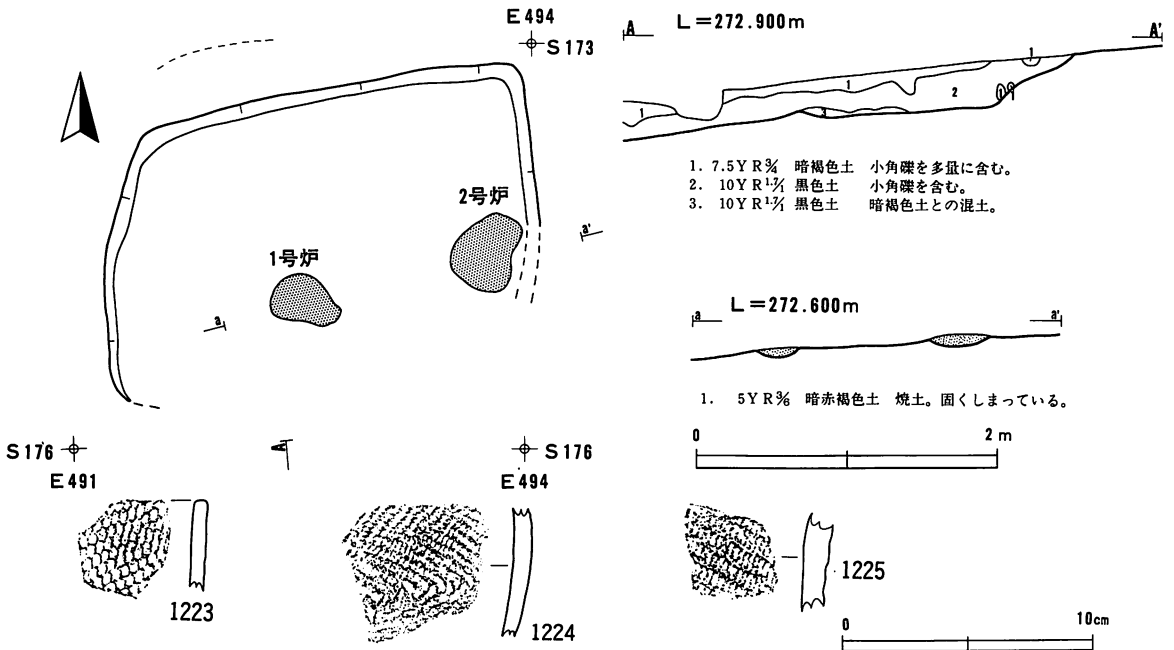
遺物 遺構内遺物はない。検出作業の段階で取り上げた土器が本住居に伴う可能性があるが明らかではない。

時期 特定する資料を欠き不明であるが、検出状況から縄文時代前期に属すると推定される。

X D 9 e 住居跡 (遺構番号162)

遺構 (第272図、写真図版100)

<検出状況>東尾根南東斜面に位置する。黒色の腐植土層を掘り込んでいる。埋土、壁とも黒



番号	出土地点	層位	文様	地文	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1223	X D 9 e 住	埋土		粗縄縄文。				繊維混入。	II 1 a	215
1224	X D 9 e 住	埋土		L R × R L 第 1 種 結束羽状縄文。				繊維混入。	II 1 c	215
1225	X D 9 e 住	埋土		R L 0 段多条。				繊維混入。	II 1 b	215

第272図 X D 9 e 住居跡・出土遺物

色土であり、平面的には検出できなかった。炉と想定される焼土の検出が先行し、その後斜面上方において壁を確認したが、埋土と明瞭に区別することは困難だった。土層断面では、立ち上がりを確認できる。南側は斜面のため流失していると考えられる。精査中に焼土が更に1基検出された。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、長軸が斜面に平行する長方形を基調とするものと推定される。規模は、東西2.9cm、南北は残存値で2mである。

〈壁・壁高〉埋没腐植層である黒色土で、埋土よりやや固めて褐色味を帯びる。緩やかに立ち上がる。壁高は、北壁30cmであるが、検出が遅れ15cm程さげてしまい、残存する壁は15cmである。西壁は7cmである。

〈埋土〉小角礫に富む黒色土を主体とする。

〈床・柱穴・施設〉埋土よりやや固めて褐色味を帯びる黒色土で、ほぼ水平で平坦である。柱穴は検出されなかった。

〈炉〉地床炉が2基検出された。いずれも断面形レンズ状で、やや締まり小角礫を含む。西側のものを1号炉、東側のものを2号炉とする。1号炉の焼土は、30×45cmの歪な楕円形状に分布し、厚さは最大6cmである。2号炉の焼土は、45×50cmの不整形に分布し、厚さは最大7cmである。

遺物（第272図、写真図版215）

〈土器〉埋土から200g出土したが、いずれも繊維を混入する。

時期 出土遺物から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

(2) 平安時代の竪穴住居跡

XI C 6 b 住居跡(遺構番号163)

遺構(第273～277図、写真図版101・102)

〈検出状況〉東尾根東側の谷頭凹型斜面に位置する。黒色土上面で検出した。斜面上方において煙出し部の構成礫が数個現れ、それより4.5 m離れた斜面下方に若干の焼土が検出されたことから本遺構の存在が分かった。埋土も壁も黒色土で殆ど区別がつかず、平面形は検出時点では不明であった。

〈形状・規模〉隅丸長方形で、規模は東西3.4 m、南北3.6 mである。床面積は、約12.3㎡である。

〈壁・壁高〉黒色土層～黒褐色土層で、上位は脆く崩れやすい。凹凸はなく、ほぼ直立する。壁高は、西壁49cm、東壁15cm、北壁55cmである。

〈埋土〉黒色土を主体とし、十和田 a 降下火山灰(付篇1参照)を粒状にごく少量含む。特に壁際に見られる。下位には焼土粒、細かい炭化材を含む。黒色土の下には厚さ5～10cmの焼土が面的広がりをもって分布する。焼土層の下は大小様々の炭化材が混入した黒色土層で、この最下層から板材が検出された。

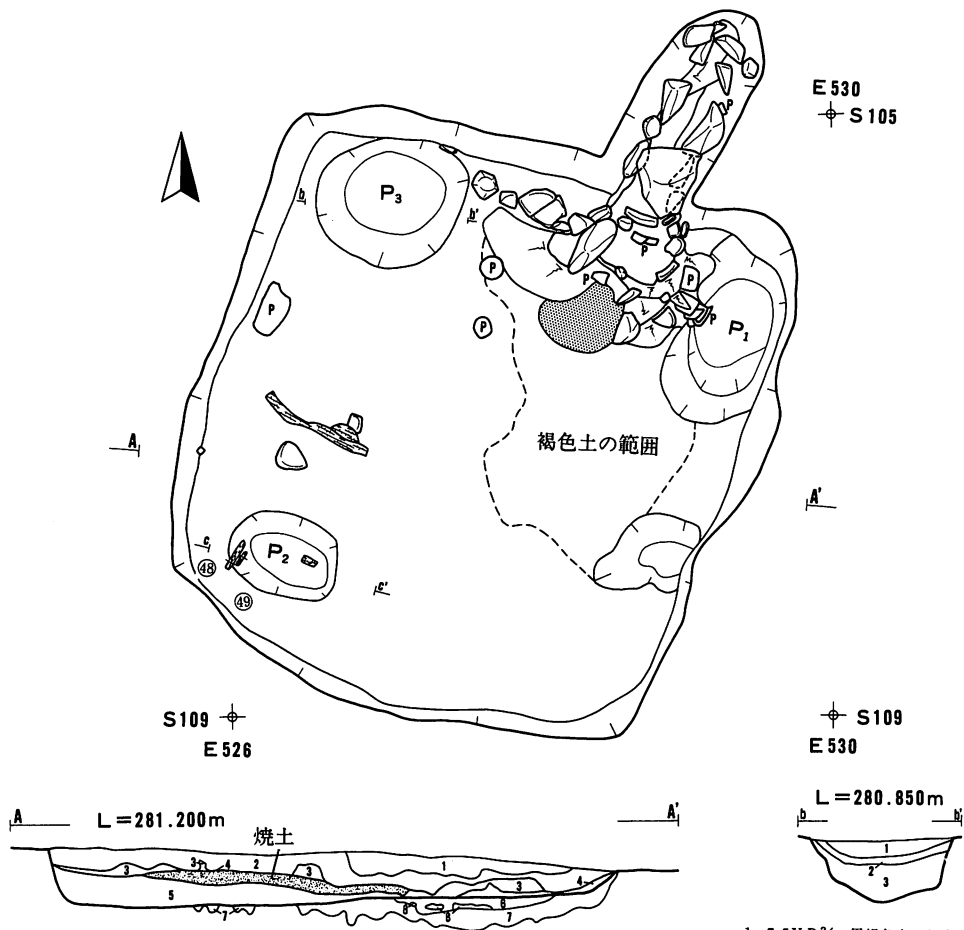
〈炭化材・焼土〉多量の炭化材が、床面から床面直上にかけて分布する。カマド周辺には細かいものが多く、脆弱でとりあげることができなかったが、現地での観察ではほとんどが径5 cm以下の細い丸材であった。西側と南側には、細かい炭化材の他に大型の材が比較的良好な状態で遺存している。この大型材は西側のものは南北方向に、南側のものは東西方向に整然と並ぶ。幅20cm程度、厚さ3～5 cm程度の柁目板で、南北方向には5～6列、東西方向には4列の単位が認められ、これらは敷板と考えられる。この敷板の上にもやや大きめの炭化材片がある。特に北壁際、西壁際に多く検出された。これらの断面も板材の様相を示している。これら炭化材の樹種は、(55～59)がクリの他は、すべてケヤキであると鑑定された。

焼土の分布は、カマド周辺と東壁付近には見られず、西側と南側に偏り、敷板の範囲とほぼ一致する。シルト質土が焼土化したもので固く締まっている。

これらのことから、本住居は焼失住居であると考えられる。

〈床・柱穴・施設〉北東四半分は、褐色土によって貼り床され、非常に固く締まっている。特にカマド周辺の床はガリガリとしている。この貼り床の部分に対応する位置に掘り方が検出された。西側には見られない。掘り方は深いところで20cm、貼り床として用いた褐色土は厚さ5～10cmである。西側と南側の敷板の下からは、丸太材1箇所、垂角礫が数箇所検出された。敷板の下の床面は、しまりを欠き極めて軟質である。柱穴・溝は検出されなかった。

土坑が3基検出された。いずれも本住居に伴うものである。P1は埋土中位に15×20cmの炭化



1. 10YR¹/₂ 黒色土 しまりなし。にぶい黄褐色土をブロック状に含む。
2. 10YR¹/₂ 黒色土 しまりあり。焼土粒、炭化物を含む。
3. 7.5YR²/₂ 黒褐色土 しまりあり。焼土粒、炭化物を含む。
4. 5YR²/₂ 明赤褐色土 焼土。しまりあり。
5. 7.5YR¹/₂ 黒色土 しまりなし。
6. 10YR²/₂ 明黄褐色土 褐色土、黒褐色土の混土。極めて固くしまっている。
7. 10YR²/₂ 黄褐色土 しまりあり。
8. 7.5YR²/₂ 黒褐色土 暗褐色土との混土。ややしまりあり。

1. 7.5YR²/₂ 黒褐色土 しまりなし。
2. 7.5YR¹/₂ 黒色土 しまりなし。
3. 7.5YR²/₂ 黒褐色土 しまりなし。

L = 281.000m



1. 7.5YR²/₂ 黒褐色土 黄褐色土、炭化物を含む。
2. 10YR²/₂ 褐色土 焼土。しまりなし。炭化物を含む。
3. 5YR²/₂ 赤褐色土 焼土。しまりなし。
4. 7.5YR²/₂ 黒色土 しまりなし。
5. 10YR²/₂ 黒色土 しまりなし。
6. 10YR¹/₂ 黒色土 黄褐色土を粒状に含む。

P	径	深さ	備	考
P1	52×68	53	土師器片が埋土全体にむら無く含まれている。	
P2	28×58	28	壁は外傾し、底部は浅皿状である。	
P3	38×56	45	本土坑の最上部から、磁石が出土した。	

0 2 m

第273図 XI C 6 b 住居跡(1)

材や、カマドの構成礫も混入する。上位からは繊維質の遺物が出土した。P2は、焼土の層にパックされた炭化材の層が薄く存在する。P3は、敷板の炭化材を取り除いた後に検出された。

〈カマド〉北壁中央より東寄りに位置する。煙道部長軸方向はN-24°-Eで、斜面に対しほぼ直交する。比較的良好な遺存状態である。焚口部から煙出し部まで約2.3 m、壁外は約1.4 mである。

西側の袖部にやや大きめの垂角礫を芯材として立て、側壁・天井部とも礫を構築材として用い、礫間の間隙を埋めるように土師器甕・坏などの破片を配して、シルト質粘土・シルト質土で全体を被覆している。東側袖部には芯材となる礫は見当たらず、全体として礫の位置に規則性を見出すことは困難である。西側袖部から西方向にはほぼ同規模の垂角礫が数個一直線上に並ぶが、褐色粘土を用いてカマド本体に向かって斜位に固定している。東側の土坑P1と接する部分には、土師器甕の破片を瓦を葺くように階段状に組み、崩落を防ぐように構築されている。

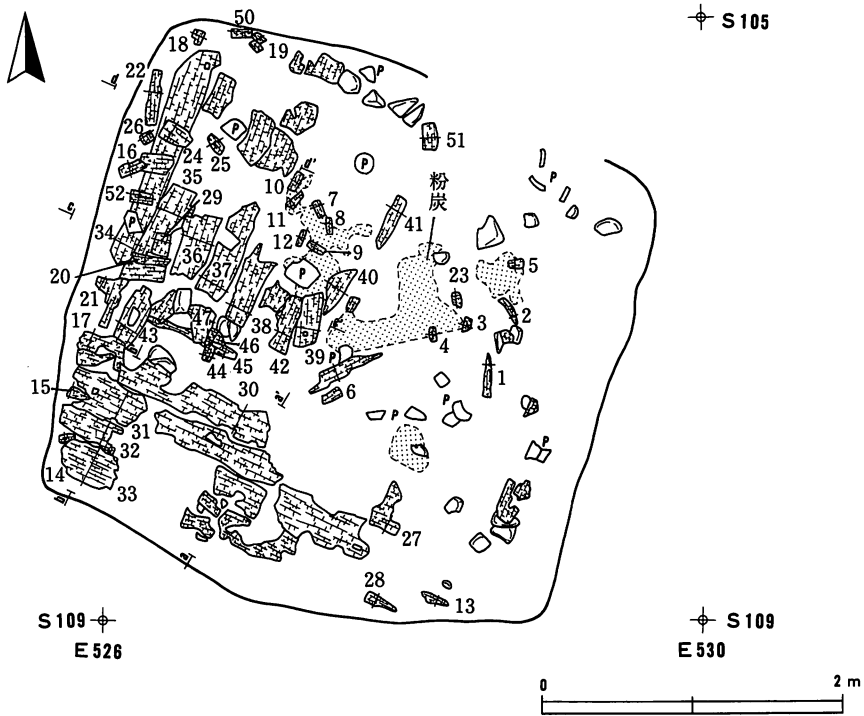
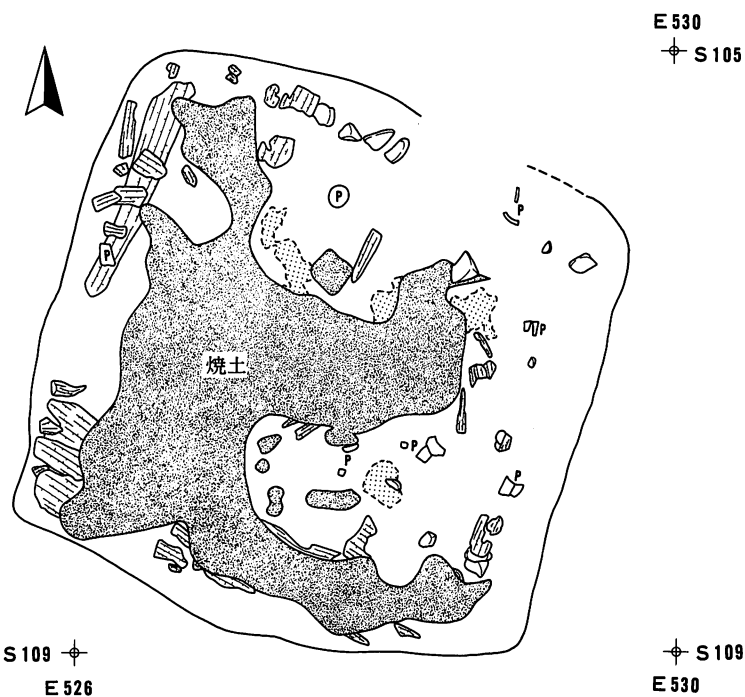
燃焼部の焼土は52×90cmの楕円形状に分布し、厚さは最大6 cmで、固く締まっている。支脚として10×10×15cmの垂角礫をたてる。煙道部は掘り込み式で、底面は緩やかに立ち上がった後、水平となり、煙出し部で下降し直立気味に立ち上がる。天井部と側壁は、偏平な垂角礫を材としてトンネル状に構築している。側壁の礫の掘り方は検出されないことから、掘り込んだ後に壁側に礫を押しつけただけの構造と考えられる。天井部は一部構築礫を欠くが、側壁の礫と対応するものがあったものと考えられる。天井部の構築礫の最大のものは、住居の壁の境界部にあり、40×55×12cmの規模である。

煙出し部は、礫を外周させ、褐色粘土質土で上部を固めているが、礫は原位置をとどめていないものがある。

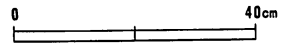
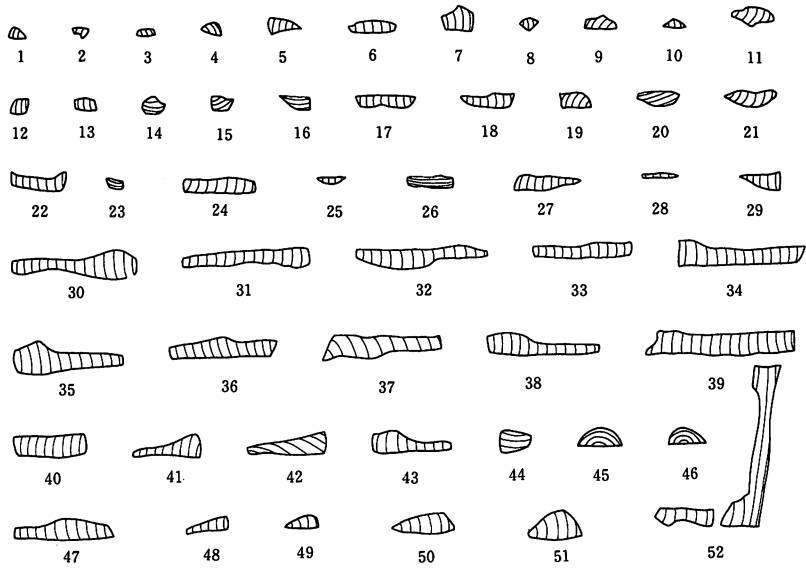
本住居で使用されている礫の石質は、支脚として用いられた礫1点のみをサンプリングした。その結果、北上山地古生界の赤色凝灰岩と鑑定された。他の礫も同質と思われる。

遺物（第278～281図、写真図版215～217・294）

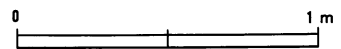
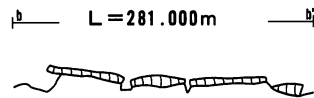
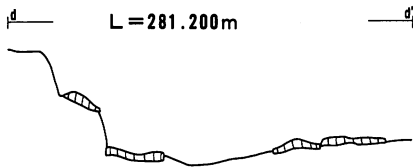
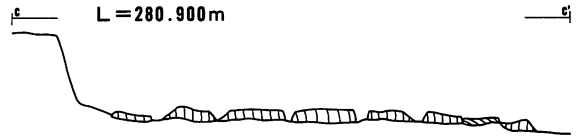
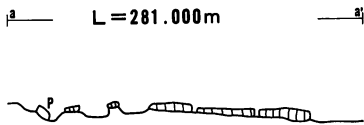
床面から多量の土師器と、砥石、釘状鉄製品が出土した。土師器の器種は、坏(1226～1235)・鉢(1236)・甕(1237～1247)である。1226～1229は内面ヘラミガキ後黒色処理されている。1226・1227には刻書文字がみられるが、これは焼成後に線刻されたものである。工具は鋭利な針状のものであると思われるが、刻みは表層のみで浅い。この2点は、他の坏より器高が高く、内湾気味に立ち上がる。底部はヘラケズリによって調整される。1228～1235は黒色処理のないものである。底部は回転糸切りの痕跡が顕著に残る。1236はロクロ成形による鉢である。甕はロクロ調整されているものは1241・1245・1247、他はロクロ不使用である。器形は1245がやや胴部が張る他は、おおむね長胴である。砥石は北西隅と西壁際から出土したものである。1248



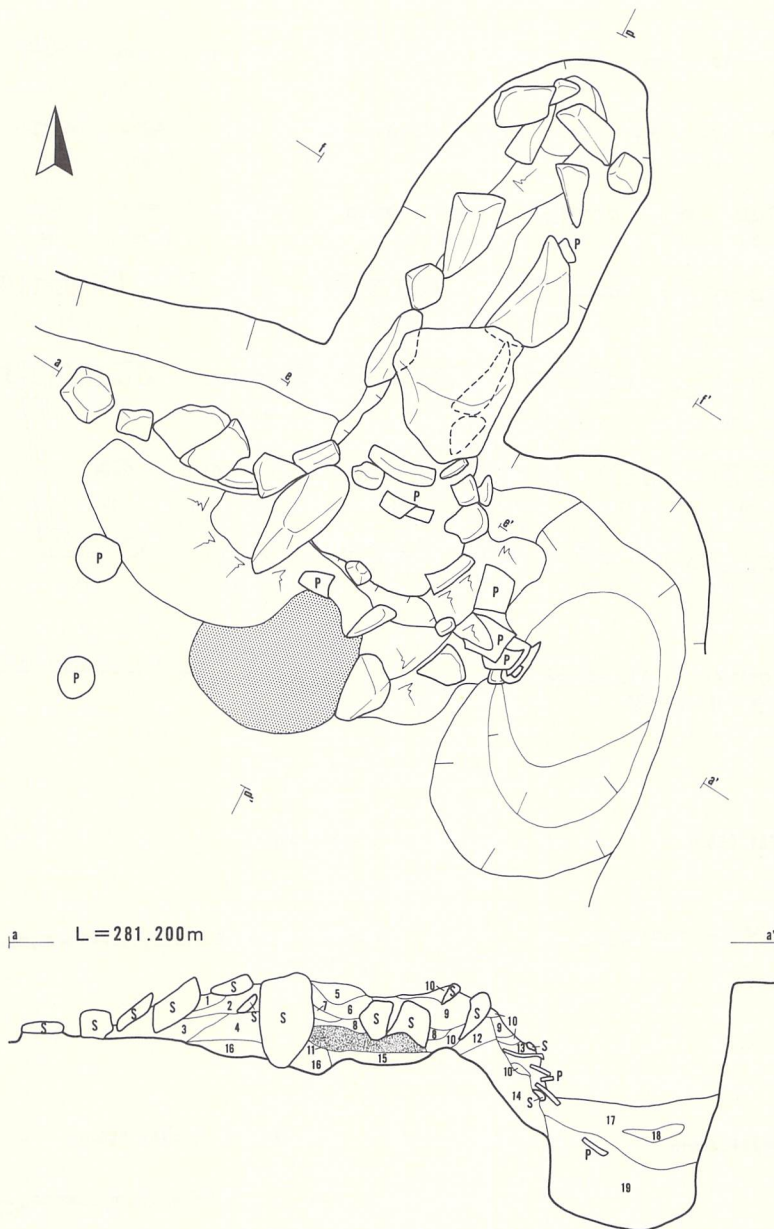
第274图 XI C 6 b 住居跡(2)



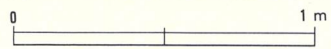
〈樹種〉 ケヤキ… 1～31、40～52
 クリ… 32～39



第275図 XI C 6 b 住居跡(3)



- | | | | | | |
|-------------------------|-------|---------------------------|--------------------------|------|-------------------------|
| 1. 10Y R $\frac{2}{6}$ | 黄褐色土 | 粘土質土。しまりあり。炭化物小角礫含む。 | 11. 5Y R $\frac{2}{6}$ | 赤褐色土 | 焼土。固くしまっている。(燃焼部焼土) |
| 2. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 | しまりなし。 | 12. 10Y R $\frac{2}{6}$ | 暗褐色土 | しまりなし。 |
| 3. 5Y R $\frac{2}{6}$ | 赤褐色土 | 粘土質土。しまりあり。明褐色土。 | 13. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 黒色土 | しまりあり。 |
| 4. 10Y R $\frac{2}{6}$ | 暗褐色土 | しまりあり。黄褐色粘土を含む。 | 14. 10Y R $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 | しまりあり。にぶい黄褐色土をブロック状に含む。 |
| 5. 5Y R $\frac{2}{6}$ | 明赤褐色土 | しまりあり。(カマド構築土) | 15. 10Y R $\frac{2}{6}$ | 暗褐色土 | しまりなし。 |
| 6. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 | ややしまりあり。 | 16. 10Y R $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 | しまりあり。 |
| 7. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 明褐色土 | 粘土質土。しまりなし。(崩落土) | 17. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 黒色土 | しまりあり。焼土粒、炭化物を含む。 |
| 8. 5Y R $\frac{2}{6}$ | 極暗褐色土 | しまりなし。 | 18. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 | しまりあり。焼土粒を多量に含む。 |
| 9. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 黒褐色土 | しまりなし。焼土粒、炭化物を含む。 | 19. 7.5Y R $\frac{2}{6}$ | 暗褐色土 | しまりあり。焼土粒、褐色土を含む。 |
| 10. 5Y R $\frac{2}{6}$ | 赤褐色土 | 焼土。粘土質土。固くしまっている。(カマド構築土) | | | |

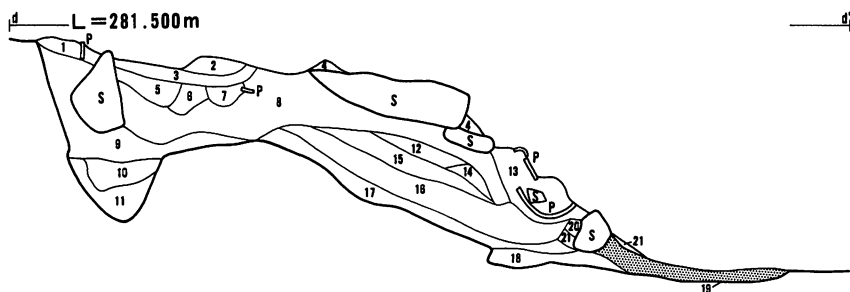


第276図 XIC6b住居跡(4)

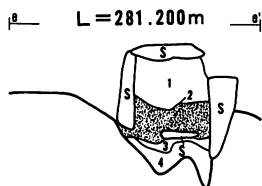
は多面を使用、1249は1面を使用している。1250・1251はほぼ同地点から出土した。鑑定の結果、砂鉄を原料とする鋼であることが判明した（付篇5参照）。

2539は炭化系塊である。P1の埋土上位、黒褐色土層から炭化材・土師器片・焼土粒と混在して出土した。極めて脆弱な状況であり、土と一緒に取り上げた。土を含めておよそ親指大きさほどの量である。周囲を丁寧に調べたが他には見当たらなかった。（付篇6参照）。

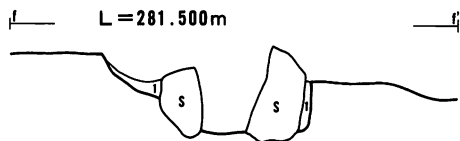
時期 出土遺物から、平安時代9世紀末から10世紀初めに属すると考えられる。



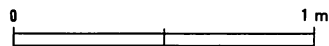
- | | | | |
|-------------------|------------------------|-------------------------------|-------------------------|
| 1. 10Y R% におい黄橙色土 | しまりなし。 | 12. 7.5Y R ¹ % 黒色土 | しまりなし。焼土粒を微量含む。 |
| 2. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。焼土粒を含む。 | 13. 10Y R% 黄褐色土 | 粘土質土。しまりあり。下位は焼成を受けている。 |
| 3. 10Y R% 黒褐色土 | しまりなし。 | 14. 5Y R% 暗赤褐色土 | しまりなし。焼成を受けている。 |
| 4. 10Y R% 黄褐色土 | 粘土質土。しまりなし。焼土粒を含む。 | 15. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。灰を含む。 |
| 5. 7.5Y R% 褐色土 | しまりなし。焼成を受けている。 | 16. 5Y R% 暗赤褐色土 | しまりなし。 |
| 6. 7.5Y R% 極暗褐色土 | しまりなし。 | 17. 7.5Y R% 黒褐色土 | しまりなし。下位に焼土粒を含む。 |
| 7. 7.5Y R% 黒褐色土 | しまりなし。焼土をブロック状に含む。 | 18. 7.5Y R ¹ % 黒色土 | しまりなし。 |
| 8. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。サラサラしている。焼土粒を含む。 | 19. 5Y R% 明赤褐色土 | 焼土。固くしまっている。 |
| 9. 5Y R% 暗赤褐色土 | ややしまりあり。 | 20. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。 |
| 10. 7.5Y R% 褐色土 | 粘土質土。しまりあり。 | 21. 5Y R% 暗赤褐色土 | ややしまりあり。 |
| 11. 7.5Y R% 黒色土 | ややしまりあり。 | | |



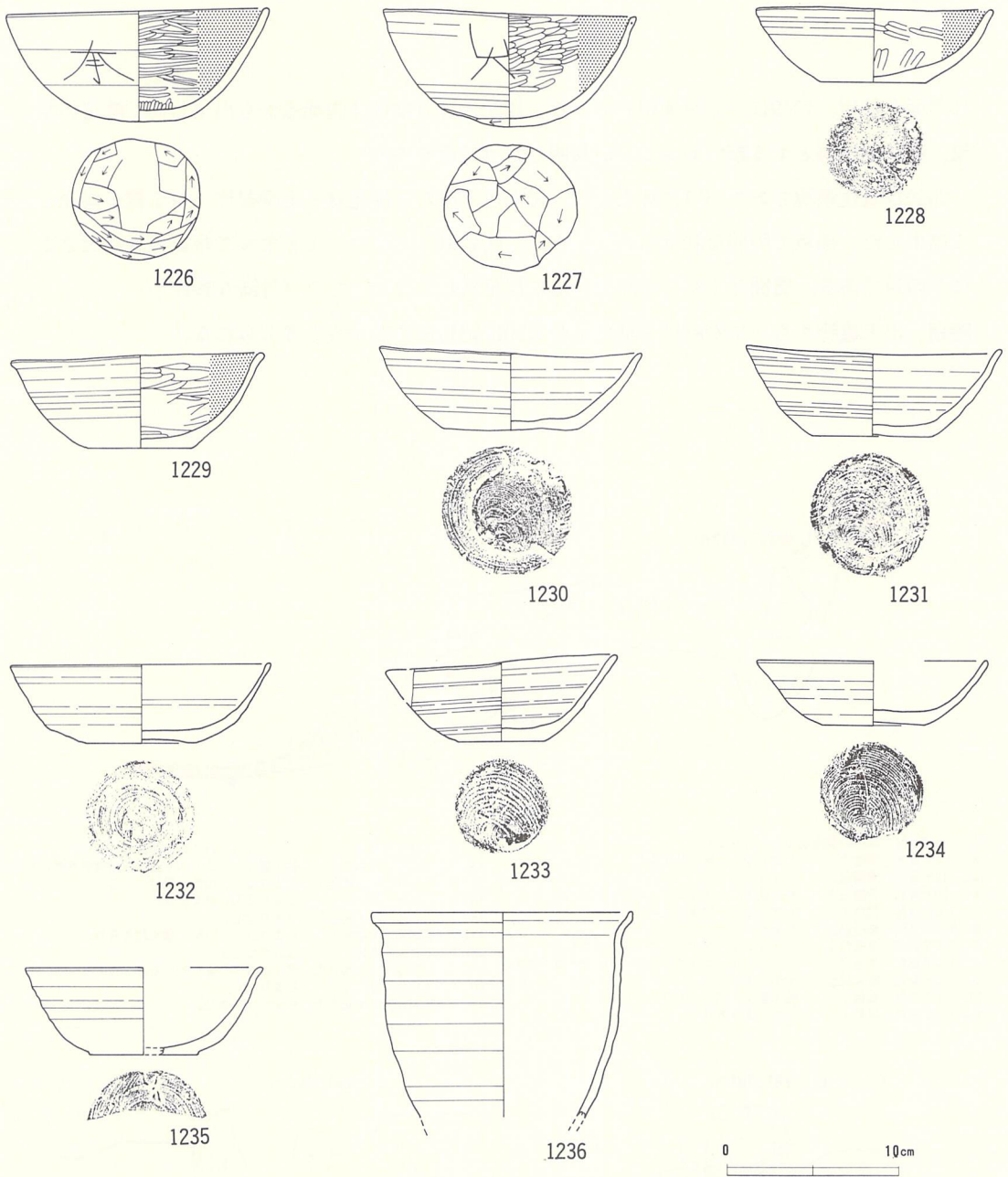
- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. 7.5Y R% 暗褐色土 | しまりなし。焼土粒を含む。 |
| 2. 5Y R% 赤褐色土 | 焼土。しまりなし。 |
| 3. 5Y R% 黒褐色土 | しまりなし。焼土粒を含む。 |
| 4. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。 |



- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 7.5Y R% 黒色土 | しまりなし。焼土粒を含む。 |
|----------------|---------------|

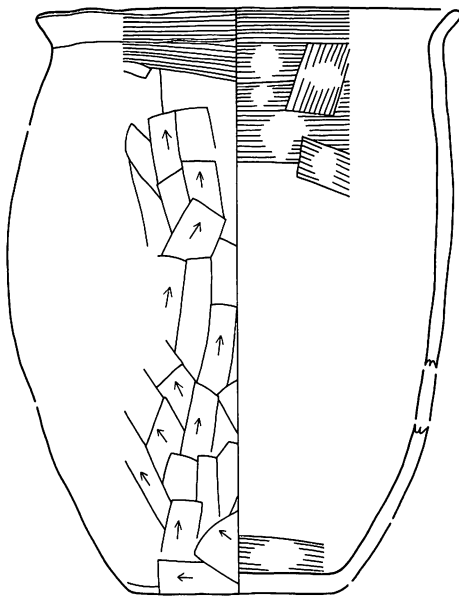


第277図 XI C 6 b 住居跡(5)

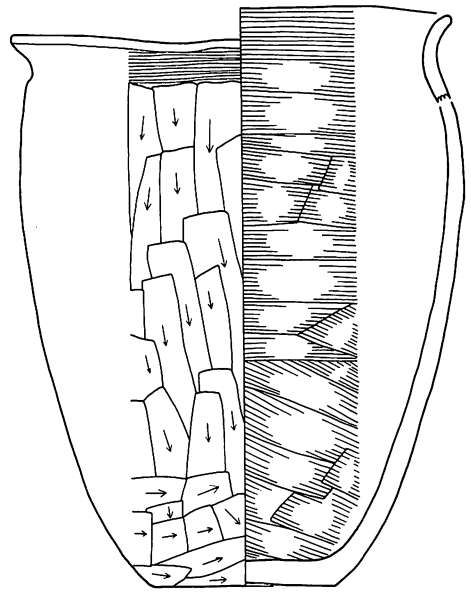


番号	出土地点	層位	調整	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1226	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	15.4	7.4	6.5	刻書土器	VII	215
1227	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	14.7	7.8	6.9	刻書土器	VII	215
1228	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部回転系切り。	13.9	6.0	4.3		VII	215
1229	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、内面黒色処理、ヘラミガキ、底部回転系切り。	14.8	6.4	5.5		VII	215
1230	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、底部回転系切り。	15.3	7.5	5.0		VII	216
1231	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、底部回転系切り。	14.9	6.9	5.3		VII	216
1232	XI C 6 b 住	カマド	ロクロ、底部回転系切り。	15.2	6.7	4.6		VII	216
1233	XI C 6 b 住	床面	ロクロ、底部回転系切り。	(13.5)	5.5	5.0		VII	216
1234	XI C 6 b 住	カマド	ロクロ、回転系切り。	(13.4)	(6.0)	3.7		VII	216
1235	XI C 6 b 住	カマド	ロクロ、回転系切り。	(13.8)	(6.3)	5.1		VII	216
1236	XI C 6 b 住	カマド	ロクロ	(15.2)	-	(12.0)		VII	216

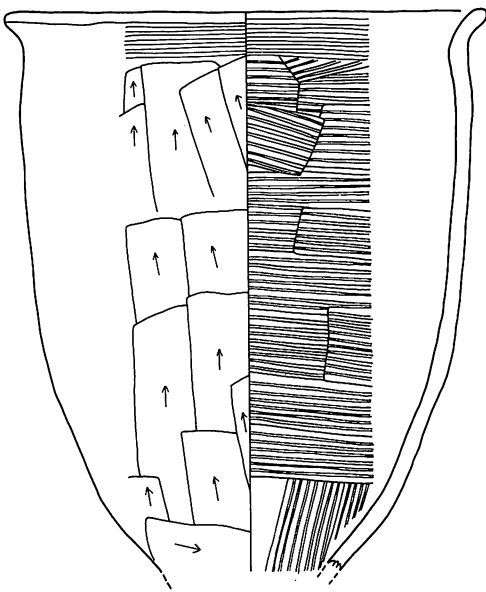
第278図 XI C 6 b 住居跡出土遺物(1)



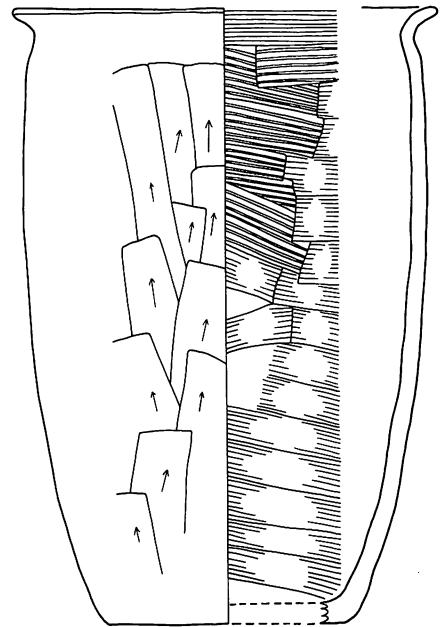
1237



1238



1239

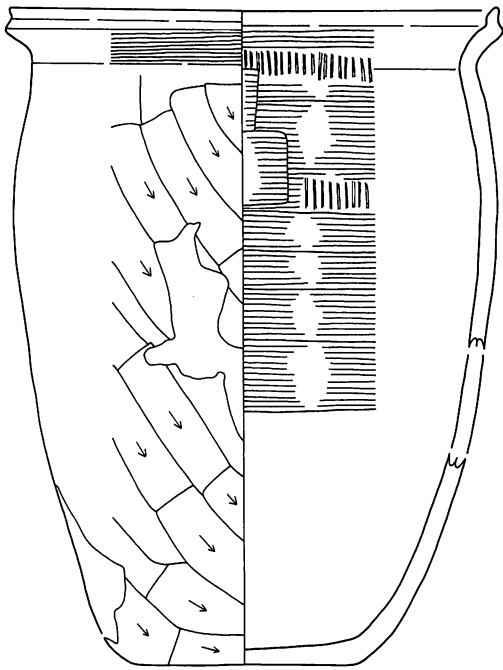


1240

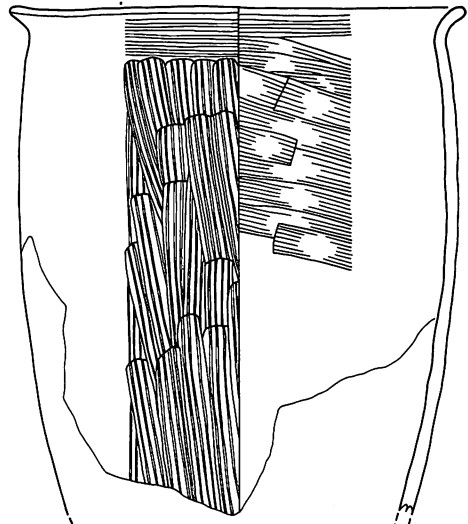
0 10cm

番号	出土地点	層位	調整	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1237	XI C 6 b 住	床面	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	22.6	10.9	31.2		VII	216
1238	XI C 6 b 住	床面	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	23.4	9.6	30.5		VII	216
1239	XI C 6 b 住	カマド	外面ケズリ、内面ハケメ 、口縁部内外面ヨコナデ。	(25.6)	-	(30.0)		VII	216
1240	XI C 6 b 住	カマド	外面ケズリ、内面ハケメ ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	(22.6)	(12.6)	33.0		VII	216

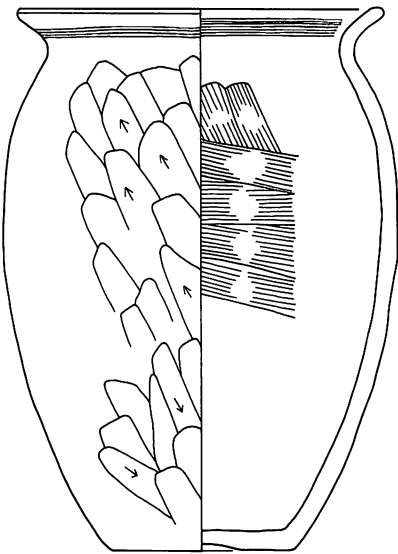
第279図 XI C 6 b 住居跡出土遺物(2)



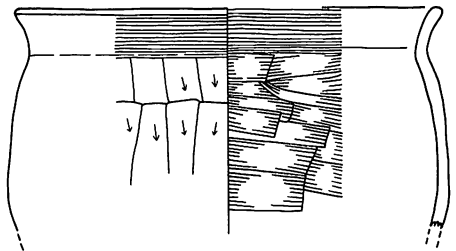
1241



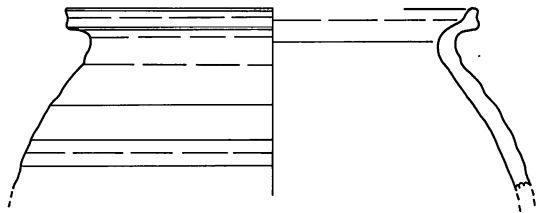
1242



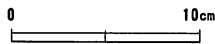
1243



1244

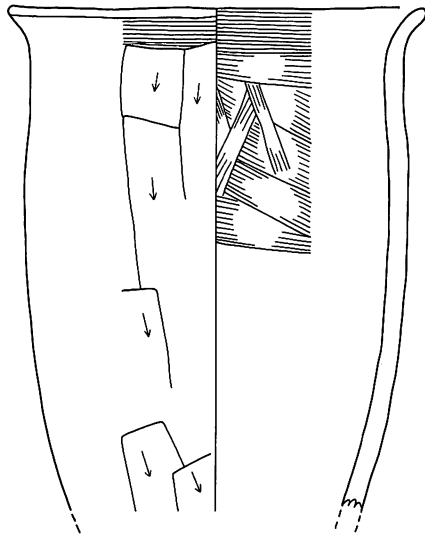


1245

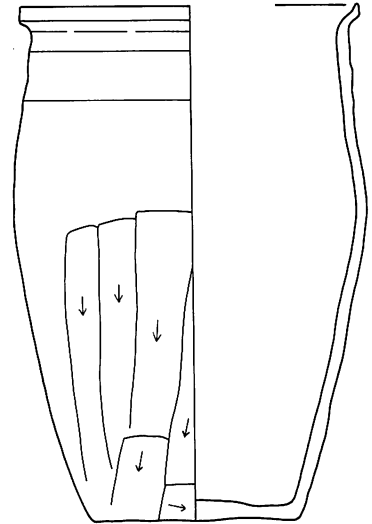


番号	出土地点	層位	調整	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1241	XI C 6 b 住	カマド	ロクロ、外面ヘラケズリ、内面ハケメ ナデ。	25.9	12.0	35.0		VII	217
1242	XI C 6 b 住	カマド	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	(24.3)	-	(27.0)		VII	217
1243	XI C 6 b 住	床面	外面ヘラケズリ、内面ナデ、ロクロ調整、口縁部ヨコナデ。	19.3	9.5	29.1		VII	217
1244	XI C 6 b 住		外面ケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	(22.6)	-	(11.7)		VII	217
1245	XI C 6 b 住	カマド	ロクロ。	(22.0)	-	(9.5)		VII	217

第280図 XI C 6 b 住居跡出土遺物(3)

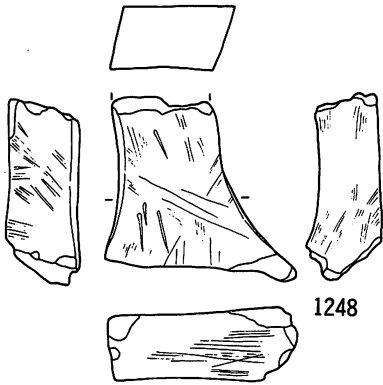


1246

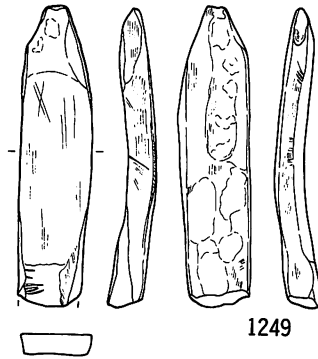


1247

0 10cm



1248



1249

0 5cm



1250



1251

番号	出土地点	層位	調整	内面ナデ、	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1246	XI C 6 b 住	床面	外面ケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。		22.0	—	(27.0)		Ⅶ	217
1247	XI C 6 b 住	床面	外面クロク、ケズリ、内面不明。		(18.0)	11.0	27.5		Ⅶ	217

番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1248	XI C 6 b 住	床面	砥石	珪長質細粒凝灰岩	奥羽山地	(6.8)	(6.8)	2.8	(165)	側面の3面がよく使用され、滑らかな曲面を形成する。		217
1249	XI C 6 b 住	床面	砥石	珪長質凝灰岩	北上山地	(11.9)	2.9	0.8	(55)	主な使用面は滑らかな曲面を形成する。		217

番号	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1250	XI C 6 b 住	床面	釘?	(2.2)	0.7	0.3	(1.44)			217
1251	XI C 6 b 住	床面	釘?	(3.6)	0.5	0.3	(1.77)			217

第281図 XI C 6 b 住居跡出土遺物(4)

XI C 9 a 住居跡 (遺構番号164)

遺構 (第282・283図、写真図版103・104)

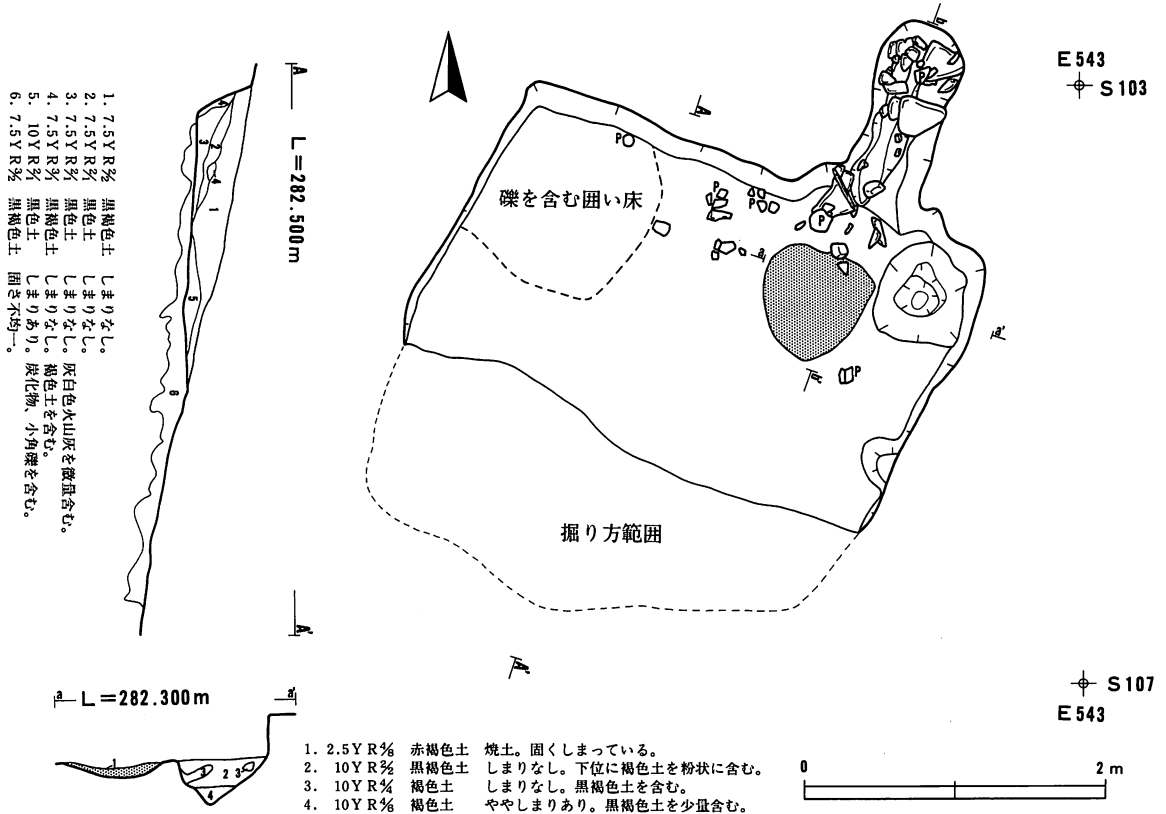
〈検出状況〉東尾根東側の谷頭凹型斜面に位置する。表土直下、基盤層への漸移層である黒色土と黄褐色土の混土層上面で煙出し部の構築礎を検出した。西側は、倒木痕の黒色土を壁とする。南側は斜面のため流失し、掘り方のみ残存する。

〈形状・規模〉南側は不明であるが、隅丸方形と推定される。規模は、東西3.2 m、南北は残存値で2 m、掘り方の範囲は南北3.2 mまで確認できる。

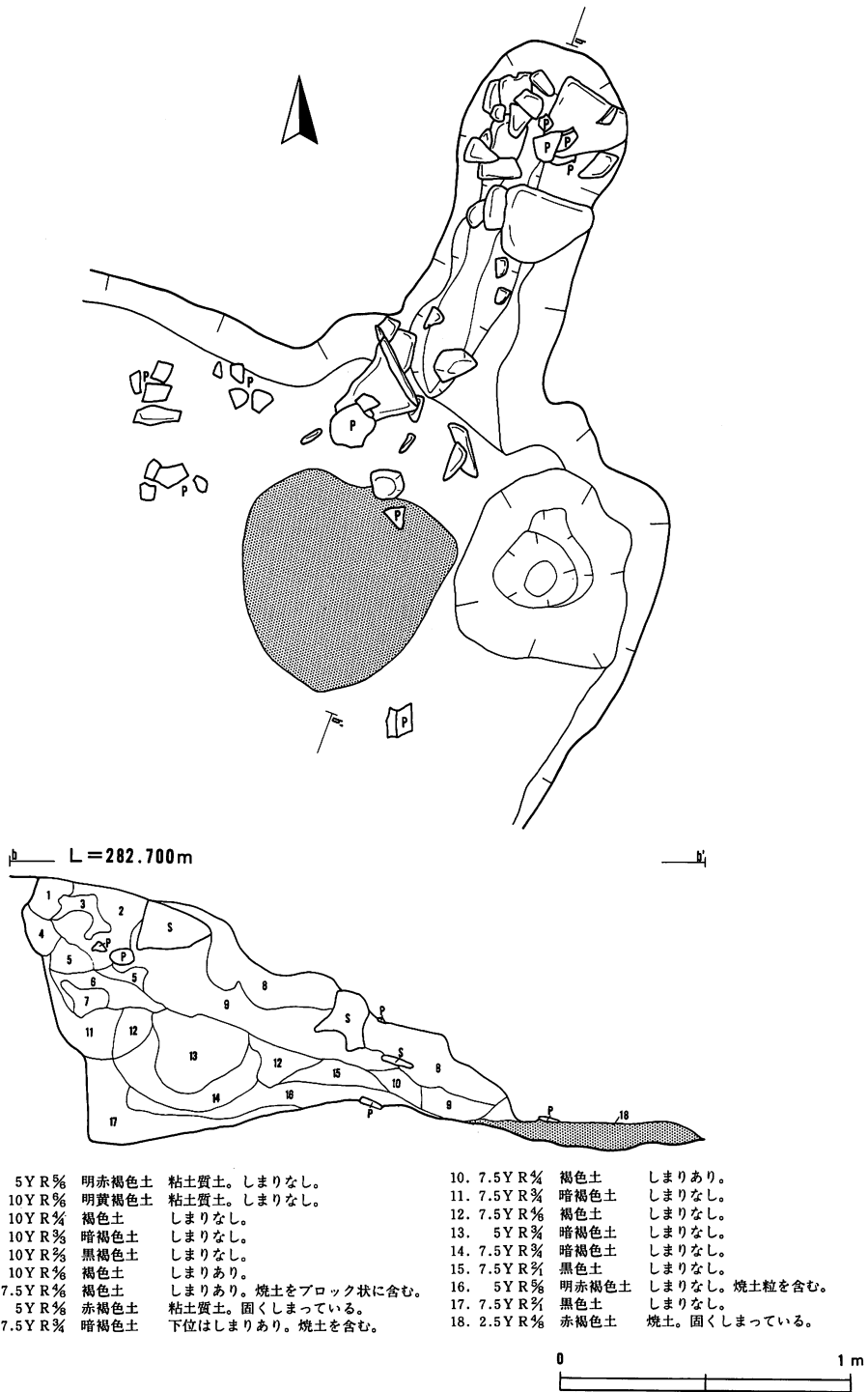
〈壁・壁高〉上位は黒色土と黄褐色土の混土層を、下位は基盤層を壁とし、ほぼ直立する。壁高は、東壁14cm、西壁20cm、北壁33cmである。

〈埋土〉黒色土～黒褐色土が主体で、一部崩落土を含む。第3層には灰白色火山灰の微細粒がごく少量混入する。

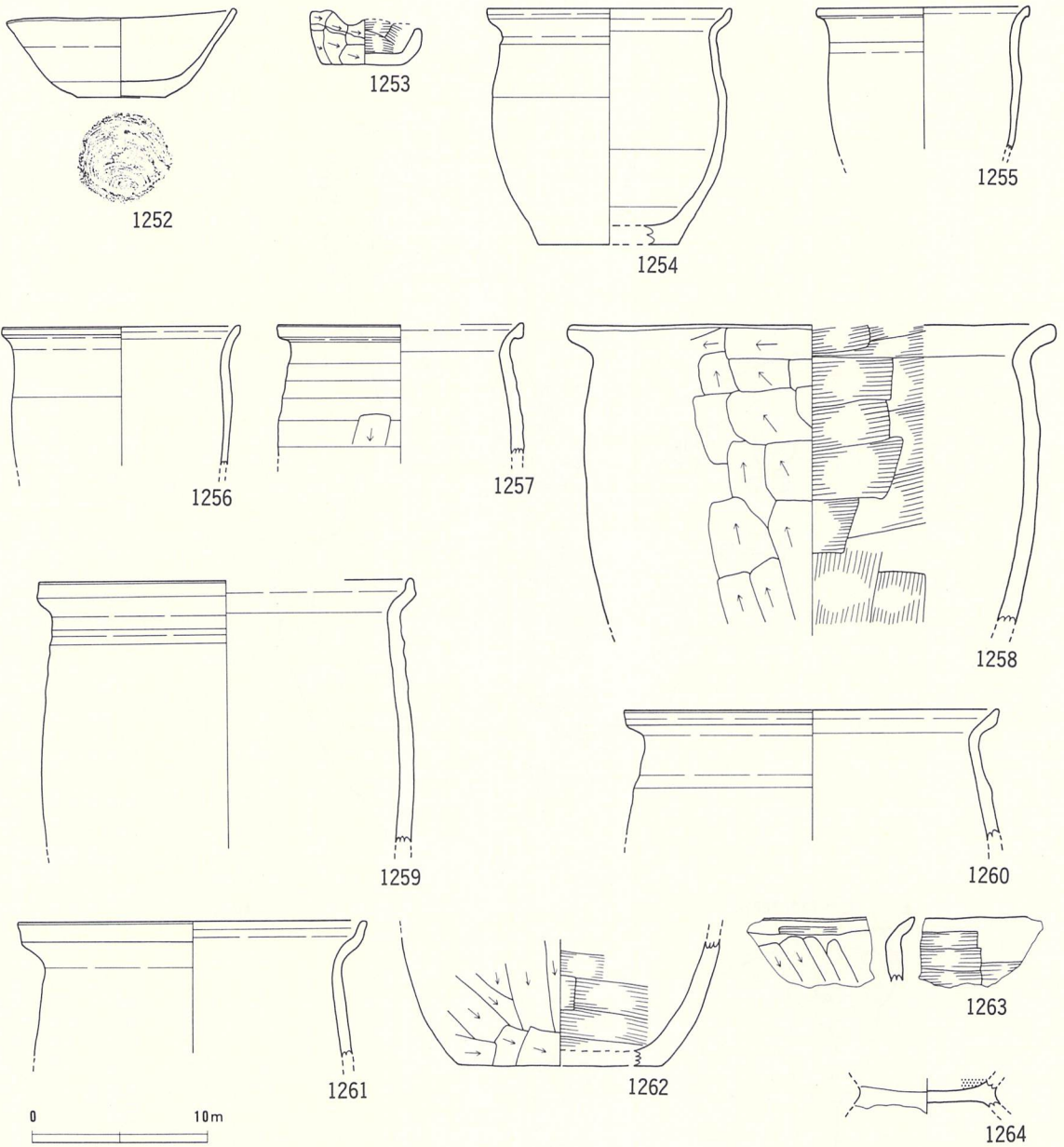
〈床・柱穴・施設〉北西四半部は、基盤層を直接床とし、礫混じりで固い。東側・南側は暗褐色土～褐色土によって貼り床されている。ガリガリとした固さはない。掘り方は斜面上方では深いところで10cm程度であるのに対し、下方では推定床面より30cmの深さになる部分がある。



第282図 XI C 9 a 住居跡(1)



第283図 XI C 9 a 住居跡(2)



番号	出土地点	層位	調整	口径	底部径	器高	備考	分類	写真
1252	XI C 9 a 住	床面	ロクロ、底部回転糸切り (調整有?)	10.1	5.0	5.0		Ⅶ	218
1253	XI C 9 a 住	床面	手づくね	6.4	4.6	3.0		Ⅶ	218
1254	XI C 9 a 住	煙道部	ロクロ	14.0	{ 8.0}	13.5		Ⅶ	218
1255	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	12.2	-	(8.2)		Ⅶ	218
1256	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	13.6	-	(8.0)		Ⅶ	218
1257	XI C 9 a 住	埋土下位	ロクロ	(14.0)	-	7.5		Ⅶ	218
1258	XI C 9 a 住	燻出部	外面ケズリ、内面ナデ。	(28.0)	-	(17.0)		Ⅶ	218
1259	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	(21.4)	-	(15.2)	煙出部	Ⅶ	218
1260	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	11.4	-	(7.1)		Ⅶ	218
1261	XI C 9 a 住	床面	ロクロ	20.0	-	(7.7)		Ⅶ	218
1262	XI C 9 a 住	煙道部	外面ケズリ、内面ナデ。	-	(11.6)	(7.3)		Ⅶ	218
1263	XI C 9 a 住	堀方埋土	外面ケズリ、内面ナデ。	-	-	-		Ⅶ	218
1264	XI C 9 a 住	Q 1 埋土上位	ロクロ、内面黑色処理。	-	-	-		Ⅶ	219

第284図 XI C 9 a 住居跡出土遺物

カマドの東脇に土坑を検出した。規模は、開口部径60×66cm、深さ33cm、歪な摺鉢状の形状で、締まりを欠く黒褐色～褐色土を埋土とする。東壁のほぼ中央部に固く締まった褐色土が盛り上がった状態で壁と繋がる。柱穴は検出されなかった。

〈カマド〉北壁中央より東寄りに位置する。煙道部長軸方向はN-25°-Eである。焚口部から煙出し部まで約2.35m、壁の外は約1.1mである。西側煙道部入り口の構築材と想定される礫は、長さ30cm、幅20cm、厚さ15cmで、壁にも焼成痕が観察されることから、原位置を保っているものと思われる。この礫の掘り方は確認されず、壁に押し付けただけの構造である。他の部分はすべて破壊され、構築礫や土器片が原位置をとどめずに散在・残存する。燃焼部西側に焼土塊と粘土質シルトの混交した層が分布し、土師器片も混入する。意図的に破壊したものかと思われる。

燃焼部焼土は、径70cm程度の歪な円形に分布し、厚さは最大で10cmである。基盤層が焼土化したもので固く締まっている。煙道部は底面が淡く焼成を受けている他、最下層の第16層には天井部の焼土が崩落して混入している。第17層は灰を含みきわめて脆い。第8層、第9層では暗褐色シルトの中に、褐色粘土質シルトの焼成痕がブロック状に観察される。これらのことから、基盤層を掘り込み、天井部を暗褐色シルトと褐色粘土質シルトで構築したものと考えられる。煙出し部付近には25×25×10cmの垂角礫をはじめ、大小十数個の礫と土師器片が集中しているが、規則性は観察されなかった。

燃焼部付近の礫は同一石質と考えられ1点のみ鑑定した結果、北上山地古生界赤色凝灰岩であった。煙出し部には奥羽山地新第三系中新統の両輝石安山岩の角礫が1点混入していた。

遺物 (第284図、写真図版218・219)

出土した遺物は、土師器の坏 (1252・1264)、鉢 (1254～1256)、甕 (1257～1263)、手捏ね土器 (1253) である。多くはロクロを用いている。1264は高台付き坏の欠損品である。内面は黒色処理され、高台部はハの字状に開くが詳細は不明である。

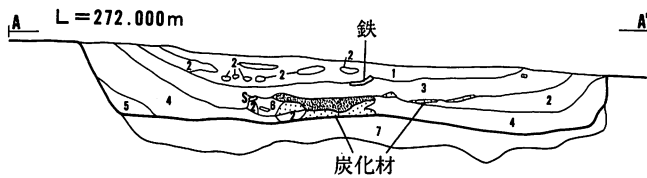
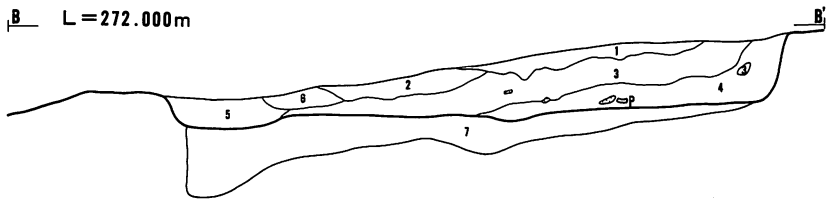
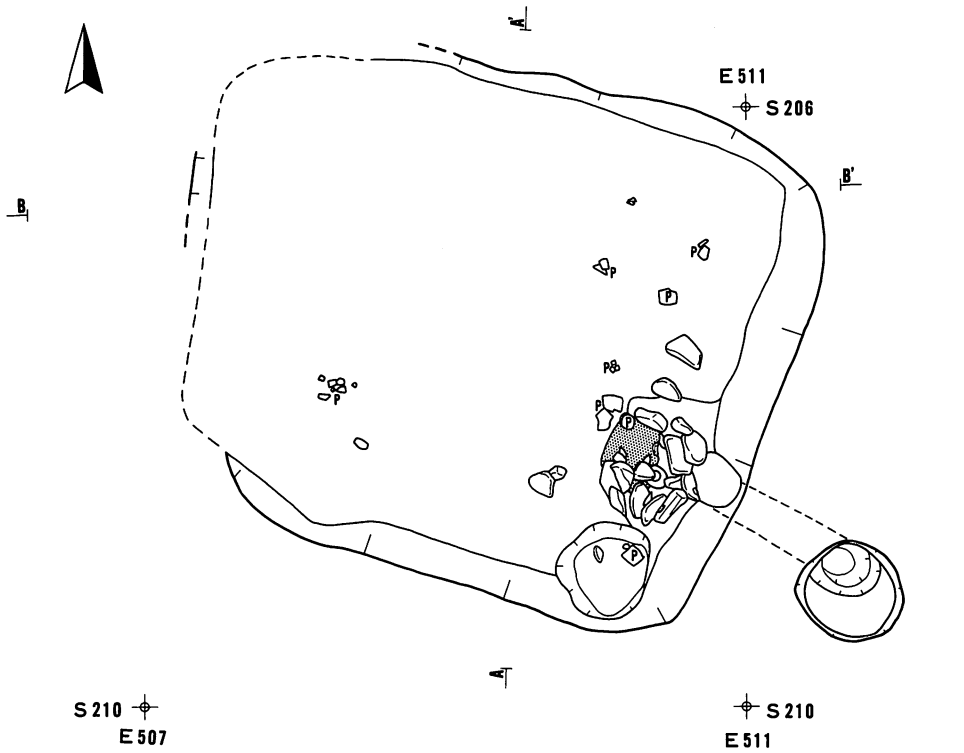
時期 出土遺物から、平安時代9世紀末から10世紀初めに属すると考えられる。

XI E12 b 住居跡 (遺構番号165)

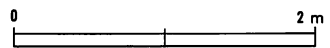
遺構 (第285～287図、写真図版104・105)

〈検出状況〉C区西斜面に位置する。表土直下の黒色土層上面で、炭化材片を含む黒褐色土が矩形に広がり、その内側にほぼ円形の黒色土の広がることから検出した。南側は、壁と埋土の区別が不明瞭で掘り過ぎてしまった。土層断面で立ち上がりを確認し、本住居の範囲を確定した。

〈形状・規模〉隅丸台形で、南北3.4m、東西4mである。



1. 10Y R¹/₂ 黒色土 しまりなし。
2. 10Y R²/₅ 黒褐色土 しまりなし。
3. 10Y R²/₅ 黒褐色土 しまりなし。焼土粒、炭化材を含む。
4. 10Y R²/₅ 黒褐色土 しまりなし。
5. 10Y R²/₅ 黒色土 固くしまっている。褐色土を含む。
6. 10Y R¹/₂ 黒色土 黒褐色土との混土。しまりなし。
7. 10Y R¹/₂ 黒色土 褐色土との混土。



第285図 XI E 2 b 住居跡(1)

〈壁・壁高〉上位は黒色土層、下位は基盤層である黄褐色土で、ほぼ直立する。壁高は、東壁60cm、西壁19cm、南壁29cm、北壁39cmである。

〈埋土〉上位は腐植土である黒色土、下位は炭化材の細片・焼土粒を含む黒褐色土が主体である。レンズ状に堆積する。埋土上位および下位に、十和田 a 降下火山灰（付篇 1 参照）が粒状に混入する。

〈焼土・炭化材〉床面直上の住居中央部南北方向に、焼土が部分的に分布する。厚さは最大で10cm程度で、締まりを欠く。焼土の上または下から炭化材が検出された。住居中央部南北方向に多く、概ね住居中央に向かって放射状の分布を示し、木目の方向も同様である。これらのことから本住居は焼失住居と考えられる。これら炭化材の樹種は、11がナラの他はすべてクリであった。

〈床・柱穴・施設〉全体規模の掘り方を持ち、黒色土と褐色土の混土で貼り床する。ややおおきめにうねるような凹凸がある。

カマドの右脇に土坑が検出された。規模は、開口部径60×60cmの歪な円形で、深さは30cmである。底面から炭化材の細片と土師器片が出土した。

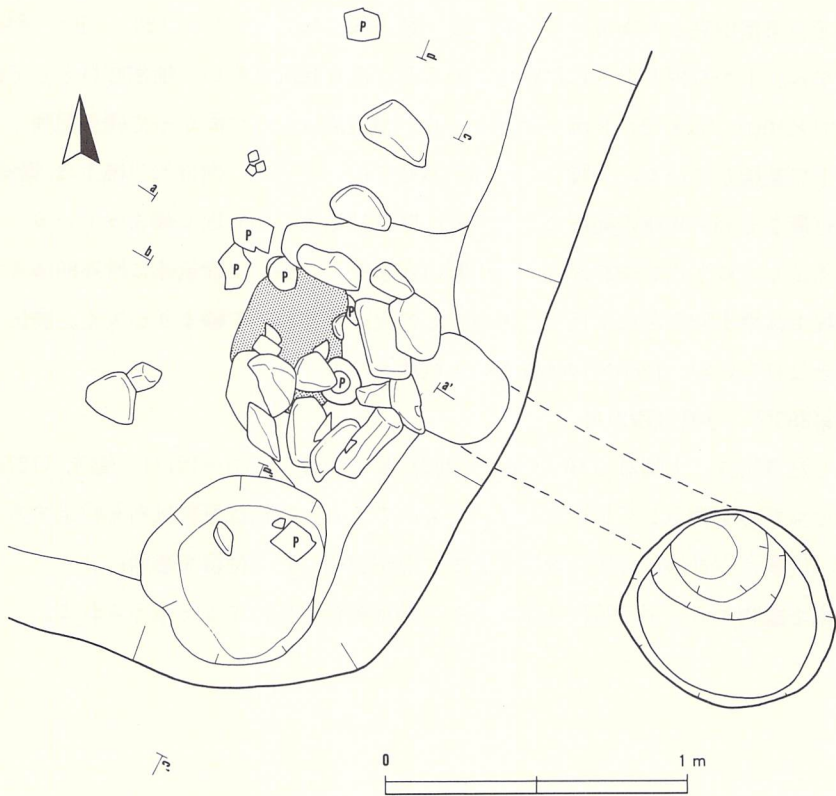
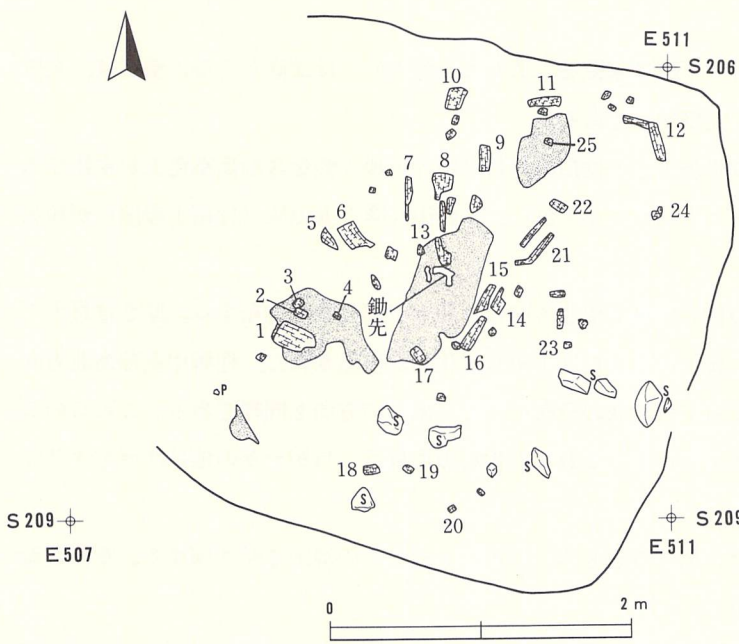
〈カマド〉東壁中央より南寄りに位置する。煙道部長軸方向はN-120°-Eで、斜面に対しほぼ直交する。上から押し潰された状態であるが、遺存状況は良い。袖部芯材として偏平な角礫(25×34×10cm、25×42×8cm)を直立させ、煙道部入り口に向かって礫を配列し、褐色粘土質シルトで被覆している。支脚として坏をふせて用いている。燃焼部の焼土は、構築礫の内側、支脚の位置まで35×40cmの範囲に分布する。厚さは最大13cmで固く締まっている。

煙道部はくりぬき式で径25cm程度の円形の穴を穿ち、やや下降気味に壁外80cmまで至り上昇する。埋土は焼土粒を含む褐色土と黒色土との混土できわめて締まりを欠く。煙出し部には特に施設を設けないが、径60×70cm程度の土坑状となる。

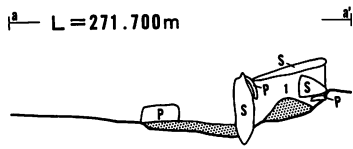
遺物（第288図、写真図版219）

出土した遺物は、土師器の坏（1265～1267）および甕（1268～1271）、鋤先（1272）である。1266はカマドの支脚として用いられていたものである。1272は原料鉱石を特定することはできないが、炭素含有量の低い鍛造鉄器であることが判明した（付篇 5 参照）。

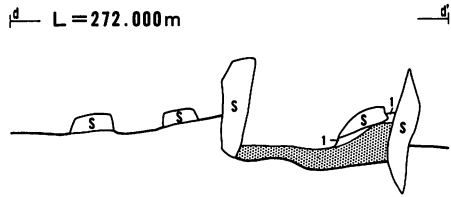
時期 出土遺物から、平安時代 9 世紀末から 10 世紀初めに属すると考えられる。



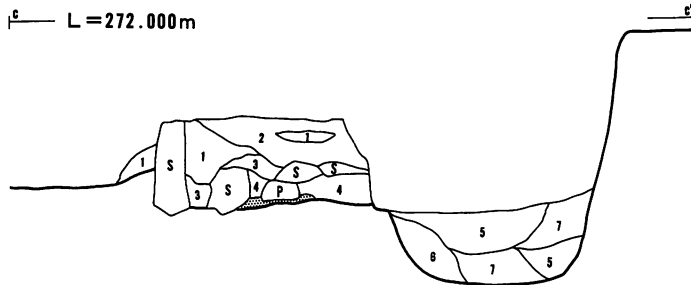
第286図 XI E 2 b 住居跡(2)



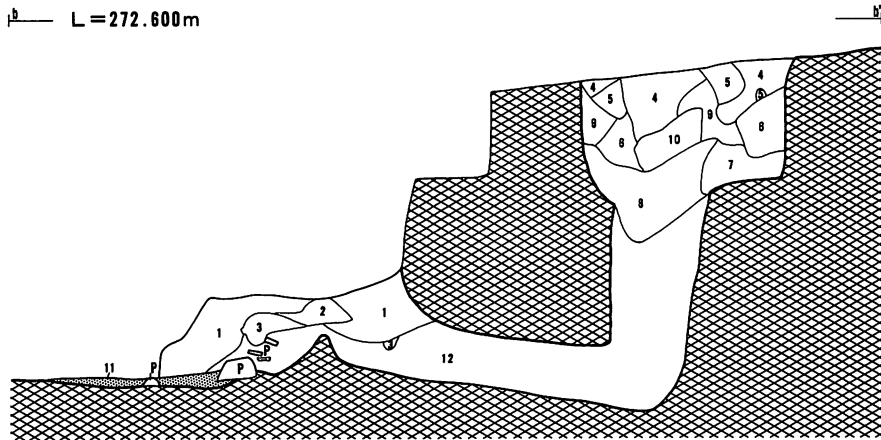
1. 10Y R% 褐色土 黒色土との混土。しまりなし。



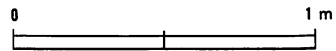
1. 10Y R% 褐色土 黒色土との混土。しまりなし。



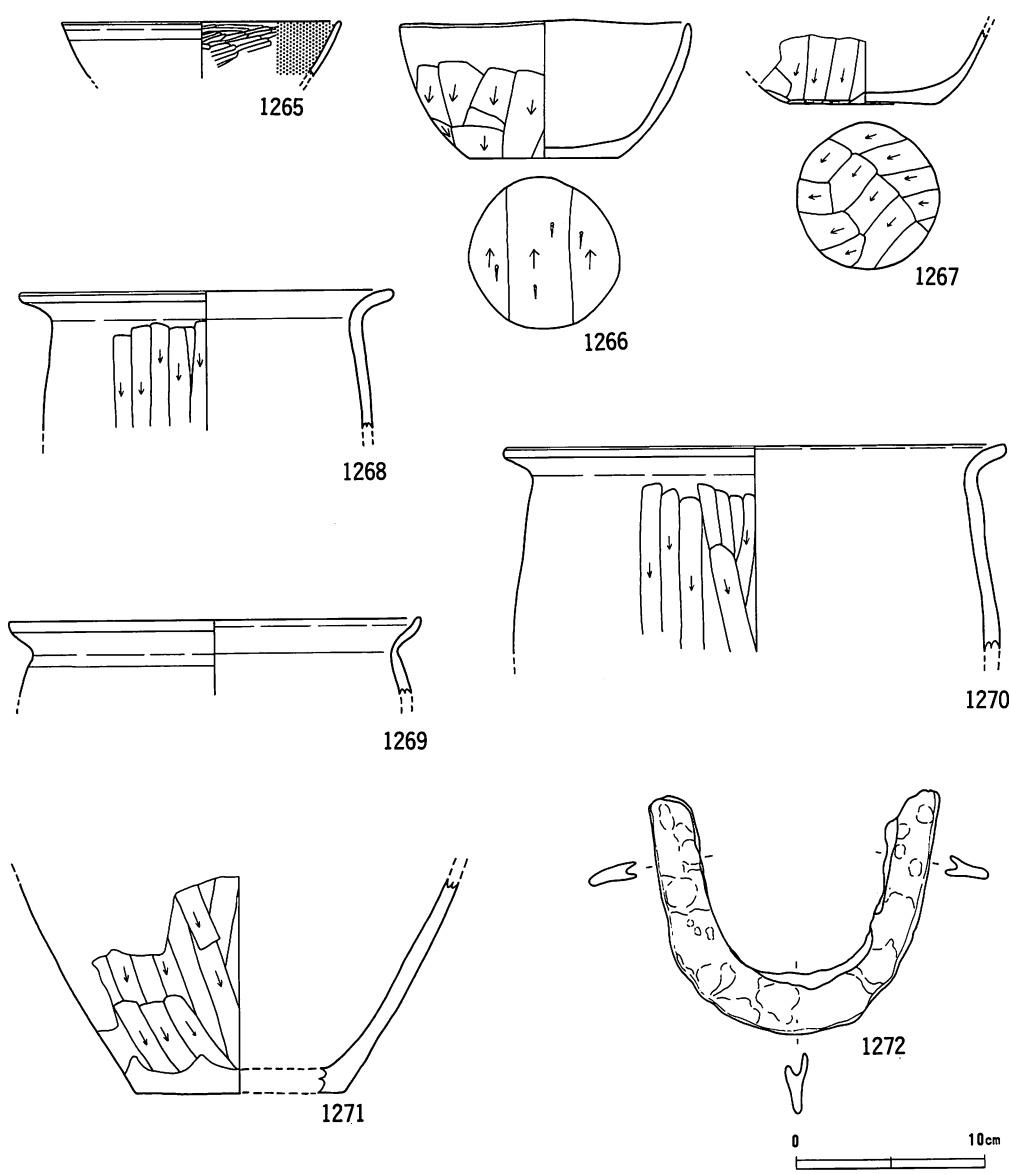
- 1. 10Y R% 黒褐色土 褐色土との混土。しまりなし。
- 2. 10Y R% 黒色土
- 3. 10Y R% 褐色土 粘土質土。しまりあり。(カマド構築土)
- 4. 10Y R% 極暗褐色土
- 5. 10Y R^{1/2}% 黒色土 しまりなし。
- 6. 10Y R% 黒色土 しまりなし。
- 7. 10Y R^{1/2}% 黒色土 褐色土との混土。しまりなし。



- 1. 10Y R% 黒色土 しまりなし。
- 2. 10Y R% 黒色土 赤褐色土を含む。
- 3. 10Y R% 褐色土 粘土質土。しまりあり。(カマド構築土)
- 4. 10Y R% 褐色土 黒色土との混土。しまりなし。
- 5. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
- 6. 10Y R% 黒色土 しまりなし。
- 7. 10Y R% 黒色土 褐色土を含む。
- 8. 10Y R% 褐色土 しまりなし。
- 9. 10Y R% 褐色土 黒色土を含む。
- 10. 10Y R% 黒色土 褐色土との混土。
- 11. 7.5Y R% 極暗褐色土
- 12. 10Y R% 褐色土 黒色土との混土。しまりなし。焼土粒を含む。



第287図 XI E 2 b 住居跡(3)



番号	出土地点	層位	調整	口径	底部径	器高	備考	分類	写真	
1265	XI E 2 b 住	埋土	ロクロ、内面ミガキ。	14.8	-	(3.0)		Ⅶ	219	
1266	XI E 2 b 住	カマド支脚	外面ヘラケズリ。	15.5	8.0	7.3		Ⅶ	219	
1267	XI E 2 b 住	カマド	外面ケズリ、内面不明、底部ケズリ。	-	7.8	(4.0)		Ⅶ	219	
1268	XI E 2 b 住	床面	ロクロ、外面ケズリ。	20.0	-	(7.4)		Ⅶ	219	
1269	XI E 2 b 住	床面	ロクロ。	22.0	-	(4.0)		Ⅶ	219	
1270	XI E 2 b 住	カマド	ロクロ、外面ケズリ。	26.4	-	(10.9)		Ⅶ	219	
1271	XI E 2 b 住	カマド	外面ケズリ。	-	(11.0)	(11.2)		Ⅶ	219	
番号	出土地点	層位	器種	幅	長さ	厚さ	重さ	備考	分類	写真
1272	XI E 2 b 住	床面	鋤先	(12.9)	(15.5)	1.3	(115)			219

第288図 XI E 2 b 住居跡・出土遺物

XI E 2 c 住居跡 (遺構番号166)

遺構 (第289図、写真図版106)

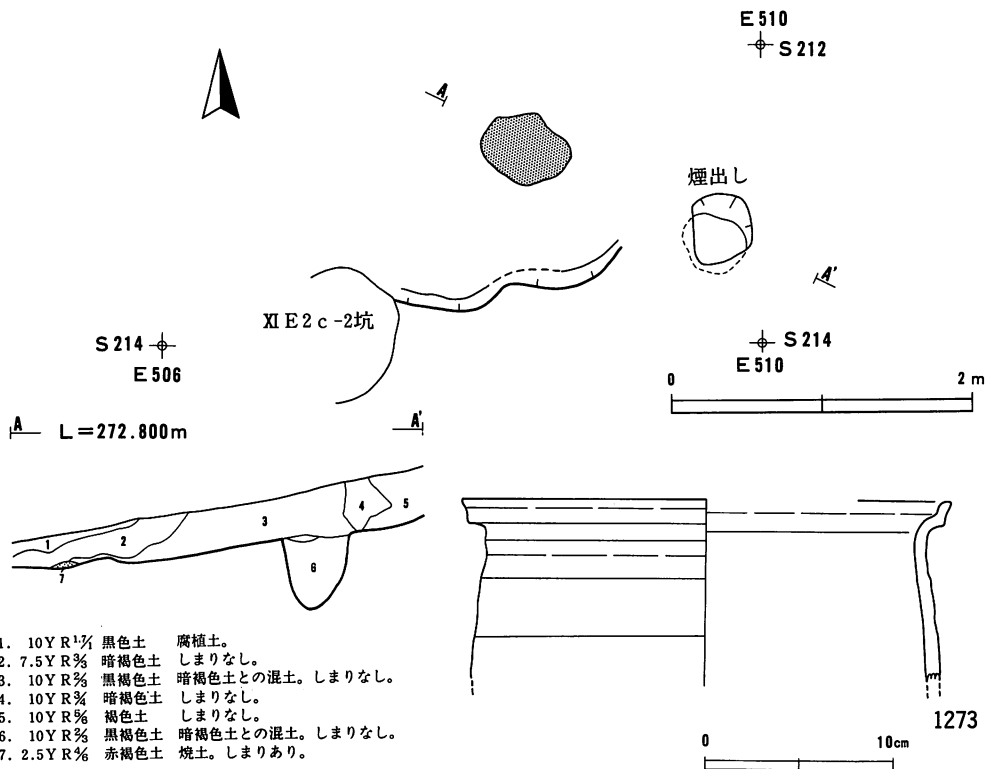
〈検出状況〉C区西斜面に位置する。試掘トレンチの底面において検出した。煙道部、煙出し部、燃焼部焼土のみ残存する。カマドの構築材は、その可能性のある黄褐色粘土質シルトが焼土の南側に少量検出された他は見当たらず、断面観察から、床面および壁は斜面のため流失、または耕作により削剝されたものと考えられる。

焼土は50×60cmの楕円形状に分布し、厚さは最大8cmで、固く締まる。

遺物 (第289図、写真図版219)

ロクロ使用の土師器甕のみの出土である。

時期 詳細は不明であるが、出土遺物および他遺構との関連から、平安時代前期に属すると推定される。



番号	出土地点	層位	調整	口径	底部口径	器高	備考	分類	写真
1273	XI E 2 c 住	埋土	ロクロ。	(26.0)	-	(11.5)			219

第289図 XI E 2 c 住居跡・出土遺物

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集

上八木田 I 遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

分冊 1 (住居跡・住居跡内出土遺物)

印刷 平成 7 年 3 月 25 日

発行 平成 7 年 3 月 31 日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・2

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6-49

電話 (0196) 53-4151